
ファンタジア

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ファンタジア

【Nコード】
N5853K

【作者名】
聖騎士

【あらすじ】
モンスターに占領された剣と魔法の国『ファンタジア』。その国を救うために、イマドキのスレた女子高生“藤堂飛鳥”は羽の生えた猫によって異世界へと召喚される。人生に絶望した女子高生は、RPGな異世界でどんな体験をするのか。恋愛、コメディ要素あり、愛と涙と感動の異世界召喚逆ハーレム系美少女格闘冒険ファンタジーです。

プロローグ

濃紺の空に星々の瞬きが目立ち始める時刻。点り始めたビルや家々の灯りはまるで地上にも星々が瞬き始めたようにも見える。帰りを急ぐサラリーマンや学生が、私鉄の駅から吐き出されていく。大通りを走る車もヘッドライトを点し始め、これから街には夜の時間が舞い降りる。空よりも地上の方が明るくなる時間帯。そんな濃紺の空を、小さな黒い物体がふらふらと横切っていく。もしそれを見上げて見つけた者がいたとすれば、蝙蝠か鳥と勘違いしただろう。しかしそれは蝙蝠でも鳥でもない。一匹の羽の生えた黒猫だった。

「ああ、お腹空いたにやあ。今日は海を渡って来たから、すんごく疲れちゃったにやあ」

誰に言うともなくその猫はお腹を抱えてふらつきながら飛んでいく。確かに羽だけならば蝙蝠のような羽だ。音もなく羽を忙しく動かしながら、濃紺の空を飛んでいく。

「今日はこの辺で食べもによでも見つけて、明日はもう少しみにやみの方へ行ってみるかにやあ」

その羽の生えた猫はぶつぶつ言いながら、ビルを回り込んで見えなくなってしまった。

1話：猫モドキ

藤堂飛鳥はいつものごとく不機嫌だった。何に対して不機嫌というわけではなく、強いて挙げればこの腐った世の中すべてに対して不機嫌だった。家に帰ればまたむかつくババアとくそオヤジのしけた面を見なければならぬ。正直言つて家出でもしたやりたいところだったが、かといってどこか行くアテがあるわけでもない。眉間にシワを寄せながら、駅前通りをぶらぶらと歩く。

飛鳥は四回折り曲げた制服のスカートの裾をひらひらさせながら、フーセンガムを膨らます。胸元は第二ボタンまで開けられ、銀のチェーンが見え隠れしている。

『クレープ半額セール』

何気なく振り向いた小じやれたカフェの店先に、木製の椅子に置かれた小さな黒板がある。ちょうど店じまいの直前で、作り置きクレープの処分セールらしい。

「あいつらの顔見ながら飯食つよりマシか」

飛鳥は口の中で小さく呟くと、カフェの中に入っていった。

小さい頃は活発で明るい女の子だった。近所の男の子とケンカして、たいていは相手を泣かす。小学校では陸上大会の選手にも選ばれるほどの運動能力を発揮した。しかしそれも高学年までの話で、飛鳥が6年生になって少し遅い初潮を迎えた日、父親に犯された。

泣き叫ぶ飛鳥を力づくで押さえ込み、父親は何度も犯した。それを知った母親は父親を責めず、飛鳥を責めた。「子どものくせに父親を誘惑するとは、どれだけ淫売なんだ」と。

幸い妊娠はしなかったが、中学に入ってから飛鳥は手が付けられなかった。恐喝・暴行・器物損壊に深夜徘徊。父親のトラウマによってさすがに援助交際には手を染めていないが、とうとう薬に手を出すことになった。実は明日そのスジに知り合いのいる先輩から覚醒剤を分けてもらえることになっている。

正直言って飛鳥にとって人生や未来などどうでもよかった。高校に入ったのも社会に出て働くのが面倒臭かっただけで、もともとそれなりに頭のよかった飛鳥は勉強など一分もせずに、市内最低ランクの吹きだまり高校に入学した。それが去年の話。

先月十七歳になった時に自分の誕生日を覚えてくれていたのはレンタルCD屋の会員制度だけ。「お誕生日おめでとうございます」と書かれた葉書には、通常の半額でレンタルできると書いてあった。

「うん、けっこうイケるじゃん」

街灯の点った公園のブランコで、飛鳥はクレープを頬張る。どうせあの腐った市営住宅に帰ったって、飯なんて用意されているわけがない。季節が冬でなければ、このまま朝までここにいた方がよっぽど幸せかもしれない。

「幸せ……か」

飛鳥は口の端にチョコレートをくつつけながら俯く。錆びたブランコの鎖がきいと鳴き、地面に映った薄い影が揺れる。

自分にとって幸せってなんだろう。すくなくともこの腐った世の中にはどこにも落ちていない。探す価値もない。それならクスリでハイになって、どん底まで落ちた方がきつとさぞかし世の中は幸せに見えるだろう。

飛鳥がクレープに二口目の口を付けようとすると、目の前に黒い何かが落ちる。

「へ？」

「うにゃあ……」

それは黒猫だった。ただし黒い蝙蝠のような羽の生えた猫ではあったが。

「な、なんだ？ この生き物……」

飛鳥が立ち上がると、その猫の首がくると飛鳥の方を向く。緑色の目が弱々しく飛鳥を捉え、瞬きを一つする。

「お、お前ミーが見えるのかにゃ？」

「しゃ、しゃべった……」

飛鳥は逃げだそうとするが、今にも死にかけた“猫モドキ”にびびって逃げるのも何だか情けない。もしかしたら一世一代の珍種発見で、金儲けができるかもしれないのだ。

「そ、それにやら何か食べ物を与えないかにゃ…… 甘いものなら、なおいにゃ」

「あ、甘い物？ これ？」

飛鳥は恐る恐るクレープを差し出す。すると“猫モドキ”の目がきらりと光る。

「にゃあ！ クレープにゃあ！」

今にも死にかけた状態だった“猫モドキ”は、目にも止まらない速さで飛鳥のクレープをひったくる。そのまま飛鳥に背を向けて、

一心不乱にクレープを食べる。ものの数秒もするとクレープはその包み紙とともに、消え去っていた。

「ふうゝ助かったにやあ」

口の端にくつついたチヨコレートを舌で舐め取りながら、“猫モドキ”は細い目をさらに細めてお腹を撫でる。すると呆然と立ち尽くす飛鳥にくるりと振り返る。

「改めてお礼を言うにやあ。ミーはノーザス＝フェンドルフィン＝スピニッチ。スピニッチって呼んでくれにやあ」

その猫は流ちょうな日本語をしゃべりながら、爪を引つ込めた肉球を差し出す。いろいろと突っ込みどころを選んでいた飛鳥は、とりあえず声を振り絞る。

「あ、あんた何者？」

「ん？ だからさっき言ったにや。ミーはノーザ」
「そういうことじゃなくって！」

だんだん飛鳥は腹が立ってくる。夕食のクレープをわけのわからないしゃべる猫に盗られ、なんたらという長ったらしい名前を言われたって理解できるわけがない。

「ふう…… 気が短いおにやのこにやあ」

“猫モドキ”は両肉球を挙げ、“お手上げ”をする。その動作が飛鳥にはまたムカつく。

「もういいわよ。そのクレープはあんたにあげる。もうないけど」

飛鳥は踵を返し、その場を歩き出す。まったくわけがわからない。

「あ、待つてにゃ！ 話を聞くにゃ！」

羽音がしたかと思えば、“猫モドキ”が飛鳥の前に降り立つ。

「何よ。クレープ食べたんだから、もういいでしょ。アタシに構わないで」

「そうはいかにゃいんだにゃあ」

すると“猫モドキ”は前足を地面につける。

「お願いにゃ！ ミーの世界を救ってくれにゃ！」
「はあ？」

飛鳥の眉間にシワが寄る。人氣がなく薄暗い小さな公園では、女子高生と羽の生えた猫が見つめ合ったまま時間が止まったような静寂に包まれていた。

2話：召喚

このわけのわからないしゃべる猫“スピニッチ”が言うには、この世界とは別の世界があつて、その世界に危機が訪れているという。そしてその世界を救うために飛鳥の力を借りたいということだった。

「あのさ、アンタが普通の猫じゃないのはわかった。でも何でアタシが行かなきゃなんないんだよ」

すっかり日も落ちて、薄暗い街灯だけが点る公園のベンチで、女子高生と羽の生えた黒猫がしんみりと語り合っている。

「まずミーの姿が見えるってことは、ミーの世界に順応する素質があるってことによ」

「素質う？」

飛鳥の眉間のシワが、一層深くなる。

「そうにや。素質のにやい者が行くと、すぐに死んでしまうにや」
「ふうん…… それじゃ素質があるヤツをアンタは捜してたってわけか？」

スピニッチは首を横に振る。振る。振る。

「そんなに振らなくてもわかるっちゃうにー！」

飛鳥はがしつとスピニッチの頭を掴む。

「素質がある人間はいくらでもいるにや。問題はファンタジアを救

える『力』がある人材がなかなか見つからにゃいんにゃ」

「力？」

「そうにゃ」

スピニツチは羽をぱたぱたと動かす。

「ミーはいわゆる“使い魔”にゃ。フェンドルフィンの女王様に仰せつかって、この世界に力のある“勇者”をしゃがしにきたのにゃ」

「ぶっ、勇者？」

飛鳥の乾いた笑い声が人気のない公園に響く。通りすがりの猫が、ぎよっとして耳を立てる。

「何だかRPGな世界だねえ。アタシ、ゲームとかやんないからわかんないけど、ラスボス倒したら何かいいことでもあんの？」

「人々の感謝と名声が手に入るのにゃ。あと世界の平和にゃ」

「は！ それはご大層なこって」

飛鳥はスカートの裾を払って立ち上がる。

「暇潰しの話にしては面白かったよ。そんなら“力”のある勇者様を捜しに、K-1会場にでもボクシングジムにでもどこにでも行ったらいいよ。か弱い、いち女子高生には縁のない話だね」

「“力”とは腕力によことではにゃいにゃにゃ！」

スピニツチは興奮すると“猫語”がひどくなるようだ。それを“猫語”と呼ぶのならば。

「“力”とは“意志”の力にゃ。“精神”の力にゃ。お前には今まで感じたことによにゃい“力”を感じるによにゃにゃ！」

「“お前”とか馴れ馴れしいよ！ アタシには忌々しいけど“飛鳥”っていう名前があるんだかね！」

スピニツチは見えない衝撃を受けたかのように、数メートルも吹き飛ばされる。辛うじて空中で羽を広げて体勢を整えるが、全身の毛は逆立っている。

「も、ものすごい“力”にや…… 女王様のおっしゃった通りにや。この世界の人間はパワーが違うにや……」

飛鳥はすでに公園の出口に向かってすたすたと歩き去ってしまった。スピニツチは慌てて飛んでいき、飛鳥の背中に抱きつく。

「うわっ！ 何すんだよ、放せ！」

「お願いにや！ ミーといっしょにフェンドルフィンに来てくれにや！」

「うっせ！ 放せ！」

飛鳥は必死にスピニツチを引つpegがそうと手を後ろに回すが、なかなか届かない。そうこうしているうちに飛鳥の全身が金色の光に包まれ始める。無数の金色の粒子が全身を覆い尽くすと、まばゆい光を放ち始める。周辺の犬や猫がけたたましく鳴き始め、何事かと驚いた近隣住民が窓を開ける。するとまるで太陽が地上に落ちたように、白い光が辺りを明るく照らし出している。続いて公園や通りの街灯が一斉に破裂する。

「きゃああ！」

誰かの叫び声が聞こえ、がたがたとドアを開ける音が続く。しかし住民たちが通りに出た時には、真っ暗な誰もいない道があるだけ

だった。遠くからはパトカーのサイレンが近づいて来て、住民たちは何て説明したらいいのか困り果てるのだった。

「ん……」

草の匂いが鼻孔をくすぐり、飛鳥はゆっくりと目を覚ます。そこは柔らかく短い芝生のような草の生い茂る草原の真っ只中だった。ゆっくりと頭を振りながら立ち上がると、緩やかに傾斜した草原の向こうに、森らしき木々の群れが見える。遠くの山々は間違いなく飛鳥のいた街の風景ではなく、楽しみに頭上を横切る小鳥たちは都会のカラスでもない。しかも夜だったはずなのに、今は明るい陽光がさんと降り注ぎ、とても冬とは思えない暖かさだ。

3 話：駆け抜ける風

「ここどこ？」

お約束なので言ってみたが、ここがどこなのかは流れでわかる。スピニッチの言っていた“フェンドルフィン”とかいう異世界の国だろう。

「こらあ！」

飛鳥はきつとそばにいるだろうスピニッチに呼びかける。

「出て来いやあ！」

無理矢理連れて来てしまったものだから、怒られるのが怖くて隠れているのだろうか。飛鳥は懐柔策に出ることにする。

「怒らないから出ておいで、仔猫ちゃん」

こめかみがひくひくしているが今は我慢しよう。見つけたらここたまぶん殴ってやる。しかし待てど暮らせどスピニッチは現れない。そよそよとそよぐ風は花の匂いを運び、知らない世界に一人ぼっちでいる寂しさをふと感じる。

「ちょっとおー、いい加減にきなさいよう。人のこと呼んどいてそれはないんじゃない？」

それでもやはり返事はない。傾斜している草原の上の方は、丸くなっている。その先は見えない。しかしさらに遠くの方には、黒々と

したのこぎりの歯のような峻険な山々が見える。どうやら天気も悪いらしく、厚く黒い雲がかかっている。その山々の部分の空だけ夕焼けのように赤いのは気のせいだろう。それともそういう仕様の世界なんだろうか。

「ちつ、とりあえず行ってみつか」

飛鳥は口の端をゆがめて唾を吐く。そのとき初めて気がつく。手に持っていたはずの通学バッグがない。中身は化粧品などでたいしたものが入っていないが、お財布だけはなくしたら困る。保険証やレンタルCDショップの会員証が入っているのだ。あと五ポイントで一枚ただで借りられるのに。

「もしかして！」

はたと気づいて、飛鳥はスカートのポケットをまさぐる。予想通り携帯電話もない。今ここに存在しているのは身体と身に着けている服だけ。これでもし全裸だったら、あの猫の命は絶対になくなっているだろう。

「まじかよ」

飛鳥のつぶやきが風に乗って下方へ流れていく。見た限り民家らしき建物はなく、道もない。とにかく高いところに登って場所を確認しないとどうすればいいのかさえ判断できない。

普段からアスファルトしか歩きつけていない飛鳥にとって、草と土の野原はとても歩きづらい。革靴は底がつるつるで、すぐに滑ってしまうのだ。

十分ほど時間をかけて傾斜を登りきる。すると強い風が吹いて、飛鳥のライトブラウンの長い髪をなびかせる。

「う、わ」

目を細めて髪をかき上げる。飛鳥の眼前には広々とした景色が広がっていた。

飛鳥のいる傾斜の下った先は、まばらに木々が生い茂る林になっている。林の中には小川が流れ、陽光を照り返してまぶしくきらめいている。その先にはただっ広い草原が果てしなく広がり、遠く霞んだ先にはまた黒々とした森が見える。しかし飛鳥の視力はその森の木々の間に、明らかに異質なものを発見する。

「あれは……」

目を凝らして見ると、それは先の尖った焦げ茶色の屋根だ。まるで鉛筆の芯のように尖っている。先端に光って見えるのは避雷針だろうか。飛鳥の住んでいる街の建物と造りは違うが、何となくテレビで見た札幌の時計台のようなイメージを受ける。

「おっしや、とりあえず人がいるところにいけば何とかなるっしょ」

沈みかけていた気持ちが回復する。目標ができれば自ずと気持ちが前向きになるものだ。

飛鳥は駆け出す。向かい風が髪やスカートをなびかせ、飛鳥の全身を包み込む。何となく気持ちよくなって、飛鳥は大声で叫びながら斜面を駆け下りる。たとえ転んでもこの柔らかい草の上ならケガはしないだろう。強い向かい風に負けないように叫びながら、飛鳥は全速力で走る。登るのに十分かった丘を、飛鳥は数十秒で駆け下りてしまった。小川のほとりに立つ木に手について、肩で荒く息をつく。こんなに思いっきり走ったのは小学校の陸上大会以来だ。

「喉渴いた」

小川の水は信じられないほどに澄み切って、コンビニで売っているミネラルウォーターと遜色ないように思える。自然の川の水なんて飲んだことはない。飛鳥の街を流れる川は、ヘドロとゴミと、腐った世の中の腐った人々が垂れ流した黒い感情の沈殿物しか流れていない。

飛鳥は小川のほとりに膝をつき、右手を水に浸す。

「冷たっ」

慌てて手を引くが、火照った手には気持ちがいい。今度は両手で水をすくい上げる。指の間から宝石のようなきらめきが零れていく。

「きれい……」

水を見てきれいだななんて思ったのは、いつ以来だろう。飛鳥は水に映った自分の顔を見る。汗でマスカラが落ち、黒い涙のようになっている。

「げ、最悪」

愛用の化粧品はバッグの中だ。こんな化け物みたいな顔を他人に見せるわけにはいかない。飛鳥は小川の水で顔を洗う。何度かばしやばしややっている、飲んでも大丈夫のような気がしてくる。飛鳥は勇気を出して、両手にすくった水を飲んでみる。冷たい水が喉を通り、飛鳥を身体の中から冷やしてくれる。

「おいしい」

不純物など一切入っていないような小川の水は、腐った心まで洗い流してくれるようだ。飛鳥は水を何度もすくって飲む。あまりにも夢中で飲んでいたため、飛鳥はまったく気づかなかった。

山刀を構えた数人の屈強な男たちが、血走った目で飛鳥を睨みつけながら背後にじりじりと迫っていたのを。

4話：爆発

「ナア！」

いきなり野太い声を背後からかけられ、飛鳥は動きを止める。顎先や指の間から、水滴がしたたり落ちる。お椀のようにした両手を口元に添えたまま、飛鳥はゆっくりと後ろを振り返る。そこには大きな刀を手にした複数の男たちが、今にも飛びかかってきそうな雰囲気で立っている。

飛鳥の真正面に立っているのは、ひげ面で身長の高いずんぐりむつくりとした男。顔中ひげだらけで、どこまでがもみあげでどこかがひげだかわからない。縮れた頭髪の髪質は堅そうだ。

その隣りにいるのは、身長一九〇センチメートル近い大男。頬に大きな傷跡があり、残忍そうな目つきをしている。全身筋肉の塊のような体つきで、体重は軽く百キログラムは超えているだろう。頭に巻いた黄色いバンダナも、砂で汚れて茶色くなっている。雰囲気からしてリーダーっぽい。

二人とも共通して汚れた黄緑色の長袖シャツを着ている。腰には赤い布地を巻き付け、黒いゆつたりとした長ズボンを履いている。

ざっと見ても男たちは十人以上はいる。みな一様に同じような格好と風貌をしている。にやけたイヤらしい表情は、どうみても友好的に飛鳥とお友達になりたいという雰囲気ではない。

飛鳥は昔観た映画を思い出す。海の無頼者たち、つまり海賊映画だ。男たちは陸に上がった海賊のようにも見える。手にしている幅広いの山刀はどう考えても銃刀法違反。飛鳥は嫌悪感と恐怖を抱きつつ、こいつらを表現するのにぴったりの言葉を思いつく。

「あの……　もしかして、山賊ってヤツ？」

走れメロスかつ！ と心の中で自分にツツコミを入れる。

「テンサ、テンサ！」

真正面のひげ面の小男が、山刀を突き出して野太い声で叫ぶ。男との距離は二メートルほどなので、尖った切っ先は飛鳥の鼻先で陽光を反射しきらっと光る。刺されたらかなり痛そうだ。

「デ、ペンテスト、ペイムーア、トリオ」
「は？」

ひげ面の隣りの大男が、少し擦れたハスキーボイスで聞いたこともない言葉を話す。飛鳥は世界中の言語を知っているわけではないが、少なくとも聞いたことのある外国語ではないはず。

「ネルラ！」

その男が山刀を振り上げ、一声叫ぶ。すると周囲の男たちが一斉に、奇声を発しながら飛鳥に飛びかかる。

「きゃあ！」

飛鳥は複数の男に仰向けに倒され、大の字で地面に押さえつけられる。晴れ渡った青空と木々の梢が視界に入り、すぐにさっきの大男が覆い被さるように現れる。

「フーア、チュミヤア」

下卑た笑いを浮かべ、大男がズボンを脱ぎ始める。太ももを押さえつけていた毛深い手が、スカートの中に入って来る。まくれ上が

ったスカートの裾から、目にも眩しい真っ白な肌がさらけ出される。節くれ立った太い指が飛鳥の柔らかい太もを乱暴に揉みしだき、指がめり込んでいく。ピンク色の下着が現れると、男たちの下品な笑い声がよじる飛鳥の華奢な身体に降り注ぐ。大男はもうズボンを半分までずり下げている。

にやつきながら見下ろす男たちの顔に、醜悪な笑みを浮かべた父親の顔がオーバーラップする。ぎゅっと目をつぶると、低く押し殺した声が蘇ってくる。

『大人しくしろ、今に気持ちよくなるから』

歪められた半月型の口。浅黒い肌と肋骨の浮き出た胸板。そしてその下の醜悪な男性器。その瞬間、飛鳥の中で何かが弾ける。

「いやあああっ！」

飛鳥は絶叫して、右足首を押さえつけていた男の手を力任せに外す。膝を折り曲げると、大男の胸を思いっきり片足で押し蹴る。

「ドグハアッ！」

大男は奇妙な声を上げて、放物線を描いて高く飛んでいく。大男は数十メートル先で、嫌な音をさせて地面に激突する。

「やあああああ！」

飛鳥は押さえつけられた両腕を振る。両脇の男たちは軽々と持ち上げられ、飛鳥の真上で激しく顔面をぶつける。

「ギャッ！」

骨の折れる鈍い音がして鮮血が飛び散る。飛鳥は叫びながら立ち上がる。

「イムア！」

鋭い声がかかると、背後から二人、両脇から二人ずつ屈強な体躯の男たちが飛鳥の全身に飛びついてくる。

「アタシに触るなあ！」

飛鳥は両腕をめっちゃめっちゃに振り回す。すると群がった男たちが爆発したように四方八方に弾け飛ぶ。

「ゲフツ！」

「グハツ！」

ある男は傍らに立つ木の幹にしたたかに背中をぶつけ骨の折れる嫌な音が響く。ある男は地面に首までのめり込み動かなくなる。またある男は大男と同じように数十メートル先まで飛ばされ、ある男は小川に水飛沫を大量に上げながら勢いよく放り込まれる。

「やあああつ！」

飛鳥は無我夢中で水飛沫の上がる小川を飛び越える。小川といえど川幅はゆくに五メートルはある。しかし飛鳥は助走もせず軽々と飛び越え、対岸の遙か遠くに着地する。と同時に、悲鳴を上げながら弾かれたように走り出す。まるで早送り映像のように、飛鳥の後ろ姿は急激に小さくなっていく。信じられないスピードだ。

「デ、デリルラ！」

ケガをしていない残りの男たちが、近くに待機させてあつた馬に飛び乗る。水飛沫を上げながら小川を渡り、飛鳥を追う。

「ハイッ！」

手綱を引き絞り、馬の腹を何度も激しく蹴って全速力で走らせる。しかし飛鳥の姿はすでに数キロメートルはある草原の彼方に消え去っていた。

4 話：爆発（後書き）

<フェンドルフィン語> 既出順

ナア：「おい」「こら」など呼びかけの乱暴な言い方

テンサ：外国人、外部の人間、外国語

デ：この

ペンテスト：娘、女の子

ペイ：よい、いい、英語でいうvery

ムーア：身体、肉体

トリオ：持っている、所持している、英語でいうhaveに近い

チュミ：かわいがる、面倒をみる

イムア：こいつ、「お前」の乱暴な言い方、フェンドルフィン北部方言の一つ

デリル：追う、追いかける、追跡する

くーラ：動詞について命令の意を加える、「くしろ」「くしなさい」

5話：ネコ型ロボット

飛鳥は大きく口を開けて、激しく呼吸しながら走り続ける。あれだけ遠くに見えた森が、もう目の前にぐんぐん迫ってくる。飛鳥は徐々にスピードを緩める。胸が苦しい。

飛鳥はさっき何が起こったのか自分でもよく覚えていない。複数の男どもに組み伏せられ、下卑た笑い声に囲まれて犯されそうになった。そこまでは覚えている。しかしその後の記憶がない。何かひどく胸が苦しい。

飛鳥はちょうど目の前にある大きな木の幹に手をつく。肩を上下させ、大きくせわしげに呼吸する。

とにかくすごく嫌なことがあったのはわかる。自分はあの男たちに犯されてしまったのだろうか。それがあまりにも嫌なできごとだったため、自分の脳みそは思い出させないようにしているのだろうか。でもそれにしては下腹部に痛みや違和感はない。

ふと目を開けるとびりびりに破れた自分のセーターが目に入る。お気に入りだったベージュのセーターは女子高生の必須アイテム。しかしそれはもう着ているというより、かろうじて体にまとわりついていると表現した方がぴったりだ。

「やだ、なにこれ」

胸のところやわき腹のあたりには、生々しい血が付着している。飛鳥は乱暴にセーターを脱ぎ、地面に投げ捨てる。気温は暑いぐらいなので、白いキャットシャツだけでも問題はない。ピンクのブラが透けて見えること以外は。

「見つけたにゃ！」

いきなり背後でアニメ声がする。飛鳥はその声ですぐスピニッチだということがわかる。

「お前が暴れるから目標地点からかなり遠くまで飛ばされてしまったにや。でも見つけられてよかぎにや！」

飛鳥は振り返りざまスピニッチにげんこつを食らわせる。草の上でスピニッチはぺしゃんこになっている。

「このくそ猫！ あんたのせいでアタシ変な男どもに犯されそうになっただかんな！」

飛鳥は腰に手を当ててスピニッチをげしげしと蹴る。

「にぎや！ ふぎや！ ま、待つにや、悪かったにや！」

身体中に靴跡を付けてスピニッチは飛んで逃げる。両肉球を突き出し、また「落ち着け」のジェスチャーをする。

「悪かったと思うなら、さっさと元の世界に帰しやがれ！」

さすがに数メートルの上空に飛ばれると飛鳥の鉄拳も届かない。憤懣やるかたなしといった様子で鼻息も荒く、飛鳥は蝙蝠のような羽をばたかせてホバリングしているスピニッチを睨む。

「そ、それは無理にやんだにやあ……」

スピニッチは悲しそうにヒゲを垂らす。顔はやっぱり笑っているようにしか見えない。

「なんでよ。あんたがここにアタシを連れてきたんでしょが」
「あれは女王様に、一往復分だけ借りた魔法にやんだにやあ……」
「ミィは転移魔法にやんて使えにやいんだにやあ」
「はああ？」

飛鳥は開いた口が塞がらない思いだった。

「だったらアタシはもう元の世界には戻れないの？」

「そんにはことはにやいにや。フェンドルフィンの女王様にやら簡単に戻せるにや。にやにせ偉大にや魔法使いにやんだからにやあ」

スピニツチはまるで自分のことを自慢するように、丸い毛玉のような小さな胸を反らす。

「はあ…… 結局女王様とやらには会わないといけないのか」

飛鳥はがつくりと肩を落とす。

「ほんとごめんにや。でもミィは必死だったんにや。どうしても勇者様を連れて来にやければにやらかったにや」

「言つとくけど、アタシは勇者だの魔王だのRPGな世界には興味ないかんね！ そんなニートなゲーマーどもに任せとけ！」

「ニートってにやんにや？」

「あんたアタシの世界に来てたくせにニートも知らねえのかよ。ニートってのはなあ…… ってあれ？」
「にや？」

その時飛鳥ははたと気づく。

「そつえばさっきの男どもはなに言つてんのかわかんなかったの

に、なんであんたのしゃべる言葉はわかんのか？ あんた日本語しゃべってる？」

「あ、そっか」

スピニツチは肉球をこぶしで叩く。そして毛玉のように丸いお腹の前に片手を入れて、もそもそと何かを探すように動かしている。飛鳥は悪い予感がする。

するとスピニツチは灰色のぷるんとした物体を取り出し、勢いよく持ち上げる。飛鳥はどこからファンファーレのような音楽が聞こえた気がする。

「翻訳こんにゃくう」

「あつちやくやつぱりやつちやつた」

未来の世界のネコ型ロボットな展開に頭が痛くなり、飛鳥は額に手のひらを当てる。

「ミーはこれを食べるからお前の国の言葉がわかるのにや。この世界の魔法のアイテムにや」

「二十二世紀の道具じゃなくって？」

「にや？」

「ああなんでもない。それ食えば言葉通じんの？」

スピニツチは得意げに鼻をくくん動かす。

「通じるにや。ただし排泄して体外に放出されると効果はにやくにやるにや」

「はあ？ うん。するとだめなんかい！」

「おにやによこがうん。にやんて言っちゃだめにや！」

「なんだよ、アニメだとずっと効果あったのに……」

「アニメじゃにやいにや！ これは現実にや」

「ファンタジーな世界に連れてきて、現実もアニメもあるか！」

飛鳥はスピニツチの前足からこんにやくをひったくってかぶりつく。夕食のクレープをスピニツチに取られた後だけに、微妙にうまいと思ってしまったのは内緒だ。

6 話：精神と肉体

「ねえ、そう言えばさっき何か変だったんだよね」

飛鳥とスピニッチは道なき道を歩いている。昼なお暗い鬱蒼とした森の中、湿った腐葉土の地面はとも歩きづらい。この世界に革靴は合わないようだ。見た目も実用の面でも。

「変つてにやんだにや？」

スピニッチは正確には歩いていない。どう考えても揚力は発生していない羽をばたかせているだけだ。

「うん…… よく覚えてないんだけど、ゴツイ男たちがいつぱいいて囲まれて捕まったのに、アタシちゃんと逃げられたんだよね。それにすごいスピードで走れた気もするし」

「ああにやんだ。そんなにやことかにや」

スピニッチはふわふわと上下に漂うように飛び、飛鳥は時々思いつきりはたき落としたくなる誘惑に駆られる。スピニッチはそんな飛鳥の黒い衝動に気づきもせず、飛鳥の少し前で丸いお尻をふわふわさせながら飛んでいる。

「この世界はにや、肉体と精神の境目が曖昧にや世界にやのにや」
「なにそれ」

「にやんて説明したらいいによか……」

スピニッチは短い前足を生意気に人間のように組む。考え込んでいるようだ。

「例えばにや」

スピニツチが振り向くと、飛鳥は振り上げていた手をさつと背後に隠し、唇を尖らせて口笛を吹くまねをする。

「今にやにかしようとしたにや」

スピニツチの声が一オクターヴ低くなり、細い目がさらに細くなる。

「な、何でもないよ。さ、お話続けて？」

「まあいいにや。例えばにや？ 飛鳥は頭の中で空を飛んだりできるかにや？」

「頭の中？ それって想像でってこと？」

スピニツチはヒゲを揺らせてうなづく。

「そんなのできるに決まってんじゃん。想像だったら何だってできるよ」

「でもお前の世界じゃ、それが現実になんてすることはにやいにや」

「そんなのあたり前じゃん。想像だもん」

「ここではあたり前じゃにやいにや」

飛鳥は小首を傾げる。

「じゃ、嫌いな奴を殺したいって思ったら、そいつの頭をバクハツさせたりできるの？」

「物騒なこと言うにやにや」

スピニツチはため息をつく。

「にやんでもかんでも現実になんてやることはにやいにや。でも少なくともお前の世界よりは現実になんてやるにや」

「例えば？」

「ん…… さっきの魔法のアイテムとかにや」

「あれは誰かが想像してできた物なん？」

「いやいや、そうじゃにやいにや…… うまく説明できにやいにや。詳しくは女王様に聞いてくれにや」

「何だよ、頼りになんねえな」

「ミーはただの使い魔にや。この世界のにやり立ちとか難しいことは、もつと偉い人たちが考えることにや」

飛鳥は何となくもやもやする。

「でも前に言ったように、この世界でによ “強さ” は肉体や腕力によ強さじゃにやいにや。 “心” や “精神” の強さが基準になるにや」

「それじゃ、心が強いやつは力も強いってわけ？」

スピニツチはまた少し考える。

「少し違うにや。心が肉体よりも優先されるって感じにや」

「何だかよくわかんない世界だね。もやもやしてるっていうか、不安定っていうか」

果てしなく続くかに思えた森が、少し開けてくる。まばらになった木々の隙間から、また若草色の草原が見え始める。

「ミーが勇者と見込んだお前は、少なくともこの世界じゃ生身でもかなりの身体能力にや。これでレベルが上がれば、きっと無敵にな

れるにゃ」

「レベル？　ますますRPGだねえ」

いつそのこと剣や鎧を装備して、火とか水とか魔法で出して、モンスターを殺しまくるともストレス解消にいいかも。

飛鳥は別に元の世界にどうしても戻らなければならぬ理由はない。結論から言えば別に死んだっていい。自殺するきっかけがなかっただけで、きっかけさえあればきつといつでも死ぬる。

飛鳥の左手首には、無数に白い傷跡が走っている。言うまでもなくリストカットの跡だ。普段はリストバンドで隠しているが、それは恥ずかしいわけではなく、周囲の大人たちの視線がウザいだけだ。

「見えてきたにゃ」

スピニッチの爪の先に、さっき丘の上から見えた尖った屋根がある。それは時計台などではなく、大きなお城の尖塔であった。

「あれがフェンドルフィンのお城にゃ」

「かぁーやっぱりこう来るか。RPGな世界ってどうしてこう中世西洋風の建物ばかりなんだろうね」

「お前は瓦屋根とかの方が好きかにゃ？」

スピニッチはまた鼻をひくひくさせている。そういう飛鳥も鼻をひくつかせる。草と花の匂いに混じって、食べ物のおいしそうな匂いが混じっている。人間の生活する匂いだ。

「どつでもいいけどさ」

森を抜けてまた広々とした草原に出る。

「ウザいから“お前”って言うのやめろつつたろ？ アタシはキライだけど、一応『飛鳥』っていう名前があんだからさ」
「わかったにゃ。だったらアスカもミーのこと“あんた”とか言わないで『スピニツチ』って呼んでほしいにゃ」
「わかったよ。スピニツチ」

飛鳥はスピニツチに手を差し出す。スピニツチの細い目が一瞬見開かれ、次に嬉しそうに細くなる。爪を引っ込めた前足を差し出し、飛鳥はしっかりと握る。ぷにぷにした肉球がひんやりとして気持ちよく、飛鳥は幼いころ近所の公園に捨てられていた仔猫を思い出した。

7話：フェンドルフィン

異世界だろうが現実世界だろうが、そこには人々の営みがあつて喜びも悲しみも日々の移ろいの中で浮かんでは消えていく。国の名前にもなっている首都フェンドルフィンは、飛鳥の住んでいた都会と比べると、首都と呼べるほど大きな街ではない。

それでも見たこともない食べ物や並ぶ露店市場や呼び子の声も高らかに客寄せをする酒場など、それなりに活況を呈している。

道行く人も様々で、ひげ面の薄汚い労働者風の男もいれば、派手なドレスを身にまとったショールガールのような女性も見かける。この国の人口はさほど多いわけではないが、その半分がこのフェンドルフィンに集まっているらしい。

「うわあゝあれチョーうまそうなんだけど」

クレープのような生地チョコレートのような甘い匂いのする黒いソースをかけたお菓子を売っている店を見つけ、飛鳥は今にも涎を垂らしそうな顔で見つめる。

「お城に行けば、もっとおいしいもによが食べられるにや。にやにせアス力はこの世界を救う勇者様だからにや」

「アタシまだ救うなんて決めてないけど」

アス力は仏頂面になってスピニッチを見つめる。この世界の人々は飛鳥の世界で言うところの中世ヨーロッパ風の文化を持っているらしく、人々の服装や顔つきは明らかに西洋人だ。現代の若者とはいえ日本人の飛鳥は、明らかに異国人だ。飛鳥とすれ違うフェンドルフィン人は、飛鳥の顔を見てぎょっとし、続いて変わった服装を上から下まで舐めるように見る。大きく開いた胸元と太ももを半分

ほど露出させたスカートをみると男は下卑た笑いをし、女は眉をかめる。少なくとも羞恥心に関しては現実世界と大差ないようだ。

賑わう市場や繁華街を抜け、飛鳥は大きなお城の前に到着する。まさに西洋風のお城だ。周囲には水を湛えたお堀が掘られ、お城の正門には橋がかかっている。橋は鎖で引き上げられるようになっており、外敵に攻め込まれた時には上げて渡れなくなるのだろう。

橋のたもとはテレビで見たことのあるような出で立ちの守衛が二人立っている。西洋風の甲冑に身を包み、長い槍を持っている。頭にはヤンキーが原チャリに乗る時に被るようなヘルメット。金色なのはお約束だ。

守衛たちは飛鳥が近づくと警戒するような動きを見せるが、スピニッチの存在を認めるときよっとして、即座に姿勢を正す。どうやらスピニッチが女王の使い魔というのは本当のようだ。

隣国がモンスターに占領されたとはいえ、今すぐここが戦場になるという切羽詰まった状況ではないらしい。城の中はきらびやかな服を着たいわゆる貴族的な人々や、先ほどの守衛たちよりも豪華な鎧を身にまとった兵士などが行き交っている。

「まずは女王様に会ってもらうにや」

この世界にもちゃんと昼と夜があるようで、外はだんだん夕焼けに染まってきている。お城の中はすでにかがり火が焚かれ、壁には松明が赤々と炎を揺らめかせている。どうやら電気というものは存在していないか発明されていないようだ。

「あのさ……」

市場や繁華街と同じような反応と視線に晒されながら、飛鳥はお城のエントランスを歩く。とりあえずスピニッチといれば大丈夫なようだが、もし飛鳥だけだったら即座に取り押さえられてるだろう。

「もしかしてだけど、女王様ってやつは高いところにいんだよね」
「当然にや。フェンドルフィンで一番偉いお方にやんだからにや」
「じゃやつぱり上まで階段で上がっていくの？」
「もちろんにや」

飛鳥は大きくため息をつく。外から見ただけでも、このお城はサンシャインビルの半分はある。低く見積もっても三十階建てはあるということだ。

「あのさあ、こんだけRPGな世界なんだから、魔法のエレベーターとかないの？」
「にやいにや」

「ドラ。エとかだと王様は二階か三階にいるよ？」
「そんなゲームといっしょにするにや」

些細な抵抗を試みるも、現実是不変ならない。しかも外敵の侵入に備えてか、お城は複雑な造りになっていて、階段も同じ場所に設置されているわけではない。ワンフロア上がるとぐるぐるといくつもの角を曲がって全然別の場所の階段を上がる。とても偉い人のいる場所に行くための階段だとは思えないような狭い階段があったかと思えば、横に十人以上が並べるくらい広い階段もある。通りがかりに見かける扉のない部屋には、兵士が鎧を脱いでくつろいでいたり、使用人らしき人々が忙しげに歩き回ったりしている。

下でも感じたことだが、このお城は格式張った雰囲気は薄い。確かに年代物らしい肖像画や高級そうな壺なども飾ってはあるが、お城の中の至るところに生活感が溢れている。映画に出てくるような綺麗なテラスに、子どものおしめやエプロンなどの洗濯物が干されてあったのを見た時は、飛鳥も笑ってしまった。

「ここにや」

外もすっかり暗くなったころ、ようやく女王のいるところへ到着する。階段を上りきると赤絨毯がまっすぐと延び、大きな両開きのドアの下へ続いている。ドアの両脇にはやはり守衛が立っており、目だけを動かして飛鳥を見る。

「例の勇者様をお連れしたにや」

守衛は目だけでうなずくと、くすんだ金色の取っ手に手をかける。重そうな扉が音もせず開いていく。まっすぐ延びた赤絨毯の先には少し高くなった台座があり、その真ん中にある数段の階段の下で絨毯は終わっている。そして予想通り台座の上には背もたれの高い椅子があり、そこには女王が座っていた。

8話：麗しの女王

「ようこそフェンドルフィンへ」

女王は優雅に立ち上がり、階段を下りてくる。長い金髪は一本一本が高級な金糸のようにさらさらと流れ、碧い目は宝石のように澄んでいる。白磁のような透明感のある肌にはシミ一つない。切れ長の目と細い顎の線はいかにも女王様といった近寄り難い美しさを醸し出している。薄緑色のロングドレスの裾を引きずりながら、女王は飛鳥とスピニツチの前に立つ。身長百六十センチメートルの飛鳥よりもさらに十センチ以上は高い。飛鳥はそこいらの女優やモデルなんかよりも全然きれいだなと、口を開けて見とれてしまう。

「アスカ、アスカ！」

スピニツチに小突かれて、飛鳥ははっと我に返る。

「あ、え、な、なに？」

「なにじゃなくて、女王様が話しかけてくださってるにや」

「あ、あそつか。ども、こんちは」

飛鳥はぺこりと頭を下げる。スピニツチは肉球を頭に当てて「あちゃ〜」と呻いている。

「いいですよスピニツチ。こんな世界に無理矢理連れて来られてさぞかし不愉快な思いをされたことでしょう。すみませんでした」

飛鳥の無礼な態度を諫めるでもなく、女王は春風のような暖かい微笑みを向ける。飛鳥はこの手のタイプは苦手だった。突っかかる

こともできないし、素直に心を開くこともできない。女王の優しい言葉にも「あ、いえ」と素っ気なく答えることしかできない。

「私はこの国の女王フェンドルフイン・クウェンディです。クウェンディと呼んでくださいね。あなたはアスカさんとおっしゃるのですね」

「あ、はい。藤堂飛鳥です」

その瞬間飛鳥のお腹が派手な音で空腹を訴える。この世界に来て時間感覚が崩れてしまっているが、公園でスピニッチにクレープを取られてからすでに6時間近く経過している。その間口にしたのはこんにゃく一枚だけだ。

女王は一瞬目を大きく開け、ころころと鈴の鳴るような声で笑う。

「ではお食事の後、お話ししましょうか。スピニッチ、ご案内して差し上げて」

「かしこまりましたにゃ」

飛鳥は顔を真っ赤にして女王に頭をぺこりと下げると、羽を忙しく動かして飛んでいくスピニッチの後を慌てて追う。女王の座っていた台座の横に扉があって、スピニッチはそこに入っていく。女王の姿が見えなくなると、飛鳥は大きくため息をつく。

「ああ、何だか緊張しちゃったよ。ああいう雰囲気アタシ苦手なんだよねえ……卒業式とかさあ」

「女王様はお優しい方だから、たいていの無礼は許してくれるにゃ。でも言葉遣いはちゃんとするにゃ」

「そだね、がんばってみる」

機嫌を損ねて飯にありつけなくなっても困る。飛鳥にとって女王

だの王様だのは物語の中の存在で、現実的な存在ではない。しかしこの世界の権力者であるからには、気に入られるに越したことはない。それに今のところ刃向かう理由もない。この世界に無理矢理連れて来られたことはム力つくが、あんな風に下手に出られると飛鳥としては恐縮するしかない。飛鳥はとことん自分は日本人だと苦笑する。

女王と会った広間から五階分ほど階段を下りると、いい匂いの漂うフロアに到着する。石造りの廊下を進んで行くと、大きなテーブルのある部屋に入る。ここが食事をする部屋のようなのだ。

白いクロスのかかったテーブルの上にはオレンジ色の光を点すキヤンドルが数本等間隔に並び、メイド服を着た給仕の女性たちが忙しそつに行き来している。

「アスカはここに座るにや」

窓を背にしたテーブルのど真ん中の席に飛鳥は座る。スピニッチが「ミーもご飯を食べて来るにや」といって部屋を出て行くと、それを合図としたかのように、目の前にどんどんと料理が並べられていく。肉、野菜、スープ、果物……食べ物には飛鳥の世界と変わりはないらしく、鶏のもも肉やコンポタージュスープなどどれも同じ味だった。もちろんファミリーストランなどよりは何倍もおいしく、いい素材を使っているようだが。

「ワインはどうなさいますか？」

飛鳥と同年代のかわいらしい女の子が緑色のボトルを差し出してくる。メイド服が妙に似合う、黒髪の女の子だ。アキバ辺りに行けば、きつとモテまくりだろう。

「ああ、アタシ酒は嫌いなんだ。コーヒーある？」

「かしこまりました」

悪いことは一通り経験済みだが、飛鳥は酒とタバコには手を出してはいない。大人という存在に憧れを抱いてはいないからだ。浴びるほど酒を飲めば嫌なことを忘れられるかと思い、一度ビールを飲んでみたが、あまりのまずさに吐き出したことがある。

「アスカさん、食事には満足していただけましたか？」

食後のコーヒを飲んでいると、女王が先ほどとは違ってラフな格好で現れる。膝下ほどの水色のワンピースに、黒いケープを羽織っている。

「あ、はい、うまかったです」

「それはよかった」

女王は給仕に紅茶を頼み、飛鳥の対面に座る。テーブルに肘をついて、飛鳥の顔をじっと見つめる。

「な、なんすか？」

何となく恥ずかしくなつて、飛鳥はコーヒを飲みながら視線を逸らす。

「この国はどうですか？」

女王はあくまでも微笑みを絶やさない。その問いも、問い詰めるでもなく探るでもなく、ごく自然な世間話という雰囲気だ。

「ん、えーっと、いい国だと思います」

飛鳥は必死に言葉を選ぶ。

「どんなところが？」

女王は姿勢と表情は変えずに質問を重ねる。飛鳥は女王の真意を図りかねる。この女王様は何を聞きたがっているのだろうか。

「そうですね…… ご飯がうまくって、自然がきれいです。あと…… 暖かいです」

飛鳥は思いつくまま言葉を並べる。ちょうど食事が終わったのか、スピニツチが入り口からぱたぱたと羽を動かして入ってくる。

女王は拙い飛鳥の感想に、一つずつ丁寧に相づちを打ちながらうなづく。授業で飛鳥が答えるたびに眉間にシワを増やしていくオバハン教師より数百倍好感が持てる。

「この国…… いえ、この世界はすばらしい世界でした。あなたのおっしゃる通り、食べ物はいしく自然は豊かで、気候も穏やかです。ご存じですか？ この国は『常春の国フェンドルフィン』と呼ばれているんですよ」

そして女王はゆっくりとこの世界の話始めた。

9 話：揺らめく炎

この世界に名前はない。ファンタジアという規模も面積も大きな国が中心にあり、政治・経済・文化面でも中心的存在であった。ファンタジアを中心として北にある国が『水の国アイリス』。ここは物静かで穏やかな人々の住む水資源の豊富な国だ。ファンタジアの南西に位置する国が『魅惑の国イスペリア』。ここは亜熱帯で砂漠とジャングルが多い。また人々の気質は陽気で明るく、反面犯罪も多い。そしてファンタジアの南東に位置するのがここ『常春の国フエンドルフィン』。気候が穏やかで、住む人々も穏和で平和的だ。それぞれの国はそれぞれの特徴を活かしながら平和な日々を送っていた。確かに犯罪やいざごさはあったが、それも日常生活レベルの話であって、大規模な戦争などは起こったことはない。飛鳥のいた世界に比べれば文明的には遅れているが、少なくとも暮らしやすい平和な世界だったと言えるだろう。

それが二年前、突然モンスターによってファンタジアが乗っ取られてしまった。モンスター自体、この世界には滅多に現れることはなかった。ところが膨大な数のモンスターがどこからともなく現れ、半年も経たずにファンタジアは占領されてしまったのだ。

ファンタジアに住む人々は、ある者は殺されある者は他国に逃げ延び、国は崩壊した。逃げおおせた者の話によれば、ファンタジア内の街や村に立てこもって抵抗を続けている人々もいるようだ。この二年間、フエンドルフィンを始め他の国にモンスターが攻め込んで来ないのは、そういったレジスタンスたちのテロ的抵抗の鎮圧にモンスターたちが手こずっているからだという。しかしそれも時間の問題で、いずれは他の国にもモンスターが押し寄せてくるのは確実だ。

「この世界の人々は基本的にみな穏やかです。戦いには向かない人

々なのです。ですから強烈な悪意とパワーを持ったモンスターに抵抗できなかったのです」

「そんなのアタシだって抵抗できるわけないじゃん」

飛鳥はさっきの黒髪メイドに林檎を剥いてもらって食べている。

「それが違うのです」

女王の前にも果物が並べられているが、女王はさっきから一口も口にしていない。

「スピニツチに話は聞いたかもしれませんが、この世界は精神と肉体の関係があなたの世界とは少し違うのです」

「境目が曖昧つてのは聞いたけど、よくわかんない」

「スピニツチに聞きました。あなたは山賊に襲われて、すごい速さで走って逃げられたと言っていたそうですね」

飛鳥が咀嚼しながらうなずく。スピニツチは飛鳥の頭を叩く。

「いてっ！ なにすんだよ！」

「人の話を聞くとときにそんな態度は失礼にゃ！」

「人のクレープ盗った猫に、そんなこと言われたくないわよ！」

その瞬間テーブルのロウソクが一斉に炎を噴き上げる、五メートル近い天井まで噴き上がった炎は、驚いた飛鳥の顔を真っ赤に照らし、すぐに沈静化する。

「これがあなたの世界の人間の力です」

女王は、驚き戸惑う給仕たちに落ち着くよう指示する。

「アスカさん、あなたの心には強いパワーを感じます。しかしそれは暗く重く歪んだパワーでもあります。きっと過去に何か嫌な思いをなさっているのでしょうか」

飛鳥の表情が固まる。他人に心の中へ踏み込まれるのは、飛鳥にとっては何よりも嫌なことだ。

「しかしそういった過去を持つ者はたくさんいます。あなた以上に辛い思いをしている者も」

「あなたにアタシの何がわかんのかよ」

飛鳥の押し殺した声に、ロウソクの炎が大きく揺らめく。スピニツチが慌てて飛鳥をなだめようとする。

「普通は……」

女王はそんな飛鳥の剣呑な雰囲気を感じ取る風でもなく、涼やかに話し続ける。

「普通の人間はそこから目を背け、逃げようとしています。自分の身を守るために」

飛鳥は眉間にシワを寄せたまま女王を睨んでいる。

「あなたはもがき、苦しみなながらもそれを乗り越える力を持っています。強い心で。そんな人間は残念ながら少ないのです。この世界にも、あなたの世界でも。あなたを選んだスピニツチの目に狂いはないと信じています」

「アタシは…… アタシはそんなに強い人間じゃない。悪いことや

って、生きることにも疲れた。未来に夢も希望も持っていない、ゴミクズのような人間だよ」

飛鳥は席を立ってため息をつく。女王も静かに立ち上がり、変わらぬ微笑みで見つめている。

「もし元の世界に戻りたいならばそう言ってください。すぐにお返しします。ただせっかくですから一晩お泊まりになっていてください。ご迷惑をおかけした、せめてもの罪滅ぼしです」

飛鳥は後ろ手に手を振りながら部屋を出て行く。スピニッチは忙しく羽を動かしながら、飛鳥の後を追う。

「余った食べ物は下へ持っていくてください。また一団到着したようです」

女王は給仕にそう申しつけ、静かに目を伏せた。

「アスカ、アスカ！ 待つにゃ！」

「ごめん、スピニッチ。アタシちゃんとした言葉遣いできてなかったね」

石造りの廊下の壁に手をついて、飛鳥は立ち止まったままうつむく。

「気にすることにはいにゃ。アスカは疲れてるにゃ。お風呂でも入

ってゆつくり疲れを取ってからいろいろ考えればいいにや」
「なにあんた、急に物わかりがよくなったじゃん」

スピニツチは恥ずかしそうに、ほっぺたを爪でかく。

「女王様のところへアス力を連れて来るのがミーの仕事にや。後はミーにはどうすることもできないにやいにや」

「後はアタシ次第ってわけか」
「そうにや」

スピニツチは浴場まで案内してくれるらしい。飛鳥は窓から城下を眺める。そこには黄色やオレンジの光に溢れ、人々の生活のエネルギーが満ちあふれている。

帰る気ならいつでも帰ることはできる。そこがどんな世界でさえ。飛鳥の心は、不安定なロウソクの炎のように揺らめいていた。

10話：女王の賭け

白く煙る湯気の向こうでは、ライオンに似た怪物の口から熱いお湯が尽きることなく流れ出ている。飛鳥は広い湯船をクロールと平泳ぎ、潜水に背泳ぎまでこなしてから大理石の湯船の縁に腰掛ける。心地よいため息をついてから、洗いたての長いライトブラウンの髪を揉み絞る。その時手首の傷が目に入る。

「アタシが強いわけないじゃん」

飛鳥は手首に幾筋もついた白い傷跡を指でなぞる。飛鳥の心はいつも悲鳴を上げていた。悪い友人たちとバカをやっている時も、母親に暴力を受けている時も。まるで出口の見えない迷路に迷い込み、暗闇に潜む怪物を恐れて泣き叫ぶ子どものように。飛鳥はそんな現実からもそんな現実に押しつぶされそうになっている自分からも目を背けて生きてきた。いや、「死」に向かって情性で進んでいた。やりたいことなどない。後悔もしていない。好きなことを好きなだけやって、どこかでたれ死ぬのが自分の人生だと思っていた。それが自分にはお似合いだと思っていた。でも……

「アスカいつまで入ってるにや。溺れたのかと思って心配したにや」
「わあゝ！」

物思いに沈んでいた飛鳥は、いきなり背後からかけられたスピニツチの声に驚いて、慌てて湯船に飛び込む。

「あ、あんたなに入って来てんのよ！　ここ女湯でしょ！」

「にや？　そうにや」

「そうにやって……」

顎まで浸かった飛鳥の前髪から、ぱたぱたとお湯が滴り落ちていく。スピニツチは飛鳥が座っていたところに着地すると、肉球をぽんと合わせる。

「なるほどにや。アス力は勘違いしてるにや。ミーはれっきとしたおにゃのこにや」

「へ？」

「おにゃのこに裸見られても別に恥ずかしくはにゃいにや」

「あ、あんたメスだったの？」

「メスじゃにゃいにや！ おにゃによこにや！」

スピニツチは短い前足を振り上げて怒っている。飛鳥は「猫はメスじゃん」とつぶやくが、それでも安心して真っ赤になった顔を手で仰ぎながらまた縁に座る。

「ねえ、この国ってさあ、ちょっと緊迫感ないんじゃないの？ いつ怪物が襲ってくるかもしれないってのに、みんな普通に生活してんじゃない」

「そう見えるかにや？」

「見えるね。あんなに豪華な食べ物一杯あるし、お城の中の兵隊さんだって普通に歩いてるし」

このお風呂だってそうだ。贅を尽くした造り、尽きることのないお湯。水道代やボイラー代がいくらかかっているか想像するだに恐ろしい。そういうシステムかどうかはわからないが。

飛鳥も小学校の時の授業でしかちゃんと学んでいないが、戦争中は「贅沢は敵だ」というものではないのだろうか。

「じゃあ、ちょっといつしよに来るにや」

スピニツチは湿気に身体中を濡らしながら、白く煙った湯気の中を脱衣所に向けて飛んでいく。飛鳥が小首を傾げると、顎先を伝って水滴がぽとりと落ち、胸の谷間を流れていった。

「なあ、どこ行くんだよ。もうアタシ眠くなってきたんだけど」
「もうちよつとにゃ」

汚れた服のままでは嫌だろうということ、飛鳥は女王の好意によりクリーム色のドレスを身にまとっている。基本的に生足を出していないと落ち着かない飛鳥は、スカートの裾を思いっきり持ち上げて歩いている。すれ違う城内の人々が目を剥いて振り返る中、飛鳥とスピニツチはどんどんと階段を下っていく。

「つたく、今日は走り回ったり森の中を歩き回ったりして疲れてんだよ……」

ぶつぶつ文句を言っていると、スピニツチはようやく止まる。そこはフロアでいうと三階に当たり、体育館よりも広いスペースになっていた。しかし床にはぎっしりと人々がひしめき合い、座ったり横になったりしている。

「これ……」
「そうにゃ。ファンタジアからの避難民にゃ」

泥や血で汚れた服。足の踏み場もないほどの人々の間を、白衣を

着た医師や看護師らしき人たちが額に汗して走り回っている。そこ
ここで上がる呻き声は、生理痛が酷くて一時期通っていた総合病院
よりも重苦しい空気を作り出している。

「ああ、う……」

飛鳥の目の前の青年が呻きながら片手で宙を掴む。頭を半分覆っ
た包帯には、乾いて赤黒くなった血がべっとりとこびりついている。

「パパ！ パパあ！」

少し先の壁際で、赤いワンピースを着た少女が泣いている。取り
すがった下には、すでに動かなくなった中年の男性が、土気色の顔
を少女が揺するのに合わせてゆらゆらと揺らせている。

呆然と立ちすくむ飛鳥の横で、スピニッチは細い目の間にしわを
寄せている。

「フェンドルフィンは食べにもも豊富で気候も穏やかないい国に
や。でも次々とやってくるファンタジアの人々みんなやをやしにや
えるほど裕福でもにやいにや。それに人手も足りにやいにや」

飛鳥はスピニッチの爪の先に視線を巡らす。そこには深皿から病
傷人にスープを飲ませているクウェンディ女王の姿があった。

「まじかよ……」

飛鳥の顔色は真っ青になる。さっき食べたたくさんのごちそうは
？ 溢れるばかりの大量のお湯は？

「元気なもによは市場や繁華街で働くしかにやいにや。この国は実

はもうぎりぎりなんにや。こによままではフェンドルフィンの経済は破綻するにや。アス力を襲った山賊たちも、きつと元々は普通の農民や商人にや。生活が苦しくて、家族をやしにやうために山賊や強盗ににやる者もたくさん出てきてるにや」

このお城に来る時に見たたくさんの人々はフェンドルフィン人ではない。ファンタジアから逃げてきて、生きるためにここで働いている人々だ。けがや病気で苦しむ人々は、街の病院では収容しきれず、フェンドルフィン城をも開放し治療に当たっている。

フェンドルフィンの騎士たちは、すでにファンタジア奪還に向けて出立した後らしい。そしてこの城にいる兵士は最低限の守備隊とファンタジアからの避難民を護衛してきた兵士たちだけだという。

「だったら…… だったらなんでアタシなんかにあんなに贅沢させるんだよ！ アタシは…… アタシは腹一杯飯食って、でつかいお風呂に一人で悠々と浸かって……」

「アス力はこの国によ、いやこの世界によ希望の星にや。女王様はアス力にこの世界を気に入ってもらいたかったにや。そしてみんなを救ってほしいって思ってるにや。ご自分の力ではできないにやいからにや。もちろん、ミーにも誰にもできないにやいにや。アス力にしかできにやいことにや」

「アタシにしか……」

転移魔法を使える魔法使いはこの世界でもごくわずかで、基本的にしてはいけないことだったらしい。それでも女王が異世界から救世主を召喚することにしたのは、一つの賭けだった。適正、素質…… 世界を救えるほどの人物を見つけられる可能性は低い。仮に見つけられたとしても、すでに国が滅んだ後かもしれないのだ。そして女王はその賭けに勝った。飛鳥という世界を救う可能性を、見つけ出すことができたのだ。

「アタシにしかできないこと……」

血と汚物の匂いにまみれ、献身的に動き回るクウエンディ女王を見つめながら、飛鳥は無意識のうちに左手首を触っていた。

11話：死へ立ち向かう者

「アスカさん、昨夜はよく眠れましたか？」

クウエンディ女王は昨日と少しも変わった様子も見せず、春風のような微笑みをたたえている。朝食を終えて女王の謁見室へスピニツチとともに現れた飛鳥は、寝不足でひどい顔をしている。飛鳥はドレスではなく、丁寧に洗濯され、シワまできれいに伸ばされた自分の制服を着ている。

「おかげさまで寝不足だよ」

飛鳥は口に手を当てて大あくびをする。飛鳥はあの後いろいろ考えてしまい、ほとんど眠れなかった。避難民たちや女王の姿。スピニツチに告げられたこの国や世界の置かれている状況。別の世界で起こっている他人事と割り切れない自分。言いしれぬイラつき。

今までの飛鳥なら即座に唾でも吐きかけてさつさと元の世界に戻り、今まで通り怠惰で腐った人生を歩んでいただろう。しかし飛鳥の中のイラつきは、簡単にそう決断できなくさせている。

「いろいろとスピニツチに聞いたようですね。黙っていてすみませんでした」

「ああ、いいよ。おたくにもいろいろと事情があるらしいし」

「そう言っていたけると助かります」

飛鳥は女王の微笑みにイラつきをぶつける。そして自分のような人間を大切に扱うこの美しい女王のたおやかな態度に。言葉遣いをぞんざいにしても、決してそれを諫めたりしない。明らかに飛鳥よりは年上で、人間的にも立場的にも上等な人物が、自分のような無

礼で粗雑でどうしようもない小娘に丁寧に接している。飛鳥はそれがどうにも解せない。今まで飛鳥の周りにいた大人たちは、飛鳥のそんな態度に眉をひそめ、汚いものでも見るような目つきで見下していた。

「それで、お返事を聞かせていただけないでしょうか」

飛鳥の片方の眉がぴくりと反応する。

「返事って？」

「この世界を救っていただけるかどうかです」

「ふん……」

飛鳥は腕組みをして、身体ごとそっぽを向く。

「ア、アスカ！」

たまりかねたスピニッチが声をかける。しかし女王に目で制されて、しゅんとして下がっていく。

「一つ聞いていいかい？」

「何でしょう」

女王は落ち着き払った態度で、真摯な目をまっすぐと飛鳥へ向けている。それは決して飛鳥を見下したり諷めたりする大人の目ではなく、心から飛鳥を受け入れようとしている目だ。

「もしアタシが失敗して死んだら、あんたはどうするつもり？」

女王はじつと飛鳥を見つめ、ゆっくりと口を開く。

「どうもしません。死体が残っていれば丁重に葬り、次の勇者を捜します」

「あわわ……」

あまりにも正直な女王の返答に、スピニツチは怯えたような表情で飛鳥と女王を交互に見やる。

「見つからなかったら？」

女王は自嘲した笑いを浮かべる。

「いずれこの国も、この世界も滅ぶでしょう。そしてこの美しい世界は、モンスターたちの跳梁跋扈する地獄ちようりょうぼくことなってしまうと思います」

「あんたそれでもいいの？」

飛鳥の表情が歪む。父親が死んで泣いていたあの女の子も殺される。必死に病傷人を看病していたこの女王も死ぬ。希望のない未来を淡々と語るこの女王に、飛鳥はさらにイライラが募る。

「いいわけありません。本来であれば我々の世界のこと。我々の力で何とかこの危機を乗り越えたいとは思っています。しかし少しでも現状を打開する可能性があれば、できる限りのことをするのが人としてあるべき姿なのではないでしょうか。決して最後まであきらめない。格好悪くても無様でも、あがいてじたばたして最後まで抵抗する。そうすればたとえ滅んでも、悔しいですがきつと後悔だけはしないでしょう。私たちの気高さだけは、誰にも汚すことはできないのです」

「気高さ……」

飛鳥は胸が苦しくなる。そしてようやく昨夜からのイラツきの原因に気づく。この世界の置かれている状況と、自分の状況はひどく似ているのだ。この女王はそんな世界に対して、真正面から戦いを挑んでいる。正々堂々、まっすぐと。

飛鳥にとってクウェンディ女王は、自分の本来あるべき姿に他ならない。そうありたいと願っても、できない飛鳥の弱い心に、女王の姿は鋭く突き刺さってくるのだ。

飛鳥は理解する。女王にとって礼節や建前などどうでもいいことなのだ。この女王にとって自分の態度など気にするレベルの問題ではないのだ。人々を救うにはどうすればよいか。それだけがクウェンディ女王にとっては唯一の問題なのだ。

あまりにもまっすぐな女王の気質を感じ、飛鳥は俯いて深くため息をつく。そして次に顔を上げた時には、晴れ晴れとした表情になっている。

「ここで死ぬのも、あっちの世界でのたれ死ぬのも変わりはないかどうかせ死ぬなら、せめて少しでも誰かの役に立ってから死んだ方がまだましかもね」
「ではアスカさん……」

飛鳥はにかつと笑う。

「アタシなんかは何ができるかわかんないけど、やるだけやってみるよ」

「ありがとうございます……ありがとうございます……」

女王は両目から大粒の涙を流す。それでも悲しげにうつむく。

「しかし…… モンスターの数は多く、強いです。本当にあなたの

おっしやるように命を落とすこともありえます……」

飛鳥はライトブラウンの髪を右手で思い切りかき上げる。

「はっ、ゲームオーバー上等！　だったら派手に死んでやるよ！」
「おおっ！」

かつてこの世界に、ここまで死に対して前向きに立ち向かえる者がいただろうか。女王をはじめその場にいた者はみな、この異世界からの少女に畏怖し感動を覚える。しかしその中において、冷静にため息をつく者がいた。

「きつとにやにも考えてにやいにや。ノリと勢いで言ってるにや」

謁見室を包む感動と賞賛の空気の中、スピニッチだけは飛鳥の本質を正確に見抜いていた。

12話：ジヨブの部屋

飛鳥は女王に連れられて、フェンドルフィン城の奥まった一室に案内される。女王以外には、飛鳥の右斜め後方に飛ぶスピニツチだけが随行を許されていない。

「ここはなんだい？」

飛鳥の連れて来られた部屋は縦長の奇妙な部屋で、円柱をくり抜いたような造りになっている。まるで大きめの丸い試着室のようだが、床には三角形を互い違いにして重ねたような模様が、淡い紫色の光を放っている。

「何だかいかにもファンタジックで魔術的な部屋だねえ」

飛鳥は入り口から中を覗き込み、興味深げに部屋を見回す。

「ここは“ジヨブの部屋”です」

「ジヤブの部屋？」

「ジヨ！ ブ！」

スピニツチが飛鳥の耳元で怒鳴る。

「うつせえなあ…… ギャグだよギャグ」

「この世界で冒険を生業とする者は、必ず何らかの職業に就かなければなりません。もちろん職業に就かなくても冒険はできますが、どんなに敵を倒しても経験を積んでもレベルアップはしません。つまり強くはなれません」

「ふっん……」

そういうものと、飛鳥は無理に自分を納得させる。職業というのは自分になりたいものに就くのが当たり前だと思う。しかし世の中にはなりたくてもなれず、不承不承やりたくもない仕事に就いている人もいる。その仕事がその人に合っているかどうかなど、誰にもわからないのだ。合っていると信じ込まなければ、仕事など続けられるものではない。

「この部屋はその人物に合った職業に適性を変えてくれます。あなたは世界を救う勇者です。そのためにも、戦いに向けた職業に就くことになると思います」

「戦いに向けた職業ってどんなのがあんの？」

「物理攻撃系で言えば戦士や剣士、騎士などもあります。魔法系で言えば魔法使いに賢者、僧侶などもあります」

「僧侶って坊さんだろ？ そんなんで戦えんの？」

女王はにつこりとうなずく。

「僧侶にしか使えない攻撃魔法もあります。聖なる力を使った魔法などです」

「へえ」

飛鳥は自分が魔法を使っている様子を想像してみる。何だかかったいい気がする。

「アス力は何になりたいにや？」

「え？ アタシの希望聞いてくれんの？」

「いや、それは難しいにや。この部屋はあくまでもその人の適性を判断して、それに合った職業に就かせるにや」

「でも何か希望がありなら、遠慮なくおっしゃってください。も

しかしたら考慮されるかもしれませんし」

「ええそうなん？ 考慮してくれんの？ そ、それじゃ、え〜と
……」

飛鳥は舌で唇を舐めながら考える。飛鳥の脳裏には、小学校低学年のころ近所の男の子からジャイ○ンの“借りた”ポータブルゲーム機でやったRPGゲームが思い出される。

「アタシ魔法と剣を使って敵を倒すヤツがいいな」

「魔法剣士にや？ 確にかっこいいにや」

「でしょ？ それか姫勇者とかでもいいな！ こうチャイナドレスみたいにきわどいスリットが入った服着て、生足ちらつかせながらばったばったと敵を斬り伏せるみたいな」

「それもいいにや。アス力にはやかにやかいいいセンスしてるにや」
「でしょ、でしょ？」

飛鳥は両手の人差し指でスピニツチの毛玉のようなお腹をつんつんする。

「く、くすぐつたいにや。と、とにかくこの部屋が就かせる職業に、間違いはにやいにや」

「何かこういうので似たようなの、昔授業サボって観た映画にあったよ。あれなんてったつけかなあ。なんとかポッターとかって映画で……」

吹っ切れたせいか、妙にテンションの高い飛鳥に女王とスピニツチは顔を見合わせて苦笑いをする。

「とにかくやってみにやいことにはわからにやいにや」

「しゃべる帽子がクラス分けするんだよねえ」

スピニッチは羽をばたつかせながら飛鳥の背中を押し、“ジョブの部屋”の中央に立たせる。「アタシすりざりんがいい！」などと騒いでいる飛鳥を置き去りに、部屋の扉が自然にスライドして閉じられる。途端に辺りは静寂に包まれる。

「では始めましょう」

女王は入り口の横の壁にある、緑色の水晶玉に両手を乗せる。クウェンディ女王の目が水晶玉以上にまばゆい緑色に輝き、その光は全身に広がる。スピニッチが細い目を開けていられないほどまばゆくなったかと思うと、一気に光が水晶玉に吸い込まれる。その後しばらくすると、“ジョブの部屋”のドアが閉まった時と同じように音もなく横にスライドする。中は淡い光を放つ緑色の煙に満たされ、飛鳥の姿は見えない。

「ア、アスカ、どうにゃ？」

光の中にうつすらと飛鳥の動く姿が見て取れる。入り口でホバリングしながらスピニッチが飛鳥に声をかけると、咳き込みながら飛鳥が現れる。

「ごほごほっ！　なんだよこの煙」

手を顔の前でぱたと仰ぎながら出てきた飛鳥の姿を見て、女王とスピニッチは啞然とする。

「どう？　魔法剣士になった？　それとも姫勇者？」

両手を腰に当てて胸を張る飛鳥。しかし口と目をOの字にして自

分を見つめる女王とスピニッチに気づき、飛鳥は怪訝な表情で自分の姿を見下ろす。

「な、なんじゃこりゃああ！」

飛鳥はぴつちりとした水着のような黒い服を着ている。身体のはインまるわかりだ。ノースリーブの両肩はむき出しになり、下半身はスカートの下に履くスパッツのように、太ももの半分くらいで布地が終わっている。まさにオリンピック選手の着る高速水着のようだ。ただし足は脛まである黒いブーツを履いている。編み上げの頑丈そうなブーツだ。

「なあ、これって何の職業？」

飛鳥は泣きそうになる。

「も、もしかしてこれは……」

女王はある職業に思い至る。それは近年就く者がいなかった、あの伝説の職業だった。

13話：中途半端

「文句？」

「違うにゃ！ モンクにゃ！」

謁見室の上階にある女王の執務室でスピニツチが叫ぶ。“ジョブの部屋”から移動してきた飛鳥たちは、飛鳥に与えられた職業について検討するためにここにいる。

「それって何？ かつこいいの？」

飛鳥はソファから腰を持ち上げて目を輝かす。ここに来るまで「アタシは水泳選手か」「こんな格好ヘンタイみたいじゃん」と不平たらたらだった。

女王は執務机で、先ほどから古い書物のページを忙しく繰っている。細いフレームの眼鏡をかけたその姿は、インテリ女教師のようだ。

「うーん、かつこいい…… かにゃ？」

「はつきりしろよ！」

飛鳥は勢いよく両腕を振り下ろす。それにつられて84のCカッブがぶるんと揺れる。

「モンクは格闘家と僧侶が合わさったようにや職業にゃ。自らの肉体を武器とする格闘の専門家と、僧侶の特性も併せ持つてるにゃ。だから多少の魔法も使えるようになるにゃ」

「坊さんと格闘家って、少林寺みたいなもん？」

「それにゃんにゃ？」

「知らないの？ 頭丸めて『はあっ！』とかやるの」

飛鳥はスピニツチに拳を突き出す。途端にスピニツチは壁まで吹き飛ばされる。

「ぎにやつ！」

壁にぶつかってぺちゃんこになったスピニツチは、そのままずりずりと床まで落ちる。

「あ、あんた何やってんの？ アタシ殴ってないわよ！」

飛鳥はあわててスピニツチを助けに行く。

「にゃあ〜…… 飛鳥の拳はすでに凶器にや…… 簡単に人に向けて振るっちゃいけにゃいにや……」

スピニツチは目を回している。どうやら飛鳥の正拳突き of 勢いに吹き飛ばされたようだ。

「アスカさん、わかりました」

女王は眼鏡を机に静かに置いて立ち上がる。手には開かれた古い書物が載せられている。

「モンクは過去数人の格闘家や僧侶が就きましたが、みな途中でレベルアップをあきらめて転職しています」
「なんで？」

飛鳥とスピニツチが女王を振り返る。

「その…… 非常に言いづらいのですが……」

はつきりと物事を言うクウェンディ女王にしては歯切れが悪い。

飛鳥は鼻で笑う。

「いいよ。一度決めたことを変えるのはアタシの主義じゃないんだ。だから何言われても変えるつもりはないから、正直になんでもぶっちゃけちゃってよ」

女王は深くため息をついて書物に目を落とす。

「わかりました。モンクという職業は先ほどスピニッチが言ったように、格闘家の格闘技術と体力、すばやさ、僧侶の聖なる力両方使える世にも珍しい職業です」

「なんだ、いい職業じゃん」

「しかし……」

女王の声音は沈んだままだ。

「武器を使えないので戦士や剣士ほどの攻撃力はなく、魔法に対する抵抗力もかなり低い。僧侶の魔法を使えるといってもごく初期のレベルの魔法のみで、攻撃魔法はほとんど使えません」

「えーっと、つまりどういうこと?」

飛鳥は考え込む。

「つまりにや、中途半端な職業ってことにゃんにゃ」

「中途半端あ?」

戦闘において重要なファクターを占めるのは攻撃力と防御力だ。

攻撃力というとその破壊力と勘違いされやすいが、その攻撃が当たらなければ意味がない。自らの肉体を武器とするモンクは接近戦しかできない。剣や槍などの武器ならある程度離れて攻撃できるが、モンクは自分の手足の範囲しか攻撃できない。大きなモンスターや空を飛ぶ相手に戦うには、その間合いにおいて非常に不利だ。

さらに格闘家であるからして、防具はほとんど身に着けられない。強力な防御力を誇る鎧や盾、兜なども当然装備することはできない。せいぜい動きに支障がない程度の上着を着る程度だろう。

そしてトドメは、魔法耐性の低さと魔法能力の卑小さだ。魔法耐性が高ければ、相手が魔法を放つても跳ね返して攻撃することができる。また魔法しか利かない相手でも、魔法が使えれば倒すことができる。しかしモンクは攻撃魔法のダメージはほぼそのまま受けてしまい、物理攻撃の効かない相手にはダメージを与えることができない。極端な話、雑魚モンスターにさえ苦労してしまうこともあるのだ。

「ふん……」

飛鳥は女王の説明を静かに聞く。異世界での戦闘などまったくイメージが湧かない。魔法だの防御だの言われても、飛鳥にとっては気に入らないヤツはぶっ飛ばせばいい程度にしか思えないのだ。

「どうされますか？　今すぐは無理ですが、少しレベルアップすれば転職もできます。ただモンクからは格闘家か僧侶にしかなれませんが……」

そんなゲームの説明書的なことを言われても、飛鳥には明快な答えなど出せるわけもない。それに先に言ったように、飛鳥に変える気はない。珍しい職業ならそれはそれで面白いではないか。

「いいよ。このままでいくよ。アタシには攻略本もチート設定もない。アタシはアタシのやり方でクリアさせてもらうよ」

「チートってにやんにゃ？」

「あんたは知らなくてもいいの」

飛鳥は立ち上がって腕組みをする。

「さ、そんじゃさっそくファンタジアとやらを解放しに行ってみつか！」

女王はまだ何か言いたそうにしていたが、飛鳥の様子を見てあきらめたようにため息をつく。次に顔を上げた時には、また春風のような暖かい微笑を湛えていた。

13話：中途半端（後書き）

この「モンク」の設定は僕のオリジナルです。

某有名ゲームのジョブの一つになっている「モンク」とは設定が違いますので、ご了承ください。

14話：ドラゴナイト

「三つ葉のクローバーを思い浮かべてください」

飛鳥は幼いころ夢中になって集めた、幸運を呼ぶ四つ葉のクローバーを思い浮かべる。

「その真ん中にファンタジアがあります」
「ふんふん」

飛鳥は天井を見上げながらうなずく。

「それぞれの葉っぱは、上がアイリス、右下がフェンドルフィン、左下がイスペリアです」

「あれ？ あとイツコは？」
「三つ葉って言ったにや！」

飛鳥の後頭部にスピニツチの跳び蹴りが入る。一瞬目玉が飛び出たかと思つた飛鳥は、痛そうに後頭部を撫でる。

「いったいなあ…… 三つ葉なんて普通だろ？ やっぱ四つ葉のクローバーだよ」

「普通とか関係にやいにや！」

「スピニツチは怒ってばっかだねえ？ 生理？」
「ミ、ミーには生理にやんてにやいにや！」

毛で覆われているため顔色はわからないが、人間なら間違いなく真っ赤になっているのだらう。スピニツチは「ふん」と腕組みをしてそっぽを向いてしまう。

飛鳥はクウェンディ女王にこれからの行動についてアドバイスを受けている。モンクになった方がいいが、今はまだレベルはゼロ。このまま強大なモンスターひしめくファンタジアに行っても、いくら身体能力がこの世界の人間より高いとはいえ、袋叩きに遭ってすぐに殺されてしまう。

まずはレベルアップしながらモンスターに勝てるほど強くならなければならぬ。

「あ、そういえばさ？ ラスボスってどんなん？」

「ラスボ…… それはなんですか？」

「女王様、ファンタジアを占領しているモンスターの首魁のことですにゃ」

「ああ、それはわかっておりません。そもそも首魁がいるのかさえ不明なのです」

「はあ？」

飛鳥は顔を歪める。

「普通こういう場合いるだろ？ 悪の魔法使いとかクツパとか」

「クツパ？」

「女王様、アスカの言うことにいちいち反応してたら、日が暮れてしまふにゃ。時間の無駄にゃ」

「そうそう、時間の無駄。適当にスルーして…… って、どういう意味だよ！」

またヒートアップする一人と一匹の言い争いに、ため息と頬杖を同時につくクウェンディ女王。しかし、悲壮な決意で雰囲気重くなるよりはいいかもしれないと思ひ直す。

女王にとって、アスカというこの異世界人はかなり特殊な部類に

入る。実は今までにも異世界人を五人召喚している。そのうちの二人は元の世界へ帰ることを希望し、記憶を消してから望み通り帰した。そして残りの三人がファンタジア解放へ向けて、悲壮な決意で旅立って行った。しかし三人ともすべて失敗に終わっている。間違はなく強い異世界人たちであつたのにも関わらず。

そういう意味では状況がわかつているにも関わらずこれだけ自然体でいられるのは、かなりの精神力の持ち主なのだろうとは思う。もちろん真実は、事の重大さを飛鳥がわかつていないだけなのだが。

「とにかく、平和なフェンドルフィンには強い魔法も技も売ってはいません。そういう意味でもまず一度イスペリアへ行くのがいいでしょう。あそこには強力な魔法も技も売っています」
「ちょ、ちょっと待った！」

飛鳥は立ち上がって女王の言葉を両手でさえぎる。

「魔法とか技ってよくわかんないけど、それって売ってるもんなの？」

女王とスピニッチはきょとした目で飛鳥を見つめる。

「にやに言ってるにや。魔法も技も買う物に決まってるにや。そんなにやに常識にや」

「異世界の常識はアタシにとっての非常識！　ってかそういうのって、レベルアップすると勝手に『アスカはブリザガを覚えた』ってなるもんじゃないの？」

飛鳥は両手を挙げて、楽しげなファンファーレを歌う。

「そんな都合よく覚えられる訳がにやいにや。あほらしい」

「あ、あほつて言うなあ！ スコールに謝れ！」
「それ誰にや？」

飛鳥は女王とスピニツチにこの世界のシステムについてじっくりと教わる。この世界では魔法も技もすべてお金で購入しなければならぬらしい。もちろん修練を積むことによってその効果や効能などもレベルアップするらしいが、買わない限り使えるようにはならないらしい。

「とほほ…… なんちゅう現実的な異世界なんだよ。夢がないなあ」
「夢は見るもんじゃにやい。掴み取るものにや！」

「あ、なんかかつこいいかも、それ」

「二人とも話を進めても？」

「は、はい」

女王の殺意を感じ、飛鳥とスピニツチは姿勢を正す。すると女王は飛鳥の前に、お弁当袋ほどの大きさの袋を置く。じゃらじゃらと音のするところからすると、何か固い物が入っているようだ。

「これなに？」

飛鳥がひもで縛られている袋の口を開ける。すると中には“おはじき”がたくさん入っている。

「なんだこれ？」

飛鳥が一粒摘んで取り上げる。ガラスのような透明な材質の中に、赤いつぶつぶがたくさん入っている。

「ぎにや ああゝ！」

飛鳥の摘んだおはじきを見ると、スピニッチは突然悲鳴を上げる。長いひげがぶるぶると震えている。

「じよ、女王様、そ、そんなに大金アスカに渡して、こによ国はだ、大丈夫にやんですか……」

いつもは線のように細いスピニッチの目が、大きく見開かれている。飛鳥はおはじきをじゃらじゃら指の間から零して、不思議そうな顔でスピニッチを振り返る。

「なに？ これお金なの？」

「この世界はこの“ナイト”と呼ばれる石が通貨となっています。赤い粒子はドラゴンの血を固めた物で、“ドラゴナイト”と言います」

「へえ〜ドラゴンって竜のことでしょ？ やっぱファンタジックだねえ」

飛鳥はドラゴナイトを指で弾いて遊んでいる。スピニッチは爪で袋を指し、わなわなと全身を震わせている。

「で、たくさん入ってるけど、一袋でどんくらいの価値になんの？」

袋の中には軽く百個以上は入っている。

「アスカ…… ドラゴナイト（DN）は、アスカの世界の通貨価値にすれば、一個百万円ぐらいによ価値があるにや……」

「い、一個百万円！」

アスカの手からドラゴナイトがぼろりと落ちる。つまり今、飛鳥

の目の前には一億円以上がある計算になるのである。

15話：金ならある

「まずは武器と防具にや」

飛鳥とスピニッチは今、城下町に買い物に来ている。もらった約百DNで、旅に出る準備をするためである。最初の目的地はイスペリアの首都イスペリア。いまだモンスターの進出のないフェンドルフィンからイスペリアへの旅路なので、飛鳥はそんなに心配はしていなかった。

しかし女王の話によると、フェンドルフィンからイスペリアまでは直接は行けず、一度ファンタジアに入らなければならぬらしい。三つ葉のクローバーの葉から葉へ移動するには、一度真ん中に行かなければならないのだ。

「防具って言ったって、アタシに装備できる防具なんてないんですよ？」

飛鳥は水着のような薄衣一枚しか身に着けていない。肩甲骨ほどのライトブラウンの髪は、邪魔だということで一つにまとめている。白く若々しい肢体に身体のラインがはつきりわかるその姿に、道行く人々の好奇の視線が集まる。多分に下卑たものだったが、長袖・長ズボンが主流のフェンドルフィンにおいて、その姿は扇情的以外の何物でもない。

「それは見てみにやいと、にやんとも言えにやいにや」

スピニッチが飛鳥を連れてきたのは、お城から二キロメートルほど離れた一件の立派な建物であった。フェンドルフィンでは一番品数も多く、質も保証でき、一番信頼の置ける武器と防具を売る店だ。

その代わり値段も目が飛び出るほど高い。

「いらつしゃいませ」

丸まった口ひげを忙しく揺らし、揉み手しながら現れた小太りの男は、どうやらこの店の店主のようだ。

「ここよお方は女王の召喚された勇者様にや。この店で一番強い武器と防具を見せてほしいにや」

「これはこれはクウエンディ女王様の使い魔様、いつもごひいきにありがとうございます。ではこちらへどうぞ」

店主は腰を低くしながら店の奥へと二人を促す。店は三階建てになっっているらしく、一階は比較的安価な武器や防具。二階がいわゆる希少価値の高い高級品。三階は魔法と技を売っているらしい。店主は迷いもせず石造りの階段を二階へと上がっていく。外観と同じ材質の階段は一度折れ曲がり、二階へと続いている。

「いらつしゃいませえ」

二階に上がると黒と白のメイド服を着た若い女の子たちが、こやかに挨拶する。

「なんか違う店に来たみたいだね」

飛鳥はスピニッチに耳打ちする。

「ここは金持ちしか来にやいところだから、かにやり趣味が入ってるにや……ところでアス力は、さっきからにやんで腰が引けてるにや？」

実は、飛鳥はお城を出てからずっとへこへこと泥棒のような忍び歩きをしていた。視線もきよろきよろと落ち着きなく、口数も少ない。スピニッチは自分の職務を遂行しやすいので黙っていたのだから、ずつと怪訝に感じていた。

「だってアタシの腰には一億円あるんだよ！　こんな大金身に着けてるだなんて悪人にバレたら、アタシ速攻拉致られて殺されるし」

飛鳥の腰に結びつけられた袋で、百DNが硬質な音を立てる。スピニッチは力なくため息をつく。

「そんなに歩き方してる方が、怪しまれるにや」

「だ、だって一億だよ！　一億！」

「一億じゃなくて、百DNにや！」

「一億と百じゃ、一億が勝つに決まってんじゃない！」

「わけわからんにやいにや」

「こちらなぞどうでしょうか」

「わっ！」

小声で言い争いをしていた二人の前へ、店主がにこにこと一本の剣を差し出す。銀のまっすぐと長い刃に、金の柄。随所に赤や緑色の宝石で装飾された、いかにもお高い感じのする剣だ。

「これは世にも稀な『王者の剣』という品です。攻撃力・耐久力ともに最高レベル！　ドラゴンのウロコさえ貫通できますよ！」

「すっげえカッコイイ！」

飛鳥は目をきらきらさせて剣を取る。若干重いが、飛鳥の今の腕力ではまったく問題ない。試しに振ってみたが、軽い風切り音がい

かにも切れ味よさそうだ。

「スピニッチ！ これ！ これ気に入った！」

「そうですか、それではお会計……」

「ダメにや」

さっそくレジへと向かおうとした店主と飛鳥を、スピニッチが冷静に引き留める。

「アスカにはそれは装備できにやいにや」

「……やっぱり？」

飛鳥も薄々わかっていただけに、素直に店主に剣を返す。店主は訳がわからぬようすで目をきよろきよろさせている。

「えっと、あの、それはどういうことでございましょうか……」

「こによお方は“モンク”なんにや。だから“モンク”用の武器と防具を用意してにや」

「モンク？」

店主は一瞬きよんとする。次に笑顔で揉み手しながら固まり、こめかみを汗がつつつと流れる。

「モンクと申しますともしかしてあのモンク？」

「もしかしにやくてもそによモンクにや」

「まさかあのモンク？」

スピニッチは重々しくうなづく。

「モンク…… はあ」

店主の肩が一気に下がる。笑顔が一瞬にして悲しみの表情に変わる。周囲に青白い人魂をまわりつかせながら、げんなりと店の奥へと下がっていく。しばらくして戻って来ると、手に持った黒い物の埃をぱんぱんと払っている。

「当店では…… いや、この国にはモンク用の防具はありません。武器は唯一これだけです」

店主の差し出した黒い手袋は、革製の黒い手袋で、埃でうつすらと白くなっている。拳の部分にはくすんだ銀色の金属がついている。

「『バトルグローブ』です」

店主からバトルグローブを受け取った飛鳥はそれを両手にはめてみる。手首のところはひもで結ぶようになっていて。

「アスカよく似合うにゃ」

「これだけ？」

「は？」

「これしかないの？」

店主とスピニッチは合わせたようにうなずく。

「アタシには水着とブーツと革手袋しかないの？」

今度はメイドたちまでいっしょにうなずく。

「金ならある」

「へ？」

飛鳥の身体から得体の知れない黒いオーラが立ち上る。

「金ならあるからもつとかっこいいの探せえ〜！」

「きゃああっ！」

「ア、アス力落ち着くにゃ！」

暴れ始めた飛鳥を、スピニツチが必死に羽交い締めにして抑える。一生のうちで一度は言いたい「金ならある」のセリフをこんなところで使うことになるとは、飛鳥には夢にも思わなかった。

16話：タトウー

「アスカ、もう元気出すにや」

「はぁ……」

飛鳥とスピニツチは店の階段を力なく三階へと上っている。予測できたこととはいえ、モンクの装備がここまで貧弱だったとは。近年就く者がいないということは、当然店でも売ることとはなくなる。仕入れをしたり開発したりしなくなるのは、飛鳥の世界でも常識である。

「アスカ、魔法！ 魔法にや！ きつとかつこいいスバーンとかバキューンとか敵を倒す魔法があるにや！」

スピニツチは肉球を振って飛鳥を元気づけようとしている。そんな様子を見て、飛鳥は前髪で半分隠れた顔をのっそりと上げる。

「そう…… かな？」

「そうにや！」

「いらつしゃい」

三階に上がると店の雰囲気は一変する。窓は厚いカーテンで遮光され、昼間なのに薄暗い。壁には禍々しいオレンジの光を揺らめかす口ウソクが点々と点り、広い店内にはところどころに妖しい物の乗ったテーブルが置いてある。テーブルの上にあるのはドクロを象ったネックレスや不気味に色を変える水晶玉、ミニチュアのギロチンなども置いてある。

「うわぁ、いかにもなところね」

どんよりとした飛鳥の気持ち以上にどんよりとした空氣に、飛鳥もさっきまでのショックを忘れてしまう。入り口の右にある木製のカウンターには、そんな店内の雰囲気には似つかわしくない、闊達な笑顔を見せる若い女が立っている。

「あたしはレビ。このマスターやってるわ。よろしく」

カウンターの横の上げ扉を開けて、女性が出てくる。差し出されたむき出しの腕を見て、飛鳥は度肝を抜かれる。きつと元は綺麗な肌だったはずの腕には、びっしりと隙間なく刺青が彫られている。正方形や長方形の幾何学的な紋様から、動物などの象形的な紋様。何語だかわからない文字で書かれた刺青もある。カラーも黒はもちろん、赤や緑などカラフルな紋様もあり、やくざというよりはアメリカの刺青アートのような印象を受ける。

レビは年の頃は飛鳥より少し上といった感じで、二十代前半ぐらいだろうか。頭には赤いバンダナを巻き、縮れた細い黒髪が隙間から出ている。肌の色は褐色で、飛鳥の世界でいう黒人だろう。ノースリーブのシャツには原色の花がこれでもかというほどプリントされ、見た感じレゲエ系の黒人女性といった雰囲気だ。アーミーカラーの長ズボンに、飛鳥と同じような編み上げの黒いブーツを履いている姿からは、魔法を扱っている店のマスターというより、密林で猛獣を狩るハンターのような印象だ。

「あ、よ、よろしくオネガイシマス」

レビは飛鳥と握手をしながら快活に笑う。

「あたしの姿にびっくりしたようだねえ。話は聞してるよ。あんた勇者様だろ？　これからあたしたちの世界を救うために、ファンタ

「ジアへ行くつていう」

「あ、は、はあ」

飛鳥はレビの勢いに気圧されてしまふ。ぶんぶんと乱暴にシェイクハンドされ、飛鳥はよろめいてしまふ。華奢な手足のくせにすごい力だ。

「で、何を探してるんだい？ 攻撃魔法？ 防御？ それともその姿から想像すると格闘家の技かい？」

レビはカウンターに戻りながらスピニッチへ笑顔を向ける。

「それがこの方はモンクなんにや。だからモンクに合う魔法や技があつたらにやんでも出してほしいにや」

「モンクうゝ？」

レビは驚いて目と口がOの形になる。しかしすぐに難しい顔になつて、あごに手を当てて考え込む。

「うゝん、モンク用の魔法や技はうちには、いや、この国にはないと思うよ。需要がまったくないからねえ」

飛鳥はまた落胆する。ここでもそうか。

「でも格闘家や僧侶用の技や魔法はあるから、とりあえずレベルアップするまでは、それで急場をしのいだらいいんじゃないかい？」

「ええつ、あるの！」

飛鳥の表情が明るくなる。とりあえず専用のものでなくてもいいので、何かあればそれは助かる。

「ああ、あるよ！　ちよつと待ってて！」

レビはカウンターの奥の部屋へ下がる。飛鳥とスピニッチは顔を見合わせてグッジョブをする。少しは光明が見えてきた。

壁際にある長椅子に座って十分ほどすると、レビが木のトレイを持ってカウンターから出てくる。トレイの上には四角や丸の小さな黒い紙がたくさん乗っている。

「とりあえずあるだけ持ってきたよ」

「これってなに？」

飛鳥は長方形の紙を取り上げて顔の前で裏返して見てみる。どうみてもただの紙だ。

「これはその技や魔法を身に着けられるか試すもんだよ。身体にくっつけられるようになって、もしダメなら剥がれる。大丈夫ならそのまんまってわけさ」

「あ、シールになってる」

長方形の角をめくってみると、確かに粘着面がある。飛鳥はそれを剥き出しの腕に貼ってみる。

「それは格闘家の基本技『ワンツ』だよ。ジャブとストレートを高速で繰り出して、相手をノックアウトする基本的な技さ」

「あ、それ知ってる。テレビのボクシング中継で言ってた」

腕に貼ったシールはそのままくっついており、剥がれる様子はない。

「どうやらその技は大丈夫のようだね。他のも試してみるかい？」
「うんうん！」

飛鳥はスピニツチやレビに時々アドバイスをもらいながら、技と魔法を選び出す。重複するものやあまり飛鳥の好みではないもの、踊りながら相手を幻惑する技など、を省き、いくつかの技と魔法を選び出した。

「じゃ確認するよ。技が『ワンツ』、『クロスアッパー』、『フック』、『フットワーク』、『回し蹴り』の五つ、魔法が『キュア』、『毒消し』、『麻痺解除』、『シールド』の四つでいいんだね？」

飛鳥は満足そうにうなづく。

「もつと強い技や魔法は、イスペリアに行けばきつとあるよ。それに全滅してなけりやけど、ファンタジアの街にはもつといっぱいある。いずれあんたが強くなってファンタジアのお城の近くの街や村までいけば、モンク専用の技や魔法もある」

「そうだね。RPGでも最初は『ひのきの棒』だもんね」
「なんだそれ？」

レビは心底楽しそうに笑う。飛鳥はこの黒人マスターが好きになった。

「じゃその技と魔法を装備しちまおう。いっぺんにやっちまうから、あんたは一度お城に戻つといで」

「わかったにや。ミーは女王様に報告に行くにや。アスカ、がんばるにや」

「がんばる？」

スピニツチはその場で煙のように消え失せてしまう。

「あ、もう！　なんだよ、なにをがんばるんだよ！」
「これさ」

レビの手には長い針がある。

「げっ、もしかして注射？」
「注射つてのが何だかわかんないけどたぶん違うよ。この世界ではね、勇者様。技や魔法を装備するためには、あたしみたいに身体に刻みつけるのさ」

レビは刺青だらけの腕を差し出す。

「げっ！　アタシ、タトウーだけはやったことないんだけどなあ」

飛鳥は針を避けるように左腕を前に出す。

「なんだい、その割にはあんただって傷いっぱいあんじゃない」

レビは飛鳥の左手首を掴む。飛鳥は慌てて腕を引っ込める。

「あ、こ、これは……」
「ふん……」

レビはいたずらっ子のように飛鳥を上目遣いに見つめる。

「どうやらワケありのようだねえ。どうせこれ全部彫るまでは四、五時間かかるんだから、彫りながら話を聞かせてもらおうかな、勇者様」

レビの指の間で、長い針がロウソクの炎を反射して妖しくきらめいた。

16話：タトウー（後書き）

< 技 >

- ワンツ：ジャブとストレートをコンビネーションで繰り出し、相手の動きを止めてから打ち抜く殴る技では基本の技。
- クロスアッパー：接近戦用のアッパーカット。
- フック：肘をフック（鉤）のように九十度に曲げて、相手を横から殴る接近戦用の技。
- フットワーク：攻撃したり相手の攻撃を避けたりするための、基本的な足の運び方。
- 回し蹴り：軸足を起点に身体を回転させ、勢いをつけて蹴る技。背後の相手に使えば『後ろ回し蹴り』となる。

< 魔法 >

- キュア：切り傷や擦り傷など、表面的な外傷を治す治癒魔法。
- 毒消し：解毒する魔法。強力な毒には効果はない。
- 麻痺解除：一時的な手足の痺れを解除する。強力な麻痺には効果はない。
- シールド：物理攻撃をある程度軽減する。全身を包むバリアのよ
うなもの。

17話：異世界の歓迎

「はにゃあ…… 疲れたあ」

床に敷かれたマットにうつぶせのまま、飛鳥は全身汗まみれになっている。長時間の痛みに耐え、ようやくすべての技と魔法を掘り終えたのだ。

「はい、お疲れちゃん」

レビは飛鳥の背中を軽く叩く。レビの額も汗にまみれている。

「アタシ、やくざって尊敬するかも。こんな彫りもん全身になんてやったら絶対死ぬ」

レビは快活に笑う。

「慣れればこれも快感になるさ」

「げえ〜！ アタシMじゃねえし」

飛鳥は敷物の上にあぐらをかいて大きく舌を出す。レビは笑いながら、刺青の道具箱に針や墨を片付けている。

「でもありがとね。なんだか少しすっきりしたかも」

飛鳥の顔は晴れ晴れとしている。自分の心の闇を人に話したことなど、初めてのことだった。レビは笑顔から一転、柔和な微笑みに変わる。

「痛みを知ってるヤツは他人の痛みにも優しくなれるものさ。あんながこの世界に来たのは偶然じゃない。何か意味があることなのかもしれないね」

「意味……意味なんてあるのかなあ。スピニツチの苦し紛れのような気もするけど」

「あは、あの使い魔ってけっこう見栄っ張りだからね。案外その程度かもね」

「言えてる!」

飛鳥とレビは、タオルで汗を拭きながらまた大笑いをする。飛鳥はこんなに気持ちよく笑ったのは、本当に久しぶりだと思う。この世界に来てよかったと、初めて思える瞬間だった。

「あ、ねえ、この技とか魔法とかってどうやって使うの?」

飛鳥は自分の腕を捻ってみる。

「うーん、慣れれば何も考えないでできるけど、慣れるまでは何か自分できっかけになるようなこと決めておいた方がいいかも」

「きっかけ?」

レビはうなずく。

「例えば刺青を触るとか適当な呪文を唱えるとか……」

「つまり自己暗示ってこと?」

「まあ、そんなところね」

「ふーん、なんかよくわかんないね。RPGとかだとコマンド選ぶだけなんだけどなあ」

「慣れるまでは、適当に弱い敵を相手に練習しとくといいかもしれないね」

「了解」

飛鳥は指二本で敬礼する。飛鳥の購入した技や魔法は全部で三DNだった。飛鳥の世界でいうと三百万円。飛鳥にはそれが高いのか安いのかわからなかったが、もともとはあぶく銭だと思い、快く四DN払った。

「まいど。そろそろ使い魔ちゃんが帰って来るころだから、下に行つてごらん」

「うん、ありがと。それじゃ」

飛鳥は手を振って出口へ向かう。しかし何か思い立ったようにレビの前に戻って来る。

「ちよつとごめん、あのさ……」

飛鳥が店から出ると、外はもう夕暮れが迫っている。ほとんど丸一日この店にいたことになる。途中レビにもらったサンドイッチしか食べていないので、飛鳥のお腹は悲しげな鳴き声を上げている。

「腹減ったなあ」

するとちょうどスピニッチが店の前に現れた。

「ネミュウムジャ？」

「は？」

「ネミュウムジャ・タルドグー！」

スピニツチはフェンドルフィン語を話しており、何を言っているのかまったくわからない。飛鳥は耳を指さし、必死に首を振ったり身体の前で×を作って、「わからない」とジェスチャーする。

「ニャ！」

スピニツチは何かに気づいたように肉球を叩き、お腹の前をまさぐる。するとまた翻訳こんにやくを出す。飛鳥は何度もうなずいてスピニツチから翻訳こんにやくを受け取って食べる。食べ終わると飛鳥の耳には、周囲の人々の喧噪が意味あるものとして戻って来る。

「助かったよ。いやあ、さっきう。こしちゃってさ」

「だから、おにゃのこがう。こにゃんて言うにゃにゃ！」

スピニツチの蹴りが後頭部に入る。

「痛っ！ ほんとのことじゃんよお。この服う。こしづらくってさあ」

「つつさいにゃ！ 翻訳こんにやくはもうにゃいにゃ。これからは自分で買うにゃ」

「げっ、まじで？」

スピニツチがお城へ向けて飛び始めるので、飛鳥は慌てて後を追いかける。夕暮れ時のフェンドルフィンの街は人通りも増え始め、これから夜の妖しい活気に包まれようとしている。

「スピニツチいゝ、この国に何で長袖の人が多いのかわかった気がするうゝ」

行き交う人を見遣りながら、飛鳥はスピニツチの黒い毛玉のような背中に声をかける。

「自分の持ち技や魔法を、わざわざ相手に教えて戦う人はいにやいからにや」

「じゃあさ、アタシも太ももの付け根とかおしりとか、普段隠してるところに彫った方がよかつたんじゃない？」

飛鳥は様々な紋様のついた上腕を、左右交互にスピニツチに見せる。

「確かにそうにゃんだけど、そういうところには隠し技として必殺技とか強力な魔法を彫るにや」

「必殺技？」

飛鳥の目が夕日に映えてきらきらと光る。スピニツチは重々しくうなづく。

「それにやりに強い魔法や必殺技は、タトウーの大きさもそれにやりに大きいにや。紋様の形もかつこいいにや」

「そつかあゝ、イスペリアってところに行けばあるの？」

「それはもちろん……」

スピニツチがそこまで言いかけた時、飛鳥たちの前方の人垣が崩れる。

「きゃあああっ！」

「逃げろお！」

道一杯に広がっていた人々が左右に分かれ逃げ惑う。荷車を引きながら慌てて横の路地に走り込む者もいれば、女性の肩を抱いて飛鳥たちの横をすり抜けて逃げて行く男性もいる。夕方の賑わいを見せていた繁華街の通りは一変し、恐慌状態に陥っている。

「な、なにになに？　なにがあつたの？」

きよろきよろと左右を見回す飛鳥。すると地面が震動し始める。それはどうやら前方から迫ってくるらしく、徐々に大きくなる。

「ア、アスカ、見るにや！」

スピニツチの爪の指す方向に視線を巡らすと、飛鳥は驚愕する。まさにここは異世界なのであった。

17話：異世界の歓迎（後書き）

<フェンドルフィン語> 既出順

ネミ：終わる

ゝユウ：ゝた（過去を表す助動詞）

ゝムジャ：ゝですか（疑問を表す言葉）

タル：聞く

ゝドグー：ゝしている

18話：唸れ！ クロスアッパー！

「な、なにあれっ！」

それは一戸建ての住宅ほどもある巨大な雄牛であった。牛は狂ったように雄叫びを上げ、周囲の人や荷車、露店などを跳ね飛ばしながら飛鳥の方へ突進してくる。

「わああ！ 暴れ牛だあ！」

黒い雄牛は電信柱よりも太い角を左右に振り回している。その目は明らかに正気を失っており、白濁した泡まじりの涎を口から大量に垂れ流している。

「や、やばっ！ 逃げなきゃ！」

すぐ横の路地へ逃げ込もうとする飛鳥の腕を、スピニッチがしっかりとつかむ。小さい羽で飛んでいるくせに、身体の高い飛鳥の方が反動で後ろに戻ってしまう。

「何だよ！ 死んじゃうよ！」

「ダメにや」

「は？」

スピニッチは線のような目で巨大な雄牛をにらみつけている。

「アス力はこの世界を救う勇者にや。あんな家畜から逃げてはいけにやいにや」

「はああ？」

飛鳥の細い眉がハの字に下がり、眉間に深いシワが刻まれる。

「あなたなに言ってるの？ あんなバカでかいバケモノにどうやって勝ってるの？ 踏みつぶされて終わりだよ」

「だったら踏みつぶされればいいにや」

「なん……だと？」

スピニツチの顔はふざけてはいない。大まじめだ。

「アス力は言ったにや。『やるだけやってみる』、『ゲームオーバー上等！』ってにや」

「そ、そりや言ったけどさ……」

雄牛はもう五十メートルほどのところまで迫っている。遠くから見てもその巨大さには圧倒されるのに、近づくにつれさらに恐怖感が増す。大型観光バスをさらに一回り大きくしたものが、地響きを立ててまっすぐ迫ってくるのだ。

「ファンタジアに行けば、あんにや動物は雑魚にもにやらにやいや。今逃げたら絶対にファンタジアは救えにやいにや」

「だって、か弱い女子高生のアタシにどうしろっていうんだよ！」

「アス力のか弱い女子高生じゃにやいにや」

スピニツチはにやっと笑う。その口にはきれいに並んだ牙が見える。

「世界を救う最強によ勇者にや」

飛鳥は唾を飲み込んで雄牛を見る。もう目の前だ。するとすぐ横

で、母親に連れられて逃げ惑う小さな子どもが、他の大人に突き飛ばされて転んでしまう。その拍子に母親と手が離れてしまう。

「ああつ！ ママ！」

「あああつ！ テルー！」

母親は戻ろうとするが、逃げる大人たちに突き飛ばされて戻れない。そこに子どもの身体の数十倍はある雄牛の角が迫る。

「きゃああつ！」

脇に身を寄せている人々が目を覆う。次に展開される惨劇を想像し、絶望の叫びを上げる。しかし雄牛の雄叫びが突然途絶える。窓ガラスが次々と破砕されていた震動が急に止まる。人々がおそるおそる顔を上げると、なんと一人の女の子が巨大な雄牛の角をつかんで、その突進を止めている。

「牛いゝ、家畜の分際で人間様に迷惑かけてんじゃねえよ。てめえ狂牛病か？」

飛鳥は両手で角の先端を握り、両足を踏ん張っている。足は脛まで地面に埋まってはいるが、そのすぐ後ろの子どもは無事だ。頬に涙を光らせ、呆然として赤く染まった空にそびえる雄牛を見上げている。

「テルー！」

母親が子どもを抱き上げる。その瞬間、雄牛が涎を飛び散らせながら雄叫びを上げる。角を振り上げ、前足で地面を擦る。闘牛士に突進しようとする雄牛そのものだ。牛が角を振り上げたため手を放

した飛鳥は、両拳を握りしめファイティングポーズを取る。

「アスカ！ ワンツーにゃ！」

スピニツチの声を聞き、飛鳥は左上腕の一番上にある長方形のタトゥーに、右手の指先で触れる。途端に飛鳥は、体温が上昇したように感じる。

「ん！ なんかイケそうな気がする！」

雄牛は血走らせた眼で飛鳥を見下ろし、頭を地面すれすれに低くすると一気に突進する。ゆうに大型トラック十台分はある質量が飛鳥に迫る。

「しっ！」

飛鳥は雄牛の角を避け、その眉間にジャブを打つ。雄牛は蜂に刺されたかのような痛みに、一瞬動きを止める。

「しっ！」

瞬時に飛鳥は左足を大きく踏み込み、右ストレートを同じ箇所へ打ち込む。分厚い鉄板がひしゃげるような音がして、雄牛の眉間がクレーターのように陥没する。洞窟のような口を大きく開けて、雄牛は血と涎の混じった液体を大量に地面へぶちまける。

「アスカ！ 今にゃ！ クロスアッパーにゃ！」

「おっしや！」

飛鳥は左肩の正方形に指で触れる。飛鳥の血は沸騰するかのよう

に熱くなる。

「おりゃああつ！」

飛鳥は右足を踏み込みながら両膝を折る。沈み込んだ身体全体の力を拳に乗せ、まっすぐに天へと身体ごと突き上げる。

それは火山が噴火したかのような衝撃だった。一軒家ほどの雄牛の身体が、数十メートル上空へと打ち上げられ、縦に回転しながら数百メートル先へと放物線を描いて飛んでいく。一際大きな地響きの震動で窓ガラスが一斉に割れる。大量に巻き上がる砂煙の向こうには、動かなくなった雄牛が道をふさいで小山のように横たわっている。

飛鳥は踏み込んだ自らの右足が、地面に直径三メートルはあるすり鉢状のクレーターを作ったことに驚く。

「わ、やべえ、道に穴開けちった」

その瞬間今度は街の人々の歓声が爆発する。帽子や鍋、釜、あらゆる物が宙を舞う。気がつけば飛鳥は、通りを埋め尽くすほどの人々に囲まれて、賞賛の嵐を受けていた。

19話：悪しき魂を救う者

「さっそくお手柄のようですね」

クウエンディ女王は柔和な笑みを見せる。高層にある謁見室の外では、眼下に城下町の夜景が広がっている。夜空には少し雲がかかって月は見えない。飛鳥の前のテーブルには、黄色い粒の入ったおはじきが一個置いてある。

「あれはスピニツチのお陰だよ。こいつが止めてくれなきゃあたし逃げてたし」

「アス力はまだ自分の力がわかってにやいにや。一日中タトウを彫られて、へとへとにやってるにも関わらずあのパワーにや。レベルを上げて本気を出したら、あんにやもんじゃにやいにや」

「ほへ」

飛鳥はまるで自分のことを言われているような気がしない。さっきは無我夢中だった。子どもが目の前で殺されそうになるのを見ていられなかったただけだ。テンプレ的展開とはいえ、やはり無視するわけにはいかない。

「でもその後、あのバカでかい牛はきらきらって砂粒みたいになって、消えちゃったんだよ。そしたらアタシの頭の上で、チャイムみたいな音がしてファンファーレが鳴ったんだ」

飛鳥は身振り手振り、口まねまで入れて女王に説明する。

「だからミーが教えたにや！アス力はあの暴れ牛を倒したことでレベルアップしたにや」

飛鳥は口を尖らせる。

「それは聞いたけどさ、アタシなんにも変わってないよ」

「まだレベル一だからにゃ」

「んじゃ、今までレベルゼロだったんだ」

「そうにゃ」

飛鳥はおはじきを指で弾く。

「砂粒になって消えた牛のいたところに、これが転がってたんだ」

「それは“報酬”です」

女王は静かに微笑む。

「それに砂粒になって消えたのは、あなたが曲がりなりにも聖なる職業の一端だからです。もはやあなたには生き物を殺すことはできません」

「え？」

飛鳥の手からおはじきが落ちる。テーブルの表面に当たって軽い音を立てたおはじきは、そのまま床を転がっていく。

「殺せないって、だってあの牛、死んじやったよ？」

女王は微笑みながらうなずく。

「いいえ、“死んだ”のではなく“転生した”のです」

「アスカの世界の言葉で言えば“成仏させた”っていうことにゃ」

スピニツチは転がったおはじきを拾いに飛んでいく。

「死んだと同じじゃん」

「それは違います」

今度はしっかりとした声音で女王が否定する。

「あなたの世界では同義に扱われているようですが、“死”と“転生”は大きな違いがあります。この世界で死んだ者は、二度と生まれ変わることはありません。死んだ魂は未来永劫虚無の空間を彷徨い続けるのです。救われない消滅……それを“死”と呼びます」

「なんだかどつかで聞いたような話だね」

飛鳥は頭の上で手を組み、背もたれに身体を預ける。

「しかし“転生”は違います。悪しき魂は浄化され、よい生命として生まれ変わります。それはとてもよいことです」

「つまりなにかい」

飛鳥は女王へ身を乗り出す。

「アタシが化けもんを倒すと、そいつは死ぬんじゃないかっていいヤツになって生まれ変わるってことかい？」

女王は深く頷く。

「あなたに倒されることよって、“救われる”んです」

「なんだかなあ」

飛鳥はまた両手を頭の上に伸ばして背もたれに勢いよくもたれ、

両足を踏ん張ってイスごと後方へ仰け反る。

「アタシみたいなクズ人間が“悪しき魂を救う”って言われても、どうもぴんと来ないね」

「こう考えればいいにや。命を“奪う”んじゃないかって“助ける”って」

スピニツチはおはじきをテーブルに置く。

「だからこれは悪しき魂を救済したご褒美にや。遠慮なく受け取るにや」

飛鳥は首だけを曲げて黄色いつぶつぷの入ったおはじきを見る。

「それドラゴナイトってヤツじゃないよね。なんてえの？」

「これは黄色だから『ウォームにやイト』にや。黄色いによは主に砂漠にいる“サンドウォーム”の体液を固めたものにや」

「ふゝん……で、いくらぐらいの価値があんの？ 一千万とか？」

「アスカの世界の価値にすればだいたい千円くらいにや」

「せ、千円？ うわっ！」

座っていた椅子の脚が滑り、飛鳥はそのまま床にひっくり返る。

「いたた……あんなでっかい化けもん倒して、たったの千円？」

後頭部をさすりながら立ち上がった飛鳥の目の前では、黄色い粒子の入った透明な鉱石が鈍く光っている。

「言ったにや。あれはモンスターではなくただの家畜にや。せいぜいそんにもんにや」

「はひ……」

起こしたイスにのそのそと腰掛け、飛鳥はテーブルに両手を伸ばしてべったりと伏せる。

「だったらファンタジアにいるモンスターってどんだけすごいんだよ……」

「例えば……」

女王が人差し指を立てて説明しかける。そこに慌てた様子の兵士が飛び込んで来る。

「じよ、女王様！ あ、暴れティラノが街に現れました！」

「なんですって？」

女王は険しい表情で立ち上がる。

「ス、スピニツチ、今あの人なんてった？ ティ、ティラノってもしかして……」

スピニツチが口を開きかけると外で凶悪な鳴き声が聞こえる。昔観た怪獣映画のあの声だ。飛鳥は振り返ってテラスの向こうに広がる城下町を見る。そこには燃えさかる街の炎をバックに、巨大な恐竜の姿があった。

「やっぱし……」

ティラノサウルス…… 飛鳥の世界ではとうに絶滅したはずの肉食恐竜である。

19話：悪しき魂を救う者（後書き）

<「ファンタジア」の共通通貨>

ドラゴナイト（赤）（ドラゴンの血）＝約100万円

ユニコナイト（白）（ユニコーンの涙）＝約10万円

マーメイナイト（青）（マーメイドの鱗）＝約1万円

ウォームナイト（黄）（サンドウォームの体液）＝約1000円

グリズナイト（黒）（グリズリーの体毛）＝約100円

カップナイト（銅貨）＝約10円

20話：魔法剣士

「あ、あれなんだよ…… これって現実？」

「あれがモンスターにゃ」

ティラノサウルスは飛鳥が幼いころ見た恐竜図鑑と同じシルエットをしている。ここからでは遠くてよく見えないが、体長はだいたい二十メートルはあるだろうか。家々の屋根が胸くらいの高さだ。ティラノサウルスは体当たりで建物を破壊し、雄叫びを上げながらこちらに向かって来る。街を破壊しながらなのでさほどスピードは出ていないが、ここに到達するのは時間の問題だろう。家が破壊される度に炎が上がり、熱せられた上昇気流に乗って悲鳴や怒号が聞こえる。飛鳥にとってはまさに映画のように、現実感の乏しい絵面だ。

「暴れ牛の次は暴れティラノって、どんだけなんだよ……」

「アスカ！ いよいよほんとの出番にゃ！ 勇者としてその力を發揮するにゃ！」

「いいっ？ 無理無理無理！」

飛鳥は必死に顔の前で手を振る。どう見てもさっき倒した牛の三倍はある大きさだ。しかも草食動物の牛と違い肉食動物だ。

「あ、あたしなんかすぐエサにされちゃうよ！」

「アスカ！ 言ったにゃ、ファンタジアには……」

「よいのです」

スピニツチの言葉を女王の凜とした声がさえぎる。

「自分の国は自分たちで守ります。アスカさんはここで休んでいてください」

「休んでって、あんなのどうにかできるの？」

「フェンドルフィンにもまだ戦う兵士は残っています。オーガスとレイズナーを呼んで！」

脇に控える侍女に女王は命令を下す。すぐに階下から金色の鎧に身を包んだ二人の男が現れる。一人は緑色の長い髪をなびかせた長身で筋骨逞しい男。もう一人は青空のような蒼く長い髪をした中肉中背の男。二人とも腰に長大な剣を携えている。

「女王様、いつでも出撃できます」

緑色の髪をした男が髪と同じ緑色の瞳に強い意志の光を見せてクウェンディ女王の前にひざまづく。

「オーガス、難民の救出作戦から戻ったばかりで申し訳ございませんがよろしくお願いします」

「身に余るお言葉痛み入ります」

「難民の中にも戦える兵士はおります。彼らにも手伝っていただいてよろしいでしょうか」

今度は蒼い髪の男が胸に手を当てて片膝をつく。頭髪と同じ碧い瞳は吸い込まれそうなほどに澄んでいる。

「もちろんです、レイズナー。ただ決して無理強いはいしないでください。彼らは辛い思いをしてきているでしょうからね」

「はい、心得ております。では」

金属の触れ合う音をさせて二人が立ち上がる。軽く会釈をすると、

男たちは背中を向けてテラスへと駆けて行く。その先は赤い炎が夜空を染めている外だ。しかし男たちは躊躇せず虚空へと身を躍らせる。ここは地上三十メートル以上の高層だ。

「まじっ！ 飛び降りた！」

飛鳥が慌てて後を追う。するとテラスの端に消えたはずの男たちが、金色の鎧をきらめかせ上空へと昇っていく。その手には銀色の剣が握られている。

「わああゝそ、空飛んでる！ 飛んでるよ、あいつら！」

飛鳥は尻餅をついて男たちを指さす。スピニッチが飛鳥の隣りに飛んで来る。

「彼らはここによお城を守る“魔法剣士”たちによ。あによ二人がいる限り、そう簡単にここによ国はやられにやいにや」

「ま、魔法剣士？」

飛鳥は途方に暮れて真っ赤に染まる城下町の空を見る。二人の男たちの金色のきらめきがティラノサウルスへと近づいていく。二人に気づいたティラノサウルスは雄叫びを上げて噛みつくこうとする。そこに地上から無数の矢が打ち込まれる。

「お城の兵士たちにや。それにファンタジアから避難してきた兵士も混じってるにや」

テラスの端に手を掛けて眺めている飛鳥に、スピニッチが解説する。まさに映画のような光景に、飛鳥は言葉も出ない。

矢が打ち込まれるとティラノサウルスの前進が止まる。身体中に

黒い小さな矢が体毛のように刺さっている。一本一本は小さくても、あれだけたくさん刺さればかなり痛いだろう。ティラノサウルスは苦悶の叫びを上げる。そこに新たに喚声が聞こえる。お城から剣を持った数十人の兵士たちが突撃していく。金や銀、中には黒い鎧を着た兵士もいる。兵士たちは苦悶に身をよじらせるティラノサウルスを取り囲み、牽制する。

「剣なんかあの化け物と戦えるの？」

「戦うにはオーガスとレイズナーにゃ」

飛鳥の顔が緑と青の光に照らされる。ティラノサウルスの左右から、緑と青の光が打ち込まれたのだ。ブーメランのような大きな刃がティラノサウルスの巨体を切り裂き、硬質な身体から鮮血が飛び散る。二人の魔法剣士は剣を振るっており、その光は剣から出ているようだ。光は次々と打ち込まれ、その度にティラノサウルスの身体からの血の量が増していく。ティラノサウルスは一際大きな鳴き声を上げると、地響きを立てて地面に倒れる。

「やったあ！」

飛鳥は立ち上がって拍手する。

「アスカさん」

いつの間にか飛鳥の傍らにクウェンディ女王が立っている。

「ここまでモンスターが現れるとは、状況はかなり悪化していると思います。急で申し訳ございませんが、明日イスペリアへ向かってください」

飛鳥は立ち上がって、しっかりとうなずく。その顔は炎の照り返しを受けて赤く染まっている。飛鳥の戦いが、今始まる。

21話：女王との別れ

「では気をつけて行ってください」

クウエンディ女王はお城の正門前まで、わざわざ飛鳥を見送りに出ている。昨夜の暴れティラノの被害は大きく、死傷者がかなり出ている。夜が明けても、いまだに行方不明者の搜索は続いている。女王は昨夜一睡もせず倒壊した家屋の下敷きになった人々の救済と、ケガ人の治療などの陣頭指揮に当たっている。巨大なティラノサウルスの死体は蒼い髪魔法剣士レイズナーが指揮する部隊によって、すでに街の外の処理施設へ搬送し終わっている。いわゆる葬儀場だ。この世界では飛鳥のいた世界と同じように、遺体は火葬にする。

肉体と精神の境目が曖昧なこの世界では、例えば悪いが、使用済みの肉体に神聖な意味合いはまったくない。地方によつては家族の遺体でも、切り刻んで家畜のエサにする場所もあるようだ。

「ああ、期待しないで待っていてくれ」

飛鳥は真っ白な朝日に目を細めながら、女王と固く握手する。この国に来て三日しか経っていないが、飛鳥はこの女王とは昔からの知り合いのような気がする。価値観も考え方もまるで違うのに。

「スピニッチ、しっかりお務めを果たすですよ」

「うっ…… はいにゃ」

女王は元氣のないスピニッチの頭をなでる。

スピニッチは飛鳥をここに連れて来ただけで、自分の仕事は終わりだと思っていたのだ。しかし昨夜女王から、飛鳥に最後までついていくようにと言われショックを受けている。スピニッチの役割は

飛鳥の知識面でのサポートと、クウェンディ女王への連絡係である。スピニッチは飛鳥といっしょに行くのがイヤなわけではない。“ファンタジア”に行くのが恐いのだ。決して戦闘に向いているわけではないスピニッチが、モンスターがうごめくファンタジアで生き残れる確率は少ない。ある意味、飛鳥以上に過酷な命令を受けたと言っても過言ではない。

命令といってもクウェンディ女王はスピニッチにそれを強制したわけではない。最終的な決断はスピニッチに委ね、その決断を下したのはスピニッチ自身だ。「ミーはアスカといっしょに行くにゃ」と。

「なあスピニッチ、お前はときどきムカつくけど、根はいいヤツだ。アタシを無理矢理この世界に連れてきたけど。無理矢理連れてきたけど。無理矢理」

「何回も言わなくてもわかってるにゃ！」

「でもいろいろアタシを助けてくれた。それには一応感謝してる。ありがと」

飛鳥はスピニッチへこりと頭を下げる。

「だから恐いなら無理について来なくてもいいよ。国境まではこのイケメン魔法剣士が連れてってくれるって言うし」

飛鳥の隣には見上げるほどの長身のオーガスが、実直な表情で立っている。曲がりなりにも自分の命を賭けてこの世界を救おうとしている異世界の少女に、できる限りの助力をしたいと自ら申し出たのだ。

「ファンタジアに行ったらどこへ行けばいいのかわかってるかにゃ？」

「う……」

飛鳥の額に縦の線が何本も入る。

「魔法も技もまだ満足に使えにやいにや」

「うっ……」

さらに汗マークが付く。

「アスカにはミーがついていなくちゃいけないのにや」

「お守り付きの勇者かあ。ま、それもアタシらしいっちゃらしいか」
「そういうことにや」

スピニツチはウィンクする。目が細くてよくわからないが。

「危なくなったら逃げるんだよ。アタシにはあんたを守りながら戦うなんて器用なことできないんだから」

「わかってるにや。いざとなったら遠慮無く逃げさせていただくにや」

「へっ、あんたらしいや」

「あんたじゃなくってス・ピ・ニ・ツ・チー！」

「はいはい」

飛鳥とスピニツチのやり取りを、女王は相変わらずの春風のような暖かな微笑みで見つめている。気難しいスピニツチがここまで自分を出すのは、今まで召喚した異世界人の中でも飛鳥が初めてだ。モンクという職業にも驚いたが、この異世界の少女はやはり今までの異世界人とは何かが違う。かくいう女王自身も、今までとは違った感情を飛鳥に抱いている。

今にも壊れそうな弱い心を持ちながらも、強いベクトルを持った

アンバランスな精神。戦いにはまったく不慣れなくせに、一瞬の爆発するような強い精神の奔流。そして恥ずかしげもなく、まっすぐと自分をさらけ出す純粹さ。本当はもつと飛鳥と話していたかった。語り合いたかった。

「アスカさん、ファンタジアを解放したら、またここに戻って来てください。今度はいつしよにお食事をしましょう」

「おっ、いいねえ。このメシはうまいからなあ」

「メシじゃにやいにや。食事じゃ」

「何かスピニツチって教育ママみたいだな」

ひとしきり笑いが起きる。潮の引くように笑いが収まると、飛鳥は両拳を胸の前で打ち付ける。固い金属どうしがぶつかる澄んだ音が朝日に吸い込まれていく。

「じゃ、行くか。女王様、それじゃさよなら」

飛鳥は朝日を背にして歩き始める。オーガスの長身が右斜め後ろにつき、左斜め後ろにはスピニツチが羽を忙しく動かしながらついていく。

「アスカさん！」

クウエンディ女王は思わず叫んでいた。振り返った飛鳥はまぶしそうに目を細める。

「またね！」

何と女王は片目をつむって、親指を立てた拳を前へ突き出している。言葉遣いもまるで現実世界にいる女子高生のような。それはこ

の先に待つ飛鳥の辛く厳しい旅路への、女王なりのせめてもの手向けであった。

驚いた飛鳥の顔が、笑顔になる。そして女王と同じように親指を立てて拳を突き出す。

「うん！ またね！」

飛鳥の笑顔が朝日に照らされて白く輝く。それは現実世界では一度も見せたことのない、最高の笑顔だった。

22話：募る不安

フェンドルフィンの街から北に向かつて行くと、夕刻には国境近くの街『サウザスパルメキア』に到着する。ここはかつてファンタジアからフェンドルフィンへ向かう旅人たちで賑わう宿場町であったが、今は国境を守るフェンドルフィン部隊の前線基地と化している。

オーガスの操る馬の背に乗って一日揺られた飛鳥は、ふらつく足で地面に降り立つ。

「いやゝ馬って乗り物は女子には向いてないね。おまたが痛くってしょうがない」

「いきなり下品なこと言うにゃ！」

最近スピニッチは前足ではなく後ろ足でツッコミを入れる。これが意外に破壊力がある。目の玉が飛び出るほど突っ込まれた飛鳥は、涙目で後頭部をさすりながら夕暮れ時の通りを見る。

目につくのは銀の甲冑に身を包んだ兵士ばかりだが、時折私服姿の人々が通り過ぎる。もともとこの街に住んでいる一般民だろう。

「やはりおかしい」

オーガスは手綱を傍らの馬止めに縛りながらつぶやく。

「おかしいって？」

「おかしいと思わないか？ ティラノサウルスがフェンドルフィンの街に現れたのだぞ？ ここに駐留している私の部隊はフェンドルフィンの精鋭部隊だ。あれだけでかいモンスターを見逃すわけがない」

オーガスは荒々しく緑髪をかき上げ、ひもで一つに束ねる。眉間に刻まれたシワは深く、イラ立っているようにも見える。

「あ、そういえば確かに」

飛鳥は手を叩く。街は活況を呈している。兵士たちは忙しく行き来し、通りは食料や資材を積んだ馬車が行き交っている。慌ただしくもあるが、緊急事態が起こったようには見えない。

「ティラノサウルスの足跡も、この辺にはなかった。つまりあのモンスターは、この辺を通って行ったわけではないということだ」
「あ、だから地面を気にしてたんだね」

オーガスは馬を駆りながら、左右の草原を注意深く見回していた。飛鳥はだんだんと近づいてくるのこぎりのような峻険な山々に不安を覚えながらも、背に負ぶさるスピニツチに「そんなにお金落ちてるわけないのにね」と不謹慎極まりないことを言っていたものだった。

「私はこれから本部に顔を出してくる。明日も早くに出発する。買い物などがあれば今のうちに済ましておくのがいいだろう」

オーガスはそう言うと、あっという間に人混みの中に消えていく。

「なんか忙しい人だね」

「フェンドルフィンがいまだにモンスターに侵略されず、今も平和でいられるのは彼のお陰にや。そのプレッシャーはそうとうにやものじゃ」

「だよねえ」

飛鳥は今さらながらに、自分に課せられた使命の重さを考えざるを得なかった。

飛鳥とスピニッチはこの先は入手困難だということで、翻訳こんにやくをあるだけ購入した。今朝は女王に一枚もらったが、もうスピニッチも持っていない。フェンドルフインでは暴れティラノ騒ぎで買えず終いだったので、ここで手に入れておかないとこの先コミユニケーションの面で不安が残る。スピニッチにいちいち通訳してもらうのも面倒くさい。

「腰にこんにやく十枚ぶら下げた勇者ってどうなのよ」

飛鳥は紙袋に入った十枚の翻訳こんにやくを見てため息をつく。

「だったら旅人用の麻袋を買って、にゃかに入れておけばいいにゃ」
「麻袋？」

翻訳こんにやくを買ったアイテムショップはさほど大きくはないが、旅人が多く立ち寄る宿場町らしく、品揃えは旅人向きの物が多い。飛鳥は持ち運びしやすいミドルサイズの麻袋を購入する。翻訳こんにやくと合わせて合計一MN（マーメイナイト）、五WN（ウォームナイト）。もともと腰に付けていたDNの袋も麻袋に入れ、飛鳥とスピニッチはオーガスと別れた場所に戻る。そこはこの町では一番いい宿屋の前だ。

「宿屋で夕食も食べられるから、飛鳥は先に食べてるにゃ。ミーはチェックインしてから女王様に報告に行くにゃ」

スピニッチは宿屋に入ると、西部劇の映画に出てきそうな木でできたカウンターに向かう。飛鳥は一階にある食堂で食事を済ませ、

カウンターで教えられた二階の部屋に入る。スピニッチはチェックインを済ませて、そのままどこかに行ってしまったらしい。町一番の宿屋といっても、簡素なシングルベッド一つに粗末な机が一つあるだけの質素な部屋だ。

「なんだかなあ」

飛鳥はフェンドルフィンで感じなかった寂しさが募る。見知らぬ土地でテレビもケータイもなく、することといったら寝るだけ。面倒な課題もないしム力つく親もない。ある意味贅沢な状況なのだが、飛鳥はなんとなく落ち着かないような気持ちになる。その正体がなんなのか、今の飛鳥には判別できなかった。

翌朝早く、オーガスが飛鳥を迎えに来た。スピニッチはいつの間にか宿屋の前にオーガスと共にいた。昨夜はずっと帰って来なかったのだろうか。考え事をしているうちに寝てしまった飛鳥は、スピニッチが帰って来たのかどうか、まったく気づかなかった。

「今日はパルメキア山脈に沿って南に向かう。国境に近い危険な場所だから、徹夜で走り通す。明日の朝にはメッサーラの村に着くだろう。疲れるだろうががんばってくれ」

「寝たら落馬するから、それで目が覚めるにや」

「いやいや、死ぬから！」

サウザスパルメキアとは、パルメキア山脈の南という意味らしい。パルメキア山脈はファンタジアとフェンドルフィンを隔てる山脈で、その向こうはファンタジアだ。飛鳥がこの世界に来てすぐ、山賊に襲われる前の丘で見た遠くの山々がパルメキア山脈だ。禍々しい厚い黒雲と血を流したような赤い空がかかる峻険な山々の向こうは、モンスターたちがうごめく暗黒の地だ。かつてはこの世界の中心と

して栄華を誇ったファンタジア。しかし今は人々に恐れられる暗黒の国になってしまった。

オーガスの駆る馬は飛ぶように走り続ける。髪が風になびいて飛鳥の顔にかかる。髪をかき分け北を見遣ると、赤い空にそそり立つ峻険な山々が後方に流れていく。飛鳥はオーガスの背につかまりながら、その景色をずっと無言で眺めていた。

22話：募る不安（後書き）

<「ファンタジア」の共通通貨>

DN：ドラゴナイト（赤）（ドラゴンの血）＝約100万円

YN：ユニコナイト（白）（ユニコーンの涙）＝約10万円

MN：マーメイナイト（青）（マーメイドの鱗）＝約1万円

WN：ウォームナイト（黄）（サンドウォームの体液）＝約1
00円

GN：グリズナイト（黒）（グリズリーの体毛）＝約100円

CN：カップナイト（銅貨）＝約10円

23話：嗚咽（前書き）

残酷描写があります。ご注意ください。

23話：嗚咽

「間もなくメツサーラの村だ」

途切れては覚醒する意識の中で、飛鳥はオーガスの声を遠くに聞く。背後からはまるで飛鳥たちを追いかけするように、夜明けの白い光が差し始めている。南に向かっていたはずなのだが、飛鳥がうとうとしている間に西へ進路が変わったらしい。

フェンドルフィンのは国は、例えばバナナのような形をしている。真ん中より北がノーザス、フェンドルフィン、南がサウザス、フェンドルフィン。この国の人々は、自分の出身地を名前にする。だからスピニッチは始め、飛鳥にノーザス、フェンドルフィン、スピニッチと名乗ったのだ。フェンドルフィン人にとって、生まれた場所は一生ついて回る重要な場所なのだ。ちなみにオーガスはサウザスパルメキア出身なので、正式な名前はサウザスパルメキア、オーガスとなる。

東の空は白々と明けていくが、前方の村は逆に闇が濃くなる。飛鳥は国語の時間に習った小説の一節を思い出す。「闇は夜明け前が一番濃くなる」。

「ストップ！」

飛鳥が突然叫んでオーガスの身体を締め付ける。

「うおっ！」

「うにゃ！」

強烈な力で胴体を締められたオーガスは、手綱を引いて馬を急停止させる。前足を大きく上げて高いいなないた馬は、何度か跳ねな

がらも次第に落ち着く。スピニツチは振り落とされそうになったので空中に飛んで逃げる。

「何だというのだ！ 急に危ないではないか！」

「あれ、あれ見て」

飛鳥は村のある方の暗がりを指さす。真っ暗でよく見えないため、オーガスは目を細める。

「な、なんと……」

村は完全に破壊されていた。村までは約五百メートル。人が住んでいたにせよ、明け方のため灯りがないのはわかる。しかしよく見るとまともな建物は一棟もない。フェンドルフィンの街とは違って、木造ばかりの村は、木材の散乱する廃墟と化している。辛うじて残っている建物も、よくて壁だけが地面に建っている状態だ。

「あ、あそこには、我が騎兵二個小隊が駐留していたはずなのだが……」

「オ、オーガス、見るにや！」

スピニツチがすぐ脇の地面に着地する。そこには三本の大きなかぎ爪の跡。間違いなくティラノサウルスのものだろう。

「やはりここから侵入したのか」

オーガスは馬を降り、大きな足跡を指でなぞる。湿った草原の土についた禍々しい足跡が、村からフェンドルフィンの方向へ点々と延びている。

「しかし何の連絡もできずに、我が部隊が全滅するとは考えられん」
「とにかく行ってみようよ。誰か生き残ってるかもしれないし」
「そうだな」

飛鳥たちが村へ入ると、村は不気味に静まりかえっている。生臭い血の臭いと鼻の奥を刺激する強い腐臭が充満している。村の入り口に馬を止め、メインストリートを歩いて行く。そこには凄惨な光景が広がっていた。

「うわっ！」

飛鳥は思わず腕で顔を覆う。通り一面には、地面が見えないほど死体が散らばっている。冗談のようにぺしゃんこになった兵士。上半身と下半身が切断された男性。頭のあった部分にスイカを割ったように赤黒い肉片が広がって、仰向けになっている女性らしき遺体。ティラノサウルスがどれだけ派手に暴れたのか、この様子から見て想像に難くない。

「ひ、ひどい…… うつつ」

飛鳥は込み上げてくるものを我慢しきれず、道端に戻してしまう。

「アスカ、これがこの世界の現実なのにな」

スピニッチは優しく飛鳥の背中を撫でる。飛鳥は涙と鼻水を流しながら何度も吐く。飛鳥の苦しげな声は、次第に嗚咽に変わる。

「ど、どうしてこんな目に遭わなきゃいけないんだよ。みんななんにも悪いことなんかしてないんだろ？ みんな平和に暮らしてたんだろ？」

ふと横を見ると、白いワンピースを着た人形が泥にまみれて落ちている。飛鳥はそれを拾うと、胸に強く抱きしめる。

「うつ…… うわあああ……」

飛鳥の泣き声が無人の廃墟の上を風に流されていく。周囲を警戒していたオーガスが、一体の死体の傍にかがみ込む。

「おい、こつちに来てくれ！」

オーガスの緊張した声に飛鳥ははっとしてぐしゃぐしゃになった顔を上げる。飛んでいくスピニッチを追いかけて、飛鳥はオーガスの元へよろよろと歩いていく。

「なに？ 生存者？」

「いや、この死体を見てみる」

その死体は潰されてはいなかった。身体中白くぶよぶよに膨れ上がり、まるで溺れた死体のようだ。

「なにこれ？ 土左衛門？」

「土左衛門とは何だかわからんが、これはティラノサウルスにやられた死体じゃない。毒だ、それも猛毒だ」

「毒？」

ティラノサウルスは毒攻撃をしない。凶悪な牙で噛みついてばらばらにするか、その強力な爪と体重で、切り裂くか踏みつぶすのが普通だ。

「ティラノサウルス以外の敵がいるってこと？」

「うわあああん！」

飛鳥の声に重なるように、通りのすぐ先の民家から幼い女の子が駆け出して来る。飛鳥の声を聞いて助けが来たのだと思ったのだろうか。

「生存者だ！」

飛鳥とオーガスが走り出す。その瞬間黒く大きなものが少女の顔を横切る。

「わっ！」

出鼻をくじかれた形になった二人が慌てて立ち止まる。少女の頭はなくなっていた。

「う……」

ちぎられた首から血を噴き出しながら、首のない少女は数歩走って倒れる。小さな手足が小刻みに痙攣している。

「何かいるぞ！ 気をつけろ！」

オーガスが腰の長剣を抜く。横の廃墟から、うなり声を上げて現れたのは巨大な黒い狼だった。

24話：オーガウルフ

若竹を連続して割るような、澄んだ音が朝霧の漂う廃墟の村にこだまする。続いて粘着質な肉をはむ音が続く。黒い狼が少女の頭部を咀嚼している音だ。

「オーガウルフにゃ！」

「う、うええ」

飛鳥はまた戻しそうになるのを必死で堪える。右手で胃を強く押さえ、漂ってくる血臭と肉の臭いを防ぐために腕で鼻を覆う。オーガウルフと呼ばれたモンスターは、体長三メートルはゆうにある。盛り上がった肩の筋肉が躍動し、血で染まった口の端からは視神経に繋がった少女の眼球が振り子のように揺れている。オーガウルフは真っ赤に妖しく光る眼をオーガスと飛鳥へ向け、低くうなりながらのっそりと通りへ出てくる。

「ス、スピニツチ……」

「な、なんにゃ」

スピニツチは黒い羽を忙しく動かしながら、飛鳥の斜め後ろで身構えている。これは戦闘態勢ではなく、いつでも逃げられるようにだろう。

「お、思ったんだけどさ」

オーガウルフは飛鳥たちとの距離は詰めず、弧を描くようにゆっくりと横に移動している。血の塊のような赤い眼は、飛鳥たちを睨み続けている。

「ア、アタシ翻訳こんにやく食べてんのに、ティラノとかこいつとかなんで言葉わかんないの？」

「モンスターには“知性”や“理性”がにやいからにや」

「じゃ、話せばわかる…… てことはないよね」

「にやいにや」

「来るぞ！」

オーガスの警告と同時に、一瞬頭を低くしたオーガウルフが跳躍する。瞬きをする間に、十メートルはあつた距離を一瞬でゼロにする。

「きゃああ！」

飛鳥は横つ飛びに転げ、脇に転がっていた血まみれの死体の陰に隠れる。オーガスは半身を引いて避け、着地したオーガウルフ目がけて剣を振るう。半月型の緑色の刃が飛んで、オーガウルフに吸い込まれる。オーガスの飛ばした刃はオーガウルフの身体を煙のように四散させ、そのまま地面へ激突する。土煙と巻き込まれた死体の一部が空中へ舞い上がる。

「やった！」

「まだにや！」

飛鳥の歓喜もつかの間、スピニッチが鋭く叫ぶ。煙のように四散したオーガウルフの身体は、そのまま意志を持っているかのように広がって黒い雲のようにオーガスへ向かう。

「キラービーにや！」

それは黒く巨大な蜂の群れだった。オーガウルフが蜂になったというよりは、蜂が密集して一頭の狼を形作っていたと言っている。一匹が手のひらほどもある無数の巨大な蜂の群れは、重低音を響かせながらオーガスへと襲いかかる。

「くっ！」

オーガスの全身が緑色の光に包まれる。シールドの魔法だ。オーガスは腕で顔をカバーし、キラビーの群れをやり過ごす。殺意を持った黒い雲はそのまま転回して、逃げようと立ち上がった飛鳥へと狙いを定める。

「わあっ！ く、来る！」

「アスカ！ シールドの魔法にゃ！」

「シ、シールド？」

スピニッチは黒い球体の中にいる。それもシールドの魔法だろう。

「シ、シールドってどれだっけ？」

飛鳥は慌てて右の上腕を捻る。重低音が空気を震わせ、黒い固まりが飛鳥の眼前に迫る。飛鳥は右肩近くにある黒丸のタトゥーに触れる。飛鳥の体温が急激に上昇する。すると飛鳥の全身がほのかに白く光る。キラビーたちは腹部を前方に折り曲げ、小指ほどもある針を飛鳥へ突き刺してくる。キラビーは、眼球や皮膚の薄い二の腕や内股など針を刺しやすい場所を狙ってくる。まさに殺戮のための本能だ。

「ふひっ、助かった」

飛鳥の全身には巨大なキラビーが群がっている。しかしその針が飛鳥の身体に届くことはなく、キラビーたちは突き刺そうと執拗に飛び回る。

「無駄無駄」

飛鳥はキラビーの群れの中、人差し指を立てて左右に振る。

「アスカ！ アスカのシールドは低レベルだから、十秒くらいですぐに消えてしまうにや！」

「ええっ！ それ早く言つてよ！」

飛鳥はその場で慌てて両手を振り回す。数匹は当たって地面へ落ちるが、無数の蜂たちが飛鳥から離れることはない。飛鳥を包む白い光が薄れる。

「や、やばっ！」

その瞬間、猛烈な炎がキラビーの群れを包む。火の玉となったキラビーたちが、地面へ次々と落ちていく。

見ると、オーガスが剣を持っていない左手を飛鳥の方へ突き出している。オーガスは続けざま手のひらから炎を出し、飛び回るキラビーたちを焼き尽くしていく。すでにシールドの消え去った飛鳥の左右と頭上へ何度か炎の舌が伸びると、辺りは静寂に包まれる。

「あ、ありがと。やっぱすごいね」

飛鳥は辺りを警戒しながら、オーガスの元へと近づいていく。

「あの死体はキラビーにやられたものだったのだな。しかしオー

ガウルフがここにいるとなると、近くに間違いなくモンスターの実働部隊がいるな」

「オーガウルフはモンスターでは斥候の役割を果たしてるにや」

スピニツチもシールドを解いて飛鳥の横に来る。

「セツコウ？」

「本隊に先駆けて敵を警戒しつつ、偵察する役割にや」

「なるほどね」

「危ない！」

オーガスは飛鳥を乱暴に抱き寄せる。

「きゃっ！」

「うつ……」

飛鳥を抱いたオーガスのうなじに、キラビーが針を突き刺している。飛鳥はまったく気配を感じなかった。

「く…… この……」

オーガスは首の後ろに手を回し、キラビーを素手で掴んで握りつぶす。緑色の臭い体液をまき散らせ、ばらばらになったキラビーの死体がオーガスの指の間から落ちる。オーガスはそのまま飛鳥にもたれるように倒れ込む。

「オ、オーガスさん！」

飛鳥は倒れ込むオーガスを支えながら、地面に膝をつく。オーガスの顔は真っ青だ。

「一匹残ってたにや！　まずいにや！　キラビーの毒は、普通の毒消しの魔法じゃ効果にやいにや！」

オーガスは完全に意識を失っている。額にはびっしょりと脂汗を流している。しかし抱きかかえた飛鳥の腕に伝わる体温は、異常なくらいに低い。

「オーガスは最強の魔法剣士にや。普通の戦士よりも毒には強いにや。でもこのままじゃ間違いにやく死んでしまうにや」
「ど、どうすればいいの？」

スピニツチは一瞬考え込む。しかしすぐに飛鳥の肩に肉球を置く。

「ミーがサウザスパルメキアに行つて、オーガスの部隊を呼んでくるにや。それまで飛鳥はオーガスを頼むにや！」

「ええっ、ちよっと！」

言うが早いか、スピニツチは煙のように消え去ってしまう。

「ちよっとお……」

飛鳥は手を伸ばしたまま力なく座り込む。サウザスパルメキアからここまで、馬で飛ばしに飛ばして丸一昼夜。それまで待てというのだろうか。

辺りは不気味に静まりかえっている。時折キラビーの焼ける音が、そこらの地面で小さく聞こえる。

「オーガスさん、死なないでよお……」

飛鳥はオーガスの頭を抱きしめる。すると前方の暗がりから低い
うなり声が聞こえる。

「ま、まさか……」

通りの向こうの暗がりには、無数の赤い眼が光っている。オーガウ
ルフだ。

24話：オーガウルフ（後書き）

「オーガウルフ」は僕の完全なオリジナルモンスターです。

25話：死んでたまるか！

廃墟と化した無言の村メッサーラは、朝の光で徐々にその姿を現していく。それにともなつてオーガウルフたちの姿もはつきりと見え始める。無数に光つていると思われる赤い眼は全部で十対二十個十体のオーガウルフが牙を剥き、涎を垂らしながらのっそりと現れる。

「まずい」

猛毒で動けないオーガスを狙われたらひとたまりもない。飛鳥はオーガウルフたちを刺激しないようにゆっくりと立ち上がり、右の廃墟の方へ歩いて行く。オーガウルフたちはそれぞれにうなり声を上げ、今にも飛びかかって来そうなほど張り詰めた空気をまとっている。

飛鳥は木片に足を取られながらも、廃墟を抜け、一本隣の通りへと移動する。

「さあて、どうするか」

飛鳥はテレビのボクシング中継で見たファイティングポーズを、見よう見まねでやってみる。幸いオーガウルフたちは、すべて飛鳥の方へついてきたようだ。瀕死のオーガスは生命反応が弱いので、気づかれなかったのかもしれない。

オーガウルフたちは扇状に展開し、飛鳥を半包囲する。後ろへ走って逃げれば、逃げられるかもしれない。しかし自分をかばって死にかけているオーガスを置いて逃げることはできない。戦うしかない。

不思議と飛鳥に恐怖心はなかった。ここで死ぬのも運命と、開き

直っているからかもしれない。いくら自分に勇者としてのパワーがあったとしても、目の前にいる十頭のオーガウルフがすべてキラークビーに分散したら助かることは不可能だろう。あのぶよぶよに白く膨らんだ死体のようになって、自分も死ぬのだろう。

「どうせならもつときれいに死にたかったよ」

飛鳥のつぶやきを合図としたように、目の前の一頭が飛びかかってくる。

「くっ！」

一瞬身を捻って飛鳥はオーガウルフの牙を避ける。着地したオーガウルフは、そのまま背後で牽制するように低い姿勢で唸っている。赤い双眼は獲物を前に、狂気に染まって燃え上がるように輝いている。近くで見ると、確かにオーガウルフの身体は黒く巨大な蜂の固まりだ。時折半透明の羽が身体のおちこちで羽ばたいている。まだ分散するつもりはないようだ。飛鳥は背後に圧迫感を感じる。

「きゃっ！」

とっさにしゃがみ込むと、もう一頭のオーガウルフが頭上を猛烈な勢いで通過する。低い蜂の羽ばたきが頭のすぐ上をかすめ、さつき飛びかかってきたオーガウルフの隣に並ぶ。どうやらこの二頭は、飛鳥の退路を断つ目的だったらしい。

「どうやら本当にゲームオーバーみたいだね……」

飛鳥は前後のオーガウルフににらみを利かせながらゆっくりと立ち上がり、グローブの装着具合を確認する。握り拳を何度か握り込

むと、革の擦れる小気味よい音がする。

「でも素直にやられやしないからな！」

前方の八頭のうちの二頭が咆吼し、飛鳥の真正面から飛びかかってくる。飛鳥は無意識に右フックを放つ。左っ面を殴られたオーガウルフは悲鳴を上げて吹き飛び、数メートル真横の壁に激突する。その瞬間オーガウルフは弾け飛び、キラビーの群れとなる。合わせたように残りの九頭も一斉に分散する。雲霞のごとく黒い雲となった無数のキラビーは、凶悪な殺意の塊となって周辺一帯の空を埋め尽くす。辺りは重低音の羽音で充満し、清廉な朝の光は遮られる。膨れた黒い腹部から長い針を出し、飛鳥の周囲全方位から襲いかかってくる。

飛鳥は死を覚悟して目をつぶる。しかし飛鳥の脳裏に、自分をかばってキラビーに刺されたオーガスの苦しそうな顔がフラッシュバックする。飛鳥の目はかっと開かれ、強い意志の光に満たされる。

「アタシは死ねない！ 彼が助かるまで、アタシは絶対に死ねない！」

飛鳥は自らを抱きしめるようにして、両腕すべてのタトウに同時に触れる。飛鳥の体内に流れる血液が、一瞬のうちに沸騰したかのように燃え上がる。

その瞬間、飛鳥の目に不思議な光景が映る。無数のキラビーは、まるでスローモーションのように羽をゆっくりと上下させている。針を突き出して戦闘態勢を取ってはいるが、まるでそのまま空中に停止しているように見える。

「うわああああああ！」

飛鳥は周囲に浮いているキラビーを片っ端からたたき落としていく。他の者が見たらそれは信じられない光景だった。目にも止まらないスピードで、飛鳥の周囲の蜂たちが次々と金色の粉になって空気中に消えていくのだ。

飛鳥の手足は常人には捕らえきれないスピードで動く。ジャブ、ストレート、フック、アッパー、回し蹴り。さらにはフットワークも使い、背後から襲い来るキラビーさえも難なく避ける。残像を残して移動する飛鳥を捉えきれず、キラビーたちは次々と金色の粒子となっていく。

「うりゃあああああああああああああ！」

何百匹倒しただろうか。無数のキラビーたちが消え去った後、飛鳥は両膝をついて地面へ座り込む。

「はあっ…… はあっ…… はあっ……」

急激な疲労感が飛鳥の全身を重くする。一気にパワーを使ったため、一種の虚脱状態に陥っているのだ。

「や、やった…… は、はは……」

朝日の降り注ぐ廃墟の村には、もう一匹のキラビーもいない。汗まみれの顔で飛鳥は笑顔を作る。しかしその笑顔もすぐに凍り付く。村全体からオーガウルフの咆吼が上がる。すると左右の廃墟の壁を飛び越えて、オーガウルフが襲いかかってくる。空中でキラビーに拡散し、またしても重低音の黒雲が広がる。見ると通りの前後左右からも、数十のオーガウルフが牙を剥き、赤い眼を光らせて飛び出してくる。戦いはこれからであった。

「うりゃあああっ！」

飛鳥は再度両腕のタトウを音高く叩き、ふらつきながら立ち上がる。ファイティングポーズを取った飛鳥の全身が、シールドの魔法で真っ白に燃え上がる。

「死んでたまるかああああ！」

飛鳥の絶叫が、巨大な黒い狼の咆吼と蜂の羽音に埋め尽くされた村の中心で響いた。

26話：おかえり

「こつちにゃ！」

スピニツチが四名の銀色の甲冑を身に着けた兵士と一名の白衣を着た男性を引き連れて、村の入り口から入って行く。空にはすでに青白い月が昇っている。

サウザスパルメキアからは普通に馬で飛ばしても一昼夜はかかる距離を、この五名は半分の時間で到達した。隊の中でも選りすぐりの乗り手と強力な駿馬五頭によって、初めて可能な芸当であった。そうとう無理をさせた証拠に、五頭のうち三頭は到着するやいなや泡を吹いて倒れてしまった。間断なく鞭を入れて走らせた結果だ。白衣を着た一名は医術に心得のあるいわゆる軍医だ。死んでなければ必ず助けるとまで豪語する、フェンドルフィナーの名軍医である。一番戦闘機会のあるオーガス隊に配属されていたのは当然だ。

本隊が到着するまであと丸一日はかかるだろう。サウザスパルメキアを空にするわけもいかず、しかしモンスターの実働部隊が潜んでいるかもしれないことも考え、一個大隊約六十人がこちらに向かつて来ている。

「アスカ！」

スピニツチの声が廃墟の村に響く。不気味に静まりかえった暗闇が、青白い月明かりの底に沈んでいる。スピニツチは通りを進んで行き、今朝飛鳥と別れたところまで来る。すると少し先の地面に、金色の鎧を発見する。オーガスだ。

「た、隊長！」

兵士たちがオーガスに取りつく。オーガスは仰向けで青白い顔をしている。体温は異様に冷たい。軍医は頸動脈に指を当て、鼻孔に頬を近づける。

「大丈夫です。かなり弱ってはいますが、隊長は生きています」

「おおっ！」

険しかった四人の兵士たちの表情が明るくなる。軍医はすぐに持ってきた医療セットを開け、毒消しと体力回復のための点滴の準備に入る。

「もう少し遅かったら危なかった……ん？」

手際よく準備をする軍医の手元が陰る。今宵は曇り空。月を雲が横切って、辺りは真っ暗になってしまふ。兵士の一人が植物油のカンテラに火を入れる。オレンジ色の淡い光が周囲を照らす。村は虫やふくろの鳴き声さえ聞こえぬ静寂に包まれている。

「ミーはアス力を捜しに行くにや」

オーガスの治療が始まるのを確認したスピニツチは、通りを真っ直ぐと飛んでいく。緑色の瞳孔は細くなり、夜行性である猫の特徴が現れる。スピニツチは雲隠れした弱い月明かりの下でも、昼間と変わらない視力を確保できる。

スピニツチは飛鳥の名を呼びながら通りを進む。後から別のカンテラを点した兵士三名がついてくる。

「勇者殿はもうやられてしまったのでは……」

兵士はそこら中に転がっている死体をカンテラで照らしている。

スピニッチは飛鳥の性格を把握していた。飛鳥ならオーガスを守るために、襲ってきたモンスターを遠くにおびき寄せたのだろう。オーガスのそばにいないということは、きっとそういうことだ。

「もしかしたら逃げてしまったのかも……」

「アス力は逃げたりしにやいにや！」

スピニッチの鋭い声に、発言した兵士はびくっとして青ざめる。女王の使い魔とは、女王の分身と考えてもいい。スピニッチの言葉イコールクウェンディ女王の言葉だ。

「す、すみません」

恐縮する兵士に一瞥をくれ、スピニッチは奥へと進んでいく。さほど大きくはないメッサラの村は、すぐに反対側に辿り着いてしまふ。この村には通りが三本ある。オーガスを敵から遠ざけるためには、同じ通りにはいないだろうということに、スピニッチは今さらながらに気づく。

後ろから走って追ってくる兵士たちを待つことなく、スピニッチは暗闇の中廃墟を飛び越える。一本隣の通りに出ると、スピニッチの夜目は遠くに廃墟とは違う物体を視認する。彫像のように立つそれは、無機質な廃墟ではなく肉体を持つ人間のようだ。

「アス力！」

スピニッチはそこ目がけて一直線に飛んでいく。折しも雲が晴れ、一本の光の柱のように青白い月光がそこを射す。そこにはファイティングポーズを取ったままの、飛鳥が立っていた。

「アス……」

喜んで飛びつこうとしたスピニッチは、周囲の異様な様子に驚いて動きを止める。射し始めた月明かりを反射して、地面がきらきらと輝き始める。それは地面を埋め尽くす膨大な量のウォームナイトの輝きだった。

「こ、これは……」

追いついた兵士たちも信じられない光景に呆然と立ち尽くす。飛鳥を中心として、黄色い粒子の入ったウォームナイトで地面が覆われているのだ。それは数センチ近く積もり、通りの横たわる死体さえも覆い尽くしている。いったい合計するといくらになるのだろうか。言うまでもなくモンクである飛鳥が、これだけのモンスターを倒したということの証明であろう。

「アスカ！」

スピニッチはきらめく地面の上を飛んでいき、飛鳥の目の前で止まる。飛鳥の肩は小刻みに揺れ、呼吸していることがわかる。全身水を被ったように汗をかき、ライトブラウンの髪が額に張り付いている。

「はっ…… はっ…… はっ…… ス、スピニッチ…… お、おかえり……」

飛鳥は微笑む。そのまま身体がぐらりと傾く。

「アスカ！」

とっさにスピニッチは飛鳥を支えるが、スピニッチの小さな身体

では支えきれない。ウォームナイトの海の中へ、飛鳥は音高く倒れる。

「ゆ、勇者様！」

「う、うにゃあ！」

ウォームナイトをかき分けながら兵士たちが飛鳥の元へたどり着いた時、スピニツチは飛鳥の身体の下でウォームナイトに埋もれてもがいていた。

26話：おかえり（後書き）

<「ファンタジア」における部隊編成>

小隊：10人 中隊：30人 大隊：60人 連隊：120人

旅団：1,200人 師団：12,000人 軍団：120,000人

27話：二人の英雄

「それにしても、なんですぐ戻って来なかったんだよ。スピニッチは瞬間移動できんだろ？」

飛鳥は口の中いっぱいパンやらシチューやらを詰め込んでいる。サウザスパルメキアから一個大隊がメツサーラ村に到着して二日、村はモンスターの侵攻に備えて急速に要塞化が進められている。幸い今のところモンスターによる襲撃はない。

腐臭が漂っていた死の村は、兵士たちの献身的な働きによって今はもう死体はない。すべて村の外に埋葬された。火葬する施設がないということもあるが、実際は死体処理にかけられる時間がなかったというのが正直なところだ。

六十人という人数は、拠点防御には最低限の人数だ。もし連隊規模以上のモンスター集団が攻めてきたら、戦略的撤退を余儀なくさせられるだろう。

兵士たちは最低限度の休息で働き続けた。瓦礫を片付け、結果的には見つからなかったが生存者を捜し、村の周りに堀と防護柵を作り、中央にあつた役所を修繕してあつという間に本部を設置してしまった。オーガスの平素の薫陶が活かされている証拠であろう。

兵士たちはテントや廃墟を利用して寝泊まりしているが、飛鳥とオーガスには無事だった病院のベッドを本部へ運んで使ってもらっていた。

飛鳥は丸一日爆睡し、目が覚めたと思ったら盛大に腹の虫を鳴らすものだから、スピニッチがオーガスの代わりに隊長をしている兵士に頼んで食事を用意してもらったのだ。

「正確には“^{ムーブメント}位相転換魔法”って言うにゃ」

「なんだよ。じゃ、やっぱりスピニッチだってあたしのこと元の世

界に戻せんじゃん」

「だからそれは無理にや。位相転換と転移は似てるけど全然違うにや」

「どう違うの？」

「横移動と縦移動にや」

つまりスピニッチの言うには、この世界の中でなら移動できるが異世界への移動はできないということらしい。

「ふーん、で、なんですぐ戻って来なかったん？」

スピニッチはため息をつく。長いヒゲがそよいで揺れる。

「飛鳥よく考えるにや。ミーがもし先に戻って来たとするにや」

「うん」

「それでアスカといっしょにいたら？」

「うーん」

飛鳥はもう五個目となるパンにかぶりつく。

「邪魔」

「そうにや。アスカはきつとミーのことが気にやって、あそこまで戦えにやかったにや」

スピニッチはすでに飛鳥から、オーガウルフ、キラビーと戦闘の話は聞いている。なぜキラビーの動きが遅く見えたのかはわからないが、スピニッチによれば追い詰められた飛鳥の潜在能力の一部が発現したんだろうということだった。ありきたりな説明ではあったが。

「じゃあ、オーガスのところにいたらどうにや？」

「オーガスがモンスターに見つかって殺されてた」

「じゃあミーが一匹でいたら？」

「あ、自分のこと“匹”って言っちゃうんだ」

「うるさいにや！」

「きつと殺されてたろうね。狼とか蜂とかに」

スピニツチは我が意を得たりとばかりに胸を張る。

「つまりミーが戻ってきてにもやんの役にも立たない。かえって邪魔にやるにや。だから軍医たちと戻ってきたにや」

「なんだかなあ……」

今考えると、よくこうやって生きているものだと思ふ。あの時は無我夢中だったが、オーガウルフの咆吼とキラビーの羽音は今でも耳にありありと残っている。

「あ、そういえば」

飛鳥は何かに気づいたように手を叩く。

「戦ってた時頭の上でチャイムみたいなファンファーレががんがん鳴ってたんだけど、アタシレベルアップしたのかな？」

「どれ、調べてみるにや」

スピニツチは肉球を飛鳥の額に当てる。

「ああ、冷たくつてきもちい」

「アス力、すごいにや！」

スピニッチはすぐに肉球を離す。飛鳥は名残惜しそうに肉球を見つめている。

「飛鳥のレベルは今十二まで上がってるにや」

「十二？」

飛鳥はきよんとしている。

「アスカにはぴんとこにやいかもしれにやいけど、この世界においてレベルアップはすんごくたいへんにや。普通は一レベル一年って言われてるにや。でもアスカはたった一日で十年以上のレベルアップをしたことになるにや。これは異常な早さにや」

「へえ〜アタシすごいじゃん」

飛鳥は無我夢中で覚えていないが、戦いの後半はタトウーに触れなくても技や魔法を使っていたし、身に着けていない技も使っていた。それだけのレベルアップを果たす強さは十分にあったのである。

「あ、それにさ、あのたくさんのお金っていったいいくらあったの？」

地面を埋め尽くしていたウォームナイトは、兵士たちによって回収されている。

「ミーも細かくは聞いてにやいけど、三十万WNはあったらしいにや」

「三十万？　ってことは円に直すと……　さ、三億円！」

飛鳥は口に含んでいた水を吐き出す。全身びしょ濡れになったスピニッチが飛鳥をにらむ。

「そつかあ、三億円かあ。宝くじ一等当たったようなもんだよねえ」
「例えがよくにやいにや。あれはアスカが命懸けで稼いだお金にや。くじみたいになや運じゃにやいにや」

「運ねえ……」

飛鳥は口を拭って立ち上がる。

「運じゃなくってオーガスさんのお陰だと思うよ。あの時かばってもらわなかったら、アタシ間違いない蜂に刺されて死んでたし。そういうえばオーガスさんは？ 助けてもらったお礼、まだちゃんと言ってなかった」

「オーガスももうだいぶよくにやったにや。まだ動けにやいけど、ベッドから部隊に指示を出してるにや」

「じゃあ、行つてくつか！」

飛鳥とスピニツチはオーガスの部屋へ行く。オーガスは白いゆつたりとした服を着ており、ベッドに半身を起こして副官と何やら打ち合わせをしている。飛鳥とスピニツチが部屋に現れると笑顔を見せる。

「アスカ、話は聞いたよ。きみは命の恩人だ、ありがとう」

お礼を言うつつもりが逆に言われてしまう。「ありがとう」などというセリフを言われ慣れていない飛鳥は大いに戸惑う。

「ア、アタシの方こそ蜂からかばってくれてあ、ありがと。そつちこそ命の恩人だよ」

「ははっ、じゃあおあいこってわけか」

「そうだね」

二人の英雄は笑い合う。「メッサーラの悪夢」と称されるこの悲劇の中で、この二人については唯一救われるエピソードとしてフェンドルフィンでは語り継がれることになるのである。

28話：この世界のために

オーガスは翌日には通常業務に戻る状態まで回復した。やはりあの軍医の腕は確かだ。極度に疲労していた飛鳥に適切な処置を施したのも彼だ。

メッサーラの要塞化は完全に終了し、後はモンスターの出方次第というところまで迎撃態勢は整った。当初はすぐにでも実働部隊が来るだろうことが予想された。しかしさらに一日が経過してもオーガウルフ一頭でさえ姿を現さない。まさか飛鳥の奮闘に恐れをなしたとも思えない。オーガスはここで選択を迫られる。

ファンタジア領へ偵察部隊を出し実働部隊の所在を確かめるか、もう少し待って様子を見るか。オーガスは悩んだ末、なんと飛鳥に相談を持ちかけた。どう見ても戦略には疎い飛鳥を相談相手に選んだのは、ひとえに「疎い」からだ。

こういう場合、専門家よりも素人の考えの方が的を得ている場合が多い。知識と経験とは、時には真実を見誤らせる。曇りのない眼で見た方が、見通せる真実もあるものだ。

「どう思う？」

「うーん……」

飛鳥の前にはこの付近とパルメキア山脈を隔てた、ファンタジア南部の地図が広げられている。

ファンタジアからフェンドルフィンへのルートは、主にファンタジア南部の商業都市ドルメンからサウザスパルメキアへの交易ルートが挙げられる。ここメッサーラから北上し、ファンタジア領に入っても、村や町はない。けもの道に毛が生えた程度の山道があるだけだ。

「わかんない」

オーガスの目に明らかに落胆の色が差す。オーガスは自分には想像もつかない戦略眼を飛鳥に期待していただけに、肩すかしを食らった気分だ。

「オーガス、アスカに戦略的判断を期待したって無駄にや。向こうの世界ではまだ社会にも出ていにやい学生だからにや」

「しかも市内最低のバカ高校生だし」

「自分で言うにや！」

「あいたっ！」

スピニツチの回し蹴りが決まる。飛鳥は時々、スピニツチにも自分と同じタトゥーが彫つてあるのではないかと本気で思う。

「わかんないからわかんないって言ってんじゃん。だったらさっさと見に行ってみたらいいんだよ。うだうだ悩んでないでさ！」

後頭部をさすりながら涙目になる飛鳥。しかしその言葉を聞いて、オーガスの渋面は憑きものが落ちたように晴れやかになる。

「いや、アスカの言う通りだ。私は部隊長として戦略や作戦にこだわってしまったようだ。武人なら武人として戦いに身を置くのが本来の姿だろう」

オーガスは傍らの兜を抱える。

「私が直接ファンタジア領まで偵察に出よう。ここにいても埒が明かん。アスカはイスペリアへ向かうのだろう？ だったらいっしょに行こうではないか」

「お、いつしよに行ってくれんの？ やりっ！」

飛鳥は小気味良く指を鳴らす。何かあった時を考えればやはり複数で行動した方がいい。その仲間が強くて頼りになるオーガスなら願ってもないことだ。

「でもオーガスが行った後ここやサウザスパルメキアにやにかあったら、みんなどうすればいいか迷うにや」

スピニツチは本部の広い作戦室を見渡す。室内では銀の鎧を着た兵士たちが忙しそうに立ち働いている。それぞれは優秀な兵士たちだが、大局的な見地での作戦の指示や危急の際の判断力にはいささか不安が残る。オーガスの治療中隊長代行をしていた兵士も、部隊の戦闘における作戦行動を判断するまでの能力には疑問が残る。

「だったらフエンドルフイン城から、レイズナーをサウザスパルメキアに呼び寄せるしかないな」

「ああ！ あのもう一人の魔法剣士！」

飛鳥は蒼い長髪に中肉中背の魔法剣士を思い出す。オーガスが逞しい戦士なら、レイズナーは頭脳明晰な優男といった印象だ。

「確かに彼にやら問題はにやいにや。お城の守りは手薄ににやるけど……」

「女王様ならそれは覚悟の上であろう。あの方は真にお強い……」

「あれ？ オーガスさん顔赤いよ？」

「え、あ？ な、何を言っている！」

オーガスの慌てぶりから、飛鳥はオーガスがクウェンディ女王に忠誠心以外の感情を抱いていることを読み取る。

「まあねえ、クウエンディ女王はキレーな人だからねえ」

「人は顔形で判断されるものではない。心が何よりも大切なのだ」

「この世界では特ににや。オーガスがクウエンディ女王に惹かれるのは当然だにや」

「ス、スピニツチどのまで！ もう勘弁してくれ」

オーガスは赤くなったり青くなったり忙しい。飛鳥はこの異世界の実直な魔法剣士に親近感を抱く。どんな世界であろうと、そこに生きる人々の心に変わりはない。人を好きになったり、死を悲しんだり、暴力を憎んだり。言葉こそ翻訳こんにやくを使わないとわからないが、飛鳥はこの世界とここに生きる人々に好意を感じるようになってきた。

「じゃ、さっそく出発しよう！」

飛鳥は笑顔でオーガスの背中を叩く。あまりの強さにむせるオーガスを見ながら、飛鳥は考え始めていた。この人たちの生きるこの世界を救いたい、自分にできることなら命を懸けてでもやってみたいと。

飛鳥は十七年の人生の中で初めて、誰かのために役に立ちたいと思い始めていた。そしてそれは、決して嫌な感覚ではなかった。

29話：山越え

メッサーラから五キロメートルほど北に草原を進むと、パルメキア山脈に到達する。オーガスと飛鳥は馬を降り、これより徒歩での旅路になる。オーガスの馬をメッサーラまで連れて帰る兵士を見送ると、オーガスは険しい山道に向き直る。これより先は草木も生えぬ荒れた山道だ。

「うわあ、いかにもなところだね」

頂上付近は雲に隠れて見えないが、鋭い角度で切れ込んだ稜線が厚い雲の中に切れ込んでいる。飛鳥は見上げながら、ゆつくりと雲が山肌をなでるように横切っていく様子を眺める。

「ここから山を越えるまでゆつくり休む場所はなく、途中で野宿しなければならん。覚悟はいいか？」

「もちろん。気合い入れていきましょう」

飛鳥は太もを強く叩く。この世界に来てからというもの、飛鳥の体力は目に見えて上がっている。パワーもさることながら、疲れにくくなっているのだ。しかも先日のおーガウルフ、キラビーとの戦いで大幅なレベルアップも果たし、それがさらに顕著になっている。やせ我慢や強がりではなく、純粋に飛鳥は山越えに対して不安はない。

「危険な場所があったら、私がアス力を抱えて飛ぼう」

オーガスは魔法で空が飛べる。本来ならこういった偵察任務も軽くひとつ飛びで済んでしまうのだが、イスペリアへ向かうアスカの

護衛も兼ねて、いつしよに登山してくれるということだった。

山道は時折霧が視界を悪くするものの、特に敵襲もなく進む。赤土についた足跡はすべてオーガウルフのもののだけで、それ以外の足跡は見当たらない。オーガスはオーガウルフの足跡を辿るように進んでいく。

「ねえ、実働部隊ってどんなモンスターがいるの？」

オーガスがちらつとスピニツチを見る。言っているのかどうか確認するような視線だ。しかしスピニツチの細い目は何も語らない。それを肯定と受け取ったのか、オーガスは前を向いて背後の飛鳥へ話し始める。

「私が把握しているものでは、大雑把に分けて三種類いる。陸と空のモンスターとそれを指揮する頭のいいモンスターだ」

「竜とか？」

オーガスは立ち止まり、驚いた表情で飛鳥を見つめる。

「竜とはドラゴンの別称。飛鳥は異世界人なのになぜドラゴンを知っている？」

「ええっ？　だって有名じゃん、ゲームとかで」

「オーガス、アスカの世界ではモンスターは想像上の生き物にや。知ってはいてもそれはあくまでもおとぎ話レベルにや」

「そうか……　ドラゴン是最強のモンスターだ。フェンドルフィンでもおとぎ話として伝えられてきたが、それは二年前現実のものとなった」

ファンタジア国から危急の知らせを受けて出陣したオーガスは、一度だけモンスター軍団を指揮するドラゴンを遠目に見た。それは

まさに言い伝え通りの姿で、オーガスほどの戦士でも恐怖に足が震えて動けなくなったのだという。

「ドラゴンを筆頭に、動物タイプ、ヒューマノイドタイプそれ以外の異形のモンスター…… 基本的に知性や理性のあるモンスターは人間型をしていることが多い」

「アタシたちと同じ姿形をしたヤツもいるの？」

「魔法で変化するモンスターもいるらしいが、模倣するというより乗り移ると表現した方がいいヤツもいるようだ」

モンスターにも主従関係があるらしく、基本的には知性のあるモンスターは、知性のないモンスターを使役する。頭のいいモンスターに指揮されたモンスター軍団は、戦術的な戦闘を仕掛けてくることもあるらしい。

「交渉が通じないという点では、人間よりも厄介だな」

途中崩れやすい崖や深い谷底などもあり、そういう場所はオーガスが飛鳥を抱えて飛んでくれた。途中昼食を挟んで、その日の夕方には頂上付近に到達する。ここからはファンタジア領だ。

遮蔽物のない頂上付近は岩がごろごろする何もない場所だ。下方は霧で煙って何も見えない。飛鳥たちは風よけになる大きな岩を見つけ、そこで野宿した。

翌日も朝から濃い霧が立ち込めていた。霧ではなく雲だろうか。手に取れるような白い塊が、赤土を撫でるように横切っていく。飛鳥が毎朝の習慣となった翻訳こんにやくを囓っている間、オーガスはたき火の跡を始末している。

「しかし野ぐそするのに抵抗を感じなくなってきた自分が怖いね」
「野ぐ…… な、何を言っているのだ」

オーガスは顔を赤らめて、たき火の跡に土を被せている。スピニツチはもう、この発言に対してつつこむ気はないようだ。

「アス力、ちゃんと手は洗ったかにや？」

「あつたり前じゃん！ さすがにそこまで野生化してないって！」

「アス力、きみはもつと自分の可憐さを自覚した方がいい。しゃべらなければいい女なのだから」

オーガスはまじめな顔で忠告する。今度は飛鳥が顔を赤らめる番だった。

「か、可憐とかいい女とかやめてよ！ 恥ずかしい！ そんなの今まで言われたことないんだから！ あゝ恥ずかしい」

飛鳥は火照った頬に手を当てて冷やしている。スピニツチの頭の上で電球が点く。アス力を攻撃する新しい戦法を思いついたらしい。

「アス力はいいいんにやにや。美少女にや」

「わあ、わあ！ やめろお！」

飛鳥は真つ赤な顔で両耳を手でふさぐ。スピニツチは“ホメ殺し”の技を手に入れた。

下山は半日で済んだ。相変わらず霧は濃いが、傾斜はかなり緩やかになっている。

「間もなく分かれ道に出るはずだ。右に行けばドルメン。左に行けばイスペリアへ通じる道だ」

石がごろごろとして殺風景な下り坂を歩き続けていくと、下方の霧に黒い木々が見え始める。先の尖った針葉樹林だ。

「おお、何か久しぶりに植物を見たなあ」

飛鳥は腰と額に手を当てて、道から斜面に身を乗り出して眺めている。すると背後の斜面の上の方から、飛鳥の足下に小さな石が転がってきてかかとに当たる。

「ん？」

飛鳥は振り返って斜面を見上げる。すると濃い霧の中でたくさんの黄色い光が、不規則に忙しく動いているのに気づく。

「ね、ねえ、あれなに？」

前に行くオーガスに慌てて声をかける。オーガスとスピニッチは飛鳥の指さす方を見上げる。その瞬間オーガスは剣を抜く。

「モンスターだ！」

オーガスの叫び声が、たくさんの奇妙な叫び声にかき消される。その声の主たちは、斜面の上の方から一斉に襲いかかってきた。

30話：モツホブ戦

それはゴリラとチンパンジーを足して二をかけたようなモンスターだった。体長は三メートルほど。黒い毛むくじやらの身体に長い手足。鋭く尖った黄色い歯をむき出して、飛鳥たちを威嚇している。黄色く濁った光を放つ双眸は、濃い霧を通してでもよく見て取れる。

「モツホブにや！」

スピニッチは黒いシールドに身を包む。斜面の上からは頭大の岩が次々と落下してくる。

「うわっ、あつぶね！ うひゃっ！」

その身に霧をまとわりつかせ、岩は雨あられのように降り注ぐ。土煙を上げて、飛鳥の周囲に岩が次々と落ちる。モンスターたちが投げているのだろう。

「このっ！」

飛鳥は斜面を駆け上ろうとする。しかし砂と砂利に滑って両手を地面についてしまう。

「アスカあぶにやい！」

飛鳥が顔を上げると、目の前に直径二メートルはありそうな大岩が転がってくる。

「う、わっ！」

飛鳥はとつさに顔を覆う。次の瞬間、その岩は粉々に砕け散る。オーガスの放った魔法の刃が岩を破壊したのだ。オーガスは霧の流れる中空に浮かび、モツホブたちを冷たい目で見下ろしている。オーガスの目は、群れが一番高い位置にいる一際大きいモツホブを視認していた。リーダーだ。

「そこか」

オーガスは剣を構えると一気に急降下する。驚いて手を振り上げるモツホブたちをすり抜け、リーダーの真正面で急停止する。

いきなり目の前に現れた金色の魔法剣士に驚き、リーダーは雄叫びを上げながら飛びかかってくる。

「むん」

オーガスの剣がきらめく。白い霧を切り裂いて、二枚の緑色の刃がリーダーの身体を突き抜ける。山肌が爆発したように土煙を上げ、オーガスの刃が消える。リーダーの両腕は、肩から切断されていた。苦悶の叫びを上げるリーダー。

「はっ！」

さらにオーガスは連続して刃を放つ。緑色の光がきらめくたび土煙が上がり、リーダーの両足、生首そして最後には上下に分断された胴体が落下する。音を立てて大量の血液が地面に降り注ぎ、異臭を放つ内臓が降り注ぐ。五臓六腑の雨が降るとはこのことだ。

「うわっ、残酷！」

降り注ぐ赤黒い血液と内臓を避け、飛鳥は山道を上に逃げる。スピニッチはすでに空中高く退避している。

運悪く飛鳥の逃げた方向には、二体のモッホブが待ち受けていた。斜面の少し上に突き出た尖った岩から、一体のモッホブが飛びかかってくる。さらに山道の上の方から霧を突き破って、もう一体が雄叫びを上げながら走ってくる。大きく開いた口腔からは、長い舌と大量の涎が垂れている。

「やべっ！」

飛鳥は乾いた唇を舌で湿らせ、まずは上から飛びかかってきたモッホブを避ける。すると目の前では、山道を走って来たモッホブが今まさに両腕を振り下ろすところだ。

「遅いよ！」

飛鳥は両足を踏ん張って攻撃する足場を確認する。足場の悪い場所だけに、石がごろごろしているのだ。

モッホブは右腕を振り下ろして飛鳥の頭を狙う。飛鳥はぎりぎりまで引きつけて、上体を屈めて避ける。モッホブの動きは俊敏だが、キラビーに比べれば遅すぎる。

飛鳥は身を屈めた状態で左腕の角度を決め、左足を一步踏み込むのと同時に斜め下方からモッホブの脇腹を突き上げる。いわゆるボディーブローだ。

重低音がしてモッホブの反対側の脇腹が爆発する。飛鳥のパンチの衝撃が突き抜けて、内臓が飛び出たのだ。

返り血を浴びながら、飛鳥は右足を引く。背後では今まさにもう一体のモッホブが飛鳥につかみかからんと、雄叫びを上げながら両腕を振り上げている。

「しっ！」

鋭い爪を光らせた両腕が振り下ろされるより先に、飛鳥は一瞬のうちにモツホブの懐へ潜り込む。その瞬間には、飛鳥のクロスアツパーがモツホブのみぞおちを突き上げていた。

飛鳥の小さな拳がモツホブの分厚い皮膚を突き抜け、その衝撃でモツホブの背中の中全面が爆発したかのように破裂する。盛大な花火のように赤黒い内臓を飛び散らせ、骨しか残っていないモツホブの身体が後方へ吹き飛ぶ。

「どつちが残酷にや」

スピニツチはため息をつく。飛鳥の倒した二体のモツホブが金色の粒子に変わり、霧に溶け込んでいく。それぞれ五枚ずつのグリズナイトが、山道に澄んだ音をさせて落ちる。飛鳥はその時初めて周囲に静寂が戻っていることに気づく。

「どうやらみんな逃げたようだな」

オーガスが音もなく飛鳥の前に着地する。

「あいつらなんだい？」

飛鳥は足下のグリズナイトを拾い始める。

「モツホブっていう下等モンスターにや。実働部隊の後にくつついて、食べ残しや戦利品の残りを漁ってるにや」

「ハイエナのようなやつらってことか」

飛鳥は手の中で十枚のグリズナイトをもてあそぶ。しかしふとあ

ることに気づき、グリズナイトを無意識のうちに握りしめる。こぼれ落ちたグリズナイト数枚が地面へ落ちる。

「ちょっと待って。ということは、実働部隊ってやつがここにいたってこと？」

オーガスは厳しい顔で、モツホブたちの消えて行った先を見つめている。それは北の方角。商業都市ドルメンのある方向だ。

「アスカ、残念だがきみとはここでお別れだ。どうやらメツサーラにオーガウルフを送り込んだのは、奴らの陽動だったようだ。私の部隊を分散させるための」

「つまり……」

「今ごろはサウザスパルメキアに向けて、モンスターの実働部隊が進軍してるはずにや」

飛鳥の言葉をさえぎって、スピニッチは決然と言い放つ。それは予測でも憶測でもなく、間違えようのない事実だった。

31話：道のりは遙か遠く

「じゃ、すぐ追っかけなきゃ！」

走り出そうとする飛鳥を、オーガスは無言で制する。怪訝な顔で見上げる飛鳥に、オーガスは優しく微笑む。

「アスカ、きみにはやるべきことがあるだろう？ 実働部隊は私たちに任せてもらおう」

「でも！」

「アスカ、オーガスの言う通りにや。アスカにはアスカのやるべきことがあるにや。それはアスカにしかできにやいことにや」

飛鳥は泣きそうな顔で霧に包まれた山道を見る。この先にはたくさんさんのモンスターたちが、フェンドルフイン侵攻を目論んで今こうしている間にも進んでいる。それを知っていながら背中を向けて旅などを続けていいのだろうか。

「アスカ、勘違いしないでくれ。何もきみの力が必要ないと言っているわけではないんだ」

オーガスはうつむく飛鳥の正面に立って、両肩に手を乗せる。それはまるで優しい兄が聞き分けのない妹に言い聞かせているようだ。

「きみには別にやってもらいたいことがあるんだ。イスペリア王にファンタジアへの派兵を交渉して欲しい。クウェンディ女王の名の下に」

「え？」

飛鳥が顔を上げると、涙の滴が一粒弾けて跳ぶ。

「イスペリア軍は我々よりも遥かに強い。もしアスカの交渉が上手くいってイスペリア軍がファンタジアに攻め込んでくれたら、後背をつかれた実働部隊は混乱するだろう。それは結局、私たちの強力な援軍となる」

飛鳥は涙で潤んだ目をまっすぐとオーガスへと向ける。その目には次第に理解と決意の色が現れる。口を真一文字に強く結んで、飛鳥はしっかりとうなずく。何も直接戦うことだけが戦いじゃない。戦っているのは自分だけではないのだ。

「わかったよオーガスさん。アタシがイスペリアを動かすまで死んじゃだめだよ」

オーガスは苦笑する。まさか異世界から召喚された少女に、一国を代表する魔法剣士である自分が心配されるとは。

オーガスはフェンドルフィンの魔法剣士として、そして何より心密かに思慕するクウエンディ女王のためなら命を捨ててもいいと思っていた。それはもちろん今でも変わらない。しかしこの少女が戻って来るのを待つのも悪くないと思う。その時はきっちり女性としてのたしなみを教えてやろう。

「では武運を祈る。また会おう、異世界の勇者アスカよ」

「うん、女王様と蒼い髪の優男さんにもよろしく。あ、レビにもよろしく言っというて！」

霧の中へと上昇していくオーガスに、飛鳥は力いっぱい両手を振る。お互いに命の恩人と思っている間柄だけに、感慨深いものがある。また生きて会えるだろうか。

「アスカ、思い出すにゃ」

スピニツチが飛鳥の横にホバリングする。

「ここは肉体と精神の境目があいまいにゃ世界にゃ」
「だから？」

飛鳥はスピニツチに赤い目を向ける。

「だからまた会いたいって想いが強ければ、きっとまた会えるにゃ。
死にゃにゃいで欲しいって想いもきつと通じるにゃ」
「想いが強ければ……」

飛鳥は拳を強く握り込む。飛鳥の腰の両脇で、強く革の擦れる音がする。

「行こう、スピニツチ。アタシたちも急がなきゃ」
「はいにゃ」

飛鳥は道端に投げ捨ててあった自分の麻袋を肩に担ぎ上げる。力強く歩き出した飛鳥の眼下の霧が晴れてくる。黒々とした森には気味の悪い鳴き声が響いている。ここはファンタジア。モンスターに占領されている国だ。

分かれ道を左に折れると、道はなくなっていた。正確には草の中に埋もれていた。歩きづらい石のごろごろした山道の次は、下草の生い茂る湿った森の道だ。広い街道なら思い切り走って行きたいと

ころだが、くねくねと蛇のようにうねる獣道は、とても走って行けそうにはない。しかも飛鳥は道を知らない。

「ねえ、この道ずっとこんな調子なの？」

飛鳥は顔にぶつかってくる木の枝をつるさそうにかき分け、前をふわふわと飛ぶ黒い毛玉に声をかける。分かれ道を曲がってから小一時間ほど、ずっとこの調子で歩いている。これでは旅をしているのか遭難しているのかわからない。

「このまま百ルキアほど進むと左側に海が見えてくるにや。さらに百ルキアほど進むとイスペリアへ抜ける街道に出るにや」

「ええっと、一ルキアーマイルだっけ？ キロに直すとええっと」

「ここからイスペリアまでは約三百二十キロにや」

「さ、三百二十キロ！」

飛鳥はへなへなと座り込む。この世界に来るまで飛鳥は十キロメートル以上歩いたことはない。小中学校は地元だったので家のすぐ近く。高校へは電車通学だった。最寄り駅までは二キロメートルもない。一番長く歩いた小学校の遠足でさえ、確か六キロメートルほどだ。三百キロメートル以上なんて、新幹線か飛行機で移動する距離だ。

「ど、どんだけかかるんだよう……」

「このペースにやら三日はかかるにや」

「み、三日……」

飛鳥はげんなりする。

「もちろん寝ないで歩き続けたらにや。普通に夜寝て昼間歩いたら、

一週間はかかるにや」

「い、一週間！」

飛鳥は呆然として天を仰ぐ。陽光をさえぎって鬱蒼と茂る梢の間を、原色に彩られた大きな鳥が奇妙な声で鳴きながら飛んでいく。飛鳥はオーガスたちががんばってくれることを、願わずにはいられなかった。

31話：道のりは遙か遠く（後書き）

<「ファンタジア」の距離を表す単位>

ー ルキア ー マイル 〓 1 / 6 0 9 . 3 4 4 m

ー ヘドル ー ヤード 〓 0 . 9 1 4 4 m

ー アナキ ー フィート 〓 0 . 3 0 4 8 m

ー トイキ ー インチ 〓 2 . 5 4 c m

32話：虚無の海

ファンタジア辺境の名も無き道ではあるが、やはりモンスターには遭遇した。森というよりはジャングルに近いこの道には、知性のない動物型モンスターが多い。飛鳥はこの三日間、猿に似たモツホブを小型にしたようなモンスターや虎と鹿が融合したような四つ足のモンスター、それにくちばしに牙の生えたカラスに似た鳥型モンスターと戦闘した。その間に一度チャイムのようなファンファレが飛鳥の頭の上で鳴り、レベルが一つ上がった。どのモンスターにも苦戦らしい苦戦はしなかったが、一番の敵は身体の疲れだった。

勇者として召喚された飛鳥の体力は、この世界の標準的な人間よりも遥かに強靱ではある。しかしいつどこからモンスターに襲われるかわからない状況での旅は、飛鳥の神経をすり減らす。何よりまともに睡眠の取れないことが、一番の問題であった。

ここにきて初めて知ったことなのだが、スピニッチはほとんど寝ないでも活動できる。せいぜい二時間も睡眠を取れば、元気いっぱいに活動できるのだ。基本的にスピニッチが飛鳥の寝ている間に見張りをすることになる。しかし夜行性のモンスターが、飛鳥の睡眠をたびたび遮った。奇怪な鳴き声の響く森の中は寝るのには非常に不向きだ。それでも疲れた身体を乾いた草の上に横たえ、ようやくとうとうしかけるとスピニッチに起こされる。目をこすりながら起きるとモンスターとの戦闘、という日々だった。

「スピニッチい、アタシチヨー眠いんだけど……」

目の下にどす黒い隈を作りながら、飛鳥がよろよると歩く。まだ午前中なのだがあたりは薄暗い。鬱蒼と茂る森の空気は淀んでいるような気がする。睡眠不足と簡易食料だけの慢性的な空腹感、度重なる戦闘による疲労は、さすがの飛鳥も限界を感じざるを得ない。

「がんばるにや。オーガスたちを助けるんじやにやかったのかにや？」

「それはそうだけど、オーガスさんたちを助ける前にアタシが死ぬ」
足を引きずりながら、それでも飛鳥は歩いていく。行けども行けども森しかない。湿った草に足を取られながらも、重い身体を一步一步進めていく。上り坂を登りきって、飛鳥は苔の生えた木の幹に手をつけてため息をつく。

飛鳥が顔を上げると、目の前が急に開けていることに気づく。

「ここ…… なに？」

飛鳥の長い髪を風がなびかせる。飛鳥は高い崖の上に立っていた。眼下には墨汁のような真っ黒い水が満々と湛えられ、寄せては返す波が心地よい音を立てている。

「海にや」

「海い？」

それは海には間違いはなかった。遠くに見える水平線には白い雲が流れ、黒い水とはっきりとしたコントラストを作り出している。

「ねえ、確かに海っちゃあ海だけど、なんで水が黒いの？」

「これは虚無の海にや」

「虚無の海？」

スピニッチは細い目をさらに細める。長いひげが海風に揺られて気持ちよさそうだ。

「アスカ、この世界の海はアスカの世界の海とは全然違うにや。この海はすべてを無に返す海にや」

精神の闇ともいうべきだろうか。この海には生物はいない。虚無の海に入ったものは生き物であろうが無機物であろうが、すべて無に返される。

実はフェンドルフィンからイスペリアまで、この虚無の海を渡れば約一日で到達できるのだ。しかしこの世界では船という乗り物は存在しない。虚無の海に出れば消滅してしまうからだ。

「この黒いのは水に見えるけど、水じゃにやいにや。タナトスという意思の塊にや」

「タナトス？ 意思？ じゃ生きてんの？」

「んにや、生き物ではにやいにや。タナトスとは、すべてを無に返そうとする意思の集まりにや」

「ひょえ」

何となく崖下に吸い込まれそうな気がして、飛鳥は一步後ずさる。すると手を触れている木の幹から、かすかな震動が伝わってくる。

「アスカ、モンスターにや！」

「ああっ？」

振り返ると、今登ってきた坂道を、巨大な牙を生やしたイノシシが一頭突進してくる。見た目は焦げ茶色のイノシシなのに、下あごから真上に伸びている牙だけが異様に長い。まるで象の牙のようだ。

「ちっ、こちとらだるいつていうのにさ」

飛鳥は麻袋を置いてファイティングポーズを取る。

「気をつけるにゃ！ 足を踏み外したりして落ちたら、アス力は存在自体が消えてしまうにゃ！」

虚無の海は人間だろうがモンスターだろうが関係ない。もちろん異世界人だろうが。来るもの拒まずで、すべてを無に返す。

「じゃあ…… こうだ！」

飛鳥はぎりぎりまで引きつけて、すつと身を引く。牙の生えたイノシシは、そのまま崖下へとダイブする。手足をばたつかせながら悲鳴をあげて、イノシシモンスターは黒い海に消える。確実に落ちたはずなのに、水飛沫一つ上がらない。影が影に融合合うように、音もなく波間に消えたのだ。

「虚無の海に落ちたら百パーセント助からにゃいにゃ。足を踏み外さにゃいように、十分気をつけるにゃ」

「う、うん」

スピニッチは海を左手に見ながら飛んでいく。ここからは海沿いに進むらしい。しかし進み始めたのもつかの間、前方に巨大な熊に似たモンスターが複数現れる。

「アス力、クレイジーベアにゃ！」

真っ赤な目で黒い毛むくじゃら。見た目はまさに熊だ。しかしその大きさは動物園で見た熊のゆくに二倍はある。クレイジーベアは咆吼しながら次々と迫ってくる。

「まったく次から次へと、とんでもねえ場所だなここは」

「これがファンタジアにゃ」

「どりゃああああっ！」

飛鳥は拳を握りしめ、気合い一発走り出す。

道のりはまだ半分を進んだところである。

33話：オアシス

モンスターとの戦闘と慢性的な睡眠不足による疲れも、すでにピークに達していた。虚無の海に出てから三日、飛鳥は確かにがんばった。虚無の海は知性のないモンスターたちにとっても禁忌の場所らしく、最初の三日間ほど頻繁にモンスターに遭遇しなかった。それでも一日に数度は戦闘を余儀なくされる。若干伸びた睡眠時間と時折吹きつける涼やかな海風によって何とかがんばってこられたといっただいだろう。しかしそれももう限界だった。

「アスカ！」

ふと背後の気配を感じなくなったスピニッチが振り返ると、飛鳥は草むらの中に倒れていた。疲労のためか肌はかさついて、頬には浅黒い垢がまだら模様になっている。身体中にできた葉傷がミミズ腫れになっていることから、飛鳥にキュアの魔法など使える余裕のないことがわかる。前に進むとする意志はあるものの、身体が言うことを聞かない。勇者とはいえ本来は十七歳の少女なのである。

「ス、スピニッチ…… アタシもうだめ……」

「なに言ってるにゃ！ もうちょっとで着くにゃ！ ほら、見るにゃ！」

スピニッチは、力の抜けた飛鳥の左腕を両前足で持って引っ張り上げる。霞む視界の先には黄色い海が広がっている。

「あれなにい？」

「イスペリアにゃ。とうとう着いたにゃ！」

「ほんと？ まじで？」

左方には虚無の海が黒々と横たわっているが、前方の木々の間に明るく見えるのは砂の海。砂漠だ。目的地に着いたことで、飛鳥にほんのわずかに気力が戻る。横の木にもたれながら、飛鳥はよろよろと立ち上がる。

「どっか休むところある？」

「以前来た時と変わってにやければ、あと三ルキアほどでオアシスがあるにや。そこまでがんばるにや」

「三ルキアって、だいたい五キロくらい？ うう、がんばる」

飛鳥は木から木へ寄りかかるように歩いて行く。数百メートルも歩くととうとう森は途切れ、陽射しの強い砂漠へと出る。睡眠不足の飛鳥に強い陽射しはかなり堪えたが、もうすぐゆっくり休めるという思いが飛鳥の足を一步一步前に進めていた。

砂漠といっても、飛鳥の世界の砂漠とはちょっと趣が違う。気温は夏ぐらいだが、灼熱というほどではない。植物も少しは生えており、舗装はされていないがちゃんと道もある。もし飛鳥の体力が万全であつたら、思い切り走って行けるだろう。

ファンタジア領を示す森を右手に見ながら、飛鳥は歩き続ける。砂漠に出て一時間もすると、ようやくオアシスが見えてくる。

「あつた！ アスカ、オアシスにや！ あそこにやら安心して休めるにや」

「や、やったあ……」

飛鳥の顔にほのかに笑顔が戻る。心持ち早足になって進むと、目に鮮やかな空色の湖と若草色の草原が見えてくる。草原の上には、游牧民族によく見られるゲルのようなテントが二張り建てられている。飛鳥は最後の力を振り絞ってイスペリア最南端のオアシス、ユ

―スに到着する。

「止まれ！」

ゲルに近づく、横合いから鋭く誰何の声がかかる。そこには槍を構えた兵士らしき青年が、切れ長の目で槍を構えたまま立っている。青年兵士は浅黒い肌にターバンを巻き、飛鳥の世界でいうと中東風の格好をしている。この雰囲気にはびたりだ。

飛鳥は両手を挙げて非戦の意志表示をする。この世界でのやり方に合っているかどうかはわからないが。

「待つにや。ミーはフェンドルフィン女王の使い魔にや。このおにやによこは誓約に基づいて異世界から召喚された勇者にや」
「なに？」

青年兵士は目を細めてスピニッチと飛鳥を交互に見る。するとゲルから、中年の兵士が出てくる。

「どうした？」
「こいつら、フェンドルフィン女王の使い魔と例の勇者だと名乗っています」

青年兵士は飛鳥たちから目を離さず、中年兵士に呼びかける。中年兵士は一瞬驚いた表情になるが、スピニッチを見ると青年兵士の槍の先を手で下げる。

「ヨギ、槍を下ろせ、間違いない。この方たちの言っていることは本当だ」

「え、で、では」

「失礼いたしました。お久しぶりですね、スピニッチどの」

「タンギ、久しぶりにや」

スピニツチと中年兵士は親しそうに会話をしている。どこでどうやってこの国のこんな辺境の一兵士と知り合いになったのか気になったが、飛鳥にとって今はそんなことよりも休息が何よりの関心事だった。

「スピニツチ、知り合いなら頼んでくれる？　アタシ……」

そこまで言うと、飛鳥はその場に倒れてしまう。オアシスにたどり着いたという安心感で、緊張と気力の糸が切れてしまったのだ。

「アスカ、アスカ！」

遠のく意識の向こうで、スピニツチの甲高いアニメ声が耳に残った。

肌を優しく撫でる風と低い声で話す男の声で、飛鳥は目を覚ます。そこはゲルの中だった。飛鳥は鉄パイプのフレームに布を被せただけのシンプルなベッドに寝かされていた。一瞬ここがどこだかわからなかった飛鳥は、しばらくくすんだゲルの天井を見つめていた。ゲルの入り口は布で遮られており、その布が玄関扉の役割も果たしているらしい。ゲルの中は意外に広々としており、同じようなベッドが他に三つ。他には木製の粗末なテーブルとイス四脚。あとは木の床に置いてある、何が入っているのかわからない木箱がいくつかあるだけだ。

話し声はゲルの外で聞こえ、低く押し殺した声のため内容までは聞き取れない。しかし声で、気を失う前に会った青年兵士と中年兵

士が会話しているのだとわかる。

34話：天国

「フェンドルフィンの今度の勇者は女の子なんですか？」

「どの程度強いのかはわからんが、あの道を通ってきたということは少なくとも弱いわけではないだろう」

「フェンドルフィンからは一週間かけてきたと、使い魔どのの言うてましたね」

「ああ、モンスターと戦いながらな。あの道は途中休める場所がない。スピニツチどのがあの道を通らせたということは、それだけあの少女の力を認めているということだろう」

「あのう」

「うわっ！」

ヨギと呼ばれていた青年兵士とタンギという中年兵士は、揃って飛び上がる。飛鳥がゲルの入り口の布から、顔だけを出している。

「び、びつくりした。気がつかれたんですね」

「ああ、はい。あの…… スピニツチは？」

「ああ、スピニツチどのはフェンドルフィン女王のところへ報告に行かれましたよ」

「そうなんだ。それで、あの……」

飛鳥は何となく言いづらそうにして視線を泳がす。

「はい？」

ヨギは快活そうに白い歯を見せて、笑顔で応える。飛鳥はそれでも顔を赤らめて、もじもじとしている。タンギは飛鳥の言いたいことに気がついて、助け船を出す。

「あちらのゲルの中にあります。気にせずお使いください」
「ありがとう」

飛鳥はタンギに感謝して、早足で出て行く。華奢な後ろ姿を見ながら、ヨギは首をひねる。

「どうしたんでしょうかね、彼女」

「ばあか、トイレだよ。そのくらい気づかんと、彼女の一人もできんぞ」

「あ、隊長、それきついっす」

二人は飛鳥に気を遣って、湖の方の巡回に歩き出した。

「あ、いた！　ありがとうございましたあ！」

飛鳥は丸い鏡のような、スカイブルーの湖の畔を歩く二人を見つけて手を振る。トイレを済ませた飛鳥は、空腹を覚えてタンギたちを捜していた。麻袋はベッドの脇に置いてあり、中にはまだ十分簡易食料はある。しかしこの一週間ほどまとまな食事をしていなかった。できれば何かちゃんとした食べ物がないか聞きたかったのである。

「ドウラア？」

「え？」

飛鳥は手を挙げたまま固まる。どうやら翻訳こんにやくの効力が切れてしまったようだ。

「あ、やばっ！」

飛鳥は気づく。サウザスパルメキアで購入した十枚の翻訳こんにやくは、すでに使い切ってしまった。まさかここに翻訳こんにやくがあるとは思えない。飛鳥はがんばって身振り手振りでコミュニケーションを取ろうと努力する。

「あ、あのね、アタシお腹空いたの。お腹、わかる？ ハラ ヘツタ」

タンギたちは首をひねって顔を見つめ合う。

「イラア ダミヤル ラ ブードウ？」

「だめだ、全っ然わかんね」

飛鳥はあきらめてしょんぼりする。タンギたちはにこやかに飛鳥に手を振りながらゲルの方へ歩き始める。

「クユマア、ヒュルリ シトウーリ ピラウ」

「わかったわかった、気をつけるよ」

まったく何を言っているのかわからない飛鳥は、きつと散歩するならモンスターに気をつけると言っているのだろっと思う。実際は違っただが。

タンギたちが行ってしまつと、飛鳥は湖の畔に一人取り残される。

風も穏やかで湖面は鏡のように澄んでいる。そういえば飛鳥はここ一週間お風呂に入っていない。最後に入ったのはメッサーラ村の本部でだ。

「ん？ ん…… くせえ」

飛鳥は自分の身体の臭いを嗅ぐ。汗と土と血の臭い。頬を擦ると垢が塊となって落ちる。

「ここはキヨムとかじゃないよね……」

飛鳥は膝をついて、水色のオアシスに手を浸す。思ったよりさらさらな水の底の砂は、何となく気持ちよさそうに感じられる。

「別に見られても減るもんじゃないしいか」

飛鳥は身に着けている物を全部脱いで全裸になると、思いっきり湖に飛び込む。ほどよい水温の湖は、寝起きの気怠さを吹き飛ばしてくれる。飛鳥は泳いだり潜ったりしてしばらく遊んでいた。

薄暗い森を一週間も遭難者のように歩いて来た後だけに、まるでプールのようなオアシスの水は飛鳥にとって天国だった。雲一つない青空に澄んだ心地よい水。飛鳥はここが異世界だということを忘れて楽しんだ。だからこそ目の前に黒い羽の生えた猫が現れた時は、驚いて水を飲んでしまった。

「アスカ！」

「むぶわっ！」

ちょうど足の届かない深い場所を背泳ぎしてただけに、飛鳥は溺れそうになって必死に浮かび上がる。

「ふうう」

水を吐き出して立ち泳ぎする。飛鳥は陸上も得意だが、水泳も得意だ。

「アスカ、テュース イゲル・ラ イエグドグー」

「わかんないって！ 翻訳こんにやく切れちゃったんだよ！」

飛鳥は怪訝な顔をするスピニツチに、必死でジェスチャーする。さすが付き合いの長いスピニツチは気づいたようで、お腹のポケットから翻訳こんにやくを取り出す。飛鳥は岸まで泳いでいき、足のつく場所まで来ると翻訳こんにやくを食べる。

「助かったよ、スピニツチ」

「ミーもあと一枚しか持つてにゃいにゃ、ご飯を食べたらさっそくイスペリアへ向けて出発するにゃ」

「メシ？ メシがあるの？」

飛鳥の目が輝く。

「だって飛鳥が食べたいってタンギたちに言っただんじゃにゃいか？ さっきタンギがそう言ってたにゃ」

「なあんだ、通じてたんじゃん。よっしゃ、食っぞお！」

飛鳥は気合いを入れて歩き出す。

「アスカそんなに格好で行く気かにゃ？ ご飯のお礼にしてはサービスしすぎじゃにゃいかにゃ？」

「あ……」

飛鳥は自分が全裸だということをすっかり失念していた。

飛鳥が寝ていた隣のゲルに入ると、香ばしい匂いが飛鳥の鼻腔を満たす。これは肉料理の匂いだ。

「うっわあ、まじ？」

粗末な木のテーブルには、鶏肉と思われる骨付き肉と大量の野菜、グレープフルーツのようなレモン色の新鮮な果物が並んでいる。

「あ、水浴びはもう終わったんですか？」

湯気の立つスープを運びながら、ヨギが飛鳥に白い歯を見せる。

「あ？ 何で知ってんの？」

「あう」

ヨギの動きが止まる。

「あんたアタシの裸見たの？」

飛鳥の眉間には深いシワが寄り、下斜め四十五度から顔を赤らめてうつむくヨギを覗き込む。

「う……」

ヨギは視線を逸らす。

「見・た・の？」

「純粹にや青年をいじめるにや！」

スピニツチのドロップキックが飛鳥の背中に入る。

「ぐはっ！」

飛鳥は横の木箱に頭から突っ込み、木箱は派手に壊れてしまう。中に入っていた木の棒や布が、床に散乱する。

「うわ、ス、スピニツチどの、やり過ぎでは……」

ヨギはおろおろしている。スピニツチは両前足を腰に当てる。

「アス力はこんにゃの、にゃんでもにゃいにゃ」

「うゝいてえ、ちょっとからかっただけじゃん」

頭にかかった埃や木片を払いながら、飛鳥は何事もなかったかのように立ち上がる。

「さ、メシ食うべ」

せつかくのごちそうが冷めてしまっではおいしくない。飛鳥は何事もなかったかのようにイスに座って、目の前の大きな鳥のモモ肉を手取る。

「いただきま」

「た、助けてください！」

いきなりゲルの中へ血まみれの男が飛び込んでくる。飛鳥は口を大きく開けたまま、動きが止まってしまった。

34話：天国（後書き）

<イスペリア語> S + V + O方式 既出順

ドウラ：何

疑問形：語尾を伸ばして上げる。

イラア：もしかして、もしも、万が一

ブード：腹

ラ：格助詞全般の代わりに用いられる

ダミヤ：減る

現在進行形：単語の最後に「ル」を付ける。

クユマ：来る

丁寧な命令形：ほんの少し語尾を上げる。

ヒュルリ：食事（軽食は含まない）

シトウーリ：準備、用意、支度

ピラウ：する、行う、行動する

<フェンドルフィン語> S + O + V方式 既出順

テユース：こんな

イゲル：場所

イエグ：何、だれ

35話：サンドウオーム

「キャ、キャラバンがサンドウオームに襲われて……」

男の頭に巻いた白いターバンは血に濡れている。こめかみから頬を伝って濃いトマトケチャップのような血が一筋流れている。

「サンドウオームだって？」

奥の布をめくってタンギが血相を変えて現れる。なぜかピンク色のフリル付きエプロンをしている。

「隊長、サンドウオームがこの辺にいたんですか？」

「いや、この辺に出没するモンスターはサンドラットがいいところだ。そんな大物見たことねえぞ！」

タンギは手に持っていたフライパンを放り投げ、エプロンを頭から抜く。フライパンからは香ばしい匂いを立てたソーセージが数本床に転がる。

「ああ、もつたいたい……」

飛鳥の目に涙が浮かぶ。

「アスカ、出勤にや！ 一宿一飯の恩義を返すにや！」

「まだ一飯じゃねえし！」

スピニツチは飛鳥の手を引いて立ち上がらせる。フォークに刺さったままの大きなモモ肉が、おいしそうな油脂を艶めかせて皿に落

ちる。

「ちつくしょ、さつさと片付けてメシ食うぞ！」

飛鳥はポケットからグローブを出し、力を込めて装着する。すぐにタンギも槍を持って飛鳥たちに追いつく。

「あの男はヨギに任せておけば大丈夫です。キャラバン隊はここからールキアほどの地点で、いきなりサンドウオームに襲われたそうです」

「キャラバン隊はどこに向かってたんにや？　こによあたりに村はにやいはずにや」

タンギの口元が引き締まる。

「ここに食料や水を運ぶ補給隊です」

タンギによると、このユースというオアシスは実はただのオアシスではないらしい。実はファンタジアからのモンスター侵攻を見張る前線基地だったのだ。ヨギもタンギもイスペリアの正規軍人で、モンスターの動向を偵察していたらしい。

襲われたキャラバン隊は軍の正式な補給部隊で、当然護衛もついていた。それがサンドウオームによって壊滅状態にさせられたようだ。男はとにかくユースへ知らせようと、一人ラクダを駆って命から逃げ延びてきたという。

飛鳥はタンギといっしょにラクダの背に揺られながら、砂漠の本道を進んでいる。遠くにファンタジア領の森は見えるが、それ以外は砂と荒れ地しかない。ラクダは決して鈍重な生き物ではないが、この緊急事態ではどうにももどかしい。

「ああ、もう！」

焦れつたくなった飛鳥は、ラクダの背から飛び降りる。スピニツチは例のごとく、飛鳥の首にぶら下がっている。

「オジサン、アタシ先に行ってるから、後から急いで来なよ！」

言うが早いか、飛鳥はあっという間に走り去ってしまう。

「オ、オジサン？」

まるで瞬間移動のように消え去ってしまった飛鳥を、タンギとラクダは呆氣にとられた表情で見つめていた。

「あれか！」

数百メートル先に数台の荷車が横倒しになっているのが見える。見えた瞬間に飛鳥はその横にいた。

「大丈夫か？」

荷車の周囲には兵士らしき男たちが数人倒れている。気を失っているだけで、ケガはないようだ。男たちの周囲には、荷車を引いていたと思われるラクダが二頭うつろうつろとしている。しかし見たところ

る五台はある荷車に、駆け込んできた男の乗ってきた一頭と合わせ
てラクダ三頭ではどう考えても少なすぎる。また随行していたと思
われる兵士も、倒れている人数では少ない。他の兵士はどうしたの
だろうか。飛鳥は一番近いところに仰向けで倒れている痩せた男の
頬を叩く。

「おい、なにがあった？ 他のヤツはどうした？」

「う、うう…… サ、サンドウオームが突然襲ってきて…… しか
もた、たくさん……」

男の顔は恐怖に歪んでいる。歯を鳴らして震え、目の焦点も合っ
ていない。

「アスカ、おかしいにや。サンドウオームは群れで襲ったりしにや
いにや。あいつらは常に一匹で行動するにや」

「でもたくさんって……」

「とにかく、みんなを起こして逃げるにや。サンドウオーム一匹に
やらアスカにでもなんとかにやるけど、複数に襲われたらさすが
にヤバイにや！」

「そ、そんなにヤバイの？」

飛鳥の現在のレベルは十四である。ある意味スピニッチは飛鳥本
人以上に飛鳥の力量を理解している。そのスピニッチがヤバイとい
うなら、かなりヤバイのだろう。

飛鳥は倒れている兵士たちを次々と馬車に乗せ、怯えてうろつろ
しているラクダにつなげる。

「ア、アタシ、ラクダの荷車なんて操縦したことないよ！」

「適当に手綱を使ってまっすぐ走らせればいいにや…… ってきた
にやー！」

スピニツチが後方を爪で指す。そこには薄茶色の柱が立っていた。
「う、うわあああつ！」

それは柱ではなく巨大な“ミミズ”だった。飛鳥の知っているミミズと違うのは、その大きさだ。砂の上に出ている部分だけで、ゆうに五階建てのビルほどもあるう。先端にはぼっかりと穴が開き、穴の内側にはびっしりと尖った歯が並んでいる。どうやら先端部はすべて口らしい。

サンドウオームはゆらりと傾くと、その口を真下に向けてもう一頭のラクダに向けて飛びかかる。

「わああつ！」

大量の砂が巻き上がり、巨大なサンドウオームは砂に潜る。跡にラクダの姿はない。

「ま、まじ？」

「アス力、早く逃げるにや！ 真下から襲われたら戦う暇もなく噛み碎かれるにや！」

「ひえええ！」

飛鳥は必死で手綱を叩き、ラクダを走らせる。本能的に命の危険を察知しているのか、ラクダも一生懸命走る。それでもやっぱり疾走というにはほど遠く、せいぜい早歩きと表現した方がいいだろう。後ろで大きな音が聞こえ振り返ると、残りの荷車に都合三匹のサンドウオームが飛びついていて。もうもうと砂煙が上がると、跡には何もない砂地が広がっているだけだ。

「アスカ、ヤバイにや！ エサがにやくにやったとバレたら、追っかけてくるにや！」

その瞬間飛鳥の乗った荷車に併走するかのようになり、サンドウオムが砂から飛び出てまた潜る。まるでテレビで見た、船といっしょに泳ぐイルカのような。

「あは…… は…… 見つかったようだね」

「アスカ！」

「うわっ！」

スピニツチの叫び声と同時に飛鳥の乗った荷車は、下方から空中高く突き上げられていた。

36話：もう一人の勇者

「うわあっ!」

荷車の御者台から放り出され、空中を回転しながら上昇していく。めまぐるしく変わる青と黄色の景色が青一色に静止する。遙か上空を一羽の鳥が横切っていく。すると次の瞬間、飛鳥の身体は真つ逆さまに落下を始める。風切り音と共に咆吼が聞こえる。顔にかかる髪の毛の隙間から見える真下には、地獄が口を開けて待っていた。

「アスカあ!」

離れたところでスピニツチのアニメ声が聞こえる。飛鳥はぽつかりと開いたサンドウォームの口めがけて落ちていく。口の中の無数の牙は波打つように蠢き、底は真つ暗で見えない。手前の牙には、ラクダらしき生首が突き刺さって引っかかっている。

「わあああああっ!」

飛鳥は空中で手足をじたばたさせるがどうしようもない。飛鳥は絶望的な恐怖に駆られる。しかし飛鳥の身体がサンドウォームの口の中へ飲み込まれようとした時、下方で大きな爆発が起こる。サンドウォームの横腹で何かが爆発したようだ。サンドウォームの巨体は弾かれたように吹っ飛ばされる。

「う、わっ」

爆風と砂塵に巻かれながらも、飛鳥は空中で何とか身体を捻る。着地と同時に尻餅をついてしまうが、地面が柔らかい砂だったこと

も幸いしてケガをすることはなかった。

飛鳥を襲ったサンドウォームは慌てて砂に潜っていく。周囲にはばらばらになった荷車の残骸が散乱し、気絶した兵士が二人ほど倒れている。

「よう」

状況にまったくそぐわない、のんきな声が空から降ってくる。陽光に目を細めて見上げると、一人の男が青空から舞い降りてくる。くすんだ短い金髪を逆立て、子どものようにくりつとした好奇心に満ちた目。細い眉と顎の線は、精悍というより繊細と表現した方がしっくりくる。アラビア風のゆったりとした長ズボンを赤い腰帯で留め、先の尖った黒い布製の靴を履いている。薄茶色のシャツの前は半分ほど開けられ、たくさんのタトゥーの彫られた逞しい胸が見え隠れしている。シャツの上に濃い緑色のボレロを重ね着した出で立ちは、この砂漠の景色に妙にマッチしている。しかしイスペリアの人間にしては肌の色が白すぎる。もちろんイスペリア人にはまだ数人しか会っていないが、みな浅黒い肌の色をしていたのだ。

「危ねえところだったな。ん？ お前この国の人間じゃねえな？」

「さっきのあんたがやったの？」

男の口元に浮かぶ微笑はニヒルというよりは、お調子者といった感じだ。

「ああ、俺の魔法すげえだろ？」

「え、あ、ああ」

とりあえず飛鳥は首肯する。いきなり自慢するなど、どうやらこの男は自信家らしい。

「アスカ、大丈夫かにゃ！」

ようやくスピニッチが飛鳥の元へやってくる。

「お？ こいつが噂に聞くフェンドルフィン女王の使い魔か？」
「あんたはだれにゃ？」

飛鳥は不思議に思つて男を見る。タンギのような一兵士でさえ顔見知りのスピニッチが、これほどの魔法を使う者と面識がないとは。

「俺？ 俺はこの国に召喚された勇者だ」
「ええっ！」

飛鳥とスピニッチは同時に驚きの声を上げる。

「ま、まさかアタシと同じ？」

男は目を見開き、飛鳥をまじまじと見る。

「“同じ”つて、お前も召喚された勇者か？」
「“お前”じゃないわよ！ アタシは藤堂飛鳥。日本人よ」
「おおー！ そうかそうか！」

男は満面の笑顔で飛鳥の手を両手で握る。そのまま上下に激しくシェイクする。

「俺はガルド。ガルドⅡロバートだ。アングロサクソン系アメリカ人だ」

「ア、アメリカ人？」

上下に激しく揺すぶられながら、飛鳥は目を丸くする。まさか自分以外に、この世界に召喚された勇者がいるなんて。

「ど、どういう……」

「おっと、詳しい自己紹介は後回しだな。お客さんだ」

ガルドの口の端が不敵に歪む。音もなく空中へ浮かぶと、ガルドは両手を前に出す。見ると後方からサンドウームが数匹、砂の海を飛び出しては潜って追いかけてくる。

「アスカって言ったっけ？ お前はその二人を連れてオアシスに逃げてな！ あいつらは俺に任せろ！」

「わ、わかった」

ここは確かにあのアメリカ人に任せた方がいいようだ。いつ足下の砂の中から襲われるかわからない状態では、空を飛べない飛鳥には不利な戦闘フィールドだ。

飛鳥は倒れているイスペリア兵士二人を両肩に担ぐ。走り出そうとした時、ガルドの鋭い声が聞こえる。

「イオナズン！」

ガルドの突き出された両手のひらから、まばゆく光る球体が射出される。まっすぐと撃ち出された白い球は、サンドウームたちの鼻面に着弾する。轟音がして大量の砂が巻き上がる。まるで映画で見た爆撃のようだ。

「アスカ、早く逃げるにゃ！」

オーガスたちとはまったく違う魔法の戦いに見とれていた飛鳥は、スピニツチの声で我に返る。

「あ、そ、そうだった」

大の男を二人も担いで走るのには走りづらかったが、それでも時速四十キロメートル以上の速度で飛鳥は走る。あっという間に走り去る飛鳥を見て、ガルドは口笛を吹く。

「へえ、やるじゃん…… ん？」

黒こげになって白煙を上げるサンドウオームの向こうから、さらに砂のうねりが近づいてくる。

「ジーザス……」

ガルドの前の広大な砂の海原は、見渡す限りサンドウオームのうねりに埋め尽くされていた。

37話：食い物の恨み

「あ、アスカさん、スピニツチさん！」

道の向こうから走ってくる飛鳥を見て、タンギがラクダの背からのん気に声をかける。しかし飛鳥が両肩に担いでいる兵士を見て表情を陰しくする。

「もしかしてそれしか助からなかったんですか？」

「最悪ミーたちも助からにやいかもしれにやいにや」

飛鳥の首につかまっていたスピニツチが、離れて空中をホバリングする。

「あれヤバイよ。タンギさんも逃げた方がいい」

その時また遠くの方で爆発音が聞こえる。

「ほう？」

タンギがラクダの上で伸びをする。

「誰か戦っているんですか？」

「イスペリア王に召喚された勇者にや」

「ああ、ガルドさんですか。でもあれ？　なんでここにいるのかな？」

すると今度はさっきよりも手前で爆発が起こる。だんだんこっちに近づいて来ているようだ。

「まずいにゃ。あの勇者押されてるにゃ」

「とりあえずユースまで逃げよう」

飛鳥は走り始める。タンギもラクダをUターンさせるが、あまりにも遅すぎる。そうこうしているうちに、百メートルほど後ろで砂煙が上がって爆発音がする。

「もうそこまで来てるにゃ！」

「ヤバイ！」

飛鳥は十メートルほど後のタンギのところへ戻る。

「降りて！」

飛鳥はタンギにラクダから降りるよううながす。

「ど、どうするんですか？」

爆発は立て続けに上がり、どんどん近づいてくる。空に小さくガルドが浮いている姿も見取れるぐらいになっている。ガルドは連続して白い光を放ち、地上を激しく攻撃しているのがわかる。

「この二人をよろしく」

飛鳥はタンギに兵士たちを担がせる。

「え、あ、お、重い！　わ、わたしに二人は運べませんよ！」

タンギは兵士二人を両肩に担いでふらついている。

「誰もオジサンに運んでもらおうなんて思っていないわよ!」

飛鳥はそう言うラクダのお腹の下に左手を当てる。

「そりゃ!」

なんと飛鳥は左手だけでラクダを持ち上げてしまう。

「オジサンこっち来て!」

数百キログラムはあるであろうラクダを、少女が片腕一本で持ち上げている。呆然とするタンギの膝の裏に、飛鳥の右腕が回される。

「よいしょ!」

今度はタンギが持ち上げられる。タンギは兵士二人を担いでいるのだ。つまり飛鳥は大の大人三人を右腕だけで持ち上げていることになる。

「お、おわ」

「飛ばすわよ!」

地面深く足跡をつけながら飛鳥が走り出す。

「おりゃあああっ!」

その早さはタンギの全力疾走よりも遥かに速い。

「しかし、ラクダと大人の男三人を担ぐ女子高生ってどうなのよ!」

「かつこいいにゃ」

飛鳥の嘆きに、首につかまるスピニッチが冷静に応える。タンギはバランスを取るのに必死で、飛鳥に慰めの言葉をかける余裕はなかった。

「よいしょ」

数分後、飛鳥はユースに到着する。ゲルの中からヨギだ槍を構えて飛び出してくる。

「タンギさん、どうだったんですか？」

「よくわからんが、サンドウォームはやはり複数いるらしい。今ガルドさんが戦っている」

「ガルドさん？ あの勇者の！」

ヨギの目が輝く。

「知ってるの？」

飛鳥が身体についた埃を払いながら聞くと、ヨギは目を輝かせながらうなずく。

「あの方の魔法は最強ですよ！ 我が国のウィザードの中でも飛び抜けています」

「ウィザード？」

飛鳥は横で飛んでいるスピニッチを見る。

「魔法使いのことにゃ」

「ああ、どつかで聞いたことあると思った」
「とりあえずこの人たちをベッドに運ぼう。外傷はないが、頭を打っているようだ」

二人の兵士は馬車が破壊された時に気絶したままだったので、受け身も取れずに地面に落下したらしい。首の骨が折れなかったのは不幸中の幸いだ。

タンギとヨギはそれぞれ兵士を一人ずつ、飛鳥の寝ていたゲルへ運ぶ。飛鳥はスピニツチと共に道に出る。まだガルドが戦っている砂煙は見えない。

「ねえ、助けに行った方がいいかな、アタシ腹減って死にそう」
「そうだにゃあ……」

スピニツチは腕組みをして考え込む。するとすぐ近くで爆発音が起こる。

「うわっ！」

揺れる地面に驚いていると、空中からガルドが飛鳥の前へ着地する。

「まずいぜ、ヤツらの数がハンパねえ」

「そんなにいるの？」

「ああ、百匹近くはいる。こんなのあり得ねえ」

「ど、どうするの？」

その瞬間陽が陰り、真上からサンドウォームが襲いかかってくる。

「うわぁー！」

ガルドとスピニッチは飛び上がり、飛鳥は地面を転がって逃げる。大量の砂が降ってきて、飛鳥は砂まみれになってしまう。

「ぺっぺっ！ やばいよこれ、まじで…… ああっ！」

飛鳥の目の前では、ゲルにサンドウームが襲いかかっている。木の骨組みがひしゃげ、中の机や木箱が空中に巻き上げられる。そこには飛鳥のまだ食べていない食事もあった。

「ああ…… アタシのメシ……」

泣きそうになってうつむく飛鳥。

「アスカ、大丈夫かにゃ！」

スピニッチとガルドが降りてくる。見る間にもう一つのゲルにも複数のサンドウームが襲う。中からタンギとヨギが慌てて逃げ出してくる。

「く、くく……」

スピニッチは低い声を聞く。それはうつむいた飛鳥の口の辺りから聞こえてくる。

「ア、アスカ？」

「くく…… くくく、けけけけっ！」

飛鳥の顔がだんだんと上がってくる。その目は妖しく光り、悪魔のように残忍な笑顔を作り出している。

「アタシの肉…… 食べ物…… このミミズ野郎ども、絶対に許さねえ！」

スピニツチとガルドは飛鳥の放つどす黒いオーラに、思わず後ずさりする。飛鳥は完全にキレていた。ここにこの後語り継がれる勇者アスカの伝説の一つ、「サンドウォーム大量虐殺」が始まるのだった。

38話：サンドウォーム大量虐殺

「きさまらぁ！」

飛鳥は走り出し、目の前で砂の中へ潜りかけているサンドウォームの尻尾を両手で抱え込むようにしてつかむ。飛鳥の身体は砂の中へ引き込まれそうになる。サンドウォームは小さいのでも全長数十メートルはある。サンドウォームにしてみれば、飛鳥など米粒ほどの大きさだろう。しかし飛鳥の臂力は潜ろうとするサンドウォームをがっしりと捕まえて放さない。

「あたしの！」

飛鳥は暴れるサンドウォームを強引に引っ張る。潜れないことに気づいたそのサンドウォームは砂の中から頭を出して、咆吼を上げながら飛鳥に襲いかかる。

「メシい！」

飛鳥はそのままサンドウォームを振り回す。無理矢理砂の中から引きずり出されたサンドウォームは、飛鳥につかまれた尻尾を中心に一回転する。

「うわっ！」

スピニッチとガルドの頭の上を、長大なサンドウォームがかすめていく。

「どうしてくれんだよぉ！」

轟音と震動がして大量の砂塵と鮮血が舞い上がる。飛鳥は振り回したサンドウォームで、他のサンドウォームを叩きつぶしたのだ。

「おわあ！　すげえ！」

一度に二匹のサンドウォームが潰されている。飛鳥の持ったサンドウォームは、半分からちぎれて内臓がはみ出ている。赤黒いその内臓は、まだ生きているように蠢いている。

直後、二匹のサンドウォームが砂の中から飛び出して、飛鳥を頭上から襲う。

「おりゃああああっ！」

飛鳥は半分になったサンドウォームをまるでバットののように振り回し、二匹いっぺんに吹き飛ばす。一人の人間が巨大なサンドウォームをおもちやのように振り回し、他のサンドウォームを次々と叩きつぶしていくさまは恐怖を通り越して滑稽ですらある。

「ガルドと言ったかにや？」

「あ、ああ」

飛鳥の暴走に目を奪われていたガルドは、スピニツチに声をかけられるまで呆然としていた。

「すにやのにやかのサンドウォームを、全部地上におびき出すにはどうしたらいいにや」

「おびき出す？　んゝ……」

基本的に本能に従って捕食するサンドウォームは、獲物がなければ

ば砂の中にいる。いくら飛鳥が暴れようと砂の中に逃げられてしまつては、結局いつかは真下から襲われてしまつかもしれないのだ。

「お、そうだ。おびき出すっていうか、追い出すのはできるかもよ」
「追い出す？」

ガルドは子どものような笑顔でうなづく。

「あいつら砂の中で生活してるから、水に弱いんだよ。普段ならどこにいるか、どのくらい深くにいるかわかんねえから追い出すなんてできねえけど、今はここに集まつてる」

ガルドは真下を指さす。スピニツチの頭に電球が点く。

「にやるほど、あれかにゃ！」

スピニツチの爪の先には、空色の水面に陽光をきらめかせているオアシスがあった。

「おりゃあああつ！」

飛鳥はすでに十分の一ほどに短くなってしまったサンドウオームの残骸を、砂に潜っていくサンドウオームの胴体へ叩きつける。甲高い鳴き声を上げながら、サンドウオームは砂の中へ消えていく。

「ちつくしよ、こいつら出たり入ったりモグラ叩きかよ！」

「アスカ、ガルドがサンドウオームを全部地上へ追い出すにゃ！
その時がチャンスにゃ！」

「あん？ 追い出す？」

上空にいるスピニツチを振り仰ぐと、その上を巨大な円盤が横切っていく。

「な、なんだ？」

それはそのままの形で持ち上げられた、ユースのオアシスだった。

「ちいゝとばかり濡れても怒るなよ」

確かによく見るとそれは飛鳥が泳いだあの湖だ。ガルドは魔法で水を固化できるらしい。それは氷ではないが、固まった水だ。

「そりゃあ、全部出てきやがれ！」

ガルドは固化化した湖を一気に液体に戻す。

「わああああっ！」

どしゃぶりというより洪水か津波に近い。乾燥したこの辺一帯は、あっという間に泥の海になる。飛鳥もスピニツチもびしょ濡れだ。

「いきなりなにすんだよお……」

「アスカ、来るにゃ！」

飛鳥ははっとして振り向く。焦げ茶色に湿った地面が次々と盛り上がってくる。水分が地面へ染み込み、苦しくなったサンドウオームたちが出て来ようとしているのだ。

「アスカ、チャンスにゃ！」

「おっしやー！」

飛鳥は手近でまだぴくぴくしているサンドウオームの尻尾をつかむ。その瞬間、地面が爆発するかのようになり、たくさんのサンドウオームが飛び出してきた。

「うつしやああ！ 死ねえええ！」

飛鳥は抱えたサンドウオームをめちやくちやに振り回し、地上に出たのたくっているサンドウオームを片っ端から叩きつぶしていく。飛び散る鮮血、ばらまかれる内臓、サンドウオームたちの叫び声。少し離れたところへかろうじて逃げることできたタンギとヨギは、信じられない光景を目にする。

一匹のサンドウオームが、目にも止まらない速さで振り回され、地上でのたうつサンドウオームたちを次々と潰していくのだ。最後の力を振り絞って襲いかかろうとするサンドウオームもいるが、無情にも即座にぺしゃんこに潰される。“砂漠の王”との異名を取るこのモンスターが、こんな風にしてやられる姿を見たのは、タンギもヨギも初めてであった。

飛鳥の「サンドウオーム大量虐殺」は、異変を察知したイスペリア軍が到着するまで続けられた。

39話：ゲームオタク

“トプス”と呼ばれるサイに似た動物は、モンスターではなくイスペリアでは日常的に使われる乗用の生き物らしい。簡単に言ってしまうえば、象とサイが合体したような生き物だ。その歩みは決して速くはないが、自分の足で歩くよりは楽だ。

イスペリア軍一個連隊は、ファンタジアの森を右方遙かに睥睨しながら、一路首都「イスペリア」へ行軍している。トプスは四足歩行だがとても歩き方が下手で、しかも象ほどの大きさがあるものだから非常に砂埃を舞い上げる。幌のついた馬車のような乗り物に乗ってはいるものの、前と後ろは開けっ放しの屋根だけの簡素な乗り物だ。前後から入ってくる砂埃に顔をしかめながら、飛鳥は軍から支給された兵士用の弁当をすでに三個平らげていた。

「ぺっぺっ、また砂がガリッていった、ガリッて」

飛鳥は口から砂粒を木製の粗末な床に吐き出す。砂粒は板の切れ目から落ち、後方へ流れていく黄色い地面へ落ちていく。

「アス力食べすぎにゃ」

飛鳥の見事な食べっぷりに、見ているだけでお腹いっぱいになったらしいスピニッチはため息と同時に忠告する。

「いいんだよ、あんなだけ稼がせてやったんだから！」

サンドウオームは一匹三MN。日本円にして一体約三万円也。それが約百匹はいたので約三百万円。イスペリア国での法律は、モンスターを倒して手に入れた戦利品はすべて国のものと定められてい

た。つまり飛鳥がサンドウォームを倒して得たナイトは、すべてイスペリア軍が徴収してしまったのである。

しかし飛鳥にとってお金は問題ではない。「金ならある」のである。飛鳥が気に入らないのは、なぜあれだけ大規模なモンスター集団を野放しにしていたのかということ、結局は助けられなかったイスペリア兵士二人のことである。名も知らぬ二人の兵士の遺体は見つからなかった。サンドウォームに食べられてしまったのか、ゲルといっしょにつぶされてしまったのか、はたまた“自分が”潰してしまったのか。

「やけ食いはデブの元だぜ」

「んだって？」

楽しげなアルトの声に顔を上げると、くすんだ金色の短髪に砂埃を大量に載せたガルドが中に入ってきて来るところだった。

「あんたか。どこ行つてたん？」

「グインに今までの状況説明。この国では勇者も軍の一所有物。命令には逆らえせんっていうこと」

ガルドは肩をすくめながら、飛鳥が最後に食べようと取っておいした鶏肉のから揚げを一つ口に放り込む。

「ああつ！ アタシのから揚げ！」

「一個くらいいいだろ？ 俺だつて働いたんだからさ」
「むっ」

木製の弁当箱を身体の下に隠し、飛鳥はガルドを威嚇する。“グイン”とはこの部隊の部隊長で、イスペリア軍を束ねる將軍の一人だ。

ふくれっ面をする飛鳥に向けて、ガルドが骨ばって男性的な手を差し出す。

「なに？」

「改めて自己紹介。俺はガルド。ロバート、アメリカ人だ。お前は日本人だよな？」

「うん、ってか“お前”ってやめてくんない？ アタシそういう馴れ馴れしい呼ばれ方嫌いなんだよね」

飛鳥はガルドの手を無視して弁当の残りをかき込み、眉間にしわを寄せる。

「そっか、アスカだっけ？ よろしくな。そこでこっちが“使い魔”のスピニッチどの」

「よろしくにや」

ガルドとスピニッチは握手する。ガルドはスピニッチの隣へ「よっこらしよ」と言いながら腰を下ろす。こうやって見るとガルドは確かに外国人だ。金髪に碧眼、幌に頭がつきそうなくらい高い身長。手足はほっそりしているものの、しっかりと筋肉が盛り上がり、ケンをしたら強そうだ。どこかのアイドルのように大きく開けられた胸からは、曲線や明らかに何かを象ったようなタトゥーが見える。

「ね、あんたってウィザードなんだって？ あんたもジョブの部屋に入ったの？」

「ジョブの部屋？ ああ、あの狭く苦しい部屋か、入ったよ」

ガルドは飛鳥のぞんざいな物言いを気にした風もなく、涼風のような笑顔で片目をつぶる。

「で、魔法使いになった」

「まあな、ところでおま、いやアス力はなんのジョブなんだ？ 見たところ戦士じゃないし魔法使いでもない。格闘家にしては服装が違う」

「う……」

飛鳥は決して自分の職業に関して引け目を感じてはいない。けれどもやはりゲームなどでも有名な魔法使いという派手な職業を目の当たりにしてしまうと、モンクなどという中途半端な職業であることが恥ずかしく感じてしまう。サンドウォームと戦うガルドの姿を、確かに飛鳥は「かつこいい」と見とれてしまっていたのだ。

「アス力はモンクにや」

「モンクう？」

ガルドが口を尖らせてスピニッチと飛鳥を交互に見やる。

「それってもしかしてあのモンク？」

「なんだよ“あの”って」

飛鳥はまた馬鹿にされるのだと思い、ふて腐れる。

「日本の有名なファイナル……」

「ストップ！ みなまで言わなくてもいいにや」

スピニッチはガルドの口を肉球で押さえる。

「まあとにかく“あの”モンクだよな？」

飛鳥はむすっとしたままうなずく。

「まじかよ、うひょお！ 俺、あのゲームも好きなんだよな！ ドラクエには負けるけど」

「ドラクエ？」

飛鳥は異世界の砂漠の真ん中で、いきなり現実世界に戻されたような気がしてしまう。それは懐かしくも不思議な響きを飛鳥に与える。そして飛鳥はあることに気がつく。

「あつ！ あんたもしかして、さっき唱えてた魔法って……」

ガルドは白い歯をきらめかせて満面の笑みを見せる。

「そ、本当はあれ“バースト”って名前の魔法らしいんだけど、俺が勝手に“イオナズン”って呼んでんだ！ 他にも“ベギラマ”とか“ヒヤダルコ”とかもあるぜ！」

もともと高い鼻をさらに高々とするガルド。飛鳥とスピニッチは顔を見合わせてため息をつく。

「ゲームオタクだ……」

40話：イスペリア王宮前にて

首都イスペリアはまさに異国情緒たつぷりな場所だった。ガルドや兵士の服装から予測はついたが、中近東の文化をベースに、ロシアや東南アジアを融合させたような雰囲気だ。フェンドルフィンでは女王の城が一番高い建物だったが、イスペリアには高い建物が多い。ガルドに言わせれば高い位置から風を取り入れないと室内が砂だらけになってしまうらしい。

飛鳥は約十日ぶりとなる都会に妙な安心感を覚える。山岳地帯にジャングル、そして砂漠と人里離れた場所ばかりにいたので、どんなに見慣れない造りの建物でも人工的な物は嬉しかった。

「うああ、やつぱり都会はいいなあ、アタシ都会育ちだから山とか森とかあんま好きじゃないんだよね」

真っ赤な夕日がとんがり屋根の林立する向こうへ沈んでいく。ユースから二日、砂まみれになりながらようやくたどり着いた目的地だ。

「アスカはトーキョーにいたのか？」

ガルドは石造りの階段に腰掛け膝に頬杖をついて、気持ちよさそうに伸びをする飛鳥をまぶしそうに見つめる。

「うん、最っ低なトコだけどね」

「ふん……」

思索ありげなガルドに、飛鳥は眉根を寄せる。

「なによ、なんか言いたいことでもある？」

「いや、なんでもねえよ……　　っと」

ガルドは立ち上がり、ズボンの砂を払う。その様子を見て飛鳥はあることに気づく。

「そつえばさ、この街の人っておかしくない？」

「なにが？」

飛鳥は目の前の大きな通りを横切る人々を見る。老若男女、さまざまな人々が往来を歩いている。これからフェンドルフィンのように市でも開かれるのだろうか。

「服装がまちまちなんだよね。まるで冬みたいに厚着してる人もいれば、上半身裸の男の人もいる。あ、あの人なんてマフラーしてるよ、暑くないのかな？」

「はあ？」

ガルドの片方の眉毛が上がる。

「使い魔どのに聞いてねえの？」

「どうしたことよ」

飛鳥は自分より数段高い位置にいるガルドを見上げて睨む。スピニッチはクウエンディ女王のところへ定時連絡に行っている。今はスピニッチが戻るのを、イスペリア王宮前で待っているのだ。

「この世界にはな“温度”って概念がねえんだよ」
「はああ？」

今度は飛鳥が眉毛を上げる番だった。「温度」の概念がないとはどういうことだろうか。ここは夏のような気候だし、フェンドルフインは春のような陽気だった。水を飲めば冷たいし、温かい飲み物だって飲んだ。第一、温度がなければ調理だってできないだろうに。

「アスカの考えてることはわかる。でもな、あっちの世界の常識はここでは捨てな」

「う……」

もちろんこのB級グラビアモデルのような格好をしている限り、飛鳥はここが異世界だという認識を忘れるわけではない。しかし元の世界への依存心が希薄なためか、それともこの世界に来て心の揺さぶられる出来事が多かったせいかわ、飛鳥の中で自分が本来所属する世界がどこなのか揺らいでいるのは事実だ。

実際、召喚された直後ほど「戻りたい」という気持ちは薄らいでいる。今飛鳥にとって一番大事なことは、クウェンディ女王やオーガスたち、フェンドルフインの人々を守りたいという気持ちと、フェンドルフインの城で見たファンタジアからの難民たちのような人々を救うという使命感だ。

「ここが“肉体と精神の境目が曖昧な世界”だったのは聞いたよ」

「ああ、そうだ」

ガルドはうなずく。

「だから“暑い”と思えば“暑い”し、“寒い”と思えば“寒い”んだ。要は心の持ちよう一つで“温度”なんて個人差のある感覚はいくらでも揺らいじまう」

「ふーん、そんなもんなんだ」

つまり厚着をしている人は心が冷たい人なのだろうか。薄着の人は“熱いやつ”なんだろうか。じゃあ、こんな格好をしている自分は熱血ヤロウなんだろう。飛鳥はまだまだこの世界でのあり方を、学ばなければならぬようだ。

「ね、アンタっているいろいろ知ってそうだけど、いつここに召喚されたの？」

「俺か？ 俺はだいたいここに来て一ヶ月ってとこだな。それまでずっとレベルアップしてた」

「レベルアップ？」

サンドウオームの群れを倒したことによって、飛鳥のレベルは今十六まで上がっている。それが高いのか低いのかよくわからないが、以前スピニツチが「一つレベルを上げるのに普通は一年かかる」といっていたのを思い出す。

「ね、ガルドって今レベルいくつなの？」

「俺は今レベル十五だ」

「十五？」

飛鳥は勝ち誇った顔で「フフン」と鼻で笑う。

「あ、お前今バカにしただろ！ アス力はいくつなんだよ！」

「アタシは今十六だよん」

飛鳥は人差し指を立てて横に振る。ガルドは舌打ちをしてそっぽを向く。

「だから早くファンタジアに行かせろって言ったのに……」

「なにアンタ、行くなって命令されてたの？ だれに？」

ガルドはため息をついて、両手で“お手上げ”をする。そして背後を右手の親指で指す。

「ここの一番偉い人さ」

赤い砂漠の夕日を浴びて、クリーム色のモスクがそびえ立っている。入り口の左右にはギリシャ神殿のような巨大な柱が建っているが、その柱も赤や緑のストライプで派手に装飾されている。熱帯の“暑い”国で原色が好まれるのは、飛鳥のいた世界では文化的常識だ。つまりイスペリア王とは、“熱い”人なのだろうか。

「お待たせにや」

シャンパンのコルクを抜くような音をさせて、スピニッチが赤から紺へ移り変わる途中の空へ現れる。

「そんじゃ行くか」

飛鳥たちはイスペリア王宮への広い石段を登って行く。飛鳥は背中に“涼しい”風を感じていた。

41話：戦乱への足音

ギリシャの神殿のような石柱が並ぶ広い空間に、赤い絨毯がまっすぐと伸びている。その先にはお約束の石段が数段あって、両脇には赤々と松明が点されている。外の雰囲気のエジプトか中近東なら、この部屋はギリシャかローマという感じた。熱帯のギリシャって何か変な感じと、飛鳥は周囲を好奇心に満ちた目で見回している。

「おおガルド、そちらがフェンドルフィンの勇者か」

筋肉質でたくましい体つきをした壮年の男性が、背もたれの高い椅子から立ち上がる。イスペリア王だ。

「王、このたびは任務の途中で戻ってきてしまい、申し訳ありませんでした」

ガルドは絨毯に片膝をついて右手を胸に当てる。飛鳥は何となくこの芝居がかった展開に内心辟易しながらも、ガルドにならって片膝をつく。

「藤堂飛鳥です。王、お目にかかれて光栄です」

一応飛鳥なりにがんばって言うてみた。まさか自分がこんな舞台俳優みたいなセリフを吐くことになるうとは、思ってもみなかった。

「イスペリアの王、デルピエロだ。アスカ、よくぞこんな遠くまで来られた」

イスペリア王デルピエロには、まさに“王”の威厳が感じられる。

鋭い目つきは視線だけでも人を殺せそうだ。黒い短髪に太い眉。たわなにたくわえられた口ひげとあごひげも真っ黒だ。こけた頬には斜めに大きな傷が走り、元々は戦士でもしていたのだろうかと飛鳥は思う。ノースリーブの深緑色のシャツはぴったりと身体に張り付いて、乳首が立っているのに気づいてしまったのには内緒だ。

真っ黒な髪と同じ真っ黒なマントを肩にかけ、軍人の履くような形のこげ茶色のズボンを身に着けている。編み上げの黒い軍靴のよなブーツは、まさに戦闘用なのだろう。

「話はグインから聞いた。フェンドルフィンにモンスターの軍が攻め入ろうとしているとか」

「はい」

飛鳥は隣にちんまりと立っているスピニッチに視線を送る。スピニッチは羽を忙しく動かして、王の目の高さまでゆっくりと浮かび上がる。

「現在パルメキア山脈にて小競り合いが続いていますにや。一気に侵攻されにやったのは、この勇者アスカによってフェンドルフィンの魔法剣士オーガスが迅速に対応できたためですにや。しかしフェンドルフィンには戦える兵士の数がそう多くはありませんし、戦闘力からいっても国内に侵攻されるのは時間の問題ですにや」

「それで我が軍にファンタジアへ侵攻してほしいというわけか」

「はいにや」

デルピエロは壁際に控えている豹人間に目配せをする。飛鳥をここまで連れてきてくれたイスペリア將軍の一人、グインだ。

グインは真正正銘の豹人間だ。頭は動物の豹で、身体は人間の男性。しかし身体能力はずば抜けており、すばやさでは飛鳥をも凌駕する。飛鳥はこっそり“タイガーマスク”と呼んでいる。

「グインから聞いてはいると思うが、我が国は今現在モンスター軍によって封鎖されておる。ファンタジア国境に展開されているモンスター軍がいる限り、ファンタジアに侵攻することはできません」

飛鳥もその状況については聞いていた。ガルドはファンタジア国境に展開されているモンスター軍の偵察と攪乱の命令を受けて、ユースへ向かっていたらしい。

王の隣にグインが立つ。身長は百九十センチメートルはあるだろうか。見上げるような大男だ。

「この国からフェンドルフィンへ軍を移動させられる街道は二つ。しかし状況を鑑みると“F二四七街道”では遠回りになる。となれば一番強力で数も多い“L四〇街道”、通称“ドルメン街道”に展開するモンスター軍を撃破せねばならん。グイン、現状戦力での勝率は」

無言で腕組みをしていたグインが口を開く。グインは少しかすれたハスキーボイスが特徴だ。

「イスペリア全軍のうち戦線投入できるのは三個師団のみ。さらにF二四七街道の防備も考えれば二個師団が限界でしょう。それを考えれば勝率は限りなくゼロに近いと思われます」

「“ドルメン街道”に展開するモンスター軍の数を、アス力は知っているか？」

「い、いえ」

急に振られた飛鳥はどきまぎしてしまふ。今説明のあった話はだいたい聞いてはいたが、その規模までは聞いていない。

「今わかっていなくても五万は下らないそうだ」
「五万……」

一個師団の人数が約一万二千人。二個師団でも約二万四千人。モンスター軍はその倍以上いるというのだ。

「それだけの数を誇っていないながら、ヤツらはなぜこの国に攻め込んでこなかったかわかるかな？」

デルピエロが飛鳥へ問答のように問いかける。

「えっと、お、王様が怖かったから？」

一同は呆気にとられる。唯一スピニツチだけが「あちゃ〜」といながら額を肉球で押さえている。次の瞬間、広間は笑い声で満たされる。飛鳥はなぜみんな笑い出したのかわからないが、とりあえず一緒に笑って笑ってみる。

「アスカとやら、そなたは面白い！　だったらよいのだが、残念ながらそうではない」

デルピエロの笑顔が先ほどと同じく厳しく引き締まる。

「フェンドルフィンとのパワーバランスだ」
「パワーバランス？」

飛鳥は決して頭は悪くはない。しかし授業をともに受けたことではない。そういった政治用語があるのは知ってはいたが、きちんと意味まで理解はしていない。飛鳥の頭の上には大きなクエスチョンマークが浮かぶ。

「簡単に言うとな？　ここに攻め込むとフェンドルフィンに攻め込まれる危険性があつたってことだよ」

「え？　じゃあ、今なんでフェンドルフィンが攻め込まれてるの？　それこそイスペリアに攻め込まれる危険性があるわけじゃない？」

ガルドと飛鳥の会話を聞いて、デルピエロは「ほう」と小さく息を漏らす。少女にしてはそれなりに情勢を把握してるようだと感じたのである。

「よく気づかれた。その通り、つまりモンスター軍はフェンドルフィンに攻め込むと同時にこの国が介入できないようにするつもりだった」

「だった？」

飛鳥は王の物言いに違和感を感じる。なぜ過去形なのだろうか。

「アスカがそれをぶつ潰したんだよ」

「ぶつ潰す？　あ……」

飛鳥は口を手で押さえる。サンドウーム……　あれは本来ここイスペリアの首都へ押し寄せるはずだったのだ。しかしその前に、ガルドと飛鳥に全滅させられた。

「グインの報告によると、サンドウームたちには気が狂うようになる薬剤が投入されていたようだ」

「気が狂う……」

飛鳥は思い出す。フェンドルフィンでの暴れ牛、暴れティラノサウルス……　あれもすでにモンスターからの攻撃だったんだ。

「じゃあ」

飛鳥はデルピエロとグインを見る。王は不敵な微笑みを浮かべ、グインは静かに瞑目している。

「モンスター側の主目的はフェンドルフィン攻略だ。そして攻略が済むまで、この国をサンドウームで混乱させ、時間稼ぎするつもりだった」

デルピエロはマントを片手で勢いよくひるがえす。

「だからこそこちらから攻め込むチャンスであろう。勝率などいくらでも変えてみせようぞ！」

グインの目がかつと見開かれる。飛鳥はごくりと喉を鳴らす。戦争だ、戦争が始まるのだ。飛鳥はこの国に来て初めて“寒い”と感じていた。

42話・修行しようぜ（前書き）

横書き推奨です

42話：修行しようぜ

宵の始めのイスペリアの街は、フェンドルフィンのような雑多な雰囲気はない。人口でいえば明らかにイスペリアの方が大きな街だ。しかし石造りの街並みは整然としており、砂埃を別にすればとても落ち着いた雰囲気だ。家々の軒先には松明がオレンジ色の光を点し、幻想的な雰囲気を醸し出している。時折ターバンを巻いた市民が歩いているさまは、まさに異国情緒たつぷりだ。

「Do you eat previously?」

ガルドが何か言っている。王宮で我慢できずにトイレに行った飛鳥は翻訳こんにやくの効力が切れ、ガルドの言っていることがまったくわからなくなってしまっている。ただフェンドルフィン語やイスペリア語といった未知の言語ではなく、ガルドの母国語は米語だ。それなりに中高と英語を習ってきただけに、何とか少しは理解できる。

「えーと、イトってことは飯食うかってこと？ いや、先に翻訳こんにやくを買う。話しづらくってしょうがない。わかる？ こんにやく、こ・ん・にや・く！」

「Paste made from the arum root?」

「ああ、もう。わっかんね！」

「アスカ、イース ニムユング」

傍らを飛ぶスピニッチはフェンドルフィン語を話している。飛鳥は両手を上げてため息をつく。もう飛鳥にはこれ以上意志の疎通を図る気力はなかった。それでも一応通じてはいたようで、ガルドは

一軒の店に飛鳥を案内する。中はアイテムショップらしく、見慣れた翻訳こんにやくが浅い水槽にたくさん浸されている。

「これ翻訳こんにやく？」

「Yes」

どうやらガルドは日本語を何とか理解してくれているようだ。飛鳥は今後のことも考えて翻訳こんにやくを二十枚ほど買う。こんにやくといっても食用ではないので、時々水をかけてやれば長保ちするそうだ。

「ありがとう」

飛鳥は店主からおつりを受け取って、さっそく一枚食べる。

「俺の言うことわかるか？ これ何本に見える？」

ガルドはにやけながら、飛鳥の前でピースサインをする。

「イエルメル」

「ああ？ なんでフェンドルフィン語になってんだよ！」

ガルドはあわててスピニツチを見る。今度は飛鳥がガルドを見ながらにやけている。

「ああっ！ だ、だましたな！」

「ごめん、ごめん」

もちろん飛鳥はフェンドルフィン語などわからない。適当に言うてみただけだ。

「ちなみに今アスカが言ったのは、フェンドルフィン語では『あなたを愛しています』って意味にゃ」

「なにつ、アスカそうなのか！ そんなら早く言ってくれごめんなさい」

飛鳥は拳を振り上げて殴りかかる直前だった。

「ス、スピニツチ、ほんとにそんな意味だったの？」

「うそにゃ」

「うがぁ！」

飛鳥は両手を振り回してスピニツチを店の外まで追いかける。通行人が驚いて道を空ける。

ガルドが続いて連れてきたのは武器屋だ。コンビニほどの広さの店舗内には、さまざまな形の剣や槍、弓などが立てかけられてある。しかし飛鳥はそういった物には目もくれず、まっすぐと太ったひげ面店主の前まで歩いていく。

「モンク用の武器ってある？」

「モ、モンク？」

見たこともない人種の少女がえらい剣幕で迫るものだから、店主は目を白黒させる。ガルドに言わせればこの店が一番マニアックな品物を扱っているそうだ。つまりここになれば他の店に行ってもモンク用の武器は手に入らないということだ。

「ちょ、ちょっと待っててください」

店主は慌てて奥へ入る。十数分くらいして、店主は二つほどの武器を木製のカウンターに並べた。

「これは“ウルヴァリンクロー”です」

「これ見たことあるよ。あの映画のでしょ？」

ガルドは微笑みながらうなずく。それは手首に装着する武器で、長い三本のつめが伸びている。突いたり引つ掻いたりして攻撃するようだ。それなりに攻撃力はあるそうだが、ある意味攻撃方法が限定されてしまうのが痛い。

「これは“カイザーナックル”です。結構格闘家さんも愛用される方は多いです」

金色の細い板に指を通すリングが四つ並んで付いている。板の部分を手のひらに握り込んで使うらしい。

「今アスカが使ってるグローブは基本装備だから、どっちを買っても攻撃力は上がると思うぜ」

ガルドは親切に使い方や攻撃力、攻撃方法などを店主に聞いている。しかし飛鳥はもうどちらを買うか決めていた。

「アタシこの“カイザーナックル”にする」

「へえ、まいど」

見た目は“ウルヴァリンクロー”の方が強そうに見えるが、飛鳥はやはり戦い慣れたスタイルに合っている方がいいと思ったのだ。
“カイザーナックル”は三YNだった。

「結構高いんだねえ」

飛鳥は今までのグローブをさっきの店に引き取ってもらい、新しい黒い革のグローブをはめている。“カイザーナックル”は、専用のケースに入れ、腰に装着した。

続いてガルドが連れてきたのは、飛鳥がどうしても行きたいと言った防具屋だ。できればこのB級グラビアモデルのような格好とはおさらばしたかったのだ。

その店はおしゃれなブティックのような店だった。通常防具屋には鎧とか盾とかが置いてあり、先ほどの武器屋のような雰囲気なのだが、この店は格闘家専門の店らしい。通常の防具屋に行っても、モンク用の防具は売っていないからだ。

「いらつしゃあい」

なよつとしたちよび髭中年オヤジがメジャーを首に巻いたまま現れる。思わず飛鳥はクロスアッパーを発動させようとしたが、気配を察知したスピニッチに飛び蹴りをくらい惨劇は未然に食い止められた。

「痛た……」

「なにいきなりドツキ漫才やってんだよ、ジャパニーズジョークか？」

「あらん、大丈夫？ お嬢ちゃん」

「く、この……」

心底心配そうに覗き込むオカマ店主に、飛鳥は必死で自分を抑え込む。黒と白の縦じまの長ズボンに同じ柄のシャツ。エンジ色のチヨッキを着て右手には裁断用のハサミを忙しく開閉させている。どう見てもギャグマンガに出てくるオカマキャラだ。

「アスカ、この店はこう見えてもイスペリアーの格闘家専門ショップだ。あのデルピエロ王もご用達だぞ」

ガルドの説明を聞いて、飛鳥は不承不承うなずく。

「ああ、えーっと、とりあえずモンク用のかっこいい防具って置いてある？」

やる気のなさそうな飛鳥の物言いに気を悪くした様子もなく、店主は軽快に手を叩く。

「あらあ、あなたモンクなの？ 今どき珍しいわねえ！ 残念だけれど今は置いてないわね」

「やつぱし……」

がつくりとうなだれて回れ右をする飛鳥。しかしオカマ店主はすばやくその前に回り込む。

「ちょおつとお、早合点しないでよ。『今は』って言ったでしょ？」「え？」

店主はしなを作って上目遣いに飛鳥を見上げる。飛鳥はカイザーナックルの入っているケースの蓋を開ける。

「ちょっとサイズを測らせてね」

飛鳥が戦闘態勢に入る前に、店主は手際よく飛鳥のサイズを測っていく。身体中触られたが、相手がオカマだと嫌な気持ちにならないから不思議だ。「あらん、素敵なバスト」とか「形のいいおしり

ねえ」とか言いながら測られるのがキモいことはキモいのだが。

「オーケー、いいわよん。二日間待つてもらえるかしら？ 値は張るけど“寺院”レベルの防具は用意してあげられるわよ。うちは基本的にオーダーメイドの店だから」
「寺院？」

飛鳥はいきなり出てきた宗教的な単語に違和感を覚える。この世界に来てからそういった宗教的な建物や人間に会ったことはないからだ。

「ああ、オーケー、オーケー。明後日なら間に合う、アスカゼひ作ってもらえ」

「あ、ああ、うん」

ガルドに背中を押され、店を出る。外は完全に日が落ちて、濃紺の空には見慣れない星座がきらめいている。

「なんだよ、寺院って」

気になったまま店の外に連れ出され、飛鳥は不満げにガルドを見る。

「話せば長くなるからな。“ヒャクブンハイツケンニシタッタラス”って言うだろ？」

「“しかし”ね、無理に笑いを取らなくていいから。その“寺院”ってのは近くにあるの？」

ガルドは問いには答えず、急にまじめな顔になってまっすぐと飛鳥を見つめる。

「なあ、“必殺技”って手に入れたくないか？」
「必殺技？」

なんだか飛鳥はRPGな世界からアニメの世界になってきたような気がする。それでもここは異世界だ。そして否応なく自分は勇者として人々に必要とされ、認められ始めている。もしその“必殺技”とやらで少しでもクウェンディ女王やファンタジアのためになるのなら、それは願ってもないことだ。

「部隊編成が完了するまで三日、そうになったら嫌でも戦争が始まる。それまで時間を無駄にして過ごすよりは、少しでも強くなった方がいいだろ？」

軽薄な雰囲気のカルドが、飛鳥の両肩に手を置いて真剣な目で見つめている。飛鳥も真剣な顔でうなづく。

「じゃ“シュギョウ”しようぜ」

空には青い月がおぼろげに浮かんでいる。その模様も飛鳥の見知った模様には見えなかった。

42話：修行しようぜ（後書き）

<米語>

D o y o u e a t p r e v i o u s l y ? : 先に飯食つか？
P a s t e m a d e f r o m t h e a r u m r o o t :
こんにゃく

<フェンドルフィン語>

イス：大丈夫、安全

ニム：わかる、理解する、了承する

ユング：文末につけて、現在進行形にする

<「ファンタジア」の共通通貨>

ユニコナイト

三YN：約30万円

43話：誰がために戦う

イスペリア王宮に一泊し、翌朝早く飛鳥とガルドは“寺院”に向かうことにした。寺院は郊外にあるらしく、歩いて小一時間ほどだそうだった。

「いやあ、まだ口の中がひりひりするよ」

飛鳥は辛い味付けのイスペリア料理が口に合わなかったらしく、舌を出して王宮前の階段を下りる。

「味覚に関しても気持ち一つでいくらでも変わるはずだぞ？ アスカ、お前まだ見た目に囚われてんな」

王宮の食堂でガルドは、飛鳥が辛くて食べられなかった真っ赤な野菜料理を大皿に山ほど積んで食べていた。

「だってあんな色してたら辛いつて思っちゃうのはしょうがないじゃん」

「ははっ、まあな。俺もここに召喚されたばかりのころはかなりやられたよ」

ガルドは朝日に目を細めながらくすんだ金髪を揺らす。

「そういえばこの国には、ファンタジアからの避難民はいないの？ フェンドルフィンじゃ女王さま自ら世話とかしてたのに」

昨日ここに到着してから飛鳥は違和感を感じていた。フェンドルフィンのような切羽詰った様子が市民の間に見られないのだ。戦争

前の雰囲気にも思えない。のどかな南国の街といった風情なのだ。

「この国はモンスター軍による国境封鎖が早かったからな。避難民たちもこの国には逃げて来られなかったみたいだ」

「あ、そっか」

入り口に蓋をされていれば逃げて来られるはずもない。避難民がいなく、モンスターも現れなければ、ここに住む人々にとって戦いとは所詮他人事なのだろう。

「兵士たちは必死で戦っているのになあ」

ユースで助けられなかった兵士たちを思い出して、飛鳥はやるせない気持ちになる。そんな飛鳥の雰囲気を感知取ったのか、ガルドはふと寂しげな表情を見せる。

「アスカ、俺な、スラム出身なんだよ」

「スラム？」

飛鳥は社会の時間にそんなことを習った覚えはある。しかし平和な日本の学生がスラムの本当の悲惨さなどを知るわけもなく、飛鳥にとってはただ単に貧困にあえぐ場所、無法地帯などという程度の認識しか持ち合わせていない。

「俺のオヤジはジャンキーでな、俺とおふくろはオヤジに何度も殺されかけた」

「殺され…… ええっ？」

飛鳥は自分の父親の醜悪な微笑を思い出す。ヤツは最低な男だが、さすがに飛鳥の命まで取ろうとは思ってはいなかった。

「俺は小さい頃からかつばらいやかつあげなんかをして生きてきた。生きるためにはなんだってやった。そしておふくろを守るためには殺人だつて…… 今でもオヤジを刺した手ごたえは残ってるよ」

ガルドは自分の手を見つめている。飛鳥は人道的にガルドを責めようとはまったく思わない。殺したいほど憎いという気持ちはよくわかるからだ。飛鳥はただ行動に移す度胸も覚悟もなかったただけだ。

「それで、あんたはこんなとこにいていいの？ お母さんはどうしてんだよ」

「おふくろは病気なんだ。もう治らないってスラムのやぶ医者には言われたよ」

「そんな……」

「でももつといい病院に入院すれば助かるかもしれない。デルピエ口王が俺の前に現れた時、俺は真っ先に聞いたよ。ファンタジアを救ったら金はいくらもらえるかって」

「現れたつて、あつちの世界に？」

ガルドは不思議そうな顔でうなずく。

「お前のところにもフェンドルフィンの女王様が行ったんだろ？」

『ファンタジアを救ってくれ』つて」

「ううん、アタシんところにはスピニツチが来たんだよ。アタシのクレープ勝手に食べて、行きたくないつてのに無理矢理召喚されて」

ガルドは吹き出して大笑いする。

「まじで？ かつこわりい」

「うるさい――」

スピニツチは今日は朝からフェンドルフィンへ戻っている。イスペリア軍が動くことを知らせに行っているのだ。こういう作戦は連携が大切だ。攻め込むタイミングに合わせ、オーガスたちにも攻勢に出てもらわなければならない。修行が始まったら飛鳥は寺院からは出られないそうなので、スピニツチは作戦開始に合わせてイスペリア王宮へ戻ってくるようになっていいる。

「あんのくそ猫、後で覚えてろ」

ガルドは母親のためにも命を賭けて戦おうとしている。それとはともかつこいと思う。少なくとも「あつちで死ぬのもここで死ぬのも同じ」などと思っている自分よりは、絶対かつこい。もしフアンタジアを救うことができたなら、ガルドには莫大な報奨金がイスペリア王宮より支払われるらしい。もちろんナイトではなくあつちの世界でも価値のある宝石類で。

しかしガルドはだからこそ死ぬわけにはいかなかった。母親を救うためにも、自分が生き残って戻らなければならないのだ。飛鳥が無茶を承知でイスペリアまで来たのに対し、ガルドがこつこつとレベルアップをしていたのは、そういう事情があつたかららしい。

「見えてきたぞ」

砂塵渦巻く荒野の向こうに、白亜の建物が見えてくる。王宮と同じモスクのような大きな建物だ。周囲は低い白茶けた土塀で囲まれているが、それは外敵を防ぐというより敷地との境界線を示すだけの役割のようだ。正面に当たる場所には門柱が建っており、飛鳥が見たこともないようなくねった文字で何か彫られてある。

ガルドによれば“寺院”とは宗教的な意味の建物ではなく、“レベルアップのための修行場”という意味合いらしい。武芸・格闘・

剣術・魔法など、ジョブと呼ばれる職業全般のエキスパートがあり、求めに応じてレベルアップさせてくれるらしい。

さらにここでしか手に入らない武器や防具、魔法や必殺技などもあり、当然モンク用の技もある。

飛鳥はまた一つ強くなるための理由を見出した。どうせ一度は捨てようとしたこの命。母親のために戦おうとしているヤツのために命を賭けるのも悪くない。

飛鳥は砂混じりの風に髪をなびかせ、寺院の入り口へと入って行った。

44話：モンクになったわけ

「ふむ、そなたの今のレベルと所持している技で身につけられる必殺技は、今のところこの三つじゃ」

オレンジ色のゆったりとした布状の服を着ている老人が、飛鳥の前に三枚の紙を並べる。一つは火の玉模様の紙で、技名は「遠当て」。遠距離攻撃用の技だ。もう一枚は柱のようにたくさんの円が縦に重なっている模様の紙で、技名は「トルネードアッパー」。クロスアッパーを身に着けている飛鳥には、特に修行をしなくても手に入られるようだ。

「これは？」

最後の一枚を、飛鳥は指差す。一見すると花のように見えるが、花卉に当たる部分は炎が揺らめいているように見える。

「これはこの寺院で一番レベルの高い必殺技じゃ。名を“百花繚乱”という」

「ヒヤツカリヨウラン？　なんかかつこいいね」

「ふおおおお、かつこええか？　しかしこの技を使えるようになるためには厳しい修行を何ヶ月もせねばならん。お前さんには一日しか時間がないんじゃない？　これはあきらめたらええんじゃないかのう？」

寺院の僧侶たちは気難しい者もいるが、飛鳥を担当してくれたこのラナという老人はともフレンドリーだった。飛鳥は祖父のような気安さで話すことができる。

「うん、確かにそうだけど、せっかくだからこれも彫ってほしいな。いつかは使えるようになるかもしれないし」

「確かにのう、ではこの三つでええんか？」

「うん、お願いします」

飛鳥は元氣よくうなづく。

この部屋は修行用の部屋らしく、飛鳥にとっては嬉しく木の床である。壁は石造りなので違和感はあるが、久々に歩くフローリングの感触は飛鳥に安心感を与えてくれる。

「じゃあ、“遠当て”の修行だけしようかの。それがクリアできれば三つまとめて彫師に彫ってもらうがいい」

「よろしく願います」

飛鳥は立ち上がってお辞儀する。飛鳥にもし祖父が生きていたらこんな感じなのかなと、少し嬉しく思う。ラナは立ち上がると部屋の奥に向かって立つ。

この部屋は不思議な形をしている。細長いのだ。横幅は普通の部屋ほどなので二間くらいなのだが、奥行きはありえないほど深い。百メートル近くはあるだろう。そして奥の壁に小さくオレンジ色の光が見える。ロウソクだ。

「ここからあのロウソクまで百ヘドルある。あのロウソクの火を拳圧のみで消すがいい。さすれば修行は終わりじゃ」

「えええっ？」

飛鳥は驚く。確かにフェンドルフィンでは拳圧でスピニッチが吹き飛んだ。しかしあれは至近距離からであって、あんな遠くまで拳圧が届くとは思えない。

「ふおおおお、おぬし今、無理じゃと思ったな？」
「う、うん」

不安げにうなずく飛鳥に、ラナは子どものように笑いかける。

「自分の力を信じるがいい。どうやらおぬしがモンクになったのは、強い精神力があるからのようじゃしのう」

「え？ アタシがなんでモンクになったかわかんの？」

ラナは優しく微笑みながらうなずく。

「もともとおぬしは身体能力に優れておった。じゃからそのままならきつと格闘家が武闘家になったはずじゃ。しかしおぬしの精神力は、不安定ではあるがかなり強い。じゃからモンクとなったんじやろう」

「精神力ねえ。確かにスピニッチとか女王さまにはそう言われたけど……」

飛鳥は自分の精神力が強いなどとは思ったことはない。第一、強かったらもつとまともに育っていたはずだ。悪いことをして周囲に迷惑などかけるわけがない。

「そうじゃの…… おぬしはまだ自分の力をコントロールできておらん。自分を信じておらんからの」

「自分を信じる……」

ラナは一本も毛の生えていない頭をつるりとなでる。

「これは意外と簡単そうで難しいことなんじゃ。誰しも自分を信じとらん。もしくは自分に嘘をついておる」

「嘘？」

ラナはにこやかにうなづく。

「自分は“強い”、とか“偉い”とかじゃな」

「うぬぼれるってこと？」

「そう思ってもええ。ありのままの自分を信じ、受け入れる。それができた時、おぬしは無敵になる。きつとこの世界を救う存在になれるじゃろう」

「なんかよくわかんないね」

「わしもようわからん」

二人は声を立てて笑う。しかし飛鳥には何となくこの老人の言いたいことがわかる気がする。とにかくこの世界では“できない”と思えば何もできないし、“できる”と思えば何でもできるのだ。人が空を飛び、魔法を使い、モンスターが暴れまわる。今まで信じられないようなものを見てきたではないか。そういったことと比べて、遠いロウソクの火を消すのは何でもないことかもしれない。

「うん、おじいちゃん、アタシ信じてやってみる」

「ふおふお、素直なのはええことじゃ。どれ、できたら知らせてくれ。わしはあっちの部屋におるからの」

「オッケー！」

飛鳥は小さく揺らめくロウソクの火を見つめる。今ごろはガルドも修行しているはずだ。

『今度の戦いは厳しそうだからな。全体魔法を身に着けてやるぜ』

一度に広範囲の敵に対して攻撃できる“全体魔法”。レベル十五

ではかなり厳しいらしいが、きっとガルドなら身に着けられるはずだ。

「アタシも負けてらんない！」

飛鳥は拳を握り締め、ファイティングポーズを取る。今ではもうすっかり馴染んでしまった。

「はっ！」

そのまま飛鳥はロウソクの火めがけて、拳をまっすぐと突き出した。

44話：モンクになったわけ（後書き）

<「ファンタジア」の距離を表す単位>
ーヘドル＝ーヤード＝0.9144 m

45話：スーパーヒロインボディスーツ

何度かパンチを繰り出してみるが、ロウソクの炎が消えることはない。相当気合いを入れて拳を突き出しても、揺らめくのがせいぜいだ。

「あぁーん、難しいなぁ」

飛鳥は床に足を投げ出して座り込む。両手で上体を支え、天井を眺める。薄茶色をした石造りの天井には飛鳥の気を引くものはない。しかし飛鳥はそのまま仰向けになり、両手を頭の下で組む。

土台、拳圧でロウソクの炎を消すなんてできるわけがない。しかしここは異世界だ。さっきラナが言ったことを飛鳥は反芻する。

『自分を信じる』

『ありのままの自分を受け入れるがいい』

「ありのまま、か……」

その時飛鳥の脳裏に何かのイメージがひらめく。ありのままの自分、つまりありのままの世界。飛鳥は勢いよく立ち上がり、遙か遠くのロウソクを見つめる。

「ありのままの空間……」

飛鳥は左手を開き、ゆっくりと前に押し出す。その動作は、まるで目の前にある何かをゆっくりと押し出しているように見える。すると遠くで針の穴ほどの大きさに見えるロウソクの炎が揺らめく。それは飛鳥の動きに呼応しているようにも見える。

「やっぱり！」

飛鳥はこの世界の在り様について、また一つ悟る。拳圧を口ウソクまで届かせるのではなく、自分の拳と口ウソクの間の空気を押し出してやればよい。空気とて物質。物質は化学的反応なくして融合することはない。つまり、飛鳥が拳で口ウソクまでの空気を押せば、まるでところてんが押し出されるようにその間の空気を押せるのではないか。

もちろんそれは現実世界では、物理的にありえないことである。しかし肉体と精神の境目があいまいなこの世界では、飛鳥がそう信じれば可能になるのではないか。空気が空気を押して空間をスラす。飛鳥はそういうイメージをしっかりと頭の中に作り出す。

「よっしゃ、やってみつか」

飛鳥はファイティングポーズを取り、足を軽く前後にスラす。そして左足を一步踏み込んで、右拳をまっすぐと口ウソクに向けて勢いよく突き出した。

重い音がして、口ウソクの向こうにある壁に丸く小さな穴が開く。口ウソクは消えるどころか、先端の火がついていた部分ごと削り取られたようになっていく。

「やった！ できた！」

小躍りする飛鳥を、穴の向こうから覗く者がいる。あの頭はラナだ。スキンヘッドが穴から引っ込むと、すぐに口ウソクの立ててあった場所へとラナが姿を現す。

「どうやら“遠当て”の極意はつかんだようじゃのう！」

ラナは指で短くなった口ウソクをつまみ上げ、嬉しそうに振っていた。

結局三つのタトウーを彫り終えるのには、丸一日かかった。“百花繚乱”のタトウーはとても大きく、飛鳥の背中の、半分の大きさもあつたからだ。飛鳥は本物のタトウーを現実世界で彫ったことはないので噂でしか知らないが、タトウーを彫るとは本来かなり痛いらしい。しかしレビの時もそうだったが、この世界でタトウーを彫ってもらふことは全然痛くない。せいぜい蚊に刺される程度だ。それがこの世界の常識なのか、飛鳥の精神がそう感じさせているのかはわからない。とにかく飛鳥は彫ってもらいながら気持ちよく寝てしまったのは事実だ。

「よう、首尾よく必殺技を手に入れられたようだなあ！」

朝食を出してくれる寺院内の食堂に行くと、ガルドがてんこ盛りの皿を前にしてフォークを振っている。朝から肉やらソーセージやら脂っこいものたっぷりだ。飛鳥はバイキング形式のメニューからパン数切れと野菜、何の鳥のものかわからない異様に黄色い白身の目玉焼きを皿に載せて、ガルドの前に腰を下ろす。

「まあね、イツコはまだ使えないみたいだけど」

飛鳥は右の二の腕に掘られた、“遠当て”と“トルネードアップ”のタトウーをガルドに見せる。

「何だかかつこよさそうな技だなあ。俺もイツコ手に入れられたぜ」

ガルドはいきなり立ち上がってズボンを下げる。

「ぎゃあ！」

ガルドのみぞおちに飛鳥の“遠当て”が炸裂する。隣のテーブルを越えて吹き飛んだガルドは、ズボンを半分までずり下げた格好で気を失い、その右の太ももには稲妻型のタトゥーがスーパやらパスやらを被っている。騒然とする朝食会場の一角では、鼻息も荒く飛鳥がパンに噛りついていた。

「ひつでえよなあ」

後頭部にできたこぶをさすりながら、ガルドが飛鳥の後について歩く。

「女の子の前でいきなりズボン脱ぐヤツいる？ セクハラだよ！」

飛鳥はイスペリア中心街へ向かう砂埃の舞う道を早足で歩いている。今日はあのオカマ店長のいる店で飛鳥の新しい防具を受け取ることになっている。そして明日にはいよいよ戦争が始まる。世界を救うための戦争だ。

飛鳥にはまだ戦いという実感はない。この世界に召喚されて半月あまり。飛鳥は今まで襲いかかってくる命の危険に、必死になって抗ってきただけだ。

「あらん、いらっしやい」

相変わらず殴りたくなるようなくねった動きで、オカマ店長が擦り寄ってくる。覚えてたての必殺技を炸裂させる誘惑に必死に耐えながら、飛鳥は引きつった笑いを浮かべる。なんだかんだ言ってもイスペリア王室ご用達の、由緒正しい防具店だ。見た目と仕事の能力は関係ない。このオカマ店長は飛鳥の防具を作ってくれた恩人でも

あるのだから。

「あ、えーと、できてる？」

飛鳥は頬は痙攣し、上体を仰け反らせながらオカマ店長から少しでも距離を取ろうと努力する。オカマ店長は拝むように組んだ両手を左右の頬に交互に擦りつけながら、さらにその細い身体をくねらせる。

「もちつ、最高の防具ができたわよお！」

店の奥の壁際に、白い布の被せてある頭のないマネキンが立っている。どうやら飛鳥の防具はそれに着せられてあるらしい。

「あたしの最高傑作よ。防御力は魔法剣士の標準装備であるフルメタルメールの二倍！ 魔法耐性もウィザードやビショップの着るロブ並みに強化してあるわ。よほど強力な魔法や呪いじゃない限り、眠っても跳ね返してくれるわよ。その分疲れやすいかもしれないけど、お嬢ちゃんのレベルが上がれば気にならなくなるわん」

いちいちしなを作って説明するオカマ店長に、飛鳥はいらいらし始める。しかしようやく前口上は終わったようだ。

「じゃあご覧あれ！ モンク用防具じゃ世界一の最高傑作！ スーパーヒロインボディスーツよ！」

オカマ店長の手が白い布をつかむ。飛鳥は胸が高鳴る。その能力の高さもすばらしいが、この恥ずかしい格好とおさらばできる喜びに打ち震える。もう周囲の好奇の目にさらされるのは真っ平だ。どうせ注目を浴びるなら「かっこいい」と思われたいと願うのは、わ

がままではないだろう。

「じゃじゃ〜ん！」

白い布が勢いよく取り払われる。“スーパーヒロインボディース”と名づけられたその防具を見て、飛鳥は全身が硬直する。

「どう、素敵でしょう？ 色合いもお嬢ちゃんのイメージに合わせてみたのよ！」

石のように固まっていた飛鳥の肩が、小刻みに震え始まる。ガルドは飛鳥の横の床で、腹を抱えて転げ回りながら笑っている。

「こ、これ…… セーラー服だろうがあ！」

飛鳥のクロスアッパーがオカマ店長に炸裂し、屋根を突き破って空高く舞い上がる。飛鳥の目の前では赤いスカーフに白いラインの入ったセーラー服と紺のひだスカートが、天井の穴から吹き込む風に吹かれて揺れていた。

45話：スーパーヒロインボディースーツ（後書き）

<必殺技>

- 遠当て：遠距離攻撃用パンチ。手の届かない遠くの敵を攻撃できる。
- トルネードアッパー：ある一定範囲内の敵を同時に攻撃できるアッパー。空の敵にも効果がある。
- 百花繚乱：謎の技。

<飛鳥の装備>

武器：カイザーナックル

防具：スーパーヒロインボディースーツ（標準セーラー服）

46話：開戦と策謀

この世界に現実世界ほど厳密な“時間”の感覚はない。あるのは「朝」と「昼」と「夜」だけだ。朝の前には「明け方」があり、夜の前には「夕方」がある。人々は陽が昇ると活動し始め、沈むと家路へと急ぐ。酒場は夕方になるとにぎわい始め、青白い月が中天に差し掛かると店仕舞いとなる。

基本的に夜行性であるモンスターとなると、それが正反対となる。陽が沈むと活発に活動を始め、昇るとねぐらへと帰る。もちろん警備兵のように昼夜勤二交代制の仕事があるように、モンスターにも昼間に活動を余儀なくさせられる種類もいる。

つまり明るい昼は人間の時間であり、暗い夜はモンスターの時間である。

常識的に考えて、モンスターに攻撃を仕掛けるのは朝か昼の時間帯であろう。人間でいうところの夜である。人々は疲れ、眠りに入る時間帯は攻撃するのに最適だ。しかしデルピエロ王は攻撃開始時刻を「夕方」と定めた。これにはわけがある。

夕方とはモンスターたちにとっては人間でいうところの早朝である。つまり、昼間はモンスターたちも警戒をしている。夜は活発に活動する。しかし一晩何もなければ、朝は眠くなる。小鳥のさえずりや起き出す人々の生活音、夜が明けたことによる安心感。デルピエロ王は、モンスターにとっての早朝、「夕魔が刻」と呼ばれるモンスターたちの警戒心に空白ができる時間帯に攻撃を開始したのである。

戦端は“F二四七”街道において開かれた。言うまでもなく陽動である。しかし明確な侵攻の意図を持って行われた。なぜなら“F二四七”街道は、そのまま侵攻していけばファンタジアの首都「フ

「アンタジア」へ通じる街道なのである。

占領されたファンタジアを奪還すべく立ち上がったとモンスターたちに思い込ませるためにも、その戦闘は苛烈で容赦ないものになければならない。投入できる二個師団すべてでもって、最初の戦闘が行われた。

「重装歩兵をもっと前線に向かわせ時間を稼げ」

イスペリア領内、ファンタジアとの国境付近に設営された本営では、グインと片目の男が地図を挟んで厳つい顔同士をつき合っている。

片目の男はグインと並ぶイスペリア將軍の一人、第二師団長フラットだ。シーフ上がりという珍しい経歴を持った將軍である。シーフとは盗賊を意味する職業だが、盗みを働いていた犯罪者ではない。フラットはファンタジアが健在だったところから四つの国に名を馳せる有名なトレジャーハンターであった。シーフという職業の持ついい意味でのずる賢さと用兵の速さはグインとはまた違った強さを持つており、グインが剛ならフラットは柔だ。相手の予想もつかないような奇策と常識破りの戦術は、イスペリアが今までモンスターに侵略されなかった一つの要因でもある。

第三師団長グインと第二師団長フラット。この二人の將軍が、今回の先鋒を務めることに異議を唱える者はだれもいなかった。

「どのくらい保ちそうだ？」

フラットの鋭い左目がグインを見つめる。黒い短髪に赤いバンダナを巻き、切れ長の目に加え、頬には大きな傷跡がある。無精ひげを生やした相貌は、一万二千人の兵を束ねる將軍には絶対に見えない。

「せいぜい一日がいいところだな」

グインは樂觀も悲觀もしない。目の前にある事実のみを冷静に分析する。時にはそれが「非情」と評されるが、王を始めとした將軍たちには一目置かれる才能の一つである。

「時間的には十分だな。では予定通りオレは戦線を離脱する。せいぜいバレないように派手に暴れてくれ」

「了解した。久々に腕が鳴るわ」

グインは牙を剥き出して精悍な笑みを見せる。それはまるでまさに、血に飢えた豹そのものだった。

「ガルドにアスカ、いよいよ出発だ。予定通り“ドルメン街道”に向かう」

「了解」

本営のテント前で休憩していたガルドと飛鳥に、フラットが声をかける。この勇者二人には重要な役割が与えられている。勇者しかできない仕事だ。成否の鍵は「速さ」と「タイミング」だ。そして何よりも「情報」。前の二つは問題はない。フラットが選ばれたのはまさにそのためだからだ。しかし問題は三つ目の「情報」だ。これが絶対的に足りない。

今回の作戦はファンタジアへの逆侵攻に見せかけたフェンドルフインの救出である。イスペリアはファンタジアに侵攻すると見せかけてモンスター軍の注意を引き撤退する。それに呼応してフェンドルフイン部隊は攻勢に出る。モンスター軍の混乱に乗じて飛鳥とガルドは敵陣深く潜入し、敵の指揮官を暗殺するという役割を担っている。

自軍の二倍以上という勝ちの目が低い戦闘に勝つには、ともに

やりあつたのでは不可能だ。敵の頭を取る。そうすれば数は多くても勝利することはできる。

敵の目を引きつける囷としてのグイン。夜陰に乗じて側面から敵陣深く切り込むフラット。そして戦闘能力のずば抜けた勇者二人による敵指揮官の暗殺。一見すると成功率が高そうだが、この作戦には致命的な不安要素があつた。

だれもモンスターの指揮官を知らないのだ。どんなモンスターなのか。どこにいるのか。どの程度の強さなのか。そもそも指揮官自体は存在するのか。

モンスターたちの組織的な動きは明らかに指揮官の存在を指し示してくれる。だが絶対的な情報不足によつて、指揮官に関する情報はすべて飛鳥とガルドが現地で入手しなければならない。

それがこの作戦の、一番困難で不安な部分であつた。

47話：宿場町メリア

「ねえ、アタシたちどこに向かつてんの？」

月が雲に隠れている上に、鬱蒼と茂った森の中は足元もおぼつかないほどの闇の底に沈んでいる。時間的にはまだ深夜とはいえない時間帯だが、人工的な明かりのまったくない森の中ではさほど違いは感じられない。せいぜい“眠くない”といった認識ぐらいだ。

「この街道筋の宿場町“メリア”だ。フラットはそこを橋頭堡とするつもりらしい」

“ドルメン街道”を封鎖していたモンスター部隊は、小一時間ほどで簡単に壊滅できた。モンスター軍の中でも戦闘力の低いコボルト部隊二千程度では、“奇将”フラット師団一万二千にとっては路傍の石程度だ。きっと本隊に危急を知らせる間もなかっただろう。ガルドと飛鳥はまだ戦闘には参加しておらず、遠くで聞こえるモンスター悲鳴を聞いていただけだ。

夜陰に乗じて侵攻するために、フラット師団は馬などの乗り物を使わずすべての部隊が徒歩で移動している。最後尾に糧秣部隊が荷馬車を曳いているくらいだ。

葉擦れの音しか聞こえない森は、異様な緊張と殺気が満ち溢れている。飛鳥は何となく忍者の群れを想起する。シーフの束ねる忍者の大部隊だ。

フラットの部隊は大まかに分けて三つの部隊で構成されている。肉弾戦を目的とした戦士・剣士・格闘家で構成された前衛部隊六千。そのうちの戦士二千五百は重装備の戦士、いわゆる重装歩兵だ。残りの三千五百のうちの一は、今回のファンタジア侵攻に備えて召集された傭兵たちだ。後衛に遠距離攻撃や魔法戦に備えた魔法剣士・

ウィザード部隊三千。このうちの五百が傭兵である。後方支援を目的とした僧侶・賢者・ビショップ部隊二千五百。高レベルの武闘家・剣士で構成されるフラット直属の護衛部隊五百といった構成である。飛鳥とガルドはその護衛部隊の中にいる。

「止まれ！」

低く押し殺した声が前方から伝言で伝わってくる。どうやら目的地近辺へ到着したらしい。

「団長、敵はメリア内に数百程度、しかもすべてゴブリンです」

「ふっ、グインのヤツが相当暴れているようだな。主だった戦闘能力の高いモンスターはすべてイスペリア国境へ行っているらしい」

ゴブリンは醜いブタのモンスターだ。一応知能はあるらしいが、それも人間でいうところの幼児程度で、難しい罠や戦略を警戒する必要はないだろう。フラットはメリア攻略には正攻法で攻めるよう命令する。数も戦闘能力もこちらが圧倒的だ。勝負になるかさえ怪しいほどだ。

フラットの命令を受けた機動力の高い格闘家部隊一千五百が、音も立てずにメリアへ潜入していく。

メリアの町は、“ドルメン街道”が町のだ真ん中を通り、左右に低い木造の建物が並んでいる。モンスターに占領される前は、人口三千程度の小さな宿場町だ。潜入した格闘家部隊は、ゴブリンを次々と倒していく。同時に生存者の確認も行っ。残っていたのは若い女性ばかり百数十人。そのすべてがゴブリンたちによって陵辱されており、中には精神が崩壊している女性もいた。下は五歳から上は二十九歳まで、町の一番大きな旅館に全員全裸で閉じ込められているという。

男はもちろん中年以上の女、赤ん坊に至るまですべて虐殺されて

おり、その死体は村外れの空き地に山積みされて異臭を放っていた。その光景を見た兵士の中には、怒りのあまり情報収集のために生かして捕らえたゴブリンを、八つ裂きにして殺してしまう者たちもいた。心情的には大いに共感するフラットも作戦全体のことを考え、そういった行為は“情報収集をした後で”行うようにやんわりと命令する。フラットもその兵士たち以上にモンスターを憎んでいた。

「二人ともちよつと来てくれ」

数時間後、メリア全体の掌握が済むと、フラットは飛鳥とガルドを仮の本部と定めた町役場に連れてくる。次の進撃に備えて忙しく人々が行き交う会議室のテーブルには、この辺りの地図が広げられている。

「敵指揮官の正体はまだわからないが、居場所はわかった」

フラットの左目が鋭い光を帯び、地図上の一点を指差す。それは“ドルメン街道”沿いではなく、数十キロメートル離れた“F二四七街道”の要衝、キャリアという街だった。

「あっちの街道にいるのかよ。じゃあ俺らどうすればいいんだ？」

ガルドが眉間にシワを寄せる。

「このまま我々がドルメンへ向けて進軍すれば、必ず“F二四七街道”方面から援軍が出される。そのポイントを予測し、その直前でキャリアへ向かってもらう」

「つまり後はお前らで何とかしろってことか」

フラットは片目だけで笑う。

「そういうことだ。しかしキャリーの敵はオレたちになるべく引きつけてやる」

「それでも敵の指揮官がいるくらいなんだから、少なく見積もっても数百のモンスターは残るだろ？」

飛鳥は卒倒しそうになる。ガルドと二人で数百のモンスターと戦う。いや正確に言えば敵の指揮官だけと戦えばいいのだが、見つからずに敵の指揮官のところまでたどり着ければという条件でだ。

「まあ何とかやってみるさ、なあアスカ」

「う、うん……」

隠密行動をするにはどう考えても不利であるセーラー服に身を包んだ飛鳥が、血の気を失った顔でうなずく。それはちょうど青白い月が中天に差し掛かる頃合いだった。

48話：フラットの不安

メリアに駐留部隊三千を残し、フラットの部隊はすぐに進軍を開始する。あくまでも目的は敵指揮官の暗殺であり、メリアの占領維持ではないからだ。メリアからドルメンまでは三百ルキア以上ということだから、キロメートルに直すと五百キロメートル近くあることになる。当然進軍すればするほど戦線は長くなり、側面からの攻撃に弱くなる。メリアからドルメンに向かう“ドルメン街道”には、無数の街道が北に伸び、敵モンスター軍にしてみればそのどれもが攻撃には適している。

フラットは敵の指揮官になったつもりで予測してみる。敵の指揮官の頭の良さがどのくらいによって攻撃ポイントは変わってくる。メリアから東へ十ルキアほど進んだ“B六七街道”、さらに三十ルキアほど先にある“E五街道”。このどちらかで攻撃を受けるのは間違いない。

敵指揮官の頭が悪ければ“B六七”街道との交差点で攻撃を受けるだろう。メリアを取られたことによって焦って攻撃してくるからだ。しかし橋頭堡であるメリアにほど近く、戦線も維持しやすいことを考えれば撃退しやすい。

ほどほどに頭が良ければ“E五街道”で待ち伏せをするだろう。戦線が伸び切って補給路も長い。メリアに戻るにしても距離があるため、追撃しやすい。

そこまで考えて、フラットはある可能性について考える。もし自分と同等かそれ以上に頭の切れる指揮官だったら？ 考えたくはないが、自信と過信は違う。もし自分が敵モンスターの指揮官で、イスペリア軍の動向を正確に把握していたとしたら？

グインの部隊はあくまでも陽動であるためキャリーまで攻め込むことはない。その意図を読まれていたとしたら？

フラットは身震いする。そうフラットの考えた可能性とは、“挟

撃”だ。

“ I五街道 ”で待ち伏せする。そこまではいい。しかし“ I五街道 ”で戦闘が始まったと同時に“ B六七街道 ”からも攻撃をする。伸びきった戦線は簡単に断ち切られる。つまり、“ I五街道 ”と“ B六七街道 ”との間に、フラットの部隊は閉じ込められてしまうかもしれないのだ。前後から挟撃されれば数で負けているイスペリア軍に勝ち目はない。ティラノサウルスやサンドウォームなどの巨大モンスターを密集している部隊のど真ん中にも投入されれば、組織的な戦闘は難しくなる。

もし自分が敵司令官ならそうする。無理に戦闘せず前後に“ 蓋 ”をして、巨大モンスターの蹂躪に任せればいいのだ。後はゆっくりじっくり時間をかけて少しずつ殺戮していけばいい。左右の森に逃げ込んだ兵士は、野生モンスターの餌食になる。少なくとも戦力には数えられなくなる。ここは敵の真つ只中、『ファンタジア』なのだ。

「ねえ、ちよつといいかな」

間もなく最初の分岐点“ B六七街道 ”に差ししかろうとした時、フラットは横から声をかけられる。セーラー服に身を包んだフェンドルフィンの勇者アスカだ。

「なんだ？」

「よければアタシたち“ B六七街道 ”って道からキャリアに向かうか？」

「なんだと？」

この少女は一体何を言い出すのだろうか。“ B六七街道 ”は敵モンスター軍が間違いなくひしめいている。敵指揮官の頭が良くても悪くても、“ B六七街道 ”は戦略的に重要な街道なのだ。

「数千の敵を相手にたった二人で戦おうっていいのか？」

飛鳥は驚いて顔の前で忙しく手を振る。

「いや、そうじゃなくって、もしアタシたちが敵の邪魔をしたり偵察できたりすればフラットさんの役に立てるかなあって」

飛鳥の後ろではスピニッチが細い目で腕組みをしている。フラットは何となく勝ち誇ったその顔にイラツとしてしまう。

「そうか…… 使い魔なのはムーブメントが使えるのだったな」
「そういうこと」

飛鳥が親指を立てる。隣のガルドも片目をつぶる。敵指揮官の意図がどうであれ、“B六七街道”の動静を把握するのは勝敗にかかわる重要な情報だ。自分たちの命をこの異世界の若者二人に任せていいものかどうか。もう“B六七街道”との分岐点まで一ルキアもない。決断するなら今だ。

「わかった。ただし、無理はしないでくれ。あくまでこの作戦の目的は敵指揮官の暗殺であって、オレの部隊が勝つことではないのだから」

「あは、フラットさんかっこいい」

飛鳥の明るい笑顔を見ると、フラットは調子が狂ってしまふ。しかしフラットは不安を隠しきれないでいる。

飛鳥はメリアの惨状を見て泣き崩れていた。ガルドとスピニッチが慰めていたが、異世界で何も知らず平和に生きてきた若者には厳しい現実だったことだろう。モンスターを見た時にきちんと行動で

きるのか。サンドウオーム大虐殺の話は聞いたが、フラットは話半分に分聞いていた。年端もいかないうな少女で魔法も満足に使えない者が、いくら召喚された勇者とはいえたった一人でサンドウオームの大群を倒せるわけがない。きつと何かの間違いだろうと。

「じゃあ、俺たちはこっちからキャリアに向かうぜ。フラットさんもがんばれよ」

「ああ、とにかく無理はするなよ」

暗い“B六七街道”へ二人と一匹が分かれていく。分岐点に敵の姿はなかった。少なくとも敵の指揮官は頭が悪いわけではなかったようだ。フラットは闇に消えていく白いセーラー服の後ろ姿を目の端に捉え、不安げにため息を一つついた。

「重装歩兵三百、ウィザード百はここに残れ。何かあったらすぐに知らせろ」

フラットは“B六七街道”を警戒する部隊を残し、進軍を再開させる。フラットはこの時「ちょっと少ないかな」と不安に思っていた。しかし少ないどころか多すぎるくらいだった。

この重装歩兵三百、ウィザード百の“B六七街道”警戒部隊は、結局この後モンスターと戦うことなく本国へ戻ることとなるのである。

48話：フラットの不安（後書き）

＜「ファンタジア」の距離を表す単位＞
ールキアⅡーマイルⅡ 1,609・344 m

49話：カルラ舞う

「ねえ、キャリアにはいつ到着できる？」

「ん〜俺だったら飛んでいけるから一時間つてとこだけど、歩いて行ったら最低でも三時間つてとこだな」

「三時間かぁ」

月が中天を過ぎた今は、時間でいうと午前一時前後だろう。ファントジアに四季があるのかはわからないが、飛鳥が向こうの世界にいた時の季節は初夏。とすれば夜明け前にはキャリアに着ける計算になる。

「途中モンスターに出くわさなければな」

「だよねえ」

街灯などのない街道は、月明かりしか光源はない。都会育ちの飛鳥には舗装もされていない暗い道には、自然に不安が込み上げてくる。フェンドルフィンからイスペリアに向かうジャングルの道もそうだったが、アスファルトというもののありがたみを、こっちの世界に来てからはつくづく感じてしまう。

「なあ、アスカって彼氏とかいたか？」

「ぶっ！」

いきなりの質問に、飛鳥は思わず転倒しそうになってしまう。

「それはミ〜も気ににやるにゃ」

ガルドとは飛鳥を挟んで反対側を飛んでいるスピニッチまで調子

を合わせる。

「い、いきなりなによ」

「ミーの予想は、いにゃいと見るにゃ」

「おお、じゃあ俺はいる方にWNな」

「ちよつと、人を賭けの対象にすんな！」

飛鳥は頬が熱くなるのを感じる。実際付き合った男は二人ほどいた。しかし父のトラウマは根強く、手を握られただけで飛鳥の身体は拒絶反応を示してしまう。俗に言う“男性不信”というやつである。だがだからといって彼氏がほしくなかったわけではない。友人たちとはそれなりに恋バナなどに興じてもいた。しかし実際に付き合い始めると、どうしても最終的には男の方から離れていつてしまう。やりたい盛りのティーンエイジャーにとつて、手も握れない彼女ではやはり物足りなく思われてしまうのだろう。

「なあ、どうなんだよ」

「いたとしたら、きつと年上を好きににやって遊ばれたにゃ」

「いや、年下をもてあそんでそうだな。気のあるフリして『アタシその気ないから』とか言っちゃって、でもそいつの落ち込む姿見て『弱虫!』とか言っちゃって」

「ツンデレにゃ！」

「あんたらはあ！」

飛鳥は「うひゃっほう」とか言いながら逃げるガルドとスピニツチを追いかける。飛鳥は怒りながらもガルドとスピニツチの気持ちには感謝していた。メリアでの惨状は、飛鳥にとってメツサーラ以上の衝撃だった。

生きながらの地獄を見た女たち。自分より年下のある女の子は、骨盤が砕けるほど犯されていた。自分と同年代の少女は括約筋が切

れ、笑いながら排泄物を垂れ流していた。女たちの全身から立ち上るゴブリンたちの精液の生臭さと“モノ”のように山積みになれた町民たち。

メッサーラの村人たちは本能のままに喰い散らかされていた。しかしメリアは違う。下劣ではあるがモンスターなりの理性でもって少女たちを犯し、村人たちを殺していた。

今のファンタジア国内ではこれが普通の光景だという。だとしたらいったいどれくらいの人々がこういう思いをしているのだろう。そしてなぜこんなことになってしまったのだろう。

メリアを出立してから、飛鳥はそんなことをずっと考えていた。表面上は平静を装い、明るく振舞ってはいたが、ガルドとスピニツチには見抜かれてしまっていたようだ。

「あつちの世界に戻れたら、今度はちゃんとした恋愛したいな」

ふいに立ち止まる飛鳥に、ガルドとスピニツチは顔を見合わせて微笑む。

「じゃあ、俺立候補してもいいか？」

「え？」

明るい口調でとんでもないことを言い出すガルドに、飛鳥が驚いて顔を上げる。同時に甲高い叫び声が空から降ってくる。青い月と見慣れない星空は、黒く大きな鳥たちによって埋め尽くされていた。

「カルラにゃ！」

それはカラスを巨大化させたような怪鳥の群れだった。ただし目は血のように真っ赤に燃え、足には鋭いつめが光っている。くちばしも尖っており、刺されたら致命傷は避けられないだろう。

「ガルド、に、逃げよう！」

「だめだ、もう見つかった！ 今逃げても間に合わない。それにこいつらを行かせたらフラット部隊がやられちまう」

ガルドは羽毛のように軽く空に浮かび上がる。数羽のカルラたちがガルドめがけて急降下する。

「くらえ！ バギマ！」

ガルドは身体の前で交差させた腕を、左右に勢いよく広げる。見えない複数の真空の刃がカルラたちに飛ぶ。三羽のカルラが同時に血しぶきを上げて墜落する。

「どうしよう」

飛鳥はパニックになってしまう。ガルドは十メートルほど上空で魔法攻撃を続けている。夜空を埋め尽くすほどのモンスターたち相手では、ガルド一人ではいつかやられてしまう。

「アスカ、にやにやしてるにや！ アスカも攻撃するにや！」

「だ、だってアタシ空飛べないもん！ 人間だもの」

「みつをつてる場合じゃにやいにや！ にやんによために寺院に行つたにや！」

スピニツチがなぜ「みつを」を知っているのか気になったが、お陰で飛鳥は冷静さを取り戻す。そうだ。こういう時こそ“遠当て”の技じゃないか！

飛鳥は右の手首より少し上に彫つてある火の玉模様のタトゥーに触れる。心持ち動悸が激しくなり、両腕が肩から手首にかけて熱く

なる。驚くことに、夜にも関わらず飛鳥の目には空が真昼のように鮮明に見えるようになる。よく見るとカルラたちは思ったより数は多くなさそうだ。せいぜい三十羽というところだ。暗がりと恐怖心のために、必要以上に怯えてしまっていたようだ。

「ふう」

深呼吸を一つつくと、飛鳥は飛び回るカルラの群れと自分の間にある空間をしっかりと把握した。

49話：カルラ舞う（後書き）

<「フアンタジア」の共通通貨
ウォーラムナイト
—WN—約1,000円>

50話：ガルドの目論見

動き回るカルラは壁際に立てられた口ウソクとはわけが違つ。それでも翼長三メートルはある怪鳥のどこかに当たればダメージは与えられるだろう。それにカルラはツバメのようにすばやく飛翔するモンスターではないようだ。大きな羽を広げて、ゆつたりと空気の塊を懷に抱くように飛んでいる。まさか地上から弾丸のように拳を打ち込まれるとは思つてもいないのだろう。

飛鳥はとりあえず手近なカルラの動きを見極める。数十メートルの高さから下降してガルドの真正面の高さで高度を安定させると、まっすぐと飛んでいく。飛鳥から見ると左から右へ動くわかりやすい直線的な動きだ。

「ん」と、この辺かな？」

飛鳥は澄んだ空気を押し出す要領で、カルラの少し先の空間に向けて右ストレートを放つ。するとまるでライフルに打ち抜かれたように、カルラの胴体に穴が開く。悲鳴を上げてカルラが道に墜落する。

「お、当たったにゃ！」

スピニツチは猫だけに夜目が利くのだろう。飛鳥が打ち落とした様子を見て感心している。

「なんかイケそうじゃん」

ガルドの魔法攻撃を受けたわけでもないのに打ち落とされた仲間を見て、カルラたちは一斉に散開する。周囲を飛び回っていたかと

思うと、数羽が飛鳥の存在に気づく。奇声を発してその数羽は急旋回する。

「これあんまり力使わないから、ジャブでもイケそうだね」

ジャブならワンツ一の技ですでに取得済みだし、何よりも慣れた技なのでいちいちタトゥーに触れなくても出せる。木々の梢を掠めながら、三羽のカルラが飛鳥へ急降下してくる。血のように赤い目は、殺戮の欲求で燃えたぎっている。

「しっ、しっ！」

飛鳥は軽くりズムを取りながら、左ジャブを連続で打ち込む。すると左端のカルラの右翼がちぎれ飛び、脳天に赤い穴が開く。

「しっ！」

ジャブのリズムに合わせて右ストレートを放つ。真ん中のカルラの頭に穴が開き、尻尾の付け根から内臓や肉が弾け飛ぶ。ストレートはかなりの貫通力があるようだ。

右端のカルラが飛鳥の目前に迫る。尖ったくちばしが飛鳥を貫こうと突き出される。

「よつと」

飛鳥は軽く屈んでカルラの下に潜り込む。

「ふっ！」

カルラが通り過ぎる前に、飛鳥はクロスアッパーで下から胴体を

突き上げる。“遠当て”の発動中であつたため、そのカルラは背中から内臓をぶちまけて上空高く吹き飛ばされる。そのまま月明かりの中金色の粉となって消え去る。道には四GNが落ちていた。

「結構使える技じゃん」

ガルドが音もなく飛鳥の前に降り立つ。見上げると他のカルラが、北に向けて逃げていくところだ。

「動く相手には初めて使ったけど、なんとなくコツがわかったかも」

「応用も利きそうだな」

「のんびりしてる場合じゃにゃいにゃ」

しっかりと四枚のGNを肉球に載せて、スピニッチが飛んでくる。

「さっきのカルラたちは偵察にゃ。あいつらは本隊に知らせに戻ったにゃ」

「まあ、そうだろうな」

ガルドは苦笑してカルラたちの消えた夜空に視線を巡らす。

「じゃヤバいじゃん。森の中に隠れよう!」

飛鳥は慌てて麻袋を担ぐ。

「いや、それはもう無駄にゃ。ミーたちがいるってバレたからには、森の中にもモンスターは展開するにゃ。数は圧倒的にあっちの方が多いからすぐに見つかるにゃ」

「じゃどうすればいいのよ!」

「答えは簡単だ」

苛立つ飛鳥をなだめるように、ガルドは軽い口調で答える。

「戦えばいいんだ」

「はあ？」

あんぐりと口を開ける飛鳥に、ガルドは不敵に微笑んで見せる。

「あんた正気？ それともそんなに死にたいの？ 相手は数千はいるっていうじゃない。いくらあんたが強くたって数千のバケモノ相手に勝てるわけないじゃん。それこそゲームオーバーだよ」

いつ死んでも構わないという飛鳥の自虐的な覚悟ははまだ健在なのだが、それも以前よりは曖昧になってきている。目の前に見せ付けられた「死」はゲームでも映画でもない。血は生臭いし服にこびりつくとなかなか落ちない。肉は赤いとばかり思っていたが時間の経った肉は浅黒いし、内臓は青黒い。脂肪は黄色いし脳漿はピンク色だ。それに骨があんなに鮮やかな白色だとは思ってもみなかった。そんなリアルな「死」は飛鳥の考えていた「死」とは全然違って。少なくとも、飛鳥は自分がそんな「死」にはなりたくないと思うようになってきている。だからこそ明確な「死」に対しては恐怖を抱くようになっていく。

「いや全部と戦うとは言ってねえよ」

「どうということ？」

飛鳥の隣でスピニツチも細い目をさらに細めて、興味深げに聞いている。

「適当に戦ったら、一気に敵の中を突っ切って逃げる」

「はああつ？」

「にやるほどにや」

ガルドの目論見をスピニッチは理解しているようだ。しかし飛鳥にはまだわかっていない。

「つまりガルドの言いたいことは、敵を引きつけるってことにや」

「だってそしたら、いっぱいバケモノたちに追っかけられるんでしょ？」

「それは望むところじゃん」

ガルドは勇者だが、飛鳥と違ってイスペリアの軍人でもある。今は勝手に行動しているのではなく、フラット師団の一員として作戦行動中なのだ。

追ってくればフラット隊の勝利は間違いない。追ってこなければ自分たちが敵指揮官を倒す本来の仕事に戻るだけ。結局殺されない限りこの方法に失敗はないのだ。

「でも追ってきたらどうするの？」

「数千に囲まれるよりはいいだろ？ 追いついてきたヤツから倒せばいいさ。さっきみたいに二人で戦えば何とかなるだろ。俺やスピニッチは飛んで逃げられるし、アス力は足速いし」

結局のところ隠れるのがダメで戻るのは論外。だとしたら真正面から戦う以外の選択肢は、勇者二人にないのだった。

「でもそう上手くいくのかなあ……」

ガルドとスピニッチの後ろについて歩きながら飛鳥はつぶやく。確かにガルドの思惑通りにはいかないのである。飛鳥のせいだ。

50話：ガルドの目論見（後書き）

＜「ファンタジア」の共通通貨＞
グリスナイト
—GN— 約100円

51話：炎の向こうに

モンスター軍と遭遇したのはそれから一時間ほど経ったころだった。

暗い街道を埋め尽くす赤や緑色の無数の目。夜間行だからなのか、モンスターたちの音を立てないようにひしめき合って歩いてくる様子がとても不気味だ。密集しているので数や種類ははっきりと把握できないが、剣道の胴衣のような黒い甲冑を身に着けた巨大な二足歩行のブタのモンスターが並んで歩いて来る。ゴブリンだ。

モンスターの接近をいち早く察知したスピニッチによって、街道脇の木の陰に隠れて様子を伺っていた飛鳥は喉を鳴らして唾を飲み込む。

「あ、あんなみっちりくつついてる化けもんたちの中を、突っ切ることもなんかできんの？」

隣で同じように様子を伺っているガルドに、飛鳥は小声で問いかける。

「そうだな…… まずは俺が空から攻撃してやつらの気をそらすから、その隙に走り抜ける」

「走り抜けるって……」

まだ百メートルは離れているのではっきりと確認はできないが、走り抜けるスペースなどありそうにもない。メリアで見たヤツらと同じで、ゴブリンは縦にも横にも身体が大きい。横綱級力士が身体をぶつけ合いながら迫ってくるようなものだ。それはまさに肉の壁だ。鎧や武器で身を固めた殺意ある動く壁だ。

そうこうしている間に、モンスター軍は数十メートル先まで迫る。

葉擦れの音が聞こえ、森の中にも何かが動いている気配がする。やはりスピニツチの言った通り、モンスター軍は森の中にも展開しているようだ。

ここまでできたら腹をくくるしかない。飛鳥はガルドの腕を掴み、口を固く結んでうなずく。ガルドは飛鳥にうなずき返すと、音もなく飛翔する。

「ベギラマ！」

相変わらずドラクエマニアな魔法を口にすると、ガルドの両手のひらから炎の渦がモンスターたちへ向かって勢いよく吹き出す。不意打ちを食らったモンスターたちは叫び声を上げながら混乱する。全身から炎を吹き上げてのた打ち回る者。頭や腕など、身体の一部に炎をまとり付かせながら逃げ惑う者。道端に転がっている黒焦げになって炭化した死体。モンスターたちの重い殺気が沈殿していた暗い街道は、炎に照らし出された炎熱地獄へと一気に転化した。

「おら、こつち来いやあ！」

ガルドは十メートルほど上空を北に向かって飛んでいく。左右の手のひらからは、ひっきりなしに炎の舌を下方に向けて伸ばしている。ガルドは飛鳥のためにあえて照明代わりになる炎の魔法を使っただろう。

「ミーも行くにや、飛鳥がんばるにや！」

スピニツチは魔法の黒いシールドに身を包むと、真上に飛び上がる。モンスターたちの注意がガルドに向いているために、空高く昇ってしまえば何とか逃げ切れるだろう。問題は飛鳥だ。

「確かに明るいし混乱はしてるけど…… 熱くて走り抜けられるわけじゃないじゃん！ あの考えなし！」

その時木に寄り添うように立っていた飛鳥を狙って、横合いから何かが飛びかかってくる。猛獣のような咆哮を上げるそれは、全身からとげの生えた虎であった。

「うわあっ！」

飛鳥はとつさに飛び退いて攻撃を避ける。ハリネズミのような虎は、飛鳥の立っていた木に激突する。鈍い音がして、木が折れて倒れる。

「あつぶねえ…… って、あ……」

飛鳥は道のと真ん中に飛び退いていた。目の前にはゴブリンの群れが、狂気に染まった赤い目で飛鳥を睨みつけている。

「うわあああ！ やばい！」

ゴブリンたちは刀や槍を振り上げ叫び声を上げながら、一斉に飛鳥へ襲いかかってくる。

「うりゃあっ！」

とりあえず先頭にいる二体のゴブリンに“遠当て”をかます。ゴブリンたちは胴体に穴が開けて、後方へ吹っ飛ぶ。

「おりゃあっ！」

即座に右端のゴブリンへ間合いを詰めた飛鳥は、すれ違いざまに左ボディブローを胴体に叩き込む。勢い余った飛鳥の拳が、ゴブリンの胴体突き抜けて派手に内臓をぶちまける。

飛鳥は拳にまとわりつくぬめった内臓の感触に顔をしかめるが、前方に混乱したゴブリンたちの間にできた隙間が見える。

「チャンス！」

飛鳥はシールドを張って、地面に転がるゴブリンたちを飛び越えながら走り出す。

「はい、どいてどいてえ！」

飛び、跳ね、突き飛ばし、時々殴る。攻撃されればよける。飛び出してきたヤツは馬飛びのように飛び越える。立ちふさがるモンスターはクロスアッパーで吹き飛ばしたり、どかすついでに左右のフツクで倒す。

確かにモンスター軍の数は百や二百ではきかないだろう。どんなに飛鳥が本気で走り続けても、なかなか終わりが見えてこない。それでも飛鳥の動きが速すぎるのか、モンスターたちは飛鳥に攻撃を加えることはできない。武器を当てる前に走り去るか殺されているのだ。

飛鳥がこのままなら何とか逃げ切れそうだと思った時、明らかにモンスターのものではない声がかすかに聞こえる。嫌な予感がして立ち止まり、声のした方を見回す。すぐに左右からゴブリンが刀で斬りかかってきたので、フットワークで軽くよけて横から二体同時に“遠当て”の右ストレートで打ち抜く。

「いやあ……」

その声は女の子の声だった。この辺りはモンスター軍の編成でいうと後方部隊にあたる。つまり補給部隊だ。イスペリア軍でいうと食料や医薬品、テントや工作道具を積んだ馬車などを運ぶ部隊だ。

食料…… 飛鳥の嫌な予感が膨らむ。次々と襲ってくるゴブリンやカルラなどを蹴散らしながら荷車の荷台を覗き込む。中には全裸の女性が五、六人横たわっていた。

「うっ」

飛鳥は吐き気をこらえる。女性たちは生きながらに殺されていた。乳房や太もなど身体の一部を喰いちぎられた者。眼球を抉り出されて、両目のあったところに赤い穴をあけて両手でかきむしるように空中を掴んでいる者。年端のいかない少女もいた。その少女の腹部にはいくつも穴が開いている。ゴブリンに犯され、内側から突き開けられたのだろう。その少女はまだ生きているようで、全身を小刻みに痙攣させ、口から血の混じった泡を吐いている。その少女は飛鳥に気づいて涙を流しながら手を伸ばす。

「お、ねえちゃん…… タスケ…… テぶっ」

少女の頭が荷台に飛び降りたゴブリンによって踏み潰される。手を伸ばした飛鳥の顔に血しぶきがかかる。ゴブリンは飛鳥をこの“食料兼慰安婦”の仲間と勘違いし、舌なめずりをして下卑た笑い声を上げる。

「げひひ、おまえ、いいおんな、やらせろ」

飛鳥の中で何かが弾け飛んだ。

52話：必殺技の饗宴

「アタシさあ……　ここまでマジに怒ったこと、今までないんだよね……」

飛鳥の目は落ちかかった前髪で見えない。頬に転々とした少女の血が、筋を引きながら顎の方へと流れ落ちていく。それはまるで飛鳥が血の涙を流しているようにも見える。

「げひひ、てあしをきりとして、いもむしみたいにしておかしてやる」

荷台に立つゴブリンは、立ち尽くす飛鳥が恐怖のあまり動けないと思っっているようだ。腰から壺刀を抜き、振り上げる。飛鳥の周囲はすでに数百のモンスターで包囲されている。ゴブリンたちは下卑た笑いを浮かべ、猛獣タイプのモンスターは死肉を喰らおうと涎を垂らしている。その数はさらに増え続けている。

「ぶぎい！」

興奮して鼻を鳴らしながら、ゴブリンは壺刀を飛鳥の右肩へ振り下ろす。澄んだ音がして壺刀が真っ二つに折れる。

「ぶげっ？」

折れた壺刀を、ゴブリンは不思議そうに眺める。刀は確かにうつむいて立ち尽くす飛鳥に当たったはずなのに、飛鳥の右肩には何のダメージも見受けられない。

「うがぁ！」

「ぶぎゅあぁっ！」

口々に奇妙な鳴き声を上げながら、周囲のゴブリンたちがそれぞれの刀や剣で攻撃する。しかし飛鳥の頭や肩、胴体や足などどこに当たっても跳ね返され、折れてしまう。

飛鳥の全身は淡い白色光に覆われている。それは間違いなく飛鳥の持つ魔法、“シールド”の光だ。しかしモンクである飛鳥にここまでの強度を持つシールドを張る魔力はない。それは飛鳥の“怒り”によって信じられないくらい強化された“超シールド”だった。

「お前ら全員殺す！」

飛鳥は右腕に彫られた、たくさんの円が縦に重なって円筒状になっているタトウーに触れる。寺院で手に入れた必殺技の一つ“トルネードアッパー”だ。

「うりゃあぁあっ！」

飛鳥は目の前に立つ、荷台のゴブリンヘクロスアッパーを放つ。しかしそのアッパーは通常のアッパーではなく、放つと同時に飛鳥の周囲にすさまじい風を巻き起こす。その風は音速を超える真空の刃でできた竜巻であった。

「ぴぎゃあぁあぁっ！」

飛鳥を中心とした半径数メートルの範囲のモンスターたちが、高く巻き上げられながら全身を切り刻まれていく。空中で四散したモンスターたちの肉片が広く周囲にばら撒かれる。辺りは炎の焦げ臭さに加え、陰惨な血のにおいが充満する。それはモンスターたち

にとって、経験したことのない地獄であった。

「ああああああっ！」

飛鳥は前後左右に“遠当て”を連続して放つ。飛鳥の“怒り”によつて威力が桁違いに増大した“遠当て”は、数百メートル先のモンスターまで一度に刺し貫く。飛鳥の一発のパンチで数十から百近いモンスターが倒されていく。

「なんだ？ 何があつたんだ？」

急に異様な竜巻が起こつたかと思うと、モンスターたちの絶叫が街道に響き渡つたため、ガルドはその方向へ飛んでいく。無数のモンスターがうごめくその中心で飛鳥が暴れていた。

「あいつ何やってんだ！」

いくらなんでも、数千のモンスター相手に戦いを仕掛けるなんてありえない。原因はわからないが、どうやら飛鳥はサンドウォームの時のようにブチ切れているらしい。このままだといずれ体力や魔力が尽きて飛鳥がなぶり殺しにされてしまう。ブチ切れた飛鳥の戦闘能力は確かに恐ろしいほどだが、“数”は“強さ”を凌駕する。召喚された身だが一応軍人であるガルドには、飛鳥が動けるうちに救出に入らないと飛鳥の命が危ないと判断する。

「ちつ、もうちょっとレベルアップしてからにしたかったが仕方ねえ」

ガルドは飛鳥の頭の上まで下降すると、大声を出す。

「アスカ、俺が全体魔法で攻撃する！ 走って逃げろ！」
「あ？」

かろうじて飛鳥は理性が残っていたようで、ガルドの声は何とか届いたようだ。眉根を寄せて頭上を振り仰いだ飛鳥は、ガルドの全身が黄色く発光しているのを見る。

「くえっ！ アースクエイク！」

地下深くで何かが爆発したような重低音が聞こえ、地面が大きく跳ねる。その反動で飛鳥もモンスターたちもひっくり返ってしまう。炎に照らされた夜の闇に地鳴りが轟き、地面が蛇のようになたつ。次の瞬間、街道の地面が爆発する。大地に加えられた捻りの力が大きすぎて、地割れを起こしたのだ。まるで太鼓を鳴らすような地鳴りが連続して響き、地面が激しく上下する。地割れはますます大きく口を開け、モンスターたちを次々と飲み込んでいく。

「や、やばいよ、これ！」

すっかり度肝を抜かれた飛鳥は何とか立ち上がる。いまだに激しく縦揺れを起こしている地面に飛鳥が立てるのは、ひとえにモンクである身体能力のお陰だ。

地割れはくもの巣のように拡散し、一番巨大な地割れはすでに街道の幅いっぱいにも広がっている。底は果てしなく深そうで、月明かりさえ届かないくらい深い。

飛鳥は揺れる地面に足を取られ、ときどき四つんばいで這いつくばりながらも何とか北へ向かって逃げる。地割れに女たちを乗せた荷車が飲み込まれるが見える。飛鳥は心の中で助けられなかった女たちに謝り、歯を食いしばってひたすら走り続けた。

53話：ガルド、至福のとき

遠く南の空には白煙が立ち上り、いまだに大地が揺れ動く錯覚にとらわれている。飛鳥は地面に膝をつき、肩で激しく呼吸をする。思ったより体力を消耗していたようだ。やはり必殺技を連続で使うと体力の消費量が激しいようだ。それにスーパーヒロインボディースーツは着ているだけで体力を消耗する。この防具と必殺技を使いこなすには、まだ飛鳥のレベルでは厳しいのだろう。

「アスカあ！」

星空に黒い穴が空いている。それは次第に大きさを増し、穴ではなく黒い球体に包まれたスピニッチだということに気づく。

「あ、無事だった？ よかった」

汗まみれの顔で飛鳥は力なく微笑む。飛鳥の前に着地したスピニッチは黒いシールドを解き、心配そうに顔を覗き込む。

「身に着けたばかりの必殺技をあんやに連続して使ったら、疲れるにはあたり前にゃ」

「うん、ガルドが助けてくんなかったらヤバかったかも」

怒りで我を忘れた飛鳥は、実は体力の限界さえも忘れてしまっていた。ガルドが懸念したように、あのまま戦い続けていても、すぐにスタミナ切れとなって動けなくなり、モンスターたちに八つ裂きにされてしまっていただろう。

地割れから逃げながらも、頭の上でチャイムのようなファンファーレが二度聞こえた。つまりレベルが二つ上がったということだろ

う。ナイトを拾っている余裕がなかったため、稼ぎはゼロだったのがもったいない。

「そっぴえばガルドは？」

飛鳥は静まり返った辺りを見回す。暗い街道と森には、モンスターや野生動物の気配はない。青白い月明かりだけが涼しげに降り注いでいる。

黄色い光に包まれて両腕を振った姿までは確認している。しかしその後起こった局地的な地震、間違いなくガルドによるものだろうが、から逃げるのに必死で、ガルドのことは見失ってしまった。

「ミーが思うに、あによ全体魔法はアスカといっしょに寺院で身に着けたものにや。だとすればアスカといっしょで、そうとう疲れてるはずにや」

その時上空でカルラの鳴き声が聞こえる。壊滅した部隊からキャリーへ逃げ帰るのだらう。飛鳥とスピニツチは一瞬襲ってくるのかと身構えるがその様子はなく、三羽のカルラは森の上を悠然と北へ向かって飛んでいく。

その中の一羽に、飛鳥は違和感を覚える。目に意識を集中すると耳鳴りがする。視界が急激にクリアになると、そのカルラが足に人間を掴んでいるのを見て取れる。気を失っているらしいその人物は、紛れもなくガルドだ。

「ガルド！」

飛鳥は疲れも忘れて走り出す。走りながら右腕の炎のタトゥーに触れ、“遠当て”を発動させる。体力が完全な時ほどではないが、ほのかに右腕が熱くなる。残った体力を考えれば、そう何発も打て

ないだろう。

「真ん中のヤツだけを狙って……」

距離にして百メートルほど。今の飛鳥にとってはぎりぎり届くかどうかの距離だ。しかしもたもたしているとガルドが連れ去られてしまう。飛鳥は重心を低くしてしっかりと狙いを定める。

「ふう……」

左腕は手のひらを前に突き出し、右腕は肘をたたんで拳を握る。ゆっくりと息を吐き、寺院でやったように目標だけに意識を集中する。巨大な怪鳥カルラも、ここから見れば雀程度の大きさだ。しかもガルドに当ててしまつては元も子もない。

「はっ！」

飛鳥は目標に向けてまっすぐと拳を打ち抜く。奇声を発して真ん中のカルラがぐらりと傾くと、真つ逆さまに森の中へ墜落していった。

「ガルド！」

飛鳥とスピニッチは走り出す。残りの二羽のカルラはいきなりの攻撃に驚いて、スピードを上げて北の空へ逃げ行ってしまった。

「ガルド！」

落下地点の森は木々の枝が重なり合っているために真つ暗闇だ。さっきの“遠当て”で残りの体力のほとんどを使ってしまったため

に、飛鳥には何も見えない。

「ミーにお任せにゃ」

こういう時は夜目が利く猫がいると助かる。スピニツチは真つ暗闇の森の中を、まったく不安な様子もなく飛んでいく。そそり立つ木々を器用に避けて、あつという間に奥に消え去ってしまう。飛鳥は木の幹で身体を支えながら、スピニツチの消えた後を追う。しばらく行くと森の中の暗闇に、小さな緑色の光が二つ揺れているのを見つける。スピニツチの目だ。

「アスカ、こつちにゃ！」

「ガルド！」

巨大なカルラの胴体は左後方から右の翼の付け根にかけて、まっすぐと打ち抜かれていた。いまだ小刻みに痙攣するカルラの下に、ガルドが半身をうずめて気を失っている。

「ガルド！ ガルド？」

頬つぺたを叩いて声をかける。

「う……」

ガルドは顔をしかめて身じろぎをする。どうやら生きてはいるようだ。

「よかった、生きてるにゃ」

飛鳥はカルラの死体をどかし、ガルドを抱き上げる。髪や頬につ

いた土を払いのけ、膝に頭を乗せる。

「ガルド大丈夫？」

「うつ……き……」

「き？」

うめきながらガルドは寝返りを打つ。背中でも打ったのだろうか。飛鳥はガルドの身体を抱え込むように背中をさする。

「どつかぶつけた？ 痛い？」

「う、き…… 気持ちいい」

ガルドは気持ちよさそうな顔で、飛鳥の太ももに頬を擦り付けている。ガルドの顔の位置からは下着も丸見えだろう。

「お、おのれはあ……」

スタミナ切れを起こしているはずの飛鳥から、再度怒りの赤いオーラが立ち上る。直後、連続したうめき声が森に響き渡る。

「みぎゃ、見てられにゃいにゃ」

「ふん！」

手を払って飛鳥が立ち上がる。地面にはカルラに連れ去られた方が幸せだったのではないかと思えるほど、ぼろぼろになったガルドの姿があった。

54話：レジスタンス

ファンタジア南西部の要衝であるキャリーは、かつてイスペリアと首都ファンタジアの中間点として非常に栄えた街であった。

西から来るイスペリアの商人とファンタジアから買い付けに来る卸問屋の間で盛んに交易がなされ、経済的にもファンタジアを支える支柱的な街であった。ファンタジアの言葉で「貿易」を意味するこの「キャリー」という街は、そういった意味で金と物の溢れる場所であった。

金と物が豊富であるということは、犯罪者や盗賊などの暗躍する場所にもなりかねない。そういった自衛的な意味をも込めて、ここには傭兵を中核とした強力な自警団が編成されていた。

レイモンドという町長が中心となつて自警団が日々その目を光らせていたため、小さないざごさはあつたものの概ね平和で活気ある街であった。

世帯数約十万、人口約三十万の、ファンタジアでは首都ファンタジア、商業都市ドルメンに続き三番目に大きな街であった。周囲を石造りの堀に囲まれてはいるが、門が閉ざされることはなく、自警団による警備によつてその平和は保たれていた。基本的に来る者は拒まず、去る者は追わずという国際的で先進的な考えを持つ人々が多く住む、魅力溢れる街なのであった。数十万のモンスター軍に襲われる前は。

「どう？　なんか見える？」

「いや、静かなもんだな。不気味なくらいだ」

飛鳥とガルドはキャリーの南門近くの森に隠れている。東の空に昇った太陽は、ようやく森の梢の上にその黄色い顔を覗かせている。奇跡的に無事だった飛鳥の麻袋と意図的に安全なところに隠して

おいたガルドの麻袋を回収、正確にはガルドに持って来させ、カルラの墜落地点から移動を開始したのは約四時間前。疲労困憊の重い身体を引きずるようにして、二人はここまでやってきた。街道脇で小一時間ほど休みはしたが、いつ野生モンスターやモンスター軍の生き残りに襲われるかわからない状況では、ゆっくり休憩もできない。正直飛鳥もガルドも朝まで爆睡したかったが、ここはファンタジアなのだ。惰眠イコール死の世界。休みたければ作戦を遂行するしかないのである。

もともと門扉などのないキャリーの南門は封鎖されてはならず、モンスター一匹発見できない。まぶしい朝の光の中で、小鳥たちが楽しげに家々の屋根で遊んでいる。本当にここがモンスター軍の拠点なのだろうか。一瞬飛鳥の頭の中には、歴史の授業で習った“空城の計”がよぎる。

「ね、罾ってことはないよね？」

「うーん、どうだろうな……」

ガルドを連れ去ろうとしたカルラは撃墜したものの、二羽には逃げられている。明らかにこちらの方角へ逃げて行ったことを考えれば、フラット師団を側面攻撃しようとした部隊が壊滅させられたことは当然伝わっているだろう。

飛鳥にはもう一つ罾ではないかと疑う理由があった。それは先ほどの“B六七街道”で遭遇した、フラット師団への側面攻撃部隊の規模だ。

予想では数千はいると思われたが、実際どのくらいの数がいたのだろうか。飛鳥は考えた。ガルドの全体魔法によってほとんどすべてが地に飲み込まれてしまったため全体数を把握することは難しくなってしまったが、飛鳥が逃げてきた距離とモンスターたちの密集度を考えれば、とても数千の敵がいたとは思えないのだ。飛鳥が逃げ始めてからガルドを助けた地点まで約一キロメートル。仮に敵の

数を三千としてみても、たった一キロメートルほどに全部隊が収まるものなのだろうか。飛鳥には多くて一千程度にしか思えなかったのだ。

となれば残りの敵はどこに行ったのか。考えられるのはフラット師団を迎撃に“Ⅰ五街道”へ向かったか、グイン師団を攻撃するために“Ⅱ四七街道”を南西に、つまりイスペリア国境へ向かったか、キャリアに残留しているかである。

この一帯のモンスターの総数を確認できない限り、飛鳥としてはここキャリアに数千の敵がひそんでいると考えざるを得ないのだ。

「アスカ、ガルド！ 敵が東門から出て行くにや！」

元気なスピニッチは、梢に隠れて街全体を見張っていた。スピニッチの目にはまるで朝日に向かうように、整然と隊列を成して東門を出て行くモンスター部隊が見て取れた。

「数はどんくらいだ？」

ガルドが羽毛のように飛び上がる。スピニッチの隣で目を細めて遠くを見る。

「ん、三百から五百つてとこだな。明らかに増援部隊だ」

ガルドが降りて飛鳥に説明する。

「それってもしかしてチャンスじゃない？ 敵の数が減ったんだもん。それに昼間はヤツらも苦手なんですよ？」

特に今の時間帯は人間でいうところの夕方だ。一日の疲れが最も出やすい。お腹も減る。潜入するなら今がチャンスだろう。

「よし、とりあえず行ってみつか！」

ガルドは意を決して森から出る。飛鳥たちのいる森から南門までは隠れるような遮蔽物は何もない。低い雑草の生い茂る広場と、踏み固められた固い土の街道があるだけだ。

ガルドとスピニッチは低空飛行で、飛鳥は全速力で南門まで走る。飛鳥の方が速いのは言うまでもない。森から南門まで距離にして二百メートル。飛鳥は十秒足らずで走り抜ける。オリンピックの陸上競技なら間違いなく金メダルだ。

「早く！ なにもたまたしてんのよ！」

南門の横に背を預け、小声で叫ぶ飛鳥。ガルドもスピニッチも二十秒以内で到着したのだから十分速いのだが、飛鳥にしてみればのんびりと飛行しているようにしか見えない。ガルドもスピニッチも一生懸命飛んでいるのだ。

「お、お前速すぎ」

「パンツ丸見えにゃ」

「うっさい！」

キャリーにも高い建物はある。そういった場所から見張りが見ていれば、見つかったかもしれない。南門から中を覗くと、砂埃の舞う広場と、その奥に家々の並ぶ通りがまっすぐと北へ向かって伸びているのが見える。モンスターどころか猫の子一匹見られない。風に舞う何かの紙が、むなしく広場を横切っていく。

「ここほんとに敵の拠点？」

飛鳥の問いに「お手上げ」をするガルド。とりあえず誰もいらないなら入るしかないだろう。三人は門から中に入り、一応堀と建物に沿って進む。情報は現地調達とはいえ、誰もいなければ情報どころの話ではない。一応メリアでキャリーの街の地図は頭に叩き込んできていたので、予定通り街の中心にある役所に向かうことにする。ここがこの街では一番高く広い建物で、本部を設置するには適しているだろうということだ。

「きゃあ！」

路地から路地へねずみのように隠れながら進んで三十分ほどしたころ、少し先の路地で女性の悲鳴が聞こえる。飛鳥とガルドは顔を見合わせて建物の陰から覗き込む。見るとゴブリンが一体、エプロン姿の女性を後ろから羽交い絞めにしていた。

「これって情報収集のチャンス？」
「だな」

ガルドはうなずくと、音もなく飛び上がる。五メートルほどの空中を滑るように移動して、ゴブリンの真上で止まる。両手を下にしておろし、ゴブリンは白目をむいて仰向けに倒れてしまった。飛鳥とスピニッチが出て行くと、ガルドはいたずらっ子のように微笑む。

「これ俺が最初に覚えた低レベルの戦闘支援魔法なんだけど、意外と役に立つもんだな」

敵一体を眠らせる魔法で、ガルドは「ラリホーマ」だと言っていたが本来は「スリープ」という魔法らしい。

「あ、あの、ありがとうございます」

女性は見たところ二十代前半で、ガルドと同年代に見える。道に散らばったりんごのような赤い果物を藤籠に集めている。

「あんたこの街の人？」

飛鳥が果物を手渡ししながら声をかけると、女性はうなづく。

「あなた方はだれなんですか？」

見た目モンスターではないのでそれほどではないが、助けられたとはいえないきなり現れた見知らぬ人間では完全に警戒心を解くわけにはいかないのだろう。ほんの少し下がりながら、女性は怯えた表情を見せる。

「俺はイスペリアから来た。あ、こいつはフェンドルフィン。ファントジアを救ってくれて王様や女王様に召喚された勇者だよ」

「え、あ、あの有名な！」

女性の目が大きく見開かれる。女性は汚れてはいるが、きれいにしてお化粧でもしたらかなりの美人であろうことが予想できる。

「わ、わたしミライといいます。この街のレジスタンスの一員です。あの、ぜひみんなに会ってもらえませんか？」

「レジスタンス？」

ガルドと飛鳥は顔を見合わせて首をひねった。

55話：異形の影

ミライに案内され、飛鳥とガルドはレジスタンスのアジトにいた。アジトは街の地下に張り巡らされた地下水道の一角にあり、昔の管理室を改造して作られていた。学校の教室ほどもある管理室の奥には、ベッドのある仮眠室トイレ、道具類を置いておく物置などもあり、数十人は隠れられるスペースがある。物置は食料を備蓄するのに使っているらしい。

レジスタンスは全員で十名おり、うち六名は元自警団に所属する傭兵たちだ。残り四名のうち一人がミライ。後はミライの弟とキャリーの助役であった中年男性、偶然助けられた酒場のダンサーをしていた女性という構成だった。

「ミライ、こいつらはなんだ？」

飛鳥とガルドの前には、剣や槍を構えた傭兵たちが鋭い目つきをして立っている。いきなり見ず知らずの人間を連れて来られたら、警戒するのは当たり前だろう。しかし飛鳥の格好はともかく、二人ともどう見ても人間だ。ゴブリンやモッホブを連れて来たというのならまだしも、ここまで警戒されるのは二人にとって心外だ。

「ヤザン、彼らは勇者よ！ あの有名な召喚された勇者様たちよ！」

「勇者？」

警戒する目つきから怪訝な表情に変わる。ヤザンと呼ばれた男はこの中のリーダーなのだろうか、手で他の者たちを制する。

「その証拠は？」

「あんたねえ、アタシたちがブタのバケモンに見える？ どっから

どう見ても人間だろ？　なんでそんなに警戒するんだよ」

耐え切れず飛鳥が不満をぶちまける。慌ててミライがヤザンと飛鳥の間に入る。

「す、すみません！　彼らは勇者様たちがヴラドに操られてるのを疑っているんです」

「ヴラド？」

飛鳥は何となく嫌な予感がする。その言葉の響きに聞き覚えがあったのだ。ガルドは飛鳥以上に厳しい表情をしている。

「おい、もしかしてそのヴラドってのは、モンスター軍の指揮官か？」

「あ、ああ……　もしかしてあんたたち、本物の勇者様なのか？」

ヤザンの顔からようやく警戒の色が消える。鋭い視線に無精ひげ、緑色のバンダナを巻いて針金のようなグレーの短髪をしたヤザンは、レジスタンスというよりテロリストに近いイメージだ。顔つきが中東系の作りをしているので、飛鳥には余計そう感じられるのかもしれない。

「ミーがいるのが何よりの証拠にや」

ガルドの背後からスピニッチが飛び上がる。ガルドを始めとしたレジスタンスのメンバーは、目に見えて驚く。

「な、なんだこの生き物は！　モンスターか？」

羽の生えた猫はファンタジアでも珍しいのか、ヤザンはまた剣を

構える。

「にゃんだ、お前たちはミーのこと知らにゃいのか？ ミーはスピニツチ。クウエンディ女王の使い魔にゃ」

「ま、まさかあの有名な…… た、確かに羽の生えた猫だという噂は聞いた。そうか、それならば間違いはない」

ヤザンは、今度こそ間違いなく警戒を解いて深く頭を下げる。スピニツチはそんなに有名な存在なんだろうか。しかし飛鳥は今、それどころではなかった。

「とにかく信じてくれたんならいいよ。そのヴラドってヤツのこと教えてよ」

「あ、ああ」

室内の緊張した雰囲気緩和され、安堵した空気が流れる。飛鳥たちは奥にある古い木製のテーブルに案内される。同じく木製の粗末な椅子に座ると、ほどなくしてミライが温かい飲み物をトレイに乗せて持ってくる。

「ありがとう」

飛鳥はテーブルに置かれる前に取って飲み始める。とにかく昨夜以降、ようやくひと心地つけたのだ。

「んだよ、意地汚えなあ」

「うっさい！」

飲み物は現実世界でいう、ほうじ茶に近い味がした。この辺で取れる葉で作られるお茶のようだ。

「さて、まずおれたたちのことから話そうか」

ヤザンはテーブルに置かれたお茶には手をつけず、飛鳥とガルドに向かって話し始めた。

モンスター軍にこの街が襲われた時、当然のごとく自警団は前面に立って迎撃をした。しかし圧倒的な数とパワーを誇るモンスター軍によって、街はあっという間に陥落する。ゴブリンを中心としたモンスター軍は、キャリアの人々に対して容赦なかった。まず降伏を認めない。男は捕まれば殺され、女は陵辱され、最後には喰われる。子どもや老人まで無差別に殺されていく光景は、まさにこの世の地獄だったという。ヤザンたちも当然戦ったが、そこにこの街の助役をしていたサイモンが逃げてきた。サイモンは町長であるレイモンドに万が一の場合はこの町を再建して欲しいと頼まれたという。ヤザンたちは戦いながらもサイモンを守り、ここに逃げ込んだというのであった。以来約一年半、ここに潜みながらキャリアの奪還を目指して情報収集やファンタジア中央政府との連絡に尽力してきたらしい。

飛鳥とガルドは、テーブルの横に座るサイモンを見る。

「わたしは町長といっしょに役所に残りたかった。しかし町長は頑としてわたしに命じたんだ。『この街をまた以前のような活気のある街に戻して欲しい』と」

飛鳥もガルドもそのレイモンドという町長を知らなかったが、立派な人物だと思う。昔戦争中の艦長は、沈みゆく艦とその運命を共にしたという。この町長もそういった気概のある人物だったのだろう。

「逃げる直前、わたしは見ました。真っ黒い服を着て、銀色の長い髪を持つ人であって人でない異形の存在を」

「それがヴラドか」

ガルドのつぶやきにヤザンが首肯する。

「ね、ガルド。その名前聞き覚えあるんだけど、なんだっけ？」

「ヴァンパイアにゃ」

ガルドに代わってスピニッチが答える。椅子に座ったスピニッチは、テーブルの陰に隠れて姿が見えない。黒いコウモリのような羽を動かして、スピニッチは空中に浮かぶ。細い目が鋭く光り、その表情は厳しく見える。この表情をするスピニッチは本気モードだ。

「格闘が得意なアスカには最悪の相手にゃ。そして今のガルドのレベルでは、絶対に勝てない相手にゃ」

アジトである管理室の湿った空気が、さらに淀んで重く沈み込む。飛鳥はめまいを感じる。まさか吸血鬼と戦うはめになるうとは。

「聞いたことあるぜ。確かグインが言ってた。この世界のヴァンパイアには十字架もにんくも太陽の光さえも効かない。倒すにはより強い魔力が必要だって」

「じゃ、どうすればいいの？」

飛鳥の問いには誰も答えられない。答えがあれば、ヤザンたちもとつくに倒しているのだ。数で劣る人間たちが勝つには、敵の指揮官を倒せばいい。そしてそれこそが飛鳥とガルドにとって、ここに来た最終的な目的なのだ。

ここに来て飛鳥たちは行き詰まってしまった。

56話：教会

この世界に宗教はない。あるのは、自分たちやこの世界を創ったとされる神の存在を信じる気持ちだけだ。それは飛鳥やガルドのいた世界でいう宗教とはかけ離れた思想だ。どちらかといえば日本人の自然信仰に近い考えだ。日々の糧に感謝し、思いやりをもって他人に接する。無用な殺生は慎み、命に感謝して生きましようといった、ごくありふれたしかしそれだけに意義深い倫理的価値観だ。

“寺院”や“教会”といった宗教色の強い建物ほどの国にも存在し、人々はそれほど深い気持ちでそういった施設を訪れない。“寺院”は冒険者たちの修行の場という色合いが強いし、“教会”は学校や塾に近い存在である。

キヤリーに“寺院”はないが、“教会”はある。そしてそこで働いていたのは“僧侶”だった。飛鳥やガルドのいた世界でいうところの、“神父”や“牧師”に相当する。しかしそういった思想的背景から、彼らの崇め奉る存在は『キリスト』や『ブツダ』といった特定の固有名詞のある神ではなく、漠然とした“超越的・絶対的な存在としての神”である。

飛鳥とガルドにスピニツチ、そしてミライは砂埃の舞うキヤリーの路地から路地を、足早に移動している。“吸血鬼は僧侶の魔法に弱い”という、出自の定かではないあやふやな情報による可能性に賭けてのことだ。

僧侶の魔法をガルドは取得していない。そもそも取得できない。ウィザードはいわゆる魔法使いであって、僧侶とは水と油のような存在だ。魔法が使えるからといって、何でもかんでも使えるわけではないのだ。

「あそこです」

暑いと言っているくらいの強い日差しの中、白塗りの壁に青い三角屋根。てっぺんには風見鶏が回る石造りの建物がある。街の西の端にあり、レジスタンスのアジトからは直線距離で二キロメートルほど。時間にして約三十分弱のところに“教会”はあった。

「どうだ？ なにかいそうか？」

忙しく辺りを偵察するスピニツチに、ガルドが小声で呼びかける。スピニツチは五メートルほどの高さで周囲を見回しながら、首を横に振る。“教会”周辺は若干開けており、植え込みなどもある。つまり見つけやすいのである。

不思議なことに、一昨日から街の中にモンスターの姿があまり見られなくなっただけ。そして今朝増援部隊が東に向かったのを最後に、まったく言っているほどモンスターがいなくなってしまった。ミライはそれをチャンスと捉えて、風邪気味の弟のため薬と果物を探しに地上に出たところ、運悪く残っていたゴブリンに見つかり、そして飛鳥たちと出会ったのである。

数十万はいたはずのモンスターの姿が見られなくなったのは人間たちにとってはとてもいいことなのだが、逆に不気味でもある。教会は明るい日差しの中、気だるげにその全身を陽光の中に晒している。

「一気にっこう」

「それしかねえな」

飛鳥とガルドはうなずき合い、飛鳥はミライを背負う。いくら女性とはいえ、ミライは大人の女性だ。現実世界ならきつとふらついて千鳥足になるところなのだろうが、飛鳥は通学カバンよりも重さを感じない。まさに黒い一瞬の影のように、飛鳥とガルドとスピニ

ツチは教会の入り口に取りつく。

「すみません、ありがとうございます」

飛鳥の背中から降りたミライは、頬を赤らめて視線を逸らす。やはり少女と言っているほどの飛鳥に、年上の自分がおんぶされたのは恥ずかしかったのだろう。

ミライはゆっくりと教会の扉を開ける。音もなく内側へ開き、すばやくガルドが中を覗く。

「大丈夫だ。なにもいねえ」

ガルドは人差し指を軽く折り曲げる。「来い」ということだろう。中はめちやくちやに荒らされていた。

元は整然と並んでいただろう木製の長椅子は床全体に瓦礫となつて散らばっている。無事な椅子の方が少ないだろう。奥の壁の高い位置にはステンドグラスがはめ込まれてあるが、それも割れたりひびが入ったりしている。僧侶が話をする台やオルガンらしき鍵盤楽器も破壊され、見るも無残な姿に変わり果てている。

「ひどい……」

ミライは涙ぐんで両手を口に当てる。ミライは幼いころからこの教会と僧侶が大好きで、モンスターに襲われる直前まではここで働いていたという。だからといって僧侶、いわゆる“尼さん”ではないのだが、教会内部についてはレジスタンスのだれよりも詳しい。だから危険を承知で飛鳥たちについてきたのだ。

吸血鬼が僧侶の魔法に弱いという情報を言い出したのはミライだ。以前、僧侶が昔話をしてくれた時に、そういったことを聞いた覚えがあるという。しかしそれも小さいころのことで、ミライの記憶も

かなり曖昧だった。

行き詰ってしまった飛鳥たちにとっては、それでもそれにすぎしかない。少しでも可能性のあることなら、少々危険も覚悟せざるを得ない。このままヴラドと戦っても、可能性はゼロに等しいのだから。

「こつちです……」

ミライはめっちゃめっちゃになった室内をあまり見ないようにしながら、奥の方へ歩いていく。瓦礫を避けながら進んで行くと、木製の小さなドアがある。通常僧侶たちが生活している居住区画へつながるドアだ。

57話：魔法の机

ドアには獣が引つかいたような三本の爪跡が斜めについている。生々しい傷跡は白木の材質が抉れた肉のようにむき出しになっている。

「ミライさん待って、アタシが開ける」

ドアノブを握るミライの動きが止まる。先ほどのゴブリンのように、群れからはぐれたモンスターがいきなり襲ってくるかもしれないのだ。飛鳥がドアに耳をあて、中の物音を聞く。中からは特に何も聞こえない。

「大丈夫みたい。じゃ、開けるよ」

飛鳥はドアに左肩を当てて後ろのガルドとミライを見る。ガルドはいつでも魔法を発動できるように両手を腰だめにしている。ミライは不安そうに両手を胸の前で祈るように組み合わせている。スピニッチは難しい顔で腕組みをし、羽を忙しく動かして空中に浮かんでいる。

飛鳥は思い切ってドアノブを回し。肩でドアを押す。しかしドアは微動だにしなかった。

「あ、開かない！　もしかしてこれ魔法で封印されてるの？」

一同に緊張が走る。教会という特殊な場所だけに、ヴラドの手下モンスター、例えばコウモリのパケモノなどが待ち構えていても何らおかしくはないのだ。

「どけ、俺が調べてみる」

ガルドが慎重に両手をドアに当てる。しばし瞑目して口の中で小さく何かをつぶやく。一分ほどでガルドはため息をついて両手を下ろす。

「特に何も魔力は感じないな。もしかして魔法じゃなくて、呪いか何かだったりすんじゃないか？」

「ひっ！」

ミライが青白い顔で後ずさる。教会に通っていただけに、“呪い”という言葉には人一倍敏感なのだ。

「しょうがない、アタシが力づくでぶち破ってやるか」

飛鳥がファイティングポーズを取ると、ガルドとミライは一步下がる。人気のない教会内の空気が緊迫していく。

「待つにや」

すると突然、腕組みをして成り行きを見守っていたスピニッチが声を発する。

「ど、どうしたの？ なにか罠にでも気づいた？」

人外が存在であるスピニッチの超感覚は、飛鳥やガルドにはない能力を有している。そのスピニッチが何かを感じ取ったらしい。

スピニッチはゆっくりとドアに近づき、ドアノブを握る。そしてゆっくりとドアを“引く”。ドアは何の抵抗もなく開く。

「飛鳥、今はウケを狙う時じゃにやいにや」

「あ、え、えへ？」

「アゝスゝカゝ……」

ガルドの冷たい視線とミライの哀れみの視線を受けて、飛鳥はかわいく笑って見せる。

「キモいにや！」

「あ痛っ！」

スピニツチのローリングソバットを受けて飛鳥が部屋の中に飛び込む。中は僧侶たちの執務室らしく、石造りの壁以外には木製の机と椅子が乱雑に置かれているだけだった。

「まじ痛いし…… あいつマニアックな蹴り技使うようになってきたな……」

飛鳥は涙目になりながら後頭部をさする。飛鳥が顔を上げて見ると、ミライが部屋の隅にある埃をかぶった黒檀の机に近づいていく。

「この机はわたしが好きだった僧侶のレギンスさんの机です。落ち込んだわたしにいつも、この机からキャンディを出してくれました」

ミライは目を潤ませながら机の表面を撫でる。

「わたしにとってこの机は魔法の机でした。元氣と勇氣と生きる希望をくれる、レギンスさんの大切な机でした」

ミライは天板の下についている横長の引き出しを開ける。飛鳥と

ガルドは後ろから覗き込む。中にキャンディはなかったが、黒く小さな紙が何枚が入っている。

「スピニツチ、これアタシ見たことあるよ……」

正方形や長方形、十字型やS字型など、一枚一枚は手のひらに載るほどの大きさの、何の変哲もない紙切れだ。

スピニツチは細い目をさらに細めて紙切れを見る。そして確信を持って強くうなずく。

「これはテスト紙にや。そして見本でもあるにや」

「テスト？ 見本？」

ガルドが紙を摘み上げて窓に透かして見る。

「魔法や技を身に着けられるかどうか試す紙にや」

飛鳥はフェンドルフィンのレビの店で、この紙を使って技や魔法を身に着けられるか確認したのだ。

「見本っていうと、これタトウーの見本？」

飛鳥はし字型になっている黒い紙を眺める。ひっくり返してみても、何の魔法なのか書いてあったりはしない。しかしレビの店のものと同じように、裏側はシールになっているようだ。

「でも、どれがどんな魔法や技なのかわかんないと意味ないよね」

「ユイリイさんなら知ってるかもしれないません」

「ユイリイさん？」

それはレジスタンスの一人、酒場のダンサーをしていた女性だ。飛鳥たちはとりあえずあるだけの紙を持って、教会を出る。空がオレンジ色に染まり始めるころ、モンスターに遭遇することもなく無事アジトに戻った。

「あたいに何か用かい？」

ユイリイは黒いぴっちりとしたショートパンツに赤いスパンコールのついたノースリーブという姿で現れた。派手な身なりに気だるげな所作は、いかにも“その業界”で生きてきた女性という風格がある。全体的に若干細めのスタイルにくせのある肩までの黒髪をかき上げる仕草は、場末のバーのママさんといったイメージを与える。年は飛鳥の母より少し若いといった感じであろうか。お世辞にも若いとは言えない。

「あの、これ教会で見つけてきたのですが、どんな魔法かわかりますか？」

ミライがおずおずとテスト紙を一枚差し出すと、ユイリイは摘み上げて面白くもなさそうに表と裏をひっくり返して眺める。

「これは“魔除け”の魔法だね。災いを寄せ付けなくするのさ。ま、気持ちの問題だけだね」

飛鳥とガルドは顔を見合わせてうなづく。この中年女性にテスト紙を見てもらい、吸血鬼に有効な魔法が発見できたらヴラドを倒せる可能性が見えてくる。

「ねえ、ところでこれが何なの？」

ミライは事情を説明する。つまらなそうに聞いていたユイリイは、聞き終わると口の端を歪めるようにして笑う。

「なるほどね、吸血鬼をね。そうだね、この中で言うと……」

ユイリイはミライのお腕のようにした両手の中を指先でかき回す。そして一枚のテスト紙を摘み上げる。

「これだね。これはエクソシストがよく使う治療系の魔法なんだけど、取り憑いたりした邪悪な存在を追い払う魔法だよ」

「そ、それ何ていう魔法だ？」

ガルドが目を輝かせて身を乗り出す。

「あんななんだい？ ああ、もしかしてこの娘を助けた勇者様ってあんた？」

ユイリイはガルドを訝しげに見やる。

「ああ、イスペリアのウィザード、ガルドだ。そこでこいつが……」

ガルドが飛鳥を紹介しようとする、ユイリイは突然ガルドの腕を取る。

「いい男じゃないか。決めた、あんなあたいと一晩付き合いな。もしたらそのタトゥーを彫ってやるよ」

「ええっ！」

その場の全員が声を上げる。

「そ、そんなの無理！　だ、だって俺あんたに会ったの今日が初めてだし……」

「なあに、男と女が愛し合うのに時間は関係ないさ」

ユイリイはガルドを引つ張って、奥の部屋へ連れて行くとする。奥は女性用と男性用で部屋が別れており、女性はいみらいとユイリイしかない。ミライがここにいるということは、女性用の部屋には誰もいないということだ。

「ちょ、ちょっと待った！　タトゥーを彫れるヤツって他にだれもい、いないのかよ！」

焦ったガルドがミライに助けを求める。ミライは胸の前で手を組み、悲しそうに首を横に振る。

「彫り師は特殊技能を取得している方しかできません。この街の専門の彫り師はたぶんすべてモンスターたちに……」

「ほうら、言っただろ？　あたいは昔彫り師をしたことがあるんだよ。道具さえあればすぐにでもやってあげられるよ……　楽しんだ後にね」

「うええ！」

ガルドは泣きそうになりながら飛鳥とスピニツチを見る。

「生け贄にや」

スピニツチは楽しそうに肉球を叩いている。しかし飛鳥はその横で微妙な表情をしている。

「飛鳥あ！」

ユイリイは挑戦的な視線を飛鳥にちらりと投げかける。ガルドの悲痛な叫びがドアの向こうに消えていくと、飛鳥は目をつむって背中を向けた。

58話：月夜の惨劇

「アスカどこ行くにや」

「ちよつと散歩」

飛鳥はアジトを出て、薄暗い地下水道をとぼとぼ歩いていく。

「日が沈んでからは外に出ちゃダメにや、いくらモンスターが見当たらないや……」

心配そうなスピニッチを振り返りもせず、飛鳥は手を振る。腕組みをしてため息をつくスピニッチのひげが、おもしろくもなさそうに揺れた。

外は夜の帳がすっかりと落ち、青い月が寒々しい様子で空に浮かんでいる。上空は風が強いのか、細い筋雲が月の前を横切っていく。緑地の少ない街中のどこに潜んでいるのか、コオロギや鈴虫のような虫の音がそこかしこで聞こえる。

飛鳥はあてもなく路地を歩き、気がつくといつの外れまで来てしまっていた。ゴーストタウンと化しているキャリーの街並みは、寂しさというカラー一色に染め上げられている。飛鳥は心なしに寒気がして、自分の身体を両手で抱きしめる。

「うっ、寒っ」

飛鳥は音もなくジャンプし、塀の上に立つ。幅一メートルほどの石造りの塀は、長年の風雪に耐えてきたのか脆く崩れやすくなっている。塀の上を平均台のように歩く飛鳥の足下では、ぼろぼろと石くれが崩れて下に落ちていく。

目の前に見えるのこぎりのような針葉樹林の上を、黒い鳥が一羽横切っていく。飛鳥はその場に両膝を抱えるように座り、澄んだ空気の青白い世界に意識を拡散させる。

自分は何でこんな気持ちになっているのだろう。ガルドと自分は这个世界では異端な存在で、確かに同じ世界の人間として仲間意識はある。人種は違えども、ここでは同じ異世界人だ。

『俺立候補してもいいか？』

ガルドの言葉が耳に残っている。ガルドは落ち込む自分を励ますために、あんなことを言ってからだったただけだ。そう自分に言い聞かせても、沈んだ気持ちが浮き上がるわけでもない。

「はあ……」

飛鳥は本当の意味で恋愛をしたことはない。小学校低学年の時に、サッカーの上手い男の子が気になって、試合を見に行ったことはある。思えばあれが初恋だったのだろう。しかし父親の悪夢が始まり、その後飛鳥にとって男は怖く、醜い存在になっていた。男は女をセックスの対象としてしか見ない生き物だ。道を歩いていると声をかけてくる男たちの下卑た目。電車で痴漢をするオヤジ。「好きだ」と言いながらも、やることしか頭になかった過去の彼氏たち。

もちろん世の中の男すべてがそうだと思っているわけではない。実際に気になる男子が一人もいなかったわけでもない。それでもやはり飛鳥にとって男とは怖く、醜い存在なのだ。

「ガルドはあたしのことどう思ってたんだろ……」

仲間？ 元の世界に戻るために利用できる存在？ 友達？ 簡単

にやらせてくれそんな軽い女？

ぐるぐると回る思考に、飛鳥はめまいがしてくる。結局どれだけ考えても答えは出そうにもない。第一ガルドは今あの中年女を抱いている。ホストよろしく、いろいろサービスさせられているんだろう。こつちの世界に召喚されてから、ガルドがどんな生活をしているたのかわからない。あれだけ容姿が整っていたら、言い寄ってくる女の子の一人や二人は絶対にいただろう。ましてやガルドは国の期待を背負った勇者様だ。引く手数多だろう。そう考えれば胸も痛まない。ガルドは飛鳥の彼氏でもなんでもないのだ。ただの旅の仲間。目的を同じくした協力者。同じ境遇の異世界人。ただそれだけだ。

「うん」

埋めていた顔を上げ、膝に顎を載せる。ガルドが首尾よくユイリイを満足させたら言ってやろう。「お疲れさん」って。

飛鳥が立ち上がるうとすると、いきなりものすごい力で腕を引かれる。

「きゃあ！」

思わずバランスを崩して地面へ落下する。下が砂地だったためケガはしなかったが、わけもわからず仰向けに転がってしまふ。

「うへ」

視界が真っ暗になり奇妙な声が聞こえたかと思うと、重い何かが飛鳥の上のにし掛かる。月明かりに浮かんだ醜悪なブタ面は、紛れもなくゴブリンだった。

「く、くそっ！」

押し退けようとする飛鳥の両手が、強烈な力で押さえつけられる。何と飛鳥は数体のゴブリンに囲まれてしまっていた。手足に一体ずつで四体。身体の上にのし掛かっているのが一体。さらに頭の上の方で荒い息遣いが数体聞こえ、足下にも気配がする。少なくとも十体近くのゴブリンがいるようだ。

「ま、まだ おんなのこ が のこってたんだな」

「みんな しんだ と お、おもってたんだな」

「いいからだ し、してるんだな」

どこかの裸の大将のような口調で、ゴブリンたちが嘲笑う。飛鳥は全力で振りほどこうとするが、なぜか力が入らない。いや、力が入っているのだが、押さえつけるゴブリンの力の方が強い。

のし掛かっているゴブリンが臭い息を吐きかけ、飛鳥の頬を太い舌で舐め上げる。

「う、うまそうなんだな、お、おかしたら たべるんだな」

「さいきん にんげん くってないから、た、たのしみなんだな」

頬を舐める臭い舌がだんだんと下がっていく。首筋から鎖骨を舐め、胸元から胸の谷間に入り込む。飛鳥は全身に鳥肌が立つのを感じる。

「くそお！ てめえら、ぶっ殺す！」

「あはは、げ、げんきな おんなのこ なんだな」

ゴブリンの節くれだった手が飛鳥の胸をもみ始める。スーパーヒーロインボディスーツも、打撃や魔法攻撃ではないため、普通のセー

ラー服と変わりはない。ゴブリンの手が上着の裾から入り込んでくる。キャミソールなど身に着けていない飛鳥は、腹部にざらざらとしたゴブリンの皮膚を感じる。

「もう がまん できないんだな」

周囲のゴブリンたちが飛鳥のむき出しの手足に齧りつく。あれだけ無敵を誇った飛鳥の皮膚は簡単に裂け、砂地に鮮血が飛び散る。飛鳥の絶叫が、青白い月明かりに沈む街にこだました。

59話：お前ら勝手にやってる

「か、かたくて かみきれないんだな」

新鮮な果物のように鮮血を弾けさせる飛鳥の太ももを、ゴブリンは咀嚼している。飛鳥の筋肉や神経繊維の束は針金のように強靱で、ゴブリンは顎が痛くなってくる。飛鳥は涙を流しながら手足をばたつかせるが、流れ出る血液の量に比例して脱力感が増してくる。召喚されて来た時から大事に使い続けているブラの下に、ゴブリンの毛深い指が侵入してくる。胸に直接与えられる痛みは、飛鳥に否が応でも父親の悪夢を思い出させる。

飛鳥の唇は紫色になり、明らかに失血症の兆候を示し始める。最後の抵抗とばかりに張り詰めていた全身の筋肉が弛緩していく。急に柔らかくなつた飛鳥の筋肉組成に頬をほころばせ、ゴブリンが歓喜の唸り声を上げる。

「てあし が なくても お おかすことは できるんだな」

「お おらが さきに や やるんだな」

飛鳥の上にのしかかっているゴブリンが一物を取り出す。やくざの真珠入りのようにごつごつとした瘤付きのソレは、挿入されれば飛鳥の中など簡単に裂けてしまうだろう。

そそり立つゴブリンの巨根を見ると、飛鳥は無意識のうちに叫んでしまう。

「ガルド！ ガルド助けて！」

飛鳥の悲痛な叫びに、ゴブリンたちが笑い声を上げる。

「だ、だれも たすけになんか こ こないんだな」
「このまちには だ だれも いなけっ」

今にも飛鳥に挿入しようとしていたゴブリンの頭が、上下二つに分断される。目だけで笑顔を作ったゴブリンの頭の上半分が、月明かりの中放物線を描いて砂地に落ちる。残った下あごからはだらしなく舌が垂れ下がり、涎が糸を引いて飛鳥の腹部に落ちていく。

「な、なにがぎえ」
「かへ」

飛鳥を押さえつけているゴブリンたちの頭や上半身が、次々と切断されていく。それは真空の刃。そしてそれを放った人物は建物の屋上に立っている。青白い月明かりを背にした長身のその人物は、ガルドだった。

「アス力、呼んだか？」

口元だけで微笑むガルドのくすんだ金髪が夜風になびく。表情では笑っていても、ガルドの全身から立ち上る怒りのオーラは目に見えるほど殺気に満ちている。

「ガルド！」

楽になった両手で肘をついて、飛鳥はかろうじて上半身を起こす。両足の太ももは大きく裂かれ、血が大量に吹き出している。二の腕に付いた裂傷からは、赤い筋肉と白い骨まで見える。かなりの重傷だ。それを見たガルドの目から笑いが消える。

「お前ら…… アス力は何しやがった！」

黒い悪魔…… ゴ布林たちは今際の際に悪魔を見た。いきなり現れたウィザードに反撃する気力も失って、残った五体のゴ布林たちが右往左往する。その真ん中にガルドが音もなく着地する。

「肉のひとかけらも残さず殺してやる」

ガルドが悪魔の微笑みを浮かべる。その瞬間、ガルドの周囲に炎の柱が立ち上る。渦巻くように回転しながら、真つ赤な炎がゴ布林たちを焼いていく。ゴ布林たちが苦しみの叫び声を上げると、ガルドは舌打ちをする。

「うるせえな、黙って死ね」

地面を突き破って、直径三メートルはあろうかという大岩が五つ浮かび上がる。ガルドは燃え上がるゴ布林たちの真上に大岩を移動させると、勢いをつけて落とす。

「ぐぎ」

ゴ布林たちは奇妙な声を発しながら首や手足を異様な方向へ曲げてつぶされていく。岩に押しつぶされることによって、炎が消えていく。

「とどめだ」

大岩が脇に転がっていくと、横たわる五体のゴ布林の焼死体は、地面から突き出た無数の氷の柱に全身を貫かれる。

「お前らも死んだくらいじゃ許さねえ」

ガルドは最初に切り刻んだゴブリンたちを、さらに真空の刃で細切れにしていく。血肉や内臓が周囲に飛び散り、辺りは焦げくさい臭いと血臭に満たされる。

「アスカ！」

肉片と化したゴブリンたちには目もくれず、ガルドは飛鳥の元へ駆け寄って抱き上げる。

「いつつ！」

足を動かすと傷口が広がり、さらに血が噴き出してくる。ガルドは無理に起こすのをあきらめ、飛鳥をそのまま抱え上げる。いわゆるお姫様抱っこだ。

「お前なんで、こんななるまでやられたんだ？ あんなやつら指一本触れさせることねえだろ？」

「アタシにもわかんないよ、全然力が出なかったんだ。こんなの初めてだよ」

血の気を失った顔で、飛鳥は力なく笑う。それでもガルドに抱かれていることを感じると、胸の奥が温かくなってくる。

「あ、なんか大丈夫かも」

飛鳥は左腕上腕に彫つてある涙型のタトゥーに指先を当てる。キアの魔法だ。

飛鳥がタトゥーに触れた瞬間、抱き上げているガルドの腕は飛鳥の体温が急激に上がっていくのを感じ取る。

「んん……」

飛鳥は目をつぶって全身に力を込める。するとみるみるうちに傷がふさがっていく。

「おお、すげえ」

治癒系の魔法が使えないガルドは素直に感動する。ほんの数秒もすると、ガルドの腕の中の飛鳥は、傷一つないきれいな肌に戻る。月明かりに浮かび上がった飛鳥のほの白い手足は、あれほどの重傷を負っていたとは思えない。

「もう降ろしても大丈夫だよ、ごめんね重くて」

「ん、そんなことねえけど……」

微妙な笑顔を浮かべるガルドに、飛鳥は大きな目をきょとんとさせて見上げる。

「もうちょっとこのままでもいいか？」

「は？」

飛鳥の片方の眉が上がる。

「いや、一応俺って命の恩人だろ？ ご褒美っていうか役得っていいか」

「なにそれ」

飛鳥は吹き出してしまふ。苦笑するガルドを見て飛鳥は自覚してしまう。自分はガルドのことを、いつの間にか好きになってしまっ

ていたんだと。

「ガルド」

「ん？」

「ありがとう」

飛鳥は首に手を回してガルドの頭を引き寄せる。二人の唇が重なった時、遠くでふくろうのような声が一声恥ずかしそうに低く響いた。

60話：ノープロブレム

結局のところユイリイに条件を出す資格も権利もなかったのである。教会のレギンスの机から発見されたテスト紙の中で、ヴァンパイアに有効と思われる魔法。“祝福”というらしいその僧侶系の魔法は、飛鳥にしか取得できない。つまりユイリイは好むと好まざるとに関わらず、飛鳥にタトウを彫るしか選択肢は残されていないかったのである。もちろんこのままこのアジトにずっと隠れて生活していくか、モンスターたちに殺されるという選択肢もあることはあったのだが。ガルドは迫り来るユイリイを軽くかわし、すぐに部屋を出てきたという。

「街の西にジョブの店があるってヤザンに聞いてな。タトウを彫る道具を持ってくるついでに、勝手に外へ出てったお前を捜してたんだ」

アジトへ戻る道すがら、ガルドは背負っている飛鳥へそんな風に説明した。自分からキスしてしまったことに照れた飛鳥はガルドに降ろしてくれるよう頼んだが、地面へ降ろされると出血多量による貧血でふらついてしまい、結局はガルドの世話になってしまったのだ。

「スピニッチが言ってたぜ。アス力は落ち込んでたみたいだから、今モンスターに襲われたらやばいかもって」

「あいつにはお見通しだね」

飛鳥はガルドの意外とたくましい背中のため息をつく。

飛鳥はなぜ自分がゴブリンごときにやられてしまったのか、よく理解していた。今まで強がって生きてきたものの、飛鳥は本来臆病

で怖がりだ。友人に対しても好意を抱いてくれる異性に対しても、常にその裏側を考えてしまう。要は他人を信用していかないのだ。自分のことも信用してくれなくてもいいと思っていた。

飛鳥はガルドの中に自分と同じ“弱さ”を感じていた。辛い過去による負い目。他人とは違うという劣等感。周囲に心の拠り所を求めてしまいがゆえに、裏切られた時の虚脱感は一倍感大きい。そんなことを繰り返してきた飛鳥にとって、自分と同じような境遇を持ち、それでも飛鳥に心を開いてくれる同じ異世界人であるガルドに好意を持つてしまうことはごく自然なことのように思える。

それが飛鳥には自覚できるだけに恥ずかしい。そして怖いのだ。また裏切られるのではないか。どうせまた身体が目的なのではないかと。そういった不安や負い目が、飛鳥のパワーを抑え込んでしまったのだろう。

「あのねガルド、聞いてくれる？」
「なんだ？」

止んでいた虫の音が戻り、静かな街に青白い月明かりが降り注いでいる。

「ドメスティックバイオレンスって知ってる？」
「……知ってるよ。アメリカでも今問題になってる」
「あたしね？ 父親に犯されたんだ……」

飛鳥はガルドに過去をすべて語った。この世界に来てレビ以来二人目だ。飛鳥は誰かに過去を語るたびに心が軽くなる気がする。

ガルドは茶化したりすることもなく真剣に聞いた。そして一言飛鳥にこう言った。

「ノープロブレム」

ガルドはその一言ですべてをまとめてしまった。「辛かったな」や「たいへんだったな」など一言も言わない。「問題なし」。結局は飛鳥の問題は飛鳥自身が乗り越えねばならず、ガルドにはどうすることもできない。中途半端な同情や憐憫は、飛鳥に対して失礼だ。「自分はすべて受け入れる」。ガルドはそう言ったのだ。

「ガルド、ありがとね」

「ノープロBLEM」

飛鳥は変に考え込んでしまった自分を恥ずかしく思い、ガルドの背中に強くしがみつく。自分のことをちゃんと認めてくれる人のいる喜び。この世界に来て、飛鳥は不思議な感覚に捉われていた。元の世界にいた時よりも明らかに心が開放されている。思えばこっちの世界にきてからよく笑うようになった。あっちの世界では笑い方なんて半分忘れかけていたのに。

ガルドと飛鳥は何かおかしいのかもわからず、忍び笑いを続けながらアジトへと戻った。

「あたいの付け入る隙はなかったみたいだね」

ユイリイはすっかりした笑顔で飛鳥たちを迎えてくれた。元々そんなにガルドに執着していたわけではないらしい。ケツの青い小娘をからかってやるうかと思っただけのようだ。実際その通りだったので、飛鳥は何も言えず、素直に頭を下げた。

「ユイリイさん、よろしくお願いします」

「へっ、しっかりがんばって、ヴラドとかいうヴァンパイアぶっ倒してきなよ」

一時間ほどでタワーは彫られ、飛鳥の左の二の腕にはキリスト教信者よろしく、十字架のマークがつけられていた。

今までの疲れが出たのか、タワーを彫られながら管理室の椅子でうとうととしてしまった飛鳥は、彫り終わったらすぐに寝室に入って寝てしまった。ガルドは飛鳥をアジトへ連れ戻したと同時にさっさと寝てしまっている。ガルドと飛鳥がアジトへ戻って来た時スピニッチはいなかったが、どうせクウェンディ女王への定時連絡にも行っているのだろうと思い、気にもしなかった。

しかし翌朝、血相を変えたスピニッチがアジトへ飛び込んできて、事態は急展開を迎える。

「ミ、ミライは戻って来たかにゃ！」

「ん…… な、なあに？」

寝ぼけ眼に勃発頭の飛鳥が下着姿でベッドに起き上がる。室内を見回すと、ユイリイは奥のベッドで寝ているものの、ミライの姿はない。そういえば昨晚ガルドと戻って来てから一度も見かけていない。

「こ、これ見るにゃ、外に落ちてたにゃ！」

スピニッチは一枚の紙を握っている。見たこともない紋様が並んでいて、飛鳥にはちつとも意味がわからない。

「これ何語？」

「おんにゃは預かった。勇者は今晚月が真上に来る時刻、役所へ来い。ヴラド」

スピニッチが読み上げると、飛鳥の頭は完全に目が覚めた。

61話：姉の誓い

疑問はいくらでも出てくる。なぜ勇者がここにいとわかつたのか。なぜミライは殺されずに連れ去られたのか。そしてなぜ呼び出すのか。身支度を整えた飛鳥は、レジスタンスの面々と管理室で洗面をつき合わせている。

「放せ！　おいらが姉ちゃんを助けるんだ！」

奥の部屋から年の頃十歳くらいの、手足の細い少年が飛び出してくる。細い腕が後方に引かれ、その手首はユイリイがしっかりと握っている。

「あんたばかかい？　あんたが行ったって殺されて終わりに決まってるんじゃないか！」

少年は薄汚れた黄土色のシャツを着て、こげ茶色のズボンを履いている。ところどころ穴が空いており、その穴以上に修繕された跡が目立つ。薄いグレーの短い髪と浅黒い肌で人種の判別が難しいが、飛鳥の世界でいうところではインド人といったところか。気の強そうな目にはうつすらと涙を浮かべ、青白い唇は怒りに震えている。ミライの弟だ。

「だって……　姉ちゃん……　ごほう！」

少年は床に両膝をついてうつむき、何度か苦しそうに咳き込む。ユイリイは力強く、それでも愛情の感じられる手つきで背中を撫でる。

「ほら、風邪も治ってないのに、助けになんか行けっこないだろ？」
「うっ……姉ちゃん」

前髪に隠れた目からは次々と透明な涙が床に落ち、黒いシミをいくつも作っていく。

「ジェミニ、お前の気持ちはよくわかるが、ここはおれたちに任せろ」

ヤザンが片膝をついて少年の肩に手を乗せる。ジェミニはミライの血のつながった本当の弟ではない。両親をモンスターに殺され、もともと天涯孤独だったミライが姉としてこの一年半面倒をみてきたのだった。

ファンタジアの綿織物の広域行商人だったミライの両親は、ミライが十歳になったばかりの頃流行の病に倒れた。後見人となったレギンスによって、ミライは教会に引き取られることになった。モンスターにここキャリアが滅ぼされる直前までは、ミライは酒場で給仕として働きながら教会の仕事を手伝っていたのだ。

あの夜……モンスターが大拳して押し寄せてきた地獄の夜、無残にも惨殺された両親にすがりつくジェミニを見つけたミライは、とっさにジェミニの家のトイレに隠れた。泣き叫ぶジェミニをしかりつけ、糞尿にまみれながら三日三晩飲まず食わず、一睡もせずジェミニを抱いて汚物にまみれたまま立ち続けた。物音がしなくなった真昼時、ジェミニといっしょに外へ出てきたミライは、街中に散乱するキャリアの人々の死骸を見ながらジェミニにこう言った。

「今日からわたしがあなたの家族になってあげる。だから絶対希望は捨てちゃダメ。これからはわたしが何があっても守ってあげるから」

その時ミライは涙も見せず、累々と横たわるかつては笑顔と活力に溢れたキャリアの人々だった肉の塊を、しっかりと見据えていたという。

「姉ちゃんはおいらをずっと守ってくれた。食べ物が無い時は、こつそり自分の取り分をおいらにくれた」

モンスターの拠点となったキャリアでは、服一枚手に入れるのも命がけだ。ミライはこまめにジェミニの服を修繕してくれたり、貴重な水で洗濯をしてくれたりもした。ミライがいなければ、ジェミニはとつくの昔にモンスターに殺されていただろう。両親と同じように。

泣き崩れるジェミニをじっと見つめていた飛鳥は、ヤザンの隣に膝をつく。

「あんたの姉ちゃんにはいろいろと世話になった。何よりあんたたちレジスタンスに合流できたのは、あんたの姉ちゃんのお陰だ。アタシはあんたとは違う世界の人間だけど、あんたの気持ちはよくわかる。だから待ってて。絶対お姉ちゃんを助け出してくるから」

「勇者様……」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになったジェミニに、飛鳥はウィンクして親指を立てる。異世界でも意味は通じるだろう。人を想う気持ちに違いはないはずだから。

「よし、グラドのところへたどり着くまでの露払いはおれたちに任せろ。その代わり親玉はあんたたち二人に任せた」

ヤザンを始め傭兵たち六人は力強くうなずく。一年半の鬱憤を晴らす時だ。飛鳥とガルドは素直にヤザンたちの好意に甘えることに

する。ゴブリンなどと戦って、貴重な体力を消耗するわけにはいかないのだ。敵はヴァンパイア。超人的な身体能力と強力な闇の魔法、そして何よりもダメージを与えられるのが飛鳥の“祝福”のみ。ガルドが防御を担当し、飛鳥が攻撃を請け負う。正々堂々戦うつもりはない。どんな卑怯な手を使ってでも倒さなければならぬ。飛鳥とガルドにとって、この世界に来て初めてのボス戦であつた。

深夜、月が中天に差し掛かる時刻。八つの影がキャリアの暗い路地を音もなく移動していく。月明かりを避け、建物の陰から陰へとすばやく移っていく。目の前にはキャリアで一番由緒正しく、巨大な建物である「キャリア街役場」がそびえ立っている。地上十階、総レンガ造りのその建物は、淀んだ空気と静かな狂気を孕み、これから起こるであろう惨劇を待ち望むかのように八つの影を睥睨していた。

62話：地獄の扉が開かれるとき

「一匹そつち行つたぞ、頼む！」

「そりゃあ！」

ヴァンパイアという有名なモンスターは、人間と同等かそれ以上に頭がいいらしい。置き手紙で飛鳥たちを呼び出したのは事実だが、そう簡単に自分のところまでたどり着かせるつもりはないようだ。その証拠に建物内に侵入した途端、次々とモンスターが襲いかかってきた。

ヴラドはミライを拉致した時点で、この街にいる人間は飛鳥たちだけではないと気づいたのかもしれない。いや、もともとレジスタンスの存在には気づいており、いつでも殺せるとあえて一年半放っておいたのかもしれない。とにかくヴラドの意図は読めないが、ミライが生きて囚われているからには何としてもヴラドのところまで行かなければならない。

「また来たぞ！」

三体のゴブリンを倒したと思ったら、狭い通路の先にある角からまた複数のゴブリンが現れる。飛鳥とガルドはヤザンに斃命されていたから緒戦には参加していない。

「おりゃあっ！」

槍を持った戦士が二人、先頭のゴブリンへ突きかかる。狭い建物内の戦闘なので、取り回しのしづらい槍は不利かと思われた。しかし幅の狭い通路だからこそ、間合いの長い槍は有効に機能している。レジスタンス側の構成は、槍二の剣四。対するモンスターは狭い建

物だけに、今のところ剣のみ。つまりレジスタンスの戦術は、ゴブリンの間合いより遠くから槍で攻撃し、その攻撃をかくぐったヤツを残りの剣を使う戦士で仕留めるという二段階の戦術だ。

飛鳥たちに手を出すなと豪語するだけあって、レジスタンスの面々はかなり強い。今まで辛酸を舐めてきたという鬱憤も、その攻撃力に拍車をかけている。特にヤザンの強さには目をみはるものがある。

ヤザンの得物は“青龍刀”と呼ばれる幅広の片刃剣だ。緩やかに湾曲した厚みのある剣は、見ただけでも相当の重量がありそうだ。実際“斬る”というより、“叩き潰す”という表現の方がぴったりだ。現実世界での飛鳥だったら、きつと重くて持ち上げることさえできないだろう。それをヤザンは縦横無尽に振り回す。手首を返し、時には指二本で軽々と扱う。低い風切り音がするとゴブリンの太い首は簡単に切断され、兜ごと頭蓋骨が破碎される。飛鳥は一番後方ではらはらしながらも、安心してレジスタンスたちの戦いを見守っている。

もう人が死ぬのは見たくなかった。自分でモンスターの命をたくさん奪っておきながらも、やはり人の死は見たくなかった。さつきまで動き、笑い、話していた人がただの肉塊になる。仲間が死ぬのはもう見たくない。例えば異世界人であろうと名前も知らない兵士だろうと。ある意味モンスターという異形の存在は、“命を奪う”という罪悪感を薄めてくれる。それでも飛鳥は苦悶の表情を浮かべ、涙や鼻水を流し、生臭い血臭を撒き散らせながら死んでいくゴブリンたちを見ると、戦うことの意味に疑問を感じてしまうのだ。

彼らは何のために戦っているのか。なぜファンタジアをこんな状態にしてまで人の命を奪わなければならないのか。殺戮の本能？従わざるを得ない命令？それとも……

「よし、これでこのフロアは制圧した。あと二フロアで終わりだな」

ヤザンは全身に返り血を浴びた姿で、全員の無事を確認する。レジスタンスの面々は、多少の切り傷はあるものの重傷者はいない。さすがとしか言えない。飛鳥とガルドは本当に一度も戦わずに、八階までできてしまったのだ。倒したゴブリンの数は百体は下らないだろう。

窓から見える月明かりは青白く澄んで、月そのものは陰になって見ることができない。そろそろ指定された時間だ。

レジスタンスと飛鳥たちは、散乱するゴブリンの死体を避けながら通路を進む。充滿する血の臭いにもすでに鼻は麻痺してしまったようで、我慢できないほどではない。灯りのない薄暗い通路を進み、上階へ上がる階段へたどり着く。戦闘において高い位置を得ることは有利だ。槍を構えた二人はモンスターの気配を警戒しながら一段ずつ昇っていく。

「まじで俺らの出番なさそうだな」

ガルドは階段を昇りながら、頭の後ろで両手を組んで余裕顔だ。

「うん、でも危なくなったらすぐに助太刀しよ」

「スケダチってなんだ？」

「手伝うってこと」

「そっか、日本語ってかつこいい言葉多いな」

ボス戦を前にガルドはのん気なことを言っている。しかしあれだけのゴブリンと戦って重傷者なしというレジスタンスの強さを見せつけられれば、このままヴラド戦も彼らに任せてしまってもいいように思えてくる。しかしやはりそう簡単にはいかなかった。

「行き止まりだ」

先頭の槍を持った二人が不安げに振り返る。階段を昇りきった先の通路は、天井の瓦礫が崩れ、行く手を塞いでいる。外壁はレンガ造りでも、この建物自体は石でできている。瓦礫をガルドの魔法で破壊しても、きつとまた新たな瓦礫に通路を塞がれるだけだろう。

「隊長、このドアから会議室を抜けて向こう側へ出られます」

レジスタンスの一人が瓦礫の手前にあるドアを指差す。九階フロアのほぼ半分を占める大会議室は、前と後ろに出入り口がある。確かに中が崩れていなければ通り抜けできるだろう。

「よし、中を見てみる」

ヤザンの指示でレジスタンスの一人がドアを開ける。木製のドアは不気味なきしむ音をさせて、手前に開いていく。中はやっぱり薄暗く、奥までは見通せない。しかしゴブリンはいないようだ。

「大丈夫です。何もいません」

確認した戦士が手招きをする。会議室の中は机や椅子が壁際に寄せられ、ひどく荒らされている。それでも通り抜けはできそうで、槍の二人を先頭にして慎重に進んでいく。会議室の中ほどまで進んだ時、先頭の二人の足が止まる。

「どうした？」

「あ、あれ……」

ヤザンが訝しげに声をかけると、槍を持った一人が前方の暗がりを目指す。そこには真紅の小さな光が六つ揺らめいている。同時に

響く、低い獣の唸り声。

「下がれ、何かいるぞ！」

この建物はキャリーの一般家屋よりも大きな造りになっている。天井の高さは三メートル近い。その天井に身体を擦りつけるようにして、奥の暗がりから巨大な何かが近づいてくる。

「こ、こいつは……」

窓から差し込む月明かりにその姿が浮かび上がる。むき出された尖った牙の群れ。真っ黒い体毛に覆われた四足の獣。鋭い爪が岩の床に当たって軽い金属音に似たリズムをゆっくりと刻む。見た目は巨大な犬だが、ただの犬とは違う。頭が三つついているのだ。飛鳥はガルドの呻きにも似た声を聞く。

「ケルベロス……」

それは“地獄の番犬”と呼ばれる伝説のモンスターだった。

63話：不意打ち

「な、なんでこんなのがここにいんのよ」

ケルベロスはゆっくりとレジスタンスたちを睥睨し、それぞれの首がそれぞれの方向に牙を剥き出している。この世のすべてを憎むがとき怒りに震えるその形相を見ると、広い会議室の温度が上がったようにも感じる。

「ガ、ガルド、あんたゲームオタクだから、こ、こういうヤツに詳しいでしょ。倒す弱点とかないの？」

飛鳥は足元に注意しながらそろそろと下がる。隣のガルドもケルベロスからは目を逸らさず、左手で飛鳥をかばうように後ずさる。

「ケルベロスはRPGゲームでもボスキャラで出てくることの多いモンスターだ。ゲームによって攻撃方法も強さも違うから何とも言えねえよ」

「広がれ！ 固まるな！ 散開しろ！」

ヤザンが鋭い声で短く必要最小限の言葉だけで指示を出す。レジスタンスは槍の二人を中心に、左右に広がっていく。ガルドは飛鳥を窓際まで下がらせ、様子を伺う。

「俺の知ってるケルベロスの設定で最強のヤツは、まず不死身なんだ。飼い主がその魂を握ってて、何をやっても再生しちゃう」
「まじ？」

うなづくガルドの横顔が青白い月明かりに照らされる。

「だから飼い主、この場合はブラドだな、を倒さない限りケルベロスは倒せない」

「えええ？　じゃどうすんの？」

ガルドは前を見据えたまま考え込む。ケルベロスは青銅を転がしたような声で咆哮し、目の前の槍を持った戦士に飛びかかる。その戦士は槍を突き出すが、ケルベロスは構わず槍ごと齧りつく。肉を食いちぎる嫌な音がして、戦士の腰から上がなくなる。それを合図にしたかのように、周囲のレジスタンスたちがケルベロスに斬りかかる。しかし左右の首が簡単には攻撃を許さない。身体は一つであるためにそれぞれの首が深追いしてくることはないが、大きさに比べてケルベロスの動きは非常に速い。見る間にもう一人のレジスタンスが左半身を食いちぎられて絶命する。次第に会議室の中にも血臭が充満してくる。

「やばいよ、ガルド。助太刀しなきゃ」

「ああ、でもこのままここで戦ってても、いずれやられるだけだな」

ガルドの言うように、もしケルベロスが不死身なら確かにここで戦っていても埒があかない。

「あんたのあのすごい魔法で倒せないの？」

飛鳥が言っているのは、B六七街道でモンスター軍を潰滅させたガルドの必殺技“アースクエイク”だ。右太ももの内側に、稲妻型のタトゥーが彫つてある。

「ばっか、ここがどこだかわかってんのか？」

「あっ」

飛鳥は口に手を当てる。ここは建物の中で地上九階だ。こんなところで地割れを起こしたら、間違いなくレジスタンスは全滅するだろう。囚われているミライも巻き込まれてしまふ。それにあの魔法はガルドにもまだうまく制御できない。ヘタをしたら街自体も壊滅させてしまふかもしれないのだ。

「ヴラドを倒せるのはお前だけだ。ここは俺が何とかするから、お前は飼い主を倒して来い」

「た、倒して来いって、ど、どうすんの？ あれじゃ先に進めるわけないじゃん！」

ケルベロスはもう一人の槍を持つ戦士に襲いかかっている。巨大な前足で踏みつけ、その爪が身体に食い込んでいる。戦士の絶叫が悲痛な叫びとなって飛鳥の心に突き刺さる。

「それに、みんなを置いて先になんて進めないよお！」

泣きそうな飛鳥の唇をガルドの唇が強引にふさぐ。

「むぐっ……」

飛鳥の目が見開かれ、目をつぶったガルドの端正な顔がその瞳に映る。唇を離すと、ガルドは窓に向けて真空の刃を放つ。

「バギっ！」

窓ガラスは簡単に碎け散り、月明かりに照らされた破片がきらめいて落ちていく。ガルドは飛鳥の腰に左腕を回し、抱き上げる。

「な、なにすんの？」

不意打ちされたキスのため、飛鳥はかなり動揺している。真っ赤な顔でされるがまだ。

「俺が飛べんの知ってるだろ？」

言うが早いか、飛鳥の身体は屋外に出ていた。足の下に何も無い恐怖。基本的に絶叫マシンなどが苦手な飛鳥は悲鳴を上げて、必死にガルドの首へしがみつく。

「く、苦しいって！」

一階分上昇し、ガルドは出てきた窓の真上の窓を同じように破壊する。階下の狂騒とは対照的に、静寂の中に破片の落ちる澄んだ音が響く。中に入るとそこは広い空間になっていた。

「アジトで見た建物の地図では、ここは多目的ホールのはずだ」

最上階は町長の執務室と秘書室、多目的ホールとそれに応接室という造りになっている。建物の南東部分になるこの部屋は、広さからして多目的ホールに間違いはなさそうだ。

「じゃ、俺はやザンたちの“スケダチ”に行ってくる。アスカ、勝てよ」

「う、うん」

ガルドは飛鳥にウィンクすると、羽毛のような身軽さで外へ出て行く。一人取り残された飛鳥は、床の下から響いてくる震動と悲鳴にびくつとしながら辺りを見回す。

「あら、あなたが勇者さん？」

突然奥の暗がりから声をかけられる。闇よりも濃い人影が、窓から斜めに差し込む月明かりに照らされる。黒装束に身を包んだその人物は、見紛う事なき吸血鬼の姿だった。

64話：再会

オールバックの漆黒の髪に白磁器のような肌。鋭く切れ長な双眼は紅く爛々と輝き、血を引いたような唇から突き出るのは二本の乱杭歯。影を固形化させたような黒装束に黒マント。細身の長身からあふれ出る殺気は、ガルドでなくても十分物理的に圧倒される。RPGゲームやファンタジー漫画などに疎い飛鳥でも知っている伝説のモンスター、ヴァンパイアである。

「あんたがヴラド？」

飛鳥はこっそりと左上腕部にある“祝福”のタトゥーに触れる。すると両の手のひらがほんのりと温かくなってくる。

「そうよ。でも意外よねえ。昨日の夜感じた魔力は、もっと強かったはずなんだけど」

ヴラドは顎の先に人差し指を当てて、小首をかしげている。その様子がCMに出てくる紅茶を気取って飲む女優のようで、飛鳥はちよつとイラツとする。

その時階下でケルベロスの咆哮が聞こえ、ヴラドの細く整えられた眉が片方だけ上がる。

「あら？ 下を感じる魔力が昨日の勇者さんね。じゃ、あなたはだれ？」

飛鳥には知りようもなかったが、この時階下ではガルドが風の魔法でケルベロスを攻撃していた。

「アタシも一応勇者らしいけど」

「そう。女の子には用はないわねえ」

ヴラドの見た目はどう見ても男だ。しかし口調は女。つまりこのヴァンパイアは……

「もしかしてお前オカマか？」

ヴラドの目つきが鋭くなる。

「あなた今言っではいけないことを言ったわね」

「え、もしかして地雷踏んだ？」

ヴラドはマントを大きく翻す。裏地の真紅で飛鳥の目の前は真っ赤に染まる。

「踏んだわよお、思いつきり！ あたしのしゃべり方はオカマじゃなくって上品なのよ！」

「ぐっ！」

鋭い爪が飛鳥を襲う。とっさに両腕でカバーするも、飛鳥の腕には大きな裂傷がつけられる。

「痛っ！」

いつの間に回りこんだのか、ヴラドは飛鳥の遙か後方の壁際に悄然と立っている。右手の爪についた飛鳥の血を長い舌でおいしそうに舐め取る。

「あら、あなた処女じゃないわね。そんな若くてかわいいのに、も

う男と遊んでるの？ 尻の軽い女勇者さんねえ」

飛鳥はこめかみで血管が「ぷちっ」と切れた気がする。今すぐタコ殴りにしてやりたいところだが、まだこのオカマ吸血鬼から聞き出さねばならないことがある。飛鳥は引きつった笑いを浮かべ、必死に自分を抑える。

「尻が軽くて悪かったわねえ。あなたみたいに上品に育てられてないもんでね」

「あら、わかる？ いやあねえ、けっこうあなた話がわかるじゃない。人間のくせに」

どうやらこの吸血鬼は、おだてに乗りやすい単純なヤツのようだ。この際なのでいい気分にかけて必要な情報をすべて聞き出してしまおうと、飛鳥は画策する。

「うん、よくわかるよ。あんたは紳士だってことね。だからきつとアタシはあんたにここで殺されるってこともわかるよ」

ヴラドは真つ赤な唇を横に広げ、乱杭歯を剥き出しにしてイヤらしい笑みを浮かべる。

「よくわかってるじゃない。勇者は作戦の邪魔にしなければならないのよねえ」

「作戦？」

飛鳥は切られた腕の傷をかばうように押さえ、こっそりとキュアの魔法をかける。傷がじんと熱くなり、ふさがっていくのがわかる。

「そうよ。あなたみたいな頭の悪い尻軽女には想像もつかない作戦

よ」

「じゃあ、最後に教えてよ。気になって安心して死ねないよ」

「そうね……」

ヴラドは小首をかしげて月明かりの差し込む窓を見る。階下では相変わらずガルドとケルベロスの戦う震動がひっきりなしに伝わってくる。飛鳥は焦る気持ちを抑え込み、媚びへつらうような笑顔を作る。

「じゃ教えてあげるわ。あなたなんでこの街に部隊がいなかったかわかる？」

「え？ あ、そういえば」

飛鳥は今気づいたように驚く振りをする。もちろんその違和感とはB六七街道で戦闘した時から感じていた。イスペリアを出国する時の情報では、モンスター軍は数万はいるはずだったのだ。しかしフラット師団の側面攻撃に向かっていたのは一千ほど。ここキャリーに至っては、ほぼも抜けの空なのだ。まさか本拠地であるキャリーを放っておいてE五街道に全部隊が向かったとは考えにくい。イスペリア方面からグイン部隊が攻め込んでくる恐れがあるのだ。

「あなた方人間は、フェンドルフィンを攻撃するためにイスペリアに陽動を仕掛けたと思ってたでしょ？」

「うん、思ってた」

これは飛鳥の本心だ。というより、イスペリア軍もフェンドルフィン軍もその前提の下に作戦を立てている。

「でも残念でした。“どっちも”陽動なのよ」

「ええっ？」

飛鳥はわけがわからなくなる。それでは本来の目的は何なのだろうか。いたずらに戦力を消耗して、何かモンスター軍に得があるのだろうか。

「さ、おしゃべりはこれくらいにしましょうか。あたしはあなたよりも、下にいる本物の勇者さんに用があるんだから」

そう言つとヴラドの双眸は妖艶に赤く輝き始める。飛鳥としてはもっと詳しく情報を手に入れたかったが、ミライのことも気にかかる。

「待って、ミライさんはどこにいるの？　せめて最後に会わせてくれてもいいでしょ？　紳士なら」

ヴラドは燃え立つような瞳で飛鳥を見据えながら、口の端を歪めて笑う。

「ああ、そうね。会わせてあげてもいいわよ」

ヴラドが指を鳴らすと、ホールの奥の暗がりがゆらりとうごめく。ゆっくりと一歩一歩確かめるようにこちらへ向かって歩いてきたのは、うつろな目をした初老の男性と変わり果てた姿のミライだった。

65話：静かなる怒り

虹彩が異様に小さく、ほとんどが白目の三白眼。生気を感じられない青白い肌に艶はなく、かさついている。半開きになった口からは粘着質な唾液が滴り落ち、乱れた黒髪は身体の動きに合わせて左右に揺れている。力なく垂れ下がった両腕には青い血管が異様に浮き出ており、それは痩せているというより干からびているといった方が適切な表現だろう。赤いチェックのロングスカートに薄汚れたエプロン姿は、間違えようもなくミライその人だった。

「ミ、ミライさん……」

飛鳥は手で口を押さえ、嗚咽が漏れないように必死で堪える。ミライの帰りを待つジェミニの顔が思い浮かび、飛鳥の中で落胆は怒りに転化される。あふれ出る怒りは、もう自分では止めようがなかった。

ミライの隣りの初老の男性は、きっと町長のレイモンドだろう。RPGやファンタジーな世界にあまり詳しくはない飛鳥にでもわかる。二人はヴラドに血を吸われたのだ。吸血鬼に血を吸われると同じ吸血鬼になると、子どもの頃読んだ本に書いてあったような気がする。しかし二人の様子は吸血鬼というよりゾンビだ。アンデットともいうらしい。“生ける屍”……つまりミライはヴラドに殺されていたのだ。

「うああああああっ！」

飛鳥の全身から真っ白い光が放出される。それは飛鳥がB六七街道で体現した“超シールド”発動の印だった。

「あらなに、怒っちゃったの？ いやねえ、気の短い尻軽女は」

血のように赤い双眼を揺らめかせ、ヴラドは右腕をひと振りする。その手には銀色に光るフルーレが握られている。

「絶対許さねえ！」

飛鳥はヴラドとの間合いを一気に詰め、そのにやけた顔面に右ストレートを叩き込む。その拳は黄色がかった淡い光に包まれている。ヴラドのにやけ顔が黒い気体となって消え去る。頭を失ったヴラドの身体は、フルーレを握ったまま突っ立っている。ヴラドの頭が消え去った状況は、キラビーを倒した時と同じだったので、飛鳥はヴラドを倒したと思い込んでしまう。気を抜いた瞬間、フルーレを持ったヴラドの右腕が見えない速さで振られる。気がついた時には、飛鳥の胸の真ん中にフルーレが突き立っている。飛鳥の視界は急速に後方へと流れ、続いて背中に強い衝撃を受ける。一瞬息が詰まって呼吸ができなくなる。喉の奥に血の味がする。どうやら壁まで吹き飛ばされたらしい。

「あらあら、その変な服、けっこう防御力高いわねえ」

頭のあった所に黒い気体が集まって、見る間にヴラドのにやけ顔が作り出される。

「な、なんで……」

飛鳥の声は痰が絡んだようにかすれている。

「あたしに物理攻撃は効かないわよん。魔法もそうとう強くないと無駄だし。つ・ま・り、あたしは『無敵』ってことね」

ヴラドは語尾に音符のつきそうな口調で、片目をつぶって人差し指を立てている。その所作が小馬鹿にしているようで、飛鳥はまたムカツとする。しかし飛鳥は怒りに全身を熱くさせながらも深呼吸する。“祝福”の魔法が効かないわけではないはず。拳にまとわせて殴っているのに効果がないのは、きっと自分の気持ちが乱れているせいだろう。

この世界において魔法とは精神の発露。想いが乱れていてはうまく発動できない。雑魚相手には多少効果はあっても、ボス級モンスターには効かない。いくら有効な魔法を手に入れていても、結局は使う者の気持ち一つなのだ。

飛鳥はガルドと共に旅をしてきたことによってそれを学んでいた。モンクである飛鳥は、基本的な魔法能力が弱い。しかも使える魔法は僧侶系の魔法のみ。激情に駆られてブチきれた聖職者なんてありえないのだ。

目をつぶって呼吸を整える飛鳥を見て、ヴラドは覚悟を決めたのだと勘違いする。

「じゃ、気持ちよく逝っちゃいなさい！」

ヴラドの紅い双眸が迫る。突き出されるフルーレの切っ先は、正確に飛鳥の眉間に向けられている。飛鳥は全身の力を抜いて、両手は身体の横にだらりと下げたままだ。フルーレが月明かりを反射して銀色にきらめき、飛鳥の頭にまっすぐと突き刺さった…… かに見えた。

「え？」

ヴラドはフルーレを持った右腕をまっすぐと突き出したまま固まる。まるで壁に突き立てたかのように微動だにしないのだ。なんと

飛鳥は右手の人差し指と中指の二本だけで、ヴラドのフルーレを顔の前で挟んでいる。しかもその両眼は閉じられたままだ。

「え、な、何よ、何が起きてるの？」

ヴラドの膂力は通常の人間の数倍だ。それがまったく動かせない。針金のように細いフルーレは、押しても引いても簡単に動かせるはず。それなのに左右はおろか、前後にも動かせないのだ。

飛鳥の両眼がゆっくりと開かれる。

「あんたは絶対に許せない」

広い会議室に澄んだ音が一つ響き渡る。フルーレの切っ先は、飛鳥の指によって簡単に折られてしまっていた。

「くっ……調子にぐぶう！」

フルーレを引いたヴラドの顔面に、飛鳥の鉄拳がめり込む。歯を何本も飛ばしながら、ヴラドは部屋の反対側まで吹き飛ばされる。

「げぶ、あ……な、なんであたしが殴られてんのよ……」

鼻血を大量に噴き出しながら、ヴラドはよろよろと立ち上がる。全身を淡い黄金色に染めた飛鳥が、ゆらりとヴラドの方へ歩き出す。ヴラドは生まれて初めて恐怖を感じる。

「お前はもう謝っても許さない。死ね」

飛鳥の形のよい唇が動き、死を宣告する。ヴラドは自分でも意味のわからない奇声を発しながら、淡く光る小柄な少女に向かって飛

び
か
か
っ
て
い
っ
た
。

66話：わたしを殺して

ヴラドの大きく尖った口角から、血の混じった唾液がこぼれる。飛鳥の鉄拳はヴラドのみぞおちに深々と突き刺さっている。次の瞬間ヴラドの長身は、石造りの天井へ礫されたように叩きつけられる。スローモーションのように落下し、ヴラドは四つんばいで着地する。その顔は自らの血に塗れて真っ赤に染まっている。すさまじい怒りの表情で飛鳥を睨みつけているヴラドの顎先から血が滴って、こげ茶色の床に黒いしみが点々とつけられる。

「な、なんで……」

「それはあんたがアタシを怒らせたからだよ」

冷淡に言い捨てる飛鳥。悄然と見下ろすセーラー服の美少女と、口や鼻から血を噴き出し、四つんばいで乱杭歯を剥き出す伝説のモンスターという構図はどう見てもアニメの世界で、滑稽ですらある。しかし現実ヴラドは恐怖を感じている。今まで人間にダメージを与えられたことは一度としてなかった。そしてこれからもあってはならないことだった。

「あ、あんた何者なの？」

「アタシ？ アタシは……」

問いかけに答える一瞬の隙をついて、ヴラドは飛鳥に抱きつく。万力のような力で、飛鳥の両腕ごと胴体を締め上げる。ヴラドは勝ち誇り、口を歪めて気が狂ったような笑い声を上げる。

「油断したわねえ、野蛮な女勇者さん。あなたなかなか強いから、いい下僕になりそうだわ」

ゆらゆらと身体を左右に傾けながら、アンデットと化したミライとレイモンドが飛鳥に取りつく。苦悶とも悦楽とも取れる叫び声を上げ、ミライとレイモンドは飛鳥の腕に噛み付く。

「処女じゃないのが残念だけど、若い女の子の血は格別においしいから我慢したげるわ」

ヴラドは顔を歪めて笑い、乱杭歯を飛鳥の首筋へ突き立てる。飛鳥は目をつぶり、覚悟を決めたかのようにも見える。飛鳥のその閉じられた瞼から涙が一筋頬を伝う。

「ミライさんはいい人だった。弟のジエミニはミライさんを助けるんだって泣いてたよ」

「な、なにを……」

ヴラドは口を離して飛鳥の首筋を見る。飛鳥の白く細い首にはわずかに二つのへこみが付いているだけだ。両腕に噛み付いているミライとレイモンドも、いくら顎に力を入れても血の味がしないので、やはり口を離して不思議そうに飛鳥の腕を見つめる。飛鳥の腕は首と同じように歯形にへこんでいるだけだ。

「ミライさん、せめて正気に戻ってよ。そしたらアタシ心置きなく悲しめる」

飛鳥はヴラドには目もくれず、左側にいるミライを悲しげに見つめる。ミライの濁った瞳は飛鳥のいた現実世界のドブ川のように、腐ったヘド口色をしている。

「ちょっと、どうして噛めないのよ!」

ヴラドは吼えながら何度も飛鳥の首筋へ乱杭歯を突き立てる。しかし分厚いゴムに覆われているかのように、ヴラドの牙は飛鳥の首筋へは刺さらない。

「ねえ、ミライさん……」

飛鳥の頬は涙に濡れ、月明かりを反射して光っている。するとミライの濁った瞳が揺らめく。突然頭を抱えて甲高い悲鳴を上げたかと思うと、ミライの顔に生気が戻る。

「ア…… スカ…… さん……」

「ミライさん……」

「そ、そんなバカな！」

ヴラドは飛鳥を放して飛び退く。アンデットとなった自分の下僕に理性が戻るなどありえない話だった。今までは。

「せか…… いを…… 救って…… クダ、さ…… イ」

ミライの目は元の美しい黒い瞳に戻っている。その目からは透明な美しい涙が溢れ出ている。ミライは元に戻ったわけではない。しかし“祝福”の魔法をまとった飛鳥の手に触れたことによって、一時的に理性を取り戻したのだ。

「じえ…… ミニを…… よろしく…… おねが、い…… し……
マス」

「うん、うん……」

飛鳥は溢れる涙を拭うこともせず、何度もうなずく。ミライはげ

っそりとやせ細った顔に、うつすらと微笑を浮かべる。

「ワタシ…… アナタが…… スキ、でし…… タ」
「ミライさん……」

飛鳥はミライをしつかりと抱きしめる。そして一時的に理性が戻ったのはミライだけではなかった。

「サイモンに…… アトはよ…… ろしくと……」

レイモンドが必死に口を動かして飛鳥へ最後の思いを伝えようとしている。飛鳥が振り向いてうなずこうとすると、レイモンドの首が飛ぶ。ブラドが苦々しい表情で左腕の手刀を伸ばしている。赤い爪には、レイモンドの血が滴っている。

「ご主人様に断りもなく、勝手にしゃべってんじゃないわよ」
「てめえ……」

飛鳥はミライを守るように抱きしめる。しかしミライは力なく両腕をつっぱり、飛鳥を押しつける。

「ワた…… しを、コロ…… して」
「ミライさん……」
「オねが…… イ」

ミライは次第に混濁していく意識の中、明確に理解していた。すぐに“祝福”の効果は切れ、またアンデットとなって飛鳥を襲ってしまうのだと。そうなる前に、せめて想いを寄せていた飛鳥の手で殺して欲しいと願っているのだ。

飛鳥には同性愛の気はない。しかしミライの想いは嬉しいし、最

期の願いならば叶えてあげたいとも思う。飛鳥は泣きながらミライを抱きしめる。

「ミライさん、絶対アタシが仇を討ってやる。だからゆっくり休んで」

「ア…… スカさん、あ…… りが…… ト……」

飛鳥は両腕に力を込め、ミライの首の骨を折る。湿った薪を折るようなくぐもった音がして、ミライは目をつむったまま崩れ落ちる。その顔は穏やかに微笑んでいた。

67話：バイバイ

「あらあ、あんたかわいい顔して、自分の仲間平気で殺すなんてなかなかやるじゃない」

血塗れの顔を歪めてヴラドがせせら笑う。ミライの亡骸をゆつくりと床に横たえると、飛鳥は静かに立ち上がる。身体の両脇で拳が固く握られている。

「ようやくわかったよ」

うつむいた飛鳥の小さな声が、石床に当たって弾ける。階下からはいまだにケルベロスとガルドの戦う音と震動が伝わってくる。ヴラドは飛鳥のつぶやきを聞き取ることができず、小首をかしげる。

「あんたさ、あたしを何者だって聞いたよね」

飛鳥の顔がゆつくりとヴラドに向けられる。その目は前髪に隠れて見て取れない。

「いやあだ、今さら？ あんたが何者だって関係ないわ。どうせここで死ぬんですもの」

ヴラドは明らかに強がっていた。その証拠に、切れ長の目は忙しく左右に動き、焦点が定まらない。逃げる気なのだろうか。それにしては今までも逃げるチャンスはいくらでもあったのに、逃げようとはしない。それは指揮官やヴァンパイアとしてのプライドなのだろうか。

「あたしはあんたたちを滅ぼす者だよ！」

飛鳥は瞬間的にヴラドとの間合いを詰め、鳩尾に左拳をめり込ませている。ヴラドは叫びながら、窓の間の壁に激突する。飛鳥は本気で殴っている。通常のモンスターが飛鳥のボディを食らえば、背中から内臓すべてをぶちまけて即死する。それが吹き飛ばされるだけでも、ヴラドが非凡なモンスターだということがわかる。ヴラドはうつぶせに倒れて口から血の混じった胃液を吐き出す。

「こ、こうなったら不本意だけど、魔法で攻撃するしかないわね」

口の中に入った砂を吐き出しながら、ヴラドはよろよろと立ち上がる。

「あたしの呪いの魔法を食らいなさい！」

ヴラドは翻訳こんにやくでも翻訳できない古い呪いの言葉を吐く。黒と紫の混濁した煙が発生し、飛鳥を包み込むように渦巻く。煙に巻かれて飛鳥の姿が見えなくなると、ヴラドの哄笑が響き渡る。

「生意気な小娘め、これであんたも終わりよ！ 古の呪いは確実に死をもたらす。下僕にできないのは残念だけど、思いっきり逝っちゃいなさい！」

大口を開けて笑い狂うヴラドの前に、飛鳥が手で煙を払いながら現れる。ヴラドは大口を開けたまま時間が止まる。

「なあ、これがなんだってんだよ。煙いだけじゃんか」

「ば、ば…… ばかな」

血の跡のこびりつく頬が小刻みに震え、ヴラドの目は今にも眼球が飛び出しそうなほど見開かれる。“死の呪い”に対抗手段はない。飛鳥のシールドがどれほど強固でも、魔法に対しては効果はないはずなのだ。

「けほつ、煙いし。何だかわかんないけど、もう殺していい？」

飛鳥の全身が薄い黄色に包まれている。“祝福”の魔法が全身を覆っている。しかしそれだけで死の呪いは防げない。飛鳥の精神はこの世界の常識を遥かに超えたところまで成長していた。「死ぬつもりはない」……飛鳥はそう強く決意しているに過ぎない。しかしそれがこの呪いには一番の対抗手段だったのだ。飛鳥は理屈としてそれを知っていたわけではない。精神が肉体を超越するこの世界では、精神の強さそれ自体がすべての強さの基準になっているのだ。

「ばかな……そんな人間などいるはずはない……人は……人はもつと弱く浅ましい生き物のはずだ」

「ふん……」

飛鳥は呆然とつぶやくヴラドを鼻で笑う。

「そうさ、人は弱い。ちょっとしたことで傷つき、倒れ、前に進めなくなる。アタシもそうだった。でもこの世界に来て少しわかったよ。気持ちを強く持つことの難しさとすばらしさをね」

飛鳥の右フックがヴラドの顔面に炸裂する。血の尾を引きながら、ヴラドが奥の壁に叩きつけられる。車に轢かれたカエルのような声を上げ、ヴラドは床にうつぶせに倒れる。

「そ、そんな……あ、あたしはモンスター軍の指揮官で最強のヴ

アンパイアよ。に、人間なんかに負けるはずは……」

ヴラドはよろよろと、膝をついたまま上体を起こす。もう立ち上がる力は残されていないようだ。飛鳥はトドメを刺すために走り出す。

「あたしがやられるわけがないのよお！」

ヴラドは左の手刀で、渾身の力を込めて飛鳥の足をなぎ払う。しかしそれはむなしく空を切る。飛鳥は身体を横にして空中で一回転し、左足のかかとをブラドの脳天に叩き込む。いわゆる“浴びせ蹴り”である。

短い破裂音が響き、真っ赤な血が四方に飛び散る。ヴラドの首から上はざくろのような赤い肉塊に変わり果てている。即座にヴラドの全身は金色の光に包まれ、粒子となって四散する。後には白い水滴が三粒入ったユニコナイトが一枚残されていた。

頭の上で、場違いな明るいチャイムのようなファンファーレが鳴る。飛鳥はため息を一つついて、ユニコナイトを手にとってしっかりと握り締める。

「アタシは負けない。何があっても」

飛鳥はミライの亡骸に近寄り、その手にユニコナイトを握らせる。

「ミライさん、アタシミライさんとの約束を果たしに行くよ。この世界を救う。アタシの命に懸けて」

ミライの死に顔は穏やかで、生気がない以外はまるで眠っているようだ。

「だから待ってて。ジェミニのような子が安心して暮らせる世界にする。アタシには重過ぎる荷物だけど、ミライさんもいつしよに背負ってくれるもんね」

階下での戦いは激しさを増したようだ。戦いの震動で、建物がそこかしこで崩れ始まっている。飛鳥はもう一度ミライの亡骸を振り返り、泣きそうな笑顔で小さく「バイバイ」と手を振った。

67話：バイバイ（後書き）

<「ファンタジア」の共通通貨>

ドラゴナイト（赤）（ドラゴンの血）＝約100万円

ユニコナイト（白）（ユニコーンの涙）＝約10万円

マーメイナイト（青）（マーメイドの鱗）＝約1万円

ウォームナイト（黄）（サンドウォームの体液）＝約1000円

グリズナイト（黒）（グリズリーの体毛）＝約100円

カップナイト（銅貨）＝約10円

68話：脱出

「うわっ！」

オレンジ色の松明が等間隔で揺らめく石造りの階段を半分ほど下りた踊り場で、飛鳥はいきなり目の前で小さく破裂した灰色の煙に驚く。誕生日に鳴らすクラッカーほどの少量の煙の向こうには、なぜかスピニッチが黒い羽を羽ばたかせていた。

「ア、アスカ、グイン將軍が到着したにや！」

「え？」

間抜け面をするアスカにスピニッチが状況を説明する。

イスペリアとファンタジア国境で激しい戦闘を繰り広げていたグイン師団。陽動部隊とはいえ、モンスター軍はグイン師団の三倍の数を誇っていた。その苛烈な戦闘は三日三晩続いたが、とうとう昨日の夕刻、モンスター軍は瓦解した。モンスター軍の中級指揮官で、パワーだけならゴーレムに匹敵するといわれる“ブラックグリズリー”をグインが倒したのだ。

指揮官を失った雑魚モンスターたちは一気に瓦解し、森の中へ消えていった。国境の部隊を足止めしておくという当初の目的は、グインによってその目的以上の成果を上げた。その数を約六分の一ほどに減らされたグイン師団、すでに“旅団”と呼んだ方がいぐらいの規模であったが、は、飛鳥とガルドを支援するために激闘の疲れを癒す暇もなく、まっすぐここキャリーまで進軍してきてくれたのだ。その数はモンスターの残党や野生のモンスターとの追撃戦を経て、二千を割り込んでしまっていた。

「この建物は完全に包囲してるにや、ヴラドは倒したのかにや？」

飛鳥はうなずく。スピニッチはミライの無事を確認しようとするが、飛鳥の沈んだ表情はすべてを物語っている。

「とりあえずガルドたちを脱出させるにや。後はグイン將軍に任せるにや！」

「うん、わかった！」

飛鳥は何も聞かなくてくれたスピニッチに心の中で感謝する。飛鳥はもう、こんな思いはたくさんだった。これ以上だれも傷つかないでほしい。みんな笑顔で未来を語り合える世界になってほしい。飛鳥は残りの階段を一気に飛び降りる。

その時スピニッチは見た。薄暗がりの中スーパーヒロインボディスーツを透かして、飛鳥の背中の一部が青く光っているのを。

「ア、アスカ、それ……」

しかしスピニッチの声は飛鳥の耳に届くことはなく、飛鳥はすぐ手前にある会議室のドアを蹴り破る。なんとそこは火の海だった。

「ガルド！」

火勢に押されて腕で顔を覆う。赤々と燃え盛る炎の向こうには、会議室の隅に追い込まれたヤザンと、かばうように前に立つガルドの姿があった。

「この犬畜生おおっ！」

巨大な顎に噛み砕かれるガルドの姿が脳裏によぎり、飛鳥は炎の壁を突き破って突進する。飛鳥はそのままの勢いでケルベロスのわ

き腹に体当たりをする。轟音と震動、三つの口から遠吠えのような鳴き声と炎の尾を引きながら、ケルベロスは壁に大穴を開けて建物の外へ吹き飛ばされる。

「アスカ、サンキュ！」

ガルドはレジスタンスのものであるう血をべったりと頬につけ、くすんだ金髪は煤でところどころ黒くなっている。ヤザンはケルベロスに噛まれたのか、左大腿部から大量に出血している。持っていた青龍刀は半ばから折れ、足元に転がっている。まさに間一髪だったようだ。

壁に開けられた大穴によって、今まで飛鳥のいた上階が音を立てて崩れ落ちてくる。火の手も周囲に迫り、脱出するにはケルベロスの開けた大穴から外へ飛び出すしかない。

「ガルド、ヤザンさんをお願い！」

熱風が渦巻き、飛鳥の髪が逆立っている。ここは地上九階の高さだ。飛べるのはガルドとスピニッチだけ。しかもガルドの抱えられるのは人間一人が限度。スピニッチは問題外。そうなれば怪我をしているヤザンを抱えるのが当然の選択だ。

「つて、アスカ…… お前はどうすんだよ！」

「跳ぶに決まってるじゃん！ 早く！」

天井の石材が次々と落下してくる。もう建物の崩壊は目前だ。

「アスカ、死ぬなよ！」

ガルドは意識が朦朧としているヤザンを背負い、星空の下へと飛

び出す。飛鳥も後に続き、外へ飛び出した。

耳元を風が通り過ぎる。炎と建物の崩れる轟音が背後に遠のく。飛鳥の眼前には一面の星空と灯りの一つも点いていないキャリーの町並みが広がる。淀んだ空気に血臭、猛火による息苦しさから一転、清涼な大気が肺胞を満たす。直後、飛鳥の身体は真つ逆さまに地面へ向けて落下していた。

「アスカア〜！」

ガルドの声が後方へ遠ざかっていく。頭の重みで天地がひっくり返る。もはや風切り音しか聞こえない。遙か下方に見えた石畳が急速に眼前に迫る。今まで体験したことなどない自由落下の不快感に、飛鳥は一瞬意識が遠のく。その時耳を満たす風切り音に混じって、誰かの声が聞こえる。

『アスカさん、わたしの分まで生きてください』

「うああああああっ！」

覚醒した飛鳥は、絶叫と共に身体を反転させる。同時に足下に強烈な衝撃が伝わってくる。飛鳥は全身の力を振り絞って衝撃に耐える。飛鳥は半径三メートルほどのクレーターの中心に片膝をついていた。

「おおおっ！」

突如として空から降ってきた異様ないでたちの少女に、建物を包囲していたグイン師団の兵士たちから驚愕の声が上がる。兵士たちにはまるで、星が降ってきたかのような錯覚を覚えさせた。

68話：脱出（後書き）

<「ファンタジア」における部隊編成>

小隊：10人 中隊：30人 大隊：60人 連隊：120人

旅団：1,200人 師団：12,000人 軍団：120,000人

69話：行け！ タイガーマスク

次第に大きくなってくる轟音と震動は、兵士たちを戸惑わせる。イスペリア独特の中東風の甲冑に身を包んだ兵士たちは、口々に夜空を指差しながら後ずさっていく。

「つつ…… ってえ……」

衝撃をともに食らった膝に鈍痛を覚えながらも、飛鳥はゆっくりと立ち上がる。

「崩れるぞ、逃げろ！」

イスペリア兵が大声で飛鳥へ警告する。

「え、あ？」

飛鳥が慌てて頭上を見渡すと、星明りを次々と飲み込みながら一つ一つが飛鳥の三倍はあろうかという瓦礫が降ってくる。

「うわわあゝ！」

膝の痛みも忘れて、飛鳥は走り出す。今まで飛鳥のいたクレーターに次々と瓦礫が落下する。飛鳥は一つ瓦礫が落ちるたびに、その震動で空中へ跳ね上げられる。転がったり四つんばいになったりして、数十メートルを一気に逃げる。積み上げた積み木が崩れるように、今まで飛鳥のいた建物は瓦礫の山と化す。ミライやレイモンド、レジスタンスの遺体を抱いたまま。

飛鳥は埃を払って立ち上がり、白煙をあげる瓦礫の山を見上げる。

折りしも夜明けの白光が東門の向こうから差し、瓦礫の山を白々と染め上げる。

「ミライさん、助けてくれてありがと。約束は絶対守るからね。だから弱いアタシだけど、見守っててね」

小さくつぶやくと頭上から声がかかる。

「おおーい、アスカあ！」

ヤザンを抱えたガルドとその脇を飛ぶスピニッチが、白みかけた空を降りてくる。飛鳥は朝日に目を細めながら大きく手を振る。飛鳥は今、心から生きていることを喜んだ。それはこの世界に来て初めて感じた“生”の喜びだ。死にかけたからではない。一つの“生”を背負ったからだ。ミライに託された彼女の“生”を。

「無事でよかったぜ。それにしてもお前すげえなあ」

ガルドは意識を失っているヤザンをグイン師団の救護兵に引き渡しながら目を輝かせる。魔法で飛行できるならともかく、あの高さから飛び降りて平気な人間など現実世界はもちろん、この世界にもいやしないのだ。

「一瞬ヤバかったけどね。ミライさんに……」

飛鳥の表情に一瞬翳が差す。ガルドとスピニッチの表情が引き締まる。

「ミライさんに『わたしの分まで生きて』って言われちゃったからね。簡単に死ねない身体になっちゃったよ」

「へへっ、そりゃたいへんだ」

ガルドはいたずらっ子のように鼻を擦る。スピニッチは腕組みをして何度も強くうなずく。突然和む三人の右下方の広場から、兵士たちのどよめきが起こる。顔を見合わせた飛鳥とガルドは弾かれたように走り出し、スピニッチは飛んで行く。飛鳥たちのいる広場から一段低くなった広場では、なんとケルベロスが暴れまわっていた。

「離れる、コイツはわたしが倒す！」

黒い甲冑に身を包んだグインが一步前へ進み出る。三つの首で周囲の兵士たちを威嚇していたケルベロスは、強烈な殺気を放つグインに真つ赤な双眸を向ける。兵士たちはケルベロスから数メートル離れて包囲網を作る。槍や剣でケルベロスを威嚇するも、その巨大さと凶暴さに腰が引けている。

「どうやらこの世界の伝承で、ケルベロスは地獄の番犬として恐れられている存在みたいだ」

ガルドは腕組みをして目を輝かせながら見下ろしている。それはこれから面白いショーが始まるのを待っている観客の顔だ。

「ちょっとガルド、そんなのんびりしてていいの？ タイガーマス、い、いや、グイン將軍がやられちゃったらどうすんだよ！」

「まあ、見てなって。あのオッサン、ハンパねえから」
「え？」

グインは背中に大きな両刃剣を差しているが、それを構える素振りはない。

「凶悪熊の次は地獄の番犬か。今日は忙しい日だな」

血に飢えた豹の顔でグインの牙が朝日に輝く。ケルベロスは素手で立ち尽くすグインに咆哮しながら飛び掛る。グインは跳躍するとケルベロスの三つ並んだ右の首元へ着地する。

「ふん！」

何とグインは黒い剛毛に覆われた太い首に両腕を回し、そのまま捻り上げる。太い木の幹を無理矢理折ったような音が響き、ケルベロスの首の一つが血の混じった泡を吹いて力なくうなだれる。

「均等にかわいがってやらんとな」

暴れるケルベロスをものともせず、即座に反対側の首元へまたがりあつという間に首の骨を折る。とうとう真ん中の首だけになったケルベロスは気が狂ったように叫びながら飛び跳ねる。さすがのグインも振り落とされ、地面へ降り立つ。そこへ真ん中の首が涎を大量にたらしながら噛みついてくる。

「遅いわ！」

身体一つ分ほど横に移動し、飛び掛ってきたケルベロスを脇に挟む。がっちりとホールドされたケルベロスの巨体が小刻みに痙攣する。

「地獄へ帰れ、犬っころめ」

一際大きな音が響き、同時にケルベロスの身体が弛緩する。グインが腕を放すと、地響きを立ててケルベロスの巨体が地面に横たわ

る。ガルドやレジスタンスがあれほど苦労したケルベロスは、無手のグインにあっけなく倒されてしまった。

「す、すごい……」

「言っただろ？ イスペリアがモンスターに攻め込まれないのは、あのおっさんがいるからだよ」

「誰がおっさんだ」

「うわっ！」

今まで眼下の広場にいたグインが、いつの間にか飛鳥たちの前に立っている。二メートル近い巨体の割りには、飛鳥なみの移動の速さだ。

「え、あ、いや、その……」

山脈のように盛り上がった胸や腕の筋肉で首の骨を折られる想像にビビりながら、ガルドは後ずさりする。そんなガルドには目もくれず、グインは飛鳥に目礼する。

「どうやら辛い思いをなされたようだ。ケルベロスも主を亡くせばただの犬。わたしがケルベロスを倒せたのは、そなたたちの努力のお陰だ。任務達成、誠に見事であった」

「い、いや、アタシはそんな……」

飛鳥は見上げるような大男に礼を尽くされ、ガルドとは違った意味で後ずさる。

「だろ？ だろ？ やっぱり！ 俺のお陰なんだよ！」

ガルドは調子に乗ってはしゃぎ回っている。そんなガルドにため

息をつく、飛鳥はすることに気がついてはつとする。

「あ、そうだ！　グインさん、指揮官のヴラドが気になること
てたんですけど」

「ん？」

はしゃぎ回るガルドを渋い顔で睨んでいたグインは、飛鳥の言葉を聞いて色を失う。この冷静で実直な武人然としたグインが、慌てたのである。飛鳥のもたらした情報は、それほど重要なものだったのだ。

せつかく人間の手に取り戻したキャリアはグインの部下とレジスタンスの手に委ね、グインと飛鳥たちは急遽イスペリアへ帰還することになる。事態は好転したのではなく、最悪な方向へと水面下で進んでいたのである。

69話：行け！ タイガーマスク（後書き）

サブタイトルはアニメ「タイガーマスク」の主題歌ですw

70話：破滅への足音

「何という…… 何ということだ！」

イスペリア王宮内の巨大な石柱が大きな音を立て、天井から細かい砂粒が少量落ちてくる。傍らに控える従者の少年たちが、怯えながら首を竦めて身を寄せ合う。デルピエロ王が力任せに石柱を蹴りつけたのだ。頬に鋭く走る傷跡が小刻みに震え、合わせて顔の下半分に蓄えられた豊かなひげも揺れる。デルピエロ王は、怒りと屈辱に打ち震えているのだ。

「ではもうアイリスは……」

「王、あきらめられるのは早計かと」

グインの豹面は一切の感情を表さず、デルピエロ王を諫める。飛鳥のもたらしたヴラドからの情報は、デルピエロ王の命令でイスペリアが今まで取ってきた作戦行動を、すべて嘲笑うかのような印象を受けたのだ。

『フェンドルフィンもイスペリアもどちらも陽動』

ヴラドは死の間際、飛鳥にそう言い残した。この世界はファンタジアを中心とした四つの国で構成されているのは周知の事実だ。中樞国たるファンタジアがモンスターに占領されている現在、残りの三つの国がモンスターにとっては侵略の対象となるのは必定。その三つの国のうち二つへの軍事行動が陽動となれば、答えは一つしかない。三引く二は一なのである。

「アイリスは今どうなっておる！」

埃っぽい謁見室にデルピエロ王の苛立った怒声が響き渡る。斥候に当たっている兵士や情報収集部隊の隊長らは、謁見室の隅で縮こまる。

「王、アイリスの状況は現在まったくわかっておりません。偵察部隊も手前のガザの町で消息を絶ちました」

再度冷静なグインの声が響く。イスペリアとアイリスとの距離は、フェンドルフィンとの距離の約二倍。クローバー型の国の配置ではあるが、北を上にはファンタジアを中心として見ると、二等辺三角形になっている。飛鳥はフェンドルフィンからイスペリアまでほとんど不眠不休で一週間かかった。しかしイスペリアからアイリスまでは、同じように不眠不休の強行軍でも軽く十日以上はかかる。イスペリア国境から“水と魔法の国アイリス”までは二百ルキア。飛鳥の世界の度量衡に直せば、実に七百キロメートル近く離れているのだ。

「アイリスの女王ニンファドローはこの世界で一番の魔法使いだ。クウエンディ女王よりもな。さらに数こそわが国には及ばないものの、精強なるウィザード部隊もある。グインの言う通り、あきらめるのはまだ早いかもしれんな」

歩き回っていたデルピエロは、ようやく落ち着いて玉座に腰を降ろす。従者たちは安堵して胸を撫で下ろす。

「しかし王、時間がないのは事実かと」
「うむ」

肘掛けにその巨軀を預け、デルピエロは思案に耽る。片膝をつい

たまま王の剣幕に硬直していた飛鳥とガルドは、ようやく身動きできようになる。

「なあ、アイリスって国がやられそうなのが、何であんなにヤバそうなんだよ」

飛鳥は視線をデルピエロ王にロックオンしたまま、顔を傾けてガルドへ囁く。

「あのなあ、モンスター軍の立場になってよく考えてみるよ。今まで別々の三方向に注意しなきゃなんなかったのが、二方向になるんだぞ」

「あ、そっか」

飛鳥は手のひらを拳で叩く。いつ後方から攻めて来られるかわからないという状況と、片方を牽制・足止めしておけばもう片方に全力を傾けられる状況ではたいへんさがまったく違う。つまり今までファンタジアを占領しているモンスターを駆逐するチャンスだったのに、もしアイリスが滅亡させられたら人間にはほぼ勝ち目がなくなる。パーを出せなくなり、グーとチョキでジャンケンをしると言われているようなものだ。勝ち目がなくなるといふより、間違はなく勝てない。

「ガルドにアスカ」

ドスの利いた低い声でいきなり呼ばれ、飛鳥とガルドは文字通り飛び上がる。

「は、はい！」

「厳しい作戦を終えたばかりで申し訳ないが、またそなたらの力を

貸してほしい」

デルピエロ王はゆったりと玉座から立ち上がり、二人の前へ石段を降りてくる。飛鳥とガルドは怪訝な表情で顔を見合わせる。

「スピニツチは今クウェンディ女王のところだな？」

「はい、そうです」

飛鳥が戸惑いながら首肯する。スピニツチは現在までの報告とフェンドルフィンの様子を確認しに、クウェンディ女王のところへ行っているのだ。

「戻ったらスピニツチにはわしの方から詳細を説明しておく。そうしたらは我が軍に先駆けてアイリスへ向かってもらえるか？」

「え？」

現在グイン師団の残存兵力は、すべてキャリアに駐留している。ドルメンを攻略したフラット師団は、こちらへ向けて帰投中。ドルメンはフェンドルフィンのオーガス部隊が占領中らしい。つまり今イスペリアに、防衛部隊を除いて作戦行動を取れる部隊はいないのだ。

「わかりました。速やかにアイリスへ向かいます」

戸惑う飛鳥に代わって、ガルドが胸の前で拳を握る。イスペリア式の敬礼だ。

「頼む。おそらくモンスターの大部隊がアイリスには向かっておる。無理な戦闘はせず、詳細がわかり次第スピニツチに連絡してもらえ」「はっ！」

「ああ、それにな……」

立ち去ろうとする飛鳥とガルドをデルピエロ王は引き止める。しかしすぐに視線を逸らせて言い淀む。豪快にして明快な物言いをする王が初めて見せる逡巡だ。

「ガルド、そなたはわかると思うが…… 今回の作戦、“ストウーピッド”の使用を許可する」
「え……」

ガルドは彫像のように硬直する。顔色は青白く、唇は小刻みに震えている。ガルドは明らかに怯えている。いつも陽気なガルドがこんな顔をするのは初めてだ。飛鳥は身体の芯から寒気を覚えた。

70話：破滅への足音（後書き）

<「ファンタジア」の距離を表す単位>

―ルキア＝マイル＝1,609.344 m

―ヘドル＝ヤード＝0.9144 m

―アナキ＝フィート＝0.3048 m

―トイキ＝インチ＝2.54 cm

71話：ストウーピッド

「ねえ、“ストウーピッド”って確か英語で“バカ”って意味だよね？」

飛鳥とガルドは兵士たちで騒がしい王宮の食堂で夕食をとっている。今夜一晩休んだら、明朝早くにアイリスへ出立することになる。もしかしたらしばらくは簡易食料のみの生活になる。デルピエロ王の計らいで、アイリスまでの食料は十分に備えることができる。しかしこうしてきちんとした場所で食べられるのは、これで最後かもしれないのだ。

「よく知ってんな。そうだよ」

ガルドは辛いパスタに辟易しながらも、芳醇なワインで流し込むように？っ込んでいる。イケメンのくせに、食べ方は一試合終えた柔道部みたいだ。

「でもおかしくない？ 英語だったらアタシの耳にはちゃんと“バカ”って聞こえるはずだよ。翻訳こんにゃく食べてんだから」

フォークを持つガルドの手が一瞬止まる。しかしガルドはすぐに食事を再開する。飛鳥と目を合わせないのは、何か言いづらいことがある証拠だ。

「てことはさあ、“ストウーピッド”っていうのはなにかの“名前”ってことだよ。翻訳こんにゃくがなんでもかんでも翻訳しちゃったら、スピニッチの名前だって“ほうれん草”になるはずだもんね」

飛鳥は野菜サラダに載っている、ウズラの卵のような小さな卵をつつく。何の卵なのか飛鳥やガルドにはわからない。味はまさにウズラの卵なのだが。

「すると“ストウーピッド”っていうのは、バカになる薬かなんか？」

「ぶっ！」

ガルドはむせてパスタの破片を飛び散らす。胸を叩きながら、赤紫色のワインが入ったグラスを慌てて呷る。

「んなわけないだろ！」

涙目になりながら、ガルドが叫ぶ。空になったトレイを持った若い兵士が、何事かと好奇の目を向けていく。

「じゃなによ」

飛鳥はガルドを横目で睨みつけるように見やる。ガルドは泣き笑いのような表情で椅子の背もたれに背中を預ける。中空を彷徨っていたガルドの視線が手前のワインに止まり、そのまま目をつぶる。真剣な横顔は何か覚悟を決めたようにも見える。事実、深くため息をついたガルドは音を立ててフォークを皿に投げ出す。

「わかった、教えるよ。でもその前に一つ注意しておく。俺は“ストウーピッド”を使うつもりはない。王はあくまでも使用を“許可”しただけであって、“命令”したわけじゃないからな」

ガルドにしては妙にもったいぶった言い方に、飛鳥はイラついて

くる。

「あのさあ、あんたアタシを“ストウーピッド”してない？　いくらあたしでもデルピエロ王の言いたいことぐらいわかるよ。“許可する”ってことは、“使わざるを得ない状況になる”ってことですよ？」

聡明な澄んだ瞳を向ける飛鳥にガルドは息をのむ。まさに飛鳥の言う通り、これからの状況を考えるとほぼ間違いなく使わざるを得ないだろう。

「そうならないのが一番なんだがな。まあ死ぬよりマシって考えとけ」

ガルドは飛鳥に身体を向ける。畏まった表情で、飛鳥の左手を握る。

「な、なによ」

公衆の面前で彼氏に手を握られるなど、今までに何度も経験している。それでもこんな場所でいきなりされると、顔が自然に熱を持つてしまう。

「いいか、よく聞け。“ストウーピッド”っていうのは、アスカの言う通り“バカになる薬”だ」
「どういうこと？」

言葉通り受け取るほど飛鳥はバカではない。この場合の“バカになる”は“頭が悪くなる”という意味ではないはずだ。

「わかりやすく言うと、“ストウーピッド”は麻薬や覚せい剤みたいなもんだ」

「え？」

飛鳥は卵をつついていたフォークを取り落としてしまう。石造りの床に金属質の高い音がして、周囲の兵士が訝しげに振り返る。飛鳥は呆然とガルドを見つめる。まさかこの世界に召喚される前の状況と同じになってしまふなんて。

飛鳥はこの世界に来て自分自身、考え方が変わってきたように思う。よく笑うようになったし、泣くようにもなった。飛鳥自身、人間らしい感情があったんだと驚いているくらいだ。同時に、生きていくという実感も感じられるようになった。現実世界より遙かに命の危険に晒されているというのに。だからこそ、もう飛鳥は覚せい剤などに興味を覚えることはなかった。いや、もともと興味はなかった。覚せい剤に手を出そうと思ったのは、どうなってもいいという自暴自棄な気持ちからだっただけだから。

「ア、アタシそんなのヤだよ。使いたくない」

飛鳥は怯えたように首を振る。左手を握るガルドの手に力がこもる。

「さつきも言ったように、俺はお前に使わせる気はない。もちろん俺もだ。ただ現実問題、アイリスまで最低十日、長ければ十数日不眠不休で移動と戦闘を続けるのは不可能だ」

飛鳥にその効果はよくわからないが、つまり“ストウーピッド”を使うことにより常人には不可能な能力が発揮できるようになるのだろ。何日も寝なくていいとか、食べなくてもいいとか。そういった状況は、確かにアイリスへの強行軍においては十分に考えられ

ることだ。

中間地点であるファンタジア北西部最大の街ガザまでは、どんなに急いでも五日はかかる。偵察部隊が消息を絶ったことから十分に予想できるが、もしガザにキャリアのようなレジスタンスがいなかったら？ そうなれば戦闘や逃亡を続けながら、休む間もなくさらに五日近くかけてアイリスまで行かなければならない。途中モンスター部隊との戦闘を避けて迂回したりしたら、もっと日数がかかる。加えてようやく到着したアイリスがモンスターに滅ぼされていたら……

飛鳥はこの作戦がどれだけ無謀で困難なものなのか想像して身震いする。すでに食欲は失せてしまった。死ぬか麻薬中毒になるか…… どちらも避けるならば、その先に待つのはこの世界の滅亡だ。

「ちよつと一人で考えさせて」

飛鳥は行き交う兵士たちの人ごみの中へ消えて行ってしまう。ガルドはパスタの絡まったフォークを取り上げて、深く長いため息をついた。

72話：飛鳥の覚悟

「では武運を祈る」

黎明の靄がかかるイスペリア王宮前の石段にはデルピエロ王と近衛兵二名、そしてゲインがいる。この国の王と軍事面の事実上のトップが顔を揃えていることから、飛鳥とガルドに与えられた使命の困難さが伺える。まさに特攻に近い作戦であるからだ。

「生き延びることを最優先します」

ガルドは飄々と笑う。ガルドには帰りを待つ大切な母親がいる。召喚された勇者として使命を果たすことは大事だが、命を落としてしまったのでは意味がない。

「もちろんだ。必ず生き延びよ…… どんなことになるうとも」

飛鳥は無言でデルピエロ王を見つめている。厳しさの中にも労わりの感じられるデルピエロ王の瞳は、それ以上何も言うつもりはないらしい。常に他人の蔑みの視線の中で生きてきた飛鳥には、王の気持ちはよく理解できる。王として為政者としてそしてファンタジアの治世が崩壊した今、もしかしたら事実上この世界の支配者としての苦渋の選択なのだ。小を捨て大を取るのはいつの世も、どこの世界でも人の上に立つ者の宿命なのかもしれない。だからこそ飛鳥はこう言った。

「アタシは死のうが生きようが絶対この目で見てやるよ。この戦争の結末を…… この世界の行く末をね」

「アス力……」

デルピエロ王は瞠目し、言葉を失う。飛鳥は言外に「自分の命を賭してやれることはやる。だからお前はその責任を取れ」と言っているのだ。特別な存在である召喚された勇者とはいえ、これは明らかに不敬罪に当たる発言だ。しかし王は怒るところか頬の傷を震わせ、深々とお辞儀をする。異世界の人間に命運を託さざるを得ない、この世界の人間を代表して。

「軍備が整ったらいリスへはわしが直接出向く。ガルドにアスカ、水と魔法の国で相見えんことを！」

白く霞む靄の中へ消えていく二人を、デルピエロ王はいつまでも見送っていた。

“B二街道”はファンタジアでも歴史のある古い街道だ。イスベリアから北東へ向けて三時間ほど森の中の狭い道を進むと、雑草が生い茂る石畳の敷き詰められた街道に出る。幅五メートルほどの“B二街道”は、モンスターに占領される前は旅人や商人の行き交う活気溢れる街道だったらしい。

「ファンタジア北西部はガザ以外に大きな街はない。小さな村や旅人たちのための宿場町が点在しているだけだ。本来ならそんなに厳しい旅路にはならないはずなんだ」

飛鳥はガルドの説明を聞きながら、麻袋に入っているファンタジアの地図を思い浮かべる。細かい村や町の配置までは覚えていないが、ガザまではこの“B二街道”を辿って行けばいい。その先は二つの街道を経てアイリスへと至る。全行程約七百キロメートルの大旅行。普通は飛行機や新幹線で移動する距離だ。車だって途中給油しなければたどり着けないだろう。

「とりあえず夕方には最初の村にたどり着けるはずだ。野生のモンスターにさえ気をつければ、今夜はちゃんと休めるかもな」

イスペリアを出立してからろくに口を利かない飛鳥の心情を慮おもてんばかつて、ガルドは明るい声を出す。飛鳥は黙ってうなずくと梢にきらめく陽光に目を細める。ガルドは肌寒いと言って長袖のシャツを着込んでいるが、飛鳥は暑いくらいに感じている。

最初の襲撃は“B二街道”に入って三十分ほど歩いた森の中だった。左右の木陰から現れた薄茶色の毛並みと四足の獣は、見た目では狼のようだ。しかしその大きさは車一台分ほどもあり、顔の両脇だけでなく額にも血走った目がついている。涎を垂らしながら牙をむき出す様は恐ろしいことは恐ろしいが、ケルベロスに対峙した後ではかわいらしいくらいに思えてしまう。

「アス力は下がってる」

カイザーナツクルを両手に装着していた飛鳥を手で制し、ガルドが一步前へ出る。しかし飛鳥はその手を押し退ける。

「ガルド、あんたなにかっこつけてんの？ 二頭いるんだから一頭ずつ相手すんのが常識でしょ？ 先は長いんだから、あんたばかりには負担かけてらんないわよ」

「アス力……」

ウィザードのガルドとは違ってモンクの飛鳥は、体力を著しく消耗する必殺技は別にして、一度に複数のモンスターを攻撃できない。つまり複数の敵と長時間戦っていくという観点では、ガルドより飛鳥の方が不利だ。しかし飛鳥はガルドに守ってもらったつもりはない。恋愛感情などではなく、同じ異世界人として差別してほしくないの

だ。ましてやこの世界で野垂れ死んでも誰も悲しまない飛鳥と違って、ガルドには帰りを待つ人がいる。かといってこの先飛鳥が死んでしまったら、ガルドも生き延びることは厳しい状況に陥ってしまう。この作戦は飛鳥とガルドという、この世界では突出した戦闘力を持つ二人だからこそ成功の可能性が見込めるのであって、どちらか一人だけでは特攻にさえならない。まさに自殺行為だ。

「わかった。右のヤツを頼む」

ガルドもそれは十分に理解している。一応男としての見栄もあったのだ。しかし飛鳥がそこまで理解し覚悟しているのであれば、ガルドには何も言えない。せいぜい魔法しか効かないモンスターが現れた時にでもいい格好をさせてもらおうと、頭を切り替える。

「了解、さっさと倒しちゃおう」

飛鳥は右の二の腕に彫られた火の玉模様のタトゥーに触れる。牙を剥いて三つ目の狼が飛びかかってくる。

「しっ！」

飛鳥は右ストレートを、モンスターの数メートル手前でまっすぐと打ち抜く。“遠当て”が炸裂し、モンスターの背中から赤黒い内臓がぶちまけられる。

「バギっ！」

同時にガルドの放った真空の刃が、もう一頭の首をはねる。

ここに二人きりの、アイリスへの長い戦いが始まった。

73話：甘い香りに誘われて

組織だった襲撃よりも本能に任せて襲って来られる方が、迎え撃つ側としては厄介極まりない。いっどこで攻撃されるか、まったく予測できないのだ。昼夜問わず、様々なモンスターが襲いかかってくる。飛鳥とガルドはイスペリアを出立して三日三晩、ほとんど休む間もなく野生モンスターとの戦いを強いられていた。

ガザまでの行程はまだ半分も来ていない。今まで村を二つほど通り過ぎてきたが、どの村もモンスターにあふれかえっていた。とてもではないが休める状態ではなかったのだ。襲撃の合間を縫って交代で一時間ほど仮眠を取りはしたが、それは休憩と呼べる代物ではない。二人とも目の下にどす黒く隈を作り、ひっきりなしに襲ってくるモンスターとひたすら戦い続けている。

「ベギラマ！」

三メートルほどの炎の壁が、石畳の街道を塞ぐように噴き上がる。火水風土の四大元素を使った魔法は効果的ではあるが、体力の消耗は激しい。車に例えれば“燃費が悪い”のだ。しかし複数のモンスターに対してはガルドの魔法は非常に有効で、戦闘時間も短くて済む。単体のモンスターには飛鳥が対処し、複数のモンスターにはガルドが対処する。二人の間にはそういった暗黙の了解ができあがっている。

吸血コウモリの集団が次々と炎の塊となって落ちていく。炎の壁をすり抜けた数匹が、ガルドの頭上から襲いかかる。

「はっ！」

空中で回し蹴りを放ち、そのままもう一発。同時に二匹の吸血コ

ウモリが金色の粒子となって四散する。着地した飛鳥の背後にさらに二匹が迫る。瞬時に身を屈めた飛鳥の頭上を黒い影が横切る。

「えやああっ！」

両手をついて逆立ちをしながら、飛鳥は後ろ蹴りを放つ。同時に二匹が消え去る。炎の壁が消える頃には、吸血コウモリの集団は森の中へ逃げ去っていくところだった。

「行つたか」

荒い息をつきながら、ガルドが飛鳥の横に立つ。飛鳥はふらつきながら立ち上がり、目にかかった前髪をつるさそうに掻き上げる。

「ガルド、全体魔法無駄遣いし過ぎなんじゃない？」

寝不足と連戦の疲れとで体力の消耗の激しい飛鳥だったが、ガルドの消耗はそれ以上に激しそうだ。もともとふくよかではなかったが、頬骨の浮き出た横顔は見ていて痛々しい。

「先のこと考えてたら、今死んじまうさ」

事実、ファンタジアの奥深く進めば進むほど、モンスターの強さは格段に上がっている。同じモンスターでもレベルが上といったところなのだろうか。飛鳥がフェンドルフィンのメッサラ村で戦ったオーガウルフにも遭遇したが、そのスピードは段違いに速かった。

「とにかく先に進もう。あと一ルキアほどで町に出るはずだ」

村はいくら大きくても所詮村で、人口は多くても数千人ほどだ。

モンスターの大量団に襲われたら数時間で全滅させられてしまう。しかし万を超える人口を誇る町であれば、もしかしたらキャリーのように生き残っている住民がいるかもしれない。それは取りも直さず休めるということでもあるのだ。今の飛鳥とガルドに必要なのは、地面に転がっているナイトではなく、モンスターに襲われる心配のない場所なのだ。

その後二回ほど戦闘を繰り返し、飛鳥たちは木造建築の立ち並ぶイデアという町にたどり着いた。

「どう？ 誰か生き残ってる人間はいそう？」

町に入っただけの建物の陰に隠れ、通りの様子を伺うガルドに飛鳥が声をかける。イデアの町は木造の建物の並ぶ平坦な町だ。高層建築といっても宿屋や町役場といった多くの人の集まる建物くらいで、ほとんどが平屋の住宅街といった風情だ。元はガザへ向かう行商人や交易商人たちの情報交換の場として発展してきた町で、外敵に襲われることを想定して町作りをしていない。そのためモンスターに襲われた時はなすすもなく蹂躪されただろう。木造の建物の多くは半壊し、かろうじて建っている建物の壁にはモンスターの爪痕や開けられた穴が無惨な傷跡を晒している。間もなく夕刻になる時間帯のせい、吹き抜ける風が寂しそうな鳴き声を上げていく。

「人間もモンスターも見当たらない。まあ、ちよつと見たくらいで心配がわかつちまったら、生き残れやしねえけどな」

地面へべったりと座り込んでいる飛鳥へ、ガルドは自嘲気味な笑顔を向ける。最悪生き残っている人間がいなくてもいい。たった一晚でもいいから、モンスターに襲われずにすむ隠れ場所があればいいのだ。

「とりあえず無事な建物を探そう。もう日が暮れる」

西日が空を赤々と染め上げ、血ですいたような薄い雲が流れていく。生きている人間など自分たちだけかもしれないゴーストタウンに夜が訪れる。ファンタジアで見る夕日はいつも寂しさと恐怖を運んでくる。明日の朝日を見ることはできるのだろうか。飛鳥は重い腰を上げ、周囲に神経を張り巡らせながらガルドについて路地へ走り出ていった。

町の中心部は噴水広場になっていた。水を噴き上げなくなっただけで、美しく細工の施された女神像の担いだ瓶には枯れ葉が詰まっている。広場はモンスターの目につきやすい。

レベルの上がつている今の飛鳥とガルドに勝てないモンスターは、よほどの指揮官クラスではないと存在しないはずだ。それでも極度の疲労の中では雑魚モンスターとの戦いも、避けられるものなら避けて通りたい。ガルドは建物の陰に隠れるようにして広場を大きく迂回する。広場の北側には一軒の宿屋があった。そこは奇跡的に無傷で、ガラスも割れていない。扉を開けて中に入ると、そこは食堂も兼ねたロビーのようで、たくさんのテーブルや椅子がきちんと置いてある。

「ここいいんじゃない？」

飛鳥は注意深く学校の教室ほどのさほど広くはないロビーを見渡し、モンスターの痕跡を探す。しかし特に荒らされた形跡はない。

「そうだな、上に行ってみよう」

ガルドは足音を立てないように、慎重に木製の階段を上る。多少

きしむ音はするが、何かが潜んでいる様子もない。宿屋ならば寝る場所には困らない。飛鳥とガルドはようやく休めそうな場所を探し当てた安堵のため、違和感に気づかなかった。建物内には、微かに甘い匂いが充満していたのだ。

74話：熱い誘惑

飛鳥はガルドに対して好意以上の感情を持っていることを、自身認めないわけにはいかない。事実、何度かキスまでしてしまっている。しかしだからといってすぐに身体の関係まで許すかといえば、飛鳥にとつてそれは大きな壁となつて立ちはだかる。飛鳥も健康な女子である限り、そういったことに興味がないわけではない。それでも父親に受けたトラウマは大きく、いくら好意以上の感情を抱いているからといって即座に身体まで許せるとは限らない。

ガルドは確かに、飛鳥にとってこの世界で心許せる存在の一人だけれどもいまだ合流を果たせていないスピニツチや、クウエンディ女王、レビなどと違って異性であるガルドにはどうしても一歩踏み込めないでいる。飛鳥の過去を知るガルドもその辺の空気は察しており、何度も夜をいっしょに過ごしてはいるが決して飛鳥に手を出してこようとはしない。飛鳥はそのことでガルドに申し訳ないと思いつつも、感謝もしていた。

そういう事情もあるのだが、飛鳥とガルドを取り巻く状況はそんな男女の甘い感情を育むことを許してはくれない。宿屋の二階はひっそりと静まり、もうすっかり暗くなつた外の静けさを壁の内側にしまい込んでいるかのようだ。

「ここがいいんじゃない？」

ガルドの指し示したのは、裏通りに面した角部屋だった。ここならもしモンスターに襲われても窓から逃げ出せる。それに廊下の突き当たりにあるということで、何者かが近づいてきても、対処する時間が稼げる。こういう判断に対して飛鳥は、ガルドを全面的に信頼している。それなりに丈夫そうな檜の木でできたドアを開け中に入ると、部屋にはシングルベッドが一つ埃を被っている。他には物

書き用と思われる机と椅子がワンセット。壁には外套などを掛けるフックがいくつつかっているだけだ。

「じゃ、お前は先に寝ろよ。俺は飯でも食いながら見張ってるからさ」

飛鳥は無言でうなずくと、ベッドの埃を払う。砂のような埃が床へ落ちる。本来なら文句の一つでも言いたい状況だが、今までの強行軍を考えればまさに天国のような状況だ。飛鳥は早々に薄っぺらい毛布を被って潜り込む。それなりに綿の入った敷き布団は柔らかく、木の根を枕にして寝るよりは数万倍は気持ちいい。ガルドの麻袋を漁る音を子守歌に、飛鳥はあっという間に眠りに落ちていった。

「アスカ」

囁くような低い声に、飛鳥の意識が闇の底から浮き上がってくる。うつすらと瞼を開けると、ガルドの白い顔が視界に入る。室内は暗いが、窓から入る月明かりのせいかなかなり明るい。それでもランプの明かりとは違って、すべてが青白く染め上げられている。

「アスカ」

再びガルドの声が耳元で聞こえる。いつの間にかガルドの声の位置が顔の横に来ている。ガルドの体温が首元や頬に感じられ、心地よいまどろみに意識が拡散していく。ガルドの堅い頬が自分の頬に触れ、一人ではない安心感に胸が温くなる。気がつくや次の瞬間、飛鳥の唇はガルドの唇で塞がれていた。

「ん……」

こんな危険な場所だという思いと、緊張の糸が途切れた安堵感のない交ぜになった複雑な気持ちで、飛鳥はガルドに身を任せる。たくましい腕に抱かれていると、死と隣り合わせになっている今の状況も刺激的に思える。飛鳥は久々に身体の内の方で熱くなってくるのを感じる。

「ん、あ…… だめだよ、ガルド……」

口ではそういいながらも、飛鳥の腕はガルドの細いけれども筋肉質な背中に回される。ガルドは服を着ていなかった。手のひらに伝わるガルドの熱い肌と筋肉の動きが、飛鳥のリビドーをさらに刺激する。

「ガルド……」

飛鳥は不思議と拒絶する気は起きなかった。このまますべてを預けてもいい。もしかしたら自分はこの異世界で死んでしまうかもしれない。いや、ほぼ確実に死ぬだろう。だったら愛とまではいかなくても、好意以上の感情を抱いているガルドと一つになってもいいのではないか。思いを受け入れてもいいのではないか。そんな達観したような気持ちになる。

ガルドは飛鳥のそんな気持ちを汲み取ったのか、赤いスカーフを抜き取り、脇のジッパーを下げる。しかし見た目はセーラー服でも、この服は飛鳥専用のオーダーメイド防具だ。ガルドには脱がすことができない。

「アスカ、脱いでくれるか？」

切ない目で見つめられ、飛鳥は小さくうなずく。両手をセーラー服の裾にかけ、ゆっくりと脱いでいく。月明かりに飛鳥の白い肌が

浮かび上がる。飛鳥は心地よい浮遊感の中、スカートのホックを外す。紺のひだスカートを膝までずり下ろすと、ガルドは優しく引き継いでスカートを足から抜き取っていく。パステルピンクの下着姿になった飛鳥は頬を赤らめ、胸の前で腕を交差させる。寝ていても形が崩れない若い二つの隆起が、さらに深い谷間を作る。

「アスカ、きれいだよ」

ガルドも身に着けていたズボンを脱ぐ。「カルバン・クライン」と書かれた紺のボクサーパンツの前は、わかりすぎるくらい大きくなっている。ガルドはそれを飛鳥の太ももへ押しつけるように抱きついてくる。火傷しそうなくらい熱い塊を太ももに感じながら、飛鳥の中心も潤いを帯びてくる。飛鳥はもう欲しくて仕方なかった。

「ああ、ガルド！」

無我夢中で飛鳥はガルドにしがみつく。モンスターに襲われるのではないかという警戒心は霧散し、飛鳥はもうガルドしか見えない。ベッドヘッドに置いてある中身の入っていない空のガラスの小瓶が、ことりと音を立てた。

75話：オスのペルソナ

ガルドの長い指が下着の上から飛鳥の胸を揉みしだく。久しく感じていなかった刺激に、飛鳥は思わず声を漏らしてしまう。

「あ……」

か細く消え入りそうなその声も、ガルドの唇によって塞がれる。ここはモンスターに滅ぼされた町。声を出せば敵に見つかってしまう。情事の最中に襲われたら、例え相手が雑魚モンスターでも命が危ない。ガルドはそれをわかっていて飛鳥の唇を塞いだ。

しかし飛鳥はぼやけた頭で違和感を感じる。そうなのだ、危険なのだ。飛鳥よりもこの世界に精通しているガルドがそんなことに気がつかないわけがない。つまり飛鳥に声を出させないように唇を塞ぐ以前に、“こんなことをここでするはずがない”のだ。

「ん、ガルド、待って……」

飛鳥はガルドの甘い匂いのする腕の中で身動きする。

「もう我慢できないのか？」

ガルドは優しく微笑み、飛鳥の股間に手を伸ばす。熱く湿った飛鳥のソコに、長い中指を当てる。

「あ、いや！」

飛鳥はガルドを押しつけようとするが、手にはまったく力が入らない。ガルドはそんな飛鳥を優しく微笑みながら見下ろしている。

太ももに当たる固いソレが、ぴくりと反応している。

飛鳥は朦朧とする頭で必死に思考を巡らす。何かがおかしい。ガルドの優しく温かい笑顔には“想い”が感じられない。淫靡な雰囲気に関わされた頭では男前のイケメンに見えるが、冷静になってきた頭ではその顔は“やる”ことしか考えていないオスのペルソナにしか見えない。

ガルドの口の両端が奇妙に吊り上がっていく。目も細められ、黒目は縦に細く猫のようになっていく。

「気がつかれたか。しかし、どうしようもあるまい。お前はもうオレの虜だ」

半月型になった口から牙が覗く。ガルドの肩越しに、先のとがった触手のようなしっぽが揺らめいているのが見える。飛鳥は心の中で「図られた」と自分を責める。

「お前の相棒も、お楽しみの最中だ」

金縛りのように全身が麻痺して動けない飛鳥には見えないが、ベツドの脇では人の動く気配がする。どうやら本物のガルドもこいつの仲間に襲われているらしい。

「知ってるか、死の直前の快感は凄まじいぞ？　今まで感じたことのない絶頂を味わいながら死ぬがいい」

偽物のガルドは長く細い舌を伸ばして飛鳥の頬を舐める。生温かいぬめりを帯びた舌が、飛鳥の頬に透明な筋をつける。飛鳥は拳を握って全身を襲う快感に抵抗する。舌や指で触れられるだけで、全身に感電したように電流が走る。

「く……」

飛鳥は齒を食いしばって偽ガルドを睨む。しかし偽ガルドはそんな飛鳥をせせら笑い、パンティに手をかける。

「久しぶりの人間の女だ。たっぷり味わって……」

「そこまでにや！」

「ぐおっ！」

突然空中にクラッカーの弾けるような音がしたかと思うと、黒く小さな固まりが偽ガルドを突き飛ばす。飛鳥の視界には偽ガルドの代わりにスピニッチが現れる。

「アスカ、“淫魔”にや！ 気をしっかり持つにや！」

「貴様！」

偽ガルドとは違った甲高い女の声が聞こえ、青白い肌が飛鳥の視界の端を横切る。本物のガルドを襲っていたヤツだろう。

「く……」

偽ガルドが離れたために、飛鳥の全身に力が戻ってくる。まだ犯されていなかったためか、麻酔効果は薄いようだ。

「くあ…… 麻痺…… 解…… 除」

飛鳥は右手を必死に動かして、左上腕にあるギザギザ模様のタトゥーに触れる。その瞬間、飛鳥の全身が薄桃色に染まる。

「し、しまった！」

男の淫魔の声が天井近くで聞こえる。どうやら逃げ回るスピニツチを追いかけていたようだ。男の淫魔は慌てて飛鳥に覆い被さるうとする。しかし鈍い音と共に、天井へ弾き飛ばされる。ベッドの上では憤怒の形相を浮かべた飛鳥が、右足を高々と上げていた。

「あんたたちに本物の地獄を見せてあげるわ」

夜目には眩しすぎるほど、飛鳥の全身は白い光に包まれている。シールドの魔法だ。

「アスカ、ガルドが！」

天井近くを逃げ回っていたスピニツチから声がかかる。ベッドの脇を見ると、上半身裸にさせられたガルドが仰向けに倒れている。そこに青白い肌をした裸の女が爪を立てようと腕を振りかぶっている。赤い唇からは白い牙が覗き、縦長の黄色い瞳孔が殺意に燃えている。黒い先の尖った尻尾が、触手のようにうねっている。

「おらあ！」

飛鳥はベッドから前転をするように身をひねりながら飛び降り、女の淫魔に浴びせ蹴りを放つ。

「ぎゃっ！」

背中に飛鳥の強烈な踵を食らった女の淫魔は、ガルドの横の床に激しく激突する。その衝撃でガルドは気がつく。

「ん…… あれ？ 俺なに……」

「ガルド、モンスターだよ！」

下着姿でファイティングポーズを取る飛鳥に驚きながらも、ガルドは頭を一つ振ってすぐに立ち上がる。二匹の淫魔は部屋の反対側の壁際で佇んでいる。

「く…… “裏切り者”め。こうなったら力づくで殺してやる」

男の淫魔の目が黄色く爛々と輝く。その様はまるでおとぎ話に出てくる悪魔の姿そのものようだ。

「こいつら、 “サキュバス”と “インキュバス”か！」

ガルドの両手が赤く輝き出す。咆吼を上げ、二匹の淫魔は爪と牙を光らせ襲いかかってきた。

76話：驚異！ 炎のトルネードアッパー！

淫魔とは、人の精を吸い取る悪魔の眷属である。男の淫魔をインキュバス。女の淫魔はサキュバスと呼ばれる。甘い香りで幻惑し、狙った獲物を麻痺させ精を貪る。サキュバスは男の精を搾り取り、ガラスの小瓶に溜める。インキュバスはそれを使って女を孕ませ、個体を増やす。強烈な催淫能力を持ちながらも、繁殖には人間を使わなければならないのである。

淫魔に襲われた人間は苦痛を感じない。強烈な快感とともに精を吸い取られ、絶頂の後に死を迎える。死体はグールなどの食人鬼の餌となるのである。

「どりゃあっ！」

飛鳥のクロスアッパーが炸裂する。淫魔は爪と牙で獲物を引き裂き、幻惑系の魔法を使いこなす。しかし純粋な戦闘能力はヴァンパイアには遠く及ばない。覚醒した飛鳥の相手にはならなかった。風船が破裂するような音を立てて、天井に赤い花が咲く。インキュバスは飛鳥のクロスアッパー発で、トラックに轢かれたカエルのように天井につぶれる。直後、金色の粒子に変わり、青い鱗の入ったナイトが一枚床に落ちる。マーメイナイトだ。

「おりゃあ！」

ガルドの両手から炎が巻き起こる。悪魔系のモンスターには火が有効だ。サキュバスは動物のような悲鳴を上げて炎に包まれる。数千度の炎の柱に取り込まれたサキュバスは、皮膚、筋肉、内臓と順に液化化していく。我慢できないほどのきつい刺激臭と焦げた臭いが室内に充満する。

「すぐに服を着て逃げるにや！」

ガルドの放った炎は壁や机に燃え移り、乾燥していた室内はあっという間に真つ黒な煙に包まれる。飛鳥とガルドは床に散らばっていた服を手早く身に着け、それぞれの麻袋を持ってドアから廊下へと飛び出す。しかしそこには数匹のサキュバスとインキュバスが黄色い目を光らせて床はもちろん、壁や天井に張り付いていた。

「ガルド、やっちゃえ！」

「おう、ベギラマ！」

即座にガルドの両手から、太い炎の柱が廊下いっぱい広がって伸びていく。淫魔たちは金切り声を上げて逃げていく。

「突っ切るぞ、ヒヤダルコ！」

今度は両手から氷の粒を発生させ、壁に燃え移った炎の勢いを弱める。廊下は並んで走れないので、ガルドを先頭に飛鳥、スピニッチと続く。階段を下りるとまた淫魔が襲って来る。

「久しぶりの人間を逃がすか！」

階段を背にした飛鳥たちに、二匹のインキュバスと三匹のサキュバスが同時に襲いかかってくる。

「そっちの三匹は任せたよ！」

「おう！」

ガルドは両腕を下から上に振り、炎の壁を作り出す。

「ベギラマ！」

勢い余って突っ込んできたインキュバスが一匹、炎に包まれ悲鳴を上げる。

「うらあっ！」

飛鳥へは二匹のインキュバスが同時に襲いかかってくる。飛鳥は左の一匹の下に潜り込み、膝のバネを使って真上に突き上げる。インキュバスの背中が爆発し、赤黒い内臓が噴水のように噴き上がる。

「何だ、こいつ！ 本当に人間か！」

飛鳥の攻撃力に驚いたもう一匹のインキュバスが、スピニッチと同じような黒い翼を羽ばたかせて上昇する。クロスアッパーを打つには距離がある。飛鳥は即座にバック転をしながら蹴りを放つ。いわゆる“ムーンサルト”だ。

「ぐはっ！」

顎を爪先で蹴り上げられたインキュバスは、頭の上半分をスイカのように破裂させ絶命する。ふらつくこともなく着地した飛鳥の背中の一部が、スーパーヒロインボディースーツを透かして青い光を発している。

「アスカ……」

飛鳥の後ろで飛んでいたスピニッチは、その様子に気づく。そして何かに気づいたように声を出す。気になった飛鳥はスピニッチに

問いただそうとするが、ガルドの声に遮られる。

「アスカ、火の手の回りが速い！一旦、建物の外に出るぞ！」
「う、うん」

炎の壁に怯えたサキュバス二匹の首を真空の刃で落としていたガルドは、玄関扉へ向かって走り出す。飛鳥とスピニッチも慌ててガルドを追いかける。ガルドが体当たりでドアを開け、枯れた噴水のある広場に転がり出る。そこはモンスターで埋め尽くされていた。

「おわっ！こいつら！」

体長三メートルはあるかと思われる青い肌の巨体。白く濁った目に、頭髮はつるりとして一本も生えていない。大きく開けられた口には牙が並び、だらしなくよだれを垂らしている。腰にはぼろ切れを一枚巻き付けている。全身を覆う盛り上がった筋肉は、プロレスラーが子どものように思えてしまうくらい圧倒的だ。それは食人鬼“グール”の群れだった。

いきなり立ちはだかった青い筋肉の壁に、ガルドは身体が硬直してしまふ。しかし危険を察した飛鳥は即座に右腕に彫られた“トルネードアッパー”のタトゥーに触れる。

「うおおああああっ！」

手近な一体の腹部へ向けて、飛鳥はトルネードアッパーを放つ。

「ガルド、シールドを張るにゃ！」

スピニッチの鋭い声で、ガルドははっと我に返る。ガルドとスピニッチがシールドを張った瞬間、無数の真空の刃でできた竜巻が凄

まじい勢いで巻き起こる。

「うわああっ！」

思わずガルドは、両手を顔の前で交差させて身を守る。レベルの上がった飛鳥のトルネードアップーは、以前“B六七街道”で放った時とは比べ物にならない規模と破壊力であった。

広場全体に細切れにされたグールたちの肉片が、ミキサーにかけられたように渦巻く。飛鳥の作り出した竜巻は周囲までも巻き込み、建物は次々と倒壊していく。今までいた宿屋の炎も風に巻き込まれ、炎の竜巻と化す。町の中心部で巻き起こった炎の竜巻は天をも焦がし、周囲には熱に煽られた強風が吹き荒れる。建物の中に隠れていた淫魔やグールたちも次々と切り刻まれ、焼かれ、黒雲の渦巻く空へと舞い上げられていく。ガルドとスピニツチは全力でシールドを張り続け、歯を食いしばって嵐の収まるのを待っていた。

77話：必殺料理人！ その名は……

大量の炭化した木材が白煙を上げている。まるで海の大渦に攪拌されたように、同方向に折り重なっている。時折小さな破片が地面へ落ち、静寂の中にも時間が進んでいることを教えてくれる。

ガルドは頭を覆っていた腕を解き、恐る恐る顔を上げる。イデアの町は完全な廃墟と化していた。星空へ向けて無数の細い白煙が糸のように立ち上り、動くものは何もない。淫魔やグールたちの細切れになった焼け焦げた肉片が、異臭を放っている。

「アスカ？」

ガルドは視線を巡らし、広場を見る。うず高い焦げた木材の壁に囲まれた広場は、焼かれて黒くなった地面が闇の底に蓋をしている。その中央に白い人影がうつぶせに倒れている。

「アスカ！」

走り出したガルドはふらついて頭から転んでしまう。疲れが足腰にきているようだ。満足に休めないまま淫魔たちに襲われ、連続して四大元素魔法を乱発した結果だろう。

白い頬を黒い砂で汚しながら、ガルドは飛鳥を抱き起こす。身体はほんのり温かく、死んでいるわけではないことに安堵する。

「アスカ」

「ん……」

細く形のいい頼りなげな眉根が寄って、飛鳥の長い睫毛が震える。ゆつくりとまぶたを開けると、飛鳥は少しばかりの星空を映り込ま

せた大きな瞳を、くると動かし、辺りを見回す。

「ア、アタシどうしたんだっけ？」

「お前、必殺技のトルネードアッパーを撃ったんだよ。そんでこの有り様だ」

飛鳥はガルドの両肩に掴まって上半身を起こす。いまだ大渦の中にいるような周囲の様子に、当の本人が一番驚いている。

「これ、アタシがやったの？」

ガルドが微笑みながらうなずくと飛鳥もようやく事情が飲み込めたようで、口の端で笑う。

「片づけ、たいへんそうだね」

「ああ、だから怒られる前にさっさとずらかろうぜ」

二人ともほとんど力を使い果たしている。ここでまたモンスターの集団などに襲われたらひとたまりもない。とりあえずスピニッチと合流できたのは大きい。隠れられそうなところで見張っていてもえれば、少しは休めそうだ。

「ア、アスカ、わかったにや！」

スピニッチが細い縦長の夜目を光らせながら降りてくる。羽を広げて降下してくるさまからは、それなりに羽が見た目通りの機能を果たしていることがわかる。

「なにがわかったの？」

飛鳥は弱々しく顔を上げる。対照的に興奮した様子のスピニツチが口を開こうとしたその瞬間、飛鳥の背後を見たまま動きが固まる。不審に思った飛鳥は、スピニツチの視線を追って振り返る。広場の反対側、いまだ燦る建物の残骸の壁をバックに、ぼんやりとしたオレンジ色の光が揺れている。

「なにあれ」

飛鳥の問いにはだれも答えない。光は和紙に絵の具をにじませたように、輪郭がぼやけている。ゆつくりと左右に揺れるその様子から、どうやらランタンの光のように見受けられる。続いて蛍のような黄色く小さい光が二つ現れる。オレンジ色のぼやとした光の中に、緑色のつるつとした小さな頭が現れる。黄色い二つの小さな光は、どうやら目のようだ。

「ア、アイツは……」

スピニツチが震えているのがわかる。飛鳥のすぐ隣では、ガルドが身を固くして小さく「ひっ」と息を吸い込む。

ゆつくりと、だが確実に“ソイツ”は近づいて来る。身長はスピニツチよりちょっと大きいくらい。薄汚れて茶色くなったローブを着て、黄色い目以外には何もついていない緑色のつるつとした頭部。左手には揺れるランタンを持ち、右手には銀色に光る何かを持っている。

「ま、まずい……淫魔にグールときたらアイツがいるのは予測できたのに！」

ガルドはかすれた声で、絶望的なうめきを漏らす。

「アイツって…… アイツ？ ちっちゃくてかわいいモンスターじゃない」

飛鳥は指を差して鼻で笑う。しかしスピニッチとガルドの怯えようは普通ではない。飛鳥はすぐに真剣な表情に戻る。ランタンの灯りが左右に揺れ、ゆつくりと近づいてくる。右手に光るのは、どうやらナイフ状の刃物のようだ。

「アイツは…… 必殺料理人と呼ばれるモンスター、トンベリだ！」

淫魔が精を吸い取り殺す。死体はトンベリによって料理され、グールたちの餌となる。このアイデアの町では、人間はこの三種類のモンスターの食物連鎖に組み込まれていたのである。

「アイツそんなにヤバいの？」

「ああ…… アスカ、お前のレベルは今いくつだ？」

ガルドはトンベリから目を離せずにいる。ランタンの灯りが一步步づつゆつくりと近づいてくる。

「アタシ？ えっと…… たぶん二十一かな」

飛鳥は指折り数えて言う。

「俺もさっき淫魔を倒した時レベル上がったから同じ二十一だ。だつたら……」

「絶対勝てにやいにや」

飛鳥の頭のすぐ上で、押し殺したようなスピニッチの声がする。飛鳥がはっとして見上げると、スピニッチは目を糸のように細くし

てトンベリを睨みつけている。

「トンベリを倒すには最低でもレベル六十は必要にや。力を使い果たした今のアスカとガルドでは、逆立ちしても勝てる相手ではないにや」

「あ、あんなちっこいのにぞ、そんなに強いのか？」

飛鳥は驚愕して緑色のつるつとした頭を見る。どうみても『怖い』とか『強そう』とは思えない。

「まず体力がハンパねぐらいタフだ」

「ヴァンパイアを一としたら、トンベリは一万にや」
「いつ……」

飛鳥は言葉を失う。ヴラドはモンスター軍の指揮官だった。中級指揮官ではあったが、ケルベロスさえも従えるほどのモンスターだった。その一万倍の強さとは……

「それに攻撃力もハンパねえ」

「トンベリの必殺技は、『みんなのうらみ』にや」
「はあ？」

バカにしたような名前の技だ。

「ファイ。ル・ファンタジーってゲームでは、定番のモンスターだ。まさか実物が出てくるとは……」

RPGゲームの好きなガルドでさえ、出会えて喜んでるようには見えない。目の前の小さなモンスターは、つまりそれほどのモンスターなのだ。

「じゃ、逃げよう！」

ガルドの腕を引いて走り出す飛鳥。

「アスカ、動くにゃ！」

悲鳴のようなスピニッチの音が、夜の静寂を切り裂く。しかしすでに、飛鳥の背中には大きな包丁が突き刺さっていた。

77話：必殺料理人！ その名は……（後書き）

実際のFFシリーズのトンベリとは、設定を変えております。
ご了承ください。

ファンの方すみませんm（――）m

78話：みんなのつらみ（前書き）

> i 1 0 6 0 1 | 2 7 5 <

コメント

78話：みんなのうらみ

「あ、ぐ…… あ……」

飛鳥の背中には、トンベリの包丁が突き刺さっている。右の肩甲骨の下、幸いにも心臓とは逆側だ。しかしそれでも鋭い切っ先は飛鳥の右肺を傷つけ、飛鳥は口から血を吐き出す。

「ぐはっ……」

赤黒い血の固まりが白いセーラー服の前を汚す。両膝をついてうつぶせに倒れるところをガルドが慌てて受け止める。すでに背中 of 包丁は消えている。

「アスカ！」

トンベリからかばうように、ガルドは飛鳥を抱き寄せる。スピニツチは飛鳥の傷口にキュアの魔法をかけるがその傷は深く、出血が若干治まっただけだ。あまりの攻撃力に、通常の治癒魔法では歯が立たない。こんな攻撃を何度も受け続けたら、いくら飛鳥でも間違いなく死んでしまうだろう。

「くそっ！」

ガルドは闇の向こうに意識を集中する。飛鳥を攻撃したトンベリは、一旦広場の一番奥へと下がっている。獲物をじわじわと追いつめ、恐怖の味付けをするためだ。

「ガ、ガルド、スピニツチ…… あ、あんなただけでも…… 逃

げて」

焦点の合わない目で、飛鳥がかすれた声を出す。ガルドは覚悟を決めたように口を引き結び、静かに首を横に振る。

「無理だ……一旦トンベリのバトルフィールドに取り込まれたら、絶対に逃げられない。出られるとしたら、ヤツを倒すか……」

「ミーたちが死ぬかにゃ」

飛鳥の出血がかるうじて止まる。スピニッチは短い腕で額の汗を拭う。トンベリのランタンの光は、またゆっくりと左右に揺れながら近づいてくる。

「く、一か八か……」

ガルドは立ち上がって両手を緑色に光らせる。

「バギマ！」

ガルドが叫ぶのと同時に、複数の真空の刃が縦横無尽にトンベリに向かって飛んでいく。トンベリは特に回避する素振りもなく、すべて被弾する。

「どうだ？」

白い煙の向こうに、ずんぐりむっくりとした小さな影がうごめいている。トンベリは何事もなかったかのようにランタンを揺らせながら歩いてくる。

「やっぱだめか……じゃあ、これなら！」

今度は両手を横に開き、手のひらに黄色い光を集める。するとトンベリの周囲に黄色い粒子が無数に発生する。その小さな粒の一つひとは帯電しているようで、虫が火に飛び込んで焼けるような音を立てながら小さな稲妻をその身にまとわりつかせている。

「イオナズン！」

周囲の黄色い粒子が一気に収縮する。空気中にある静電気を魔法で圧縮し、一気に爆発させる魔法だ。太陽が発生したかのような強烈な光が発生する。直後、爆風が周囲の木材を跳ね飛ばし轟音が耳をつんざく。

「やったか？」

砂埃が収まり、白煙が薄れてくる。その向こうには変わらず揺れるオレンジ色のランタンの光と黄色い二つの目。

「く……」

ガルドは悔しそうに下唇を噛み、飛鳥を見る。うつぶせに倒れたまま、スピニッチが寄り添っている。ガルドは死を覚悟する。こうなれば自分の命と引き替えに倒すしかない。いや、倒せなくても飛鳥を逃がすチャンスぐらいは作れるかもしれない。ガルドは拳を握り、腰だめにする。それは自己犠牲魔法。自分の命と引き替えに相手に大ダメージを与える究極の攻撃魔法だ。

「ガ、ガルド待つて」

弱々しい声が聞こえ、ガルドは飛鳥を見る。飛鳥は腕で身体を起

こし、膝をついて立ち上がろうとしている。血と砂の混じったセーラー服の前面はどす黒く染まり、ライトブラウンの髪も砂にまみれて汚れている。

「ア、アタシがやるよ。敵は一匹だからね」

「お、お前、そんな身体で戦えるわけねえだろ！」

そう言いつつも、ガルドは理解していた。もし勝てる可能性が万に一つでもあるなら、それは飛鳥しかない。トンベリに魔法は通じない。しかし物理的ダメージなら積み重ねれば倒せるかもしれない。ただしそれも、無尽蔵のトンベリの体力を削り取るまで、包丁の攻撃に耐え切れればの話だ。つまり現状では不可能に近い。

「やってみないと…… わかんないでしょ」

肩で息をしながら、飛鳥はファイティングポーズを取る。握り込まれた拳には、金色に光るカイザーナックル。顔中脂汗にまみれながらも、飛鳥の目は決してあきらめてはいない。

「……わかった。俺がヤツの気を逸らすから、その隙にフルボッコにしてやれ」

「りょーかい」

飛鳥は口の端で不敵に微笑む。ガルドは残り少ない魔力を手のひらに集中する。トンベリは間もなく攻撃可能範囲に到達しようとしている。

「うりゃあ！」

ガルドが両手を前に勢いよく出すと、炎の柱が渦巻きながらまっ

すぐと伸びていく。灼熱の炎がトンベリを包む。

「いまだ！」

炎の切れ目を狙って、飛鳥はトンベリに向かって跳躍する。緑色のつるんとした頭が、炎の向こうに見え隠れしている。飛鳥は炎が通り過ぎた瞬間を狙って、右ストレートを放つ。

「うらあつ…… て、あれ？」

確かにいたはずの緑色の頭が忽然と消える。トンベリは残像だけを残して、飛鳥の背後に回り込んでいた。

「ぐああああつ！」

今度は飛鳥の右ふとももに包丁が深々と刺さる。動脈を切断されたのか、傷口からは噴水のように鮮血が噴き出す。

「アスカ！」

ガルドは絶叫してキズを押さえながら倒れる飛鳥に飛びつく。服や顔が血で汚れるのも構わずに、飛鳥の傷口を手で押さえる。

「ミーに任せるにゃ！」

スピニツチはお腹から小瓶を取り出し、飛鳥の傷口に中の白く濁った液体をかける。

「あああ〜！」

傷口からは白煙が立ち上り、飛鳥は苦悶の叫びを上げる。それは治療用のポジションだった。しかしやはりキズを完全に治癒するには至らず、スピニッチはキュアの魔法で補強する。しかしそれも間に合わせでしかない。トンベリは闇の向こうからまたゆっくりと近づいてくる。

「や、やっぱり“メガンテ”しかねえか……」

涙を流しながら苦痛に歪む飛鳥の顔を優しく撫で、ガルドは煤と砂で汚れた顔でトンベリを睨みつける。

「むん」

両拳を腰だめにし、空手の正拳突きをする前のような姿勢になる。ガルドの拳に黒い光が徐々に集まってくる。ガルドは自分の中の魔力を集中させるのと同時に、内圧を高めて膨張させる。すべてが臨界点に達した時、“メガンテ”が発動する。

「ガルド、待つにゃ」

メガンテの準備をしながらスピニッチを見る。スピニッチは飛鳥にキュアの魔法をかけながら、トンベリを爪で指している。トンベリは歩みを止め、闇の中で立ち尽くしている。

「なんだ？ どうしたんだ？」

不審に思っ てスピニッチに問いかけると、震えるアニメ声で余命を告白するように小さく答える。

「『みんなのうらみ』にゃ」

「えっ？」

広場のあちこちから青白い光がトンベリに集まっていく。淫魔やグールたちの肉片から染み出た光は、まるで人魂のようにトンベリに吸い込まれていく。

「ど、どうしたの……」

飛鳥がうつすらと目を開け、スピニツチに問いかける。

「トンベリの必殺技にや。『みんなのうらみ』…… 飛鳥やガルドの倒したモンスターが受けたダメージをそのまま攻撃力にして返す技にや」

「そ、そんな……」

青白い光は次々とトンベリへ吸い込まれ、その右手に持つ包丁が青く輝き始める。

「だめだ、間に合わねえ」

絶望に打ちひしがれたガルドの声は、トンベリの包丁が放つ低い振動音に掻き消されていった。

79話：覚醒

攻撃力が同じなら、打突点が狭ければ狭いほどそのパワーは集約される。面よりも点。分厚いクレイモアでぶった切るよりも、鋭いフルーレで突いた方がその一点に集約されたパワーは相乗的に高まる。トンベリは武器の包丁で、斬るのではなく突いてくる。元々強力なパワーに比べ、“みんなのうらみ”で増大したその攻撃力を包丁の切っ先一点に集約して攻撃すれば、その破壊力は小型核爆弾ほどの破壊力に匹敵するだろう。いくら飛鳥の“超シールド”でも、防ぎきれない。ガルドやスピニッチの通常のシールドは言うに及ばずだ。命中した瞬間に肉体は原子にまで分解され、跡形も残らないだろう。

「ア、アスカ、俺が攻撃を受けるから、その隙に何とか逃げてみてくれ。い、一秒くらいは保たせてみせるから……」

泣きそうな顔でガルドが飛鳥の前に立つ。その足が震えているのは、疲れのためだけではないだろう。

「何言ってるのよ！ アンタ、お母さん待ってるんでしょ！ アンタの帰りを、病氣と闘いながら待ってるんでしょ！ それを言うならアタシが犠牲になるから、ガルドこそ逃げて！ アタシのシールドなら三秒くらいは……」

「無理にや」

涙を流しながら絶叫する二人を、スピニッチの冷静な声が遮る。スピニッチはいまだ飛鳥の傷口にキュアの魔法をかけ続けている。その短い毛むくじらの腕は小刻みに震え、スピニッチの魔力も限界に近いことを嫌でも教えてくれる。もう位相転移魔法でこの場か

ら逃げることも難しいだろう。

「“みんなのうらみ”の破壊力はドラゴンの爪並にや。あれだけの数のパワーを集めてるんだからにや」

「く……」

ガルドが悔しそうに唇を噛んでうつむく。トンベリの包丁に集まる青白い光が数少なくなる。間もなく“みんなのうらみ”が発動される。低い振動音が少しずつ高くなってくる。あまりの振動に青白い刃の輪郭がブレ、淡い光の塊のように見える。

「お、終わりなのか……俺たち……」

ガルドの膝からは力が抜け、地面に膝をつく。それはまるで処刑人に許しを請う罪人のようにも見える。

「いや、まだ終わってないよ」

飛鳥のかすれ声が強い意志を秘めて響く。ガルドとスピニッチが振り向くと、飛鳥は自分の荷物を持ったまま、片膝について立ち上がろうとしている。そのまま飛鳥は荷物の中に手を入れ、彫刻刀ケースのような焦げ茶色の木箱を取り出す。

「お前、それ……」

ガルドとスピニッチの目が大きく見開かれる。飛鳥はためらいもなく蓋を開け、中から木の棒を取り出す。鉛筆より少し太いくらいのその棒は長めの箸ぐらいで、先に人差し指ほどの長さの針が付いている。

「ストウーピッド……」

スピニツチの震える声がトンベリの振動音に掻き消される。青白い光はもう完全に吸収され尽くしたようで、暗闇の中青白い光のみが強烈な輝きを発している。膨大な破壊力が溢れ、“ほうちよう”直下の地面は赤く溶解している。

「アタシは絶対死さない！」

飛鳥は自分の左肘の内側へ、ストウーピッドの注射器を突き立てる。

「あああああゝ！」

根本まで突き刺さった注射器は、刺さった瞬間にストウーピッドを飛鳥の体内へ流し込む。飛鳥の絶叫を掻き消すかのように、トンベリの包丁がジェット噴射のような高音を発する。瞬間トンベリは残像を残して飛鳥へと間合いを詰める。地面を真っ赤に削り取りながら、包丁がまっすぐと突き出される。

「アスカ！」

ガルドとスピニツチは同時に叫び、直後爆風で吹き飛ばされる。周囲の木材が三百六十度の方向へ飛散し、さらにその外側の健在だった建物までもが破壊されていく。それはまさに小型核爆弾が炸裂したようだった。

「く、ア、アスカあ！」

爆風が収まると、大量の木材を跳ね飛ばしながらガルドが地面へ

転がり出てくる。

「ア、アスカ？」

ガルドの青い瞳が映し出したのは信じられない光景だった。

トンベリは腕を伸ばして包丁を突き出している。その刃を飛鳥が左手で握りしめている。飛鳥はトンベリの真正面に立ち、若干顔をうつむかせている。トンベリは必死に包丁を抜き取るうともがいているようだが、飛鳥に握りしめられたままびくともしない。

「く……」

静寂の中に飛鳥のかすかな声が聞こえる。

「アスカ？」

恐る恐るガルドが声をかけると、飛鳥はゆっくりと顔を上げる。

その顔は満面の笑顔だった。

「く…… くくく…… あは、あははははははははははっ！」

飛鳥はトンベリの包丁を放し、夜空に向かって上半身を大きく仰け反らせて大笑いをする。両手は夜空を掻き抱くように大きく広げられ、大口を開けて心底楽しそうに笑い続ける。自由になったトンベリは、広場の奥へと逃げる。

「あはははっ、いい！ いい気分だ！ 最高だよ！」

飛鳥の髪が逆立っていく。その笑顔は醜悪に歪み、ガルドには飛鳥が悪魔に見えてくる。飛鳥の全身は黄金色の淡い光を放っている。

それは美しいというよりは、禍々しい光だ。

「さあ、殺戮ショーの始まりだよ！」

飛鳥はぎろりとトンベリを睨む。白煙を上げながら、早送り映像のように飛鳥の傷が修復されていく。それは魔法というより、呪われた黒魔術のようだった。

79話：覚醒（後書き）

< 作中の用語解説 >

クレイモア 〓 両手持ちの大剣

フルーレ 〓 細身の剣、レイピアをさらに軽量化させたもの。

80話：クレイジーモンキー

「いやっはぁ！」

飛鳥が一直線にトンベリへと走る。トンベリの真正面で立ち止まると、右フックを放つ。やはりトンベリは残像を残して飛鳥の背後へ回り込む。しかし今度はさらに飛鳥も、残像を残してトンベリの背後に回り込んでいる。

「いひ、死ねやぁ」

背後から右フックの一撃を食らったトンベリは、爆発に巻き込まれたように弾き飛ばされる。しかし次の瞬間、飛ばされているトンベリの前に飛鳥が現れる。両手を組んで、飛鳥はトンベリを垂直に地面へ叩き落とす。爆発音がして大量の土煙が舞い上がる。大きなクレーターの真ん中に、緑色のつるつとした頭が埋もれている。

「あ、悪魔が目覚めてしまったにや」

金縛りにあったように身動きできずにいたガルドの隣に、いつの間にか埃にまみれたスピニッチが立っている。

「きやはっ！」

クレーターの際から軽くジャンプした飛鳥は、土に半分埋まったまま痙攣しているトンベリの前に降り立つ。

「死ね」

凶悪な笑顔で飛鳥は拳を振り上げる。腐ったトマトが潰れるような粘着質な音がして、緑色の頭が割れる。中からはピンク色の脳漿や真っ赤な鮮血に混じって、白桃のようなつるんとした脳がはみ出す。

「あはっ！　ぐちゃぐちゃああ」

飛鳥は全身にトンベリの返り血を浴びながら、何度も拳を突き下ろす。その度に生ゴミをかき混ぜるような音がして、トンベリが肉塊に変わっていく。中身のないゴム手袋のように、トンベリの身体がその形を失っていく。トンベリが死んでいるのはもはや明確なはずなのに、飛鳥は攻撃を止めない。トンベリがミンチのように細切れになると、飛鳥は攻撃を止めてため息をつき、つまらなそうに血まみれの拳を見る。ところどころに、ミミズのようなトンベリの肉片がまわりついている。

「んはっ！」

長い舌を出して、飛鳥は拳についた肉片を舐め取る。しばらく咀嚼していると、まずそうに地面に吐き出す。

「まずい……」

飛鳥の目は酔っぱらいのように据わっている。

「ア、アスカ？」

クレーターの縁からガルドが声をかけると、飛鳥はライトブラウンの髪を逆立てながら勢いよく振り向く。

「うつ！」

ガルドは思わず吐き気がしてしまう。飛鳥の顔はトンベリの返り血で赤と白の縞模様のようになっており、口の周りは血がべつとりと付いてまるで口裂け女だ。

「あはあ……」

飛鳥は不気味な微笑みを浮かべると、突然高く飛び上がる。

「アスカ！」

飛鳥はクレーターから遙か離れた地面へ着地すると、ガルドたちの方を振り返る。

「ガザに行くんだろ？ アタシは先に行ってるよ！」

笑顔でそう言うと、飛鳥はあっという間に北へと向かって走り去る。

「く……」

ガルドは自分と飛鳥の分の麻袋を両肩に担ぎ、飛鳥の走り去った方へ向けて飛び上がる。

「ガルド、あんやもによをデルピエロ王にもらってきたにやかにや？」

スピニッチは細い目をさらに細めて、飛鳥の消え去った暗闇を見つめている。

「ああ…… 使用に関しては俺たちに任せるとは言っていたが、実際に使うつもりはなかった」

「でも使わにやかったら今頃はミーたちがあんにやにや」

クレーターの底には“かつてトンベリだった肉の破片”が散乱している。

「とにかくアス力を追うにや。薬によ効果は約二十四時間。飛鳥によ足にやら、ちょうどガザに着くくらいにや」

スピニツチに言われて初めて、ガルドは気づく。イデアの町でさえこれだけのモンスターがいたのだ。しかもここにいたのは野生モンスター。つまり組織だつてファンタジアを占領しているモンスターの正規軍ではない。ガザはファンタジア北西部の要衝。ほぼ間違いなく正規軍がいる。もしモンスター軍がアイリスを攻略している最中なら、その後方支援基地としてガザにはかなり本格的な部隊が駐留している可能性が高い。ストウーピッドの効果がそこで切れたらどうなるか、火を見るより明らかだ。

「ミーにもストウーピッドによ効果が切れた時どうにやるによかはわからにやいにや。ただあれほどによパワーを出し続けた反動を考えれば……」

スピニツチは言葉を濁すが、ガルドにもその先は容易に想像できる。気絶するか昏倒するのは間違いない。そのまま放っておけば命に関わる。どうすれば飛鳥を救えるのかはわからないが、その時何千何万ものモンスターに囲まれていたら為す術もなく殺されてしまっただろう。

「くそっ！」

ガルドは疲労とダメージがピークになった身体に鞭打って、“B二街道”を北に向けて飛翔する。ここで自分までストウーピッドを打つわけにはいかない。ガルドまで狂ってしまったら飛鳥を助けることはできないからだ。ガルドは決めていた。もし飛鳥のストウーピッドの効果が切れた時モンスター軍に囲まれている状況なら、その時こそ自分が打つ番なのだと。

「くっそ、アスカ、待つてろよ！ ぜってえ俺が助けてやる！」

月明かりを頼りにガルドとスピニッチは石畳に沿って飛んでいく。左右の森は不気味なほど静まり返り、あれほどの騒ぎがまるで嘘のように穏やかだ。飛鳥はストウーピッドで狂いながらも、自分のことをしっかりと認識してくれていた。ガルドは飛鳥の悪魔のような笑顔が、悲しそうに思えてならなかった。

80話：クレイジーモンキー（後書き）

Web拍手設置しました。

よければ何か一言でもよろしく願います。
コメントなしでも拍手はできます

81話：死のロード

地球の大きさが加速度的に縮んでいった大航海時代、ヨーロッパ人によってアメリカ大陸に持ち込まれた天然痘は修羅のごとき猛威を振るい、当時実に九割ものネイティブアメリカンが死んだという。ガルドは当然その地獄をアメリカ人の常識的範囲内での知識としてしか知らないが、眼下に広がる光景はまさにその歴史的地獄をまさに再現しているかのようだった。

「なんだこれは……」

上空数十メートルを北に向かって飛ぶガルドとスピニツチの鼻孔に、濃密な血臭が否応なしに入り込んでくる。石畳は無数の野生モンスターの死骸で埋まっていた。

ゴリラのような毛むくじやらの大きなモンスターの胴体部分に大穴が空き、他のモンスターの死骸がどす黒い血と内臓の池に沈んでいる。サーベルタイガーのような長い牙を持つ四つ足の獣型モンスターが、八つ裂きにされて身体の部品が四散している。

どれもこれも刃物や魔法で殺された死骸ではない。明らかに飛鳥がやったものだろう。飛鳥は暴走した悪魔的なパワーで、街道沿いのモンスターを皆殺しにしながらガザへと向かっている。これだけのモンスターと戦いながらであつたら、すでに追いついていてもおかしくはない。実際モンスターの死骸はまだ命あつた時の柔らかさが見て取れ、今まさに死んだばかりという様子だ。

それなのに飛鳥の姿はどこにも見られない。超人的なパワーとスピードで、休むことなく戦い続けている証拠だろう。いや、“殺戮し続けている”と言った方がぴったりだ。飛鳥の潜在的な戦闘能力は、いったいどれほどのパワーを秘めているというのだろうか。味方ながらにガルドは空恐ろしくなる。

「ガルド、気づいてるかにや」
「ん？」

スピニツチは羽を忙しく動かしていたかと思うと、大きく広げてグライダーのように滑空したりしている。魔力と羽を併用することによって、無駄な魔力の消費を抑えているのだらう。長距離を飛ぶにはよいやり方だ。

ガルドは飛鳥を救いたい一心で飛び続けている。一瞬でも気を抜けば、簡単に気絶できそうなくらい疲労度は高い。この世界が現実世界であれば、ガルドはすでに動けなくなっているだらう。幸いなことにここはファンタジア。精神と肉体の境目が曖昧な世界だ。肉体の限界を超えてもなお、精神力で補うことができる。今ガルドの身体を動かしているのは肉体ではなく、飛鳥を絶対に救いたいというその強靱な精神力だ。

「トンベリもそうだしこのモンスターたちもそうにや。みんな“転生してにやい”にや」
「転生って…… あっ！」

こんな状況下にあっても冷静に物事を見ることのできるスピニツチがいると、本当に頼りになる。本来モンクである飛鳥は“モンスターを殺せない”はずなのだ。飛鳥に倒されたモンスターは転生して、その報酬としてナイトに変わる。しかしトンベリもそうであつたし、飛鳥が殺しまくっている眼下のモンスターたちもそうであるように、すべて死骸はそのまま転がっているのである。それは何を意味するのか。

「どうやらストウーピッドは、使用すると精神の属性が“悪”に変わる代わりに、平常時の数倍のパワーを出せるようになるアイテム

らしいにや」

「RPGでいうと経験値やお金を得られない代わりに、一定の時間強くなる呪われたアイテム…… ってところか」

ゲームだったらその後も冒険は続く。ゲームオーバーになったらセーブしてあるところからまた始めればいい。しかしこれは今まさに現実に起こっていることだ。

ストウーピッドはゲームのアイテムではない。説明書も攻略本もない。副作用があるのかどうか、またあるとしたらどんな症状になるのか、そもそも無事でいられるのか何もわからない。とにかく今は飛鳥に追いつくのが先決だ。

ガルドとスピニッチは、延々と続く“死のロード”をひたすら北へ向けて飛び続けた。

夜が明け、世界が陽光の下にさらけ出されても眼下の状況にまったく変わりはなかった。累々と重なるモンスターの死骸。二つほど小さな村落を通過したが、建物は無惨にも破壊され、巨大なハリケーンの通過した跡のようだった。幸い…… と言っているのかわからないが、生き残りの人間はいなかったらしく、転がっているのはすべて人間とは異形のモンスターばかりだった。

日が暮れ、また夜が来る。ガルドとスピニッチは飛鳥の姿を見ることもなく、深夜ガザに到着した。

「あそこがガザか……」

星空の下、黒々とした市壁が左右へ果てしなく伸びている。高い建物も多いらしく小高い丘のように盛り上がった景観は、イスペリアに引けを取らないほどの大きな街だ。

「おい、見るよ、灯りが点いてる」

「ほんとにや、煙も上がってるにや！」

灯りが点き、煙が上がっているということは、そこに“生活”があるということだ。つまり誰かがいるということになる。いや、この場合“誰か”ではなく“何か”であろう。見た感じでは混乱が起こっている気配はなく、いたって平和な様子である。もし飛鳥が街に突入していれば、今頃はモンスターの叫び声やら何やらで大騒ぎになっているはずだ。

ガルドとスピニッチは間違いなく目を光らせているであろう歩哨に見つからないように、街道脇の森の中へと身を隠す。

「アス力はどこ行っただ……ん？」

「アス力にゃ！」

星の瞬く夜の街道を、白く小さな人影がゆらゆらと近づいてくる。見慣れたセーラー服はモンスターの返り血でどす黒く染まっているが、遠目にもそれが飛鳥だということはすぐにわかった。ガルドとスピニッチは足音を隠すために、低空で飛んでいく。ガルドが飛鳥の前に着地すると、引きずるように歩いていた飛鳥の足が止まる。

「アス力？」

うつむいて表情の見えない飛鳥の顔を、ガルドは下から恐る恐る覗き込む。

「う……」

微かな呻き声が聞こえ、水滴が一粒地面へ落ちる。飛鳥は泣いていた。

「う…… ガ、ガルド、ごめん…… ア、アタシ……」

飛鳥は糸の切れた人形のように、そのまま地面へと崩れ落ちた。

82話：裏切りの街

「う……」

飛鳥の目が覚めた時、視界に入ってきたのは古めかしい木材を並べた天井だった。煙で燻されたように黒く汚れ、隅には蜘蛛の巣が張っている。どうやら自分は布団の上に寝かされているようで、身動きすると柔らかい毛布が身体の上をずり落ちる。

「……」

飛鳥は自分の状況を思い出す。暗闇の中自分は走っていた。頭の中から沸き起こる、ただひたすら街道を北に向かわなければならぬ、邪魔する者はすべて殺すという抑えきれない内なる衝動に従って走り続けた。紙のように引き裂かれる異形のモンスターたち。世界は深紅と闇のコントラストで占められていた。その世界に色が戻ってきた時、一瞬ガルドの顔を見たような気がする。飛鳥の記憶はそこで途切れていた。

周囲は見たこともない部屋だ。天井と床は木材でできているが、壁は石造りだ。無骨な立方体がそれなりの秩序で組み合わされている。部屋の大きさは六畳間くらいだろうか。窓は白く曇って外の様子は見えないが、光の加減からすれば今は昼間なのだろう。時折人の話し声や笑い声、馬の嘶きなど外の喧噪が聞こえてくる。壁際に備え付けられた両開きのクローゼットと木製のドア以外、特に何もない部屋だ。

「アタシ、生きてる……」

飛鳥は自分のものではないくらい重い両手を毛布から出す。その

時初めて気づく。飛鳥は白い着物を着ていた。いや、着させられていた。それは和服のようなきちんとした服ではなく、袖を通す部分だけある一枚の布を、腰の部分で紐で縛っただけの簡素な着物だ。下着を身に着けているのは感触でわかる。問題はここがどこで、だれが自分を着替えさせたかだ。

常識的に考えれば、この部屋が家の持ち主だろう。しかし問題は“なぜ”である。ファンタジアのど真ん中で気を失った自分が、なぜこんな風にしてベッドで寝ていられるのだろうか。ガルドやスピニツチはどこへ行ったのだろうか。そもそも自分は本当に生きているのだろうか。

「痛っ！」

思いつきり頬をつねるとやっぱり痛い。とりあえず生きているのは確かなようだ。その時向かいの壁にある木製のドアが開く。

「おやまあ、気がついたかえ？」

銀髪を後ろで団子にした背中丸まった老婆が、木製のトレイに同じく木製のコップを載せて入って来る。

「だ、だれ？」

飛鳥は毛布を持ち上げ、壁際に下がる。淫魔の時のように、モニターに幻惑されている可能性だってあるのだ。

「怯えんでもええぞえ、わしゃパドムといいますじゃ」

「よつこらせ」とベッドの横にある丸い木製の椅子に座る。飛鳥はそんな椅子が横にあることに、気づきもしなかった。

「気づいたんならまず、水を飲みなされ。なあに、毒なんぞ入ったりやあせん」

パドムと名乗った老婆はしゃがれ声を震わせて笑い、トレイを飛鳥に差し出す。警戒しつつもコップを受け取り中を見る。透明な水は無臭で、特におかしい様子はない。それに何よりも飛鳥の身体は水分を欲していた。目尻にたくさんのしわを寄せて微笑む老婆の顔を見るが、何か企んでいる悪人にも思えない。飛鳥は開き直って一気に水を飲み干す。

「はあ……」

さほど冷たくはないが、水分が心地よく体中に染み渡っていく。

「お連れさんはもうすぐ帰って来ると思うぞい。いい男じゃのう」
「連れてって、ガルド？」

パドムは「ん〜ん〜」と唸る。どうやらうなずいているらしい。するとまたドアが開き、くすんだ短い金髪が姿を現す。

「アスカ、目が覚めたか！」

ベッドに身を起こす飛鳥を見ると、ガルドは目を輝やかす。小脇に抱えた安っぽい紙袋を飛鳥の枕元に置き、ガルドは飛鳥の頭を撫でる。

「心配したぜえ、二日も目え覚まさねえんだもん」

何となくガルドの目が潤んでいるように見える。どうやら本物の

ガルドのようだ。

「ね、ガルド、ここどこ？ どうしてこんなところにいるの？ アタシの服は？」

一気に捲し立てる飛鳥を手で制すと、ガルドは横にいるパドムを振り返る。

「すみません、こいつ起きたんで風呂の用意お願いしていいですか？」

「ああ、ええとも。待つとりんしゃい」

パドムはまた「よっこらせ」と言って立ち上がり、よたよたと部屋を出て行く。ドアが何度かつつかえながら閉まると、ガルドの表情が急に引き締まる。

「アス力よく聞け。俺たちは今非常に危険な状態にいる」
「へ？」

明るい陽射しの差し込む部屋と、吹けば飛びそうな腰の曲がった老婆のどこが危険なのだろうか。

「順番に説明するからよく聞け。まず二日前お前はガザ手前で気を失った」

「それは何となく覚えてる」

不安げではあったが、ガルドの顔を見て一気に気が抜けたのだ。

「それでお前を抱いてどこか隠れられそうなところを探したんだ。でもそんなところはなくて、森の中を彷徨ってた。そしたらジャ

グワじいさんに会ったんだ」

「ジャグワじいさん？」

ガルドは小さくうなづく。

「さっきのパドムばあさんの旦那さんで、ただのハゲてるじいさんだ。犬の散歩をしてたら俺たちに遭遇したらしい」

「犬の散歩？」

ここはファンタジアのはず。モンスターに占領された国。のんびり年寄りが夜中、犬の散歩などしていたら一時間も経たないうちに肉塊になっているだろう。

疑問を口にしようとする飛鳥を制し、ガルドは話を続ける。

「そんでお前の様子を見て、こりゃたいへんだということ家で休ませてもらってる。お前を着替えさせたり、看病したりしてくれたのはパドムばあさんだ」

「じゃここはガザ？」

「そうだ。アスカの言いたいことはわかる。ファンタジアにおいて、普通に人間が生活できる場所なんてすでにないと思ってい。イスペリアやフェンドルフィンに近い村や町だって壊滅状態なのに、こんなファンタジアの奥地の街が平和であるはずがない」

しかもここはファンタジア北西部で一番大きな街で、交通の要衝だ。モンスター軍が見逃すわけがない。それにイスペリアの偵察部隊がここで消息を絶っている。

「じゃあ、あのばあさんやそのハゲじいさんはモンスターなの？」

ガルドは慎重に否定する。

「いや、間違いなく人間だ。俺たちと同じ、な」
「じゃあ、どういうことなの？」

飛鳥はわけがわからなくなる。確かに彼らがモンスターなら、今こうして無事でいられるわけがない。ガルドの話によれば、自分は二日間もここで寝ていたらしいのだ。

「これは俺の推測だがな……」

ガルドはさらに声を潜める。

「この街の人間はみんな、“モンスターの仲間”だ」

窓の外からは、人々の楽しげな笑い声が響いていた。

83話：思い出はセピア色に

問題はなぜ飛鳥を助けたのかだ。そしてなぜ襲って来ないのかだ。この街の住民がモンスター仲間であるなら、いくらガルドの魔法能力が高かるうがすでに二人とも殺されていてもおかしくはない。いや、変な話だが殺されていて普通だ。しかし飛鳥はすやすやと二日間も休み、ガルドはのんびりと街の中で買い物や散歩ができた。

「ねえ、スピニツチは？」

身体が慣れてきたのか、飛鳥の顔には赤みが差してきている。ガルドは飛鳥の横に座り、窓やドアの方をさりげなく警戒しながら囁く。

「ジャグワじいさんに会った時、すばやく森に隠れた。この街や周辺の様子を探ってる」

「そっか、よかった」

「それより気がついたんなら、とりあえず風呂に入れ。まだ血の臭いがこびりついてるぞ」

飛鳥はガルドそう言われて初めて、自分の身体が生臭いことに気づく。ガルドは横の紙袋から、緑色の塊を取り出す。

「ほら、石鹸だ。この世界じゃかなり高価な品物だからな」

「ありがとう」

飛鳥は手のひらに乗る石鹸の匂いを嗅ぐ。石鹸などフェンドルフインで豪華なお風呂に入って以来だ。

「セーラー服の方は、今洗濯して乾かしている。あの服、なかなか乾かねえんだよな」

「オカマの作った防具だからね」

ガルドの顔に「？」マークが浮かぶ。アメリカ人なのにしゃれが通じないのだろうか。

「湿っぽいうつこと」

「ジャパニーズジョークか？」

ガルドと飛鳥は穏やかな、つかの間の平和を噛みしめる。なぜ今無事でいられるのかはわからないが、いつ何があっても対処できる態勢を整えておいた方がいいだろう。

「お風呂が沸きましたぞえ」

ちょうどパドムが飛鳥を呼びに来る。

「じゃ、行ってくる」

「ああ、俺はもう少し街を散歩してくるよ」

それは様子を探りに行くという意味だろう。ガルドはウィンクして、部屋を出て行った。

ジャグワじいさんは薬草を採集して生計を立てているようだ。一口に薬草と言ってもその効能は多岐に渡り、似たような種類も多いので素人にはなかなか手を出せない分野だ。すでに亡くなった師匠に弟子入りして五十年以上も、ガザ近隣の森や山を歩き回って薬草の生育場所とその見分け方、販売ルートなどを身に付けてきたそうだ。

「セージつつうのは紅茶にして飲むのが普通の飲み方じゃがな？
実はクミンとよく合うんじゃ。ぴりつとしたスパイスが効いての？
熱が出た時なんかには食欲増進にもええんじゃぞ！」

顔の下半分が真っ白いわたあめのようなひげに覆われたジャグワじいさんは、夕食のスープを飛ばしながらずつと熱弁を振るっている。話の半分以上を占める専門用語は、飛鳥とガルドにはまったくわからなかったが、顔を真っ赤にして楽しそうに笑うジャグワじいさんを見ているだけで楽しい気分になる。

「ほら、じいさん、自慢話はそれくらいにしなされ！」

パドムが苦笑しながらたしなめる。飛鳥はこんな温かな団らんなど久しぶりだった。子どもの頃、一人娘の飛鳥は両親に間違いなく愛されていた。学校から帰るとカレーライスのおいしそうな匂いに誘われ、大急ぎで宿題を終わらせていたものだ。今は望んでも手に入らないささやかな幸せ。父親が父親ではなく“男”になったあの日から、飛鳥にとって“温かな家族の団らん”は異世界よりも遠い世界の話になってしまった。

「ばあさん、これすっげえうめえ！」

ガルドは鶏肉のシチューをもう三杯もおかわりしている。ガルド

も思うところはあるのだろう。無理に明るく振る舞っている。しかしそれは苦痛を伴う演技ではなく、心地よい、できればいつまでも続いてほしい演技であった。

「じいちゃん、野犬に襲われた話もう一回聞かせてよ！」

「なに、アスカさん、あの話気に入ったか？ よつしゃ！ あれはわしが初めて師匠と東の山を越えて遠出をした時のことじゃった……」

「アスカさん、じいさんを焚きつけるもんじゃないぞえ！」

ガザの片隅で過ごす奇妙な夕餉のひとときは、ここがファンタジアだと一瞬忘れてしまうほどの楽しい時間だった。飛鳥はこの夢のようなひとときを、大切な思い出として心のページに大事に綴った。

しかし“現実”はその夜、唐突に飛鳥の元へ現れた。

「アスカ！」

ワインのコルクを抜くような軽い音がして、心地よい眠気に身を任せ始めていた飛鳥の頭上にスピニッチが現れる。

「ス、スピニッチ？」

「アスカ起きるにや、そんで逃げるにや！」

「なにがあつたの……」

飛鳥は気怠げにベッドから身を起こす。身には不測の事態に備えて、ようやく乾いたスーパードロインボディスーツを着込んでいる。

「オークの大部隊がこの街に迫ってるにや！」

「ええっ？」

“オーク”というものが何だかわからなかったが、モンスターだということはある。飛鳥は飛び起きて、隣のガルドの部屋へ飛び込む。

「ガルド！」

ガルドはすでに夢の世界へ旅立っていたようで、飛鳥が揺り起こすとだらしなく笑って飛鳥に抱きついてくる。

「むにゃ、アスカあゝ好きだあ」

「ウザい！」

飛鳥はまとわりつくガルドを一本背負いで床に叩きつける。奇妙な叫び声を上げて、ガルドはようやく目覚める。

「あれ、アスカ？ それにスピニッチ？」

「ガルド、オークにや！ オークの軍勢が来るにや！」

「オーク？」

ガルドの顔色が青くなる。

「オークってモンスター？」

「ああ、今の俺たちなら雑魚でしかねえが、数で来られるとやべえな」

ガルドは手早く荷物をまとめる。

「オークの軍勢はたぶん千ぐらいにや。“C六街道”をまっすぐこっちに向かってるにや」

「ちつ、一旦森の中へ逃げてやりすごす……」

ガルドの動きが止まる。不審に思った飛鳥とスピニツチも、すぐにその理由にたどり着く。部屋のドアが開いている。そしてそこには大きな斧を構えたジャグワじいさんと、ランタンを持つパドムばあさんがいた。

「すまんの、逃がすわけにはいかんのじゃ」

「じいさん、やっぱり……」

飛鳥の中にまだ温もりの残る家族の団らんが、遠い過去のように急速に色あせていった。

84話：苦悩する街

「じいちゃん、どうして…… どうしてモンスターなんかの味方をするの？」

飛鳥の声は震えている。愚問だった。そんなこと聞かなくてもわかってる。しかし飛鳥は言葉にせずにはいらなかった。

すべてに絶望し、すべてをあきらめ、すべてに唾を吐いていた飛鳥は、この世界に召喚されてからというもの、少しずつ「生きる」ということのすばらしさ、大切さ、愛おしさを思い出し始めていた。人を信じれば必ず裏切られる。人を頼れば騙される。だったら誰も、何も信じなければいい。しかし現実世界に絶望していた飛鳥は、皮肉にも異世界で“世の中”というものを見直し始めていた。クウエンディ女王を始めとして、この世界の人々は死を目前としながらも精一杯前を向いて進もうとしている。自分のようなゴミくずでも必要としてくれている。飛鳥はもう一度信じたかった。人の持つ力を。人の持つ優しさを。人生のすばらしさを。

目の前で苦渋の表情を浮かべる二人の年寄りを見れば、その理由は明白だ。“生きる”ためにモンスターに従っているのだ。

「わしらはファンタジアを“売った”んじゃ。自らの命と生活を引き替えに。やつらにとつてみて、このガザは重要拠点じゃった。じゃからこそ、全滅させて都市機能を麻痺させるよりも、わしらを生かして後方基地とした」

それは飛鳥とガルドの思った通りの答えだった。しかしわからないのはやはり、なぜ飛鳥たちを生かしておいたのかだ。食べ物だって飲み物だって普通だった。いくら飛鳥たちが強いとは言っても、殺す機会はいくらでもあったはずだ。

「どうして俺たちを殺さなかったんだ？」

それにはパドムばあさんが前に出てきて答える。

「お前さんたちはファンタジアの人間じゃないからのう。わからんじやろ。この国がモンスターに襲われ始めた二年前から、人間が人間を殺すと、その殺した人間はモンスターになっちまうようになったんじゃよ」

「え……」

これには飛鳥もガルドも絶句してしまう。スピニツチは苦しげに唸って難しい顔をする。

「一種の呪いじゃ。わしらはヤツらの言いなりにはなっておるが、モンスターにはなりとうない。じゃから生かしたまま引き留めて、ヤツらに引き渡すのが約束なんじゃ」

「イスペリアの偵察部隊も、そうやって全滅させられたのか……」

モンスターが跳梁跋扈しているはずの街に、見慣れた平和な風景がある。長い距離と時間、モンスターと戦ってきた人間がそんな風景を見てしまうと最初は訝しむだろう。しかし大丈夫だとわかると、いずれ気を許す。実際、ガザの人々は人間を傷つけるつもりはないのだ。おいしい食べ物と失われたはずの人間らしい喧噪や活気。温かい風呂に心地よい寢床。一日や二日はそうして戦いの疲れを癒す気がついた時には、モンスターの大量に囲まれて逃げられなくなってしまうのだろう。そしてガザの人々は八つ裂きにされる人間の悲鳴を、耳を塞ぎながら聞かされるのだろう。

これで飛鳥とガルドはガザから逃げ出せなくなってしまった。ジヤグワじいさんやパドムばあさんを押しつけて出て行くのは、今の

飛鳥とガルドの力ならば簡単なことだ。すでにこの家を取り囲んでいるはずのガザ市民たちの包囲も、ケガ一つすることなく突破できるだろう。怖いのはジャグワじいさんの持っている大きな斧ではない。ガザ市民たちが振り上げる武器でもない。本当に恐るべきことは、飛鳥たちが逃げれば確実に殺されるであろう、ジャグワじいさんたちガザ市民を人質に取られているということだ。

確かに彼らは人間を裏切った。しかし周囲の町や村の惨状を鑑みれば、その選択は仕方がない、というより逆に頭がいいと賞賛すべきほどこだ。だからこそ飛鳥とガルドは、「自業自得だ」と言ってここを脱出することはできない。飛鳥は相手を倒せばいいという、今までの戦いとはまったく違う窮地に立たされていることを感じる。

「じいさん、あんたたちの置かれている立場はよくわかった。でもな、俺たちは“違う”」

「なんじゃと？」

ガルドは麻袋を肩に担いで、ジャグワの前に立ちはだかる。その気迫に気圧されて、ジャグワじいさんは後ずさりする。

「俺たちは“召喚された勇者”だ。あんたたちを束ねる指揮官の居場所を教えてくださいな。俺たちがこの街を解放する」

ジャグワじいさんとパドムはあさは目を丸くする。飛鳥とガルドが勇者という事実よりも、その申し出に驚いているようだった。

「む、無理じゃ、あのモンスターには絶対勝てん！ あいつは本当の意味でのバケモンじゃ！」

「あのなあ……」

ガルドのくすんだ金髪が炎のように逆立っている。ガルドが本気

で怒っている証拠だ。

「このままここにいたって、俺たちはどうせ殺されるんだろ？ だったらこの街を仕切ってる親玉モンスターと戦わせてくれよ。どっちみち死ぬんだったら、勇者らしく派手に戦って死にてもんだ」

「な」っと、ガルドは飛鳥を振り向いてウィンクする。飛鳥も不敵に微笑んでうなづく。そんな二人の様子をせわしなく交互に見つめていたジャグワじいさんは、深いため息とともに斧を床に下ろす。

「ヤツは…… ヤツは市場にいる。いつも酒を飲んで食いたい物を食って女を犯し、気に入らない人間は気まぐれに殺しているんじゃない？」
「そいつはどんなモンスターなんだ？」

ジャグワとパドムはしばし見つめ合い、あきらめたように肩を落とす。そしてジャグワじいさんが小さなしゃがれ声でため息とともに一言つぶやく。

「^{バーサーカー}狂戦士じゃ」

85話：死闘への葬列

剣呑とした雰囲気の中にも、怯えの色も見える。松明やランタンを持ったガザ市民は、神聖な祭りの夜のようなオレンジ色の光の中にひしめき合っていた。

「これは、戦闘になったらケガじゃ済まねえな……」

「誰が」とは言うまでもないだろう。相手が集団なら、ガルドの魔法の出番だ。しかしモンスター相手ならまだしも、同じ人間を相手に戦いたくはない。人々の顔はオレンジ色の光に揺らめいて幽鬼のように見える。人間としての尊厳をモンスターに売り渡し、自分たちの保身を図ったと言えは悪い。しかしファンタジアの現状を考えれば、苦肉の策だったのだろう。ジャグワやパドムの優しさは決して演技ではなかった。モンスターに引き渡すために引き留めるという下心はあったとしても、ひとときの安らぎを得られたことに変わりはないのだ。

「どこへ行く気だ」

針金のような剛毛を口の周りに生やした、恰幅のいい木こりのような服装をした男が一步前へ出る。

「この街を取り仕切ってるモンスターのところへ行く」

ガルドは気圧された風もなく飄々と言い放つ。狂戦士はよほど恐れられているらしく、周囲の市民たちが顔を見合わせて囁き合う。恰幅のいい男は一瞬身を引いたが、それでも負けじと強面を維持する。

「お前らはその家にいてもらわなければならない」

「オークどもに囲まれるまでか？」

男の太い眉根にしわが寄る。なぜ知っているのかと言いたい顔だ。

「ちょっと待つんじゃ」

家の中からジャグワが出てくる。後ろにはパドムがランタンを掲げてついて来る。ジャグワじいさんはガルドを背中にして市民たちの前に立つ。

「この方たちは“召喚された勇者”たちじゃ。お主らが束になっても勝てん」

「召喚された勇者だと？」

今度こそ市民たちは目に見えて動揺する。やはりファンタジアでも、召喚された勇者は特別な存在なのだろう。中には表情を明るくして希望を見出したような顔をする者もいる。しかし大半は眉間のしわをさらに深くして、より剣呑な雰囲気で詰め寄って来る。

「だったらなおさら勝手に行動させるわけにはいかない」

恰幅のいい男に同調する者たちは、「そうだ、そうだ」とうなずいている。

「じゃからこそ、ベルセルクのところへ連れて行かねばならん。わしらの目的に気づかれたからには、わしらではどうしようもありません」

ベルセルクとは狂戦士の名前だろう。ジャグワの主張を聞いて、恰幅のいい男は周囲の男たちと何やら密談を始める。しばらくすると恰幅のいい男は、手に持った大きな斧でガルドを指し示す。

「わかった、暴れないというなら連れて行こう。もしあんたらが暴れるなら、おれたちは阻止しなきゃならん。あんたらにおれたち普通の人間が殺せるか？」

「あんたらがアタシらを殺すつもりなら、アタシたちは容赦なくアタたちを皆殺しにしてやるよ」

「なんだと？」

「ア、アスカ！」

おとなしく言いなりになって狂戦士のところへ連れて行ってもらはずだったのに、アスカはいきなり挑発し始めてしまった。ジャグワとパドムも啞然として飛鳥を見つめる。

「この街から南の野生モンスターは、かなりの数をアタシが殺した。今この街に迫っているオークとかいうモンスターたちも、アタシたちなら全滅させられる。その狂戦士とかつていうこの街を牛耳っているヤツをぶっ倒せば、アタたちは自由になれるんだろ？」

ざわめきが波紋のように広がっていく。ガルドは飛鳥の意図に気づいて、言葉をつなぐ。

「今現在、イスペリアの主力部隊がこっちへ向かってる。いずれはここはアイリス支援の後方駐屯地になるだろう。それまで持ちこたえられれば、あんたたちはもうモンスタアの言いなりになんかならなくて済むんだぞ」

そこかしこで「援軍」とか「イスペリア」の単語が聞こえる。飛

鳥はとどめとばかりに声を大きくする。

「アタシたちをベルセルクとかつていう狂戦士のところへ連れてって。そいつを倒してこの街を解放する！」

どよめきが起こる。飛鳥とガルドは確かな手応えを感じる。その証拠に、恰幅のいい男は斧を下げ、戸惑いの視線を飛鳥に向けてくる。

「あんたたち、あいつに勝てるのか？」

「もち！」

飛鳥はか細い腕を曲げ、半袖のセーラー服を捲って力こぶを見せる。ぷにぷにとした飛鳥の二の腕は、とても柔らかそうだった。ガルドとスピニッチは顔を見合わせて苦笑する。

「とりあえず、連れていくことには異存はなかるうな？」

ジャグワが恰幅のいい男に念を押す。男は「ああ」と力無くうなずき、その大きな体を横にどける。するとモーゼの十戒のように、市民たちが左右に分かれていく。暗くてよくわからなかったが、ガザ市民たちは数百人は集まっているようだ。長い通りの左右には、見える範囲いっぱいの人垣ができている。遠くの方ではまだ話がうまく伝わっていないらしく、わけがわからないままとりあえずという顔で脇へ移動している。

「じいさんありがとな」

ランタンを持ったパドムを先頭に、飛鳥たちは人の壁の間を進んでいく。

「礼を言われるには及ばん。あんたたちがあいつに勝てるという保証は、どこにもないんじゃないかな」

ジャグワじいさんは厳しい顔で前を見つめている。周囲の人々の顔は、まるで葬列を見送るような表情だ。飛鳥は何となく不安になっ
てくる。

「ねえスピニッチ、狂戦士ってどんくらい強いのか？」

飛鳥の右斜め上を飛ぶスピニッチは、線のような目を少し開き、飛鳥へちよっとだけ視線を送る。しかしすぐに顔を前へ戻し、ぼそりと呟く。

「トンベリと比べたら、大人と子どもぐらいの差があるにや」

飛鳥はほっと胸をなで下ろす。それなら何とか勝てるかもしれない。スピニッチはそんな飛鳥の様子を見て小さくため息をつく。

「大人は狂戦士の方にや」

「え？」

飛鳥は背筋に冷水を流し込まれたような気がして、忙しく羽を動かす。スピニッチの後ろ姿を呆然と見つめていた。

85話：死闘への葬列（後書き）

バーサーカーのレベル設定は、本作品オリジナルです。ご了承ください。

86話・Cruel orgy（前書き）

残酷描写がありますのでご注意ください。

86話：Cruel or gy

ガザの西側には広大な市場が広がっている。縁日の出店のような粗末な店が軒を連ね、朝や夕方には多くの人出で賑わっていたのだろう。現在そこは一体のモンスターによって蹂躪されていた。といっても、破壊されているわけではない。その証拠に、深夜にも関わらず店と店の間の細い路地には煌々と松明が焚かれ、その脇を忙しそうに人々の影が行き交っている。手にはまるまると太った豚や鶏の丸焼きや、芳醇な香り漂う葡萄酒を捧げ持ち、すれ違う者の皿や酒樽には何も残ってはいない。ひっきりなしに行き交う人々の顔は、焦燥と恐怖に彩られている。

「酒が足りんぞ！ もっと持ってこい！」

豪快な笑い声が響き、人々はその度に肩を竦める。赤々とした松明が丸く設えられた市場の中心にある広場に、大男があぐらをかいて座っている。座っているにも関わらず、その背丈は周囲の人間より高い。立てば三メートルには達するであろう。無造作に伸び放題となっている黒髪は長く、先は地面に届きそうだ。全身を筋肉の鎧で固めた筋骨逞しい男だ。上半身は何も着ておらず、腰にぼろのよくな黒い布を巻いている。足には古代ギリシャのようなサンダルを履き、脛の部分に交差した皮で固定してある。その肌は日に焼けて浅黒く、松明の灯りを受けててかっている。引き締まった顔はまさに戦士のそれで、その目の部分には青い光が淡く揺らめいている。子どもならひと飲みできそうなくらい大きな口には、人間とは明らかに違う長い犬歯が上下に生えている。その口で運ばれてくる肉を次々と食らい、酒を飲み、大笑いしている。狂戦士ベルセルクだ。

「ど、どうぞ」

若い女が両腕で抱えながら、特大の木製のジョッキをベルセルクの前へ持つてくる。中には血のように赤黒い葡萄酒がなみなみと注がれている。相当な重さらしく、足下がおぼつかない。案の定、手を伸ばしたベルセルクがジョッキの柄を掴む前に、膝をついてこぼしてしまう。零れた葡萄酒は、ベルセルクの足を濡らし、地面に大きな染みを作ってしまう。

「ああ、す、すみません！」

女は慌ててジョッキを持ち上げるが、すでに中身は半分以上も零れてしまっている。

「オレよりも地面に酒をごちそうするとは、なかなか面白い女だなあ」

ベルセルクは口角を上げて、犬歯を見せつけるようにして笑う。女は声も出せずに固まっている。おもむろに丸太のような左腕で女を持ち上げると、ベルセルクはまるで人形のように服を破いて裸にってしまう。

「いやああああ！」

泣き叫ぶ女の悲鳴が市場中に響く。しかし周囲の人間たちは顔を伏せていそいそと立ち去ってしまう。助けられるわけではないし、立ち止まって見ているのがバレれば次は自分の番になるのがわかりきっているからだ。

「オレを楽しませてくれたお礼に、お前も楽しませてやる」

そういつとベルセルクは腰の布を捲り上げ、棍棒のようなイチモツを取り出す。松明の灯りに照らされたソレの表面には子どもの握り拳ほどもありそんな瘤が無数に盛り上がっており、酒の勢いもあって凶悪なほど反り返っている。

「いや、いやあああ！ 死にたくない死にたくない！」

ベルセルクの手のひらの中で、女は必死に暴れ始める。しかしベルセルクにとってみれば、それは欲情をそそる小動物の仕草にしか見えない。

「ぐへへえ」

ベルセルクは女のむき出しになった性器の入り口へイチモツをあてがい、力任せに挿入する。

「死にたくない死にたくない死にたげばごぼウゲベ」

この世の者とは思えない叫び声がしたかと思うと、女の下腹部から小振りな乳房の間にかけて異様な盛り上がりが迫り上ってくる。ゴムを引きちぎるような音がしたかと思うと女の首が飛び、同時に身体が縦に引き裂かれる。女の頭のあったところには、赤黒い血と臓物にまみれたイチモツの先端が突き出ている。

「なんだ、楽しむ前に壊れちまったか」

ベルセルクは赤黒い肉塊となった女の死体をつまらなそうに見ては笑い、音を立てて食べ始める。時折背骨や大腿骨といった太い骨を吐き出す。松明が異臭に揺らめき、行き交う人々は込み上げる嘔吐を飲み込みながら、何事もなかったかのように食べ物を運び始め

る。その時、市場の東側がざわめき始める。

「ん？」

齒の間に挟まった小腸を指でほじくりながら、ベルセルクが振り返る。見ると店と店の間の路地いっばいに、人間たちがひしめき合っ
て歩いてくる。

「なんだあ？ オークどもが着くにはちと早いようだが」

ベルセルクは女の腕の骨とおぼしき小骨を吐き出し、背後に置いてあつた大剣を取る。幅広の直線的なフォームを持ちベルセルクの身長とほぼ同じ長さのその剣は、“竜殺し”の異名を持つ「ドラゴンスレイヤー」と呼ばれる大剣だ。

「おやおや、これはおいしそうな小娘が来たな」

ベルセルクの青い目が輝きを増す。ガザ市民に連れられて現れたのは、くすんだ金髪と青い瞳のウィザードらしい若い男とライトブラウンの長い髪をなびかせた小柄な若い女だった。

86話：Cruel orgy（後書き）

このバーサーカーは、本作品オリジナルです。同名の漫画等の作品とは一切関係ありません。ご了承ください。

「Cruel orgy」は「残酷な狂宴」という意味です。

「orgy」には「乱交パーティー」という意味もありますが、その意味では使用していません。

87話：狂戦士の脅威

「なんだ、お前のところに転がり込んだ人間どもじゃねえか」

飛鳥たちを率いてきたジャグワに、ベルセルクは酒臭い息を吐く。数メートル離れていても見上げるような大きさだ。筋肉の塊のような全身から立ち上る異臭が、涙腺を刺激する。

「はい、逃げ出そうといたしましたので、やむなくこちらへお連れしました」

怯むでもなく淡々とそう言いながら頭を垂れるジャグワの背中に、パドムが隠れるようにして身を寄せる。

「ということは、バレたのか」

「は…… なかなかに勘の鋭い者どもで……」

さらに深く頭を垂れるジャグワの背中に、ベルセルクの笑い声が雷鳴のように降り注ぐ。

「まあ、イスペリアのまぬけな兵士の中にも、逃げ出そうとしてコイツの餌食になったヤツもいたからなあ」

ベルセルクは肩に乗せたドラゴンスレイヤーを見て笑う。この巨体であの大剣を振るわれたら、普通の人間は木っ端微塵だろう。飛鳥は背筋に流れる汗に不快感を感じながらも、ベルセルクからは決して目を逸らさない。

「で、何でオレのところに連れて来たんだ？ オークどもが来るま

で家にも閉じこめておけばよからう」

どうやらベルセルクの役割は街の統治であって、迷い込んだ人間の処理はオークたちの仕事のようだ。

「それが…… この者たちは“召喚された勇者”のようなんですじや」

「なに？」

ベルセルクの片方の眉毛が上がる。そして顎に手を当てて「ふむ」と唸って飛鳥とガルドを眺める。飛鳥の後ろで忙しく羽を動かしているスピニツチは、眼中になさそうだ。

「ということはフェンドルフィンとイスペリアの勇者か。あいつらまあだあきらめずに、そんなことやってたんだなあ」

ベルセルクは顎をさすりながら楽しそうに目を細める。

「“まだ”ってことは、前にもアタシたちみたいな召喚された勇者が来たことあるの？」

思ったよりしつかりとした飛鳥の声音に、ベルセルクは意外そうな顔をする。しかしすぐに犬歯を見せつけるようにしてにやりと笑う。

「今までお前らのような勇者を三人殺した。どれも歯ごたえはなかったなあ」

ベルセルクの褐色の身体中にまわりつく血と臓物を見れば、“歯ごたえ”が“強さ”の比喩表現だけでないことは容易に察するこ

とができる。

飛鳥は手のひらから血が滲むほど強く拳を握り込む。込み上げる感情が恐怖なのか怒りなのか自分でもよくわからない。ただ一つ言えることは、身体が熱くなってどうしようもないということだ。

「で、どっちから食べばいい？」

ベルセルクはせせら笑いをしながら舌なめずりをする。飛鳥とガルドは顔を見合わせてうなづく。

「二人いつぺんだ」

飛鳥とガルドは同時に答えて地を蹴る。打ち合わせをしたわけでもないのに、そのタイミングは完璧にいつしよだった。

「バギクロス！」

すれ違いざまガルドは両腕を振って、複数の真空の刃をベルセルクに叩き込む。それは攻撃するというよりも、飛鳥のための目くらましを目的としたものだ。

「む？」

虚を突かれたベルセルクは、ドラゴンスレイヤーを持っている方の手で顔を覆って真空の刃を防御する。開いた腹部に飛鳥の右フックが炸裂する。

「うりゃあぁっ！」

重低音がして飛鳥の小さな拳が筋肉の鎧に突き刺さる。体力も万

全、一撃でモンスターを即死させる飛鳥のパンチが炸裂したのだ。ガルドは勝利を確信する。しかし白煙の中に悠然と立つベルセルクは平然と微笑んでいた。

「なんだ、遊んでほしいのか？」

「え…… うあっ！」

ベルセルクはドラゴンスレイヤーを軽く振って、飛鳥を弾き飛ばす。斬ったわけではなく、剣の腹の部分で打ったのだ。飛鳥の身体は弾丸ようにまっすぐと飛んでいき、建物を次々と破壊しながら市場の端の方まで吹き飛ばされる。

「アスカ！」

「女のことよりめえの心配をしるよ」

ベルセルクは一瞬のうちに、上空にいるガルドの背後に跳んでいく。ガルドが逃げようとした時にはすでに、地上へ叩き落とされていた。

「がはっ！」

土煙をあげてガルドの落ちた地面に穴が開く。あの巨体で信じられない速さだ。それに飛鳥の渾身の一撃でさえまったくダメージを与えられなかった。耐久力も尋常ではない。

「くっそ……」

レベルが上がっていたため致命傷にはなっていないが、それでもあばら骨が数本折られたらしい。空っ風のような呼吸に血の味が混じる。どうやらベルセルクはガルドを先に狙っているらしい。

「メインディッシュは後ってことかよ」

土混じりのつばを吐いて、ガルドは穴から這い出す。ベルセルクは襲いかかってくるでもなく、見下した笑いを浮かべながらガルドが上ってくるのを待っている。

「こりゃ、俺もストウーピッド打たなきゃ勝てねえかな……」

ガルドの視線の先には怯えた様子で下がっているジャグワじいさんとパドムばあさんがおり、その足下には二つの麻袋が置いてある。スピニツチに言えば、ストウーピッドを手にするチャンスぐらいは作れるだろう。

「うおりゃあっ!」

いきなりベルセルクの横っ面へ、飛鳥の飛び蹴りが入る。全力で走ってきた勢いでそのまま蹴りを放ったため、さすがのベルセルクもふらつく。

「うおうっ、元気な小娘だなあ」

身を低くして着地した飛鳥に、ベルセルクは頬を撫でながら嬉しそうな表情を向ける。やはりまったくダメージを与えてはいないようだ。

「く…… このバケモノ……」

飛鳥はファイティングポーズを取り、足でリズムを刻む。体力一千の相手に、例え一しかダメージを与えられなくても、それを一千

回繰り返せば倒せる。一万なら一万回だ。飛鳥はパワー勝負ではなく、スピード勝負に切り替える。

「これなら！」

飛鳥はダッシュして直後に真横へ跳ぶ。ベルセルクの巨体はそれだけで死角が多い。飛鳥は横から攻撃を仕掛けると見せかけて、さらにベルセルクの背後に回り込む。ガルドやガザ市民には、飛鳥の姿は目で追えないほどの速さだった。

「おら！」

背後から殴りかかろうとした飛鳥は、真下から強烈なパワーで蹴り上げられる。ベルセルクは飛鳥のスピードに翻弄されることもなく、的確にその位置を把握していた。

「ぐはっ！」

血の固まりを吐き出しながら、飛鳥の小さな身体が夜空に飛んでいく。

「ああ、やっぱりダメじゃ……」

ジャグワはしわだらけの手で顔を覆う。しかしジャグワの背後で震えていたはずのパドムは、いつの間にかいなくなっていた。

88話：魔王降臨

「ばあさん！」

ジャグワは背中に残った温もりを探し求めるように周囲を見回す。何とパドムは荒れ狂う暴風雨のようなベルセルクに向かってよたよたと歩いて行くではないか。

「ばあさん！」

ベルセルクのいる方向へ進むのは足がすくむ。それはまさに「死」そのものだからだ。それでも長年連れ添ってきたパドムのために、ジャグワは必死で追いかける。後ろから抱きしめた時、ベルセルクの巨体はすぐ目の前にあった。

「ば、ばあさん、危ないから下がってれ」

「わしゃあ…… わしゃあもういやじゃ…… 若いもんが死んでいくのを見るのは、もう耐えられん」

パドムの骨張って背筋の曲がった小さな身体は、強い力でジャグワを振りほどこうとしている。

「わしらは息子をこいつらに殺され、嫁は犯された上に食われた。孫の顔ももう見りゃあせん」

パドムの灰色に濁った目に強い光が灯り始める。それはこの街の者たちがなくした人間としての誇りと怒りの灯だ。

「じゃからって、ばあさんに何ができる！ 指先一つで殺されて終

いじゃ」

「ばあさん、じいさん、こんなとこでなにやってんだよ！」

飛んできたガルドが二人を抱き上げ、スピニッチのいるところまで戻す。

「わしゃあ…… わしゃあ……」

パドムは顔中のしわを震わせ、ガルドに何かを伝えようとしている。

「じいさん、ばあさん待ってるよ。俺が命に代えてでもアイツを倒してやる！」

ガルドは足下の麻袋を取り上げる。

「ガルド、まさかアレを打つのかにゃ！」

「ああ、それしか手はねえ！」

麻袋から取り出したのは焦げ茶色の小箱。“ストウーピッド”だ。

「ガルドが暴走したら誰にも止められにゃいにゃ！」

飛鳥は物理攻撃主体のモンクだ。しかしウィザードのガルドが暴走し、全体魔法を使われたらどうするか。それはベルセルクを倒せる可能性と共に、この街の崩壊を意味する。それに何よりも、魔法使いがストウーピッドを打った前例は今までにないのだ。

“ストウーピッド”は本来、戦場での恐怖心を麻痺させるために使う。現実世界でもベトナム戦争などでは覚醒剤の使用例が確認されている。「心を解放する」のがその効能なら、精神と肉体の境目

が曖昧なこの世界において、精神がその母体となる魔法能力にどのような影響が出るのか。それはあまりにも危険な賭けだ。飛鳥の時は周囲に及ぼすその危険性が、段違いなのだ。

「その時は飛鳥に言って、この俺を殺してくれ」

スピニッチはガルドの真剣な青い瞳に何も言えなくなる。飛鳥にしろガルドにしろ、もともとファンタジアがどうなるうとも関係のない立場だ。大切な命を無駄にしなくても、元の世界で平和に暮らす権利がある。それでも飛鳥にもガルドにも、“元の世界に帰る”という選択肢は元々ないようだ。それはスピニッチの胸を締めつける。

「ガルド……」

「うりゃあっ！」

ガルドは飛鳥のしたように、自分の左腕にストウーピッドを刺す。急激に流れ込む薬剤が、一気にガルドの全身を駆け巡る。

「ぐあああっ！」

こめかみに太い血管を浮き上がらせ、ガルドが絶叫する。

「なあにしてんだ？ 待ちくたびれちまったじゃねえか」

スピニッチもジャグワたちも、ガルドに気を取られてまったく気づいていなかった。今やスピニッチたちの周りにガザ市民は一人もいない。ベルセルクが近づいて来ていたために、遠くに逃げてしまっていたのだ。

「ぐあああああ……」

両膝を地面について苦悶するガルドを一瞥すると、ベルセルクはつまらなそうにドラゴンスレイヤーで弾き飛ばす。ガルドは人形のように店を破壊しながら飛んでいく。

「ああ、ガ、ガルド！」

「よおケット・シー。いいところで会ったなあ」

血の滴る口角を持ち上げ、ベルセルクがにやりと笑う。震えながら抱き合うジャグワとパドムをかばうように、スピニッチが短い手足を精一杯大きく開く。

「い、今はアスカとガルドがお、お前によ相手にや、こ、こによ人たちにて、手は出すにゃ！」

ベルセルクは仰け反って大笑する。その声に怯えたジャグワとパドムが、びくつとして山のような狂戦士を見上げる。

「こによ人たちに手は出すにゃ！」

ベルセルクは笑いながらスピニッチの口まねをする。小馬鹿にしたその顔を、スピニッチは細い目で睨みつける。

「どの口が言うか！」

ベルセルクは巨大な剣を振り上げる。このまま振り下ろせば、スピニッチはおろか、ジャグワとパドムも粉微塵だろう。スピニッチだけなら避けられるかもしれないが、スピニッチに避ける気はなかった。ぐつと目をつぶってスピニッチは来るべき衝撃に身を固くす

る。しかしいつまで経っても衝撃が来ないことを不審に思い、ゆっくりと目を開ける。なんとベルセルクの頭に、飛鳥がしがみついていた。

「このお！ スピニツチとじいさんたちに手を出すなあ！」
「アス力！」

ベルセルクの背後から飛びついたのだろうか、両足でその太い首を絞め、両手で激しく頭を殴りつけている。まるで子どものケンカだが、ベルセルクにとっては“ウザい”ようだ。

「こいつ、いつの間に！」

左手を回して飛鳥の小柄な胴体を掴む。

「ぐあっ！」

息のできなくなった飛鳥の足が、ベルセルクの首から外れる。ベルセルクはそのまま飛鳥を持ち上げ、全身を握りしめる。

「ぐあああああっ！」

飛鳥は血の混じった唾液と涙をまき散らし、大きく口を開けて呼吸しようとする。力無い両手がベルセルクの指を叩くが、蚊が刺したほどもダメージを与えることができない。

「おっと、このままつぶしたんじゃ味が落ちちまうな」

力を緩めたベルセルクは、飛鳥を高々と持ち上げる。そのまま力いっぱい、地面へ投げつける。地雷が爆発したように土煙が巻き起

こり、地面に大穴が空く。普通の人間ならば肉塊になってもおかしくはない衝撃だったが、飛鳥はとっさにシールドを張ったようで、穴の底で半ば土に埋もれてうつぶせに倒れている。

「どれ、どこからいたくかな」

舌なめずりをしてベルセルクは穴の底から飛鳥を取り出す。まさに人形のように全身を弛緩させた飛鳥は、気を失っているようだ。

「とりあえずこの変な服が邪魔だな」

ベルセルクが飛鳥のスカートに指をかけた時、少し離れたところで爆発が起きる。

「ん、なんだ？」

そこはさっきガルドを弾き飛ばした場所だ。周囲の店の残骸が四方に飛び散り、黒い炎が夜空に向かって伸びている。その炎の中から異形の怪物がゆつくりと空中に浮かんで出現してくる。

「ま、まさか……」

スピニツチの声が怯えてかすれている。ソレは赤黒く巨大なモンスターだった。身長はベルセルクと同じくらいはあるだろうか。硬質で蝙蝠のような黒い羽を左右に大きく広げ、全身の筋肉は赤黒く脈動している。頭部にはうねった二本の角が長く伸び、目の部分には紫色の光が二つ、淡く揺れている。笑いの形に切り裂かれた大きな口には鋭い牙が並び、白い息を吐き出している。ソレはまさに“悪魔”だった。

「ま、“魔王変化”にや……」
「ガ、ガルド？」

スピニツチのつぶやきに飛鳥の声が重なる。ダメージで目の見えない飛鳥は、少し離れたところにガルドの温もりを感じていた。

89話：魔王と狂戦士

“魔王変化”とは召喚魔法の一種である。闇の魔法使いの最上級種族である“悪魔”を召喚し、その身に融合させるのが“悪魔変化”と呼ばれる。術者自身の魔法特性によっては、上級悪魔になったり下級の悪魔にしかねなかったりする。

ただまれに術者の魔法特性が“悪”で、さらに強力な魔力を有している場合に限って“魔王変化”が起こる場合がある。悪魔の王たる“魔王”の力はすさまじく、大陸一つが消し飛ぶほどの魔力を持つ。もちろん“魔王変化”はあくまでも術者自身の魔力がベースとなるため、本物の“魔王”ほどの力はない。しかし“魔王変化”ができること自体かなり強力な魔法使いだということができ、通常のウィザードでは比較にならないほどの魔力を発揮する。

「なんだと？ 人間風情が“魔王変化”だと？」

ベルセルクは飛鳥を投げ捨て、ドラゴンスレイヤーを斜に構える。戦士として本気になった証拠だ。

「“魔王変化”ができるのは、高レベルのネクロマンサーか闇の魔導士ぐらいのはず！ 見た目でごまかそうだったってそうはいかん。オレが化けの皮を剥ぎ取ってくれる！」

ベルセルクは数十メートルの距離を一気に跳躍して“魔王”ガルドに上段から斬りかかる。ガルドは両腕を力無く前方に垂らしたまま、不気味な小声で何か呟く。するとガルドの前に紫色の魔法陣が現れる。二重の円の間に不思議な文字がぐるりと描かれ、内側の小さな円の中には三角形を互いに逆向きにしたマークが浮かび上がっている。いわゆるヘキサグラムといわれる“六芒星”だ。外側の円

には、上下左右斜めと、八方向にテレビアンテナのような“角”が突き出ている。見た目は船の操舵輪のようだ。

「おらあああああつ！」

不気味な光を放つ魔法陣に怯んだ様子も見せず、ベルセルクは巨大な剣を振り下ろす。しかし金属的な音がして、ドラゴンスレイヤーは鋼鉄の壁に当たった竹刀のように簡単に弾かれる。

「なにっ！」

剣が跳ね返った反動で万歳をしたような格好になったベルセルクは、体勢を崩して後ずさってしまふ。ガルドは素早く何事かを呟く。その言葉はスピニツチにも理解できない闇の言葉だ。

魔法陣の中心部が急激に盛り上がっていく。紫色の魔法陣の線が、歪んで前方に膨らんでいく。その膨らみが限界に達した時、魔法陣は眩い紫色の光の塊になり、一直線にベルセルクの胴体へ向けて伸びていく。

「うがあつ！」

狂戦士は多用しないだけでその魔法能力は高い。自らのパワーにブライドを持っているので、普段は使わないだけだ。しかしさすがのベルセルクもブライドを捨てて、シールドを張る。ベルセルクの赤いシールドにガルドの紫色の光が激突し、ベルセルクは真後ろへ吹き飛んでいく。そのまま市場を破壊しながら飛ばされ、街の外縁を巡る市壁さえも突き抜けて外の森まで飛ばされる。

「す、すごいにゃ…… ほ、ほんもによ “魔王変化” にゃ……」

ガルドは空中に数メートル浮かんだまま、ゆっくりと前進し始める。その姿はまさに魔王の存在感そのもので、スピニッチは近寄ることさえできない。白い息を吐きながら、ガルドはまっすぐと浮遊していく。

「ガ、ガルド？」

飛鳥の傍をガルドが通過しようとした時、うつぶせに倒れていた飛鳥が上体を起こす。少なくとも肋骨はすべて折れているのだろう。土で汚れた顔を苦痛に歪め、飛鳥の口からは苦悶の声とともに血の混じった唾液がこぼれる。

そんな飛鳥をガルドは一瞥し、興味なさげに浮遊していく。とりあえず飛鳥を敵だと認識しているわけではないようだ。ガルドの狙いはあくまでもベルセルクのみ。ということは“魔王変化”していても、ガルドとしての理性はまだ残っている可能性がある。

「くっそおおお！ 人間ごときが！ このオレ様にダメージを与えるなどとは、あつてはならんだ！」

市壁を飛び越え、市場の店を路傍の小石のように跳ね飛ばしながら、ベルセルクが剣を構えて走ってくる。その剣は白く淡い光に包まれている。

「魔法剣にゃ！」

ベルセルクは剣に魔法属性を付与し、ガルドの魔力に対抗しようとしている。狂戦士としての人外の膂力に魔法効果が加われば、どんな魔術的な防壁も紙のように切り裂かれてしまう。ガルドはそれを知ってか知らずか、また前面に魔法陣を張る。

「無駄無駄無駄あゝ！」

狂気笑顔で跳躍したベルセルクは、ガルドを袈裟懸けに斬りつける。今度は弾き返されず、魔法陣は斜めにまっすぐと切り裂かれる。

「うおらあ！」

地響きを立てた着地と同時に身体を一回転させたベルセルクは、そのまま横薙ぎに大剣を振るう。しかしガルドはその身体からは想像もつかないほどの俊敏さで両足を畳んでジャンプし、剣を避ける。そして音もなく着地すると、空振りに身体の流れたベルセルクの頭を驚掴みにする。

「な？」

ベルセルクの顔が驚きと恐怖に歪む。ガルドは耳まで裂けた口を大きく開き、そこに紫色の光を集束させ始める。

「ま、まさかそれは……」

ガルドの口いっぱい溜まった紫色の光は、膨大な光を周囲にまき散らしながらまっすぐと伸びる。光が通り過ぎた後、ベルセルクの首から上は何もなくなっていた。

89話：魔王と狂戦士（後書き）

「悪魔変化」「魔王変化」等の設定は、当作品のオリジナルです。もし他に似たような設定があっても、それは偶然の一致なのでご容赦ください。

90話：狂戦士たち

重々しい音をさせて、首のないベルセルクの死体が地面へ落ちる。手足は小刻みに痙攣し、少し離れたところには巨大な剣が横たわっている。ガルドの圧倒的な勝利だ。

「ガルド、やったにゃ！」

抱き合って震えるジャグワとパドムの横で、砂煙を浴びて白くなったスピニツチが喜んでいる。

「ガルド……」

胸を押さえた飛鳥がふらつきながら立ち上がる。体中擦り傷だらけで血まみれだ。

胸の前で何かを掴むような形にしていたガルドはゆっくりと両手を下げ、夜空を見上げる。目の部分に当たる紫色の淡い光が揺れ、白い息が口の中へ急速に吸い込まれていく。次の瞬間、狼の遠吠えのような、それでいてこの世の生き物とは思えないような不気味な声で雄叫びを上げる。それはこれから世界を滅ぼすと宣言しているようにも聞こえ、その声を聞いた者は言い知れぬ不安に苛まれる。けれども飛鳥とスピニツチには、ガルドの勝利の雄叫びに聞こえていた。

「こによままオークたちを殲滅すれば、こによ街は解放されるにゃ！」

「ま、まだじゃ……」

「によ？」

いまだに全身を震わせているパドムをしつかりと抱きしめ、ジャグワはスピニツチへ厳しい表情を向ける。パドムは目を見開いてベルセルクの死体を凝視している。

「まだってどういう意味にや？ あいつは死んだにや」

スピニツチは首のないベルセルクの浅黒い巨体を見る。すでに痙攣は収まり、ただの肉の山でしかない。今後このあたりのカラスや犬は、さぞかし肥え太るに違いない。

「こ、この街を取り仕切っている狂戦士は全部で五体いるんじや。ベルセルクが死んでも、あと四体もの狂戦士がおる。あ、あんたら早く逃げた方がええ！ ヤ、ヤツらが戻って来る前に……」

ジャグワが話していると、街の中央部の方からガザ市民が悲鳴を上げながら大勢逃げて来る。

「わああ、ヤツらが戻ってきた！」

「オーク部隊も間もなく到着するそうだ！」

逃げまどう群衆の遙か後方からは土煙が上がり、破壊された家屋の瓦礫が夜空に次々と舞い上がる。時折豆粒のような人間が数体、空中へ投げ上げられ、瓦礫といっしょに落ちていく。数百人はいるであろう群衆が市場へ逃げ込んでくると、ベルセルクの死体と“魔王”にぎよっとして立ち止まる。

「じ、じいさん、これどういうことだ？ あ、あいつはなんだ？」

動揺してジャグワに詰め寄っているのは、家の前で会った木こりのような恰幅のいい男だ。その手には大きな斧を持っている。戦闘

用ではなく、本物の木こりが使う伐採用の斧だ。

「あ、あの青年が妙な薬を打つと魔王変化をしてしまった。それでベルセルクをあっという間に倒してしまったんじゃ」

「な、なんだと……　じゃあ、あの不気味なのはあの若者か」

男は驚いてガルドを見る。周囲の市民たちも男に釣られて、ガルドに期待を込めた視線を送る。その時地響きを立ててガルドと市民たちの間に巨大な狂戦士が着地する。盛り上がった筋肉。逆立った黒髪。巨大な幅広の剣。若干髪の長さがベルセルクより短いが見間違ふことなき狂戦士だ。

その狂戦士は目の部分の青い光を揺らめかせ、ベルセルクの首のない死体を見下ろしている。すると途端に雷鳴のように大声で笑い出す。

「なんだベルのヤツ、やられちまったのか。情けないヤツだ。留守番の一つもまともにできんとは」

直後、市民たちの後ろで市場の店が数軒まとめて爆発する。土埃と白煙の中から、やはり同じような狂戦士が現れる。しかし手にしているのは剣ではなく巨大な斧だ。

「どうやらあの魔王変化したウィザードにやられたらしいな。久しぶりに殺しがいいのある獲物のようだ」

その狂戦士は斧を片手で一振りし、肩に担ぐ。重さだけでも大人十人分は優にあるだろう。斧を持つ狂戦士は、鋏のついたヘアバンドで無造作に髪を立てている。

「ベルが簡単にやられたくらいだからな。一人じゃきついだろう。」

でも三人がかりならなぶり殺しだな」

「さ、三人？」

スピニツチは周囲を見回す。すると頭上から美しく青い月をバツクに、黒い影が降りてくる。市場の店を数軒踏みつぶし、地響きを立てて着地したのは三体目の狂戦士だ。

「ブタどもは鈍くさくて敵わねえ。ドヌーデルに押しつけて先に来ちまったぜ」

その狂戦士は両手に刃しかない斧を持っている。接近戦でよく使われるダブルアックスだ。しかし通常のダブルアックスより数倍も大きい。この狂戦士はスピード重視で戦うスタイルなのだろう。

「でもなんだあ？ 酒とメシを楽しみにして帰って来たつてのに、出迎えもなしに臭えベルの死体しかねえってどういうこった？」

ダブルアックスの狂戦士は、ベルセルクの死体に唾を吐く。応えたのはベルセルクと同じドラゴンスレイヤーを持つ狂戦士だ。

「どうやらあいつにやられたらしい。“魔法変化”だ。タイマン勝負じゃ敵わないな」

「俺は別に何でもいい。魔王変化した人間なんか食ったことないしな。さっさとやっちまおうぜ」

ドラゴンスレイヤーの狂戦士の言葉に、二番目に現れた巨大な斧を持つ狂戦士が応える。周囲の数百人というガザ市民は眼中にないようだ。

「おい、その変わった格好の女はなんなんだ？」

ダブルアックスの狂戦士は、ドラゴンスレイヤーの狂戦士から少し離れたところに立つ飛鳥に目を止める。ドラゴンスレイヤーの狂戦士は今気が付いたように飛鳥を見て、目を細める。

「お前はあの“魔王変化”したヤツの仲間だな。連絡を受けたのは男女二人だったからな」

このドラゴンスレイヤーの狂戦士は頭がいいらしい。飛鳥の傷を見て、ベルセルクとの戦いの様子を読み取ったようだ。

「お前、もしかして“召喚された勇者”か？ だったらあいつの“魔王変化”にも納得がいく」

飛鳥は胸を押さえながら荒い息をついている。ベルセルクと同じかそれ以上の狂戦士が三体。しかももう一体もオーク部隊と共に間もなく到着する。満身創痍の自分はとてもではないが戦える状態ではない。立っているだけでやっとなのだ。この場合は“魔王変化”したガルドだけが頼りだ。しかし三体同時に相手をして勝てるものなのだろうか。

「レン、ジダンお前らはあの魔王変化と遊んでろ。俺はこの女をやっつてから遊ぶ」

「ちっ、ロンがそう言うなら仕方ねえ」

ジダンと呼ばれたダブルアックスの狂戦士は、苦々しげにガルドの方を向く。

「殺さずにオレたちの分まで残しておけよ」

レンと呼ばれた巨大な斧を持った狂戦士が苦笑して歩き出す。どうやらロンと呼ばれたドラゴンスレイヤーを持つ狂戦士が、この中では一番上の立場らしい。

「けけけ、魔王変化した人間って、どんな味するんだろうなあ」

ジダンも舌なめずりをする。この狂戦士は女より食い気らしい。ガルドはゆっくりと空中で向きを変え、二体の狂戦士と対峙する。

「さて、殺さずにやるなんて無理だが、せめて少しは楽しませてくれよ」

ドラゴンスレイヤーを担いだロンが、飛鳥に迫る。

「くっ……」

飛鳥もむざむざとやられるわけにはいかない。しっかりと地面を踏みしめてファイティングポーズを取る。それでも全身に激痛が走り、額には脂汗が滲み出る。勝敗は歴然としている。飛鳥は心の中で覚悟を決める。クウェンディ女王に言った通り、ここでゲームオーバーかと。

90話：狂戦士たち（後書き）

< 狂戦士たち >

? ベルセルク：ドラゴンスレイヤー

? ロンベルク：ドラゴンスレイヤー

? レンドルフ：トルネードアックス

? ジダンヘル：ダブルアックス

? ドヌーデル：ロングソード、狂戦士の盾（バーサーカシールド）

91話：飛鳥覚醒

ロンの青い目の輝きが一層増し、飛鳥に飛びかかろうとしたその瞬間、小さな人影が割り込んで来る。なんとそれはパドムだった。

「や、やめとくれ！ も、もう若いもんが死ぬところは見とうない、この娘がなにをしたっていうんじゃ。わしらがなにをしたっていうんじゃ！」

パドムは丸まった背中を精一杯伸ばし、山のような狂戦士の前で両手を広げている。その足は小刻みに震えているが、絶対に飛鳥の前からは動かないという強い意志を感じさせる。

「ん〜なんだ？ 虫ケラのようなババアが」

ロンは楽しみを邪魔されたためか、不機嫌そうに顔をゆがめる。

「ばあさん！」

パドムのいないことに気づいたジャグワが、よろよろと走り出す。飛び立ったスピニッチがジャグワを追い抜かした瞬間、パドムの身体が斜めに分断される。ロンがドラゴンスレイヤーを振るったのだ。

「ばあさん！」

「ばあちゃん！」

目の前でまっぴたつになって絶命するパドムの血が、飛鳥に飛び散る。ジャグワは手を前に伸ばしたまま、その場に力無く膝をつく。

「ばあちゃん……」

驚愕に見開かれたパドムの目が飛鳥を見つめている。その目からは涙がこぼれている。すでに絶命しながらも、パドムの両手は飛鳥を守るように左右に広げられている。

「うるさい虫ケラだ、さて、いதாகとするかな」

ドラゴンスレイヤーを再度肩に担ぎ、ロンが飛鳥の方へ一歩踏み出す。しかしロンはそこで動きを止める。

「んん〜？」

違和感を感じて足下を見ると、なんとジャグワじいさんが斧を振り上げてロンの脚を斬りつけていた。

「よくも、よくもばあさんを！　許さん、許さんぞ！」

かつては野山を駆け巡って薬草を採集していたジャグワにとって、道なき道を探索するための斧は必需品だった。しかしその愛用の斧を植物以外に向けたことはない。今ジャグワはその長い生涯で初めて怒りと憎しみを覚えている。長年連れ添った愛する年老いた妻が、目の前で簡単に殺されてしまったのだ。

今まで狂戦士やモンスターの言いなりになっていたのは、パドムを守るためでもある。そして故郷でもあるガザのためでもあった。それともはやジャグワにとってはどうでもいいことになってしまった。ジャグワは両手で持った愛用の斧を、渾身の力を込めて何度もロンの脚に叩きつける。例え傷一つつけられなくても、そうしないといられないのだ。

「この、このおっ！」

ジャグワの力で狂戦士に傷をつけられるわけがない。それがわかっていて何度も攻撃するジャグワの姿に、飛鳥の胸が熱くなる。しかしこれは自殺行為だ。

「ふん、またうるさい虫ケラか。どうやらこの街の利用価値は、もうなさそうだな」

面白くもなさそうに、ロンはジャグワを掴み取る。

「ぐわっ！」

ジャグワは斧を取り落とし、ロンに全身を締め付けられる。ジャグワの目からは涙がこぼれ、それでも手を伸ばしてロンの指をほどこうとする。

「ジジイなんぞ食っても味がしないからな。ぷちっつつぶしてメインディッシュを早くいたたくとするか」

「ぐああああっ！」

枯れ木の折れるような音が連続して聞こえ、ジャグワの身体がロンの手の中で異様に細くなる。

「や、やめろ……」

胸をナイフで何度も刺されるような激痛に耐え、飛鳥が声を出す。ところがその瞬間、飛鳥の声に重なるように、大勢の喚声が夜空に響く。何とガザ市民たちがロンに次々と飛びかかっていく。

「もう我慢できねえ！」

「人間をバカにするな！」

「やっちまえ！」

男も女も老人も子どもも、あらゆる年齢、あらゆる職業のガザ市民たち数百人がいつせいにロンに飛びかかっていく。まるで群がる蟻のように、ロンの身体はガザ市民で覆い尽くされる。

「な、なんだこいつら、虫ケラどもが！」

ロンは力任せに両手を振り回し、脚で蹴り上げる。その度に数人のガザ市民がつぶされ、引き裂かれて死んでいく。それでも人々は恐れもせず次々とロンへ飛びかかっていく。その様子を見ると、飛鳥の胸の奥は煮えたぎるように熱くなってくる。

「ば、ばあさん……」

手を開いたまま絶命しているパドムの横で、手足を変な方向に曲げたジャグワが必死で地面を掻い繰っている。次の瞬間、ロンの野太い足がジャグワの胴体を踏み潰す。体中にガザ市民をぶら下げながら、ロンは青い目を強く輝かす。

「このくそジジイ、お前のせいで虫ケラどもがうるさくてしょうがない！」

「ごふっ……」

ジャグワは口から血の塊を吐き出して息絶える。飛鳥の目の前にはセピア色に染まっていた昨夜の団らんの光景が、色鮮やかに蘇って来る。その時、飛鳥の中で何かが弾けた。

“魔王”ガルドは苦戦していた。確かに一対一では狂戦士に勝てる。しかし同時に二体を相手にするととなると、途端に形勢は逆転する。もう一体にはガザ市民たちが群がり、足止めをされている。三体同時に攻撃されたら、さすがの“魔王”ガルドでもレンと呼ばれた巨大な斧を持つ狂戦士の言った通りなぶり殺しにされるだろう。

ジダンとレンは巧みに位置を変えながら、常にガルドを挟み撃ちにできる攻撃態勢を取っている。ガルドが一方向しか強力なシールドを張れないのを見透かしての作戦だ。

「ジダン、ヤツの弱点は口だ！　魔王はすべて詠唱と魔光砲で攻撃してくる！　口を抑えちまえば後はパワーで何とかできる！」

レンは巨大な斧を縦横無尽に振り回し、ガルドに詠唱の隙を与えない。ガルドはまだダメージは食らっていないが、防戦一方だ。何度目かの回避行動の末、ガルドはとうとうジダンに背後から捕まってしまう。ガルドを両脇から羽交い締めにし、ジダンは右手のハンドアックスをガルドの胸に突き立てる。ガルドの口から白い息といっしょに、鮮血が霧のように吐き出される。

「ぐへへえ、こうなりゃこっちのもんだ」

ジダンは左手の刃をガルドの口へ差し込もうとする。ガルドは牙で刃を受け止め、高い金属質な音をさせて噛みしめる。

「へへ、どこまでがんばれるかな」

ジダンの目の光が赤みを帯びてくる。狂戦士が血に飢えている証拠だ。

「一息に殺してやる」

レンが巨大な斧を横に構える。ガルドを真横にぶった斬るつもりなのだろう。

「じゃ肉付きの良さそうな下半身は俺がもらったぜ」

レンが舌舐めずりをして斧を振るおうとした時、ロンのいる辺りで強烈な光が発生する。金色に輝くその光は、夜中なのにまるでそこに太陽が落ちてきたかのようなだった。

92話：スーパーモンク

飛鳥にとって“キュア”の魔法はきっかけに過ぎなかった。複雑な数理計算の第一歩が「+」「-」であるように、飛鳥にとってフェンドルフィンで手に入れた“キュア”は彼女の中で大きな進化を遂げていた。

もともと精神が“負”であつた飛鳥は、ファンタジアにおいては“魔”の力に通じる潜在力を有していた。それが様々な経験や戦いを通じて研ぎ澄まされ、強化され、もはや飛鳥にとって肉体は精神の付随物に成り下がっている。心の傷は確かにその人の一生に関わってくるが、いつまでも引きずって生活することはほとんどない。どんなに深い傷だろうがいつかは癒え、それを人は乗り越えていく。飛鳥にとって肉体の傷とは心の傷に比べれば遥かに浅いものであつたし、考え方を変えるだけで落ち込んでいた人が明るくなれるように、彼女自身が強くそう望めば死なない限り完全に治癒されるものでしかないのだ。

飛鳥の全身は黄金色の光に包まれている。ストウーピッドを打つた時と同じように髪は逆立ち、全身の傷は見る間に修復されていく。そしてイデアの街でトンベリと戦ってから今までの戦闘経験が、すべて飛鳥の肉体に積み上げられていく。

飛鳥の頭上ではめまぐるしくチャイムのようなファンファーレが鳴り続け、目に見えない数字が早送りのように進んで行く。

「ク、クラスチェンジにゃ……」

眩いばかりの飛鳥の光に線のような目をさらに細め、スピニツチは呆然と空中に停止している。

「うあああああああ！」

飛鳥の周囲の地面が地割れを起こし始める。飛鳥のあまりのパワーに耐えきれなくなってしまったのだ。半壊した市場の建物は次々と崩れ始め、地震のような揺れが強くなり始める。しかしそれが唐突に静まる。飛鳥の全身から放出していた金色の光は、淡くほのかな揺らめきとして落ち着いている。飛鳥は両手を身体の横に垂らしたまま、足を肩幅に開いて静かにロンを睨みつけている。その静かな怒りは見ている者を凍りつかせるのに十分な恐怖を感じさせる。

「こ、この小娘、何をした！」

我に返ったロンが、市民を振り払いながらドラゴンスレイヤーを振り上げる。その大きさと重さからは想像もつかない速度で振り下ろされた大剣は、確実に飛鳥の脳天に叩きつけられたかに見えた。しかしロンの剣は、飛鳥の頭の上で静止画像のように瞬時に止まる。その瞬間大きな音をさせて、飛鳥の周囲の地面が大きくすり鉢状にへこむ。飛鳥はロンの上段斬りを左の手のひらで受け止めていた。

「なに！」

ロンの青い目が色を失う。目の前で飛鳥の姿がかき消える。次の瞬間、飛鳥の右肘が、ロンのみぞおちに深々と突き刺さっていた。

「ぐぶうつ！」

黄色い胃液を吐きながら、ロンと数人の市民が数十メートル後方へ吹き飛ばされる。飛鳥のその技は偶然ではあるが、現実世界の太極拳における“八覇”の型であった。

「はあっ！」

飛鳥は着地すると即座に右足を軸に半回転し、左足を一步踏み込むと同時に右拳を前へ突き出す。直後、ガルドへ向けて斧を振るおうとしていたレンの左肩に大穴が空く。“遠当て”だ。

「ぐあっ！」

少しレベルの高い“格闘家”ジョブを持つ戦士なら、“遠当て”ぐらい誰にでもできる技だ。寺院に行つてそれなりのナイトを払えば、誰にでも手に入れられるからだ。その程度の技に、狂戦士がダメージを食らうわけがない。しかし飛鳥の“遠当て”によって、レンの左肩には簡単に大穴が空いてしまう。

「ま、間違いにやいにや…… 飛鳥は…… 飛鳥は“スーパーモンク”にクラスチェンジしたにや！」

飛鳥の背中では、三枚目の花びらが青い光を放っている。

「いまだ、やっちまえ！」

倒れたロンにガザ市民が手に武器を持って襲いかかる。いくら弱い一般市民たちとはいえ、致命傷に近いダメージを受けていては、市民たちに殺されるのは時間の問題だろう。

そしていきなり遠い後方から攻撃を受けたレンは、金色に淡く輝く飛鳥を呆然と見つめている。

「な、なんだあの小娘は……」

その隙をガルドが見逃すはずはなかった。ガルドはすかさず自分の胸へ両手の爪を突き立てる。

「ぐおお！」

獣のような叫び声を発すると、ガルドの胸の中央部が縦に裂かれる。ガルドはさらに自分の肋骨を外側へ引き出す。ガルドの胸は、まるで肋骨の花弁が開いたように開かれる。

「ま、まさか！」

異変に気づいたレンが振り返った時はすでに、紫色の膨大な光が目の前に膨れあがるところだった。

ガルドの口から発せられる“魔光砲”の魔力の出所は“心臓”である。口をジダンに抑えられているガルドは、その心臓を剥き出しにさせ、レンへ魔光砲を放ったのだ。巨大な紫色の光の球体がレンを押し包み、一瞬のうちに蒸発させる。持っていた巨大な斧さえも、気体となって消えてしまった。

「まま、まさか……」

あまりの急展開に、ガルドを掴むジダンの力が緩む。すかさずガルドは身体を回転させ、ジダンの腹部へ深々と右手を刺す。

「ぐうばおおっ！」

ジダンの褐色の背中から、ガルドの右手が突き出る。その指には蛇のようにうねった腸が絡みついている。上体を折り曲げたジダンの目の前には、不気味にうごめくガルドの赤黒い心臓がある。ジダンの記憶はそこで途切れる。ガルドの再度放った魔光砲によって、ジダンの上半身は蒸発してしまったからだ。

『アスカ、このまま行くぞ』

飛鳥の頭の中に、ガルドの声が響く。飛鳥はガルドを見つめてしつかりと頷く。戦いはまだ終わってはいない。最後の狂戦士一体と一千はいると思われるオーク部隊。そしてその先に待ち受ける無数のモンスター軍。ガルドのストウーピッドの効果が切れるまであと二十時間ほど。それまでできる限りアイリスに近づいておかなければならない。“魔王変化”の解けたガルドに、まだ命があるとは限らないのだ。

92話：スーパーモンク（後書き）

「スーパーモンク」は「スーパーサ○ヤ人」ではありません。ファイナルファ○タジーシリーズのクラスチェンジから流用しました。

93話：朝靄の小さな村で

ガザの街からファントジア北部を横切る形に伸びている“C六街道”。“水と魔法の国アイリス”とファントジアを隔てるローレンツ山脈を遥か北に臨み、その広い街道は緩やかにうねりながら東へと続いている。イスペリアからガザまでの“B二街道”の石畳ほど整備されていないが、“C六街道”はローレンツの山々から切り出された石灰岩が敷き詰められ、通称“白の道”とも言われている。夜になお白く浮き上がって見えるその道は、村や町の少ないファントジア北部を走る馬車にとっては非常にありがたい街道である。

人里離れた森に囲まれた街道のど真ん中で脱輪したりすれば、それはイコール死をも意味する。今でこそモンスターの跳梁跋扈する地獄の街道となってしまうたが、以前も野犬や血に飢えた狼などによつてその尊い命を失った行商人や旅人は多い。村から村へ、町から村へ、日の高いうちに移動するためにはどうしても馬に鞭打って高速で移動しなければならない。現実世界でいうところの“高速道路”に当たるといえばいいのだろうか。だからこそこの街道はそういう馬車のために固く整地されているのである。その白い街道は今や、血の街道と化している。

四肢を引きちぎられたり、細かな肉塊と成り果てたオークの死骸が、美しい“白の道”を赤く染め上げている。両脇のブナの木は生々しい白い傷跡をさらけ出し、固く踏み固められていた街道には、何かが発したような大穴がいくつも空いている。オークたちの死骸に埋もれて、胴体のど真ん中に大穴の開いた浅黒い肌の狂戦士の死体もある。

“オーク”は豚のような顔つきをした妖精である。妖精と言っても、現実世界で有名なティンカーベルのような可愛らしい生き物ではない。殺戮を本能とした凶悪なモンスターである。身長は大きいもので二メートル以上、小さいものでも一メートル七十センチメー

トルほどで、平均すると人間よりは若干大きめといったサイズだ。

黒に近い石炭色をした肌で、頭髮は一本も生えていない。濁った赤い目をしており、下あごが極端に突き出ている。そこから真上に林立した牙は鋭く、常に臭い涎を垂らしている。言葉を話すことはできないが、若干理解することはできるようだ。粗末な布を身体に巻き付け、基本的に錆びた銅製の剣を装備している。中には銅製の盾や槍を持っているオークもいる。基本的に群れで行動し、視覚よりも熱を感じて襲ってくる。洞窟や深い森ではその能力が発揮され、手練れの剣士でさえあつという間に殺されてしまうこともある。

オークは魔法こそ使えないが、痛覚もなく、どんなに攻撃しても平気で反撃してくる。腕の一本や二本を失っても、その強力な顎で噛みついてくる。ある意味アンデットモンスターに近い存在だろう。ファンタジアを占領したモンスター軍のほとんどが、実はこのオークである。次に多いのがゴブリンだが、強さで言えばオークとは比べものにならない。ゴブリンが雑兵なら、オークはモンスター軍の実質的な正規兵といったところであろう。

「アスカ、ガルド！」

ガザの北東約二百五十キロメートル。朝靄の霞む深い森の中の小さな村で、奇妙なアニメ声がこだまする。ガザでの死闘から丸一日と半が経過している。

「アスカあ！ ガールドおー！」

現在のファンタジアの常識からすれば、この行為は自殺行為ではない。いくら日が昇った朝だとしても、ファンタジアのど真ん中でこれだけ大声で叫べば何かしらのモンスターをおびき寄せてしまう。しかし声の主、スピニッチにしてみればその心配は皆無なのであった。

村に至る“C六街道”からの小道には、無数のモンスターの死骸が散乱している。あまりにもバラバラに惨殺されているため、元々の正確な数はわからない。少なくとも数百はいるのは間違いないだろう。その死体の破片は点々と村へと続いており、村の中にも無数に散乱している。特にひどいのが村の中央にある共同井戸付近で、オークやゴブリンといったモンスター軍に混じって獣タイプや植物タイプの野生モンスターまでいる。村の建物もほとんどが破壊されてはいるが、それはきつとモンスターによるものではないだろう。なぜならその傷跡は、明らかに強力な魔法攻撃による焼け跡ばかりだったからだ。今この村を中心として半径数ルキアにモンスターは一匹もいないのである。ケット・シーであるスピニッチを除いては破壊されていない建物を中心に、スピニッチは一軒一軒丁寧に覗き込んでいく。二人分の麻袋を持っているために、ふらふらして安定した飛行ができない。飛鳥にしろガルドにしろ、今現在活動していないのは確かだ。なぜならスピニッチの“位相転移魔法”が通じないからだ。そこから考えられるのは、二人とも気絶しているか寝ているかもしくは、死んでいるか。ガザの街から必死になって二人を追いかけて来たが、重い麻袋二つを担いできたために結局ここまで追いつくことはできなかった。

「ス、スピニ……」

村の一番西の外れにある粉挽き小屋を覗いた時、二階の板敷きの間で微かな声が聞こえる。飛鳥の声だ。

「アスカ！」

スピニッチは二階の木窓から飛び込んで行く。中には白い粉まみれになった飛鳥が壁に背をつけて座っており、その膝の上には力無く横たわったガルドのくすんだ金髪があった。

93話・朝霧の小さな村で（後書き）

＜「ファンタジア」の距離を表す単位＞

ールキア＝一マイル＝1,609.344m

ーヘドル＝一ヤード＝0.9144m

ーアナキ＝一フィート＝0.3048m

ートイキ＝一インチ＝2.54cm

94話：異教徒の村

「飛鳥、無事かじゃ！」

スピニツチは二人分の麻袋を乱暴に投げ捨て、飛鳥の脇へ着地する。小麦粉らしい白い粉が、あつという間にスピニツチの黒い毛並みを白く染め上げる。しかしスピニツチは意に介した様子もなく、すぐに飛鳥へキュアの魔法をかけ始める。

「ア、アタシは大丈夫…… 疲れてるだけだから。でもガルドが……」

ひだスカートのまくれ上がった飛鳥の柔らかそうな太ももに頭を載せ、ガルドは蠟人形のような顔色で気を失っている。頭も身体も粉で真つ白だ。木窓から差し込む朝の光で、ガルドの顔の前の白い粉が粉雪のように舞っている。それが真横に急角度で飛ばされる。呼吸している証拠だ。

「この村にたどり着く直前、アタシ力尽きて気を失っちゃったみたいなんだ。それでガルドはアタシを抱えたまま戦い続けてくれてたみたいで……」

飛鳥が気がついた時には、ここでガルドの腕に抱かれていたそうだった。つまりモンスターを駆逐し、最後の力を振り絞ってここに避難したらしい。生き残りのモンスターがいたかどうかはわからないが、幸運なことに見つけることはなかったようだ。それでも飛鳥は気を抜くと遠くなる意識をつなぎ止めながら、今度は逆にガルドを守りながらスピニツチが来てくれるのをずっと待っていたらしい。

「実際モンスターが襲ってきたとしても、アタシがちゃんと戦えたかどうかはわからないけどね、へへ……」

そついうと飛鳥は気絶するように眠りに落ちていった。

スピニツチは壁に背中を預けたまま昏睡してしまった飛鳥はとりあえずそのままにして、今度はガルドヘキュアの魔法をかけ始める。ガルドは外傷こそなかったものの、その状態は深刻なものだった。いわゆる“枯渴状態”だったのである。

精神と肉体の境目が曖昧なこの世界において、魔力が底を尽きるということは精神力が無くなってしまふことと同じ意味を持つ。つまり現実世界でいうところの“脳死状態”や“植物人間”に当たるのである。スピニツチは魔力が底について“枯渴状態”になった人間を見たのは初めてで、どうしていいのかまったくわからない。ガルドは命を懸けてガザを救い、飛鳥を守った。そんなガルドがこのまま目を覚まさないなどスピニツチには信じられない、いや、信じたくない。ガルドの精神力を、ここは信じるしかなかった。

飛鳥が目を覚めたのは翌日の朝だった。スピニツチはその間一睡もしないで、村中を飛び回って食べられそうな食料と水を調達してきた。それでもその量は多くはなく、かろうじて二人の一食分というところだ。井戸がモンスターの死骸で使えなくなってしまうていたのは非常に痛い。二人の麻袋の中に入っているのも少量の水と翻訳こんにやく数枚のみ。飛鳥は腐る直前の干し肉と水と翻訳こんにやくで、かろうじて動けるまでに回復した。けれどもやはりガルドは目を覚まさない。こんこんと深い眠りにつくガルドを見て、飛鳥は途方に暮れる。

「スピニツチい…… どうすればいいの？」

ガルドは死んでしまったわけではない。しかし最新の医療設備があるわけでもないこんな粗末な水車小屋では、ガルドのか細い命の灯はいつ消えてしまうかわからない。

「ミーにもどうしたらいいかわかんないにや……」

いつも誇らしげに左右にぴんと張っているスピニッチのひげが、力無く垂れ下がる。小さな耳までしなびたように元気がない。すると飛鳥が何か思いついたらしく、大きな声を出す。

「女王様は？　クウエンディ女王様ならガルドのこと助けられるんじゃない？」

しかしスピニッチはふるふると首を横に振る。

「女王様がフエンドルフィンを離れることはできにやいにや。また最近パルメキア山脈を越えてモンスターが出没し始めたにや……今のところオーガスたちのおかげで大丈夫にやんだけど、予断は許さにやいにや」

「そ、そっか……」

「もしかしたらまたにやにかモンスター軍のにやかで、動きがあるかもしれないにやにや」

「アタシたちがイスペリアを出てから、また何か大きな動きがあったの？」

「イスペリアの情報は入ってきてにやいにや」

飛鳥とスピニッチはため息をつく。どんなに強い力を身に着けたとしても、世界は広い。そして飛鳥やガルドが救える範囲はそれほど大きくはない。しかしせめてガルドは助けたい。飛鳥は必死で考える。そこでふとあることに疑問を感じる。

「ね、スピニツチ、この村ってどこ？」
「にゃ？」

スピニツチはいきなり聞かれたからか、間抜けな声を出す。しかしすぐに質問の内容に思い至り、細い目をさらに細める。

「ここは地図にはよってにゃいにゃもにゃき村にゃ。それにアイリスへ向かう街道はだいぶ前に通り過ぎてきてしまったにゃ」
「ええ？」

飛鳥とガルドは戦いに夢中で、曲がらなければならない街道の分岐点を直進して来てしまっていた。本来ならば八十キロメートルほど手前で“白の道”から“M四一”街道へ入り、北へ向かわなければならなかったのである。

「じゃ、じゃあ、アイリスって国にはここからは行けないの？」

スピニツチは難しい顔で腕組みをして、羽を動かしながら木窓の高さへゆっくりと飛び上がる。若干寒い空気が入り込むその窓の向こうには、灰色に霞む高い山々が見えている。

「行けにゃくはにゃいにゃ。ただ、かにゃりきつい山道を越えて行かにゃければにゃらにゃいにゃ」

飛鳥は安堵する。とりあえず取り返しをつかないミスを犯したわけではないようだ。するとスピニツチは何かに気づいたように、飛鳥を素早く振り返る。

「もしかして……」

「な、なに？」

スピニツチは腕組みをしたまま考え込む。そしてぽつりと呟く。

「ここよ村は“異教徒の村”かもしれないにや」

95話：彫り師の家

「異教徒の村？」

「そうにや」

スピニツチは羽を忙しく動かしながら、また視線を木窓へ戻す。鬱蒼と生い茂った森の中には小屋のような粗末な建物が、まるで隠れるようにして点在している。それぞれの建物は村として計画的に建てられたのではなく、空いたところにとりあえず建てたという感じだ。村というよりは集落と表現した方がぴったりだろう。井戸を中心に放射状に建物が広がって配置されてはいるが、そこに組織としての秩序は感じられない。

「異教徒って、自分の信じる神様以外の神様を信じてる人たちってことでしょ？」

「そうにや」

「それっておかしくない？ キャリーの時間いたけど、この世界に特定の神様っていないんでしょ？」

「そうにや」

「あんたさっきから『そうにや』しか言っていないじゃないの！」

「そうにや」

さすがにまだスピニツチをど突くほどの元気はないが、飛鳥に笑顔が戻ったことにスピニツチも安心する。

「どこの世界にも超越的存在に救いを求める人たちはいるにや……」

悪魔や死神などのいわゆる悪魔崇拝の信仰、伝説の怪物や宇宙からの来訪者。そういったものを神格化して崇める者たちは、社会的

不適応者として周囲から断絶される。そしてそういった歪んだ信仰心ではなくても、犯罪者の身内や経済的に破綻した者、人間関係に疲れた者など、集団の中で自分の存在を確立できない者はどの世界にもいるものである。そしてそういった者たちが自然に寄り添い、世間から離れてひっそりと暮らしているのが“異教徒の村”なのである。

そこではお互いの傷を舐め合い、労り合い、互いに必要以上に干渉することなく、穏やかにそれぞれのパーソナルスペースを守って生活する。夜ごと豚の生き血を飲みながら奇怪な声を上げる家があれば、ドアを固く閉ざして決して外へ出てこない家族もある。ここはそういった世の営みから外された者たちの村だったのである。

「で、ここがその異教徒の村だったらどうだっていうの？」

スピニッチは飛鳥の横へ着地する。

「もしかしたら治癒系の魔法のアイテムがあるかも知れにやいにや」「あ、そっか！」

周辺のモンスターが壊滅しているとしても、新たなモンスター軍がやってくることは十分に考えられる。いつまでもここにいてはいいわけにもいかない。飛鳥とスピニッチは手分けをして村を探索することにした。

飛鳥は村の西側を担当した。まだ体力が全快ではないので元気いっぱい走り回ってというわけにはいかないが、モンスターなどに邪魔されることはなかったのでそれほど苦もなく調べることができた。村中に散乱するモンスターの死骸の異臭には辟易したが、それさえ我慢すれば探索に支障はない。

飛鳥は一軒の二階建ての建物に入る。その建物は林の中に建てら

れており、ひっそりとした佇まいを見せている。丸太を組み合わせたログハウス風の建物で、当たり前だが中に人気はない。開け放たれたドアから入ると、まず目についたのは散乱した家具だ。

丸太を縦に割って並べて組み合わされたテーブルは横倒しになり、床にはやはり木製の食器が散らばっている。中学の技術の時間に作られるような組み立て式の椅子も倒れ、苔がこびりついている。

この辺りは湿っぽい地域だからなのだろう。奥の部屋に行く作業台のような大きなテーブルがあり、その上には金属製のトレイや三十センチメートルほどの長さの、金属の棒がたくさん転がっている。飛鳥はその金属の棒に見覚えがあった。

一本手に取って見てみる。片方の端は尖っており、刺さったら危ないだろう。錆びてはいるが、元はきれいな銀色をしていたに違いない。これはタトゥーを彫る“針”だ。よく見ると黒く固まった墨のようなものも、陶器の器に入って机の上に並んでいる。すでに使い物にはならないが、ここはきっと魔法や技のタトゥーを彫る彫り師の家だったのだろう。

仮に何かのタトゥーを見つけたとしても、彫り師がいなければ意味はない。今探さなければならぬのは魔法のアイテムや食料などで、使い物になるかわからないタトゥーなどではない。それでも何か役に立つ物はないかと部屋中を物色してみるが、特に目を引く物はなかった。

いつまでも一軒の家に時間をかけているわけにはいかない。飛鳥は湿った板でできている梯子を上って二階へ上がる。そこはロフトのような造りになっており、天窓が付いている。少し持ち上げてみると湿った空気が異臭と共に入り込んでくる。飛鳥は顔を顰めて天窓を閉め、辺りを見回す。

そこは十畳ほどのスペースになっており、特に荒らされた形跡はない。こんなところに食料を保存しておくわけではない。板敷きの床には埃が積もり、飛鳥は踏み抜かないように慎重に足を運ぶ。壁際にクローゼットのような両開きのドアのついた家具がある。中を見

てみたが男物のシャツや使い古されたズボンなどが差し渡された棒に掛けられているだけだ。

飛鳥はドアを閉めて視線を巡らすと、隅に小さな書き物机があることに気づく。床に直接座って使うらしく、高さは飛鳥の膝ほどしかない。見ると天板の下に横長の引き出しがついている。飛鳥は引き出しを引いてみる。中には黒い小さな紙切れがたくさん入っていた。

「なにこれ」

一枚取って目の高さまで持ち上げる。それは鳥の翼の形をしていた。

96話：夢見草

水車小屋に戻るとすでにスピニッチは帰って来ていた。

「何か見つかったかによ？」

「全然……でもこんなのあったよ？」

飛鳥は黒く小さな紙を数枚と比較的錆の少なかつた針、それに唯一残っていた使えそうな墨の入った小瓶を取り出して床に並べる。ガルドは安らかな寝息を立てて寝ているが、やはり起きる様子はない。そのままではかわいそうなので、村で見つけた毛布を掛けてある。

「見たこともないタトゥーばかりによ」

スピニッチは短い爪を出して器用に紙を一枚一枚取り上げる。

「アンタは何かいいもん見つけた？」

「村中探してみたけど、役に立ちそうにやアイテムはにやかっただ。でも村外れでこによはにやが栽培されてたによ」

スピニッチはお腹のポケットから「にやにゃん」などといったながら、一本の花を取り出す。それは根っこから引き抜いてきたようで、下部には細いひげのような根が広がっている。見た目は水仙のような花で、花弁は細長い白色をしている。花芯は角度によって輝きが変わる紫色をしており、明らかに現実世界の花とは違う。

「これなに？」

飛鳥は匂いを嗅いでみる。それは何とも言えない甘い香りがして、飛鳥は何となく眠くなってしまう。

「それは“夢見草”にや」

「夢見草？」

このまま嗅いでいると本当に眠ってしまいそうになるので、飛鳥は夢見草をスピニツチへ返す。

「こによはにやによ匂いを嗅ぐと強い眠気を感じるにや。そして幸せにや夢を見るにや」

「いい花じゃない」

「とんでもにやいにや！」

スピニツチは短い前足を精一杯伸ばして、匂いを嗅がないようにしている。見た目猫だけに、人間よりは嗅覚が優れているのだろう。しかめっ面をして夢見草から視線を逸らす。

「こによはにや畑によにやかで眠り込んでしまったら、人はそのまま死ぬまで目を覚まさにやいにや」

「そ、そっか……」

スピニツチの説明によるとこの花は強烈な催眠作用があり、ファンタジアでも栽培はかなり厳しく規制されていたらしい。一種の大麻のような扱いで、不眠薬や手術の際の麻酔に使われるようだ。どうやらこの村では夢見草が不法栽培されていたらしい。半分以上は枯れてしまっていたが、村が壊滅してから約二年間も元気に咲いていたのは不幸中の幸いだろう。水分の多い気候のお陰かもしれない。

「で、それがガルドに何か有効なの？」

飛鳥は霞がかる頭を振りながら聞いてみる。甘い香りが鼻孔に残っている。

「こによ世界では精神によ安定イコール魔力によ安定にや。だから幸せにや夢を見れば、ガルドによ魔力も戻るかもしれにやいにや」
「ほんとにいゝ？」

疑ってみたところで、この現状ではわずかな可能性にでも賭けるしかない。結局はガルドに夢見草を嗅がせることにした。

スピニッチはガルドの鼻先へ夢見草をそつと置く。すやすやと眠るガルドの顔が、甘い香りを吸い込んで微かに歪む。

「ねえちよつと、苦しそうだよ」

「これだけではダメにや、夢によ世界から戻って来にやくにやつてしまふにや」

「え？　じゃヤバいじゃん、どうすんのよ」

スピニッチは悪巧みをしているような笑みを浮かべる。

「アスカがガルドの耳元で甘い言葉を囁くにや」
「ええ？」

飛鳥は目を見開いて、スピニッチとガルドを交互に見遣る。

「『ガルド愛してるう』とか『戻って来てえ』とかにやんでもいいにや。ガルドが夢によ世界からこつちに戻りたくにやるように呼びかけるにや」

「そ、そんなの無理だし！」

飛鳥は顔を赤くして手を激しく振る。しかしその役は確かにスピニッチでは無理だろう。スピニッチはおもしろがってはいるが、冗談を言ってるわけでもない。ガルドを死なすわけにはいかないし、かといってこのまま夢の世界に行つたままでも困つてしまう。飛鳥はため息をついて、仕方なくガルドの耳元へ口を近づける。

「ガ、ガルド、戻ってきて」

「愛情が足りにゃいにゃ」

「うっさいわね！」

飛鳥が怒鳴ると、ガルドが苦しそうに身動きする。

「そんなに大声を出すと、逆に悪夢に精神を壊されてしまふにゃ」
「わ、わかった、わかったって……」

飛鳥は口を尖らせて再度ガルドの耳元へ顔を近づける。

「ガルド、愛してるわよ」

「恥ずかしいにゃ！」

スピニッチはおかしそうに顔を両前足で隠して後ろを向く。

「ああもう、まじで“夢見そう”」

飛鳥は上手いこと言ったと気づいて、にやつとスピニッチを見る。しかしスピニッチは難しい顔で腕組みをしている。

「つまんにゃいにゃ、山田くん、座布団一枚持つてくにゃ」
「なんでアンタそんなこと知ってんのよ！」

散々スピニツチにからかわれながらも、飛鳥は何度もガルドへ呼びかける。夢見草の香りに耐えきれず、飛鳥も次第に眠ってしまう。しかしスピニツチに起こされ、呼びかけを続ける。夢見草が萎れて香りを発しなくなった頃、ようやくガルドの顔に血色が戻る。

「ス、スピニツチ、ガルドが暖かくなってきた……」

眼の下に隈を色濃くつけながら、飛鳥はガルドの頬に手を添える。確かに今までの深い眠りとは違って、普通の睡眠という感じだ。

「ふむ、山は越したにや」

「やったあ……」

飛鳥はガルドの横へ身体を横たえ、自分も一眠りしようとする。

するとスピニツチは少し離れたところで何かごそごそとやっている。

「なにしてんの？」

今すぐ寝に入ろうとした飛鳥は、顔を起こしてスピニツチを見る。スピニツチの手には、飛鳥が彫り師の家で見つけてきた紙と針、それに墨の入った小瓶がある。

「アス力は寝てていいにや。そによ間、使えそうにやタトウーをミ―が彫っておくにや」

「あ、アンタ、タトウーなんか彫れんの？」

飛鳥は遠のく意識の中、必死で瞼を開いてスピニツチを見る。スピニツチは針を構えて飛鳥へ近づいて来る。

「彫ってるところを、見たことはあるにや」

「ア、アンタそれって彫れるって言わないんじゃない……」

スピニツチが鳥の翼のような紙を持っている光景を最後に、飛鳥の意識はそこで途切れた。

97話：飛鳥、空を飛ぶ？

「アスカ、アスカ起きるにや！」

冷たい肉球がぷにぷにと頬へ押しつけられる感触に、飛鳥の意識が覚醒する。瞼を開けると木窓から眩しい陽の光が差し込んでいる。どうやら一晩眠ってしまったようだ。

「ん、ん、スピニツチおはよ」

「によん気に挨拶してる場合じゃにやいにや、ついさっき“黄泉鳥”が村によ上空を横切っていったにや！」

「黄泉鳥うゝ？」

飛鳥は目を擦りながら埃の舞う床に身を起こす。その拍子に身体に掛かっていた毛布がずり落ちて、小麦粉の白い粉を舞い上げる。

「そうにや、モンスター軍によ斥候にや。夜にはヤツらが来るにや」
「ええゝ！」

飛鳥は完全に目が覚める。一晩眠ったおかげで、雑魚モンスター程度なら戦っても十分勝てるぐらいには回復した。しかしいまだに眠り続けているガルドを守りながら、ろくなものを食べていない今の状態ではいくら雑魚相手でも数で来られると勝ち目はなくなる。

「じゃ逃げなきゃ！」

飛鳥はおろおろして木窓に足をかけて外へ出ようとする。

「待つにや」

スピニッチは難しい顔をして飛鳥を制する。線のような目では難しい顔なのか笑っている顔なのか判別し難いが、声音で何となくそんな気がする。飛鳥は木窓に足をかけたまま動きを止める。

「パンツが丸見えにや」

「そんなこと今、どうだっていいでしょ！」

しかし本当にピンクの下着を丸見え状態にしながら、飛鳥は外へ出ようとする。

「違うにや、タトウーにや」

「タトウー？」

口を尖らしたまま、飛鳥は昨晚のことを思い出す。そういえばガルドに夢見草を嗅がせた後、何かイヤなことがあったような……

「あ」

飛鳥はようやくそのことに思い至り、床に降り立って自分の身体を点検し始める。そして右腕に彫られた歪な形のタトウーに気がつく。何となく鳥の翼のように見えるが、貝殻と言われたらそのようにも見える模様だ。

「ああー！ これスピニッチが彫ったの？」

「そうにや」

スピニッチは得意げに長いひげを揺らす。

「これ何の技なのか、あんたわかって彫ったんでしょね？」

「んにゃ、全然わかんないにゃ」
「ぐは」

飛鳥は虚脱してうなだれる。

「でも鳥によ翼模様にゃ。もしかしたら空を飛べるようににやる魔法かもしれないにゃ」

「まさか……」

飛鳥は腕を持ち上げて、子どもの落書きのようなタトゥーをまじまじと見る。確かに今までの経験上、模様はその技や魔法の特質を表していた。特にレベルが高い技や魔法はそうだった。トルネードアッパーしかりガルドの全体魔法しかり。しかしこのタトゥーが鳥の翼模様だからといって本当に空を飛ぶ魔法なのかは、使ってみないことにはわからない。鶏に変化する魔法などであつたら、目覚めたガルドに何を言われるかわかったものではない。ガルドが魔王変化で飛鳥が鶏変化では笑い話にしかない。

「とりあえず試してみるにゃ」

「はぁ、それしかないか……」

気乗りはしないが、飛鳥は渋々と小屋から出る。外はいまだにモンスターたちの死骸から立ち上る異臭が立ち込めているが、もうだいぶ慣れてしまった。

脛ほどまで生えた雑草を掻き分けながら、飛鳥とスピニッチは小屋の裏手へ回る。そこは少し広い草原になっており、邪魔な木や建物はない。降り注ぐ陽光と小川のせせらぎの音に包まれながら、飛鳥は両足を踏ん張って草原に立つ。

「じゃ、いくよ」

スピニッチは少し離れたところにいて、真剣な顔でうなづく。飛鳥はごくりと唾を飲み込んで、鳥の翼模様のタトゥーに触れる。飛鳥は息を止めて歯を食いしばる。何となく全身がほんわか温まった気はするが、それだけで何も起こらない。

「なんにも起こないんだけど」
「うーん……」

鶏になっっていないか自分の身体を確認する飛鳥を見ながら、スピニッチはない首を捻る。

「おかしいにや」
「鶏にもなってないみたいだし」

飛鳥は空を飛ぶことよりも、鶏に変化する可能性の方を心配しているらしい。しかしそれすらも起こらず、飛鳥の身体には何の変化も見られない。

「あんたの彫り方が悪かったんじゃないの？」
「んん、そうかもにや……」

スピニッチは落ち込んだようにうなだれる。飛鳥は自分の言葉で傷つけてしまったのだと思い、焦ってスピニッチのところへ走り寄る。

「も、もしかしてジャンプすれば飛べるかも…… ね？」

俯くスピニッチを覗き込むように、飛鳥は笑顔で話しかける。

「じゃ、ジャンプしてみるにや……」
「うん」

どうせ何も起きないだろうと思い、飛鳥はその場で軽くジャンプする。軽くといっても、今の飛鳥のジャンプ力は超人的だ。垂直跳びで十メートルほどジャンプすると、何と飛鳥はその高さのまま空中に止まってしまう。

「え、あれ？ うわっ！」

時間にして一秒ほど空中で停止した後、飛鳥は真下に落下してしまふ。何とか体勢を立て直して着地すると、スピニッチは面白そうに細い目をさらに細めている。

「飛べたにや！」

「あ、あれ飛べたって言うの？ 空中で止まっただけじゃん、何の意味もないし！」

「んゝもしかして……」

スピニッチは爪を出して顎を搔く。

「ミーによ技術が中途半端だったから、そんなにんにやったかもにや」

「はあ…… 結局無駄骨か」

鶏に変化しなかったただけでもましとあきらめて、飛鳥は小屋へ戻ろうと歩き出す。しかし何かに気づいたように、スピニッチが声を上げる。

「アスカ、ちょっと待つにや！」

「はあ？」

怪訝な表情で振り向いた飛鳥の横へ、スピニッチが勢いよく飛んで来る。

「もう一回飛んでみるにや」

「はあ、何回やっても同じだよ」

そうは言ったもののスピニッチは何かに興奮しているようで、飛鳥は仕方なくもう一回飛んでみることにする。

「よっ！」

十メートルほど飛び上がり、空中で停止する。

「ほらやっぱり……」

「もう一回飛ぶにや！」

「え？」

スピニッチの言葉につられて、飛鳥はその場でもう一度ジャンプする。

「うわあああああ！」

飛鳥の声が遠ざかっていく。なんと今度は数十メートル上空まで、飛鳥はそのまま上昇していった。そしてやはり一秒ほど空中で停止すると、一気に地上へ向けて落下してくる。

「わああああああっ！」

今度は両手両足全部を使った四つん這いの格好で、飛鳥は何とか着地する。飛鳥はあまりのことに言葉が出ないようだ。目を見開いて、肩で息をしながらスピニッチを見上げる。

「アスカ、飛べにゃいけど、空を歩いたり走ったりできるにゃ！」
「ま、まじで？」

かくして飛鳥はスピニッチの中途半端なタワーによって、モンクという職業らしく中途半端に空を飛べるようになったのである。

98話：アイリスへ

「よっ、はっ！」

飛鳥はおぼつかない足取りではあるが、着実に空中を歩いている。右足を高く上げ、何もない空中を踏みしめる。一秒以内に左足でさらに高い位置を踏みしめる。まるで階段を上るように、飛鳥は空中を上っていく。

飛鳥は午前中いっぱいを使って新しく身に着けた、いや、身に着けさせられた“空中歩行”の魔法を練習していた。二階建ての水車小屋を越えて上昇下降の練習をしたり、一定の高さを水平に歩く練習をしたりした。

お陰でだいぶ上達し、かなり自由自在に空中を歩けるようになった。リズムを速くすれば、走ることも可能だろう。

練習することによってこの魔法の特性も見えてきた。この魔法は、理論的には“遠当て”と同じ要領らしい。つまり空気の塊を踏みしめるということだ。ただしその効果の持続時間が一秒と極端に短いため、落ちる前に次の空気の塊に乗らなければならない。つまり同じ場所にずっと浮いていることはできない。もしいわゆる“ホバリング”をしたければ、ずっと足踏みをしていなければならないのだ。また空気の反発のためか、空中では地面よりも高くジャンプすることができる。トランポリンで跳ぶのと同じ感覚だ。

「なあんか、かつこ悪いなあ。ド。ゴンボールの悟空みたいにこう、シャーっとかって飛べたらいいのに」

飛鳥は小屋の横の草むらに着地すると、スーパーマンのように両拳を前に突き出す。

「贅沢言うにやにや。空中を移動できるってことは、あによ険しい山脈を一気に越えられるってことにやんだからにや」

「んまあ、そうだけどさあ」

飛鳥は目を細めて北方に連なる灰色の壁を見遣る。距離にして二十キロメートルほどだろうか。天気がいいのに稜線が霞んでいるのは、気圧が違うからだ。ファンタジアとアイリスを隔てるローレンツ山脈はこの世界でも最も高い山々で、現実世界でいうところのヒマラヤ山脈に当たる。標高が高く、上空には寒気が入り込んでいる。もちろん現実世界でいう寒気とは違う。霊気と言った方がいいだろうか。

アイリスはイスペリアのように強力な軍隊はなく、フェンドルフィンのように強い兵士もない。美しい湖沼地帯と肥沃な湿地帯に囲まれた水の国で、魔法能力の高い人々が住むという。そのためアイリスの人々は、ファンタジアがモンスターの手に落ちた時から国境に魔法の障壁を築いたのだ。それが寒気という形で現れている。それは飛鳥がいくら気張ったところで暖かくなるものではない。越境に時間がかかってしまえば、半袖ミニスカートの飛鳥は間違いなく凍死してしまうだろう。つまり一気に越えてしまわないといけないのだ。

「はあ、寒いのが苦手」

ローレンツからの寒気が入り込んでいるためか、この村の気温は常に低めだ。霧が多いのもそのせいだろう。飛鳥は剥き出しの二の腕を抱くようにしてさする。その時奇妙な鳴き声を耳にする。それはまるで防犯ホイッスルのような声で、妙に心をざわつかせる。

「アスカ！」

スピニツチの鋭い警告で、飛鳥は背後を振り返る。水車小屋の屋根にカラスが一羽止まっている。通常のカラスよりは一回り大きく、鷲よりは小さいぐらい。黄色い目が淀んだ光を放ち、まるで睨まれているような気がする。

「黄泉鳥にや！」

「ちいっ！」

飛鳥は“遠当て”を放つ。距離にして十メートルほど。今の飛鳥にとつて、それは外す距離ではない。逃げようとして羽ばたいていた黄泉鳥は、どろりとしたオレンジ色の体液をまき散らして屋根に落ちる。しかし小屋の向こう側から同じような鳴き声がして、さらに二羽の黄泉鳥が南へ向かって飛び去っていく。

「まじい！」

飛鳥は覚え立ての空中歩行で駆け上がり、屋根に隠れて見えない黄泉鳥たちを攻撃しようとする。しかしすでにその姿は、木々に隠れて見えなくなってしまっていた。

「くそっ……」

空中で立ち尽くした飛鳥は、傾斜のついた屋根へ落下する。バランスを取って器用に着地すると、さらに地上へジャンプする。スピニツチの目の前へ着地すると、小屋の入り口へ向かって早足で歩き始める。

「どうやらさつさとずらかった方がいいみたいだね」

「そうにや、きっと先遣隊が近づいている証拠にや」

人間の部隊もそうだが、先遣隊は足の速い部隊だ。獣系か、ヘタをすれば鳥系のモンスター部隊の可能性もある。夕方まではまだまだ時間はあるが、スピニッチの予想よりモンスターたちの動きは早かったようだ。

飛鳥ははしごを駆け上がり、荷物を木窓から外へ放り出す。続いてガルドを毛布で包み、肩に担ぐ。身体を捻りながら何とかガルドを担いだまま木窓から身を乗り出すと、そのままスピニッチの立つ地面へ飛び降りる。スピニッチは麻袋を拾って、飛鳥が降りて来るのを待っていた。

「それもアタシが持つよ。あんたふらふらしてちゃんと飛べないでしょ？」

「すまにゃいにゃ」

飛鳥は荷物とガルドを担いでも、きつともものすごく速く走れる。何も持たないスピニッチでも、かろうじてついていけるかどうかだ。それがわかっているだけに、スピニッチは素直に二つの麻袋を飛鳥に渡す。

「それじゃ、一気にいくとしますか」

「そうだにゃ」

飛鳥は梢の向こうに霞んで見えるローレンツの山々を睨む。あの山の向こうで待っているのは生か死か。イスペリアでモンスター軍の意図に気づいてから約一週間。飛鳥とガルドそれぞれの暴走により、予定よりは早くたどり着けそうだ。しかしアイリスへのモンスター軍の行動は、牽制でも陽動でもない。アイリスは本気のモンスター軍の攻撃に、どこまで耐えられているのだろうか。

「うおりゃああああああっ！」

飛鳥は一気に木々の上まで駆け上がり、そのまま空中を猛烈な勢いで走り出す。ぐんぐんと近づいてくる雄大な山脈を見つめながら、飛鳥は風と一体になって走り続けた。

99話：女王脱出

水と魔法の国アイリス。そこは豊かな自然と優しい人々の住む美しい国だ。清涼な水と豊穡な大地によって育まれた食べ物、何を食べても至高の一品となる。言うまでもなくアイリスの酒は極上の一級品ばかりで、アイリス産の銘柄はイスペリア辺りだと宝石よりも高い値で取引されるほどだ。

緑豊かな大地は起伏に富み、山は四季折々の木々が人々の目を樂しませ、湖や川はアイリスの象徴ともいえる美しい水を陽光にきらめかせている。

そこに住む人々も穏和で慈愛に満ち、争いごとなどは滅多に起きない。アイリスの民は他の国とは違い、非常に美形が多い。きれいな水で育っているせいか肌は透き通るように白く瑞々しい。遺伝的なものなのか男性はほとんど黒髪ばかりだが、女性はカラードが多い。青い髪や緑色など、ファンタジアではついぞ見られない髪の色は訪れた者を驚かせる。

また魔法能力が高く、生活スタイルは独特の文化を築いてきた。例えば、彼らは火を使わない。調理にしろ灯りにしろ、すべて魔法でまかなってしまえるのだ。また、刃物もない。故に剣や槍など人を傷つける武器は、宮殿を守るごく一部の者しか手にしない。ゆえに火や刃物に対しては異常なほどに恐怖心を抱く。

南方に自然の障壁であるローレンツ山脈がそびえているためにファンタジアとの交流も極端に少なく、その全貌は他の国の人々にとっては羨望と謎に包まれている。アイリスが別名“神の国”ともいわれている所以である。

その麗しき神の国アイリスは、今滅亡に瀕していた。

「女王様、早くお逃げください!」

女王付きの女官が必死の形相で寝室に飛び込んでくる。その白いロングドレスは、煤と埃にまみれている。まだ若い女官の白く瑞々しい頬は、どこかで転倒したのか擦り傷がついて血が滲んでいる。光り輝く腰まで届く長い金髪をきらめかせ、女王と呼ばれたその女性、ニンファドローラは窓辺に佇んで眼下で怒り狂う炎の照り返しで白く秀麗な美貌を赤く染め上げている。

「我が国が燃えている…… この地上の楽園が…… アイリスが…… 燃える……」

城の周りの深い森は一面火の海と化している。すべてを焼き尽くす悪魔の炎は赤い巨大な舌のように伸び、次々と緑の葉を飲み込んでいく。逃げまどう人々が炎に巻かれ、悲痛な叫び声と共に燃え上がっていく。そしてその炎を背に、黒々とした異形の化け物たちがこちらに向かって押し寄せてくるのが見える。

「あれがファンタジアを滅ぼしたモンスター軍……」

ニンファドローラは掠れた声で呆然と呟く。巨木を象ったアイリス城は青水晶のような外壁に炎を映し、まるで城自体が燃え上がっているように見える。城の周囲はうごめくモンスターたちに埋め尽くされている。黒い甲冑を着込んだオークたちが、逃げまどう人々を斬り殺しながら徐々に城へ迫って来る。

「“薔薇十字隊”はどうしましたか？」

白くきらめく上掛けを着せかけてもらいながら、ニンファドローラは女官に青白い顔で問いかける。その表情は硬く強ばっている。

「街で迎撃に当たっていましたが抑えきれず、今はお城の正面入り

口で時間を稼いでいます」

“薔薇十字隊”とは、アイリスの誇るウィザード部隊だ。特別に訓練された魔法使いたちで編成された強力な部隊なのだが、その訓練は戦闘を目的としたものではない。あくまでも災害や事故などに対処するためのレスキューを目的としたものだ。殺戮を目的としたモンスターの大部隊を相手に、そう長い時間耐えきれはするはずはない。

「わたしは“フェアリーテイル”へ向かいます」
「え？」

女官の顔が女王以上に青ざめる。女王は部屋の出口で長年親しんだ自室を一瞥すると、小さく寂しげにため息をつく。そしてそのまま部屋の外で待機していた女官たちと共に、城の裏口からアイリス最北の山“エスター”へと向かって飛び立って行った。

「う、うう……」

ようやく気温も常温となったローレンツ山脈の麓の深い森の中、飛鳥は凍えきった身体を焚き火で温めていた。激しく身体を動かして体温を高めながら空を走って来なければ、寒さのため墜落し、そのまま凍死してしまっていたことだろう。

飛鳥は焚き火の前で毛布にくるまったまま腰掛け、身体を前後に揺すっている。歯の根が合わずがちがちと震えながら、気を抜けば

遠くなりそうな意識をかううじてつなぎ止めている。毛布でミノムシのようになつた全身に白い霜をこびりつかせたガルドが呻いたのは、夜空に星が瞬き始めた頃合いだった。

「ガルド！」

凍ったひげに滴った細長いつららを一本一本丁寧に溶かしていたスピニツチは、身動きするガルドの傍らに立つ。歯を鳴らして震えながら、飛鳥もスピニツチの脇から覗き込む。

「が、がるろ？」

まだまともに口が利けない飛鳥は、それでも呂律の回らない舌でガルドに呼びかける。彼が気がつけば、この寒さも一気に解決できるかもしれないのだ。

飛鳥とスピニツチが覗き込むガルドの白い瞼は小刻みに震え、ゆっくりと開いていく。焦点の定まらない青い瞳が左右に動く。そしてそれははつきりとした意思を感じさせる視線へと変わる。

「よお……」

霜で白くなつた唇が動き、ガルドは微笑む。飛鳥はガルドが気づいた時のために取っておいた一番上等な干し肉を火で炙り、気怠げに上体を起こしたガルドへ差し出す。

「ありがとな」

ガルドはじつくりと味わうように一口ずつ嚙り、水袋から水を飲む。

「ここは、どこだ？」

飛鳥は震えながらもスピニッチと共に、今までのことを順序立てて話す。話し終わる頃には飛鳥はもうすっかりと震えが止まっていた。

「そっか、いろいろ迷惑かけたな」

「ううん、大丈夫。それよりもうガルドが目を覚まさないのかと思つて焦つたよ」

「ガルド、飛鳥はガルドに『愛してるにや』つてずっと囁いてたんにや」

「『にや』なんて言つてないわよ！」

三人で笑うのは久しぶりのことだった。夜半過ぎにはガルドもだいぶ調子を取り戻し、モンスター除けの魔法の結界を張つて朝までぐっすりと眠る。翌朝は霧の立ちこめる薄ら寒い曇り空だった。

火の始末をして身支度を整える。飛鳥は全身にパワーが戻つてきたことを感じる。

「よし、スピニッチ、北へ向かえばいいのね？」

スピニッチは濃い霧の森を見上げてうなずく。八十ルキアほど北に行くとも美しい都があり、そこにはアイリスの女王ニンファドーラがいるはずであった。

99話：女王脱出（後書き）

＜「ファンタジア」の距離を表す単位＞

―ルキア＝マイル＝1,609.344m

―ヘドル＝ヤード＝0.9144m

―アナキ＝フィート＝0.3048m

―トイキ＝インチ＝2.54cm

100話：クリスタルレイクに陽は暮れて

アイリス城の見える山へは、夕刻にはたどり着いた。寄り道をせずぼまっすぐ空中を移動してきたからだ。途中いくつかの町や村の上空を横切ってきたが、すべて焼き払われ無惨な姿をさらけ出していた。

丸一日で百三十キロメートルも走り通しだと、さすがの飛鳥も息が上がる。枝が何重にも寄り合わさったような大木の陰に着地すると、飛鳥は尻餅をついてへたり込んでしまう。

「クラスチェンジしたとはいえ、まだまだ修行が足りねえな」
「うっさいわね」

ガルドの軽口に戻す口調も精彩を欠く。それでもこうしてまた言い合えることは、嬉しいことだった。

「スピニツチ、何か見えるか？」

大木のとっぺんでアイリス城の様子を伺っていたスピニツチが降りてくる。その細い目からは何の感情も読み取れない。しかし纏う雰囲気、決してよい状況ではないことがわかる。案の定着地したスピニツチは、首を横に振りながら深いため息をつく。力なく垂れたひげが寂しそうに揺れている。

「にゃんにも見えにゃいにゃ。本当にやら、ここからでもアイリス城の青いきらめきが見えるはずにゃんだけど……」

山の麓にはコバルト色の夕日を照り返す美しい湖が広がっている。その湖の向こうがアイリスの首都“クリスタルレイク”だ。正式に

はこの世界の通例によって国の名前と同じ“アイリス”というらしいが、水晶のように美しい湖の名がそのまま首都の名で呼ばれるようになっていいるらしい。

「ミーもアイリスに来たによは二回目だからにやんとも言えにやいけど、ちよつと静か過ぎる気がするにや……」

「やっぱりもうアイリスは……」

飛鳥は梢の隙間にきらめくクリスタルレイクの水面を見つめる。それは確かに美しい湖で、飛鳥は子どもの頃一度だけ連れて行ってもらった湖を思い出す。あれは確か神奈川の丹沢湖だったと思う。まだ小学校に入学する前、両親といっしょにボートに乗った記憶が蘇る。

「暗くなったら行ってみよう」

思い出の中に沈みかけていた飛鳥は、ガルドの声で我に返る。モンスター軍がいるとまずいので火は起こさずに、ガルドが結界を張って食事と仮眠をとることにした。

「ひでえ……」

ガルドの呟きが風に紛れて瓦礫の間を吹き抜ける。アイリスの首都“クリスタルレイク”は、瓦礫と死体の焼け野原となっていた。

湖を越える途中、悪い予感はしていた。アイリス城は静かだったのではない。“なかった”のだ。湖の北に広がっていたのは一面の黒く焼けこげた大地と、灰と土に埋まった青い水晶のような建物の破片だけであつた。

飛鳥たちは、いまだ燻つて白く細い煙を立ち上らせる地面を歩いて行く。

青い瞳を見開いて中空をにらみつけたまま息絶えている若い女性。その身体は肩から腰にかけて斜めに斬り裂かれている。

元は美しい銀髪であつたろう年老いた男の生首が、苦痛に歪んだ表情で半分地面に埋まっている。

焦げた匂いと死体から立ち上る異臭に顔を顰めながら、飛鳥は無力感に囚われる。

結局間に合わなかつた。もしかしたらという可能性に賭けて、半ば特攻に近い旅路を駆け抜けてきた。もしアイデアで淫魔たちの罠に掛からなければ。もしガザで手間取らなかつたら。もし異教徒の村などに道を間違えて行っていなければ。

幾多の“もし”を頭の中で巡らしてみても、現実が覆ることはない。飛鳥は涙ではなく怒りが込み上げてくるのを感じる。関わったこともないアイリスの人々の苦悶の声が聞こえてくるような気がする。ここは断じて“神の国”などではない。この世の地獄だ。

「ここによ辺がお城によあつた辺りにゃ」

一際大きな水晶の破片が重なり合つて散乱している。元は美しいお城だつたことは想像に難くない。瓦礫の隙間から見えるドレスのきらめきや、黒く焦げた土に埋もれた銀の燭台などがその名残を感じさせる。

「これじゃ女王様を捜すどころじゃないね……」

三人はしばらく辺りを歩き回って見たが、それらしい人物の遺体は見えない。モンスターの死体は極端に少なく、ここが“戦闘”ではなく“一方的な破壊と殺戮”の場であったことが伺える。

すっかり日が沈んでお互いの顔が判別しづらくなった頃、ガルドが決断したように宣言する。

「ファンタジアに戻ろう」

飛鳥はそれがこの国を救えなかった自分たちへの責め句のような気がして、下唇を強く噛みしめる。ここまでの苦労は何だったのか。この世界はこの後どうなってしまうのか。

焼け野原になっても、虫たちは夜の訪れを賛美するかのように鳴き始めている。ガルドが飛鳥の肩を優しく抱きしめる。ガルドの体温を感じると、飛鳥の両眼からは止めどなく涙がこぼれ落ちてくる。両手で顔を覆って小さな嗚咽を漏らす飛鳥の肩を、ガルドは優しく叩く。

「俺たちは精一杯がんばった。でもまだやれることはある。やらなきゃいけないことも」

「……かつてる、わかつてるよ」

鼻をすすりながら、飛鳥はとぼとぼ歩き始める。そうなのだ。

泣いている暇などない。アイリスが滅んだ今、恐れていたことが現実となってしまう。

フェンドルフィン、イスペリア、アイリスと、三方向へ分散していたモンスター軍は、二方向へと戦力を集中してくる。軍事力の高いイスペリアはまだしも、今でさえぎりぎりの状態で耐えているフェンドルフィンなどは、そうならひとたまりもないだろう。飛鳥はクウェンディ女王の顔を思い浮かべる。

『またね!』

クウエンディ女王は、片目をつぶって親指を立てている。

「うん、行こう!」

飛鳥は涙を拭って力強く一歩踏み出す。まずはフェンドルフィンへ戻ろう。自分たちのために戦ってくれたガザの人たちも心配だが、いずれガザにはイスペリアの軍隊が行く。ファンタジアを縦断するのは骨が折れそうだが、今一番自分たちを必要としているのはフェンドルフィンに違いなのだから。

歩き出したガルドと飛鳥は、ふとスピニッチがついて来ないことに気づく。

「あれ、スピニッチ?」

すっかり暗くなってしまったために、黒いスピニッチの姿は簡単には見つけれられない。何度か呼びかけると、先ほど飛鳥が立ちつくしていた辺りにスピニッチの緑色の細い瞳が浮かんでいることに気づく。

「スピニッチ、そんなところでなにしてんの? 行くよ!」

「ちょっと待つにゃ」

らしくない低い声に、飛鳥とガルドは暗い中顔を見合わせる。瓦礫に足を取られないようにして側に行くと、スピニッチは腕組みをして顎に前足を当てて考え込んでいる。

「なによ、なにかあるの?」

「ミーたちはモンスターを見たかにゃ?」

「え？」

飛鳥とガルドは同時に声を上げる。スピニッチが何を言っているのか、二人とも理解できない。

「ローレンツ山脈を越えてから、ミーたちは一度もモンスター軍を見てにやいにや」

「それがなによ、もうとつくにファンタジアに戻っちゃったってことでしょ？」

「いや違う」

今度は飛鳥の隣でガルドが声を出す。少し目が慣れてきたのか、ガルドがしゃがみ込んでいるのがわかる。

「地面はまだ温かい。つまりここは攻撃されてまだ間もないってことだ」

「つまりどういうことよ！」

焦れったくなった飛鳥が叫ぶ。虫の声がふいに途切れる。

「モンスター軍は、まだここよ国にいるってことにや」
「う、うう……」

すぐ側の地面でうめき声が聞こえ、飛鳥たちははっとそちらを見る。薄暗い中で、白い腕が瓦礫の間から出て宙を掴もうと動いている。

「生存者にゃ！」

スピニッチが叫ぶより早く、飛鳥はそちらへ走り出す。車一台分

はありそつな巨大な水晶の瓦礫の下に、ほんのり白い顔が見える。
若い女性だ。

「待ってて、今どけてあげる！」

飛鳥は柔らかい土に両足を埋め込むようにして踏ん張り、瓦礫の端に手を掛ける。水晶の硬い塊同士が擦れる重い音がして、巨大な瓦礫が持ち上がっていく。隙間が大きくなると、すかさずガルドが女性を引っ張り出す。思いの外簡単にその女性は外へ出て、飛鳥はすぐに瓦礫を放す。地響きと共に塊は崩れ、女性が挟まっていた隙間は完全に埋まってしまふ。

「よかった…… うっ！」

手を払って振り向いた飛鳥は言葉を失ってしまふ。尻餅をついたガルドの前に横たわるその女性は、下半身がなかったのだ。

101話：希望と暗雲

「う…… うつ……」

その女性は目を見開いて、盛んに腕を振り回している。青い瞳には星空が映り込んでいるが、見ているものを認識しているようには思えない。すでに目は見えていないようだ。

飛鳥は腹から触手のように地面に伸びている腸を見ないようにし、女性の手を握る。すると女性はあらぬ方向を見据えながら、しがみつくように飛鳥の手を両手で握りしめる。

「じよ、女王様を…… お助けください……」

煙を多量に吸い込んだためか、女性の声は老婆のように嘎れてとても聞きづらい。それでも飛鳥は顔を寄せて必死に聞き取る。とすら。

「女王？　女王様が生きてるの？」

女性の上半身は華美ではないが、清楚な絹のドレスを身に着けていることからそれなりの立場の者であることがわかる。血と土に塗れて赤黒く変色した胸元に、青く小さなペンダントが光る。

女性は耳も聞こえないようで、飛鳥の手を力一杯握りしめ、譫言のように「女王様、女王様」と繰り返している。飛鳥は握られた手に痛みを感じ、顔をしかめる。しかし下唇を噛んでその痛みに耐える。

「どこにや、ニンファドーラ女王様はどこに行ったんにや！」

スピニツチが必死で問いかける。その思いが通じたのか、女性は大きく口を開けると喉を鳴らせて深く息を吸い込む。

「北…… 北の山、エスター……」

女性はそのまま動きを止める。大きく開けた口はそのままに、呼吸は止まっている。最期の力を振り絞って、女王の行き先を飛鳥たちに告げたのだろう。その表情は苦しげなまま固まっている。

「北の山、エスター…… か」

ガルドは静かに呟いて、女性の目と口を閉じさせる。飛鳥は石のように硬直した女性の指を、一本一本丁寧に外していく。飛鳥の手首には女性の手の形に、夜目にもわかるくらいのはっきりとした青痣ができている。

「アンタの思い、ちゃんと受け取ったよ」

飛鳥は自らの首に掛けていた銀のチェーンネックレスを引きちぎり、女性の手に握らせる。代わりに女性のしている青いペンダントを外し、自分の首に掛ける。

「アンタたちをこんな目に遭わせたヤツらを、絶対ブチ殺す。そして絶対女王様に会って、アンタのお陰だって伝えてあげる」

飛鳥はもう涙は流していない。北を睨みつけ、拳を握りしめる。飛鳥とガルドは柔らかい地面を掘って女性を埋め、盛り土をする。墓標となるものがなかったので、お城の欠片でそれっぽい形のものを立てる。

「ガルド、行こう」

「ああ」

飛鳥の胸元には、名も知らぬ女性の青いペンダントが揺れる。飛ぶ鳥を象った銀細工の中に、青い宝石が光っている。

「まさに“飛鳥”にや」

スピニッチが細い目をさらに細める。飛鳥もペンダントにちらと視線を送り、悲しそうに微笑み返す。そしておもむるにスピニッチの頭を撫でる。

「アンタはグイン將軍のところに行つて、アイリスの状況を伝えてきて。そしてなるべく早く、アタシたちを助けに来てもらつて」

スピニッチの目が大きく開かれる。

飛鳥はニンファドーラ女王を守るために、モンスター軍と戦うつもりでいるのだ。数万体はいるだろうモンスター軍の大部隊を相手に、たった二人で戦おうとしている。それはまさに命を懸けた決意だ。

スピニッチはガルドを見る。ガルドもすべてを了承しているのか、穏やかに目を伏せている。

「アスカ」

スピニッチは飛鳥に向き直り、改まった顔をする。真剣な雰囲気を感じ取って、飛鳥は静かにスピニッチを見つめ返す。再び鳴き始めた虫たちの声の中、スピニッチのエメラルドグリーンの瞳が細く光っている。

「二つ言っておくにや」

「なに？」

「ミーはアスカとこれでお別れにするつもりはにやいにや。だからこそ、こによ二つは頭に入れておいてほしいにや」

スピニツチは飛鳥の頭の高さまで浮き上がる。音もなく黒い羽が羽ばたいている。

「一つは背にやかによタトウーによことにや」
「背中？」

飛鳥は首を捻って背中を見ようとする。

「アスカは気づいてにやいかも知れにやいけど、背中によ四枚によ花びらにようち、三枚が青く光ってたにや」
「え、まじ？」

飛鳥はなんとか背中を見ようとするが、暗いこともあってよく見えないようだ。

「今は光ってにやいにや。ミーによ見たところ、今まで光ったにやは、ある特定によ技を使った時だったにや」
「特定の技？」

飛鳥にそんな特定の技を使った意識はない。

「一枚目はヴラドを倒した時にや」
「ヴラド……」

もうだいぶ昔のような気がする。しかし飛鳥はミライの首の骨を

折った時の感触は、今でも忘れてはいない。あの時何か特別な技など使っただろうか。飛鳥は思い出そうとするが、特にそういった特別な技を使ったかどうかまでには思い至らない。

「普通によパンチやキック以外にも技を、使わにやかっただかにゃ？」

そういわれると一つ思い当たる節がある。

「そういえば、アイツの攻撃を避けてそのまま蹴りをぶち込んだかも」

飛鳥はジェスチャーでその蹴りを再現してみる。するとガルドが声を上げる。

「俺それ知ってるぜ。格ゲーでやったことある。“浴びせ蹴り”っていう技だぞ、それ」

「浴びせ蹴り？」

飛鳥は何となく聞いたことがあるような気がするが、知識として知っているわけではない。あの時は身体が自然に動いたのだ。

「二回目は淫魔を倒した時にゃ」

「あ、それは覚えてる。バク転しながら蹴ったヤツだ」

「“ムーンサルト”だ。格ゲーじゃ定番の蹴り技だな」

ガルドがまた解説する。

「ふうん、三番目は？」

「狂戦士を倒してクラスチェンジした時にゃ」

飛鳥はあの時すでに半分ブチ切れていた。それでも何となくその時の様子を思い出す。あれは確かヘアバンドをして巨大な斧を持った、二番目に現れた狂戦士を倒した時だった。

「もしかしてこれ？」

飛鳥は一步踏み出して、肘打ちの格好をする。

「それも知ってるぞ！ ええっと、カンフーの技で…… “八罫”とかいう技だ！ それは“ス。リートファイター”でリュウが……」
「もういいわよ！」

ゲームオタクのガルドが語り始めようとしたので、飛鳥は口を遮る。ガルドは苦笑いをして後頭部を掻く。

「で、それがどうしたの？」

「つまりにゃ」

スピニッチは短い人差し指を立てる。ほんのちよつと爪が出ている。

「そによ背中によ技は、イスペリア寺院に伝わる奥義“百花繚乱”だにゃ」

飛鳥はうなづく。彫ってもらってからはほとんど忘れていたが、確かラナというお坊さんが、寺院で一番レベルの高い必殺技だと言っていた気がする。習得はまず無理だと言われたが、万が一を考えて念のために彫ってもらっていたのだ。

「どんにゃ技かはわからにゃいけど、イスペリア寺院で一番レベル

により高い技で、さらにスーパーモンクによアスカが使ったら、モンスター軍にも勝てるかもしれないにゃ」

「まじで！」

飛鳥の表情が明るくなる。十中八九死を覚悟していただけに、光明が見出されたようで嬉しくなる。

「じゃ、後一つなにか技を使えばいいんだね」

「たぶんそうにゃ」

その技が何かはわからない。蹴り技が二つに上半身の技が一つ。バランスを考えれば、手や肘を使った打撃系の技が怪しい。飛鳥はこれからの戦いでは、意図的にそういう技を考えて使ってみようと思った。

「よおっしー！」

飛鳥は腕まくりをしてやる気満々だ。しかしスピニッチが言っておかなければならないことは、もう一つあった。

「もう一つ……」

「ん？」

スピニッチの低めの声に、飛鳥は笑顔で振り返る。

「モンスター軍によほとんどはオークにゃ」

「う、うん…… そいつらあの白い道で倒したヤツらと同じでしょ」

飛鳥は、少し離れたところに仰向けで死んでいるオークを顎で指す。

「あいつらは確かに凶悪にやモンスターにやんだけど、いくら数が多くてもアイリスによ巨大にやお城を破壊できるほどによパワーはにやいにや……」

「つまりどういうこと？」

飛鳥とガルドはごくりと唾を飲み込む。聞きたくはないが聞いておかなければならない。自分たちのためにも。

「お城ぐらい巨大にや建造物を破壊できるモンスターがいるってことじゃ」

それはフェンドルフィンで見たティラノサウルスや、キャリアで戦ったケルベロスなどとは比べものにならないほどの大きさとパワーを持つモンスターであることを示唆していた。

102話：いんたーみっしょん

「それにしてもさあ」

「ん？」

強い向かい風で顔にかかった髪をかき上げながら、飛鳥がぼつりとつぶやく。

眼下には壮大な森と湖の自然が果てしなく広がっている。飛鳥はジョギングするように空中を走り、ガルドは紙飛行機のようにゆつたりと飛んでいる。全力で走って行ってもいいが、これからの戦闘を考えれば体力は温存しておかなければならない。

クリスタルレイクでは無事な食料はほとんど見つからず、かろうじて飢えをつなげるだけの果物や干し肉が三食分ほどしか手に入らなかった。後は翻訳こんにやくが三枚だけ。水だけは豊富にあるが、やはり戦うには固形物がないと腹の足しにはならない。飛鳥とガルドは残り少ない食料を節約しながら、北へと向かわなければならぬのだ。

「ニンファドーラ…… 様だっけ？ そのアイリスの女王様は、なんで北の山なんかに逃げてったんだろうね」

アイリスは北の国ではあるが、現実世界の“北方”とは違う。気温はほどよく、寒くもなければ暑くもない。上空数十メートルという高さのため若干風は強いが、過ごしやすい気候といえるだろう。今のところは。

「さあ、スピニッチもわかんねえって言ってたしな」

「でもその“エスター”って山は、行けばすぐわかるんでしょ？」

「ああ、『行けばわかるにや！』って言ってたもんな」

スピニツチとはクリスタルレイクで別れた。とにかく飛鳥たちがニンファドーラ女王を守って時間を稼いでいれば、いずれグイン將軍率いるイスペリア軍がやってくる。フラット部隊だって来てくれるかもしれない。そうなればきつと十分戦えるはずだ。

ガルドはもう自分の意志で“魔王変化”ができるようだ。魔力の消耗が激しいので簡単に使うことはできないが、いざとなったらとても心強い。

飛鳥もスーパームンクとしてパワーを全開にして戦えば、そうそうやられることはないはずだ。後は時間と体力の問題だけ。モンスター軍の指揮官やアイリス城を破壊した「大きくてパワーのある」モンスターは気になるが、それを恐れて逃げ出すわけにはいかない。

飛鳥はクウェンディ女王やミライなど、この世界で出会った人々と約束した。世界を救う、仇は討つと。先ほども青いペンダントの女性に誓いを立てた。モンスター軍をぶち殺すと。

今さら「やっぱりやめる」という気はなかったし、不思議なことに死ぬ気もなかった。

覚悟はある。現実としてこの世界では「死」を間近に見てきたからだ。マンガの主人公のように、勇者だから死なないなんて不文律は存在しない。召喚された勇者だろうが死ぬ時は死ぬ。それが現実だ。

この世界にやってきて「世界を救うためにやれるだけやってみる」とクウェンディ女王に約束した時、飛鳥は「死んでもいい」と考えていた。それは「自殺する面倒臭さがなくていい」程度の認識だった。事実、飛鳥は現実世界では生きていながら死んでいるのと同じ状態だった。

だから死ぬのが怖くはなかった。しかし現実には目の当たりにした「死」は、そんな飛鳥の「死」に対する甘い考えを簡単に吹き飛ばした。

「死」はきれいなんじゃないし、「楽」なことでもない。

もしミライが生きていたら、今ごろはジェミニと仲良く楽しく生活していたらう。

もしパドムとジャグワが生きていれば、今ごろはあの温かい食卓を囲んで、また昔話に興じていただろう。パドムは曲がった背中を揺らせて、苦笑しながらジャグワじいさんを窘めていたかもしれない。

どんなに苦しくても生きていれば幸せは必ず訪れる。いや、そう信じて生きていくだけです。人に「幸せ」と言えるのかもしれない。

この世界に来てからの飛鳥は、スピニッチに言われるまでもなく自分が変わってきていることを自覚せざるをえなかった。

遠くに白く霞む靄がかかっている。雲のようでもあるが、あれは霧だ。

「ガルド、あれ」

「ああ」

霧が出ているということは、気温差があるということだ。現実世界ならどうということはないが、ここではそのことが特別な意味合いを帯びてくる。つまり意図的な魔力の放出だ。

気の持ちようで体感温度の変わるこの世界で、気温が低い状態になるのは誰かが意図的に魔法を使っている証拠に他ならない。自らの存在を隠そうとしているのか、邪悪なモノを寄せ付けないようにしているのか。そしてこの場合はその両方であらう。

稀代の魔法使いとされるニンファドーラ女王がモンスター軍の進軍を阻むために、もしくは遅らせるためにとった対策の一つだろう。つまり目的地は近いということだ。

「気をつけるよ」

飛鳥とガルドは手をつなぐ。スーブのように濃い霧の中では、お互いの存在を見失ってしまう恐れがある。近くにモンスター軍がいるかもしれない状況で、大声でお互いを捜すことも避けたい。

「なんか感じる？」

飛鳥に魔力を感じることはできない。それはウィザードであるガルドの得意とするところだ。しかしそんな飛鳥にも、十分感じることはできる。吐き気がするほどの邪悪な気配が充満している。それは冷たい霧の中にあっても、肌をじりじりと焦がすように下方から吹きつけてくる。

「きゃあああ！」

突然、霧の中から女性の悲鳴が聞こえてきた。ここは空中であるはずなのに、なぜかその声は右“上方”の霧の中から聞こえてきたのだ。

「ガルド！」

「ああ！」

飛鳥とガルドは、声のする方へと急上昇していった。

103話：三人目の影

霧の中から現れたのは巨大な“翼竜”だった。細長い頭部に硬そうな深緑色の皮膚。翼の真ん中には三本の小さな爪がついている。翼竜は霧をかき分けるように現れ、猛スピードで南へと向かって飛んでいく。長いクチバシには、青いペンダントをしていた女性と同じような絹のドレスを着た女性をくわえている。先ほどの悲鳴は彼女のもののようだった。

「うわっ！」

翼長十メートル以上はありそうな翼竜の巻き起こす乱気流に翻弄され、飛鳥は思わずバランスを崩してしまう。

「おっと」

墜落しかけた飛鳥を、ガルドが引つ張り上げる。飛鳥は体勢を整えると弾丸のように翼竜を追って走り出す。あっという間に霧の中へ消えて行ってしまった飛鳥を追って、ガルドも加速して飛翔する。

「アスカ、待てよ！」

この霧はやはりただの霧ではなく、魔力の放出らしい。ガルドは飛鳥の痕跡を追っているが、それはとても薄く、すぐに霧散してしまう。ちよつとでも気を抜くと見失ってしまうだろう。

ガルドは腹の底に気合いを込め、さらに加速する。今のガルドには、出す気なら音速に近い速度を出すことができるだろう。それは飛ぶ能力だけではなく、シールドを張る能力が向上したためでもある。

ものの数秒も加速すると、翼竜の大きな影が現れ、そのすぐ後ろを走る飛鳥の小さな後ろ姿が目に入る。

唐突に霧が晴れる。魔法の霧の範囲を抜けたのだろう。

「アスカやべえぞ、丸見えだ！」

翼竜がいるということは、当然モンスター軍が近くにいるということだ。霧の中なら身を隠せるが、何もない空中だとすぐに見つかってしまう。エスターに行く前にモンスター軍から攻撃を受けることを避けたかった二人にしてみれば、この状況はとても危険であった。

「すぐにケリをつけるから、うりゃああっ！」

歩幅を大きくして力強く加速した飛鳥は、その勢いのまま翼竜の真上に走り込む。そして何と頭を真下にして、翼竜の背中めがけて走っていく。逆さまになったまま走っているのだ。

「その人を放せえ！」

翼竜は飛鳥に気づいて首を捻るが、白い疾風のように上空から飛来した飛鳥を避けるには、その大きな体は愚鈍過ぎる。走りながら飛鳥は右ストレートを放ち、翼竜の胴体に大きな穴を開ける。

翼竜は内臓をぶちまけながら甲高い苦悶の声を上げると、空中で金色の粒子となって消え去ってしまう。同時に女性は落下し始める。全身の力が抜けていることからすると、どうやら気絶しているようだ。

勢いのついた飛鳥はすぐには止まれず、空中で足踏みをして減速する。しかしその間にも女性は、青く長い髪をなびかせて真つ逆さまに落ちていく。

「ガルド、お願い！」
「あいよ！」

ガルドはツバメのように急降下して、空中で女性を抱き止める。そのまま木々の間を滑るように高度を下げていき、重力などないかのように柔らかく地面に着地する。直後、飛鳥も勢いよくガルドの隣に着地する。

「よつと！」
「お疲れ」

飛鳥とガルドはハイタッチする。

ガルドは女性を草むらに寝かせ、周囲を見回す。そこは深い森の中のようなのであるが、周囲は静まり返っている。あいにくの曇り空とも相まって、何となく不気味に感じてしまう。

「なあアスカ、この人……　って、お前なにやってんだ？」

飛鳥は腕を上げたり下ろしたりして、首を捻って背中を覗き込んでいる。

「ガルド、アタシの背中なんか光ってる？」
「背中？」

飛鳥の背中には白いセーラー服があるだけで、特に何か変化があるようには見えない。

「なんにもなっていないけど」
「そっかぁ……」

飛鳥はがつくりとうなだれる。

「逆さまパンチ」は四枚目の技じゃなかったか」
「んなわけないだろ」

どうやら飛鳥は“百花繚乱”の最後の花びらの技を意識して、先ほどのアクロバティックな攻撃をしたようだ。

「だいたい、なんだよそれ“逆さまパンチ”って。ネーミングもだつせえし」

「うっさいわね！」
「ん……」

二人の話し声に反応したのか、女性が呻き声を上げる。

「あ、気がついた」

飛鳥がすかさず女性の横にしゃがみ込む。ガルドは荷物の中から水袋を取り出す。女性は長い睫毛を震わせたかと思うと、ゆっくりと瞼を開く。焦点の定まらないライトブルーの瞳を左右に動かし、周囲の様子を認識し始める。するとすぐに飛鳥に気づいて、目を大きく見開く。

「え、あ、あの、こ、ここは…… 私は……」
「まあまあ、まずは水でも飲んで落ち着いて」

ガルドが水袋を差し出すと、女性は上体をゆっくり起こして夢でも見ているかのように呆然とした表情で受け取る。

「アンタ、翼竜に食べられそうになってたんだよ」
「え、あつ！」

ようやく自分の置かれていた状況に気づいたのか、女性は青ざめて震え始める。飛鳥は優しく女性の肩を抱き、背中をさする。

「もう大丈夫だよ、翼竜は倒したから」
「あ、あの、ありがとうございました、あなたたちは……」

飛鳥の体温を感じてようやく落ち着いたのか、女性の顔に赤みが戻り始める。

「アタシは藤堂飛鳥、こっちはガルド…… なんだっけ？」
「おまつ、ロバート！ ガルド」ロバート！ 名前忘れんなよな！」
「ごめん、ごめん。普段ガルドってしか呼ばないからさ」
「ったく…… 俺たちは“召喚された勇者”だ。俺はイスペリアに、コイツはフェンドルフィンに召喚された」
「そ、そうなんですか！」

女性はかなり驚いたようで、目と口を丸くしている。

「私はアイリスの“薔薇十字隊”に所属するウィザードで、エマ」
ジェラートと言います。お願いします、女王様を助けてください！」

女性は飛鳥の腕にすがりつく。そして驚愕の事実を告げる。

「女王様はあなた達と同じ、“召喚された勇者”の封印を解きに行かれました」

今度は飛鳥とガルドが驚く番だった。

104話：ボスモンスター

エスターは“神の国”と言われるアイリスでもさらに特別な場所である。“聖地”とも言われ、アイリスの人々はエスターに滅多に近寄ることはなく、その姿を遠くから眺め、畏怖するだけであった。エスターはただの山ではなく、山それ自体が魔法の塊であるという。まるで生きて呼吸するがごとく、山全体から魔力を放出している。言い伝えによると、この世界が創世された時から存在する神聖な山らしい。

そしてその中腹には“フェアリーテイル”と呼ばれる聖なる洞窟があり、中には“妖精”と呼ばれる古の存在が今もなお生活していると言われている。“言われている”という曖昧な表現なのは、誰もその存在を確認していないからだ。正確にはアイリスの女王を始めとした選ばれた一握りの者しか“フェアリーテイル”に入ることは許されていないからだ。

妖精たちと歴代のアイリス女王たちとの間には厳格な取り決めがあり、それを破るとアイリスにとって不幸な出来事が起こるとされていた。そのため、一般のアイリス人は決してエスターには近寄らなかつたし、女王を始め妖精たちに接触したと思われる者たちはみな一様に妖精の話題には触れようとはしなかつた。

しかし妖精たちが存在することは確かであつたし、アイリス人たちも“決められた者以外は入らない”という取り決めをきちんと守っていたため、妖精たちとアイリス人の間にトラブル等は今まで一度もなかつた。

エマの話によれば、ニンファドーラ女王はファンタジアがモンスターたちに突然襲われた二年前、飛鳥たちの世界から選りすぐった勇者を召喚し、武器や戦いを忌避する国民性を考慮してその勇者をフェアリーテイルへ連れて行つたらしい。妖精たちにフェアリーテイルでその勇者を鍛えてもらい、来るべき災厄に備えていたという

ことであつた。

「じゃあ、その勇者が出てくれば、この国は救えるってわけだね」

ようやく顔色にも血色が戻り、半分ほどに減った水袋をガルドへ返しながらエマは困惑したように眉をひそめる。

「それは…… 何とも言えません」

「なんで？ だってその妖精とかつて不思議な存在に鍛えてもらってたんでしょ？ その勇者」

エマは眉間のしわを深め、膝の上の両手を強く握りしめる。

「女王様は、ファンタジアを救える力をその勇者に身に着けさせたとおっしゃっていました。でもそれには長い時間がかかると…… だからこそローレンツ山脈に結界を張って、アイリスを孤立させたんです。フェンドルフィンやイスペリアには申し訳なかったとは思いますが……」

クウエンディ女王は多くの犠牲を払って、ニンファドーラ女王に何度か協力を打診していた。そのことごとくを断っていたのは、ニンファドーラ女王にとっても辛いことだったらしい。

フェンドルフィンとイスペリア、それにアイリスというファンタジアの衛星国とも言える三国は、それぞれに世界を救おうと勇者を召喚した。

フェンドルフィンとはにかく適正者を数多く召喚し、必要な物を与えて他国と協力体制を取ろうとした。

イスペリアは勇者を自国で鍛え、持ち前の軍事力と共に攻勢に出ようとした。

そしてアイリスは一人の勇者を完璧に鍛えて起死回生の反撃に出

ようとしていた。

三つの国はそれぞれの国のやり方で、ファンタジアを、そしてこの世界を救おうとしていたのだ。そのすべてに重要な役割を果たしているのが召喚された勇者だ。

「クウエンディ女王は、アタシの前にも何人が召喚したって言ってた。そしてアタシがもし死んだら、別のヤツを呼ぶって言ってたよ」「デルピエロ王もそうだったな。『お前が死んだらまたあっちに行かなければならん』って苦い顔して言ってたのを覚えてる」

「ニンファドーラ女王様は、ある意味確実性を重んじられる方なんです。ご自分で時間をかけて十分に吟味されて召喚したようです。確実にファンタジアを救える、本当に力のある者だけを召喚するとおっしゃって……」

飛鳥とガルドは複雑な気持ちだった。自分たちは確かに召喚されるべき“適正者”ではあったようだが、確実にファンタジアを救える存在かと言われれば首を捻らざるを得ない。精一杯、できる限りがなばると心に決めてはいるが、期待に応えられるほど強い存在だとも思えない。

そついう意味でこの“三人目の勇者”の存在は、飛鳥たちにとつても希望の持てる存在だろう。ファンタジアを解放し、この世界を救い、元の世界に戻るためにも、その勇者をモンスターたちに殺させるわけにはいかないのだ。

「フェアリーテイルから勇者を連れ出せるのは、今はもうニンファドーラ女王様だけです。ですから女王様が万が一モンスターたちの手にかかったら、この国も世界ももう……」

飛鳥もガルドも、「自分たちがいるじゃないか!」と自信を持つては言えない。それほどうぬぼれてはいないからだ。極端な話、モ

ンスター軍が一万体いるなら現実世界から適正者をその十倍の十万人を召喚すればいいのだ。少ない人数でたくさんの敵を倒すのは確かに痛快な話ではあるが、現実味を帯びないからこそ痛快に感じる。戦いとは本来、冷酷なまでに現実的なのである。敵より多い人数を揃えるというのは、戦略の基礎の基礎なのだから。

「それなのにどうしてわかんないって言うの？」

エマは何と言ったらいいいのかわからないといった様子で言い淀む。するとガルドが横から助け船を出す。

「つまりこういうことだろ？ 『確実に強くなるにはまだ時間がかかる。今連れ出してもモンスター軍に勝てるほど強くなっているかどうかかわからない』」

エマは我が意を得たりとばかりに、何度もうなずく。

「女王様は、本当は後半年かかるとおっしゃっていました。勇者が召喚されて一年半、本来は最低でも二年間は修行させないといけないうって……」

「まあでもある意味四分の三は終わってるってことでしょ？ その修行。だったら少なくともアタシたちよりはよっぽど頼りになるんじゃない？」

「そうだな」

もしかしたらここで死ぬかもしれないと悲壮な決意をしていただけに、飛鳥とガルドは希望を感じる。しかしエマはその希望を打ち砕くような事実を二人に告げる。

「女王様が召喚された勇者でも、妖精たちの修行が完全ではないな

ら“あのモンスター”には勝てないかもしれません」

飛鳥とガルドはぎくつとして、顔を見合わせる。“あのモンスター”……つまりアイリス城を破壊するぐらい“大きくて強いモンスター”のことだ。

「あのモンスター」ってもしかしてモンスター軍のボス？」

飛鳥の言葉にエマは青ざめてうなづく。目には涙が浮かんでいる。アイリス城がそのモンスターに襲われた場面を思い出しているのだろうか。

「あの……そのボスモンスターってどんなヤツ？」

飛鳥は聞くのが怖かったのもあり、おずおずと聞いてみる。そしてエマの口から出てきたそのモンスターの名前は、二人を絶望のどん底へと落とすのだった。

「ブルードラゴンです」

105話：ユグドラシル

ドラゴンは“神獣”とも言われ、古来より様々な伝承や民話に登場するあまりにも有名な存在である。ファンタジーの世界では定番のモンスターで、時にはボスモンスターとして時には味方としても登場する。その姿は本来、世界各地に点在する“蛇信仰”が元になったと言われている。

全身強固な鱗で覆われ、鋭い爪を持ち、高速で高空を飛翔する。様々なブレスを吐き、人語をも解する。中には人よりも高度な知性を有するとされる種類もあり、モンスターというよりは“神”に近い存在とされるものもある。実際、世界的に有名な神話や物語の中などでも、神がドラゴンの姿に変化したという逸話は枚挙に暇がない。

「問題はどのパターンかってことだよなあ……」

再度白い冷製スープのような霧の中を飛鳥はジョギングするように走り、ガルドはゆったりと飛んでいる。つなかれた手は冷たく、霧がまとわりついてすでにしっとりとして湿っている。

「どのパターンって？」

雲のような霧の塊が二人の間を流れていく。エマとは先ほどの森で別れた。最後までついて行くと健気にも主張していたが、実際問題翼竜にさえ勝てない者を連れて行っても足手まといだ。エスターとフェアリーテイルの詳細な場所が確認できたので、エマにはまだ無事な村や町へ自力で避難してもらうようにしたのだ。

エマの話によれば、クリスタルレイクからエスターまでの町や村は壊滅状態だが、アイリスの東側はほとんど無事で、それぞれの自

警団ががんばっているらしい。モンスター軍がアイリスへ侵攻してきてから野生の凶悪なモンスターが出没するようにはなったが、基本的に魔法能力の高いアイリス人たちが野生モンスター程度に全滅させられることはないだろうというエマの話だった。

「つまり、空を飛ぶのかとかブレスは何を吐くのかとか」

ガルドはRPGゲームに詳しい。モンスター軍を束ねるブルードラゴンというモンスターはどんな攻撃をしてどんな特徴があるのかなど、事前にわかればそれに越したことはない。敵の情報がわからないということは恐怖心が増すし、何よりも戦う覚悟を決めづらい。

「ブルーって言うくらいだから、きっと青いんだろうね」

「青い竜って聞くと、俺どうしても海の神“リヴァイアサン”を想像しちゃうんだけどな」

「なんとなく聞いたことある」

「でもあれは海だしなあ」

翼竜からエマを助け出す直前に感じた下方からのあの禍々しい気配は、今はまったく感じられない。一度様子を伺いに恐る恐る高度を下げてみたが、連なる森の木々以外にはモンスターはおるか野生の動物さえもいなかった。白い霧の底に沈む深い森には生物の気配は一切なく、不気味な静けさが辺りを支配していた。

その後また元の高度に戻って進んで行くが、何となく背筋の寒くなってきた飛鳥は無理矢理明るい声でガルドに話しかける。

「ドラゴンって火吐くもんだって思ってたけど、他にも何か出すの？ ビームとか」

「キングギドラかよ!」

薄ら寒い雰囲気を感じ取ったのか、ガルドもテンションを上げている。

「他にもいろいろあるみたいだけど、有名なのはポイズンブレスかな」

「ポイズンって…… 毒？」

「そう、毒の霧を吐くドラゴンの出るゲームもあったなあ。アレなんてったっけかな」

「毒って…… なんかグレート・カブキみたいだね」

「なんだそりゃ？」

「あ、アメリカ人のガルドは知らないか」

「グレート・ムタなら知ってるぞ」

「知ってんじゃない！」

飛鳥とガルドの笑い声が霧の中に響いていく。しばらく進みつづけると、真っ白い霧の中が次第に薄暗くなってくる。どうやらもう夕方らしい。モンスター軍に見つからないようにするためには、森の中で野宿するしかない。野生モンスターは心配だが、高い木の上なら少しは安心して休める。飛鳥はそろそろ高度を下げた方がいいと思い、横にいるガルドへ声をかけようとする。するとガルドは前方を見ながら視線を鋭くさせる。

「おい、アスカ、見てみるよ」

ガルドの視線を追って目を細めると、霧の中から緑色の山が現れる。それは幅百メートル以上はある巨大な木であった。

「うわ…… すっごい……」

霧の中から現れたその巨大な木は、青々とした葉を霧に濡らして

果てしなく長大な枝を左右に伸ばしている。その様子はまるで、巨大な緑色の城が空中に浮かんでいるようにも見える。空に浮かぶ巨大な木…… 飛鳥はまるで夢を見ているようだった。

「これがエマの言ってた“ユグドラシル”だな」

別名“世界樹”とも言われるこの巨木は、現実世界においては架空の木である。世界そのものを内包するとも言われる神聖な木だ。この世界の魔力の根源とも言われ、“聖地” エスターの玄関にもなっている。エスターの巡礼に来たアイリス人たちは、この木より北には行つてはいけないことになっているらしい。そのためこの木の根本に留まって、遠くに見えるエスターへ祈りを捧げるのだ。残念ながら今は霧のために、エスターどころか木の根本さえ見えない。

「ここまで来たってことは、エスターはもうすぐだね」

「ああ」

飛鳥とガルドはユグドラシルの豊かな梢を掠め、天辺まで高度を上げていく。葉や枝をかき分けながら中に入っていくと、人間より太い枝が縦横無尽に広がっている。

「いい感じじゃない？」

飛鳥は適当な場所を見つけて腰を下ろす。太い枝は何となく温かい気がして、飛鳥はほっと一息つく。手のひらを通してユグドラシルの命の息吹が感じられる。やはりこの木は普通の木ではないようだ。

ガルドは飛鳥の隣に腰を下ろし、荷物の中から干し肉を取り出す。最後の二切れだ。

「ここじゃ火を起こすわけにはいかねえよなあ」

そういうとガルドは手のひらに肉を載せ、じっと見つめる。すぐに肉の焼けるおいしそうな匂いがして白い煙が立ち上る。

ガルドは召喚されてすぐイスペリアの寺院へ入れられた。そこで旅に必要と思われる一通りの魔法を身に着けさせられたのだ。今までガルドの魔法によってどれだけ助けられたかわからない。モンスターを倒すことはできても、調理したり寝床をこしらえたりするのは飛鳥にはできない芸当だった。

「ほい、熱いから気をつけろ」

ガルドは狐色に焼けた肉を飛鳥へ放る。飛鳥は反射的に手を出して受け取る。

「うあちっ!」

あまりの熱さに、飛鳥は思わず肉を放り上げる。しかしこの高さで肉を落としたら拾うことは難しい。何度か放り上げながら、飛鳥はスカートの上に肉を置く。そんな飛鳥を笑いながら、ガルドは自分の分を焼き始める。干し肉とはいえ、内部には若干水分が残っていたらしく、飛鳥のスカートには肉汁の染みが少しついてしまう。

「おい、汚れるぞ」

自分の分を焼き上げたガルドは肉を自分の荷物の上に置き、タオルを出して飛鳥の肉を載せる。ついでに飛鳥のスカートを拭き始めると、その手に水滴が落ちる。驚いて見ると、飛鳥は声も出さずに泣いていた。

「お、おいアスカ、急にどうしたんだよ」

ガルドは慌てて涙を拭ってやろうとするが、肉汁のついたタオルで飛鳥の顔を拭くわけにはいかない。おろおろしていると、飛鳥の手がガルドの腕をしっかりと掴む。

「ガルド、この木さ……」

飛鳥の目は赤くなり、目尻には透明な涙が玉を作っている。ガルドはその美しさに声を失ってしまう。

「昔観たアニメに出てくる木に似てんだよね……」
「アニメ？」

飛鳥はうなずく代わりに、梢の間からすっかり暗くなった霧の空を見上げる。濃い霧を通して、青い月明かりがほんの少し差し込んでくる。幻想的なその雰囲気、ガルドは我を忘れて呆然としてしまう。ここは“世界樹”ユグドラシルの懐なのだと、ガルドは改めて神聖な気持ちで身を引き締める。

「『天空の城ラ・ユタ』って知ってる？」

飛鳥は月明かりに涙を光らせながら呟く。あの時と同じだとガルドは思い出す。キャリーの町で飛鳥が自分の辛い過去を告白してくれた時。あの時もこんな青く幻想的な月明かりだった。

「ああ知ってるよ。ジャパニーズアニメの名作だ」
「もしさ……」

飛鳥は視線をガルドへ戻す。

「もし元の世界に戻れたらさ、アタシといっしょに映画観に行こ？
ジブリアニメ」

「アニメ？ お前アニメなんか観るのか？」

飛鳥は微笑んで首を横に振る。涙の粒が飛んで、小さな星屑のよう
に散っていく。

「何でもいいんだ、ホントは。とにかく行こ？」

ガルドは飛鳥の細い肩を抱き寄せる。その肩は小さく震えていた。

「ああ、行こう。ぜってえ行こうな」

ガルドは低く嗚咽を漏らす飛鳥を強く抱きしめる。その肩からは
「死にたくない」という飛鳥の想いが伝わってくる。

飛鳥は変わった。出会った頃は、目つきはもつと鋭かったし言葉
遣いも乱暴だった。けれど今の飛鳥はちよつと気の強い普通の女の子だ。
普通の女の子は普通の生活をしなきゃならない。こんな世界
で死ぬか生きるかの冒険などをしてはいけないのだ。

ガルドは心から決意する。自分の命を懸けて飛鳥を守ろうと。そ
して自分の命と引き替えにしても、飛鳥を元の世界へ戻してやる
うと。

その夜、ガルドと飛鳥はしっかりと身を寄せ合って眠った。ユグ
ドラシルの木は温かく、二人は信じられないくらい深い眠りにつく
ことができた。

それはこの世界を救おうとする若者たちへ、ユグドラシルからの
せめてものエールだったのかもしれない。

翌朝、二人は異様な音で目を覚ます。依然として霧は立ち込めて

いるが、昨日とは打って変わって青空が見える。その音は動物の低い唸り声のようにも、迫り来る地震の音のようにも聞こえる。

その不気味な音の正体を確かめようとユグドラシルの梢から顔を出すと、二人の眼前には信じられない光景が広がっていた。

106話：地獄の空中回廊

ユグドラシルのある場所は小高い丘になっているようだった。晴れ始めた霧の向こうに青い三角錐が見える。それはまるで蒼空を固形化したような幾何学的な青いピラミッド。あれがエスターなのだろう。

ユグドラシルからエスターまでは直線距離にして約六、七キロメートルほどだろうか。遙か下方の地表が薄く雲のように流れていく霧の間から垣間見える。

そこは真っ黒に蠢くモンスターたちで埋め尽くされていた。

「な、なにあれ」

飛鳥はその様相に吐き気を催す。ここから見るとまるで無数の虫が蠢く様に似ている。あの一一つはモンスターなのだ。数千、数万のオークの群れが、重く低い太鼓のような単調なリズムの音に合わせて進んでいく。エスターへ向かって。

「モンスター軍だ……」

ガルドの深刻な声音に、飛鳥は気が遠くなる。時折見える木々の間にも、真っ黒いモンスターの頭が無数に蠢いている。地面はまったく見えない。まさに波打つ黒い絨毯だ。いったい全体でどれくらいの数がひしめいているのだろう。あの一休一休が普通の人間の何倍もの膂力を持ち、人を引き裂くことに何の躊躇もしないオークたちだと考えると飛鳥は総毛立つ思いがする。例え所詮雑魚モンスターだとしても、あの数は驚異的だ。見渡す限りの地面を埋め尽くすほどの数の敵と、たった二人でどうやって戦えばいいというのだろう。今まで戦ってきた数とも桁が違う。いくら飛鳥とガルドの力が

上がっているとはいえ、あれだけの数と戦えば途中で間違いなく力尽きる。それは即、死を意味するのだ。

「あ、あれ見ろよ」

ガルドがモンスター軍の黒い絨毯の真ん中を指さす。そこには周囲のオークたちよりも明らかに大きな後ろ姿が見て取れる。

「あれって……もしかして狂戦士？」

「ああ、それも一体だけじゃない」

ガザで戦った狂戦士は全部で五体。今の飛鳥とガルドなら倒せない相手ではないが、晴れてきた霧の部分だけ見ても、狂戦士の姿は数十体はある。全部を類推すれば百体以上は確実にいるだろう。

モンスター軍の前の方で、一際大きな鳴き声が響く。目を凝らすと巨大な爬虫類の後ろ姿が複数見える。巨大なトカゲを連想させるその後ろ姿は、恐竜のようにも見える。しかしフェンドルフィンで見たティラノサウルスとはシルエットが違う。その大きさも。小さく見ても体長二十メートル以上はあり、ここから見てもオークの数十倍だ。その様は昔テレビで何気なく見た歩兵と戦車の関係のようにも見える。

「パキケファロサウルスだ」

「え？」

飛鳥は一瞬翻訳こんにやくの効果が消えてしまったのかと錯覚する。今朝最後の一枚を食べたばかりなのに。

「パキケファロサウルス。頭蓋骨が異様に堅くって、岩をも砕く頭突きで攻撃する気性の荒い恐竜だ」

「ガルド、恐竜に詳しいの？」

「母さんが……」

ガルドは少し言い淀む。「母さん」という言葉で、昨日の飛鳥のように現実世界に郷愁を誘われたのだろうか。

「母さんが昔、恐竜の図鑑を買ってくれたんだ。金もないのに無理して……俺のバースデイに」

「そっか」

「でも、パキケファロサウルスは大きいものでも十フィートから二十フィートぐらいのはずだ。あれはどう見ても二十ヤードはある。あり得ねえ」

「ええっと、つまり一フィートが三十センチくらいだから……本物の四、五倍は大きいってことね」

ガルドは顔色を失った白い顔でうなずく。

「あり得ないっていったって、そもそもこの世界自体があたしたちの世界の常識じゃあり得ないんだから、この際そんな関係ないよ」
「ああ、そうだな」

その感想にはガルドも全面的に賛成だった。ここでは現実世界の常識は通用しない。それは取りも直さず自分たちにも言えることだ。

「見た感じドラゴンっぽいのはいないね」

ブルードラゴンというからにはやはり青い竜なのだろう。真っ黒いモンスター軍を可能な限り見渡して見ても、それらしい色のモンスターは見受けられない。

すると今度は複数の甲高い鳴き声がして陽光が陰る。

「お、おい隠れる！」

ガルドが慌てて飛鳥の頭を梢の中に押し込む。ユグドラシルの全体が黒い影に覆われる。梢の隙間から見上げると、無数の翼竜たちがエスターの方へ向かって飛んでいく。あまりの数の多さに、辺りは一瞬のうちに真っ暗になる。

「じよ、冗談じゃねえぞ」

ガルドが飛鳥の耳元で呟く。大地と空がモンスター軍で埋め尽くされている。これが本物のモンスター軍の実働部隊であった。

「ガルド、どうする？」

さすがの飛鳥も慎重な顔でガルドを見上げる。この数は気合いや根性でどうなるものでもない。むやみやたらに突撃していても、エスターにたどり着く前に肉片にされてしまうだろう。

しかしエスターにはニンファドーラ女王や護衛の“薔薇十字隊”がいる。三人目の召喚された勇者を守るために、きつと命を懸けてこのモンスター軍を迎え撃とうとしている。飛鳥とガルドはこのままここに隠れているわけにはいかないのだ。

「どうするもこうするも……」

ガルドは突然飛鳥を抱きしめる。意表を突かれた飛鳥は呆然としてしまう。ガルドはそのまま飛鳥と唇を重ねる。数秒ほどで唇を離れたガルドは、穏やかに微笑んでいる。

「俺が暴れてヤツらの気を引く。お前は全速力であの山まで空中を

駆け抜ける」

「ええっ？」

飛鳥は空と大地が真っ黒に埋め尽くされている、エスターまでの地獄の空中回廊を見つめる。

「ここでお別れだ」

ガルドは全身から紫色の光を放ち始める。“魔王変化”だ。

「ガ、ガルド！」

すっかり霧の晴れた抜けるような青空をバックに、ガルドは見る間に魔王の姿へと変化していく。異形の姿となったガルドのその凶悪な顔は、やはり穏やかに微笑んでいた。

107話：駆け抜ける！

ガルドは大きな黒い蝙蝠のような翼を広げ、モンスター軍の真っ只中へ突っ込んでいく。ガルドに気づいた翼竜の一団が、ガルドを追って急降下していく。見る間にガルドの姿は見えなくなってしまった。

「ガルド！」

飛鳥は走り出す。ユグドラシルのてっぺんから、坂を下るようにまっすぐと駆け下りていく。不気味に蠢くオークの大集団が急速に視界に迫ってくる。

飛鳥はオークたちと翼竜たちのちょうど中間の高度に降りると、青く輝くエスターへ向けて空を駆けていく。

「いづくぞおおおおお！」

腕を振り脚を上げ、飛鳥はトップスピードを維持する。駆け下りた勢いも手伝って、そのスピードは今までにない速度まで上がる。

飛鳥の左手前方で大きな爆煙が上がる。ガルドが飛鳥のためにモンスター軍を攻撃しているのだろう。朝の澄んだ空気は固く走りやすい。その分震動が激しく、飛鳥はガルドの様子を伺う余裕がない。

「ガルド、死んじゃダメだよ！ お別れなんてやだよ！」

エスターの美しい山肌が黒い集団で遮られる。翼竜たちが飛鳥の行く手を遮ったのだ。

「どけえええええっ！」

飛鳥は全身を金色のシールドで覆い、右拳を突き出す。“遠当て”だ。

まるでナパーム弾のように翼竜たちが次々と爆発四散していく。鮮血と肉片の雨の中、飛鳥は猛スピードで駆け抜けていく。翼竜たちの肉片は次々と金色の粒子に変わっていく。金色の粒子は飛鳥のシールドとの摩擦で長く尾を引き、空中に金色の流星が出現する。翼竜たちの叫び声と降り注ぐナイトで、地上部隊が飛鳥の存在に気づく。ガルドの方へ動きかけていた黒い波が、一斉に流れを変える。

「矢を放て！」

狂戦士の指示が下方を流れていく。すぐに背後から無数の風切り音が聞こえ、走る飛鳥の左右を矢が掠めていく。翼竜の鳴き声がひっきりなしに追いかけてきて、後ろはたいへんなことになっているのだろうことがわかる。

青く澄んだエスターの山肌が間近に見えた時、とうとう飛鳥の前に二体の狂戦士が現れる。どうやらこの狂戦士たちはガルドのように飛べるらしい。巨大な幅広の剣を構え、飛鳥に斬りかかってくる。

「死ねえ！」

左右同時に巨大な剣が振り下ろされる。

「ひゅっ！」

飛鳥は息を吸い込んで左腕を上げる。硬質な音をさせて左の狂戦士の剣を腕で受け止め、飛鳥は身体を真横に一回転させ、右の狂戦士に回し蹴りを放つ。

「ぐばおっ！」

猛烈な勢いで狂戦士が吹き飛ばされる。狂戦士は身体を“く”の字に折り曲げたまま飛んでいき、衝撃音とともにエスターの山肌へ埋没する。左の狂戦士をかわした飛鳥は、速度を落とさず走り続ける。そしてブレーキ代わりに山肌に埋まっている狂戦士へ、まっすぐとドロップキックをぶちかます。

骨の碎ける嫌な音がして、狂戦士の胸の真ん中が異様にへこむ。口から大量の血を吐いて、その狂戦士は金色の粒子へ変わる。飛鳥が降り立った場所は、青い氷の地面だった。

「ここがエスター」

エマに聞いた“フェアリーテイル”の入り口は、もう少し上のはずだ。見ると真正面からは翼竜の群れが突っ込んで来る。飛鳥は階段を上るように、山肌を駆け上がっていく。少し遅れて、数体の狂戦士が追いかけて来た。

二百メートルほど登ると、明らかに人工的な洞窟の入り口を発見する。これが“フェアリーテイル”の入り口だろう。磨き上げられた大理石のような山肌に、長方形の入り口が口を開けている。天井部分はコンパスで計ったように美しい曲線を描いている。

「ここだ！ ガルド、ここだよ！」

飛鳥は振り返ってガルドを捜す。しかしその視界は翼竜と狂戦士で埋まっていた。

「う、うわっ！」

飛鳥はシールドを強化して両腕で顔を防ぐ。目をつむって衝撃に備える。直後、翼竜と狂戦士の悲鳴がしてモンスターたちの気配が消える。

「大丈夫ですか！」

飛鳥が両腕の間からうつすらと目を開けると、白く美しいドレスを身に纏った女性たちが十数名空中に浮かんでいる。金髪や青い髪、緑やオレンジなど、色とりどりの美しく長い髪が風になびき、それぞれが次々とやはり色とりどりの魔法の塊を撃ち出している。“薔薇十字隊”だ。

「ア、アンタたちもしかして“薔薇十字隊”って人たち？」

「そうです、あなたは？」

飛鳥に声をかけた女性は、青く透き通るような美しい髪をした若い女性だった。その瞳も南国の海のようなライトブルーで、飛鳥は一瞬この女性がニンファドーラ女王かと思ってしまう。

「ア、アタシは……」

「隊長、あそこを！」

緑色のセミロングの髪をした女性が右の空を指さす。そこには黒いモンスターの塊が空中に浮かんでいた。

「ガルド！」

飛鳥は直感的にそれがガルドに群がった無数の翼竜だと察知する。飛鳥は弾かれたようにそこへ向かって駆け出す。

「待ちなさい！」

先ほどの青い髪の女性の声が背後に遠ざかる。しかし飛鳥は前後左右に飛び交う矢の雨の中、モンスターの塊へ向かって一直線に走って行く。

あの中でガルドはモンスターたちに袋叩きに遭っているのではないか。もしかしたらすでにガルドは引き裂かれて死んでいるのではないか。

飛鳥は走りながら目頭が熱くなる。近寄ってくる翼竜や狂戦士どもを次々と金色の粒子に変えながら、飛鳥は走り続ける。

モンスターの塊まで後数十メートルのところで、突然その塊に太い稲妻が突き刺さる。轟音とともに翼竜たちは一瞬のうちに燃え尽き、炭になって霧散していく。飛鳥は驚いて急停止する。

「あなたは入り口まで下がっていてください」
「え？」

突然頭上から透明感のある澄んだソプラノの聲がかけられる。見上げるとそこには金色の長い髪をなびかせた美しい女性が、ほの白い光に包まれて浮かんでいた。

108話：解けない封印

「あなたがアイリスの女王様？」

金髪の女性、ニンファドールは透き通るような微笑みでうなずく。美しさの中にも理知的な光を湛えた瞳は、飛鳥が何も言わなくてもすべて理解している聡明さを感じる。

「同じだ」と飛鳥は感じる。この女性はクウェンディ女王と同じ存在なのだと。美しさの中にも優しさと強さを兼ね備え、愛する民のためなら炎のように激しく戦うこともできる。悪には決して膝を屈せず、自分の命さえも投げ出して人々の盾となる。

一国を統べる為政者の持つ威厳と存在感を、飛鳥はこの凜とした細身の女性から感じ取る。

「女王様！」

先ほどのライトブルーの髪の女性が飛んてくる。“薔薇十字隊”の隊長らしい女性だ。

「ライラ、あの者を避難させなさい。“彼女”が来ます」
「は、はい！」

ライラと呼ばれた“薔薇十字隊”の隊長は、ぐったりと空中に浮かんでいるガルドへ向かって飛んでいく。後に緑色の髪をした女性とオレンジ色をした髪の隊員がついていく。

ガルドは見たところ外傷らしい外傷はないが、気を失っているらしい。ライラたちに手を引かれて空中を漂ってくる。魔王変化をしているガルドの身体は彼女たちよりかなり大きく、空中とはいえ連れてくるのは重労働のようだ。

「あの…… 女王様、“彼女” って……」

飛鳥は牽引されるガルドを気かけながら、ニンファドーラへ問いかける。あれほど激しく攻撃を仕掛けてきていたモンスター軍は、ニンファドーラの稲妻に怯えたのか潮が引くように退却していく。それでもエスターの麓は、黒い絨毯を敷いたように数十万のオークたちで埋め尽くされたままだ。空には翼竜たちが旋回を続けている。決して警戒は解けない。

「“彼女” とはモンスター軍の司令官、ブルードラゴンです」
「ええ？」

飛鳥はゲームもファンタジーにも詳しくないので何とも言えないが、ドラゴンに性別などあったのだろうか。先入観ではどうしても男、それも「わし」とか言うような老齢のおじさんというイメージがあつたのだ。

「女王様、この者は」
「フェアリーテイルに入ることではできません。入り口で手当てをしてください」
「はい！」

ライラはぐったりとうつむいたままのガルドを押して、フェアリーテイルの入り口へと向かう。

「あなたも避難して…… そのペンダントは」

ニンファドーラは飛鳥の鎖骨の間で光っている青いペンダントに気づく。飛鳥は指先で持ち上げて女王に見せる。

「クリスタルレイクで、アタシたちに女王様のことを教えてくれた人の形見です」

「そうですか…… 形見ということは、リンは亡くなったのですね」

飛鳥は無言でうなづく。下半身のちぎれた壮絶なあの女性の死を思い出し、飛鳥は改めて怒りが込み上げてくる。ようやくエスターにたどり着いた。そしてアイリスの女王に会うことができた。後は……

「女王様、ここに来る前にエマさんという“薔薇十字隊”の隊員に会いました。彼女に聞いたんですけど、アタシたちと同じ“召喚された勇者”がここにいますよね」

「エマ！ 彼女は生きていますね、よかった。そうです、私はそのために城を捨ててここまで来ました、しかし……」

ニンファドーラの表情が陰る。飛鳥は嫌な予感がする。

「封印がまだ解けないのです」

「封印が解けない？」

“封印”が何なのか、飛鳥にはよくわからない。飛鳥の認識では、神社の扉に貼られたお札のようなイメージしか湧かないのだ。

「エマさんは、勇者の封印が解けるのは女王様だけだって言っていました」

女王は厳しい顔でフェアリーテイルを振り返る。入り口の前ではガルドの赤黒い巨体が座らせられ、幾人かの隊員たちが治療の魔法をかけている。

「正確に言つと、勇者の封印を解けるのは妖精たちだけです。私は妖精たちと話をする権限を与えられているだけなのです」

「ええっ！ つ、つまりその妖精たちが許してくれないと、勇者は出て来られないってことですか？」

ニンファドローは悲しげに睫毛を伏せる。きっと女王はここへきてずっと妖精たちに懇願していたのだらう。アイリスの、そして世界の危機を必死で訴えながら。

「で、妖精たちは……」

ニンファドローは沈痛な面持ちで首を横に振る。豪奢な金髪が、次第に陰ってきた弱い陽光を反射して儚げにきらめく。

「『まだ時期が満たされていない』と……」

「んなバカな！」

思わず飛鳥は叫んでしまう。妖精たちの融通の利かなさといったら、まるで“お役所仕事”ではないか。これだけのモンスター軍が迫り、あれだけのアイリス人たちが殺されたというのに、時期だのなんだの言っている場合ではないではないか。

「アタシ、怒鳴り込んで来る！」

飛鳥はフェアリーテイルへ向けて走り出す。その時空全体に雷鳴が轟く。

「なに？」

飛鳥は急停止してその場で足踏みをしながら空を見上げる。今まではそれほど晴れ渡っていた空に、真つ黒な雲が立ち込めている。物理的な質量さえ感じられる厚い黒雲が、急速に大空に蓋をしていく。辺りは急に夕方のように赤い陽光に染まり、飛鳥は思い出す。

この世界に召喚された時、フェンドルフィンのあの丘の上で初めて見たファンタジアの空と同じだと。

「あなたのお名前は？」

ニンファドローラが真剣な顔で飛鳥へ問いかける。

「アタシは藤堂飛鳥、あつちはガルド」

「ありがとう。ではアスカさん、彼の意識が戻ったら逃げてくださ
い」

「え？ そんなことできるわけ」

「“彼女”にはあなた方でも敵いません」

ニンファドローラの言葉は、最後まで飛鳥の耳には届かなかった。

大気を震わせ、地を揺るがす雷鳴が辺りを満たしたからだ。

一度に数十本の太い稲妻が大地に突き刺さる。その一本一本が先ほどニンファドローラが放った魔法の稲妻の数倍は太い。大地を穿つ稲妻に続いて、黒雲が急速に渦を巻く。

何かが空から降りてこうとしている。その場にいる誰もが、それがなんなのかわかり過ぎるほどにわかっていた。

109話：天地鳴動

硬質な三角形の尖った青い鱗がびっしりと敷き詰められた巨大なモンスターが、ゆっくりと下降してくる。飛鳥はヘビなどの爬虫類があまり好きではないが、これはそういうレベルではない。確かに見た目はトカゲのようにも見えるが、まずそのサイズが尋常じゃない。

先ほど上空を駆け抜けてきたモンスター軍にも、ガルドが言っていたパキケファロサウルスという恐竜型モンスターがいるが、それよりも遥かに大きい。

スリムな胴体に太い後ろ足がついており、三本のかぎ爪が大気を切り裂くように鈍く光っている。“手”と表現してもいい前足は細く、やはり三本のかぎ爪が光る。長い首が見えてくると、その上には鰐のような長大に裂けた口に並ぶ牙と真っ赤に燃え立つ目が現れる。

飛鳥にとっては空想上の動物、しかし今日の前に圧倒的な存在感でもって現れたのは紛れもなく現実の存在であるブルードラゴンだ。ブルードラゴンのしなやかな首が引かれ、一瞬その動きが止まる。次の瞬間膨大な炎の塊が飛鳥の方へ、否、ニンファドーラ女王へ向かって噴き出される。

「くっ！」

ニンファドーラ女王は自らを中心に広範囲の魔法のバリアを張る。飛鳥やフェアリーテイルの入り口にいるガルドや“薔薇十字隊”を炎のプレスから守るためだ。

「きゃあっ！」

魔法のバリアが白く輝き、真つ赤な炎が飛鳥の目の前数メートルで上下左右に広がる。猛烈な熱気が飛鳥の顔に吹きつけ、思わず顔を腕で覆ってしまう。炎のブレスはブルードラゴンにとってはただの挨拶代わりだったらしくすぐに止まり、暗く赤い空が戻ってくる。焼けこげた森の梢が黒煙を上げ、炭化した白い灰が雪のように風に舞っている。

ブルードラゴンは、痛みさえ感じるほどの殺意のこもった赤い目をぎらつかせてゆっくりと迫ってくる。地上では強大な司令官が現れたことによって、数十万のモンスターたちが歓喜の叫びを上げている。

「アスカさん、下がって！」

ニンファドール女王の凜とした声に突き飛ばされたように、飛鳥はフェアリーテイルまで走り出す。敵わない。飛鳥は足下が定まらないほど震えていた。それはまさしく恐怖。多少なりともこの世界で召喚された勇者として戦いを経験してきたからこそ、それが如実に感じられた。

ブルードラゴンは焦るでもなく落ち着いた様子で、ニンファドール女王から数十メートルほど離れた真正面で止まる。背中がゆったりと羽ばたく蝙蝠のような黒い翼は風を孕んで膨らんでいるが、どう見ても揚力を発生させているようには見えない。ブルードラゴンにとって翼とは、飛行するためについている器官ではなさそうだ。

『ニンファドールよ、殊勝なことよな』

唖れた声が天空に響く。肉声ではない。脳内に直接響く魔法の波動だ。それは耳をふさごうが目をつぶっていようが排除することはできない強制力を持った負の波動。飛鳥は心の奥底に眠る嫌な記憶がかき回されるような嫌悪感を感じて吐き気を催す。

「何がです」

ニンファドローは豪華な金髪を風になびかせ、自身の数十倍はあろうかという巨大なモンスターに真っ向から対峙して胸を反らす。気圧された様子はまったくくない。“フェアリーテイル”の入り口の前に着地した飛鳥は、いまだ気を失っているガルドの傍らに立って女王の後ろ姿を見守る。

飛鳥は空間が歪むような錯覚に囚われ、めまいがする。生暖かい空気の塊がプリーツスカートをためかす。どうやらブルードラゴンが笑ったようだ。

『そなたの無駄な努力が、だ』
「無駄？」

錐を突き刺すような鋭く尖った言葉が、ブルードラゴンへ放たれる。それだけでも通常の神経の持ち主なら萎縮してしまうだろう。女王の言葉にはそれだけの冷たさと威厳が感じられる。

しかしブルードラゴンはまったく意に介した様子もなく、真正面から受け止める。

『召喚した勇者などに頼っても滅亡は免れぬ』

飛鳥は込み上げる吐き気に抵抗しながら、必死に両足を踏ん張っている。ここでへこたれたらまさにアイツの言う通りじゃないか。

「それは戦ってみないとわかりません。最も、その時があなたの最後でしょうけれど」

『ほう、戦えばわらわが負けるとでも？』

「それ以外に聞こえたなら、私の言い方が悪かったのでしょうか」

『笑止!』

エスターの麓に広がる深い森の木々が一斉にざわめく。ブルードラゴンから放たれた見えない波動が、波紋のように一気に広がる。眼下ではなぎ倒されたオークたちが、折り重なって倒れている。ニンファドーラの魔法のバリアで守られていなかったら、飛鳥もきつと吹き飛ばされていただろう。

『そなたは駆け引きがヘタよのう。そうして、わらわとその勇者を戦わせようとしとるのじやろう?』

女王は何の反応も見せない。背筋を伸ばし、毅然とした態度を崩さないその後ろ姿は莊嚴でさえある。

『心配せずとも、勇者もろとも滅ぼしてくれるわ!』

ブルードラゴンの身体が一瞬で巨大化する。いや、巨大化したのではない。突進してきたのだ。ブルードラゴンはその前足を振りかぶり、ニンファドーラの魔法のバリアへ振り下ろす。目の前がまばゆい白光に包まれ、エスター全体が衝撃に震える。核爆発かと思えるような轟音とともに、ニンファドーラの魔法のバリアが消滅する。ついに飛鳥の想像を絶する戦いが始まってしまったのだ。

110話：友ありき

「きゃああつ！」

女王の華奢な身体が吹き飛んで、エスターの斜面に叩きつけられる。寸前にシールドを張ったようでダメージはなさそうだが、全身を打った衝撃で息が詰まったらしい。ニンファドーラ女王は秀麗な顔を顰めて、咳き込みながら緩慢に上体を起こす。

「女王様！」

思わず飛鳥は飛び出そうとするが、そこにブルードラゴンのプレスが襲いかかる。

「きゃああつ！」

両腕で顔を覆い、前方から迫り来る炎の壁に身構える。しかしそれは寸前で拡散する。“薔薇十字隊”が全員で協力して、フェアリーテイルの入り口にバリアを張ったのだ。

長らく争いごとのなかったアイリスでは、攻撃魔法はほとんど発展してこなかった。稀代の魔法使いとされるニンファドーラでさえ、先ほどの雷のように自然の力を利用した攻撃魔法しか使えない。ましてや“薔薇十字隊”の魔法攻撃など、ブルードラゴンにとっては砂粒をぶつけられるよりダメージは少ないだろう。

しかしプレスを防ぐことはできる。ドラゴンのプレスは一種の魔法であるので、全力で防御に回れば防ぐことはできるのである。

『やはりここでも同じパターンで抵抗するか。ではアイリス城と同じように、徹底的にパワーで蹂躪してくれよう』

そう言つとブルードラゴンは背中を向ける。直後、長大な尾の一撃が“薔薇十字隊”のバリアに叩きつけられる。

「きゃあっ！」

「あああっ！」

轟音と震動が山全体を揺らし、“薔薇十字隊”のメンバーたちが弾き飛ばされる。ある者は山肌へ叩きつけられ、そのままオークたちの蠢く麓へと青い斜面を滑り落ちていく。ある者は中空高く跳ね上げられ、そのまま黒々としたモンスター軍の中へ落下していく。かろつじて踏みとどまつた者は半数にも満たなかった。爪にしろ尻尾にしろ、次の一撃は耐えられそうにもない。

突如雷鳴が鳴り響き太い稲妻が数本、大気を切り裂く。それらはなんとすべて、ニンフアドーラ女王へと降り注いでいく。

先ほどのブルードラゴンの尾の攻撃でフェアリーテイルの入り口まで吹き飛ばされていた飛鳥は、驚いて立ち上がる。女王がブルードラゴンに攻撃を受けていると思ったのだ。しかしそれは違っていた。

女王は稲光を纏つて全身を金色に輝かせている。さらに数本の稲妻が女王に落ち、その輝きが増幅される。飛鳥のいる位置まで感電しそうなほど高電圧を纏つた女王は、そのままブルードラゴンへまっすぐと突っ込んでいく。

信じられないことだが、ニンフアドーラ女王は稲光を身に纏つてそれを攻撃に使うことができるらしい。雷光が水平に走る。それはそのままブルードラゴンの胸部へと吸い込まれていった。

『ぐあっ！』

ブルードラゴンの全身は一瞬まばゆい光に包まれ、次の瞬間遙か

遠くまで吹き飛ばされる。ニンファドーラ女王は身に纏った雷光のパワーを、そのままブルードラゴンへとぶつけたらしい。数十万ボルトの電圧の反発を受けて、ブルードラゴンの巨体があり得ないほどの勢いで吹き飛ばされたのだ。

「女王様！」

すでに全身の光は失われ、黒い点にしか見えないニンファドーラ女王の元へ飛鳥は走り出す。焼け焦げてはいないが全身から細い白煙を立ち上らせ、女王は肩で荒い息をついている。

「こ、この程度で彼女は倒せません。けれど、もうわたしにはこれ以上の攻撃はできません……」

飛鳥の表情が強ばる。こんなにすごい攻撃ができるならば、ブルードラゴンだって倒せるかもと一瞬期待したのだ。しかし女王はほぼ力を使い果たしてしまっただけ。全身からは先ほどの生気が失われ、虚脱感に包まれている。もしかしたらもうバリアどころか自身を守るシールドさえ張れないかもしれない。

「エ、エスターは魔法の山です。例えばブルードラゴンでもそう簡単に破壊はできない。そしてフェアリーテイルの入り口の封印を解くことは、山を破壊するより難しい。となれば、勇者の修行が終わるまでどれだけ時間を稼げるかが勝負の分かれ目になります。ここで朽ち果てようとも、少しでも彼女にダメージを与え、時間を稼がなければなりません」

確かにブルードラゴンからあれだけの攻撃を受けたにも関わらず、エスターの山肌は美しい光沢を放ったままだ。先ほど飛鳥が狂戦士を叩きつけた穴も、すでに消えている。明らかに“氷の山”なのに、

ドラゴンのプレスでも溶けた様子がないのだ。

「じゃあ、牙の一本、あわよくば腕や足の一本くらいは道連れにしないかな」

「え？」

飛鳥の低い呟きに、女王の浅く短い呼吸が一瞬止まる。額の汗が鈍い陽光に光っている。

「物理攻撃ならアタシが何とか食い止めてみせます」

鉛色の空が重くのしかかる空を、飛鳥は強い意志を込めた目で睨む。落下しないように軽くステップを踏みながら、飛鳥は両腕を上げてファイティングポーズを取る。

「この世界に来てから、アタシは何度も死ぬのを覚悟しました。でもまだ生きてる。それはたくさんの人たちの犠牲の上に立ってるんです」

ニンファドーラ女王の顔が綻ぶ。それは見知らぬ異世界人に対する目ではなく、旧知の友に向ける表情だった。

「……さすがはクウエンディ女王の召喚された勇者ですね。人は置かれた環境や境遇を嘆くのではなく、どうあがいて戦っていくかで生きる意味が決まってくると思います。例え勝ち目のない運命でも、最後の瞬間まで堂々と戦い続けていきたいものです」

「女王様……」

飛鳥は強く頷く。女王も汗を光らせ、微笑みながら緩やかに頷き返す。

「共に戦いましょう、最後まであきらめずに」
「はい」

黒雲が渦を巻き、雷光が連続して走る。血のように赤い空が垣間見え、重く湿った空気が流れ込んで来る。

「……来ます」

ニンファドーラ女王は決然とした表情で細い顎を上げ、渦巻く空を睨みつけた。

111話：真紅の槍

ブルードラゴンの巨体がゆっくりと渦巻く雲間から降りてくる。見た感じではどこにもダメージらしきものを受けた形跡はない。ニンファドーラ女王の渾身の一撃は、やはりそれほど効果があったわけではないようだ。

『さすがは稀代の魔法使いと言われた女王よの。しかし……効かん』

ブルードラゴンは長大な首を振るって一声大きく咆吼する。大気が震え、世界が怯えたように振動する。ブルードラゴンは巨大な身体を水平にして一気に加速する。勢いをつけた前足の爪が振りかぶられ、核攻撃に匹敵する打撃が女王に襲いかかる。

「女王様、下がって！」

飛鳥は重く湿った空気を蹴って走り出す。五階建てのビルほどもあるブルードラゴンと飛鳥では、その大きさにおいて対抗できるかどうかなど比べるべくもない。しかし飛鳥にはもう恐怖も逡巡もなかった。死ぬまで抵抗し続ける。その覚悟は飛鳥の中にあつたすべての負の要素を払拭していた。

「させるかあ！」

飛鳥は一步ごとに加速し、そのままブルードラゴンの腹部へ体当たりする。全身に金色のシールドを張り巡らしているにも関わらず、その衝撃は強烈なものだった。

「ぐはっ！」

飛鳥は数十メートルほど弾き返される。しかしブルードラゴンの突進も止まる。

『む、なんだこいつは』

さしたるダメージを受けた様子もなく、ブルードラゴンの燃え立つ瞳が飛鳥を睨みつける。飛鳥は両足で踏ん張って空中を蹴る。吹き飛ばされた距離を一気に詰め、ブルードラゴンの頭上から殴りかかる。

「アタシは召喚された勇者、フェンドルフィンの藤堂飛鳥だあ！」

最大到達点から下降に移ると、飛鳥はさらに前傾姿勢になって走り出す。鉛色の空に飛鳥のシールドの光が、一条の流星となってブルードラゴンへと吸い込まれていく。

『なんと、他にも勇者が召喚されていたのか。それは捨て置けんな』

ブルードラゴンは飛鳥へ炎のブレスを吐く。しかし飛鳥は、その猛烈な炎の柱を唐竹割りに突き進んで来る。ブレスが無効だと判断したブルードラゴンは首を振って身体を捻り、右前足の爪で飛鳥を叩き落とそうとする。かなりのスピードだったにも関わらず、ブルードラゴンの爪は正確に飛鳥を捉える。

「ぐっ！」

飛鳥は上方からの強烈な一撃を受けて打ち落とされる。シールドを張っていても、その衝撃は飛鳥の全身を打ちのめす。飛鳥はオー

クたちの上空十数メートルでかるうじて体勢を立て直して踏ん張る。

「まだまだあ！」

オークたちの騒ぎを背に、飛鳥はブルードラゴンへ向かって空中を駆け上がる。ブルードラゴンは待ち構えていたかのように前足を振るってくる。飛鳥は両腕を上げて、ブルードラゴンの爪を受け止める。

「うりゃあっ！」

『なに？』

豆粒より小さい飛鳥に自慢の爪を受け止められ、ブルードラゴンが驚愕の波動を放射する。飛鳥は頭の上で爪を受け止めたまま押し上げていく。

「うあああああっ！」

『小賢しい』

飛鳥の両腕にかかっていた力が急に抜けたかと思うと、飛鳥の真横に青い鱗の壁が迫っている。尻尾だ。まるでバットでボールを打つように、飛鳥は真横に弾き飛ばされる。

「ぐはっ！」

飛鳥は目に見えないほどのスピードで、エスターの山肌へ叩きつけられる。全身の骨が砕けるような衝撃が襲い、飛鳥の身体はエスターの固い山肌に穴を穿つ。

「アスカさん！」

女王が助けに行こうとすると、そこにブルードラゴンの爪が襲いかかる。

『よそ見をしてるでない！』

「きゃあっ！」

ニンファドーラ女王は寸前にシールドを張ったが、その衝撃までは受け止めることができず垂直に打ち落とされる。女王も飛鳥と同じように、エスターの麓の地面へ穴を開けて墜落する。

突然不気味な咆吼が聞こえ、ブルードラゴンが頭を上げる。そこに紫色の光の柱が襲いかかる。

『む！』

ブルードラゴンは咄嗟に前面に青いシールドを張る。紫色の光はそれに当たって拡散する。

『お前が敵の指揮官か』

青いエスターをバックに、赤黒い異形の人間が黒い翼を広げて浮かんでいる。

『むう…… お前は悪魔、いや、魔王化した人間か』

『そうだ。アスカと同じイスペリアが召喚した勇者、ガルド＝ロバートだ』

ガルドは小声で素早く魔法を詠唱し、前面に魔法陣を顕現させる。それはガザの街で作り出したものより大きく複雑だった。

『召喚された勇者が二人…… だと？ なぜここにいるのだ』
『決まってるだろ。お前を滅ぼすためだ』

魔法陣の中央が前方へ向かって膨れあがっていく。ガルドはさらに詠唱し、前方に伸びる魔法陣のさらにその前方に、白や黄色の小さい魔法陣を現出させる。急速に前方へ細長くなっていく魔法陣は、白や黄色の魔法陣と合体しながらその色を赤く変化させていく。高濃度に圧縮され、さらにドラゴンに有効な雷のパワーと聖なるパワーさえも付加した魔王ガルド究極の魔光砲だ。

『逃げてもいいんだぜ？ 追っかけるけどな』
『ふふ、笑止』

ブルードラゴンはガルドの攻撃を避けるつもりはないらしい。ドラゴンの矜持なのだろうか、ここで逃げたらモンスター軍の指揮官としてのプライドが許さないのだろう。

ガルドはニンファドーラ女王とブルードラゴンとのやり取りを聞いていた。このドラゴンは挑発すると乗ってくる。それは自分の強さに絶対の自信があるからだろう。ガルドはそれを利用したのだ。

『消えろ！』

ガルドが咆吼し、伸びきった魔法陣の赤い光が一気に加速する。それは血塗られた真紅の槍が、ブルードラゴンへ向かってまっすぐ伸びていくようにも見えた。

112話：瞬間、心重ねて

白光が爆発した。ガルドの真紅の槍がブルードラゴンの魔法の青い障壁に衝突すると、その部分から白色の強い光が発生し、一瞬遅れて雷が数百本まとめて炸裂したかのような轟音が大気を震わす。間断なく大地が震動し、堅固なエスターの氷の破片が鋭角な斜面をいくつも転がっていく。

真紅の槍は青い障壁に突き刺さっている形ではあるが、その先端は内側には突き出ていない。ヤスリで削られるように徐々にその長さを短くしていく。明確な殺意を持って放たれたガルドの真紅の槍は、ブルードラゴンを貫こうと強烈な推進力で突き進んでいく。しかしそれは無駄にその長さを短くするばかりだった。

白光は次第に弱まり、轟音と震動もそれに合わせて収まっていく。真紅の槍が完全に消滅した後は、傷一つない青い障壁がブルードラゴンの前に半透明の美しい表面を見せているだけだった。

『だめか……』

ガルドはがつくりと肩を落とす。ブルードラゴンはプレスや爪、尻尾で攻撃してはいたが、決して魔法能力が低いわけではない。むしろ高い。ブルードラゴンが物理系の攻撃を好んで使うのは、ただ単にその残虐な性格ゆえなのだろう。

『終わりか勇者よ。どうやらそなたは魔法には自信があるようだのう。ではわらわも魔法で攻撃してやろう』

そう言つとブルードラゴンは、右前足を持ち上げる。手のひらに当たる部分に白光が集まり始める。気圧が急激に下がり、耳鳴りがある。光はプリズムを通したように多方向から収束し、凝縮してい

く。ガルドはその驚異的なパワーを感じ取り、背筋に悪寒が走る。エスター近辺は自然の魔力が高い。ブルードラゴンはその魔力を集め、さらには自らの魔力で高圧縮しているのだ。巨大なブルードラゴンの右前足はまるで野球のボールを握っているかのようにも見えるが、その白色光の球体の大きさは人一人より大きい。

『わが魔力の塊、耐えられるかのう』

ブルードラゴンは目を細め、右前足を無造作に前へ突き出す。一瞬のきらめきの後、それはガルドの前面で爆発する。

『ぐあっ！』

紫色の魔法陣が明滅し、白い爆風がエスター全体を押し包む。麓の森の木々は一斉になぎ倒され、オークやパキケフロサウルス、狂戦士たちさえも砂粒のように吹き飛ばされる。それはまさに核爆発にも匹敵する破壊力であった。

その驚異的な魔法攻撃にも、ガルドの魔法の障壁は耐えた。ブルードラゴンがガルド一人に狙いを定めて攻撃したお陰で、エスターも“薔薇十字隊”のメンバーにも被害はない。

攻撃に耐えてガルドが気を抜いた瞬間、魔法の障壁を突き破って白い剣が伸びる。それはそのままガルドの腹部に突き刺さる。

『ぐばおあー！』

白い剣に貫かれたガルドは、そのままの勢いでエスターの山肌へと礫にされる。爆風が風に流されて晴れてくる。すると左前足から白い槍状の光を伸ばしたブルードラゴンが現れる。

『そなたは魔王変化ができるようになってまだ間もないようだな。』

魔法のなんたるかを、まだよく理解しておらぬようだ』

ブルードラゴンの目が妖しく光る。

『ぐはっ、な…… なんだ、と?』

口からどす黒い血を吐き出し、ガルドが呻く。ブルードラゴンの笑いの波動が爆風を攪拌する。

『魔法は精神力。それは常に一定ではない。魔法に強い魔法をぶつけるとその強度は弱くなる。そこに一点に集約したパワーをぶつけるとご覧の通り、簡単に貫通できる』

ドラゴンとは知能が高く、そのプライドは高い。まさに人智を超えた存在なのだ。ガルドはこの世界の人間よりも強い魔力を有する召喚された勇者ではあるが、ドラゴンには人である時点で敵う存在ではないのかも知れない。

『く、くそ……』

牙の並ぶ口から血の飛沫を上げながら、ガルドはブルードラゴンの白い魔法の剣を両手で掴む。温度が高いのか高圧縮された魔力のせいか、剣を掴んだガルドの両手からは白煙が上り始める。

『ぐ、ぐああああっ!』

高音と低音の入り交じった不気味な苦悶の声を上げ、ガルドは剣を引き抜こうとする。しかしブルードラゴンはゆっくりと前進し、剣をさらに深く突き刺していく。擦れたガルドの両の手のひらは、焼けただれて真っ赤に皮膚がめくれていく。

『人間どもは一人残らず滅ぼしてくれるわ!』
「そうはさせるかあ!」

横合いから金色の光が飛び出して、ブルードラゴンとガルドの間を横切る。美しい高音が辺りに響き、白色光の剣が真つ二つに折れる。

『む?』

ブルードラゴンは長大な首を巡らす。白色光の剣を折った金色の光は、大きく曲線を描きながら戻ってくる。

「ガルドを放せえ!」

飛鳥だった。

白いセーラー服はところどころ破れ、むき出しになった腕や太もには無数の切り傷が血を滲ませている。口の端も切れているように、頬にも赤い筋が一本引かれている。

それでも強い意志の光をその瞳に宿し、飛鳥は全身の力を振り絞って突撃してくる。

『小娘の方の勇者か。まだ生きておったか』

「あいにく! アタシは! しぶといんだよお、うりゃああああっ!」

飛鳥は走りながら“遠当て”を放つ。目に見えない鉄拳がブルードラゴンの横っ面に当たる。

『むっ!』

顔を顰めて思わず片目をつぶったブルードラゴンの頭に、黒い影が覆い被さる。

『しぶとさじゃ俺も負けねえよ！』

腹から大量の血を流しながら、ガルドは皮膚のない両手でブルードラゴンの頭を鷲掴みにする。そのままガルドは血の糸を引きながら口を大きく開き、紫色の光の奔流を吐き出す。至近距離からの魔光砲だ。

「うりゃあっ！」

ガルドが魔光砲を放つのと同時に、高速で突っ込んできた飛鳥がブルードラゴンの腹部を殴りつける。召喚された勇者二人のコンビネーション攻撃で、しかも魔法と物理攻撃が同時に炸裂したのだ。

113話：げに恐ろしきは

飛鳥の鉄拳は間違いなくブルードラゴンのボディにヒットした。ガルドの至近距離からの魔光砲も、確実にブルードラゴンの頭部を攻撃した。しかし次の瞬間、エスターの山肌に全身を打ちつけて血を吐いていたのは飛鳥とガルドの方だった。

『人間どもめ、いくら足掻いたところで無駄だということがわからんのか』

ブルードラゴンは血のような紅い眼を光らせて、剥き出しにした牙の隙間から黒煙を立ち上らせる。

飛鳥の鉄拳は確かに当たったのだが、それは難なく跳ね返されブルードラゴンの身体から放射された衝撃波によって吹き飛ばされた。ガルドも残されたほぼすべての魔力を消費して攻撃したのだが、ブルードラゴンの頭部には焦げ跡一つつけられなかった。力尽きたところを、縦に身体を回転させたブルードラゴンの尻尾の一撃が襲った。シールドを張る余力さえ残っていなかったガルドは、そのままエスターの山肌へ叩きつけられたのだ。

「ぐはっ！」

咄嗟に顔を腕で覆った飛鳥は、直接的な衝撃波のダメージはない。しかし勢いよく硬いエスターの山肌に叩きつけられたため、息ができなくなる。衝撃であれば骨が何本かいかれたようで、口の中に鉄味の混じった胃液が込み上げてくる。斜面をずり落ちそうになるのをかろうじて踏ん張り、よろよろと空中を歩き出す。

見上げるとフェアリーテイルの横では、ガルドがぼろ雑巾のようになつて山肌に埋没している。ガルドは飛鳥のように防御する余裕

がなかったらしく、もう完全に戦闘不能のようだ。生きていることは微かに動く手足でわかるが、魔力はほぼ枯渇状態、そのため腹部の傷はまだ治りきっておらず、いまだに血が噴き出し続けている。きつと全身何力所も骨折しているだろう。生きているのが不思議なくらいだ。

飛鳥は右手で自らの左腕を押さえている。どうやら飛鳥も左上腕部を骨折したようだ。タトウの彫られてある辺りが異様に腫れ上がっている。喉からは呼吸するたびに木枯らしが吹き抜けるような音が出て、胸に激痛が走る。当然キュアの魔法は使っているつもりだが、ユグドラシルを出てから戦い続けているため、飛鳥の魔力も限界に近づいているようだ。

『勇者と言っても所詮この程度、素直に死を受け入れよ』

ブルードラゴンの目が爛々と輝く。下方からよると空中を歩いて上ってくる飛鳥に気づくと、ブルードラゴンの目が細められる。

『なんだ、大人しく死んだふりでもしていればよかるうものを』

『アタシは…… この世界の人間じゃない』

飛鳥は何度もよるめきながら、階段を上るようにブルードラゴンの方へ上っていく。

「でも、どんな世界だって人には生きる権利がある。死んでいいやつなんかいない」

左腕は力なく下がり、咳き込むと血の混じった唾液が吐き出される。

『いいや、いる。それはお前たち人間だ』

ブルードラゴンははつきりと断定する。飛鳥の瞳に怒りの炎が揺らめく。

「どうして！ どうしてお前らモンスターは人間を滅ぼそうとするの！ この世界の人たちはそれなりに平和に穏やかに暮らしていたはずだよ！ 何も悪いことはしていない！」

大声を出すと肺が圧迫されるためか、飛鳥は激痛に顔を歪める。左腕を押さえていた右手で、胸を掻きむしる。

『わらわの体内には我が創造主の憎しみが込められている。いや…… わらわの存在自体が憎しみの塊と言ってよいだろう。それはすべてそなたら人間に向けられている』

「創造主……」

ファンタジアを占領したモンスターたちは二年前突如としてこの世界に現れたと、飛鳥はクウェンディ女王に聞いた。それは飛鳥のようにどこから召喚されたのではなく、何者かが創り出したというのだろうか。

『お前たち人間を滅ぼすのがわらわの、いや我々の存在理由。そこには人間との共存などはありません。どちらかが死滅するまで、この戦いは続けられるのだ。もちろん死滅するのはお前たち人間だがな』
「どうして…… どうしてそこまで憎まれなければいけないの？ どうして……」

飛鳥はブルードラゴンの顔の前まで上りきる。地獄の溶岩のように煮え立った紅い双眼は、飛鳥を燃やし尽くさんばかりに睨めつけている。

『げに恐ろしきは人の憎しみの心よ』

ブルードラゴンの眼に一瞬影がよぎったような気がする。飛鳥が問い質そうとすると、世界を切り裂くかのように雷鳴が轟き、ブルードラゴンはその巨体からは想像もできないような速さで身を捻る。飛鳥の眼前で、膨大な電圧を湛えた稲妻が天と地をつなぐ。

「きゃあっ！」

飛鳥は稲妻に弾き飛ばされ、フェアリーテイルの方まで後退する。稲妻は一本だけに留まらず、二本、三本とエスターの麓に落ちる。ブルードラゴンは数十メートル離れた空中に肅然として浮かんでいる。稲妻はブルードラゴンを狙ったものではないようだ。

「これは……」

飛鳥は落雷の場所を見下ろす。稲妻はエスター麓の地面の一点へ、何度も集中して落ちていく。あまりの高電圧のためか、落雷した場所の周囲の地面は黒く焼け焦げている。その黒い地面の一点に、黄色く輝く小さな人影が立ち上がる。なんとそれはニンファドーラ女王だった。

『わたしの命を懸けた最後の攻撃をします。飛鳥さん、ガルドさん、後は頼みます』

「女王様！」

飛鳥の顔が強烈な光に照らされる。全身に黄色い稲光を纏ったニンファドーラ女王は、光の尾を引きながら急上昇してブルードラゴンへと吸い込まれるように飛んで行った。

114話：三人目の勇者

黒に近い鉛色の空に一条の強い光が飛んでいく。それはニンファドーラ女王の命の光だ。おそらく自らの命をすべて魔力に変えているのだろう。黄色い稲妻の光に混じって、薄緑色の光が布を引くように後方へと流れていく。超高压電流の塊である黄色い光とは対照的に、それは美しく儂げだった。

「女王様！」

飛鳥は女王の名を何度も叫ぶ。その度に肋骨に激痛が走るが、それでも何度も叫ぶ。両頬を熱い涙が流れ落ち、届くはずのない右手を伸ばす。そこにブルードラゴンの落ち着いた声が響いてくる。

『ニンファドーラ女王か。その見事な心意気に敬意を表して、わらわも本気で攻撃させてもらおう』

ブルードラゴンは短く何語か詠唱すると、急速に迫り来る黄色い輝きに向け巨大な口を大きく開ける。プレスではないようだ。ブルードラゴンの牙の並んだ赤い口腔内に、白く細い光が集束する。それは上下に大きく開けられた口の真ん中で、白い球体を形作る。その白い球体は急速に肥大化し、ブルードラゴンの頭部とほぼ同じくらいの大きさまで育つ。ニンファドーラ女王はもう目の前まで迫っている。

ニンファドーラ女王がブルードラゴンに激突しようとした刹那、白く太い光条が真横に走り、世界を二分する。ブルードラゴンの口から発せられたプレスのような白い光条は、ニンファドーラ女王を飲み込んでそのままエスターの山肌に突き刺さる。

「女王様！」

「ニンファドーラ様！」

飛鳥の周りを“薔薇十字隊”のメンバーが上昇していく。みなどこかしら傷つき、飛行する様子もふらついている。それでもニンファドーラを助けに行かずにはいられないのだろう。

ブルードラゴンの白い光条は、まるでレーザー光線のように直線的にきらめいたかと思うと唐突に消え去る。大気に焦げた臭いが充満し、飛鳥の髪を熱風がたなびかせる。

ブルードラゴンの眼前まで迫っていたニンファドーラ女王の姿はどこにもない。しかし“薔薇十字隊”のメンバーは迷う様子もなく、エスターに穿たれた穴へ向かっていく。直径十メートルはあるうかというその穴に、メンバーは次々と入っていく。どうやら女王はブルードラゴンのレーザープレスに押し返される形になったようだ。

程なくして“薔薇十字隊”のメンバーが女王の両脇を抱えて穴から出てくる。女王は真っ黒に焼け焦げていた。

「女王様！」

飛鳥も痛む身体に鞭打って、空中を駆け上って行く。その目の前を青い鱗が暴風のように通り過ぎる。直後、“薔薇十字隊”のメンバーが浮かんでいた場所に、長大なブルードラゴンの尾の一撃が叩きつけられる。エスター山全体が震動し、細かい氷の破片が斜面を無数に転がってくる。

「いやああああっ！」

飛鳥の悲鳴がエスターにこだまする。山肌にブルードラゴンの尾がめり込んでいる。尾が離れると、トマトを壁に投げつけたような状態で、“薔薇十字隊”の何人かが尾の形の溝で潰れて死んでいる。

女王は周囲の“薔薇十字隊”のメンバーによって、シールドを張られて守られていた。しかし女王の周囲にはもう三名ほどしか残っていない。女王たちを包む青い球形シールドが切れかかった電球のように明滅する。そこに再度ブルードラゴンの尾が叩きつけられる。さらに大量の破片が飛鳥の頭上に降り注ぐ。

『この死に損ないが！』

ブルードラゴンの怒りが周囲に熱波となって放射される。二度、三度尾が叩きつけられ、その度に女王を守る“薔薇十字隊”のメンバーが潰されていく。頑丈なエスターの山肌には、尾の溝から蜘蛛の巣状にひびが広がっていく。女王は意識がないようでぐったりしている。その傍らにはすでに、ライトブルーの髪を乱したライラしが残っていない。

「もうやめろあー！」

飛鳥は必死で空中を駆け上がっていく。ブルードラゴンは尾を振りかぶり、さらに一撃を加えようとする。そこに突然、重低音が響く。

『む？』

ブルードラゴンは振りかぶったまま動きを止める。さらに重低音が響きわたる。言うまでもなくブルードラゴンの尾の一撃ではない。その音はエスターの内部から聞こえてくるようであった。

『なんだこの音は』

ブルードラゴンの紅い眼が細められ、青い輝きを保っているエス

ターを睨む。飛鳥はその隙に女王のところまで駆け上る。

「女王様！」

女王は真つ黒に焼け焦げてはいたが、かろうじて息はあるようだ。ライラが女王の右腕を自らの肩に担いでいるので、飛鳥は女王の左腕を自分の肩に回す。さらに重低音が大きく響き、エスター全体が鳴動する。

「こ、これは…… な、なんなの？」

飛鳥の問いかけに、ライラは煤けた顔に怪訝な表情を浮かべて首を横に振る。エスターは魔法の氷でできている山だ。噴火するなどあり得ない。しかもこの堅固なエスターが自ら震動を起こすなど、アイリスの歴史上一度もなかったはずだった。

重低音が発生する感覚は次第に短くなり、ブルードラゴンに動揺が走る。飛鳥も胸の奥に何か波立った感情が湧き起こるのを感じる。何かが起ころうとしている。

すると突然下方で何かが爆発する。ガルドの埋没している横、フェアリーテイルの入り口がある辺りだ。分厚いエスターの欠片が前方に飛び散り、青くきらめきながら落下していく。一陣の強風が吹き、飛鳥は乱れた髪に目を細める。そこには目にも鮮やかな金色の髪と鎧を身に着けた偉丈夫が立っていた。

「ア、アレン……」

ニンファドーラ女王の微かな声が、飛鳥の耳に届く。それが飛鳥にとって三人目の勇者“アレン・ワグナー”との、初めて出会った。

115話：熱い怒りと冷たい声

遠雷と爆風収まらぬ混乱した世界で、その男は超然として立っている。肩にかかるぐらいの美しい金髪を風になびかせ、白い肌は明らかに日本人のものではない。下方に蠢くモンスター軍は一顧だにせず、海のように青い瞳はブルードラゴンを射抜くようにまっすぐと見つめている。

身長は遠目でもわかるぐらいかなり高く、全身メタリックゴールドの鎧で覆われている。肩口から出た腕は黒いインナーシャツに覆われているが、それでも盛り上がった筋肉はたくましく、かなりのパワーを感じさせる。

右手には銀色に光る長剣を持っており、その切っ先が鈍く光を反射している。その剣が無駄のない動きで上げられ、ブルードラゴンへと突きつけられる。

『そなたがアイリスの勇者か』

ブルードラゴンの灼熱の目が細められる。その表情は今にも舌なめずりでもしそうに見える。ブルードラゴンは強大なパワーと膨大な魔力を有するが、かといってその力に驕っているわけではない。アレンと呼ばれた三人目の勇者がどの程度の力を持っているのか試そうというのだろう。硬質な翼を羽ばたかせ、エスターから一旦離れる。二十メートルほど離れて振り返ると長大な首をしならせ、炎のブレスを吐く。

「く…… 助けに」

アレンの強さはわからないが、ブレス攻撃なら飛鳥でも防ぐことはできる。女王をライラに任せてアレンの方へ降りて行こうとする

飛鳥を、ニンファドーラ女王は微かな動きで制止する。

「し、心配要りません。彼が…… アレン・ワグナーがフェアリーテイルから出てきたのであれば、もう我々の出る幕ではありません。すべては彼に任せましょう」

「アレン・ワグナー…… あいつそんなに強いのか？」

飛鳥がアレンに視線を戻した時、アレンは迫り来る炎の柱へ向け、長剣を縦に一振りしていた。すると先ほど飛鳥が唐竹割りにブレスをかき分けたように、炎の奔流が左右に割れる。そのまま割れ目は一気にブルードラゴンの方まで進んでいく。異変に気づいたブルードラゴンがブレスをやめて身を避けると、三日月型の白い空気の塊が今までブルードラゴンがいたところを通過し、鉛色の空へ向かって一直線に飛んでいく。

『むづ……』

ブルードラゴンはさらに目を細め、思案顔になる。次はどうしてくれようかという顔だ。

『そなたは見たところ剣士。そうならば魔法攻撃との相性は悪いはず』

するとブルードラゴンの口に、白く細い線が集まり始める。先ほどニンファドーラ女王を攻撃したレーザーブレスだ。これは一見するとブレス攻撃のように思えるが、実は魔力を一点に集束し高圧にして相手へ光速でぶつけるブルードラゴンの持つ最強の攻撃魔法なのである。

「じよ、女王様！ アイツまたあれやるつもりだよ！ほんと大丈夫

夫なの？」

「だ、大丈夫です……」

ニンファドーラ女王はかなり辛そうだ。先ほどからライラがずっと高レベルのキュアの魔法を施し続けているが、女王の表皮細胞が死滅していく速度の方が速く、治療が追いつかない。せめてあと二人“薔薇十字隊”のメンバーが生き残っていれば何とかなるのだろうが。

この現象は一般的に“呪い”と表現されるものだ。女王はブルードラゴンに“呪われた”のである。ブルードラゴンの魔法攻撃による被害の恐ろしいところは、攻撃力の高さだけに留まらず、その影響が続くところでもある。このままなら女王は確実に死んでしまうだろう。

「アレンだかなんだかわかんないけどお願い、勝って！」

アレンは静かに剣を下段に構える。光速のレーザーブレス相手に、剣で対抗できるものなのだろうか。飛鳥の不安をよそに、アレンはなんと目をつぶってしまう。その瞬間白い光条が一直線にアレンへ向かう。

「う、わっ！」

まるで自分の方へ向けられたかのような猛烈な熱波が飛鳥たちを襲う。飛鳥はシールドの魔法を大きめに張り、女王たちを熱波から守る。

「アイツは？」

顔を腕で覆いながら下方を見ると、アレンはなんと同じ姿勢で瞑

目したままでいる。レーザープレスはアレンの目の前一メートルほどで消滅している。白く太い光条はまるで空気中に溶け込むように、アレンには届かない。アレンは魔法のシールドを張っているようには見えない。信じられないことだが、アレンは魔法そのものを消し去っているようだ。

レーザープレス攻撃が無効だと知ったブルードラゴンは、怒りの波動を全方向へ放射する。

『なんだと…… わらわの攻撃が通用しないだと？』

ブルードラゴンの怒りは物理的な波動となって周囲へ放射される。黒雲は渦巻き、森は真っ黒に焦げていく。急激な温度差によって巻き起こる強風で、炭化した木々が白い灰となって空へ上っていく。

「私に魔法は通用しない」

ブルードラゴンの熱い怒りの波動とは対照的に、低く冷たい声が聞こえる。それがアレンの発した声だと気づくのに、飛鳥は数秒を有した。

『魔法が通用しないだと？』

その声にブルードラゴンも気づいたようで、訝しげな気配を漂わせる。アレンは言葉を継ぐことはなく、構えを解いて同じ場所に立っている。その様子は何気ないようであり、まったく隙もなかった。

116話：決着、そして……

ブルードラゴンは咆吼する。言葉にならないその咆吼はこの世のすべてを憎悪しているようにも思える。しかしそれは思い通りにならない、金髪的青年に対しての苛立ちなのだ。

彼女は今まで暴力ですべてを蹂躪し、平伏させ、支配してきた。彼女にとって暴力とは唯一絶対のものであり、抛り所でもある。その暴力が通じないとなれば、彼女の存在自体が否定されたことになる。それは決して許されないことであり、しかもその相手が勇者とはいえ人間であるのは我慢ならないことだった。

『であれば、そなたの得意とする物理攻撃で暴力の差を教えてやるう！』

ブルードラゴンは早速映像のように、アレンへ距離を詰める。直前で半回転し背中を向け、長大な尾をアレンへ叩きつける。推進力と遠心力の勢いがついた尾の一撃は、ブルードラゴンの体重も乗っているだけにメガトン級の破壊力を持つ。しかしその尾がエスタ―へ叩きつけられることはなかった。

「え？」

飛鳥は自分の目を疑う。ブルードラゴンの尾はアレンのいるフェアリーテイル入り口付近へたどり着くことなく、空中へ跳ね上げられている。真つ赤な切り口からは白い骨が見え、血の尾を引きながら森へと落ちていく。勢い余ったブルードラゴンはそのまま一回転し、次の瞬間身の毛もよだつような叫び声を上げる。なんとブルードラゴンの尾は根本から切断されていた。

『ぐあつ、あ…… な、なんだと…… わ、わらわの尾が……』

大量の涎をまき散らし、ブルードラゴンは空中で苦悶にのたうち回る。そこに金色の光点が放物線を描いて跳んでいく。剣を上段に構えたアレンがブルードラゴンへ向かって跳躍していた。

『ぬっ、おっ！』

身の危険を感じたブルードラゴンは、頭上から斬りかかってくるアレンへ向かって前足を振る。その爪に叩き落とされれば、全身を覆う鎧ごと粉微塵になってしまうだろう。

しかしその前足も虚しく空を切る。前足も手首に当たる部分から瞬時に切断されていたのだ。

『ぐおおおおっ！』

ブルードラゴンは苦し紛れに巨大な口を開き、アレンに噛みつくうとする。上下の顎が閉じられる瞬間、アレンは牙を蹴って右に避け、長剣をきらめかせる。そのままブルードラゴンの肩に着地すると、また後方へ跳躍する。ブルードラゴンは時間が止まったように空中で静止していたが、アレンが先ほどと同じように放物線を描いてエスターへ着地すると同時に首がズレる。切断された前足と首、そしてもはや巨大な肉塊と化した胴体が音もなく森へと落ちていく。下方では逃げまどうモンスター軍が右往左往している。轟音と震動が森を揺るがすと、白い灰と大量の土砂が空中へ飛散する。

「す、すごい……」

風になびく豪華な金髪が飛鳥の方を振り仰ぐ。その瞳が青よりも濃い瑠璃色だと認知した時、飛鳥の意識は遠のいていった。

「う、うん……」

飛鳥が目覚めると、その視界には星空が見えた。それはスカイブルーの半透明な空に、白い星が瞬いている不思議な星空だ。自分が何か柔らかい物の上に寝かされているのに気づき、飛鳥は首を捻って辺りを見回す。そこは外ではなく、壁に囲まれた部屋の中だと気づく。さほど大きくはなく六畳間ほどの広さの部屋のようにだが、半透明の壁や天井に囲まれているため閉塞感はない。身を起すと体中に若干の痛みは感じるものの、先ほどの激痛はもうない。どうやらベッドに寝かされているようだった。

「ここは……」

ぼつりと呟くと、その声はエコーがかったように部屋の中へ反響して吸い込まれていく。どうやらここはエスター山の中のようなのだ。

「おお、気づいたんか。身体の痛みはもうだいぶマシやる?」

女性の声で妙な関西弁が聞こえて足下を見ると、そこにはクマのぬいぐるみが一つ置いてある。それはつぶらな瞳で飛鳥を見つめている。

「あれ? 今、声が聞こえたと思ったけど」

「うちや、うち」

両手で抱えられるほどのうす茶色のクマのぬいぐるみが立ち上がり、右手を挙げて飛鳥の方へ歩いてくる。

「うわぁ！　ぬいぐるみがしゃべった！」

飛鳥は驚いて後ずさりする。

「しっつれくなやつちゃんあ」

クマのぬいぐるみはよく見るとテディベアだ。飛鳥の好きなキャラクターである。

「ア、アンタなに？」

「うちか？　うちはフェアリーや」

テディベアは飛鳥に掛けられている毛布の上を歩いてくる。それなりに体重を感じるところが妙な気分になる。

「フェアリーって、もしかしてここはフェアリーテイルの中？」

「せや」

テディベアは飛鳥の横まで来ると、黒いプラスチックの目で飛鳥を見上げる。

「お前さんは丸一日寝てたんや」

糸を縫いつけた口が動くことはないが、それでも身体を揺らせているところからこのぬいぐるみがしゃべっていることがわかる。飛

鳥は訝しげにぬいぐるみを見つめる。飛鳥にとってフェアリーとは女の子の姿でドレスを着て、トンボのような羽を持っている小さな生き物というイメージだったのだ。

「彼はまだ目え覚ましてへんよ。もう動けるんやったらご飯でも食べに行かへん？」

「彼氏？」

飛鳥は一瞬金髪の偉丈夫を思い出したが、それはガルドのことだと気づく。

「ガルドは無事なの？ それに女王様、ニンファドーラ女王様は？ ブルードラゴンは死んだの？ モンスター軍はどうなった？」

「待て待て！」

テディーベアは短い両腕を上げて、飛鳥の怒濤のような質問攻めを制止する。

「モンスター軍は蜘蛛の子を散らすように撤退したよ。ブルードラゴンは死んだ。とりあえず危険は去ったちゅうわけや。彼氏は無事やけどアイリスの女王は…… オノレの目で確かめたらええ」

黒いつぶらな瞳に影が差す。飛鳥は空中に浮かび上がったテディーベアを追って、ベッドから降りた。

116話：決着、そして……（後書き）

作中の関西弁は大阪弁です。

大阪弁ネイティブスピーカーの桜庭春人さんとそうじたかひろさんにご指導いただきました。

ありがとうございますm（　　）m

ちなみに飛鳥は大阪弁がわからないので、すべて「関西弁」と表現してしまいます。ご了承ください。

117話：ファースト インプレッション

「女王様！」

ニンファドーラ女王は、飛鳥がいた部屋と同じような部屋で寝かされていた。傍らにはライラが、半透明の青い円柱形のイスに沈痛な面持ちで座っている。

「アスカさん…… でしたっけ？ アイリスのために戦ってください
ってありがとうございます」

ライラは飛鳥に気づくと、立ち上がってお辞儀をする。飛鳥は不器用に「い、いえ」と返礼し、女王を見る。真つ黒だった女王の顔は元の白い肌に戻っている。しかしその白さからは生命力が感じられない。ほとんど盛り上がっていない毛布が微かに上下していることから女王が死んでいないことはわかるが、普通に寝ているわけでもないのだろう。

「女王様は大丈夫なんですか？」

飛鳥はニンファドーラを見つめたままライラへ聞く。ライラはうつむいて黙り込む。

「ニンファドーラ女王さんはもう助からん。身体の芯までドラゴンの“呪い”に犯されてしまつとる」
「呪い？」

飛鳥の後ろで、関西弁の気っ風のいい女性の声が答える。テディベアのぬいぐるみが、空中に浮かんだままつぶらな瞳で飛鳥を見つ

めている。

「呪い？」

「せや」

フェアリーはニンファドーラの枕元に音もなく着地する。

「攻撃魔法の影響力が身体内部にまで浸食しとる。その範囲は全身に広がって、もう手の施しようがあらへん。今彼女は緩やかに死に向かっとるんや」

「そんな……」

飛鳥は両手で顔を覆う。戦いの中、心を通わせ合い強い友情を感じた。到底敵わないと思えた強敵に、共に立ち向かった。アレンという強い味方が現れたことで窮地を脱し、アイリスはこれから立ち直っていかねばならない。それなのにその精神的支柱とも言うべき女王が死んでしまうなんて。

「あ……」

ライラが小さく声を上げ、真っ赤になった目で飛鳥は背後を振り返る。部屋の入り口に、クリーム色のシャツを着て焦げ茶色の長ズボンを履いたアレンが立っていた。

アレンは眉間に深いしわを刻み込んだまま、大腿でゆっくりと歩いてくる。固い床にブーツの硬質な音が規則的に刻まれる。飛鳥はそのギリシャ彫刻のような神話的顔立ちと長身に息を呑む。

豪華な金髪に瑠璃色の瞳。一八〇センチメートルを軽く超えるであろう身長。引き締まった顔に無駄な贅肉は一切ついておらず、細い顎に薄い唇が真一文字に引き結ばれている。筋の通った彫りの深い鼻に形のよい薄茶色のまつすぐとした細い眉。横に立ったアレン

を見上げると、悲しそうに伏せられている睫毛が思ったより長いことに気づく。

「私のせいだ。もっと早く助けに出られればこんなことにはならなかった。すまない」

アレンはベッドの横にひざまずき、誰にともなくつぶやく。低く落ち着いた声が部屋に響き、ライラの鼻をすすする音が重なる。

「アンタが三人目の勇者でしょ。助けてくれてありがと。強いね」

飛鳥は重い空気を払拭するかのようになり、明るい声で微笑む。アレンはニンファドローを見つめながら立ち上がる。目を覆う金色の前髪が光を弾き、飛鳥は美しいウィンドチャイムの音が聞こえた気がする。アレンが飛鳥の方を振り向くと、目にもまぶしい金髪が揺れる。飛鳥はこんなに美しい男を見たことがなかった。

「アレン・ワグナー、ドイツ人だ。君は？」

大きなたくましい手が差し出される。飛鳥はスカートで自分の手をごしごし拭き、おずおずと握手する。大きな手が飛鳥の手を包み込む。それはとても温かった。

「アタシは藤堂飛鳥、日本人だよ。フェンドルフィンのクウェンデイ女王に召喚されたんだ」

「日本か、よい国だ。見たところかなり若いがいくつだ？」

「アタシは十七歳の高校二年。アンタは？」

アレンは一瞬瑠璃色の瞳を大きく見開き、すぐに柔和な表情になる。

「十七歳か、ギムナジウムだな。もつと若いかと思った。東洋人は初めて会ったが、見た目若く見えるな。私は二十八歳、電気工事士をしていた」

飛鳥はこんなハリウッド俳優のようない男と話したことは初めてで、緊張してしまつて気づかなかった。アレンの目に悲しげな影が揺らめいていたことを。

「二十八か。ガルドより年上だね」

飛鳥は熱を持ち始めた頬を隠すため視線を逸らす。

「ガルドとは隣の部屋で寝ているアメリカ人だな。彼ももうすぐ気がつくだろう。よければ自己紹介と情報交換も兼ねて食事でもしないか？」

飛鳥はうなずいてライラを見る。ライラは悲しげに微笑みながら、首を横に振る。女王がこんな状態なのに食事をしたり楽しく語らったりする気分にはなれないのだろう。

飛鳥はライラのその気持ちが痛いほどわかる。しかし自分とライラでは立場が違う。女王の容態も自分にはどうすることもできない。見守るのはライラに任せ、飛鳥は先に進むために部屋を後にした。

飛鳥にできることは、この世界をこんな風にしてしまったモンスター軍を倒すことである。ブルードラゴンによって先が見えてきた彼女の言っていた「創造主」の存在である。

部屋を出ると青い半透明のきらきらした通路が左右に伸びている。左隣がガルドの寝ている部屋で、そのさらに向こうが飛鳥の起きた部屋だ。その先は行き止まりになっている。

フェアリーはむくむくとしたお尻を振りながら、「こっちや」と

先導してくれる。飛鳥が歩き出すと突然突き当たりの曲がり角から、黒く小さな物体が翼を広げて飛んでくる。

「む？」

アレンが飛鳥の背後で身構える。しかし飛鳥はその見知った姿に笑顔で駆け出す。

「スピニッチ！」

スピニッチは黒い蝙蝠のような翼をぴんと伸ばして、グライダーのように滑空してくる。これは高速で飛行する時の飛び方だ。

「アスカ、たいへんにや！」

スピニッチはフェアリーやアレンには目もくれず、飛鳥に飛びつく。スピニッチのもたらした情報は、驚愕の事実を告げるものだった。

118話：終わりの始まり

青い半透明の壁と天井に囲まれた広い空間に、金属同士がぶつかる硬質な音が響いている。そこは学校の教室でいうと二つ分ほどの広さで、その真ん中に壁や天井と同じ材質の大きな長テーブルがある。テーブルの上には様々な料理が並んでいる。ローストチキンにキツネ色に揚げられたソフトシエルクラブ、ハッシュドポテトに大きなミートボールの乗ったスパゲティ、マフィンやワッフル、コーンブレッドまである。それらの前で、ガルドは黙々と口と手を動かしている。

「アンタちよつと食べ過ぎじゃないの？」

向かい側に座る飛鳥は呆れている。そういう飛鳥の前にも、新鮮な魚介類で握られた生寿司やビーフステーキ、カレーライスにラーメンとどう考えても食べきれないほどの量の料理が並べられている。

「いくらでも食べたらいい。腹が減っては戦いもできない」
「うっせ！」

飛鳥の横に座るアレンが声をかけると、ガルドは食べかすを飛ばしながら悪態をつく。そういうアレンの前には、ツヴィーベル・ズツペと呼ばれるオニオンスープ、ソーセージの添えられた肉汁たっぷりのハンバーグが鉄板の上で美味しそうな音を立てている。手には黒ビール。ワインを好むガルドとは対照的だ。

「まだまだいくらでも食いもんはあるさかい、遠慮せえへんとたんと食べえな」

「いやいや、もういいから！」

飛鳥はフェアリーの持ってきた日本酒の熱燗を断って、アイスコ―ヒーを頼む。久しぶりの故郷の味に舌鼓を打てたのはいいが、後からいくらでも出てくるのだ。とてもではないが食べられるものでない。

「アス力は育ち盛りにやんだから、もつといっぱい食べにやきやにやらにやいにや」

アレンの向かい側に座るスピニッチが、膨らんだ頬つぺたをもぐもぐと動かしながら飛鳥をフォークで指す。スピニッチの前には秋刀魚の蒲焼きが置いてある。他にも秋刀魚の塩焼きに煮付けなど、秋刀魚づくしだ。どうやらスピニッチは秋刀魚がお気に入りらしい。

「いくらなんでもデブるわよ！　ねえアレン？」

飛鳥は黙々とビールを飲むアレンへ笑顔を向ける。その様子を見てガルドが面白くもなさそうに「けっ」と吐き捨て、ワイングラスを煽る。

ガルドは機嫌が悪かった。起きた時にはすでに飛鳥とアレンは親しげにしており、自分だけ除け者にされた気がしているのだ。それに飛鳥がアレンに向ける熱いまなざしも気に入らない。確かにアレンは男のガルドから見てもいい男だ。しかしガルドにしてみれば、飛鳥は自分の彼女だという思いが強い。この異世界で共に生死の境をくぐり抜け、思いを共有し、絆を深めてきたはずだ。それがアレンという存在が現れたことによって、ガルドの中に強烈な嫉妬心がむくむくと湧き起こってきてしまっているのだ。

「あんさん、えろっいい食いつぷりやなあ。ほならこっちの酒もいっつとくか？」

フェアリーはスコッチのラベルをガルドに見せる。

「ジョニー・ウォーカーの青か、珍しいな。よし、それロックでくれ」

「ガルド、飲み過ぎだよ！　これから作戦会議しなきゃなんないんだからね！」

「んなのわかってるよ！」

「もう……」

ガルドはフェアリーに琥珀色の液体を注いでもらっている。明らかにダブル以上の量だ。

「へへっ、かわいい妖精さんに注いでもらうと、酒の味も格別だな」

「かわいいって、ぬいぐるみじゃん」

「お前はな」

ガルドの顔はすでに赤くなっており、酔いが回ってきているのがわかる。全員そろって初めてわかったことなのだが、フェアリーとは精神生命体らしい。人によってその姿は違うようだ。飛鳥にはデイベアのぬいぐるみに見えるフェアリーも、ガルドにとってはいわゆる妖精、羽の生えたかわいい女の子の姿に見えるらしい。ちなみにアレンには三角帽子を被った小人、スピニッチには淡い白光の塊にしか見えないということだ。

「ガルドは放っておきましょう。それでスピニッチ、さっきの話の続き聞かせて」

管を巻いているガルドをよそに、飛鳥とアレンはスピニッチを見る。喉を鳴らして秋刀魚の塩焼きを嚥下したスピニッチは、細い目

をさらに細めてまじめな顔つきになる。

「結論から言えば、ミーたちが今からフェンドルフィンやイスペリアに戻っても無駄だっていうことにゃ」

スピニツチのもたらした情報は驚くべきものだった。なんとモンスター軍はすでに両国に大軍を派遣し、本格的な侵略戦争を始めているということだったのだ。そのため対応に追われたイスペリア軍はアイリス派兵を諦め、ファンタジア国境付近で激烈な戦闘を開始しているそうなのだ。

キヤリーからもすでに撤兵している。そして飛鳥を悲しませたのはガザの陥落である。市民兵によってイスペリアからの援軍を待っていたガザは、大挙して押し寄せたモンスター軍によってあっという間に滅ぼされてしまったらしい。

せっかく支配していた狂戦士を飛鳥たちが倒しガザの街は解放されたかに思えたのに、やはりイスペリアからの援軍が来ない状況では陸の孤島に等しいガザではモンスター軍の攻撃に耐えられなかったのである。飛鳥は強大な狂戦士たちに蜂起したガザの人々の雄々しい姿を思い浮かべ、涙が止まらなくなった。

キヤリーのレジスタンスたちは、グインによってイスペリア本国へ保護されたい。ヤザンやジェミニ、ユイリイなど彼らが無事なのはせめてもの救いだった。

フェンドルフィンの状況はイスペリアよりも切羽詰まっている。もともと戦力的にイスペリアよりも脆弱なフェンドルフィンは、すでに国内までモンスター軍の侵入を許してしまっているらしい。オーガスとレイズナーという二人の強力な魔法剣士の働きで保っているが、フェンドルフィン方面部隊を指揮しているレッドドラゴンの攻撃力は圧倒的で、日ごと首都フェンドルフィンへ戦線が後退しつつあるという。

「レッドドラゴンにブラックドラゴンか……」

飛鳥はストローでグラスの中のコーヒートを転がす。涼やかな音が室内に反響する。イスペリア方面部隊の指揮官は黒いドラゴンで、豪雨や雷、暴風に極度の気温変化など、気候を操るドラゴンだということだ。

「このままこの世界は滅びちゃうのかな……」

飛鳥はぼつりとつぶやく。いくらアレンが強いと言っても、どちらかを攻略している間にどちらかは滅亡してしまうだろう。フェンドルフィンとイスペリア、両方同時に救うことはできないのだ。

「両国同時に、なおかつこの世界をも救える方法は…… ある」

重苦しい静寂に満ちた空間に、アレンの低い声が響く。飛鳥とスピニッチは驚いてアレンを見る。さすがにガルドも興味をそそられたように胡乱な目をアレンに向ける。

「ファンタジア本国を我々で攻撃する」

それはさらなる過酷な戦いの始まりを告げるものだった。

119話：最善の方法

「本国を攻撃するう？」

素っ頓狂なガルドの声が神秘的な輝きを放つ壁に反響する。その声に驚いたフェアリーたちが、何事かと入り口から顔を覗かせる。飛鳥はそれが全部デイベアなので、嬉しくなって目を輝かせる。

「お前、俺たちに『死ね』って言うのかよ。ファンタジア本国っていうことはつまり敵の親玉のいる首都ファンタジアに攻め込むってことだろ？　いくら俺たちが召喚された勇者だからって、それは無謀だぜ」

酒の力も手伝ってか、ガルドは必要以上に挑戦的だ。しかし思考能力は衰えているわけではないらしく、言っていることは的を射ている。

「アレン……　って言ったかにや。にやにか“あて”はあるによかにや？」

スピニッチはテーブルの上に立って腕組みをしている。イスに座ると頭までテーブルの下になってしまっただ話しぶりのだ。

「“あて”とは？」

アレンは傾けていたジョッキをテーブルへ戻す。

「例えば敵によボスがどこにいるによかとか」

アレンは瞑目し、自嘲するような微笑みを浮かべる。

「敵のボスカ……　そういう意味でいうところの“あて”はない」
「はあ？」

ガルドは片眉を上げ、威嚇するように大きく口を開ける。

「しかし」

アレンの落ち着いた声がガルドの二の句を遮る。アレンはすでに二杯目のジョッキを空にしているが、表情や顔色にアルコールの影響はまったく見られない。ゆでダコのようなガルドとは対照的だ。

「おおよその見当はついている」
「ええ？」

飛鳥とスピニッチの声がハモリ、ガルドは口をつぐんでアレンを睨みつける。アレンはナプキンで口の端を上品に拭くと、徐に話し始める。

「この世界のどこから、あれだけのモンスターが現れたと思う？」
「どこから？」

飛鳥はクウェンディ女王に聞いたこの世界の話の思い出す。確かこの世界はファンタジアを中心に三つの国がクローバーのように配置されている。ここアイリスを頂点とした二等辺三角形の右と左の角は、フェンドルフィンとイスペリアだ。つまり、モンスターがファンタジアに外部から攻め込むことはあり得ない。

「モンスターたちはファンタジアで発生した。そしてその発生源の

見当もついている。おそらくそこに敵のボスがいる」
「ど、どこ？」

飛鳥はイスから立ち上がって、アレンの方へ身を乗り出す。

「それは先ほど彼が言った場所、ファンタジアの首都ファンタジアだ」

「えええっ？」

二年前、大国ファンタジアは瞬く間にモンスターたちに占領された。ファンタジアはイスペリアなど相手にならないほどの軍勢力を誇り、アイリスの何十倍ものウィザード部隊を有し、フェンドルフイン以上に豊かな国だった。

それが、首都ファンタジアは一晩で陥落し、広大なファンタジア領も半年を待たずして占領された。その電光石火の侵略速度は、決して外部からの侵略ではなかったのだ。

「このフェアリーたちに聞いた。ヤツらは突如として現れ、その数も瞬く間に増えていった。ブルードラゴンの言った“創造主”とは、神話的な意味ではない。モンスターを創り出し、この世界をヤツらの力を使って支配しようとしているヤツのことだ」
「そ、それがファンタジアの首都にいるの？」

アレンは静かにうなづく。長い睫毛が伏せられ、重い沈黙が降りる。

「けっ！」

そこにガルドの馬鹿にした声が響く。

「お前よお、首都ファンタジアがどんだけデカいか知ってるのか？ 周囲二十リーグ超、総面積十五万エーカー以上の、この世界最大の大都市だぜ？ その創造主ってのがブルードラゴンみてえにどでかいヤツだったらわかりやすいが、もし俺たちみたいな人間サイズだったら、見つけるまでに何年かかるかわかったもんじゃねえ。その間にフェンドルフィンとイスペリアを滅ぼした何十万ものモンスター軍に囲まれて終わりだぜ」

「ファ、ファンタジアってそんなにでかいの？」

飛鳥の問いかけに、スピニッチが腕組みをしながらしつかりとわずく。そこにアレンの声が重なる。

「“創造主”が何者かはフェアリーたちも知らない。しかしそいつのいる場所には“あて”がある」

飛鳥もガルドも、アレンの次の言葉を待つ。しかしその答えを告げたのはスピニッチだった。

「ファンタジア城…… かにゃ」

アレンは一瞬目を見開いてスピニッチを見るが、すぐに真剣な表情に戻ってうなずく。

「そ、それって……」

飛鳥の質問をガルドが遮る。

「どでかいファンタジアのど真ん中にあるどでかいお城さ。ファンタジアの政治・軍事の中枢でもあり、この世界の中心でもある。確かにそこを抑えられちゃったら、いくらファンタジアが強え国でも

あつという間に落ちるわな」

「私たちは何も、膨大な数のモンスター軍と戦う必要はない。ファンタジア城に侵入し、“創造主”とやらを倒す。それが私たちの取れる最善の方法だ」

室内にアレンの言葉の余韻が響く。テーブルの上はすでにきれいに片付けられ、食後のコーヒーが香ばしい香りを漂わせている。

「最善ねえ……」

ガルドが身動きすると、座っている椅子が硬質な音を立てる。

「俺たちがその“創造主”とやらにご対面できるまで、フェンドルフィンやイスペリアが保つかね」

ここはこの世界の最北端。アイリスを縦断し、広大なファンタジア領を南下し、巨大な都市ファンタジアの中心に位置するファンタジア城まで、行くだけでも相当な時間がかかる。そして進むにつれモンスターの数も強さも増大するだろう。ファンタジア城にたどり着いても、結局は両国とも滅んだ後かもしれないのだ。

「そんなの」

「やってみなきゃわかんねえか？」

ガルドの充血した目が言いかけた飛鳥に向けられる。飛鳥は眉間にしわを寄せてガルドを睨む。

「そうだよ！ 少なくともアタシは、ここでぬくぬくとしている気はない！」

飛鳥とガルドが睨み合いをしていると、コーヒーのお代わりを持ってきたフェアリーが二人の間を横切って着地する。全員の怪訝な視線が集まると、フェアリーはコーヒーのたつぷり入ったガラス製のコーヒーサーバーをテーブルの上へことりと置く。

「あんさんら、ファンタジアのお城へ乗り込むつもりなんか？」
「何が言いたい？」

アレンが問いかけると、テディベアは身体を小刻みに揺する。

「イスペリアは保って三ヶ月、フェンドルフィンに至っては一ヶ月保つかどうかやろ。せやけどそのタイムリミットを倍にする方法があるで？」

「ええっ？」

飛鳥の声がこだまする。室内には気がつくど、たくさんのフェアリーたちが集まって来ていた。

119話：最善の方法（後書き）

<ヤード・ポンド法>

二十リীগ＝約百キロメートル

十五万エーカー＝約六百二十五平方キロメートル

120話：最初の犠牲者

「うわ…… あ……」

フェアリーテイルはエスターの魔法の岩盤をくりぬいた洞窟である。圧迫感や閉塞感を感じないように天井は通常の家屋の倍以上も高い。吹き抜けと表現してもいいくらいだ。その高い天井いっぱいになるほど、薄茶色のテイベアが埋め尽くしている。正確な数字はわからないが、間違いなく数百はいるだろう。

「フェアリーってこ、こんなにいたの？　ってか、チョーかわいいんだけど！」

飛鳥は空中を漂うように横切る少し小さめのテイベアを抱きしめる。

「うわっ、こらっ！　やめ、やめい！　うちはそんな趣味はあらへん！」

そのテイベアは女の子だったらしく、短い手足をむくむくと動かして飛鳥のハグから脱出する。

「どや？　こんだけおっいたら少しは戦力になると思わんか？」

「え？」

コーヒースーバーに寄りかかるようにして手をついている先ほどのテイベアが胸を反らす。口の部分で「へ」の字に縫いつけられた黒い糸がなんだか偉そうに見える。

「お前らまさか…… 援軍になるつもりか？」

さすがのガルドも惚けたようにテディベアを見つめている。

「せや。うちらこう見えても、アイリスのウィザード部隊にだって引けは取らん」

「つ、つまり、フェアリーたちがフェンドルフィンやイスペリアに援軍として行ってくれるって言うの？」

飛鳥の表情はみるみるうちに明るくなる。確かに薔薇十字隊レベルの魔法能力を持ったこれほどの数の援軍が行けば、かなりの戦力になる。当然、戦線を維持できる期間だって倍どころかそれ以上持ちこたえられそうだ。

「この場合、イスペリアよりもフェンドルフィンだろうな。一ヶ月のタイムリミットを二ヶ月から三ヶ月まで延ばせれば、確かに俺たちにも勝機が見える」

「三ヶ月は…… 無理だ」

盛り上がってきた飛鳥とガルドに、冷たく低い声が水を差す。ガルドが眉間にしわを寄せてアレンを見る。飛鳥も困惑したような視線を向ける。

「それ…… どういうこと？」

まだ何か問題があるのかと、飛鳥はおずおずとアレンへ問いかける。

「フェアリーたちはここエスターによって生を育んでいる。それはつまり、ここから離れると長くは生きられないことを意味する」

「え……」

飛鳥はコーヒーマーバーの横で得意げな顔をしているティディベアを見る。

「ここを出たら彼らの命は保って一月半。二ヶ月保てばいい方だろう」

エスターからフェンドルフィンまでの旅程を思えば、確かに実質一ヶ月ほどこしか活動はできない。もしまたここに戻ってくるならば、援軍としてほとんど役には立たない期間しか向こうにはいられない。飛鳥たちが作戦を成功させるためには、フェアリーたちは自らの命を懸けてフェンドルフィンを支援しなければならないのだ。

「そんな…… そんなのダメだよ！ だって、こんなにかわいいのに」

飛鳥はもふもふとおしりを動かす先ほどの小さいティディベアの脚を掴んで、また腕の中へたぐり寄せる。今度は抵抗もせず、小さなティディベアは大人しく飛鳥の胸の中に収まっている。

「どのみち封印があんな形で解けてしまつては、エスターの魔力もそう長くは保たん。このままここで数十年生きるのも、この世界のために二ヶ月後消えるのもそう大差ないやろ」

「封印って…… あっ！」

飛鳥はブルードラゴンとの混沌とした戦いの記憶を呼び覚ます。アレンはフェアリーテイルの入り口を破壊して出てきた。それは確かに正規の手順を踏んだ出方ではない。

「つ、つまり、アタシたちが来たせいで、この子たちが死んじやうことになっちゃったってこと？」

飛鳥の大きな目には、見る間に涙が浮かんでくる。関西弁の陽気な妖精たちは自分たちの存在を脅かした存在のために誠心誠意看護し、面倒をみてくれている。それが飛鳥には申し訳なくて仕方がない。

「フフ、あんさんは優しいなあ。どっちみちあのままやったら、今ごろうちらはみいんなブルードラゴンの腹ん中や。あんさんらには感謝こそすれ、恨む筋合いはないっちゆうことや。気にせんといてや」

「だって！」

「いや、無理矢理出て行つたのは私の独断だ。彼らの存亡に責任を負うべきなのは私だ。君たちは何の負い目も感じることはない。すべては私が背負うべき業だ」

「だあゝ！」

いきなりガルドが叫んで立ち上がる。充血した目で飛鳥たちを睨みつける。

「湿っぽい譲り合いしててもしょうがねえだろ？ 要は俺たちができる限り早く、確実に創造主とやらをぶっ倒せばいいってわけじゃねえか！」

「え、あ、じゃ、じゃあ、ガルド……」

飛鳥はティベアを強く抱きしめてガルドを見上げる。ガルドは飛鳥と目が合うと、照れたように後頭部を掻く。

「し、仕方ねえじゃねえか。今のところそいつの言った作戦が一番

現実的で合理的だ。フェアリーたちの心意気に応えるためにも、俺たちがやるしかねえ」

「ガルド……」

飛鳥が目を潤ませて立ち上がる。アレンも静かに立ち上がって右手を差し出す。

「ではよろしく頼む、ガルド＝ロバート」

ガルドは一瞬躊躇するも、アレンの手をしっかりと握る。

「言うておくが、パーティのリーダーは俺だかな。穴蔵にこもって外の世界を知らないお前には、いろいろと教えてやんねえといけねえからな」

「うむ、よろしく頼む」

ガルドの挑発にもアレンはまったく動じる気配はない。大物なのか鈍感なのかはわからないが、頼もしい仲間ができたことに間違いないだろう。

「さあ、そうと決まったら今日はさっさと休みいな。明日はうちらがあんさんらにできる限りの強化をしちやるさかい、よう寝とかんとあかんよ」

すっかり冷めてしまったコーヒーマーサーバーを持ち上げて、テディベアが空中へ浮かび上がる。

「あ、それと……」

テディベアは何か思い出したように飛鳥へ向き直る。

「その子、もう放してくれんか？ 出発する前に死にそうや」
「え？ あっ！」

小さなティディベアは、飛鳥の腕の中でぐったりとしていた。

121話：いんたーみっしょん2（前書き）

横書き推奨です。

121話：いんたーみっしょん2

「おっはよー！」

「G u t t e r M o r g e n .」

「へ？」

昨晚食事をした部屋で、アレンは金色の鎧をテーブルに載せてデイベアと何か話していた。振り向いたアレンの口から出てきた言葉は、声音こそ低く落ち着いたアレンの声だったが言語はドイツ語だった。

「あ、やばっ！」

「G o o d m o r n i n g .」

「ペイモル」

ガルドとスピニッチもそれぞれの言語で現れる。翻訳こんにやくはもうない。すべて食べ切ってしまったのだ。飛鳥が目を白黒させていると、スピニッチがにやりと笑う。

「イクタ・マルス ムステウムジャ」

「ああもう、わかんない！」

「しょうがねえなあ」

飛鳥がかんしゃくを起こすと、突然ガルドの言葉がわかるようになる。といっても、さすがの飛鳥も「G o o d m o r n i n g」は理解できていたが。

「あれ？ アンタ翻訳こんにやく、いつ食べたの？」

「俺？ 俺はそんなの食わなくても、翻訳の魔法でいつでも誰とで

もコミュニケーションは取れるぜ」

「ええ、ずるい！」

「ミーもやる気なら大丈夫にゃ」

「ちよつとお！」

今まで言葉で不便していたのは異世界だからしょうがないと思っていた飛鳥だったが、実は自分だけがアイテムを使わないとコミュニケーションが取れなかったと知って憤慨する。

「アレン、アレンは？」

「Ich verstehe nicht, was Sie sagen, aber englisch kann mich verstehen.」

「ああ、もう、わかんない、わかんない！」

飛鳥は頭を抱える。

「こいつは『英語はわかる』って言ってるんだよ」

ガルドが通訳してくれる。飛鳥はアレンの横に浮いているデイベアに縋るような目を向ける。

「ねえ、ここに翻訳こんにゃくはないの？ あんなにいろんな料理が出てきたんだから、翻訳こんにゃく一枚くらいあるよね？」

しかしそのデイベアはふるふると首を振る。

「必要のない物はあらへん。ここはアレン以外、みいんな言葉は通じたからなあ」

飛鳥はがつくりと肩を落とす。これからまた長い旅が始まるというのに、いちいちガルドやスピニッチに通訳してもらわなければならないのだろうか。

「なんや、翻訳の魔法も強化項目に入れたるか？」
「え？」

飛鳥の目が輝く。

「そ、そんなことできんの？」

テディベアは体を揺らす。うなずいたのだろう。

「あんさんはえろう魔力が強いさかい、たぶん問題ないやろ。どうせアレンにも身に着けさせる予定やったから、ついでにいつしよにやっちゃるわ」
「やった！」

アレンには翻訳の魔法に加えて防具への魔法耐性強化を施してもらい、ガルドは爆発系の強力な魔法とワイザード用のローブをもらった。そして飛鳥は翻訳の魔法をもらったが、さらに何と新しい武器と防具までもらえることになったのだ。

「何て名前付けようかなあ」

ガルドは右手の甲に刻み込まれた、黒い円形のマークを嬉しそうに眺めている。二重丸に重ねて×印が大きく描かれている。どうやら光系の魔法らしく、あまりに強力なため魔王変化していないと使えない代物らしい。魔王変化したガルドは属性が“悪”になる。それは閻属性の魔法を使うには都合がいいが、これから戦う相手はさ

らに強力な“悪”だ。その対抗手段として光系の魔法をもらったらいい。

「でも悪属性の魔王変化でその魔法はちゃんと使えるの？」

横から飛鳥が紋章を覗き込む。タトウではなく魔法によって一瞬のうちに焼き付けられた紋章のため、色は若干紺に近い。

「フェアリーの話だと、悪属性の反発で爆発力が増すらしい。周りになんにもないところで使えって言われたよ」

「ふうん」

ガルドは黒いローブを羽織っている。

「でもなんかそのローブ縁起悪いなあ。フード被れば死神みたいだよ」

「へっ、俺には合ってるかもな」

「アスカ、用意できたで」

ティディベアが呼びに来る。どうやらここにもジョブの部屋があるらしく、そこで現在の飛鳥のレベルに応じた武器と防具がもらえるらしい。

「そんじゃ行ってくるね」

「ああ、かっこいいといいな」

飛鳥は笑顔でうなずいて、奥への通路へ出て行く。数分後落ち込みながら現れた飛鳥の姿を見て、全員啞然としてしまう。直後、ガルドとスピニッチの爆笑が湧き起こる。

「お、お前、それ……」

ガルドは腹を抱えて椅子から落ち、床を転げ回って笑っている。目には大粒の涙が溢れている。

「前の服よりセクシーにや！」

スピニッチはうつむいて肩を震わせている飛鳥の周りを、嬉しそうにぐるぐると飛び回る。アレンは瑠璃色の目を大きく見開き、呆然として動きを止めている。

飛鳥は紺のスクール水着姿だった。

「ひげっ！」

飛鳥の回し蹴りが飛び回るスピニッチにヒットする。反対側の壁に激突すると、ペしゃんこになったスピニッチが壁をずり落ちる。

「なんでアタシばかりこんななの！」

「まあまあ、そう怒りなさんな。見た目はアレやけど、たぶんこの世界では最強の女性用防具やぞ」

「どつという意味の最強よ！」

飛鳥の履いている編み上げのブーツは、頑丈そうだがかなり軽い。激しい戦闘にも十分耐えうるだろう。両手には黒光りする革手袋を装着している。刃物や尖った先端でも破れないエスター特製の魔法の合皮だ。現在の飛鳥のレベルはなんと九十九。ここまでくると下手な武器を使うよりも、動きやすい方が攻撃力は上がるということらしい。

「何か着るもんじゃないの？ アタシこのままなんてやだよ！」

「しゃあないなあ…… さもない防御力しかあらへんけど、これでも羽織つときいな」

テディベアの差し出したのは、薄いブルーのいわゆるGジャン。コーディネートも何もあつたものではない。

「ああ、アタシなんだかどんどん変態になつてく気がする……」

スクール水着にGジャンを着た飛鳥は、がつくりとうなだれる。しかしそんな飛鳥に熱い視線を送る者がいた。

「そ、それほど悪くはないと思うぞ」
「へ？」

全員の目が点となり、低く落ち着いた声の主に視線が集まる。アレンの引き締まった白い頬は、ほんのり赤く染まっていた。

121話：いんたーみっしょん2（後書き）

<ドイツ語>

Guter Morgen・おはよう

Ich verstehe nicht, was Sie sagen, aber englisch kann mich verstehen.

何を言っているのかわからないが、英語ならわかる。

<米語>

Good morning・おはよう

<フェンドルフィン語> 既出順

ペイモル：おはよう

イクタ：翻訳

マルス：こんにやく

ムステ：なくなる

ユウ：ゝた（過去）

ムジャ：ゝですか（疑問）

122話：出発のとき

エマ「ジェラートがフェアリーテイルに現れたのは、今まさに飛鳥たちが出発しようとしていた時だった。黒く焼け焦げた森の上を、ユグドラシルの方向から白い点が近づいてくるのに最初に気づいたのはやはりスピニッチだった。

「にやにか来るにや！」

モンスター軍が戻って来たのかと一瞬場は緊張するも、それがエスターに来る前に翼竜から命を助けたエマだとわかり胸をなで下ろす。しかし血相を変えてやってきたエマの話を聞くと、再会の喜びを分かち合う雰囲気にはなれなかった。

「東の村々がモンスター軍の残党に襲われています！」

エマの白い絹のドレスは所々破れている。おそらくまた翼竜に襲われたのだろう。さすがに薔薇十字隊の一員らしく、今度は捕まらなかったようだ。

アイリスの東にはさほど大きくはないがいくつか村が存在する。ファンタジアからローレンツ山脈を越える街道は、西と東の端にそれぞれ一本ずつある。しかしユグドラシルとエスターの位置が若干東寄りのため、ファンタジアから直接ユグドラシルやエスターの巡礼に向かう人々は東街道を利用するのである。そのため東街道にはいくつかの村が存在する。宿泊施設や食べ物屋、旅に必要な道具を売っている店などもあり、ほとんどの村はそれが貴重な収入源となっている。湿潤な気候のため穀物は育てにくい、放牧や小麦の栽培などもそれなりに需要がある。つまり牧歌的でのんびりとした地域なのだ。そこに凶悪なモンスターたちが襲いかかったらどうなる

か。

当然自警団はあるし野生モンスター相手ならばそれなりに戦うこともできると思うが、例え残党であってもモンスター軍が本気で襲ったら全滅させられるのは時間の問題だろう。

「どうしよう、早く助けに行かなきゃ！」

今にも飛び出しそうな飛鳥を、ガルドは冷静に引き留める。

「まあ落ち着け。アイリス人の魔法能力はバカにできねえ。ブルードラゴンみてえな凶悪なヤツだったら危ないが、一日や二日は自警団で十分持ちこたえられるって」
「でも！」

飛鳥は救いを求めるようにアレンを振り返る。しかしアレンは腕組みをして考え込んでいる。

「私たちには二つの選択肢がある」

エマは始めてみる自分の国の召喚された勇者の美しさに、目を奪われている。

「東の村々を無視して、まっすぐファンタジアへ向かうという選択」

飛鳥の顔色が青白くなる。何か言いかけるが、スピニッチに目で制される。細くてよくわからないが。

「もう一つはできる限り迅速にかつ効率よく各村々を救出しながら、東街道をファンタジアへ向けて進むという選択だ」

最初の選択肢の問題点は言うまでもない。多くのアイリス人がモンスターの餌食になってしまっただろう。しかし見方によっては多くのフェンドルフィン人やイスペリア人、もしかしたら生き残っているファンタジアの人々さえも救う確率が高まる。小を捨て、大を取るということだ。

後の選択肢は、できる限り多くのアイリス人たちを救えるが、考えようによってはより貴重な“時間”を消費してしまう。飛鳥たちには二ヶ月以内にケリをつけなければならないという、タイムリミットがあるのだ。

「そんなの考えるまでもないじゃない！ 助けに行こうよ！」

飛鳥は即座に東の村々を助けに行くことを主張する。そこにガルドが反駁する。

「アスカ、落ち着いて考える。その方法は確かに人道的には間違っちゃいない。しかし東街道沿いの村は救えるが、俺たちは街道から離れた村まではどちらにせよ寄り道している時間はない。ファンタジアは広く、遠い。はつきり言って、まっすぐ向かってても時間的には余裕ないんだぜ」

つまりガルドの言っているのは、ファンタジアに向かう“ついでに”助けられることはできるが、“すべての”村を助けることはできない。そこに不公平感があるのではないかということだ。運良く東街道沿いにある村は飛鳥たちに助けてもらえるが、奥まったところにある村は素通りされることになる。村のある場所が悪かったと納得して死んでいく者はいないだろう。

「そんなこと言っただけ……」

飛鳥はガルドの言いたいことが痛いほどにわかる。ガルドは決して冷たい人間ではない。ある意味、飛鳥以上に正義感は強い。人情に流されて世界が滅ぼされてしまったら、結果的には誰も救えないことになってしまうのだ。しかしそこに異を唱える者がいた。

「大丈夫です！」

エマだった。ようやくアレンの危険な魅力から我に返ったのだろう。ほんのり頬を桃色に染めてはいるが、決然とした意志の光をライトブルーの瞳に宿している。

「街道沿いの村だけでも助けただければ、あとはそれぞれの村の自警団が他の村の救出に向かいます。アスカさんたちはできる限り急いでファンタジアに向かってください」

胸の前で両手を強く握りしめているエマは、やはり選ばれた薔薇十字隊のウィザードだった。すべてを飛鳥たち召喚された勇者に依存するのではなく、自分たちの力でできる限りは戦えると言っているのだ。

それを聞いてアレンもガルドも力強くうなずく。

「決まったにや」

スピニッチは青空に向けて飛び立つ。

「東街道はユグドラシルの根本から南下して、すぐ分かれ道があるにや。まっすぐ行けばクリスタルレイク、東に向かえば東街道にや」
「よし、やったるでえ！」

飛鳥はGジャンの袖を捲りながら、スピニッチに続く。

「やれやれ、また戦いの日々か。ゲームで言うところの『ラスボスは近い』ってところか？」

黒いローブの裾をはためかせ、羽毛のような軽やかさでガルドも飛び上がる。魔法の霧はすっかり晴れている。ブルードラゴンの死体はもうない。フェアリーたちが処理したようだ。

ニンファドールの側に付いているというエマに手を振り、飛鳥たちは遠くで幻想的に霞むユグドラシルの大樹に向かって、青空の下をまっすぐと進んで行く。

「行くぞお…… ってあれ？」

加速しようとした飛鳥はあることに気づく。

「アレン？」

振り返るとアレンはフェアリーテイルの入り口に立ち尽くしている。まだ何か問題があるのだろうか。飛鳥たちは怪訝な顔を見合わせる。

「何やってんだよ、早く行こうぜ！」

「……ないのだ」

「は？」

ガルドの明るい声に、アレンは小さく何か呟く。その顔は何となくバツが悪そうに見える。飛鳥たちがフェアリーテイルの入り口まで戻ると、アレンは申し訳なさそうな顔で呟く。

「私は飛べないのだ」

「えええええ？」

アレンは修行を中断して飛鳥たちを助けた。そのため翻訳の魔法以外はまったく使えないのだった。

123話：東街道へ

「到ちやあゝつく！」

飛鳥はきれいに整地された薄緑色の芝生へ軽やかに着地する。見上げると空を覆う梢の隙間から、きらきらと陽光が差し込んでいる。ここは世界樹“ユグドラシル”のある丘だ。

「おい、アスカ！ いきなり離すなよ！」

「お、重いにや！」

上空からガルドとスピニツチの声が降ってくる。二人は金色の鎧を身に纏った偉丈夫を吊り下げている。アレンは仏頂面のまま両手を挙げて、ガルドとスピニツチに吊り下げられている。

エスターからここまで、深い森と小川ばかりで道らしい道はない。そのため飛鳥とガルドは、空の飛べないアレンを吊り下げて連れてきたのだ。ユグドラシル直前で飛鳥が手を離してしまったために、慌ててスピニツチが助けに入ったのだ。

「えへへ、ごめん、ごめん」

無事芝生の上へ着地したガルドとアレンに、飛鳥は舌を出して頭を掻く。飛鳥にはアレンの運動能力ならたぶん百メートル上空から落下しても大丈夫だろう、という勝手な予測があった。動き回るドラゴンの身体に飛び移ったりバランスも悪く足場もない空中であれだけの攻撃ができるのだから、現実世界の常識で考えることはできないだろう。それはもちろん飛鳥たちにも言えることだったが。

「すまん、手間をかけた」

慇懃にお辞儀するアレンに、ガルドは苦笑する。

「飛鳥ならまだしも、やっぱずっと吊り下げてくのはちとキツいな。ここからは道もあるし、歩いて行った方がいいな」

たぶん一番効率がいいのは、飛鳥がアレンをおんぶして行くことだ。しかし飛鳥もアレンもそれは絶対にしなくなかった。大けがでもしていれば別なのだろうが女の子の背に掴まって行くなど、合理的な思考を常とするアレンもその矜持が許さない。飛鳥もそういうアレンの気持ちは理解できるし、何より飛鳥自身そんなことは恥ずかしくてしたくない。

とりあえずここまでは吊り下げて来たが、これから先は歩いて行くのが無難なところだろう。

「わあ、こんなだったんだ。来る時は霧でなんにも見えなかったからなあ」

ユグドラシルの丘から南方を見ると、森と湖のまさにアイリスを象徴するような景色が広がっている。ところそこで陽光を反射してきらめく湖は美しく、飛鳥はテレビで見たカナダの風景を思い出す。まさにこんな感じだ。

「あそこに森の切れ目があるにやがわかるかにや？」

飛鳥の横で、スピニッチが羽ばたきながら爪で指し示す。確かによく見ると、数キロメートル先の森に切れ目がある。それはまっすぐと左の方、つまり東へ向かって伸びている。その切れ目の遙か向こうには、湖らしい白い水面が微かに霞んで見える。

「あれが東街道にや。それであによ向こうに見える湖がセントマリ
ア湖で、そによ湖畔に村があるにや」

「んじゃまずはその村に行ってみつか！」

飛鳥は張り切って芝生を歩き出す。その背中に向けて、スピニツ
チが低いアニメ声でぼそりとつぶやく。

「エスターに一番近い村にや」

何が楽しいのか、飛鳥は身体中に音符をまわりつかせながら意
気揚々と丘を下っていく。ガルドはアレンと顔を見合わせて、苦笑
しながら肩を竦めた。

クリスタルレイクへ向かう街道を南下し、東街道に入る。確かに
モンスター軍の残党が通ったらしく、砂利で固められた街道の両側
には無数の足跡がついている。野営したらしい焚き火の跡もあり、
やはり一匹二匹の数ではなさそうだ。

「よく考えたらあんだけの数がいたんだもんね」

飛鳥は左右の森を観察しながら歩いている。ブルードラゴンとの
戦いでは、結構な数のモンスターが被害を被ったはずだ。散り散り
になって逃げたとしても、数十万はいたと思われるモンスター軍だ。
集団になれば簡単に数百、ヘタをすると千単位で行動しているかも
しれない。

オークは基本的に集団で行動する。組織的に獲物を襲った方が効
率のいいことを知っているからだ。しかしその方法は稚拙で人間の
頭脳には敵わない。専門的に訓練を積んだアイリスの自警団ならば、
オークごときにはそう簡単にやられはしないだろう。

危険なのは知能の高い統率者の存在だ。エスターに向かう時に見

た限りでは、狂戦士の存在がそれに当たる。狂戦士がオークの集団を指揮していたら、自警団の規模によっては全滅させられてしまうかもしれない。

唯一救いなのは、個別主義の狂戦士は集団での行動を嫌うという性質だ。単体でも十分強いからだ。モンスター軍ではきつと、ブルードラゴンもしくは“創造主”の命令で仕方なく中級指揮官の任に甘んじていたのだろう。

そう考えれば単体で村を襲うことは十分に考えられるが、指揮官のブルードラゴンがいなくなった今自由に行動できるのに、わざわざ面倒なオークどもを自らの意志で率いるという状況はちよつと考えづらい。

「オークの集団が出てきたらガルドの出番だね」

「ああ、任せとけ」

ガルドはフードの下で不敵な笑みを見せる。単体の強敵なら飛鳥以外にアレンもいる。この場合空は飛鳥、地上はアレンという役割でいいだろう。たった三人の勇者たちだが、その戦闘力は数万、数十万のモンスター軍にも負けない。飛鳥が基本的に楽観的でいられるのは、そういった自負があるからだ。

パキケファロサウルスの集団に遭遇したのは、それからすぐのことだった。

124話：その瞬間

「いち、にい、さん…… 全部で五体か」

左の森から鳥のような鳴き声が聞こえ、木の折れる音と共に現れたのは体長二十メートル以上はある恐竜だった。ブルードラゴンとの死闘から数日経っているのにも関わらずまだこの辺をうろついているということは、ただ単に帰る道がわからないからだろう。わけもわからずオークたちに連れて来られ、そのオークたちも勝手にいなくなってしまった。結局パキケファロサウルスたちは野生化するしかなかったのだらう。

「どうする？ アタシやる？」

飛鳥はまるで、掃除当番のゴミ捨てをやる時のような口調だ。

「いや、せっかくだからみんなでやろうぜ」

ガルドがクラス長のような口調で応える。

「では私は右の二体を請け負う。手間を掛けたからな」

アレンは腰の鞘から、小気味よい音をさせて剣を抜く。銀色の刀身が陽光を反射して美しく光る。

「じゃあアタシはその横の二体ね。ガルド一番左端の大きいヤツお願いね」

「了解」

アレンはすでに駆け出している。空を飛べずに迷惑をかけているという負い目を感じているからだろ。恐竜たちは鳥のような鳴き声を上げたり足踏みしたりして、飛鳥たちを威嚇している。アレンの金色の鎧がジャンプした瞬間、右の二体の首がずり落ちる。まさに一瞬の早業だ。

「やるうー！」

空中へ飛び上がりながら、ガルドが口笛を吹く。その両手には緑色の光球が輝きを膨らませている。

「バギクロス！」

ガルドが両腕を交差させるように振ると、二つの白い真空の刃が緩やかな曲線を描いて一番左のパキケフロサウルスの首へ飛ぶ。クロスしながらほぼ同時に首の両側を斬りつけた真空の刃は、そのまま青空へと吸い込まれて消える。体長三十メートルほどの巨大な身体が動きを止めると、野太い首がぐらりと前へ傾く。地響きを立てて首が落ち、続いて胴体が木々をなぎ倒して横へ倒れる。真ん中の二体はより一層大きな声を上げて首を仰け反らせる。

「ほれ、後はお前の仕事だぞ」

飛鳥の横へ着地したガルドは、Gジャンの背中を軽く叩く。

「任せといて」

飛鳥は走り出すと、階段を上るように空中を駆け上がっていく。

「んーっと、これだあ！」

パキケファロサウルスの直前で背中を向けた飛鳥は、右手の手刀を水平に目の前の胴体へ叩きつける。直後、土気色をしたパキケファロサウルスの上半身が爆発する。血や臓物を派手に空中へ飛散させ、それが次第に金色の粒子へと変化する。道に数枚のナイトが落ちるが、飛鳥は気にもせずスピニツチの所へ駆け戻る。

「スピニツチ、見て見て！ アタシの背中！」

飛鳥はうなじをスピニツチへ差し出す。

「にゃ？」

スピニツチは面倒臭そうに、スク水の中を覗き込む。

「にゃんにもにゃってにゃいにゃ」

「嘘お……」

飛鳥は悲しそうな顔になる。

「おいアスカ、なにやってんだよ！ まだ一体残ってたぞ！」

「わかってるわよ！」

どうやら飛鳥は“百花繚乱”の最後の技を探っているようだ。変な動きを見せたのはそのせいだろう。放っておかれたパキケファロサウルスは、地面を蹴りながら頭を下げる。この体勢はパキケファロサウルスの得意とする攻撃、“頭突き”だ。

「あ、その手があったか！」

頭の上で電球を光らせ、飛鳥はこぶしで手のひらを叩く。

「おりゃあああっ！」

何と飛鳥は、パキケファロサウルスへ頭から突っ込んでいった。

五階建てのビルほどもある巨大なパキケファロサウルスと身長百六十センチメートルほどのスク水を着た女の子が正面から激突するシユールな光景に、アレンは剣に付いた血糊を拭き取ることも忘れて呆然と見つめてしまう。

飛鳥が当たった瞬間、パキケファロサウルスの頭が弾け飛ぶ。ナパーム弾が炸裂するように、首、胴体、腹と順々に爆発四散していく。飛鳥が通り抜けた後には、パキケファロサウルスの肉片すら残っていないかった。

「エドモンド本田か」

呆れたようなガルドの呟きに、スピニツチもため息をつくしかなかった。

結局四枚目の花びらが反応することなく、夕刻前には村へたどり着いた。その村は湖の名前を取ってセントマリアといった。

日はまだ高く天気もいいのだが、村はひっそりと静まり返り人気がまったくない。木造の粗末な建物が並ぶ村のメインストリートを歩いて行くと、大きな建物の前に出る。大きいといっても他の家屋に比べてという意味で、言うなればちょっと大きな二階建ての家だ。どうやら宿泊施設らしい。

「モンスターもいねえみてえだし、今日はここで一泊していくか？」
「そうだな」

ガルドの提案にアレンが首肯する。次の村はここから急いでも半日はかかるらしい。今後のことを考えれば、あまり無理はしないで体力や気力は維持しておきたい。

ガルドが木戸を開けると、中はテーブルと椅子だけの閑散としたホールになっている。食堂だろうか。飛鳥はアイデアでの経験を思い出す。あの時と状況が似ている。淫魔に襲われた時だ。唯一の違いは、村も建物も傷跡や破壊された跡がなく人だけがないということだ。

「だれかいませんかー！」

飛鳥の声が寒々しい建物の中に吸い込まれていく。

「念のため二階も見ておくか」

ガルドがホールの端にある階段を上がっていく。ガルドはふと気配を感じて足を止める。

「あ……」

いきなり立ち止まったガルドに気づいて、二階を見上げた飛鳥は息を呑む。白いワンピースを着た女の子が泣きそうな顔で飛鳥たちを見つめている。青い髪を頭の両脇でお下げにし、スカートの裾から伸びた白く細い足は裸足だ。しかし女の子の口の周りは真っ赤な血に染まっていた。

「だ、大丈夫？」

「アス力、待て！」

駆け上がろうとした飛鳥を、ガルドが手で制する。

「どうして？　だってケガしてるかも知れないじゃない！」
「見る」

いつの間にか飛鳥の隣に来ていたアレンが、厳しい表情で女の子を見つめる。

「う、うう……　うああっ！」

女の子の顔がくしゃっと歪み、苦悶の声を上げながらいきなり右目の部分に大きな瘤が盛り上がる。

「うわっ！」

飛鳥たちは階段を後ずさる。女の子の身体はさらに黒っぽく変色しながら、肩、肘、膝など関節を中心に膨れあがっていく。

「ど、どういうこと？」

飛鳥の怯えた声が小さく響く。まさかこんなホラーな光景を見ることになるとは、思いもよらなかったのだ。

「モンスター化だ」

アレンの一言で、飛鳥の脳裏にパドムの言葉が蘇ってきた。

125話：亀裂

『人間が人間を殺すと、その殺した人間はモンスターになっちまうようになったんじゃよ』

飛鳥たちはファンタジアの人々に掛けられた呪いを、初めて目の当たりにする。女の子は身体の各部分を歪に膨れあげさせながら、徐々に巨大化していく。そしてとうとう、身の丈二メートル以上のオークになっちゃった。

「まさかこんな……」

飛鳥は口を押さえて青ざめている。ガルドとアレンも沈痛な面持ちだ。スピニツチだけが飛鳥の頭の横で、黒い羽を動かしながら厳しい表情でオークを見つめている。

「アスカ、モンスターにや。ちゃっちやと殺すにや」

「はあ？ アンタバカあ？」

飛鳥はスピニツチを睨む。

「あ、あのオークは元々は女の子なんだよ？ あいつを殺すってことは、あの女の子を殺すってことなんだよ？」

「そんなにやによわかってるにや。でもあによおにやによこはもう人間に戻ることはにやいにや。死んだも同じにや。アスカの手でひと思いに浄化させてやってほしいにや」

「そんな……」

飛鳥は改めて階上のオークを見る。モンスター化したあのオーク

は、まだ身体を上手く動かせないらしく、首を回したり肩を動かしたりして全身の関節を鳴らしている。確かに殺^やるなら今だろう。しかし……

「ア、アタシにはできないよ……」

飛鳥は一旦持ち上げた握り拳を力なく下ろす。そこでアレンが一步前へ出る。

「私が殺ろう。君たちは他にモンスター化した村人がいないか探してくれ」

「ア、アンタ殺れんの？」

「もちろんだ」

アレンは剣を持ったまま無造作に階段を上っていく。近づく金色の鎧に気づいたオークは咆吼する。アレンはそのまま剣を突き出して、胸の真ん中へ突き立てる。

「うが」

アレンの一連の動作に無駄や躊躇はなく、オークは何が起こったのか理解できていないようだ。不思議そうな顔で自分の胸に突き立った剣とアレンの白く秀丽な顔を交互に見る。アレンはさらに剣を深く突き刺す。

「うぼ」

オークの突き出た下顎が開き、血の泡が吐き出される。音も立てずに剣を抜いたアレンは、一動作でオークの首を落とす。オークの生首がごとりと音を立てて木の床に落ち、そのまま階段を転げ落ち

てくる。オークの首は飛鳥の目の前で止まり、見る間に女の子の首へと戻っていった。

「い、いやあああああつ！」

飛鳥の悲鳴が建物内に響き渡る。

「バカっ！ 何いまさらこんなの見て悲鳴上げてんだよ！」

ガルドが飛鳥の震える肩を抱き寄せる。飛鳥は両手で顔を覆って震えている。今まで無数のモンスターを倒し、人間の死体も数多く見てきた飛鳥だったがやはりショックなのだろう。モンスター化していたとはいえ、元は幼い女の子だったのだから。

二階の奥から物音がし始める。他にもモンスター化した村人がいるのだろう。人間のものとは思えないくぐもった声が近づいてくる。アレンは無表情でそちらを見遣り、ゆっくりと歩いて行った。

結局村にはモンスター化した村人と、その村人たちに殺された人たちの死体しかなかった。戦闘意欲をなくした飛鳥を宿屋に残し、アレンとガルドはモンスター化した村人たちをすべて殺して回った。二人が宿屋へ戻ってきた時、飛鳥は血などで汚れていない二階の一室のベッドの上で膝を抱えて座っていた。

隣には難しい顔をしてスピニッチが付き添っている。スピニッチはガルドたちを見ると、小さくため息をついて首を横に振る。

「アスカ、終わったぜ」

ガルドが優しく声をかける。膝に顔を埋めていた飛鳥は、涙で真っ赤になった目を上げてアレンを見る。

「どうして…… どうして殺しちゃったの？ 何か元に戻る方法があったかもしれないじゃん。ア、アタシ…… アタシこんなのやだよ！」

収まっていた激情がぶり返してきたのだろう。飛鳥の大きく美しい瞳には、見る間に涙の粒が盛り上がる。何も言えずに口ごもるガルドの肩に、金色の装甲で覆われたアレンの手が置かれる。アレンは鎧の擦れる金属的な音をさせて、ベッドの前に片膝をつく。そして飛鳥をまっすぐと見つめながら、その両肩を掴む。

「アスカ、これ以上無理ならフェアリーテイルへ戻るがいい。あそこならばらくは安全だ。もしくはここからまっすぐとフェンドルフインへ向かうのでもいい。クウェンディ女王に言って現実世界へ戻してもらえ。そうすればこの悪夢から逃れられる」

「な、お前！」

ガルドは驚いた声を上げる。飛鳥とスピニッチも目を見開いてアレンを見つめる。

「どちらにせよ、これからの戦いを考えれば戦えない者は足手まといだ。ここからは私とガルドだけで行くことにしよう」

アレンは立ち上がり、振り向きもせず部屋を出て行く。閉じられたドアを見つめる飛鳥の目から、大粒の涙が一筋流れ落ちる。

「ひどい…… アイツ綺麗な顔してあんなヤツだったなんて、見損なったよ！」

飛鳥はドアを見つめながら口を尖らす。するとスピニッチが羽を動かしながら飛鳥の前に来る。

「ミーもアレンと同意見にや」
「え？」

飛鳥は呆然とスピニッチを見つめる。細い目から表情は読み取れないが、冷たく突き放すような雰囲気は伝わってくる。場にそぐわないクラッカーのような陽気な音をさせ、スピニッチは煙のように消え去ってしまった。

飛鳥はまた膝に顔を埋めて嗚咽を漏らし始める。徐々に暗くなってくる部屋の中で、ガルドはただ何も言えず立ち尽くすだけだった。

126話：笑う村人

黎明の光が窓から差し込み、埃っぽい室内の空気が白く染まり始める。飛鳥は毛布にくるまったまま、朝日に背を向けるようにしてベッドに横たわっている。

昨夜は女の子のオークになるシーンが脳裏に何度もフラッシュバックして、満足に眠りにつくことができなかった。うとうとしかけると、あの女の子が苦しそうな顔で助けを求めてくる。手を伸ばそうとすると横から銀色の剣が伸びてきて、女の子の首を飛ばす。そこではつとして目が覚め、頬に流れる熱い涙を拭いながらぎゅっと目をつぶるということの繰り返しだった。

飛鳥はどうしてこんなにもショックを受けているのか、自分ではよくわかっていた。自分は今までモンスターを殺し過ぎたのだ。浄化といえは聞こえはいいが、所詮殺すことに変わりはない。今まで殺してきたモンスターのうちどれだけの数が元は人間だったのか、いやもしかしたらすべて元は人間だったのかもしれない。それを考えると寒くもないのに全身が震えてくるのだ。

「ん……」

ベッド脇の床で小さく声がする。首だけを動かしてそちらを見ると、毛布にくるまったまま横になっているガルドがいた。昨夜は泣きやまない自分にずっと付き添っていてくれたのだろう。

アレンとスピニッチが戻ってきた気配はない。救えなかったこの村に、もう用はない。もしかしたらすでに村を発ってしまったのかもしれない。

「行かなきゃ……」

飛鳥は寝癖で爆発した髪を手櫛で整え、脇に畳んでおいたGジャンを着る。スク水で寝るのは気持ちのいいものではないが、淫魔の時のこともある。いきなり襲われる可能性を考えれば、のんきにパジャマに着替えて寝るということはできないだろう。もつとも、パジャマなど持つてはいないのだが。

「ガルド、ガルド」

「ん、ん……」

飛鳥は身を乗り出してガルドの肩を揺する。長い睫毛が開き、視点の定まらない青い瞳が揺れ動く。こうして見ると、ガルドだってアレンに負けず劣らずいい男だと思う。しかし同じイケメンでも大雑把で勢いで動くことも多いガルドと、理知的で合理的な考え方をするアレンとでは正反対の性格だ。

ガルドの青い瞳は一瞬宙を彷徨い、飛鳥の顔に視点が定まる。そして朝日より眩しく微笑む。

「おお、起きたか。ゆっくり休めたか？」

「ん、あんまり……」

飛鳥は額に手のひらを当て、眉間にしわを寄せる。起きあがると微かに頭痛がする。昨日たくさん泣いたからかもしれない。

「アレンとスピニッチは？」

飛鳥はベッドの端に腰掛けたまま、毛布をまとめるガルドの背中へと声をかける。一瞬ガルドは動きを止め、「もう次の村に出発したよ」と言って作業を続ける。荷物をまとめ終わると、飛鳥へ向き直って立ち上がる。

「先に行ってるってさ」

朝日に照らされたくすんだ金髪が、眩しい光を吸収している。ガルドの人を小バカにするようないつもの微笑みを見ると、飛鳥も自然に口元が綻んでくる。

「飛べないヤツとちっさい羽のくせに先に行ってるって?」

飛鳥は傍らの麻袋を肩に担ぐ。ガルドはアメリカ人らしく肩を竦める。

「俺らのスピードを改めて教えてやろうぜ」
「フフッ!」

飛鳥とガルドは互いの拳を突き合わせる。森の梢の上に白い太陽が完全に顔を覗かせた時、飛鳥たちは東街道を南に向けて爆走し始めた。

「アレン、すっかり囲まれたにや!」

アレンたちはセントマリアから半日近く離れた次の村に到着していた。その村はいまだ村人たちが人間のまま生き残っていた。しかし村に入ると、胡乱な目つきをした村人たちに囲まれてしまったのだ。

「うへ、うへへへ」

「あはは！」

正気を失ったように笑いながら近づいてくる村人たちに囲まれたアレनとスピニツチは、とりあえず近くの家に飛び込む。しかしその家にも涎を垂らしながら笑う村人がいた。

「く、ここもか」

アレンは立つたまま脱力して笑っている村人を押しのけ、裏口へ向かう。

「アレン、わかってると思うけど、あによ村人たちを殺してはいけにやいにや」

「ああ、わかっている」

アレンとスピニツチは裏口から出て、下草の生い茂る森の中を走る。

気が触れているとしても、人間は人間だ。モンスター化していない人間を殺せば、アレンでもモンスター化してしまうかもしれない。モンスター化の呪いはファンタジア国内だけのはずだった。しかしここアイリスでもモンスター化が起るようになってしまっている。これにはきっと原因があるはずだった。

「アレン、あそこを見るにや！」

昼なお暗い森の木陰に、闇が凝縮したような人影が佇んでいる。黒いローブを着て、大きな鎌を持っている。

「キシシ」

木材が擦れるような軋んだ音が辺りに響く。

「死神にや！」

アレンは十メートルほど距離を置いて立ち止まる。腰の鞘から剣を抜き、静かに黒い影を見つめる。

> i 1 7 1 8 0 — 2 7 5 <

「そうか、貴様がモンスター化の原因か」

アレンは静かに息を吐き、呼吸を整える。

“死神”は諸説があるが、ファンタジアにおける死神は人間の魂を狩るアンデット系のモンスターとして位置づけられる。デス・シッケル “斬魂鎌”

と呼ばれる大鎌で人間の魂を斬り裂き、生ける屍“アンデット”にしてしまう。アンデットとなった人間は本能のままに他の人間を襲い、そのまま呪いによってモンスター化してしまうのである。

「キシシ…… ワタシを剣で倒すことはできない」

ローブの下から黄色く丸い目が妖しい光を放つ。死神はアンデット系でも上位に位置する。基本的に物理攻撃は一切通用しない。攻撃力だけならヴァンパイアの方が上だが、攻撃魔法の使えないアレンにとっては相性の悪い相手だと言えよう。

「い、いざとにやったらミィが戦うにや！」

スピニッチはお腹のポケットから銀のナイフを取り出す。旅立つ

前にクウェンディ女王から与えられた、魔力の込められた聖なる短剣だ。

「いや、その必要はない」

アレンに動揺は一切感じられない。鈍い陽光を受けたアレンの剣がきらめく。

「この剣の前に斬れないモンスターはいない」

死神の軋むような笑い声が消える。次いで周囲の温度が急激に下がる。死神が怯えているのだ。

「ま、まさかその剣は……」

「アレン！」

上空から飛来した黒い影が炎の玉を連続して発射する。ガルドだった。ガルドの放った炎の玉は逃走を図ろうとしていた死神の周囲に着弾し、その動きを止める。

「おりゃあああっ！」

直後、全身を金色に染めた飛鳥が死神に向かって飛び込んでいく。飛鳥の拳が死神に命中し、その姿は黒い霧となって霧散してしまう。

「ガルド、アスカ！」

スピニツチが二人に向かって飛んでいく。

「あぶねえところだったな。何だあの黒いやツ」

ガルドはローブの裾をはためかせ、華麗に着地する。その後ろからは、飛鳥が自分の拳を見ながら首を捻って歩いてくる。

「あれは死神にゃ」

「なんか変だよ、倒したのにナイトが出てこない」

飛鳥は手応えがまったくなかったのに違和感を感じているのだらう。

「倒したのではない、消えただけだ」

アレンが剣を鞘に収めながら歩いて来る。

「消えただけ？」

顔を見合わせる飛鳥とガルドに、アレンは左手で鞘を軽く叩いてみせる。

「死神は普通の攻撃では倒せない。ヤツを倒せるのはこの剣だけだ」

村の方からは、村人たちの不気味な笑い声が押し寄せてくるところだった。

126話：笑う村人（後書き）

作中の挿絵は著作権フリーのイラストをいただきました。

127話：魔剣グラム

「魔剣？」

飛鳥の問い返しに、アレンは走りながらも強くうなずく。十キロメートル以上休みなく走り続けているのに、飛鳥もアレンも息切れ一つしていない。速度も、オリンピックの短距離走金メダリストよりも速い速度を維持し続けている。

「“魔剣グラム”という。悪の存在そのものを斬ることのできる剣だ」

アレンの腰で揺れている長剣は、見たところそれほど派手な装飾が施されているわけではない。持ち手の部分は両手でも使えるように少し長めになっているが、金色のつばの部分は少し湾曲した金属でできている。見た感じ非常に実用的でシンプルな剣だ。とても“魔剣”などという禍々しいものには見えない。

「魔法伝導率も高く、剣自体に属性を持たせることもできる。そして何よりも、悪の魂そのものを斬ることができる。物理攻撃はもちろん、死神のように魔法しか効かない相手にも有効だ」

「へえ、アレンって攻撃だけなら魔法剣士レベルなんだな」

アレンの隣で飛んでいるガルドは本気で感心している。

「死神の本体はこの世にはない。先ほど遭遇したのはヤツの幻影だ。倒したように思えても、根幹である本体が無事ならばヤツは何度でも現れる」

「しかもそれが一体だけではないってか……」

ガルドは後方へ流れていく木々を見つめる。いつ何時黒い影の塊が襲いかかってくるのかわからないのだ。

「でもこれではつきりしたよね。アイツを倒せばモンスター化は防げる。少なくともこのアイリスでは」

「どのくらいの死神がいるかわからないが、数自体はそう多くはないはずだ。雑魚モンスターではないからな」

飛鳥の明るい表情につられて、アレンも薄く微笑む。ブルードラゴンのような敵が数多く存在したら、今頃この世界はとくに滅亡しているだろう。それなりに強いモンスターをこの世に生み出すためには、それ相応の膨大なエネルギーが必要なのだろう。

セントマリアの女の子はオークに変化した。モンスター軍の下級兵士は、元々はファンタジアの人間だった可能性が高い。そうなる“創造主”たる敵の親玉が作り出したモンスターは、元々はさほど多い数ではないのかもしれない。

フェンドルフィンでもイスペリアでも、人々を襲ったモンスターは元々この世界に存在した野生モンスターばかりだった。

「それで本体が別の世界にある死神をどうやって倒すの？」

あと数十分もすれば次の村が見えてくる。とりあえずそこで死神が現れるのを待つ計画だ。先ほどの村の人たちは、すべてアンデットにされていた。獲物がいない場所に死神が現れることはないだろう。現れるとしたら生き残っている人間のいる村だ。

「本体と幻影を完全に切断する。この世界とのつながりを断ち切るのだ」

死神が存在するシステムは、有線の異世界召喚に近い。常にその出入り口が繋がっている状態なのだ。アレンの魔剣グラムは、その出入り口を破壊できる。そうすれば死神はこちらの世界に出て来られなくなる。

「じゃ、アタシたちの仕事はアレンのサポートだね」

「ああ、そうだな」

ガルドが力強くうなづく。徐々にはあるが、三人には連携が生まれつつある。国籍も文化も違う若者たちが、本来は何の関係もない異世界のために命を懸けている。スピニッチは飛鳥の後ろを飛びながら、お腹のポケットに収められている銀のナイフをそっと前足で確かめた。

五十キロメートルを約一時間で走破した飛鳥たちは、道の先に人工物を発見する。街道を封鎖するかのように、高い門柱の間で分厚く大きな木の扉が固く閉ざされている。百メートルほど手前で速度を落とした飛鳥たちは、歩いて村の入り口へ近づいて行く。するとすぐに誰何の声かけられる。

「止まれ、何者だ！」

門を支えている左右の支柱からは、高い板塀が森の中へ向かって伸びている。どうやら急造で作られた防壁のようだ。その塀の向こう側に、木材で組まれた櫓が立っている。声の主はどうやらそのてっぺんにいるようだ。飛鳥の視力は、櫓の上で矢をつがえている男を捉えていた。

「あそこに誰か立ってるよ。弓矢を構えてる」

飛鳥が指さすと、アレンも気づいていたようで小さくうなずく。

「ここはリーダーの俺に任せておけ」

ガルドは両手を挙げて歩いて行く。飛鳥がスピニツチを見ると、肩を竦めて「ガルドに任せておくにゃ」とでも言いたげだ。

「俺たちはモンスターじゃない。お前たちを助けに来た」

「助けに？ 冗談じゃない！ お前たちの来た方向には、生き残った人間などいないはずだ！」

「はあ……」

ガルドは肩を落としてため息をつく。一から説明しなければならぬのが面倒なのだろう。とにかくこの村はまだ無事のようなのだ。

ガルドは自分たちが召喚された勇者であること、アイリスの女王と共にエスターでモンスター軍を撃退したこと。ファンタジアに向かう途中であることなどを説明する。櫓の男はそれでようやく安心したようだった。

程なくして門扉が開かれる。中に入ると簡素な鎧に身を包んだ男たちが出迎えてくれる。

「疑ってすまなかった。私はこの村の自警団長カクトだ」

カクトはアイリス人にしては無骨な手を差し出す。村の中で悲鳴が聞こえたのはその時だった。

128話：希望の音

「どうした!」

周囲から武器を持った男たちが村の奥へ向かって走って行く。カクトについて、飛鳥たちも走る。この村はさほど大きな村ではないらしく、街道の両側にそれぞれ十戸ほどの建物が並んでいるだけだ。森の中にも家はあるようだがそれも数えるほどしかなく、その奥で板塀が村をぐるりと囲んでいる。

飛鳥たちが走って行くと、道の真ん中に女性が立ち尽くしている。どうやらその女性が悲鳴を上げたようだ。

「あ、ああ…… う、うちの人が……」

エプロン姿で髪をひつつめた女性が、青白い顔で家の方を震えながら指さす。自警団らしき男たちは剣や槍を構えて、その家の出入り口を半円形に囲む。よく見ると男たちの持っている武器は、モンスターたちの使っていた武器だ。倒したモンスターから奪ったものなだろう。

開け放たれた家の出入り口から、人影がゆっくりと現れる。中年の男性だ。女性の夫なのだろう。男は口を半開きにして涎を垂らしながら笑っていた。

「ぐへ、げへへ」

「アゼル、どうした!」

カクトが声をかけるも、アゼルと呼ばれたその男はだらしなく笑っただけだ。これは明らかに死神に魂を狩られたのだろう。先ほどの村の人たちと同じだ。

飛鳥はアレンを見る。アレンは眉間にしわを寄せて小さく首を横に振る。こうなってしまうてはどうしようもない。

「だめだ、気が狂ってる！ 仕方ないが殺すしかない。ロザリー、いいな？」

女性は夫らしき男を見つめたまま、青白い顔でわなわなと震えている。カクトの言っていることを理解はできても、納得することはできないのだらう。小刻みに頭を振っている。

「アゼルのせいで村が全滅しちゃってもいいのか！ お前たち、アゼルを殺し……」
「ダメだよ！」

自警団員たちに攻撃の指示を出そうとしたカクトを、飛鳥が大声で遮る。

「この人は魂を狩られてるけどまだ人間なんだ。殺したらアンタたちみんなモンスター化しちゃうよ！」

飛鳥は笑い続けるアゼルの前に立って、背中をかばうように両手を広げる。その全身はほの白い光に覆われている。

「モンスター化？」

カクトはまだモンスター化の事実は知らないらしく、怪訝な表情を見せる。するとアレンがカクトの横に立つ。

「死神の狙いは君たちの同士討ちだ。おかしくなった者は殺され、殺した者はモンスター化する。そのモンスターが他の村人を殺す。

この村の規模なら、このように魂を狩られた者が五人もいればあつという間に全滅だろう」

自警団員や騒ぎを聞きつけて集まってきた村人たちが、戸惑ったように顔を見合わせる。

「だ、だったらアゼルはどうすりゃいいんだ」

「彼は……」

見るとアゼルは今まさに、飛鳥の肩へ噛みつこうとしているところだった。

「ア、アンタ危ない！」

カクトは弓をつがえる。

「大丈夫にゃ」

黒い羽を羽ばたかせながら、スピニツチはどこからか持ってきたロープをガルドに渡す。

「あははあ！」

アゼルは飛鳥の背後から抱きつき、そのまま飛鳥の左肩へ噛みつく。しかしその歯が飛鳥の身体に食い込むことはなかった。飛鳥の全身は薄いシールドで覆われている。アンデットの噛みつき程度で破られるはずはなかった。

ガルドはアゼルを、飛鳥に噛みついていてる間に手早くロープで縛り上げる。その間飛鳥は目をつぶって唇を噛んでいた。

「あ、あの、うちの人はどうなるんですか？」

ようやく落ち着いて来たらしい妻のロザリーが、アレンを見上げながらおずおずと聞く。胸の前で両手を組んでいる様子は、まるで神に祈りを捧げているようだ。

「彼はもう助からない。本来は死んでいる状態だ。魂はなく、肉体だけが仮初めに生きながらえているだけだ。いずれ肉体も生物的な死を迎える、モンスター化しない限り。」

「そ、そんな……」

アレンの説明を聞いて、ロザリーが地面へ座り込む。アンデットになった人間に選べるのは、死ぬかモンスターになって人々を殺すかの二つしかない。周囲はその人間をひと思いに安楽死させることもできないのだ。それは本人は元より、周囲の人々にとっても気が狂うぐらい辛い状況だった。

アゼルは縛られてもなお、涎を垂らしながら笑い続けている。ガルドは噛まれないようにきつく猿ぐつわをし、アゼルを家の中に連れて行った。

「セントマリアでは村人全員がモンスター化していた。ヨヘンナ村では全員がアンデット化していた。今頃は村人同士で殺し合いが起きているだろう。いずれこの村にもオークの集団が押し寄せる」

「何ということだ……」

カクトの顔は青ざめている。

「大丈夫」

暗く重い雰囲気吹き飛ばすかのように、飛鳥の力強い声が響く。

村人たちはつとして、奇妙な格好をした小柄な少女を見る。

「アゼルさんが襲われたっていうことは、村のどこかに死神が紛れ込んでるってことだね？　だったらチャンスじゃん。死神はアタシたちに任せて。絶対ぶつ殺す！」

飛鳥が拳を握りしめると、黒い皮のような材質が擦れる小気味よい音がする。そこで村人は改めて気づいた。ここにいる三人は、その強さにおいてモンスター軍数十万に匹敵する召喚された勇者たちなのだ。

アレンが魔剣グラムを抜く鞘鳴りの音が、青空に吸い込まれるように消えていく。それは村人たちにとって、まさに希望の音だった。

129話：襲撃

「こっちへ！」

さしたる混乱もなく、村人たちが集まってくる。カクトによればこの村の人口は百三十二人。アゼルを除いてだ。家の中に隠れていても死神には関係ない。だったら広いところにみんなが集まっていた方がいいだろうということで、村の入り口の櫓の辺りに村人全員を集めることにしたのだ。

村人たちは自警団の誘導によって静かに座っているが、みな不安げな表情で囁き合っている。

「きつと来るよね」

飛鳥は村人たちの脇に立つアレンへ話しかける。アレンは周囲を厳しい視線で警戒していた。

「ああ、間違いなく来る」

ガルドは櫓の上でスピニッチと共に、村の内と外を見張っている。そのガルドが大声を上げる。

「来たぞ、通りの方だ！」

はっとして振り返ると、村の通りの真ん中に黒い影が固まっている。自警団たちは各々武器を構えて、村人たちを背にする。

「アレン、アタシがアイツを引きつける。隙を見てぶっ殺して！」

飛鳥は弾丸のように駆け出す。ものの数歩でトップスピードに乗ると、あっという間に死神の前に立ちはだかる。

「さあ、かかってきなさいよ！ アンタ人間の魂が欲しいんでしょ！」

飛鳥は拳で胸を叩く。死神は半円形の口を引き延ばし、木が擦れるような声で笑う。

「キシシ、邪魔するヤツみんなコロス」

死神は巨大な鎌を振り上げる。二本の鎌の切っ先は、鈍い光を放って飛鳥へ向けられている。飛鳥は全身を金色のシールドで包む。ブルードラゴンのブレスさえ無効化した“超シールド”だ。

「キシッ！」

挟み込むように鎌が振り下ろされる。金属質の硬い音をさせ、飛鳥は両腕で鎌を受け止める。

「ギッ？」

「アレン、今だよ！」

「承知した」

日が陰る。いつの間にか跳躍していたアレンは、死神を脳天から真つ二つに斬り下ろす。

「ギャッ！」

テレビ画面が静止するかのように、死神の姿が歪んで霞む。その

姿にノイズが走って点滅すると、色を失っていく。モノクロームのその姿は、水晶の像のように固まってしまう。次の瞬間、涼しげな音をさせて粉々に砕け散る。

「おお、なんかかつこいい倒し方だなあ！」

ガルドが口笛を吹きながら飛鳥の隣に降り立つ。きらめく破片を見つめながら、飛鳥は笑顔でうなづく。次の瞬間、背後で村人たちの悲鳴が聞こえた。

「なんだ？」

飛鳥たちが振り返ると、なんと村人たちの集団の中で死神が二体大鎌を振るっている。

「ちいつ、こいつは陽動だ！」

ガルドは逃げまどう村人たちを避けて飛び上がる。すでに何人が斬られたようだ。二、三人の村人が、ゆらゆらと身体を揺らしながら千鳥足で歩いている。

「一体を引きつけておいてくれ」

アレンは飛鳥にそう言うと、一体の死神の方へ走っていく。

「う、うん！」

飛鳥も駆け出し、もう一体の死神へ向かう。その死神は今まさに、一人の村人へ鎌を振り下ろそうとしているところだった。

「させるかあ！」

飛鳥は身を低くして鎌の下へ潜り込む。金属音をさせて二本の鎌を受け止める。

「大丈夫？」

鎌を受け止めながら振り返ると、青年の村人は青ざめた顔でうなずく。死の象徴のような死神から視線を外せないらしく、尻餅をついたままその青年は後ずさりしていく。そこに横からアンデットが噛みついた。

「うぎゃあっ！」

首筋から勢いよく鮮血を噴き出し、青年は涙を流す。アンデットは首の肉ごと噛みちぎり、美味しそうに咀嚼する。青年は全身を痙攣させ、そのまま絶命する。

「く、くそっ！」

飛鳥は鎌を押し返し、右ストレートを放つ。死神は黒い霧のようにかき消えてしまう。

「ぐあああっ！」

村の青年を殺したアンデットが苦しみ始める。モンスター化が始まったのだ。そのアンデットはよく見ると、自警団長カクトだった。

「カクトさん！」

飛鳥の叫びを受けながら、カクトの身体が巨大化していく。セントマリアの少女のように黒い身体ではない。赤みがかった褐色の肌だ。モンスター化が終わるまではまだ人間だ。手出しはできない。飛鳥はファイティングポーズを取って攻撃態勢を取る。しかしその表情は不安げで、全身のシールドは消えてしまっていた。

「ぐあ、ぐああああっ！」

カクトの身体はさらに大きくなっていき、頭髪が異様に伸びていく。眼窩はくぼみ、その中に青白い炎が揺らめく。着ていた服はちぎれ、身体のところどころにぼろ切れとなつてまわりついている。飛鳥はそのモンスターをよく見知っていた。

「バ、バーサーカー……」

なんとカクトは飛鳥の目の前で狂戦士になつてしまった。つまりモンスター軍の中級指揮官である狂戦士も、元は人間だったのだ。

「ぐあははあゝ」

白い息を吐いて、元カクトだった狂戦士が不気味な笑顔を作る。

「カクトさん……」

飛鳥は苦しい表情で後ずさつた。

130話：飛鳥の苦悩

「お前ができねえなら俺が殺るぜ」

いつの間にか隣に立っていたガルドが、飛鳥の肩に手をかけて狂戦士を睨みつける。今のガルドなら、魔王変化しなくても狂戦士は倒せるだろう。

「う、ううん、アタシにやらせて」

飛鳥の瞳に一瞬迷うような色が揺らめいたが、頭を振って前を向く。元カクトだった狂戦士は武器は持っていない。しかし狂戦士は普通の人間なら一撃で殴り殺せるほどの膂力を誇る。素手だからといって気を抜くと、いくら飛鳥でも簡単に骨折ぐらいはさせられてしまうだろう。

「うがぁ！」

狂戦士は数メートルを跳躍し、飛鳥へと飛びかかる。ガルドはスピニッチのいる櫓へと飛び上がる。

「うっ！」

飛鳥は掴みかかろうとする狂戦士の腕を弾き、横へ逃げる。スピードはガザで戦った狂戦士たちと大差ない。基本的な身体能力はモンスター化した時点で同じなのだろう。

「このっ！」

飛鳥は素早く踏み込んで、狂戦士の横っ面に右ストレートを叩き込む。重い音がして狂戦士はふらつくが、体勢を立て直して即座に掴みかかってくる。どうしても飛鳥を捕まえたいらしい。モンスタ―化したばかりで空腹なのだろう。

「うりゃあ！」

狂戦士の腕をかいぐり、分厚い筋肉で覆われた腹部にすれ違いざまフックを食らわせる。

「ぐほっ！」

肘近くまでめり込んだ飛鳥の細い左腕が、狂戦士の巨体を吹き飛ばす。狂戦士は黄色い胃液をまき散らしながら、数メートル先に背中から落ちる。

「はっはっはっ…… やったの？」

飛鳥は荒い息をしながら全身異様に汗をかいている。ブルードラゴンと渡り合った飛鳥が、今さら狂戦士ごとくと戦ってこれほど疲労するのはおかしい。ガルドはスピニツチと顔を見合わせて、いつでも加勢できるように手すりに身を乗り出す。

「アス力はまだ吹っ切つてにやいにや」

「ああ、どうやらそのようだ」

ガルドの厳しい視線の先では、ふらつきながら狂戦士が立ち上がるうとしている。追撃するなら今が絶好のチャンスなのに、飛鳥は肩で息をつきながら狂戦士が立つのを黙って見ている。攻撃するのをためらっているのは明らかだ。

狂戦士は腹を押さえながらゆっくりと振り返る。その顔に凶悪な微笑みはなく、どこかカクトの面影の残る顔で悲しそうな表情を作る。

「な、なあ、わ、私は腹が減ってるんだ…… 食わせてくれよ……
その美味しそうな太もも…… いや、腕一本でもいいから。あんた
私たちを助けに来てくれたんだろ？ だったら助けてくれよう」

カクトの顔で狂戦士はゆっくりと近づいてくる。飛鳥は呼吸を乱しながら少しずつ後ずさる。すると、すぐ後ろの板塀に背中がついてしまう。

「ダ、ダメだよ。ア、アンタはもうモンスターになっちゃったんだ。
ア、アタシはアンタを倒さなくちゃならないんだ」

大きな体で肩を落として近づいてくるカクトを見つめながら、飛鳥は苦しそうに首を振る。倒さなければならぬという意志とやっぱり倒せないという優しい心が、飛鳥の中でせめぎ合っているのだ。

「私は苦しいんだよぉ！」

カクトは青白い光を揺らめかせる眼窩から涙を流し、飛鳥の両肩を掴む。

「きゃっ！」

勢いよく板塀に押しつけられた飛鳥は、反撃するのも忘れて身を守る。「噛まれる」思つて身を強ばらせると、カクトの身体が崩れ落ちる。カクトの広い背中には、太く長い氷の槍がたくさん突き刺さっていた。

「ガ、ガルド？」

俯せに倒れた狂戦士の向こうに、複雑な顔で見つめるガルドが立っている。ガルドは魔法を放った左腕を下げ、ため息をついてうつむく。

「お前には無理だ。櫓の上で見張りを頼む。まだどこに死神が現れるかわかんねえからな」

「え、だ、大丈夫だよ、アタシやれるよ！」

「無理だ」

ガルドは黒いローブの裾を翻し、村の通りの方へ飛び去ってしまった。アレンは首尾良く死神を倒したようだ。広場の反対側でクリスタルのような破片がきらめいて四散している。アレンは走りながら飛鳥の方をちらりと見ると、ガルドを追って通りへと消えて行った。

「ア、アタシ……」

前髪に覆われた額から汗がぼつりと落ちて、乾いた地面へ黒い染みを作る。

「うつ……」

飛鳥は両手で顔を覆って座り込む。どうして自分はこんなに苦しい思いをしなければならないのか。どうしてみんな死ななければならないのか。

目の前で息絶えているカクトが元の姿に戻っていく。モンスター化して間もない人間は、死んだら元の人間の姿へ戻るようだ。あの少女もそうだった。

カクトの顔は涙と砂で汚れている。背中に刺さっていたガルドの氷の槍はすでに消えている。赤黒い穴がたくさん背中に空いているだけだ。

「カクトさん、守ってあげられなくてごめんね」

飛鳥はカクトの頭を抱き上げて、顔を手で拭いてあげる。今までこの村を必死に守ってきたアイリス人は、助けに来たはずの勇者に殺されてしまった。

しかしガルドが悪いわけではないこともわかっている。きっとガルドのしたことが正しいのだ。アレンやスピニッチの言う通りなのだ。自分は甘い。こんな自分がこの世界を救うなんてできるわけがない。

カクトの死に顔は穏やかで眠っているようだ。いったいどうしたらこんな悲しい出来事をなくせるのだろうか。飛鳥はカクトの頭を抱きしめ、嗚咽を漏らす。村のあちこちでは悲鳴が上がり、アンデットが村人を襲っているのがわかる。しかし飛鳥にはどうしようもない。みんな同じ人間なのだ。喜んだり悲しんだり笑ったり怒ったりして、人生を一生懸命生きてきた人間なのだ。それをどうして自分の手で殺すことができるだろうか。

「アスカ、死神にや！」

突然、櫓の上でスピニッチが叫ぶ。はっとして顔を上げると、聞いたことのある悲鳴が聞こえる。見ると乱れた前髪の隙間から、口ザリーが死神に斬られている光景が目に入る。

「おばちゃん！」

飛鳥は夢中で立ち上がり、弾かれたように走り出した。

131話：夫婦の結末

「キシシ」

ロザリーを斬った死神は、木の擦れ合うような笑い声を上げて浮かび上がる。

「このおっ！」

階段を駆け上るように飛んだ飛鳥は、死神に殴りかかる。死神はそのまま黒い霧となって霧散してしまった。

「おばちゃん！」

うつぶせに倒れているロザリーの横へ着地すると、飛鳥はその身体を抱き上げる。ロザリーの顔色は青白く、生者のそれではない。

「おばちゃん、おばちゃん起きてよ！」

いくら揺すってもロザリーが目を開ける様子はない。飛鳥は自分の腕の中で、ロザリーの体温が急激に下がっていくのを感じる。心持ち眼窩がくぼみ、唇が青紫色に変わっていく。ロザリーはアンデットになりかけているのだ。

「けひ、けひひ……」

すぐ側でアンデットの笑い声が聞こえる。はっとして顔を上げると、目の前にロザリーの夫アゼルが立っていた。

「ア、アゼルさん？」

「ひひ、ひひひ、ひひひひ！」

アゼルは口を横長に開き、涎を垂らして笑っている。誰かが拘束を解いたのか自分で外したのか、アゼルはふらふらと酔っぱらったような足取りで歩いて来る。

「だ、だめだよ！ 人を殺したらモンスターになっちゃうんだよ！」

飛鳥はロザリーの頭を胸に強く抱きしめ守ろうとする。しかしアゼルは完全に理性を失っており、不気味に筋張った手を伸ばしてくる。

「ダメだつてば！」

飛鳥は立ち上がってアゼルの手を払いのける。アゼルは少し下がるが、またふらふらと前進してくる。

「ふひひ……」

「おばちゃんはアンタの奥さんでしょ？ 思い出し」

「あはあ！」

飛鳥の横をロザリーが、アンデットとは思えないスピードで駆け抜ける。ロザリーはそのままアゼルに飛びついて、首筋に噛みつく。

「おばちゃん！」

「ふひああ！」

アゼルは首筋から血飛沫を上げ、変な悲鳴を上げながら倒れ込む。ロザリーはアゼルの首筋から顎を離さず、そのまま肉を食いちぎる。

アゼルの目がぐるりと回転し、白目になる。大量の血が地面に溢れ、赤黒い血溜まりを作り出す。アゼルはもう間違いない助からないだろう。

飛鳥は呆然と立ち尽くしてしまう。夫婦がお互いを殺し合う。アゼルがアンデットになってしまった時あんなにも悲しんでいたロザリーが、今日の前でその夫を貪り喰っている。

「おばちゃん…… アゼルさん……」

飛鳥は両手で口を覆って涙をこぼす。無理矢理ロザリーを引き剥がすことはできただろう。しかし飛鳥にはそんな気力は湧いてこなかった。ただ力なく座り込み、己の無力さを噛みしめることしかできない。

「あぐっ！」

アゼルを食っていたロザリーの身体が勢いよく仰け反る。目は白く濁り、口の周りは真っ赤になっている。ロザリーはロボットのような奇妙な動きで立ち上がり、全身の関節という関節をあらゆる方向へ激しく動かす。モンスター化が始まったのだ。

「おばちゃん……」

通りは逃げ惑う村人たちや、それを追うアンデットで混乱している。そんな中ロザリーの身体が歪に膨れ上がっていく。緑がかった黒い肌の色はオークのものだろう。ロザリーの身体はどんどん大きくなり、全身に隆々とした筋肉が盛り上がっていく。あつという間に髪を振り乱したオークの姿に変わってしまった。

「ウガア！」

鬼とも豚とも似つかないようなオークは、耳まで裂けた大きな口から涎を垂らして飛鳥を見据えている。すでに死体となったアゼルには見向きもしない。生きた人間を喰らう。それがモンスターの本能的な欲求なのだろう。

飛鳥は通りの左右を見渡す。アレンもガルドもどこにも見当たらない。どこかで死神やモンスターと戦っているのだろう。櫓の上にはスピニツチもどこかへ飛んで行ってしまった。誰にも頼ることはできない。オークとなってしまったロザリーを何とかできるのは、自分しかないのだ。

「きゃああっ！」

どこからか逃げてきたらしい十歳くらいの少女が、オークとなつたロザリーに驚いて立ち尽くしている。必死に家の陰などに隠れて逃げてきたのだろう。

ロザリーが野太い首を回し、少女を見下ろす。そして大量の涎を垂らしながらにやりと笑う。

「くっ……」

少女の危険を察した飛鳥は、ダッシュして少女を抱き上げる。間一髪ロザリーの手が少女のいた空間を横切る。

「おばちゃん、ダメだよ！ そんなことしたら本当に、心までモンスターになっちゃうよ！」

飛鳥は少女を抱きしめながら、ロザリーへ叫ぶ。モンスターとなつてしまったロザリーに、その意味が理解できるとは思えない。しかし飛鳥は叫ばずにはいられないのだ。

「グガッ、グガガ……」

すると突然ロザリーの動きが止まり、両手で頭を抱えて苦しみ始める。

「お、おばちゃん？」

少女を地面に下ろして後ろにかばいながら、飛鳥はロザリーの様子をつかがう。ロザリーは苦しみにのたうち回っているように見える。

するとロザリーの両手の間から見える頭部に、変化が現れ始める。縮んでいるのだ。

「おばちゃん？ おばちゃん、どうしたの？」

必死に声をかける飛鳥の目の前で、ロザリーがゆっくりと上半身を起こす。飛鳥は息を呑む。何とロザリーは、身体はオークの巨体のまま頭だけ元に戻っていたのだ。

132話：涙を越えて

「あ、あああ……」

ロザリーは悲しげな表情で飛鳥たちを見下ろし、涙を流している。緑がかった大きなオークの身体に女性の頭が載っている姿は、シュールで滑稽でアンバランスで、それでいて無性に悲しかった。

「お、おばちゃん？」

ロザリーは両手を持ち上げ自分の変わり果てた姿を見て、くしゃつとした泣き笑いの顔になる。

「あ、あたしを殺して……」

「おばちゃん……」

飛鳥の目から止めどなく涙が溢れてくる。ロザリーは肉塊となつた夫を見、呆然と見上げる少女を見る。そして今度は間違いなく微笑む。

「あの人はあたしが殺しちゃったんだね…… 長年連れ添ってきてこんな終わり方をするなんて、あたしたちは何か悪いことでもしたのかねえ」

ロザリーはゆっくりと飛鳥たちの方へ近づいてくる。飛鳥の背後で少女が「ひっ」と息を呑む。

「シシリー、あんたは絶対生き延びるんだよ。そしてこの村を、いやこの国を元の美しい国に戻しておくれ」

シシリーと呼ばれた少女は、ようやく目の前のモンスターがロザリーだと思えるようになったようだ。

「ロザリーおばちゃん」

伸ばされた無骨で歪な手に、少女の小さな手が添えられる。突然その手が大きく痙攣し始める。

「ウガッ、ウガガッ！ ゆ、勇者のお嬢ちゃん、どうやらもうあたしはダメみたいだよ。せめて…… せめて人間の心が残ってるうちに、うちの人のところに逝かせておくれ！」

「おばちゃん……」

ロザリーは最後の力を振り絞って、シシリーを飛鳥の方へ押し出す。モンスターの本能的な欲求をはね除けるその理性は、想像を絶する苦痛を与えているだろう。

ロザリーは獣のような叫び声を上げ、頭を振りながら顔を覆う。それは醜悪な顔になってしまつのを見られたくないという、女としての最後の意地なのだろう。

「は、早く、早くう！」

「うわああああああつ！」

飛鳥は涙の粒を弾かせながら、大きく強く一歩踏み込む。両膝を折り曲げて、左手をロザリーの腹部へ突き上げる。本気のクロスアップだ。

「おばちゃんああん！」

ロザリーの胴体が爆発する。飛鳥の絶叫と共に、ロザリーの身体が四散していく。空中高く弾き飛ばされたロザリーの首が、元の顔のまま微笑んでいる。それは聖母のような、優しく穏やかな笑顔だった。

「お嬢ちゃん、ありがとう。この国を…… この世界を救っておくれ」

「おばちゃん…… おばちゃああん！」

飛鳥の悲痛な叫びの中、ロザリーの身体が金粉に変わっていく。それはまるで金色の雨のようで、シシリーはその美しさに目を奪われる。

「きれい…… おばちゃんは天国に行ったんだね、よかったね」

「天国…… そう…… そうだね、そうだよ」

飛鳥はシシリーを抱き寄せる。村のあちこちではいまだに悲鳴が上がっている。飛鳥は涙を拭って顔を上げる。その顔にはもう迷いはなかった。

「シシリー、アンタはこの家の中に隠れてな。クローゼットでも物置でもなんでもいい。お姉ちゃんの友達には、トイレの中に三日間隠れて逃げ延びた人もいる。生きたかったら、死にもの狂いで生きる努力をするんだ」

「う、うん…… お姉ちゃんありがとう、がんばってね」

横の家の中へ入るシシリーを笑顔で見送り、飛鳥は黒い革手袋に包まれた手を上げる。シシリーが手を振りながら家の中へ消えると、そのまま通りを奥へと走り出す。すると横の路地から目の前に、オークが二体飛び出してくる。

「アスカ！」

オークたちの背後にガルドが現れる。どうやらガルドに追われていたようだ。

「どけっ！ 俺に任せろ！」

「アタシに任せて！」

飛鳥は走りながら跳躍する。そのまま右のオークの顔面へ飛び膝蹴り。その反動を利用し、空中で後ろ回し蹴りを隣のオークへ放つ。一瞬のうちに、二体のオークは金粉に変わってしまった。

「ヒュ〜！」

ガルドが口笛を吹いて歩いてくる。その顔は満面の笑顔だ。

「どうやら吹っ切れたようだな」

飛鳥は力強くうなづく。

「モンスターになったって、みんな人を殺したいだなんて思っただけなんだ。みんな死ぬほど苦しんでる。だからアタシはみんなを楽にさせてあげる。これ以上苦しまないように」

「ああ…… ああ、そうだな」

ガルドは飛鳥の頭をくしゃくしゃに撫でる。飛鳥の頬についた涙の跡は、彼女が苦しみを乗り越えたことを教えてくれる。

飛鳥は以前キャリーの街で、アンデットにされたミライを殺した。あの時も悲しんでいたが、これほど苦しみはしなかった。それは飛

鳥の心が弱くなつたのではなく、逆に強くなつたことの表れだろう。本来関係のないはずのこの異世界の人たちを、まるで大切な友人のように感じている。それは飛鳥の思いやりや優しさが強くなつた証拠であり、心が成長した証でもあるのだろう。

「アスカ、ガルド！」

通りの向こうからアレンとスピニッチが現れる。飛鳥を見るとアレンは何か言いたげだったが何も言わず小さく、しかししっかりとうなづく。

「死神はあらかじめ片付けたが、あと一体いるはずだ。それにまずいことになった」

「なに？」

飛鳥とガルドの顔色が変わる。アレンは言葉を継がず、スピニッチを見る。スピニッチは難しい顔で腕組みをしながら、羽を忙しく動かしている。

「さっきによ村によ人たちが、こっちへ向かつてるにや。数百によオークによ群れにや」

スピニッチはそれを見して、ガルドがアレンを呼びに行ったのだろう。するともうオークの群れはこの村にたどり着く頃だ。

通りの向こうから悲鳴が上がる。村人たちがこぞってこっちへ逃げてくる。見ると門を突き破って、オークの集団が村へなだれ込んで来るところだった。

「残った死神も気になるが、その前にあれを何とかしないとな」

ガルドがロープの裾をはためかせて飛び上がる。

「行くぞ！」

「うん！」

アレンが走り出す。飛鳥も即座に弾かれたように駆け出す。隣に並んだ飛鳥の横顔を見て、アレンは薄く微笑む。目の前にはオークの壁。

「うおりゃああああっ！」

村人たちは逃げることも忘れて呆然とする。彼らは召喚された勇者たちの、本当の強さを見ることになった。

133話：笑う飛鳥

「ベギラマ！」

ガルドはオークたちの前に炎の壁を作り出す。先頭のオークたちが炎に巻かれ、悲鳴を上げながら焼かれていく。後続のオークは数千度の炎の壁に行く手を遮られる。その壁の中から白いシールドの光に身を包んだ飛鳥と、金色の鎧に身を包んだアレンが飛び出してくる。

「ウガッ！」

瞬時に数体が金色の粒子となって消え去り、数体の首が撥ねられる。村の入り口広場に密集しているオークたちの左半分は一瞬ごとに数体が金色の粒子になっていき、右半分は草刈り機で刈られるように次々と倒れていく。

入り口から外へ逃げだそうとした集団は、上空から飛来するガルドの放った炎の塊に打たれてまとめて焼き殺される。数百体はいたオークの大集団は、ものの数十分で全滅してしまった。

「す、すごい…… あれが召喚された勇者たちの力か……」

手に槍や棍棒を持った自警団の生き残りたちは、自分たちの出番がまったくなくなってしまったことに驚愕する。たった三人で掠り傷一つ負うこともなく凶悪なモンスターの大集団をあっという間に全滅させる光景は、まさに信じられない出来事だったろう。

「アス力はいいいなあ、後の処理が楽で」

「ふっふっん、アタシは心が清らかだからね」

「真っ黒にや」

飛鳥がスピニッチを追って走り去ってしまつて、アレンとガルドは笑いながら通りへと戻ってくる。すると途端に村人たちに囲まれる。

「あ、あんたちすげえなあ！　こんなに強え人見たの初めてだよ！」

村人たちの顔は砂や涙で汚れているが、危機を脱したことでみな笑顔だ。

「なあ、できればこの先のノワールの村も救つてやつてくんねえか？　ここはもうオレたちでなんとかかなりそうだしよ」

「ノワール？」

ガルドが自警団員に聞き返す。自警団員たちは気まずそうに顔を見合わせ、苦しい表情で話し始める。

「実は昨夜モンスター軍の生き残り集団が来てな。カクトさんの指揮で何とか村は守れたんだが、あいつらそのまま街道を南へ向かつて行つたんだ」

村の周囲を守る防壁はさほど強固なものではないが、カクトを始めとした自警団員たちは必死で応戦したらしい。狂戦士などの強力なモンスターがいなかったこともあり、何とか村を守り切れたようだ。しかし南へ向かったモンスター軍の残党を追撃する余力はなく、結果的にノワールの村を見捨てることになってしまったということなのだ。

「じゃあ最後の一体となる死神を片付けたら、さっそく南へ向かお

う。撃退したのが昨夜なら、まだ間に合うかもしれない」

アレンの言葉にガルドと、いつの間にか戻って来ていた飛鳥とスピニッチもうなずく。

「おおい！ ゆ、勇者様たち！ い、いたぞ、黒いヤツだ！」

通りの向こうから一人の村人が、つまずいて転びそうになりながらも必死で走ってくる。その後ろから黒い影が、地面を滑るように追ってくる。

「来たぞ、アレン！」
「うむ」

ガルドが援護のために飛び上がり、アレンは剣を構えて走り出す。しかし飛鳥は逃げてきた村人の横を見て、動きが止まってしまった。

「シシリー！」

何とシシリーが先ほど隠れた家の前に立っている。村の様子が落ち着いたと思い、出てきてしまったのだろう。シシリーの後ろには、不気味な笑顔の死神が大鎌を振り上げ迫っている。

飛鳥は無意識のうちに走り出す。視界にはシシリーの姿しか入っていない。飛鳥はアレンをあつという間に追い越す。そのスピードは、スピニッチやガルドさえ見たことのないほどの速さだった。

飛鳥は瞬間移動のようにシシリーの元へをたどり着き、その小さな身体を抱きしめる。その背中に死神の鎌が振り下ろされる。

「アスカあ！」

スピニツチが悲痛な叫び声を上げる。勢いよく飛鳥の身体を通り抜けた大鎌は、鈍い陽光をきらめかせ一回転して元の位置へ戻る。

「キシシ、勇者がモンスター化すると、何になるのか楽しみね」

死神は大鎌を飛鳥と少女の首へかける。そのまま引けば、飛鳥はまだしも少女の首は簡単に斬り落とされてしまうだろう。飛鳥はこちらへ背を向け、しゃがみ込んでいる。少女を抱きしめたままぴくりとも動かない。

「く、くそっ！」

ガルドとアレンは死神の手前で立ち止まる。ヘタに手出しをすると、まだ斬られていない少女の命はない。死神は飛鳥がアンデットに変わるのを待っているようだ。シシリーという少女を斬らずに人質として生かしているのは、そのための時間稼ぎであろう。

「どうする？ 女の子は見捨てて突っ込むか？」

ガルドはアレンへ囁く。アレンは厳しい表情で首を振る。

「無駄だ。それにもしアスカが魂を狩られていたら、ヤツの鎌でも確実に殺されてしまう」

精神と肉体の境目が曖昧なこの世界で魂を狩られてしまえば、勇者だろうが賢者だろうが普通の人間と変わりはない。ガルドは飛鳥の首が撥ねられるシーンを想像し、背筋に冷たいものが走る。

するとゆっくりと飛鳥が立ち上がる。後ろを向いているのでその表情はわからない。

「ア、アスカ？」

ガルドは恐る恐る飛鳥の背中へ声をかける。飛鳥はゆっくりと振り返る。前髪が顔にかかり、やはり表情はよくわからない。死神の大鎌は、飛鳥の首へかけられたままだ。

飛鳥の首がぐんと前に倒れ、さらにゆっくりと左右へ振られる。飛鳥は両手を持ち上げ、手のひらを見つめる。

「ふふ、ふふふ……」

乱れたライトブラウンの髪の間から、低い笑い声が湧き上がってきた。

134話：アタシってすごい？

「ふふ、ふあっはははは！」

勢いよく顔を上げ、大口を開けて飛鳥は笑う。アレンとガルドは息を吞んで飛鳥を見つめている。しばらく笑い続けた後、飛鳥は涙の滲んだ目で死神を見る。

「アンタの鎌、見てくれはおつかないけどアタシには通用しないみたいだね」

死神が驚いて距離を取る。

「アスカ！」

ガルドとスピニッチが笑顔になって、同時に名前を呼ぶ。シシリは呆然としがみついたまま、飛鳥を見上げている。

「ギギ、そ、そんな……」

飛鳥が死神の方へゆっくりと歩いて行く。死神は両手の鎌を振り上げ威嚇する。

「やってみなよ、何度でも」

張りつめた空気を纏う死神とは対照的に、飛鳥はまるで散歩でもするかのように軽い足取りで近づいていく。そこにデス・シックルが勢いよく振り下ろされる。飛鳥の身体を透過した二本の刃が、また陽光を反射してきらめく。しかし飛鳥の歩みに変化はない。

「はは！　なんか手品みたいだね」

「そ、そんなバカな！」

再度、死神は鎌を横薙ぎに振るう。金属的な音がして、鎌が飛鳥の首に引っかかる。飛鳥は微動だにしない。

「あのねえ、アンタごときの物理攻撃が効くわけないでしょ？」

「ギギ……」

「アスカ、私に任せろ！」

後方からアレンが魔剣グラムを構えて走ってくる。ガルドはシリィを保護したところだ。

「ギイイ！」

死神は空中へ滑るように浮かんでいく。飛鳥も階段を駆け上るように追いかける。

「アレン、アタシに任せて！」

「ん？」

砂埃を上げて急停止し、アレンは空を見上げる。

「こっちはやられる心配がなくなつて一方的に攻撃できるって、ちょっと卑怯だけど」

飛鳥の全身が金色の超シールドで覆われていく。死神は身の危険を感じたのか、加速して南へ逃げようとする。

「悲しいけどこれ、戦闘なのよねえ！」
「アスカ！」

ガルドが飛び上がって追いかける。スピニッチもガルドを追って飛び上がる。

「セリフが違うっ！そこは『戦争』だ！」
「ツッコミどころが違うにゃ！」

金色の光の塊となった飛鳥は、死神の影のように黒い塊を一瞬のうちに通過する。先ほど見せた瞬間移動のようなダッシュだ。

「死神は通常の攻撃では……」

アレンが魔剣グラムを構えたまま呟く。通常の物理攻撃では、死神は黒い霧となって消え去ってしまう。しかし空中の死神の身体はそのまま形が崩れない。すると死神はデス・シックルを手放し、身体は金色に光り始める。いや、正確に言えば金色の彫像のように固まっていく。

「あ、あれは……」

アレンは驚愕する。何と金色に固まった死神はそのまま地面へ落下し、粉々に砕け散ってしまったのだ。

「ど、どういうことだ？」

アレンの隣へガルドが着地する。スピニッチは粉々になった死神の破片の方へ飛んでいく。

「おそらく…… アス力は強引に本体と幻影のつながりを断ち切ったんだ。いや…… “断ち切った”なんて上等なもんじゃない」
「引きちぎった！」

ガルドはアレンを笑いながら指さす。アレンはガルドにうなずくと、口元を緩めて飛鳥を見上げる。魔剣グラムと同等かそれ以上の力を、飛鳥はその小さな身体に宿している。もしファンタジアで最終的な局面を迎えた時、鍵を握るのは飛鳥かもしれない。

アレンは顔にかかる前髪に目を細めながら、満面の笑顔で手を振る飛鳥に微笑んでいた。

「しっかしデス・シックルが効かねえって、どんだけなんだよ」

街道を南へ向けて急ぎ足で歩きながら、デス・シックルを肩に担いだガルドが飛鳥へ笑いかける。スピニッチが拾ってきて、唯一装備できるガルドがもらったのだ。二本あったデス・シックルのうち、大きい方をガルドは自分の物とした。見た目と違ってとても軽く、魔法使いのガルドでも十分使いこなせそうだ。

村で食べきれないほどの食料をもらい、村人たちからはくれぐれもノワールの村を救ってほしいと頼まれた。カクトが死んでしまっても、村人たちは希望に満ちた顔で飛鳥たちを送り出してくれた。勇者たちはきつとこの世界を救ってくれると信じて。

「お姉ちゃんありがとう、世界を救ったらあたしに会いに来てね」

「うん！」

シシリーの両親はすでにアンデットたちに殺された後だった。天涯孤独の身となっても、シシリーは挫けてはいなかった。ロザリーの言葉があつたからだ。生き残った自分にすべきことはいくらでもある。こんな世の中だからこそ、みんなで協力して生きていかなければならない。

シシリーは幼いながらも、飛鳥やロザリーから勇気を受け取った。そして飛鳥を本当の姉のように感じていたのだ。

「きっとヤツの鎌では狩れないほど強い魂だったのだろう」

アレンがまじめな顔でガルドに解説している。

飛鳥自身はその理由はまったくわからなかった。あの時シシリーを守りたいとは思ったが、死神に対する恐怖心がなかったのは確かだ。

「恐怖心か…… 案外、俺たちでも死神の鎌を無効にできるかもな。恐怖心さえ取り除ければ」

「死神は“死”を象徴する存在だ。人には死に対する根源的な恐怖心がある。死に目を背けているうちはその恐怖心は取り除けない。アスカは人の死に対して正面から向き合って乗り越えたからこそ、死神の鎌が効かなかったのかも知れん」

「もしかしてアタシってすごい？」

「ああすげえ」

「えへへえ！」

飛鳥は照れて、桃色に染まった両頬を手で覆う。

「でもな、あの大事な場面でセリフを間違ったのは許せねえ。次の

村に着くまで、俺がたつぷりと名言について特訓してやる」
「えええっ！」

飛鳥が泣きそうな顔をアレンとスピニツチに向ける。一人と一匹は不自然に視線を逸らし、森の梢を飛び交う小鳥などを見ている。

「まずは敵に攻撃を受けた時だ。『殴ったね？ 親父にもぶたれたことないのに！』だ。はい復唱」

「アタシ、親父にぶたれまくってたけど」

「いいから練習しろ！ 今度は間違えんなよ！」

「ふええ〜ん、アレン〜、スピニツチい〜」

ノワールの村へはほぼ丸一日かかる。森の中をうねるように南へ向かう街道では、飛鳥たちの笑い声が響きながら遠ざかっていった。

134話：アタシってすごい？（後書き）

これで一応「死神編」は終わりですw

135話：ノワール村の危機

「団長、裏手に二十体ほどの集団が現れました！」

「くそっ、次から次へと……」

カイは傍らで攻撃魔法を放っている、長い若草色の髪の女性を見る。

「エレナ、すまないが頼めるか？」

「わかったわ」

エレナと呼ばれた女性は焦げ茶色のスカートを翻して空中に浮かぶ。しかし心配そうにカイを振り返る。

「死なないでね」

「ああ」

カイは斧の柄を握って前方を見据えたまま口だけで笑う。

ノワールの村の命運は、今や風前の灯火だった。夜明けと共に襲ってきたオークの大集団は、今にも村へなだれ込んでこうとしている。

ノワールの村の周囲は、野太い丸太を立てた防壁で囲まれている。カイが村人たちに指示して立てさせたものだ。

一週間以上前、ノワール村出身でかの有名な“薔薇十字隊”のメンバーでもあるエマ・ジェラートが危険を知らせに来てくれた。それを受けて普段林業に携わっているカイは村人たちに呼びかけ、大急ぎで丸太の防壁を作ったのだ。

この村にはもとも自警団はなかった。しかし力と信頼のあるカイが自然に自警団長となった。エマは北の各村へも危険を知らせな

がら、召喚された勇者がいるはずのエスターへ救援を求めに行った。エマはまだ戻っては来ない。勇者も現れない。エスターにはブルードラゴン率いる数十万のモンスター軍が押し寄せていったという常識的に考えれば助かるはずはない。例え召喚された勇者だろうが薔薇十字隊だろうが。

そう考えれば、自分たちの身は自分たちで守るしかない。カイは村人たちに呼びかけ、戦えそうな者を集めた。もともと東街道では大きい村であるノワールの村民は二千人ほど。その中で戦えそうな者は約半数の九百人強。カイは彼らを村の周囲に配置して戦い方を教え、モンスターの襲撃に備えた。

そして昨夜遅く、エマと同じ薔薇十字隊のメンバーでもある恋人のエレナに叩き起こされたのだ。北からたくさんの邪悪な気配が近づいて来ると。

エレナはカイと結婚式を挙げるために除隊して帰省していた。

「団長、矢がなくなつた！」

丸太の防壁には角材を組んだ足場を設けてある。上から攻撃できるようにだ。自警団員はそこから弓矢でオークたちに攻撃をしていたが、もともと弓矢は武器ではなく狩猟でしか使わない。エマに知らせを受けてから急遽攻撃用の矢を増産したが、それもすでに底を尽きかけている。

「く…… 降りてこい！」

カイは団員を呼び、周囲の仲間を集める。カイの周囲には、手斧や鉈などを手にした自警団員が十数人ほどいる。

「矢がなくなれば後は白兵戦しかない。一体に複数でかかれ。オークは腕力が強い。決して一対一になるな」

団員たちは青白い顔でうなずく。みなわかつていた。一対一どころかオークの方が数は多い。自警団員一人に対してオークは二、三体はいるだろう。カイも自警団員も口にこそ出さないが、防壁を破られてしまった時点でこの村は終わりだということはよくわかっていた。

逃げ場はない。村はすっかり囲まれている。どこに隠れても、体温や臭いでバレてしまうだろう。家々に隠れている年寄りや子どもたちがどんな目に遭うか。慣れない作業で手を切り傷だらけにしていた女たちがどんな目に遭うか。そして最愛の女性エレナがどうなるか。

カイは自分の身体が震え出すのを必死に堪えていた。自分は死んでもいい。せめてエレナだけは守りたい。

大きな音がして、街道に面した防壁が大きく揺れる。オークたちが力任せに防壁を破ろうとしているのだ。

「エレナ、最後にもう一度きみの笑顔が見たかったよ」

大きな衝撃が何度か響くと防壁の根本に亀裂が入る。不気味な叫び声が周囲の森にこだまし、地面が震動している。一際大きな衝撃が防壁に加えられると、数本の丸太がまとめて嫌な音をさせながらこちら側へ倒れてくる。その向こうには密集したオークの群れが、狂気に満ちた赤い目をぎらつかせてこちらを睨みつけていた。

「な、なんて数だ……」

カイは絶望の呟きを漏らす。村の正面を担当しているカイたちは十数人。目の前から迫るオークは、見える範囲だけでも百体以上はいる。そのオークたちが叫び声を上げながら、次々と村の中へ走り込んで来る。カイは死を覚悟した。

「くそっ、エレナああ！」

足が竦んで動けなくなっている団員たちを尻目に、カイは斧を振り上げてオークの壁に突撃していった。

「カイ！」

突然、後方上空からエレナに呼び止められる。その瞬間、目の前のオークたちが一気に爆発四散する。オークたちの血飛沫の中を、小柄な女の子が走り抜けてくる。

薄青い上着を着て、太ももを丸出しにしたその少女は、カイの目の前で急停止する。

「間に合った！」

その少女は顔中にオークの返り血を浴びているが、太陽のような明るい満面の笑顔を浮かべる。少女が後ろを振り向くと、オークたちは金色の粒子となって消えていくところだった。

「アンタたち覚悟しなさいよお！」

女の子がオークの群れに向かって、また走り出す。呆然と立ちすくむカイの隣に、エレナが着地する。

「勇者さまたちよ、エマが間に合ったんだわ！」

エレナがカイの腕を取る。その細く白い指は小さく震えている。気丈に振る舞ってはいても、やはり怖かったのだらう。

「おりゃあああ、親父にもぶたれたことないのにいいい！」

「アスカ、使いどころを間違ってるにゃ！」

オークの群れに突っ込んでいく少女とすれ違いに、羽の生えた黒い猫が飛んで来る。その猫はカイの前まで来ると、細い目をさらに細めて微笑む。

「もう大丈夫にゃ」

村の外では、カイたちには信じられない戦いが繰り広げられていた。

136話：別れ、そして急変（前書き）

横書き推奨です。

136話：別れ、そして急変

魔王変化したガルドは右手に紫色の、左手には黒色の魔法陣を盾のように作り出す。耳まで裂けた牙の並ぶ口を心持ち開き、呟くように闇の言葉を詠唱する。

勢いよく両手を合わせると、紫紺の光が爆発するように膨れあがる。広げられたガルドの両手の間には、黒い球体が紫色の縞模様を作って回転している。それはまるで宇宙の深淵に浮かぶ邪悪な惑星のようだった。

『デモンズゲート』

魔王ガルドの重々しい声が数百体のオークへのしかかる。ガルドが両手を前へ突き出すと、球体は放物線を描いて地面を埋め尽くすオーク集団の真ん中辺りへ飛んでいく。地面へ落ちた瞬間紫色の縞模様が消え、漆黒の球体へと変わる。それはまさに虚無の深淵への入り口であった。

悲鳴を上げながらオークたちが黒い球体に吸い込まれていく。ガルドは一時的に“虚無の海”を作り出したのだ。球形はしているものの、それは終わりのない虚無の世界。数百体いたオークたちは、数瞬後一体残らず消え去っていた。

「むん！」

アレンが魔剣グラムを一振りすると、同時に数体のオークの首が跳ぶ。黒く蠢くオークたちの中にあって、アレンの金色の鎧はよく目立つ。

二体斬るとその後ろから四体。四体斬ると八体現れる。オークなど何体いようがもの数ではないが、アレンにも召喚された勇者としてのプライドがある。飛鳥やガルドより手間取っていては、アイリスの勇者として沽券に関わる。

「では、私にもスピードがあるところを見せてやらないとな」

アレンは意識を集中し、へその下十センチにある人体のツボ“丹田”に力を溜める。瞬間、アレンの脳内から光の速さで魔法の神経パルスが全身を駆け巡る。

「子どもでしたが、お前たちにはいい余興だろう」

動きの止まったアレンの前後左右から、怒り狂ったオークが飛びかかってくる。

「Ein Teufelsschwert “Eine Visi
on”」（魔剣“幻影”）

オークたちの爪がアレンの身体をすり抜ける。アレンは残像を残してその場から消え去ってしまったのだ。直後、周囲のオークたちが一気に四散していく。頭、腕、上半身…… ありとあらゆるオークの四肢が宙に舞う。

アレンは瞬間的に神経の伝達速度を上げて、目に見えないほどのスピードでオークたちを斬り裂いていつているのだ。

金色の幻影がオークたちの間をすり抜けていく。数十秒後、アレンは数百メートルほど先で姿を現す。同時に身体の一部を失った無数のオークたちが、ゆっくりと崩れ落ちていく。

「またつまらぬものを…… む、この先を忘れてしまった。後でガ

ルドに確認しておかねば」

アレンは気難しそうに眉根を寄せると、血糊を振り払って音高く魔剣グラムを鞘に収める。背後にはオークの死屍が累々と横たわっているだけだった。

「す、すげえ……」

ノワールの村人たちは、村の周囲で繰り広げられる召喚された勇者たちの戦いに言葉を失う。彼らはもはや“強い”というレベルを遙かに凌駕していた。それは普通の人間が努力や才能で目指せるレベルではない。まさに特異な存在であることをまざまざと見せつけられたのである。

あれほどいたオークたちの大集団が数十分後には村の正面では地面を埋め尽くすナイトに変わり、ガルドのいた東側では一体残らず消え去り、西側では無数の無言の肉塊と化していた。

呆然と立ちすくむ村人たちの前に、三人の召喚された勇者が歩いてくる。まるでハイキング帰りのように何気なく、おしゃべりしながら。

「む、そうか。『またつまらぬものを斬ってしまった』だな、わかった」

「使いどころって難しいよねえ……　　ねえ、じゃあ『やらせはせん！　やらせはせん！』は？」

「それは……」

途端に飛鳥たちは村人たちに囲まれる。みな目に涙を浮かべ、感

謝の言葉を述べている。そんな中、一人のたくましい男が前に進み出る。自警団長カイだ。

「自警団長として勇者様方に感謝を申し上げます。我が村を救ってくださいまして、本当にありがとうございます」

差し出された手をガルドが代表して握り返す。その瞬間周囲の村人たちから歓声が湧き起こる。気がつけば家々から、年寄りや子どもたちも走り出てくる。

飛鳥はようやく心から自分たちの選択が間違ってたのだと安堵する。東街道に來なければ、この人たちは皆殺しに遭っていたのだ。同じアイリス人の手によって。

泣きながら抱きついてくる村人たちに押し合いへし合いされながら、飛鳥は空を見上げる。目の前には雄大な山脈が空を覆うようにそそり立っている。

ローレンツ山脈…… その先には三度訪れるファンタジアが広がっている。そこではこれまで以上に厳しい戦いが待っているはずであった。

周囲の防壁の補修作業とオークたちの死体の処理、家々の窓や入り口に打ち付けられた板を剥がす作業など、夕暮れ時のノワールの村には活気と喧噪が入り乱れている。家々の竈には炊飯の火が点され、美味しそうな匂いが漂い始めている。そんな中飛鳥たちは早々に旅立とうとしていた。

「どうしても立ち会えないのですか？」

胸の前で手を組んだエレナが、寂しそうな顔で飛鳥たちを見ている。その肩をカイがしっかりと抱きしめている。

「エレナ、無理を言っではいけない。彼らには重い使命がある。俺たちなんかに想像もできないような重い使命がな」

「エレナさんすみません、せつかくの結婚式なのに……」

非常に簡素なものではあるが、明日カイとエレナの結婚式が行われる。伝説の召喚された勇者たちに参列してほしいというエレナの気持ちはよくわかるが、ファンタジアの情勢は刻一刻と悪化している。

カイたちがずっと幸せに暮らしていくためにも、一日も早くファンタジアへ行かなければならない。

それにカイたちはモンスター化の事実知らない。モンスター化していたとはいえ、飛鳥たちはカイたちと同じアイリス人を虐殺したのだ。飛鳥は自分たちに、カイたちアイリス人を祝福できる資格はないと思っていた。

「いいえ、無理を言ってしまったてすみません。あの…… エマは無事だったんでしょうか」

エレナはそれ以上誘うことはせず、話題を変える。飛鳥は微笑みながらしっかりとうなづく。

「うん、エマさんが来てくれなかったら、こっちに来ることはなかったと思います。だからエマさんに会ったら、ぜひお礼を言っておいてください」

「はい」

エマは傷だらけになってエスターまでたどり着いた。エマがこの村を出立した頃は、翼竜などもまだたくさんいただろう。あれだけのモンスターの各村に危急を知らせながらエスターまで行ったのは、驚嘆に値する。さすが薔薇十字隊のメンバーだと思う。

「じゃ、さよなら…… ん？」

村の方で何かざわめきが起こっている。飛鳥たちはまたモンスターが生き残っていたのかと身構えるが、どうやらそうではないらしい。

「おい、あれ見ろよ！」

ガルドが北の空を指さす。無数の金色の光がまるで流星のように、暮れなずむ濃紺の空に出現し始めている。それは確かにこちらへ向かって飛んで来ているようであった。

137話：ニンファドールの死

「そろそろここに来とる頃やと思ったで」

光の正体はフェアリーたちだった。

「や〜ん、久しぶりかわいい！」

飛鳥が手近なところに浮いていた小さいティディベアを、むんずと掴んで抱き寄せる。

「むがつ！ や、やめい、そんな趣味あらへんって言ったやろ！」

それはエスターで作戦会議をしていた時に飛鳥が抱きしめて殺しそうになった、女の子のフェアリーだった。

「いよいよ出発か」

ガルドが複雑な表情で、飛び交うフェアリーたちを見上げている。フェンドルフィンを救うための死出の旅。フェアリーたちの命の力。ウントダウンはもう始まっているのだ。

「アレンさん！」

フェアリーたちの間からドレス姿の見知った姿が降りてくる。

「エマ！」

フェアリーたちの幻想的な姿に呆然としていたエレナが、明るい

声を上げる。エマはエレナの前に着地するとひしと抱き合う。

「無事だったのね、よかった。アスカさんたちに助けてもらったの？」

「ええ、みんなすごかったわ」

エマはエレナから離れると、アスカたちに深々とお辞儀する。

「エレナたちを救ってくださって、ありがとうございました」

笑顔で髪を掻き上げるエマに、飛鳥は苦笑で返す。

「でも他の村はダメだったよ」

「いいんです！」

思いの外強い口調が返ってきて、飛鳥は驚いて身を引く。エマは真剣な顔で飛鳥をまっすぐと見つめている。薄暗い中周囲を飛び交うフェアリーたちの姿は、夏の夜の蛍のようでも幻想的だ。

「アスカさんたちは、私たちのために貴重な時間を遣ってくださいました。後は私たちで何とかします。だからそんな顔をしないでください」

「エマさん……」

飛鳥は泣きそうになる。セントマリアやヨヘンナといったこれまでの村は救えなかった。間に合わなかったと悔やんでいた飛鳥にとって、エマにそう言ってもらえるとせめてもの救いになる。

「アスカさん、それにアレンさんにガルドさん」

エマは静かに飛鳥の両手を取る。ようやく解放されたフェアリーが「助かったで」とため息をつきながら、夜空へと舞い上がる。エマの手は冷たく震えていた。形の良い唇は少し震えており、目には涙の粒が盛り上がってきている。

「女王様がお亡くなりになりました」

飛鳥たちに衝撃が走る。わかっていたことだったが、その事実を告げられるとやはり胸が締めつけられるように苦しい。

「ニンファドーラ女王様はお亡くなりになる前に意識を取り戻され、次の女王をライラ様に任命いたしました」

「ライラさん？ あの花十字隊の隊長だった人？」

エマはしつかりとうなずく。ニンファドーラ女王自身も、昔は薔薇十字隊の隊長をしていた。高い魔法能力でもって災害救助などに尽力していたニンファドーラの人望は厚く、女王に就任した時は誰も反対しなかったという。そういう意味ではライラが次の女王になるのは自然な流れと言えた。

「私たちはここから立ち直っていかなければなりません。悲しむのはいつでもできます。だから……」

エマは振り返ってエレナとカイに笑顔を向ける。

「だから今は二人の幸せを心から祝福するために、ここへ来ました」
「エマ……」

エレナとエマはまた抱き合って、お互いに肩を震わせる。そんな二人を見ながら、飛鳥も涙を一筋流す。アイリスはここからまた始

まる。またいつモンスター軍が攻めて来るかわからないのだ。そのためにも戦いがなく平和だった“神の国”は変わらなければならぬ。

「じゃ、アタシたちは行くね。エレナさんカイさん、本当に結婚おめでとうございます。そしてエマさん、ライラさん…… いや、ライラ女王様によりしく伝えてください。アタシたちは絶対、ファンタジアを救いますって」

「ええ、もちろんです。ありがとうございます、お氣をつけて！」

エマとエレナは手を取り合って飛鳥たちに手を振っている。カイも力強くうなずいている。別れの余韻に浸って飛鳥は気づかなかった。

ガルドたち他のみんなの様子がおかしいことに。

ローレンツ山脈の夜はとても静かだ。

以前飛鳥が山越えた時は、ニンファドーラによって寒気の障壁が築かれていた。しかし今は寒気も消え、植物もない岩場がごろごろしているだけだ。虫の鳴き声さえしない山の夜は寂しく冷え冷えしていたが、それでいて落ち着いた雰囲気を感じ出している。

「フェアリーさんたち、無事にフェンドルフィンにたどり着けるといいねえ」

食後のコーヒーを飲みながら、飛鳥が明るい声でしゃべっている。岩場の静けさの中に、飛鳥の声だけが響いている。

周囲にモンスターがいないことを確認しているため、ガルドが森で拾っておいた薪に火をつけて暖を取っている。三人と一匹の顔はオレンジ色に染まり、飛鳥以外の目はじっと焚き火に注がれている。

「フェアリーさんたちって蛭みたいだね。こうきらきらって光って。一匹くらい連れてくればよかった」

飛鳥はいつになく饒舌だ。しかしガルドもアレンもスピニッチも、じっと焚き火を見つめたまましゃべらない。ノワールの村を出てから、飛鳥以外みんなずっとこうだった。

「あ、そう言えばフェアリーさんたちって、エレナさんたちアイリスの人にはどんな姿に見えるんだろう。失敗した、聞いてくればよかった」

「アス力」

重々しい声が飛鳥の止めどないおしゃべりを遮る。アレンだった。飛鳥はみんなの様子がおかしいことには気づいていた。それは自分と同じく、ニンファドーラ女王が死んでしまった悲しみのためだと思っていた。だからこそその雰囲気少しでも盛り上げようと、一人で明るく振る舞っていたのだ。

しかしどうやらそうではないらしい。アレンの美しい顔が焚き火の光に揺らめいて、まるで泣いているように見える。アレンの隣にいるガルドも飛鳥の隣に佇むスピニッチも、真剣な表情でアレンを見つめている。

「今から話すことをよく聞いておいてほしい」

アレンはゆっくりと、そして静かに語り始めた。

138話：エリーゼのために

「私はドイツのニルンベルクに住んでいた。城壁のある落ち着いた街だ」

アレンが電気工事士をしていたということは以前にも聞いた。

「私には妹が一人いる。両親は十年前にアメリカで死んだ。父は証券関係のビジネスマンをしていた。母は国際的な服飾デザイナーで、ちょうど出張が重なった父について行ってあの事件に巻き込まれた」
「あの事件って？」

飛鳥はアレンに聞き返すが、その答えはガルドからもたらされた。

「九・一一世界同時多発テロ…… お前の両親はあの時、貿易センタービルにいたのか」

アレンはガルドを見ながら静かにうなづく。

「ニュースを観た時、私は信じられなかったよ。まさかあそこに両親がいるなんて」

アレンの黄金の前髪が夜風に揺れる。あの事件は飛鳥も覚えている。小学校に入学したで、家族は温かいものだと思っていなかった頃だ。入学式に校門の前で、親子三人で撮った写真は今も大切にアルバムに挟んである。

「私と妹は突然二人きりになってしまった。ギムナジウムを出て大学が決まっていた私は、進学を諦め親戚の伝を伝えて電気工事士の

仕事に就いた。学生時代、唯一取得していた資格がそれしかなかったからな」

「どうして？ ドイツのことはよくわかんないけど、そういう時って奨学金とかってあるんじゃないの？」

「妹が不治の病に冒されていたんだ」

飛鳥はガルドを見る。ガルドの母親も同じだからだ。

ガルドはそんな飛鳥の視線に気づき、焚き火に視線を落として鼻で笑う。

「俺の母親は、金さえあれば治る病気だ」

ガルドはデルピエロ王と、そういう契約で召喚された勇者になった。

「妹の名はエリーゼ。年はアスカと同じ十七歳だ」

「え、ホント？」

アレンはノワール村を出てから初めて、薄く微笑む。

「ああ、アスカの年を聞いた時は驚いた。まさか妹と同じ年とは。もう会えないだろうと思っていただけに、妹と重ね合わせてしまった」

「えへえ、アタシ妹さんに似てる？」

「いや、全然」

「がくっ！」

大げさに項垂れる飛鳥を見て、アレンは小さく笑う。

「お前なあ、アレンを見りゃわかるだろ？ きつと金髪碧眼のお姫

様みたいにきれいな妹だぞ」

「むう、どうせアタシは野暮ったいよ！」

「話がズレてるにゃ」

いつもの言い合いに発展しそうな雰囲気、飛鳥とガルドを、スピニッチが諫める。

「あ、ごめん。続けて」

アレンはうなずいて、また焚き火に視線を戻す。

「エリーゼは白血病で、まともに学校にも通えない状態だった。だから私は治療費と手術費用を稼ぐために働いた。そんな時だ、ニンファドーラ女王が現れたのは」

それは霧の深い夕方だった。仕事で疲れた重い身体を引き摺って帰宅しようとしたアレンの前へ、幻想的な美しい女性が現れた。それがアイリスの女王ニンファドーラだった。

彼女はファンタジアの危機を説き、いつしよに来てもらえるよう丁寧にしかし強い意志でもって懇願した。

当然アレンは断った。重い病気の妹を置いて、そんなわけのわからない世界のためにいなくなるわけにはいかなかったからだ。

しかしニンファドーラはなんと、報酬の先払いを提案した。つまりエリーゼの病気の根治とその後の生活の保障である。

アレンは、もしそれが本当なら行ってもいいと女王に約束した。そしてそれは確実に履行された。エリーゼの白血病は見事に治り、アレンの口座にはゼロの並ぶとんでもない数字のお金が振り込まれていた。

「召喚される前、エリーゼは体力回復のためのリハビリをがんばっ

ていた。私はエリーゼに、両親の遺体を探しにアメリカへ行くと
言ってきた」

飛鳥はアレンを見つめながら何も言えずにいた。アレンは元気に
走り回る同じ年のアスルを見て、どんな想いだっただろう。もし
かしたら本当に、妹と重ね合わせて見ていたのかもしれない。

アレンは何があっても現実世界へ戻らなければならない。もしア
レンが死んでしまったら、エリーゼは一人ぼっちになってしまうの
だ。

「もし私が死んだら」

飛鳥は心臓が大きく波打つを感じる。まさにそのことを考えて
しまっていたからだ。

「もし私が死んだら、エリーゼには私はアメリカで死んだことにし
ておいてほしい。そしてお前の幸せをずっと願っていると…… 伝
えてほしい」

「なに言ってるのよ!」

飛鳥は思わず立ち上がる。飛鳥の声が、夜のローレンツ山脈にこ
だまして響いていく。

「そんな遺言のようなこと言わないでよ! みんないつしよに帰ろ
うよ! そして妹さんに『ただいま』を言わなきゃ!」

アレンは驚いて飛鳥を見上げている。飛鳥は涙を浮かべ、しっか
りとした目でアレンを見つめている。肩で息をついている飛鳥を見
つめ、アレンはふっと肩の力を抜く。

「そうだな、『おかえり』を言ってもらわなければな」
「そうだよ！」

伏し目がちに自嘲して笑うアレンに、飛鳥は思いの丈をぶつける。
アレンにとってそれはとても心地よく、頼もしいものだった。

「おいアレン、お、お前……」
「ガルド」

何か言いかけたガルドをスピニツチが鋭く止める。細い目が夜の闇に緑色の線となって光っている。

「アレンが自分で決めたことにや。ミーたちはにゃんにも口出しできにゃいにや」

「んあ、ま、まあな……」

浮きかけた腰を下ろし、ガルドはちらと飛鳥を見遣る。飛鳥はわけがわからずガルドとスピニツチを交互に見る。

「アスカ」

スピニツチが真剣な目を飛鳥へ向ける。

「アレンによ今によ話、ちゃんと聞いたかにや？」

「う、うん。ちゃんと聞いたよ」

「じゃあ、絶対忘れにゃいでファンタジアを救うにや。アレンはそれが言いたかったにや」

飛鳥は大きく、しっかりとうなずく。

「もっちろん！ アタシがんばって“創造主”をぶっ倒す！ そんなでみんないっしょに帰ろうね！」

飛鳥は力こぶを作るマネをして上腕を叩く。

「ああ」

アレンはボディービルダーのようなポーズを次々と取る飛鳥を眩しそうに見上げ、前髪を掻き上げる。

ガルドだけは複雑な表情で、そんなアレンを見つめていた。

139話：会いたかった！

北にあるアイリスを上にとすると、肥大した逆三角形の形になっているファンタジア国。その右の斜辺、つまり東の海岸線に沿って南へ伸びる街道は“ A三街道 ”と呼ばれる。

この“ A三街道 ”は、ファンタジア北西部最大の街ガザから伸びる“ C六街道 ”、通称“ 白の道 ”の終着点でもある“ ズサ ”という町が起点となっている。終着点は商業都市ドルメンだ。

アイリスとフェンドルフィンを結ぶ幹線道で、南北の総延長は一千里メートルにも及ぶファンタジアでも一番長い街道である。

街道沿いには町や村が多く、伝説の残る洞窟や遺跡なども点在する。南に向かうと左手には黒い“ 虚無の海 ”が不気味に横たわっているが、右手には広々とした草原や牧草地が広がって旅人の気持ちを和ませる。

ところどころにはそこそこ高い山もあり、平時であれば旅をするにはとてもよい景観の道だろう。

ズサは人口四千人ほどの中規模の町で、ガザと同じく交通の要衝として発展してきた。アイリスへ向かう商人やユグドラシルの巡礼者は北へ。ガザや遠くイスペリアへ向かう行商人は、西の白の道へと勢いよく馬車で飛び出して行く。南は言うまでもなく商業都市ドルメンへの貿易や物資の輸送のため、荷物を満載した馬車が重々しい車輪の音を響かせていく。

旅人や商人はここで旅の疲れを癒し、次なる目的地へと旅立って行く。ズサは別名“ 出会いと別れの町 ”とも呼ばれていた。

飛鳥たちはローレンツ山脈を越えてこのズサの町近くまで来ていた。ノワールの村を出てから六日が経っている。途中野生のモンスターに何度か遭遇したが、問題なく撃退してきた。

「あとちよつとでズサの町に着くにゃ」

ローレンツ山脈の裾野に広がる森を抜けると、視界が急に開けてくる。ローレンツの寒々しい岩肌の露出した山道や自然の霧が立ち込める森をずっと歩いて来ただけに、若草色の牧草地は飛鳥たちの目と心を和ませる。

一瞬ここが、モンスターの国となってしまったファンタジアだということのを忘れそうになってしまう。

「こつちの方は俺も詳しくは知らねえけど、ズサって“出会いと別れの町”って言われてたんだろ？」

ガルドはデルピエロ王やグインから、ファンタジアに関して多くのことを学んでいた。しかしイスペリアとは正反対の位置にあるファンタジア東部の地理に関しては、もともと来るつもりもなかったことからそれほど詳しくはないようだ。

スピニッチはガルドの言葉にうなずきつつ、細い目をさらに細めて長いヒゲをひくつかせる。

「他にも“癒しによ町”っても言われるにゃ」
「癒しの町？」

道端で見つけた長い木の枝でスピニッチをつつこうとしていた飛鳥は、思わず聞き返してしまう。

スピニッチは飛鳥をひと睨みして、後ろを歩くアレンの元へと飛んでいく。

「ズサは温泉でも有名な町にゃ」
「温泉！」

飛鳥は両手を胸の前で祈るように組み、目をきらきら輝かせる。
頬はほんのり桃色に染まっている。

「まさかモンスターが湯治をするわけないから、隙を見てアタシたちも癒されようよ」

「トウジってなんだ？」

アレンが不思議そうな顔で悶え喜ぶ飛鳥に問いかける。

「温泉で癒されることよん。ニッポンの良き文化だよ！」

飛鳥の目には少女マンガのように大きな星がきらめいている。確かに、きちんと湯船に浸かってお風呂に入れるのはガザ以来だ。フエアリーテイルでは温水ではあったものの、シャワーしかなかったのだ。

「ちょっと違うぞ。温泉でリウマチとか病気を治療することだろ？」

「あり、そだっけ？」

「アメリカ人のガルドの方がよっぽど詳しいにゃ」

「うるさいなあ」

飛鳥はスピニッチを睨み返す。スピニッチはいつも飛鳥に先ほどのようないたずらをされているので、ここぞとばかり揚げ足を取る。

「バカ学生のアスカらしいにゃ」

「うがぁ！」

飛鳥は両手を振り回してスピニッチを追いかける。

平和な時であれば、牛やヤギ、羊などがのんびりと草を食んでい

ることだろう。何もいない牧草地は若草色の海のようにうねり、その先に建物が見え始める。とんがり屋根や色鮮やかな屋根が薄い雲が横切る青空に映え、ヨーロッパの高原の街を思わせる。

じゃれ合う飛鳥とスピニツチに目を細めていたアレンは、その向こうから来る人影に気づいて眉根にしわを寄せる。

「二人とも、何か来るぞ！」

アレンの鋭い警告で、飛鳥とスピニツチは動きを止める。見ると牧草地の向こうから、小さな人影がこちらへ向かって走って来る。

「モンスター？ ……にしては小せえな」

ガルドはすでに遠距離魔法攻撃態勢に入っている。周囲の風のパワーを集めているようで、両手に緑色の丸い円盤を作り出している。ガルドいわく“ウィンドカッター”だそうだ。

ガルドは数メートル上空に浮かび、飛鳥ほどではないが常人の数十倍はある視力で次第に大きくなってきた小さな人影に目を凝らす。

「ガルド待つて！」

人影をじつと見つめていた飛鳥は、片手を挙げてガルドを制する。その人影はとても美しい金髪の少女だった。陽光が豪華な髪にきらめき、透き通るような白い肌に揺れている。少女は華奢な手足を精一杯動かして、緩やかな傾斜を走ってくる。

「兄さあん！」

人影が手を振りながら美しいソプラノを響かせる。その瞬間、飛鳥とガルドはアレンを見る。アレンの顔色は真っ青になり、小刻み

に震えている。そして愛して止まないその名を呟く。

「エリーゼ……」

果然と立ちすくむアレンの胸へ、この世のものとは思えないほど美しくも愛らしい少女が勢いよく飛び込んだ。

「会いたかった！」

139話：会いたかった！（後書き）

東日本大震災で被災したため更新頻度が大幅に落ちますが、がんばって更新しますので変わらぬご愛顧のほどをお願いいたします。

聖騎士

140話：邂逅

言葉をなくして呆然と歩く飛鳥とガルドの前では、腕を組んだワグナー兄妹が歩いている。と言ってもエリーゼがアレンの腕にしがみついているだけなのだが。

飛鳥の前では溢れんばかりの陽光を受けたエリーゼの豪華な金髪が、彼女の動きに合わせて揺れている。濃いエンジ色のロングスカートとフリルのついたエプロンの裾が、飛び跳ねるように歩くエリーゼといっしょにダンスを踊るように楽しげに翻る。

すると突然エリーゼが振り返り、後ろ手で歩きながら飛鳥たちに満面の笑顔を向ける。

「あなたが藤堂飛鳥さんですよね？」

エリーゼはまさにアレンの妹らしく、その顔はそっくりだ。ただアレンが男性的な造形美であるのと対照的に、エリーゼは少女らしい儂げな美しさがある。身長は飛鳥より若干高めであることから、確実に百六十センチメートル以上はあるだろう。しかし体重は間違いなく飛鳥より軽いだろうということは、その細身の身体からも容易に想像がつく。

触れるどころかまともに目を合わせるのさえ憚られるような可憐な美貌に、飛鳥は狼狽えながら視線を泳がす。

「う、うん、そうだけど…… な、なんで知ってたの？ アタシたち初めて会ったんだよね？」

「うふふ！ 知ってますよ。そちらがガルド＝ロバートさん。二十六歳でアメリカ、サンフランシスコ生まれ。スラムに病気のお母さんを残してこの世界に召喚された。」

「おいおい、ファンタジアには個人情報保護^{プライバシー}って考えはないのかよ。」

俺の情報だだ漏れじゃねえかよ」

ガルドがやれやれといった調子で“お手上げ”をする。

エリーゼは透き通るような白い肌をほんのりと桃色に染め、アクアマリンのように澄んだ碧い瞳を細める。

「どうして知ってるかっていうのは、今は内緒にしておきます。すぐにわかりますから」

緩やかに傾斜している牧草地に沿ってしっかりと踏み固められた道が、ズサの町へと伸びている。次第にその全容が見えてきたズサの町は、一見すると特に荒廃しているようには見えなかった。

「あれがわたしの住んでいるズサの町です。あそこでみなさんに会っていたきたい人がいるんです」

「会ってもらいたい人？」

首を捻る飛鳥に、エリーゼは楽しげに微笑む。美しくも大人びたその微笑みに、飛鳥はやはりとても同年には見えないと素直に感心する。

「はい、そうすればどうしてわたしがあなたたちのことを知っているのか、わかっていただけたと思います」

「エリーゼ」

エリーゼの言葉が切れるのを待っていたかのように、アレンが感情を押し殺した低い声を出す。若干震えているように感じるのは、アレンがまだエリーゼに再会したショックから完全に立ち直っていない証拠だろう。

「私にはまだ信じられない。なぜお前がこの世界にいるのか。どうして私たちがここに来るのがわかったのか。そしてなぜ、このファンタジアにおいてあれほど大きな町が無事でいるのか。常識的に考えれば、これはモンスター軍の罠だと考えるのが普通だろう」

“ 虚無の海 ” から吹き上げてくる冷やかな風が、牧草を揺らせて通り過ぎる。

顔にかかった髪をかき上げながら、飛鳥は真剣な目でアレンの言葉にうなずく。見るとガルドの頭の横で、スピニッチも細い目をさらに細めて難しい顔でうなずいている。

「召喚転移魔法が使えるによは、こによ世界でも三人だけにや。フエンドルフィンによクウエンディ女王、イスペリアによデルピエロ王、そしてアイリスによ女王を受け継いだライラ女王。あんたがほんもによアレンによ妹だっていうにやら、その誰かに召喚されたっていうことにや」

「うふふ」

エリーゼは肩を竦めて、兄と羽の生えた黒猫に意地悪そうに微笑む。

「それもすぐにわかります」

アレンとスピニッチは憮然としたまま、小鳥のように駆けていくエリーゼの後ろ姿を黙って見送る。

「しかしあれ明らかにアルプスの少女だよなあ」

町の入り口へ向かって歩き出しながら、ガルドが後頭部で両手を組んで軽口を叩く。元来「なるようになる」という考え方のガルド

は、あまり細かいことに煩わされない。

すでにエリーゼの姿は、町の中へ溶け込んでしまっただけで、見えなくなっている。

「いや歩けなかったけど、最終回で立てた娘の方が」

「アンタどんだけアニメオタクなのよ」

飛鳥は吹き出しながらも、気を引き締める。

エリーゼは少なくともアンデットではない。普通に思考し会話することが出来るからだ。すると考えられるのは、イデアの町で襲われたサキュバスの可能性だ。

しかしあの時は寝込みを襲われた。淫魔は人の夢の中に入り込んで籠絡しようとする。今自分たちが眠っていて、これが夢ならばその可能性も否定できない。しかし現実には飛鳥たちはしっかりと意識があつて目も覚めている。

とにかく常に警戒心を怠ってはならない。ここはモンスターに占領された国ファンタジアなのだから。

「兄さあん！」

町の周囲には、石でできた市壁が巡らされている。さほど高くはないが、モンスターたちに攻め込まれた時の足止めくらいには使えるだろう。

町の入り口にはその市壁の一部が途切れ、大きな門柱に木製の扉がついている。高さ五メートルほどの扉だが、今は大きく左右に開け放たれている。

そこに大きく手を振るエリーゼと、薄緑色のロングドレスを着た長身の女性が立っている。エリーゼよりもさらに高い身長。目にも鮮やかなストレートの長い金髪。

その全身から醸し出す柔らかな波動は、飛鳥にとって泣きたくな

るほど懐かしく嬉しいものだった。

141話：そしてまた邂逅

「クウエンディ女王！」

飛鳥は思わず走り出す。後ろでスピニッチが何か叫んでいるが、飛鳥にとっては気にしているところではない。クウエンディ女王は飛鳥をこの世界へ召喚した張本人ではあるが、それ以上によりき理解者でもあり精神的な支えでもあった。

クウエンディ女王は別れた時と同じ春風のような温かい微笑を湛え、両手を広げて飛鳥を迎え入れる。飛鳥が勢いよく飛びついたため二、三步よろめくが、それでもしっかりと抱きしめる。

「アスカさん、よくここまでがんばりましたね」

飛鳥の頭に頬ずりをしながら、クウエンディ女王は涙を流す。傍らではエリーゼが満面の笑みを浮かべて、その様子を見ている。

「女王様」

ようやくたどり着いたスピニッチが、神妙な顔でお辞儀する。クウエンディは飛鳥を胸にしっかりと抱いたまま、スピニッチへも微笑みかける。

「スピニッチご苦労様でした。よくここまでアスカについてくれましたね」

「は、はいにや……」

スピニッチは戸惑っていた。飛鳥ほど手放して再会を喜べる気にはなれなかったからだ。

「じよ、女王様、こんにやとこにいてフェンドルフィンは大丈夫にやんですか」

「ふふ」

しゃくり上げる飛鳥を優しく身体から離しながら、クウエンディはスピニツチと同じく神妙な顔で立っているガルドとアレンに優雅に会釈する。

「あなた方がイスペリアの勇者とアイリスの勇者ですね。初めまして、フェンドルフィンの女王クウエンディです。この度は辛い戦いご苦労様でした」

「い、いえ……」

エリーゼが未成熟な儚い美しさなら、クウエンディ女王は成熟した存在感のある美貌だ。ガルドもアレンも、ニンファドーラとは違った力強さと美しさを持った一国の為政者に、完全に圧倒されてしまっている。

厳しい顔で見つめているアレンと、狼狽えながら返事をするガルドへ優雅に微笑み返すと、クウエンディはまたスピニツチへ向き直る。

「フェンドルフィンは救われました。フェアリーたちの支援によってレッドドラゴンを滅ぼし、平和を取り戻したのです」

「ええっ？」

飛鳥とガルドは同時に声を上げ、アレンとスピニツチは目を見開く。エリーゼだけは相変わらず満面の笑みだ。

「だから兄さんたちの旅はここで終わり！ やつとこうして会えた

んですもの。戦いのことは忘れて再会を喜び合いましょう！」

両手を広げてエリーゼは目を輝かせる。

「ちょ、ちょっと待つにゃ！ フェンドルフィンがよくても、イスペリアやファンタジアそによもにはまだ平和になつてないにゃ！」

スピニツチは狼狽えながら、踊るように回転するエリーゼに訴えかける。しかしそれもクウエンディによって遮られる。

「大丈夫です。イスペリアはブラックドラゴンを駆逐し、今は首都ファンタジアへ迫る勢いです。我が軍もオーガス、レイズナー二人の魔法剣士を先頭に進軍を開始しています。私は一足先にあなたたちをここまで出迎えに来たのです」

ガルドの喉が大きく音を立てる。飛鳥も呆然とクウエンディ女王の穏やかな微笑みを見上げている。
終わつたのだ、自分たちの旅は。

帰れるのだ、現実世界へ。

飛鳥はクウエンディ女王のいい香りがする胸へ顔を埋め、大きく息を吐く。

死を覚悟してここまで来ただけに、このクウエンディ女王からの知らせに飛鳥は心から安堵した。

「さあ、こんなところにいるのも休めません。救国の英雄たるあなたたちには、それ相応の宿を用意しています。そしてそこでもう一人、あなた方を待っている方がいらっしゃいますよ」

「ええっ、まだ誰がいるの？」

クウエンディと手をつないで歩きながら、飛鳥は明るい声を出す。

続くアレンの右腕には、エリーゼがスキップしながらくつついている。

「なんだかなあ」と後頭部を掻きながら歩くガルドの後には、難しい顔で佇むスピニッチだけが残されていた。

「進軍……か」

スピニッチのそのつぶやきは、町の喧噪に紛れて誰の耳にも届くことはなかった。

「ガルド！」

ホテルかと思間違うほど立派な建物は、ズサ一番の高級宿屋であった。白い壁には黒檀の柱がクロスして組まれており、まさに北歐風の印象を与える。

三階建ての一番上の角部屋へ案内された飛鳥たちは、そこでまたもや意外な人物に会うこととなった。

「母さん！」

部屋の奥にある大きなベッドに、やつれた顔の中年女性が上半身を起こして微笑んでいる。色素の薄いブルーの瞳は、ガルドそっくりだ。

ガルドはベッドの脇へひざまずき、母の手を取る。筋張ったその細い手は、ガルドの大きな手にすっぽりと包まれてしまう。

「ガルド、お前には辛い思いをさせてしまつてすまなかつたね。このクウエンディ女王様が、あたしをここに連れて来てくれたんだよ」

「母さん病気は？ 身体はもう大丈夫なのかよ」

ガルドの母親はにっこりと微笑み、口元のしわを深める。やはり病の影響なのか、それほど年老いているわけではないはずなのに、老人のように見える。乾燥したブロンドの髪が、かざりと揺れる。

「クウエンディ女王様の魔法はすごいねえ。あたしの病気なんかすぐに治ってしまったよ。あんなに苦しかった胸も楽になって、もうちよっとすれば歩けるようになるかもしれないって」

「母さん！」

ガルドは白い毛布に顔を埋めて泣き崩れる。いつも明るく不敵なガルドのそんな姿を見て、飛鳥も堪えきれず涙をこぼす。

「ガルドよかったね」

指先で涙を拭い、飛鳥は感動的な親子の再会を喜んでいる。クウエンディはそんな飛鳥の肩を優しく抱き寄せる。

「さあ、まずはズサ名物の温泉にでも入って来てください。旅の疲れも吹き飛びますよ。その間美味しい夕食を準備させておきます」

「兄さん、いつしよに入りましょう！ ここは混浴なのよ！」

「ああ…… ん、なんだと？」

両手を引かれて強引に連れ去られるアレンを見ながら、飛鳥とクウエンディは声を上げて笑った。

142話：ガールズトーク

町中には、一回の入浴料がウォームナイトでお釣りが来るぐらいの大衆的な共同浴場が何カ所があるらしい。源泉は一カ所らしいが数多くの宿泊施設や共同浴場があり、裕福な邸宅などでは個人的にその権利を買ってお湯を引いている家もあるらしい。

飛鳥たちの旅館は言うまでもなく温泉を引いており、男女別の大浴場だけでなく家族風呂のような混浴風呂もあった。通常の沸かし湯の浴場もあるらしいが、ズサに来たからには一度は温泉へ入るのが“通”だということで、ほとんどの旅人は温泉の方に好んで入るようだ。

エリーゼはどうしても兄と入りたかったらしく、事前にクウエンディ女王が予約していた旅館で一番大きく豪華な家族風呂が飛鳥たちのために空けてあった。

「いい気持ちねえ！」

家族風呂とは思えないほど大きな岩造りの浴槽で、飛鳥は手足を思いつきり伸ばす。若干緑がかったお湯は鉱泉らしく、硫黄の香りが鼻につく。

「東洋の方のエスニカルな黒髪って憧れます」

飛鳥から少し離れた岩の上では、白い水着を着たエリーゼが白い肌を桃色に火照らせて湯冷まししている。

アレンがどうしてもいっしょに入りたければ水着を着ると、エリーゼに必死でお願いしたのだ。

エリーゼは口を尖らせて不満を述べていたがさすがの飛鳥もアレンの前で全裸になることは憚られ、それならとクウエンディ女王が

水着を用意してくれたのだ。

言うまでもなく飛鳥は、Gジャンとブーツを脱いだだけのスク水姿だ。

「そっかなあ…… だいぶ色抜けちゃったんだよね」

飛鳥はだいぶ伸びた前髪を指先でもてあそぶ。顎までつかった飛鳥の前髪から、滴が数滴したたり落ちる。

現実世界にいた時はためにカラーリングしていたライトブラウンの髪も、激しい戦いと手入れなどする余裕もない旅の連続のためにすっかりと色褪せてしまっている。かといって黒かといえばそうではなく、くすんだ茶色という感じだ。それでもエリーゼには美しい黒髪と感ぜられるようで、にこにこしながら飛鳥を見ている。

エリーゼは長い髪を後ろでダンゴにまとめ上げてあり、白いうなじをむき出しにしている。ほんのり桃色に染まったうなじは大人っぽく、やはり飛鳥には同い年には思えない。

「ね、エリーゼさん」

露天風呂のため、湯気の向こうに星空が見える。平和な星空だ。

この世界に召喚されてから今まで、飛鳥はこんなゆったりとした気持ちで星空を見上げたことはなかった。常に何かしらの不安に苛まれ、その向こうにあるものに怒り、怯え、絶望していたように思う。

しかし今飛鳥の真上に広がる満天の星空は、何も悩みもなかった子どもの頃に見上げた星空と同じだった。

「なんですか？」

エリーゼは寒くなって来たのか、お湯に入りながら飛鳥の方へ歩

いて来る。真っ白な二の腕や首筋が、湯氣の向こうから近づいて来る。

「聞きづらいこと聞いちゃっていいかな……」

「なんですか？」

飛鳥より身体一つ分空けて隣に座ったエリーゼは、海よりも碧い大きな瞳を飛鳥へ向けてくる。無邪気なその笑顔はやはりアレンそっくりだ。

「その……アレンに、お兄さんに聞いちゃったんだけど、びよ、病気のリハビリって大丈夫だったの？何かその、リハビリしてたって思えないほど元気に走り回ってたし」

「ああ」

エリーゼはほんのり汗ばんだ顔に笑顔を浮かべ、湯氣の向こうの星空を見上げる。

「クウエンディ女王様に治していただいたんです」

「そっか、ごめんね変なこと聞いちゃって」

「うふふ」

エリーゼは肩を竦めて楽しそうに笑う。そうするとやはり年相応に幼さが感じられた。

「わたしもアスカさんに聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「なに？」

エリーゼの目は細められ、まるでいたずらを仕掛けた子どものよ

うだ。

「アスカさんはガルドさんと兄と、どちらが好きなんですか？」

「ぶっ！」

思わず飛鳥はお湯を口に吸い込んでしまい、吹き出してしまう。

ガルドとはキスまでしているし、現実世界に戻ったらデートしようとして約束している仲だ。好きかと聞かれれば間違いなく好きだと答えられる。

しかしアレンはどうか。

確かにアレンは絶世の美男子だし逞しいし、生活力もあるだろう。男性としての包容力に溢れ、きつと浮気など絶対にしない。気難しげなところもあるが、裏を返せばかわいらしさにもつながる。まさに“武士”といった感じなのだ。

現代日本にはほとんど生息しなくなってしまった硬派な日本男児であり、それは男性としてとても魅力的に思える。

そして何より妹のために自分の命や人生を投げうってこの世界に來たアレンの心意気には、実際飛鳥はとても感動した。

ガルドへの恋愛感情が大きく咲いた花ならば、アレンへの恋心はまだ蕾と言える。どちらがどうとは、飛鳥にははっきり言えない。簡単に言ってしまうと、どちらも好きとしか言えないのである。

「エリーゼ、くだらないことでアスカを困らせるな」

湯気の向こうから逞しい肉体のアレンが現れる。腰に大きなタオルを巻いてはいるが、飛鳥たちのように水着は着ていない。男性用の水着はこの宿屋には置いてなかったのだ。

「だってお兄ちゃん、アスカさんのこと愛してるでしょ？」

「な、お前！」

アレンは見た目にも真っ赤になって慌ててエリーゼの隣へ座る。まるでエリーゼを使って、飛鳥の視界から逃れようとしているかのようだ。

「あ、愛だなどと、そう軽々しく口にする言葉ではない」

「そ、そうだよ、エリーゼさん。そ、そんなこと言ったらお、お兄ちゃんに失礼でしょ？」

エリーゼの両側では、飛鳥とアレンが赤くなったり青くなったり忙しい。すると湯気の向こうに人影が揺らぎ、また誰か入って来た気配がする。

ガルドは母親に付き添っているため、ガルドでないことは確かだ。

「なんだか楽しそうなお話ですね」

それはクウエンディ女王だった。彼女はなんとタオルさえ身につけない全裸で、芸術的に均整の取れた美しく白い肢体を惜しげもなくさらけ出していた。

142話：ガールズトーク（後書き）

<「ファンタジア」の共通通貨>

ドラゴナイト（赤）（ドラゴンの血）＝約100万円

ユニコナイト（白）（ユニコーンの涙）＝約10万円

マーメイナイト（青）（マーメイドの鱗）＝約1万円

ウォームナイト（黄）（サンドウォームの体液）＝約1000円

グリズナイト（黒）（グリズリーの体毛）＝約100円

カップナイト（銅貨）＝約10円

143話：女王の提案

「ぶっ、じよ、女王様！」

「女王様きれ〜！」

クウエンディは金糸のような長い金髪を後ろ手にまとめて持ち上げ、水色の光を放つ不思議なヒモで縛りながら歩いてくる。その度に豊かな白い乳房が揺れ、湯気が肢体にまとわりつきながら後方へ流れていく。

アレンは呆然として固まっている。今ならゴブリンに攻撃されても防げないだろう。

「アスカさんは二人の男性に好かれているのですか？」

クウエンディがアスカの前で身体を湯に沈め、ほんのり火照ったうなじをさする。金髪碧眼の洋風美女が、こんなにも温泉に似合うなどとは飛鳥には思ってもみなかった。

「ア、アタシは好かれてなんか……」

後半の言葉はぶくぶくと泡の中に消えてしまふ。エリーゼとクウエンディというまさに幼と成の美女が並ぶと、自分などは本当に野暮ったい何の魅力もない女だと思ひ知らされてしまふ。ただでさえ過去のある身だ。比べること自体間違っている。

「わ、私はもう上がる！」

アレンが慌てて立ち上がる。なぜか前屈みになっている。

「兄さん！」

エリーゼが声をかけるも、止まろうとしない。その腕をクウエンデイが捕まえる。

「恥ずかしがらなくてもいいですよ、アレンさん。せっかくですからいっしょに入りましょう」

「い、いや、私は…… 失礼します！」

クウエンデイの手を丁寧に振り払い、アレンは派手に波を立てながら湯気の間こうへ消えてしまった。

「なによ、小さい頃はいつもいっしょに入ってくれてたのに」

「ふふ」

クウエンデイは妖艶に微笑む。

「まだこれからいくらでもいっしょに入る機会がありますよ」

「ふう…… まあそうですね」

「ふふふ」

クウエンデイとエリーゼは意味ありげに微笑みを交わす。その時飛鳥はその意味を深く考えることができなかった。それがはつきりとしたのは、夕食の席であった。

「ファンタジアの平和に」

「乾杯！」

クウエンデイのにこやかな声にエリーゼが元氣よくグラスを掲げる。オレンジ色のキャンドルの灯りが温かい家庭的な雰囲気醸し

出し、広いレストランを幻想的に照らし出している。

宿屋の一階東側スペースは広いレストランになっており、大規模なパーティや結婚披露宴などもできるようになっている。時間的に遅くなってしまったため他の客の姿は見受けられないが、もしかしたらクウェンディが気を遣って貸し切りにしてくれたのかもしれない。

体育館の半分ほどの広いスペースには長方形や丸いテーブルが幾何学的に配置されており、清潔な白いクロスが掛けられてある。

飛鳥たちはその真ん中に、テーブルを二つつなげて食事をしていた。

この地方では名産品だという七面鳥の丸焼きが中央にでんと鎮座し、その周囲には野菜料理や果物が恒星を公転する惑星のように所狭しと並べられている。

各人の好みに応じて白米やパンなども注文でき、アルコール類も一通り頼めるらしい。飛鳥は乾杯のための葡萄酒を一口口に含んだだけで、後はアイスコーヒーを飲んでいる。ガルドは赤ワイン。アレンは温泉での出来事を忘れようとしているかのように、黒ビールを煽っていた。

しばらくおしゃべりをしながら食事していると、ナプキンで口の端を拭ったクウェンディ女王が音もなく立ち上がる。

「それではみなさん、ここで大事なお話があります」

一同は食事の手を止め、女王に視線を向ける。しかしスピニツチだけは口の周りをひと舐めただけで、また秋刀魚の蒲焼きにかぶりついていた。

「みなさんの今後のことです」

「今後のこと？」

給仕らしいメイド服を着た女性が再三勧めてくるワインを断っていた飛鳥が、クウエンディを見上げて思わず問い返す。

今後とはどういう意味だろうか。

「アレンさんにはエリーゼさん」

クウエンディはアレンとその隣に座る、満面の笑顔のエリーゼに微笑みかける。

「ガルドさんにはお母様」

今度はガルドと母親を見る。ガルドの母親は車いすに乗り、ガルドの隣で微笑んでいる。

「そしてアスカさんには私」

クウエンディはすべてを見通すかのような澄んだ瞳で飛鳥を見つめる。クウエンディに見つめられると、飛鳥は心の奥底まで見透かされている気がして狼狽してしまう。彼女の美しい瞳には、ヘドロのように負の感情が沈殿している自分の心の底がどんな風に見えるのか不安になってしまう。

「みなさんはあちらの世界からそれぞれ召喚されました。しかしどうでしょう。あちらの世界を思い返してみてください。戦争、災害、犯罪や面倒くさい人間関係など…… あなた方はこの平和になったファンタジアと、苦難に満ちた希望のないあちらの世界とどちらを魅力的に感じられるでしょうか」

飛鳥にはもうクウエンディの言いたいことがわかった。みな身動きせずじつとクウエンディ女王を見つめている。アレンは困惑した

顔でガルドは確信に満ちた顔で、そして飛鳥は真剣な顔で。

「ファンタジアはこれから今まで以上の楽園となります。苦しみのない地上の楽園ファンタジア…… 私はあなた方に提案します。あちらの世界へは戻らずに、私たちとここでずっと暮らしませんか？」

クウエンディの言葉に、エリーゼとガルドが力強く拍手する。その音が広い室内に大きく響いていた。

144話：スピニッチはかく語りき

「異議ありにゃ！」

鳴り響く拍手の中、甲高いアニメ声が和やかな空気を切り裂く。口の周りと鼻先を油でてからせたスピニッチが、テーブルの上で静かに黒い羽を動かして浮遊している。細い目は引き絞られ、鋭い針のようになっている。

「……なんですか」

微笑を湛えながらも、クウエンディは感情を押し殺した声で問い返す。その口元は笑っていない。

「ファンタジアはまだ平和になっていいにゃいにゃ。それにアスカたちはこによ世界によ住人じやにゃいにゃ。どんにゃにあつちによ世界が苦しくても、戻るによが定めにゃ」

「兄さんたちはもうこつちの世界の人間よ！ あんな…… あんな悲しい世界に戻るくらいなら、ここで幸せに暮らした方がみんなよっぽど幸せよ！」

エリーゼが立ち上がり、ヒステリックに叫ぶ。フランス人形のような整った顔を歪め、まさに噛みつかんばかりの勢いだ。

「それでも戻らにゃくてはにゃらにゃいにゃ」

そんなエリーゼを一瞥するも、スピニッチの細い目はクウエンディを見据えたままだ。

温かいオレンジ色の光で満たされた空間が張りつめていく。飛鳥

はわけもわからずおろおろしてしまう。まさかあのスピニッチがクウェンディ女王に対してこんな強硬に反対意見を述べるなど、思いも寄らない出来事だからだ。

「あなたは何様ですか、スピニッチ。使い魔風情をここに同席させているだけでも感謝すべきなのに、あまつさえ私の提案に率先して反対するなど許し難い反逆行為です」

クウェンディの突き刺すような視線と声音に、スピニッチ以外の全員が固唾を呑む。あの、いつも春風のように温かい雰囲気崩さないクウェンディが怒っている。

「あ、あの、スピニッチ、アタシたちよく考えて結論出すからそんなに熱くならないで。女王様、あの、すみません。アタシたちのためにこんな」

「女王様じゃにやいにや」

場を取り繕うとする飛鳥の言葉を、スピニッチが一刀両断する。

「え？」

全員の視線がクウェンディへ集まり、次いでスピニッチへと戻る。スピニッチの右前足には銀色に光る短剣が握られている。

「ミーはもうとつくに、女王様によ使い魔じゃにやいにや！」

キャンドルの炎が揺らめく。薄明かりの中黒い塊が疾風のようにテーブルの上を横切る。次の瞬間、スピニッチの銀の短剣は、クウェンディの胸の真ん中へ突き刺さっていた。

クウェンディはこの世の者とは思えない叫び声を上げる。短剣の

刺さった場所から薄緑色の炎が一気に燃え上がる。その炎はあつという間にクウエンディの全身を包み込み、女王は一本の生ける松明と化してしまう。

「アスカ、“幻魔”にや！」

短剣を構えたままスピニッチが振り返る。エリーゼはアレンの背後から片腕を首へ回し、もう片方の手の鋭く長く伸びた爪をアレンのこめかみに当てている。目は異様につり上がり、口も耳まで裂け牙が覗いている。

ガルドの母親も俊敏な動きでガルドの肩に飛び乗り、両足で首を締めつけている。やはり長く尖った爪をガルドの頭に突きつけている。

「え、ど、どういうこと！」

飛鳥はあまりの急展開に頭がついていかない。どうやらクウエンディ女王は本物ではなく、“幻魔”というモンスターだったらしい。そしてエリーゼもガルドの母親も。

アレンもガルドも身動きができないようだ。ただ単に押さえつけられているだけではない。魔法か何かで身体が麻痺させられているらしい。

「幻魔はそによ者によ心から作り出された幻にや！ 幻魔を倒さない限り、アレンもガルドも動けにやいにや！」

スピニッチは黒い疾風となって室内を飛翔する。牙を剥きだして襲いかかってくるメイドたちと、銀の短剣を構えて対峙する。

「アスカは二人を頼むにや！」

「う、うん！」

飛鳥は混乱した頭でうなずく。クウエンディはすでに白い灰となつて霧散してしまつた。テーブルや椅子などを蹴散らしながらガルドは窓際へ、アレンはエントランスへ出る両開きのドアの方へ引き摺られていく。

頼まれたのはいいが、正反対の方向へ連れて行かれる二人のどちらを追えばいいのか判断に迷う。

「ど、どうしよう！」

飛鳥が迷っていると金切り声が連続して聞こえ、二人のメイドを倒したスピニッチがガルドと母親の方へ飛んで行く。

「アスカはアレンを頼むにや！」

「わ、わかった！」

ツバメのようにスピニッチはガルドと母親を追う。ガルドたちはそのまま窓を突き破つて外へ出て行ってしまう。飛鳥はエントランスへ出て行つたエリーゼとアレンを追うために、テーブルに片手をついて飛び越える。

「アレン！」

エリーゼとアレンはエントランスの真ん中で飛鳥を待ち構えていた。アレンの顔色は血の気がなく、真っ青だ。まるで生命力を吸い取られているかのように見える。

「ケケケ、近づくな小娘。この男を殺されたくなければな」

若干エリーゼの面影が残る悪魔顔で、幻魔が妙に反響する声を出す。異様につり上がった目は緑色に燃え立ち、耳まで裂けた口には鋭い牙が並んでいる。鋭く尖った爪はアレンの首筋へ突きつけられ、アレンの白い肌に赤い玉を浮き上がらせている。アレンの強靱な防御力は、完全に無効化されているようだ。

「ど、どうすれば……」

飛鳥はファイティングポーズを取ったまま動けなくなる。いくら瞬発力に自信があつたとしても、突きつけられた爪がアレンの動脈を突き破る前に倒すのは難しいだろう。

「ア、アスカ……」

血の気のないアレンの唇がゆっくりと動く。それはまるで死人の唇のように白く乾いている。

「わ、私のことは気にせず…… こいつを倒せ……」

アレンの命の炎は今まさに消えゆかんばかりに細く、幻魔の吐息で軽く吹き消されてしまうかのように見えた。

144話：スピニッチはかく語りき（後書き）

「幻魔」は本作品のオリジナルモンスターです。
類似したモンスターが他作品にあったとしても、偶然の一致ですの
でご了承ください。

145話：消える愛世

アレンは首筋に鋭い爪を突きつけられたまま、出口の方へ引きずられていく。飛鳥はいつでも飛びかかれるように油断なく距離を取りつつも、幻魔とアレンを追う。

外へ出ると街の風景は一変していた。

あれほど晴れ渡っていた青空は真っ黒な厚い雲で覆い尽くされ、ところどころ稲光が走っている。ヨーロッパの美しい街並みのようだった景観は、見渡す限り爆撃を受けたように瓦礫の山と化している。あれほどいた町の人たちは誰もいない。瓦礫の山の間で蠢くのは、オークやゴブリンなどのモンスターばかりだ。

「こ、これって……」

飛鳥は何も言えなくなってしまう。すべてはまやかしだったのだ。幻魔による。

「ケケケ、あのまま夢の世界で幸せなままいればよかったものを」

エリーゼはもはやエリーゼの服を着ているというだけで、完全に人以外のものになっちゃってしまっている。黒い炎の塊がかろうじて人の姿を取っている、と言えはいいのだろうか。輪郭があやふやな顔に黄色い亀裂が三本横に走っている。おそらく上部で横に二本並んでいるのが目、下に一本ある長い亀裂が口なのだろう。

袖から伸びた腕も黒い炎の塊で、三本の爪だけが鈍い色を反射させている。

「アタシは…… アタシはアンタを許さない。人の心をもてあそぶような、そんなアンタを絶対に許さない」

「許さなければどうだって言うんだ？」

幻魔は口の両端を釣り上げ、目を細める。アレンはかるうじて意識だけはつなぎ止めているといった様子で、真っ白な顔で浅く短く呼吸している。衰弱して、もはや声も出せないのだろう。

「ぶっ殺す！」

「ケケケ！」

亀裂を大きく広げて、幻魔が甲高い声で高笑いする。その笑い声に引きつけられたかのように、周囲にモンスターたちが集まり始める。オークやゴ布林たちは淀んだ目で両腕を力なく揺らせ、牙の見える口元からはだらしなく涎の糸を引いている。

「う、うまそうなんだな」

めまいがするほど刺激のある口臭を吐きかけ、頭一つ分小さなゴ布林が飛鳥の周りを嗅ぎ回る。

「い、いいにおいなんだなべっ！」

ゴ布林が飛鳥の太ももに鼻先を擦りつけた瞬間、その頭が破裂する。飛鳥が殴ったのだ。見た目には飛鳥の手が動いたようには見えない。もはや通常のモンスターに飛鳥の動きを見ることはできないのだ。

「ケケケ、そんなことをしていいのか？ この男をお前の目の前で解体してこいつらに食わせるぞ？」

「う、うぐ……」

幻魔はアレンの首筋に突きつけていた爪をさらに深く突き刺していく。数センチメートルは食い込んでいるだろうか。幻魔の爪が刺さっている三カ所の傷からは、次々と赤黒い血が流れ出してくる。

「アレン！」

飛鳥が一步踏み出すと、幻魔はアレンを引きずったまま一步下がる。距離的に一秒もあれば倒せる距離ではあるが、幻魔に隙はない。

「アレンを放しなさいよ！ アタシが身代わりになるよ！」

反撃できないアレンより、元気な自分が人質になった方が幻魔を倒すチャンスはある。そう思って飛鳥はアレンとの交換を申し出る。

「ホッホウ！ お前はあつちの男が好きではなかったのか？ しかし殊勝な心がけた。ゆっくりこっちへ来い」

飛鳥は幻魔を睨みつけたまま、ゆっくりと近づいていく。すると突然飛鳥の両膝から力が抜ける。

「あつ！」

つんのめる形で両手を地面へつく。何と地面の中から、幻魔のもらしき手が突き出て飛鳥の両足首を掴んでいる。

四つんばいになった飛鳥の顔の真下の地面に、三本の亀裂が入る。別の幻魔が罫を張って待ち構えていたのだ。

「ケケケ、こいつは美味そうな女だな。人間の女にありつけるのは半年ぶりだ」

地面から黒い炎の塊が滲み出て来る。幻魔に掴まれた足首からは、力がどんどん抜けていく。腕からも力が抜け、支えきれずうつぶせに倒れる。

「こ、これ……」

朦朧とする意識の中で飛鳥は思い出す。キャリーの町でゴブリンに襲われた時。あの時もこんな風に力が抜けてしまった。あの時は飛鳥自身落ち込んでいて、精神的に弱くなっていた。

しかし今は強制的に弱められていた。幻魔とはパワーの源である心に入り込み、どんなに力のあるものでも無力化してしまうモンスターなのだ。それは召喚された勇者であるアレンや飛鳥でさえ、例外ではない。

飛鳥の心の中にはもはや反撃する気力さえない。もうこのまま死んでもいいやという諦めにも似た、自暴自棄な思いで満たされてしまっている。それが幻魔によるものだということは理解できていても、抗う気力が湧いてこないのだ。

「ケケケ、だいぶ大人しくなったようだな」

幻魔は人の“想い”を食らう。そしてその食らった想いを幻として現出させる。しかし幻とはいっても、想いを食らわれた者には本物としてしか感じ取れない。ズサの美しかった街並みも、エリーゼもクウエンデイもみんな飛鳥たちの心の中から現れたのだ。

「も、もう食ってもいいだか？」

焦点の定まらない感情のない能面のような顔で、飛鳥はうつぶせに倒れたまま動かない。その周りにはゴブリンやオーク、さらには黒い蝙蝠のような翼を羽ばたかせたガーゴイルまでも集まって来て

いた。その数はさらに増え続けている。

「ケンカしないで仲良く食べよ」

幻魔の許しを得て、モンスターたちは一斉に飛鳥の白い肌に噛みついていった。

146話：アレン、その愛

退廃と空虚、無秩序と混沌の混じった界限では異形の存在たちも景観の一部と化している。ある一点を中心として放射状に頭を向け合うモンスターたちは、何か宗教的儀式を行っているようにも思える。我先にと押しのけ、手や足の隙間に頭を割り込ませる。その中心点にあるものはかつて飛鳥だった肉塊。

朦朧とした意識は一瞬でも気を抜くとシャットダウンされそうだが、それでもアレンはそんな光景を想像してしまう。

両頬いっぱい食べ物を含んで咀嚼する、礼儀や慎ましさとはほど遠い距離にある豪快な食事の仕方。

些細なことで怒ったり泣いたり、傷ついたりする繊細な心。感情のわかりづらい東洋人には珍しい、万華鏡のようによく変化する表情。

長くい過ぎたために麻痺しかけた自分に、親しみを込めて名前を呼んでくれる明るい声。

藤堂飛鳥という妹と同年の少女は強い意志と繊細な心をその小さな身体に宿して、この世界で戦い抜いてきた。自分が妹のためにできることはもうない。

しかし飛鳥にだったらまだできることはある。自分の命を懸けて守り、元の世界に戻してやることだ。

そう考えた時アレンの閉じかけていた瞼が大きく、勢いよく見開かれた。

「ぬああっ！」

アレンは裂帛の気合いを吐き出し、幻魔の腕を掴んで爪を引き抜く。手のひらの皮膚は黒い炎で焼けただれ、無数の針を突き刺されるような痛みが広がる。しかしアレンはそのまま腰の剣を抜き、上段から一撃の下に幻魔を屠る。

「ぐげ？」

手前にいたゴブリンが異変に気づいて振り向くと、そこには青白い顔で強烈な怒気を孕む人の形を取った暴風を見た。

「ぐあああああつ！」

一振りごとに全身の力を絞り出し、アレンはモンスター集団に斬りかかっていく。まるでナパーム弾が炸裂したかのように、一瞬のうちに数十体が数百の肉の破片へと四散していく。

血飛沫と悲鳴が交錯する中、血まみれになった飛鳥の姿が現れる。太ももや首筋など嚙られた跡はあるが、まだ息はあるようだ。

「アスカ！」

アレンは左腕一本で飛鳥を抱き上げ、声をかける。飛鳥の首は糸の切れた人形のように前後に力なく揺れるが、色を失い固く乾いた唇の隙間から呻き声が漏れる。

「ア、アレ……ン？」

長い睫毛が小刻みに震えながら開かれる。拡大しかけていた薄茶色の瞳孔が収縮し、焦点が定まる。

幻魔が離れたことによって、アレンは少しは回復している。ただ気力を振り絞って剣を振るったため、このままでは体力が保たない

恐れがある。しかし飛鳥が共に戦ってくれたら、この窮地は脱出できるだろう。

アレンは外部に放出するタイプの魔法は使えない。内発的な魔法のみだ。自分の傷は治せるが、飛鳥を回復させることはできない。モンスターたちは、急に息を吹き返したアレンを遠巻きにしている。上空で旋回する悪魔のような姿をしたガーゴイルたちも、隙を見せれば瞬時に襲いかかってくるだろう。飛鳥を捕まえていた幻魔の姿も見当たらない。地面の中にも警戒を怠ることはできない。

飛鳥の傷は幸いたいしたことはなく、太ももの肉が数カ所抉り取られているのと首筋に牙が突き立てられた穴がいくつか穿たれているだけだ。モンスターの涎でべとついてはいるものの、出血量はさほどではない。傷さえ治せば、きっと自分より戦えるだろう。

アレンは一瞬躊躇するものの、助かるためにはこの方法しかない
と覚悟を決める。

「アスカ、すまない！」

アレンは徐に飛鳥に口づけをする。外部へ魔法を放出できないなら、飛鳥を自分の身体の一部にしてしまえばいい。試してみたことはないが、アレンは一か八かその可能性に賭けてみることにしたのだ。

「う、うぐっ！」

突然唇を塞がれ、飛鳥の目が大きく見開かれる。目の前には閉じられたアレンの瞼と美しい睫毛がある。口腔内にアレンの舌が差し込まれ、そこから温かいパワーが流れ込んでくる。

痺れるような感覚が頭の中を飽和させ、脊髄を下って全身へ行き渡る。同時に傷口からは出血が止まる。

アレンが離れた時、飛鳥の顔色は元に戻っていた。

「ア、アレン？」

きょとんとアレンを見つめる飛鳥に、アレンは自嘲するように微笑みかける。

「すまなかった、きみを助けるにはこの方法しか思いつかなかった」
「う、ううん、あ、ありがとう……」

呆然とする飛鳥を静かに地面へ下ろす。多少ふらついたが、飛鳥は自らの足でしっかりと立つ。

「アレン！」

飛鳥はアレンの背後を見て驚く。蝙蝠のような羽を広げて、悪魔のようなモンスターが爪を振り下ろそうとしていたのだ。

アレンは飛鳥の瞳に黒い影が映っているのを見て取って、脇の下から魔剣グラムを真後ろに突き出す。ガーゴイルは胸の真ん中を貫かれ、身の毛もよだつような悲鳴を上げて地面へ落ちる。

「でやあっ！」

突然、飛鳥はアレンの足下を殴る。地面に蜘蛛の巣状のヒビが入り、アレンを中心として直径数メートルほど陥没する。するとヒビの隙間から黒い炎が噴き出し、叫び声を上げながら空中へ霧散していく。どうやら幻魔はガーゴイルにアレンの気を引かせている間に、足下から襲おうとしていたらしい。

「ありがとう」

アレンは飛鳥に微笑む。飛鳥も微笑みながらうなずき、背中合わせに立ち上がる。周囲はオークやゴブリンたちによって埋め尽くされ、その様相は黒々とした蠢く壁に囲まれているようだ。空には数十ではきかないほどのガーゴイルが旋回している。

アレンはスピニツチとガルドが気になったが、まずはここを脱出しなければならぬ。衰弱し傷ついた身体でどこまで戦えるかわからないが、心の奥底では切り抜けられる自信が沸々と湧き上がってくる。

それはアレンが今まで感じたことのない感情から紡ぎ出される、勇気と希望だった。

アレンは認めざるを得なかった。

自分は飛鳥を愛しているのだと。

147話：宣戦布告

正面のオークの頭が爆発四散すると同時に、右のゴブリンの胸に穴が開く。その後ろのオークの背中が破裂して内臓がぶちまけ、直後上空のガーゴイルが身体の部位をばらまきながら墜落する。

身体の小さな飛鳥は攻撃と同時にその位置を移動させ、巧みにモンスターたちの包囲をかくぐっていく。格闘が主な攻撃方法である飛鳥は、必然的に高レベルのフットワークが要求される。ある意味大柄な男性より、格闘には向いているのかもしれない。

次々と三次元的に襲いかかってくるモンスターたちを撃破しながら、飛鳥は確実に一体ずつを屠っていく。全体数が把握できない限り、トルネードアッパーなどを使って攻撃するのは危険が大きい。体力を大きく消耗してしまうからだ。一応重傷を負っていたことに間違いはないのだ。

「アレン、キリがないよ！」

無数に蠢くモンスター集団の一角を削り取り、飛鳥は後方へ距離を取る。アレンとあまり離れてはいけなと思ったからだ。

「体力はまだ大丈夫か？」

金色の疾風がモンスター集団の中を駆け抜けてくる。アレンが飛鳥の前で急停止すると、その後ろでは数十体のモンスターが身体を分解されて崩れ落ちる。

「まだ大丈夫だけど、いつまで保つかかわかんない。こいつらいったいどれだけいるの？」

十体倒せば二十体現れる。すでに二人の倒したモンスターのいたスペースは、他のモンスターによって埋め尽くされ始まっている。

複数を攻撃するには魔法攻撃か大技が効果的だ。アレンにも一度に多くの敵を攻撃する技はいくつかあるが、やはりそのどれもが大きく体力を消耗してしまう。

これだけ倒せば終わりというゴールが見えていれば気力も保つし体力配分もできる。しかし無限に増え続けるモンスター集団が相手では、いくら効果的でも大きく体力を消耗する戦い方は自殺行為だ。いずれ力尽きてやられてしまう。

「こんな時ガルドがいたら……」

飛鳥は思わず呟いて気づく。アレンが悲しそうに目を伏せていた。

「あ、と、ゴ、ゴメン。別にアレンじゃダメだって言いたいわけじゃないくて、ええと……」

「気を遣わなくていい。私は単体の強大な敵を倒すよう訓練されてきた。一度に多くの敵を倒すのは、やはりガルドのようなウィザードには敵わない」

「う、うん……」

魔法にしろ技にしろ、攻撃力が高ければそれだけ多くの体力や精神力を消耗する。飛鳥やアレンのような単体戦に強いタイプは集団戦には不向きなのだ。

「一か八か大技使ってみる？」

飛鳥は無意識のうちに、右上腕部に彫られたトルネードアップのタトゥーに触れる。

「お互い今の状態で大技を連発すれば、まともに動けなくなる。それなら確実に一体ずつ最小限度の体力で戦っていった方が……」

その瞬間、目の前を膨大な量の炎が流れていく。

「アス力、危ない！」

一瞬早く気づいたアレンは、飛鳥を抱きかかえて廃墟となった建物の上へ跳び移る。

幅十メートル以上はある通りいっぱいに、轟音を立てて炎の川が流れていく。それはもはや火などではなく溶岩の流れのようだ。

炎はモンスターたちを焼き尽くし、その様子に怯えたガーゴイルたちは町の中央部の方へ逃げていく。通りの向こうには、赤黒い巨体が悠然と浮かんでいた。

「ガルド！」

飛鳥の顔が一瞬で明るくなる。それを見てアレンの眉間に、ほんの少ししわが寄る。

魔王変化したガルドは目の部分に当たる紫色の二つの光を揺らめかせ、ガーゴイルたちの逃げて行った方向を見つめている。

『何か来るぞ』

ガルドの頭部に生えた二本のうねった角は、膨大な量の悪意と魔力を感じ取って細かに振動している。

ガルドの後方から黒い小さな毛玉が飛んできて、飛鳥とアレンの前の空中で停止する。スピニツチだ。

「二人とも無事だったかにや！　どうやら幻魔たちの親玉が動き出

したようにや」

「親玉？　つまりこの町のボスってこと？」

「そうにや」

スピニツチは銀の短剣を持ったままだ。よく見ると全身の黒毛は砂や埃で白く汚れ、ところどころにはモンスターのものと思われる黒い血が乾いて固まったままこびりついている。ガルドとスピニツチも、それなりにモンスターたちと激闘を繰り広げていたのだろう。

「アスカ、敵のボスが相手なら私の出番だ。援護を頼む」

アレンは口元を引き締め、ガルドの炎によって巻き起こった激しい風に黄金の髪を揺らせながら厳しい視線を町の中央部へと向ける。町の中央部の上空では黒雲が渦を巻き、雷鳴が轟き始めている。町全体が鳴動し、瓦礫が音を立てて崩れていく。フェアリーテイルで戦ったブルードラゴンがそれ以上の膨大なパワーが、町の地下から身を持ち上げていく。

音もなく近づいてきた魔王ガルドに、アレンは口の端で微笑する。

「戦いの前に言っておこう。私は飛鳥を愛している。君には負けない」

「え、ええ？」

隣でアレンの突然の告白を聞いた飛鳥が、顔を赤くして目を白黒させている。

ガルドは耳まで裂けた口を引き伸ばし、不敵な笑顔を作り出す。

それはアレンの“宣戦布告”を受け取ったという意味だろう。

『これは厳しい戦いになりそうだな。ではその前にあいつを軽く片付けとくか』

「ああ、そうだな」

アレンとガルドは、うなずき合って身構える。一キロメートルほど先の、町の中央部が盛り上がっていく。途方もなく巨大な“何か”が、出現しようとしていた。

148話：蚩尤

盛り上がった瓦礫が崩れ落ち、その下から大量の土砂が盛り上がってくる。土砂の中から、湾曲した太い角が現れる。茶がかった角の先は左右に広がり、その下から丸みを帯びた赤い塊が浮上してくる。どうやら防具でいう兜のようなものらしい。

赤い兜の下からさらに爛々と赤く輝く二つの光源が現れる。それは陰鬱とした呪いの光ではなく激しい怒り、この世のすべてを破壊尽くさんとする暴虐な恒星のようであった。

「ま、まさかあれは……」

スピニツチの細い目が開かれ緑色の瞳が大きく見開かれている。その瞳には、さらに高く上昇していく炎のように揺らめく赤光を映し出している。

兜の下には黒い皮膚と牙の並んだ口。牙の一本一本は人一人分はありそうなほど太く、それが上下に林立している。

兜から無数にはみ出た長槍のような黒いものは、どうやら頭髪らしい。ウニの針のように放射状に生い茂っている。そしてその頭髪はそのままもみあげと顎髭につながり、短い首を隠している。

頭の上半分は角と兜、下半分は長槍でできたウニのようなもみあげと顎髭という容貌だ。

「蚩尤^{しゆ}！」

> i 2 1 8 0 0 — 2 7 5 <

スピニツチが叫ぶと、轟音とともに雷鳴が幾筋も天地をつなぐ。想像を絶する巨人が、崩壊したズサの町に立ち上がる。その大きさ

はブルードラゴンより一回りは大きいだろう。渦巻く黒雲を突か**ん**ばかりの巨大な姿は遠近感を麻痺させ、遠くに**い**るはずの蚩尤が目の前に立っているかのように錯覚させる。

古代中国の鎧のような甲冑を身に纏い、左右三本ずつ、計六本の腕がそれぞれ違う種類の武器を握っている。剣、斧、槌、戟……長い柄のついた矛は両手でがっしりと握られている。背中には万里の長城を曲げて縦にしたかのようなサイズの弓を背負っている。

「な、なんなのあれ！」

轟く雷鳴に負けぬよう、飛鳥が大声で叫ぶ。

「蚩尤にや！ 戦いによ神でアス力によ世界では、中国によ神話に出てくるほど有名にや怪物にや！」

驚愕と恐怖のためか早口で叫ぶスピニッチの言葉に、ガルドが念話で応じる。

『映画や小説にも頻繁に登場する有名な化け物だ。しかしあれほどの大きさとパワーがあるなんて設定、見たことも聞いたこともない』

蚩尤はまっすぐこちらを睨みつけている。距離は遠く離れているにも関わらず、まるで目の前にいるかのように射竦められてしまう。この世界で戦い抜いてきた飛鳥にはよくわかった。

あの蚩尤という鎧姿の巨人は、見た目ほど鈍重ではない。そしてブルードラゴンより遥かに強い。アレンが自分に援護を頼んだのがよくわかる。ブルードラゴンの時にはたった一人で戦ったアレンが。あの敵には三人で協力しないと勝てないだろう。少なくとも、アレンは空を飛べないのだ。つま先を攻撃したって倒せっこない。

飛鳥の頭には、幼い頃幼稚園の紙芝居で見た「一寸法師」のお話

が思い浮かんだ。

『来るぞ！』

ガルドから鋭い警告が発せられる。見ると蚩尤は二本の腕で握った巨大な矛を構えたまま走り出している。ものの数歩で飛鳥たちの目の前に到達する。黒雲も稲光もすべて蚩尤の身体で見えなくなり、物理的に感じられる膨大な存在感が飛鳥を吹き飛ばす。

『散れ！』

飛鳥は右の空へ駆け上がり、アレンは蚩尤の足下へ飛び降りる。スピニッチは魔法で消え去り、ガルドは真上へと上昇する。刹那、巨大隕石が落下するかのごとく蚩尤の矛が振り下ろされた。

一瞬の無音。直後、世界が“ズレ”た。

あまりの衝撃にズサの町は一瞬のうちに消滅した。瓦礫はより細かな砂礫となって崩れ落ちる。内臓をかき回すかのような暴力的な空気の振動は、耳元で大音量の業務用スピーカー力を最大音量でかき鳴らされたかのような重低音を身体中に駆け巡らせる。

飛鳥は堪えきれず空中で吐いた。全身の血流は不規則に乱れ、胃や腸は間断なく引き絞られる。涙目になりながらも、飛鳥はかろうじてその場で足踏みをして墜落を免れる。苦悶の声を上げながら何度も嘔吐すると、手の甲で口の端を拭う。

飛鳥の隣で軽い音がして、スピニッチが現れる。

「蚩尤はモンスター軍全体の指揮官も兼ねてたにや。今は首都ファントジアの防御司令官にや。実質モンスター軍のナンバー三にや」「ちよ、ちよっと待って、“アレ”より上がまだいるっていうの？」

飛鳥は口の中に酸っぱいものを感じながら、震える指先を規格外の巨人へ向ける。

一瞬のうちに数百メートル離れたところまで移動した飛鳥の瞬発力はさすがだが、直接攻撃を受けたわけでもないのにこのダメージだ。今だに内臓は苦悶にのたうつている。

スピニツチは重々しくうなずく。

「“創造主”と最高指れ」

突如紫色の光が爆発し、飛鳥たちの視界を覆う。どうやらガルドが攻撃を開始したようだ。

「助けに行かなきゃ！」

弾かれたように飛鳥が走り出す。あれだけの巨体に飛鳥の攻撃が通じるのかわからない。けれど飛鳥は怯むことなく突っ込んでいく。全身を金色のシールドが包み込み、長く尾を引いていく。流星と化した飛鳥の心には、怯えは一切ない。

自分は一人じゃない。

愛する男たちがついているのだ。

「うりゃあああああつ！」

城塞のような蚩尤の横顔へ、飛鳥の金色の流星が吸い込まれるように緩やかに上昇していく。

世界を揺るがす途方もない“神”との死闘が、轟く雷鳴と渦巻く黒雲の下切って落とされた。

148話：蚩尤（後書き）

作中の挿絵は「4 Game・net」様より掲載。

「蚩尤」の設定は当作品オリジナルです。また挿絵とも若干描写が違いますので、ご了承ください。

149話：狂える風（前書き）

横書き推奨です。

149話：狂える風

「はりゃあああつ！」

全力で走ってきた勢いごと拳を突き出す。蚩尤の周囲の空気は異様な質感で、陸上競技場のトラックに使われるポリウレタンのような感触だ。一步ごとの反動が強い。飛鳥は自分の身体より大きな蚩尤の頬に拳をめり込ませた。

家一軒分はある大きさの蚩尤の顔が勢いよく真横を向き、巨大な身体がふらつく。飛鳥は殴った勢いそのまま駆け抜け、緩やかに反時計回りに旋回する。ふらつく蚩尤へガルドがすかさず攻撃する。どうやら飛鳥が攻撃する間、魔法の詠唱をしていたようだ。

『……N a t e r r a e o n o m e d o I m p e r a
d o r d o v e n t o , l e v e a c a b o u m c
o n t r a t o 』

（……大地と風の御名において、契約を履行せよ）

ガルドの身体の前に紫色の魔法陣が現れる。その周囲に緑と黄の小さい魔法陣が三つずつ互い違いに現れ、紫の大きな魔法陣の周りを歯車のように回り始める。

『V e n t o i n s a n o ! 』（狂える風）

小さな魔法陣は一気に回転を速め、濃紺色をした竜巻が発生する。蚩尤へ向かって身をくねらせながら伸びていき、その全身を捉えようと垂直に伸びていく。よく見ると竜巻の中では無数の真空の刃がミキサーのように回転している。

三日月型をした真空の刃は、一つ一つが刃渡り数メートルはある

だろう。それが竜巻の中で縦横無尽に駆け巡り、蜚尤の全身を切り刻んでいく。

砂塵が巻き上げられ、苦悶に身を擦らせる蜚尤の身体を覆い隠していく。その様子は、蜚尤がまるで巨大なサンドウォームに飲み込まれる様に似ていた。

「ちょ、ちょっとガルド、あんな大技使ってアレンが近くにいたら、巻き込まれちゃうじゃないのよ！」

走りながらその様子を見ていた飛鳥は、ガルドの隣に来ると慌てて叫ぶ。先ほどの蜚尤の攻撃から、アレンの姿はどこにも見当たらない。もしかしたら蜚尤の足下にいたのかもしれないのだ。

ガルドは一瞬動きを止めるが、継いで耳まで裂けた口の端を持ち上げる。

『大丈夫だ、問題ない』

「……あんた忘れてたでしょ」

大地の力を使っているため、魔法の竜巻はその勢いを容易に弱めない。攻撃は風の力、パワーは大地。蜚尤のような巨人を着実に痛めつけるのには、打ってつけの攻撃魔法だろう。

「私のことなら大丈夫だ」

いつの間に現れたのか、飛鳥たちの真下にアレンが立っている。荷物も何もなくなしてしまったので、兜は被っていない。金髪が風になびいて鈍い陽光を反射している。

『……ちっ』

ガルドが小さく舌打ちをする気配が伝わってくる。

「あ、あんたねえ」

「アス力気にするな、彼なりの愛情表現だ」

アレンは目にかかる前髪をかき分けながら微笑して、ガルドの竜巻を振り仰ぐ。

「今のうちに作戦を練っておこう。ガルド、あと何分だ？」

『三分つてところだな』

「え、え？ 倒したんじゃないの？」

飛鳥はガルドと竜巻を交互に見遣る。無尽蔵のエネルギーで蚩尤を蹂躪する魔法の竜巻は、先ほどよりもその勢力を増し、直径数十メートルもの巨体をうねらせている。蚩尤の姿は見えないが、全身ミンチのようになっているものと、飛鳥は期待していたのだ。

「蚩尤は創造主によ左腕ともいわれるモンスターにや。防御力、耐久力、再生力どれをとってみてもあによ程度によ攻撃魔法じゃ、足止め程度にしかにやらにやいにや」

黒い羽を大きく広げ、バランスを取りながらスピニッチが滑空してくる。

「え、ええ？ じゃアイツあの中から出てくるの？」

スピニッチは細い目を引き絞り、しっかりとうなずく。

「ガルドによ言つとおり、あと二分ちょいぐらいかにや」

「まじで……」

飛鳥はがつくりと頂垂れる。

『俺の持つてる魔法で、あれ以上の攻撃力を持つ魔法はない。だが……』

「あれか」

アレンは首だけを回して、ガルドに不敵な微笑みを向ける。

「あれって？」

不思議そうな飛鳥に、ガルドは視線を竜巻に固定しながら応える。

『フェアリーにもらった爆発系の強力な光魔法だ』

「ああっ！」

飛鳥は手のひらを拳で軽く叩く。ガルドは飛鳥の頭の上に電球が点った気がした。

「ヤツを倒せるかどうかはわからないが、怯ませることぐらいはできるだろう。その隙に私が攻撃する」

『ちっ……ム力つく言い方だが、俺も使ったことねえからどのくらいの威力があるのかわからねえ』

アレンは細い顎を上げて飛鳥を見る。

「アスカは私をヤツの正面まで連れていってくれ」
「正面？」

飛鳥の眉間にしわが寄る。ガルドの強烈な魔法の竜巻でさえ倒せ

ないのに、いくら魔剣とはいえアレンの攻撃だけで倒せるのだろうか。

「私の攻撃力のすべてを一撃に込める。そうなると防御までは手が回らん。だからアスカに私の防御を頼みたい」

「つ、つまりアレンをアタシのシールドで包みながら、アイツのところまで連れてけばいいのね？」

「ああ」

いくら巨大でも、モンスターである限り弱点は自ずと決まってくる。頭、心臓、首……生半可な傷ではすぐに再生してしまうだろう。ヘタをすれば、首を切り落としても再生してしまうかもしれないのだ。

あれだけの巨体を維持し続けるためには大量のエネルギーが要る。エネルギーの源は心臓だ。

「ヤツの心臓をぶち抜く」

竜巻の轟音に混じって、不気味な咆吼が聞こえる。やはり蚩尤は健在のようだ。

「来るにや」

あれほどの勢いで全身を切り刻まれていたはずなのに、蚩尤の六本の腕が竜巻から勢いよく突き出る。それぞれの手は武器をしつかりと握ったままだ。

『発動までに少し時間がかかる。悪いが時間稼ぎをしてくれ』
「どのくらいだ？」

アレンが両手に剣を構え、走り出す体勢になる。飛鳥も覚悟を決め、酸っぱい唾を飲み込む。

「五分だ」

飛鳥にとってそれは、気の遠くなるような時間に思えた。

149話：狂える風（後書き）

作中のガルドの魔法は、ポルトガル語です。

150話：虫けらの一刺し

「アスカは上空からヤツの気を惹いてくれ」

「アレンはどうするの？」

「私はヤツの足を止める…… 文字通りにな」

ガルドはすでに瞑目して呪文の詠唱に入っている。初めて使う魔法だけに、練り込み方や発動の仕方など調整が難しいのだろう。

実際飛鳥もタトウに触れるというきっかけがなければ、魔法を使うことはできなかった。飛鳥の持つ初歩的な魔法でさえそうなのだ。高度な魔法であればあるだけ、その手順は複雑で微妙な調整が必要なのだろう。

慣れればそんなことをする必要もないが、何事も知らないことにはきちんとした手順を踏まなければ正しく行えない。きっと次からは、ガルドもこの魔法を発動する時はもっと短い時間でできるようになるだろう。

“次”があればだが。

アレンは金色の疾風となって走り去ってしまう。トップスピードは、もしかしたら飛鳥より速いかもしれない。飛鳥も慌てて砂塵の舞う空へと駆け上っていった。

蚩尤はすでにその巨体を竜巻の中から現し始めていた。ガルドの魔法の竜巻は自ら意思を持っているかのように、うねったり移動したりしている。対象を逃がさないためらしい。

しかし蚩尤が歩くにつれてその規模も縮小していく。そしてとうとう竜巻は蚩尤の身体の周りを吹きすさぶ空つ風のようになり、白い真空の刃も枯れ葉のごとく空中に消えていく。

蚩尤は何事もなかったかのようにその歩みを進める。身体のどこにも傷はない。一つの真空の刃だけでも、二トントラックでさえ簡

単に切り裂くほどの大きさと勢いがあつたはずなのに。

「気を惹くって、どうすればいいんだろ……」

蚩尤にしてみれば飛鳥などただの虫けらにすぎない。蚊や蠅が飛び回ったところで、軽く手で払われて終わりだ。ではもし自分だつたらどうするか。

「アタシは『血い吸うたるか』なんてできないけど……」

飛鳥は急停止し、自由落下に移る。顔や剥き出しの肌の部分に、細かな砂粒が当たる。そして真下に向けて全力疾走し始める。全身が金色のシールドに包まれる。その光は否が応でも蚩尤の注意を惹きつける。

「ウザがられるのは得意なんだよねえ！」

無数の小さな瓦礫が埋もれる砂の地面が眼前に迫る。そのまま地面に激突するかという直前で、飛鳥は急上昇に移る。まだ気持ち悪さの残る内臓が一気に下へと押し下げられ、不快感が増加する。しかし飛鳥は歯を食いしばり、一步一步に全力を込める。

急角度で跳ね上がった飛鳥の金色の流星は、そのまま蚩尤の胴体へと上っていく。飛鳥は弾力性に富む空気を蹴り上げ、加速する。

「ほら、虫けらが身体にまわりついてるよぉ！」

蚩尤の身体に足が着くと、飛鳥はグラウンドのような胴体を駆け上っていく。

蚩尤の身体は不思議な感触だった。見た目鎧を着ているので硬い感触を想像していたのだが、まさにグラウンドのような感触でとて

も走りやすい。飛鳥は一步一步しっかりと踏みしめていく。

途端に日が陰る。飛鳥の頭上に巨大な手のひらが迫っていた。

「うわっ！」

飛鳥が両足を踏ん張って急停止する。その足が蚩尤の身体にめり込む。

「え？」

違和感を脳内で処理する暇もなく、飛鳥は元来た方向へ駆け戻る。直後、飛鳥のいたところに分厚い手のひらが打ちつけられる。

「うわっとお……」

反動で飛鳥の身体が跳ね上げられる。そこにまた巨大な手のひらが振り下ろされる。

「遅いんだよ！」

飛鳥は逆光で真っ黒な手のひらを見上げながら、左右にフェイントを入れる。手のひらが飛鳥の残像を押しつぶした時、飛鳥はすでに蚩尤の胸の高さまで駆け上がっていた。

「ドロップキック！ック！」

飛鳥が無意識に技名を叫んでしまうのは、ガルドのたゆまぬ努力の成果だろう。空中で直角に軌跡を曲げた飛鳥の作り出す金色の流星は、左右から拍手をするように合わされる手のひらをすり抜け蚩尤の胸へ突き刺さる。

爆発するような重々しい音を響かせ、蚩尤の途方もない巨体ぐらつく。蚩尤の死角をつくために大きく迂回していたアレンは、最
高速で走りながらその光景にほくそ笑む。

「私も負けてはいられないな」

急速に視界へ迫る蚩尤の左足に向けて、アレンは魔剣グラムを水平に構える。そして勢いをつけて跳躍した。狙うは膝の裏の靱帯。

巨木のような蚩尤の足を一撃で切断するには、技や魔法などを駆使しなければ難しいだろう。しかし巨体を動かす腱であれば、容易に切断できる。膝裏の靱帯なら、即死させられなくても転倒させることはできるのだ。

アレンは剣を水平に薙ぎ、蚩尤の左膝裏の靱帯を二本まとめて一気に切断した。

「む？」

異様な手応えに眉を顰めるも、アレンは着地して蚩尤の右側へと走り抜ける。アレンの背後では、バランスを失った蚩尤が今まさに仰向けに倒れるところだった。

直下型地震のように大地が跳ね上がり、大量の砂煙が巻き上がる。アレンはそのまま時計回りに走り、蚩尤の頭へと向かっていく。

次の目標は眼球。視界を奪えば、ガードが魔法を発動するまでの時間は間違いなく稼げるだろう。

「アレン！」

上空から飛鳥が降りてきて、アレンと併走する。蚩尤を転倒させたにも関わらず、飛鳥は戸惑った表情をしている。

「アイツなんだか変だった」

「やはり、私も同じように感じた。いつの間にか持っていた武器も消えている。だがとにかく、今は時間を稼ぐことに集中しよう。アス力は左目を頼む」

「わ、わかった」

それだけで飛鳥にはアレンの意図していることは伝わった。

ガルドの身体はほの白い光に包まれ始めている。そして蝙蝠のように黒く硬質だったガルドの背中の翼は、なんと天使のような純白の翼に変わっている。そして頭上には白い天使の輪が、燦然と輝き始めていた。

151話：アルテマ

美しい…… 飛鳥は素直にそう思った。“魔王”に変化しているガルドが、さらに“天使”へと変化しかけている。この世界では肉体の見た目はその精神に左右されるのだろう。現実世界とはちょうど逆に。

自分に自信のない者がお金をかけて外見を飾り立てたり整形したり、足繁くフィットネスジムに通ってスタイルを維持したりする。そうすることによって自分に自信を持ち、精神の安定を得る。現実世界では肉体が精神を変質させる。

ガルドの肉体の変化は、精神の変質が外見に表出した結果なのだろう。

飛鳥は変化し続けるガルドを視界の端に捉えながら、迫り来る蚩尤の巨大な頭部に意識を戻す。

「アスカ、同時にいくぞ」

「うん！」

金色の疾風と金色の流星。黒雲と砂塵渦巻く荒野を、二つの光源が尾を引きながら美しい曲線を描く。それは小山のような蚩尤の頭部の手前で、唐突に飛び上がる。

「うりゃああああっ！」

飛鳥は空中で前転し、跳び蹴りの体勢になる。アレンは魔剣グラムを逆手に持ち、切っ先を真下に向けて狙いを定める。

飛鳥は全身の力を踵に込め、一般家屋のリビングルームほどもある蚩尤の眼球へ飛び込んでいく。同時にアレンの剣も、見開かれた瞳孔のと真ん中へ深々と突き刺さっていた。

猛烈な勢いで突風が吹き上げられ、一瞬遅れて轟音が爆発する。破裂する眼球の勢いを利用して飛び退いた飛鳥とアレンは、着地と同時に駆け出しながらそれが蚩尤の苦悶の声と知る。

蚩尤は両手で目を覆い、残りの四本の腕で立ち上がるうともがく。しかしアレンに断ち切られた膝裏の腱はまだ再生されていないらしく、バランスを崩すと地面に地響きを立てて身体を落とす。

「アレン、やったね！」

「う、うむ……」

アレンはやはり手応えに違和感を感じた。眼球に剣を突き立てるなどという経験はアレンも初めてだったが、それにしても先ほどの手応えは眼球というより砂の塊に剣を突き立てたようなざらつとした感触だったのだ。

飛鳥とアレンは身悶えしながら地面を揺らし続ける蚩尤の巨体を大きく回り込み、ガルドの足下まで戻る。ガルドはすでにその姿を完全な“天使”へと変えていた。

『待たせたな、吹き飛ばされないように踏ん張っとけよ』

純白の裾が風に翻る。ガルドの全身は白いシートを巻き付けたようなローブに包まれている。足は古代ギリシャのような紐付きのサンダルを履いている。肩から剥き出しになった腕は白く、魔王だった時の赤黒い肌とはまったく違って絹のように滑らかだ。

顔はガルドの顔に戻り、角は消えている。しかし短くくすんだ金髪は、長く美しいウェーブを描く長髪へと変わっている。それはうなじの後ろで一つにまとめられ、黄金の尻尾のように白く輝く両翼の間に伸びている。

天使へと変化してもなおたくましい両腕を前に伸ばし、ガルドは両手のひらで球体を包み込むように手首同士を合わせる。そして

その中が白く輝き出す。

蚩尤はようやく立ち上がるところだった。黒い空洞となった両眼が洞窟のように口を開いているが、血などが流れている様子はない。唐突に不気味な低い声が飛鳥の脳内に響いてくる。

『フェアリーどもの魔法か…… そんなもので我を滅せると思つか
「しゃべった？」

飛鳥は思わずアレンを見る。アレンは厳しい表情のまま前髪を風に靡かせ、蚩尤をじっと見上げている。

『やってみなきゃわかんねえだろ？』

ガルドは不遜に微笑み、光球を胸に引き寄せる。頭上の光輪が輝きを増し、黒い空を白い光で染め上げていく。

『ではやってみるがよい』

『言われるまでもねえ！』

光輪が一際強く光を放つと、ガルドは両腕を勢いよく前に突き出した。

直径一メートルほどの小さな白い光球が、音もなく蚩尤の胸の真ん中へ埋め込まれる。数百メートルの距離を光の速さで飛翔した光球を、蚩尤の巨体は避けるべくもなかった。

『む？』

胸に埋まった光球をかき抱くように、蚩尤は六つの手のひらを白い光に翳す。光球は徐々に胸に埋まっていきながら、その輝きを増していく。

すると蚩尤の周囲の空間に、白い線が発生する。それは胸の光球へ向けて集束していく。白線は見る間にその本数を増やし、無数の光線となって光球へと吸い込まれていく。

『行け、“アルテマ”！』

世界が白で埋め尽くされる。音もなく膨張した白色光は、そのまま地上の恒星となった。

飛鳥は足下の地面が消失するのを感じる。踏ん張るべき地面がなくなってしまったため、飛鳥は塵埃のように吹き飛ばされる。

咄嗟にその手首が誰かに握られる。白い破滅の光の中で、アレンが飛鳥の手首をしっかりと掴んでいた。飛鳥の腕は力強く引かれ、硬質な装甲板で覆われた胸にしっかりと抱きしめられる。世界は強烈な白色の光と膨大な聖なるパワーの奔流に満たされ、飛鳥はアレンとその世界の中にたった二人だけで取り残されたように感じた。

どれだけの時間が過ぎたのだろうか。飛鳥がアレンの胸の中で目を開いた時、周囲の様相は一変していた。

飛鳥とアレンは巨大なクレーターの中腹に、砂の前半は埋まるようにしてしゃがみ込んでいた。

クレーターは直径数キロメートルはありそうで、下半分は赤黒い土が露出している。

薄茶色の砂がその土を覆い隠すように流れ下り、大きさは桁違いだがまるでアリジゴクのようなのだ。

アレンの肩越しに周囲を見回すと、クレーターの縁にガルドが浮かんでいるのが見える。その姿は元の魔王の姿に戻っていた。

「アスカ！ アレン！」

小さな黒い物体が飛んで来る。スピニツチだ。どうやら無事だっ

たらしい。

「スピニツチ、大丈夫だったの？」

飛鳥は立ち上がるとバランスを崩す。足下は柔らかい砂で、斜面はかなり傾斜している。砂から足を抜いて、飛鳥は空中に駆け上がる。

「ミーは大丈夫にゃ、でもガルドはかなり魔力を消費して気絶寸前にゃ」

「これだけの魔法を使えばねえ」

飛鳥は呆れたようにクレーターを見下ろす。確かにフェアリーが周りに何もいないところで使えと注意するわけだ。

「す、すまないが引き上げてくれないか」

飛鳥の足下でアレンの声がする。見るとアレンがアリジゴクに捕らえられた蟻のように、砂といっしょにずり落ちていく。必死に斜面をよじ登ろうとしているが、流れる砂に足を取られて登れないようだ。

「あはは、さすがのアレンもこりゃ無理だね」

飛鳥は両手でアレンの右腕を掴み、空中を踏みしめながら引き上げる。飛鳥はアレンを宙づりにしたまま、ガルドの方へと駆け上がっていく。アレンの左手には、魔剣グラムがしっかりと握りしめられている。

クレーターの縁まで上りきると、ガルドが力なく笑いかける。

『アイツ跡形もなく消えやがった』
「うん、やったねガルド！」

飛鳥の満面の笑顔に、ガルドは鋭い爪の伸びた親指を立てる。いつもの勢いが無いのは、かなり疲労している証拠だろう。けれどまだ人の姿に戻っていないところを見ると、以前のような枯渴状態の心配はなさそうだ。

「とりあえずどつか休めるところに……」
『これで終わるか』

飛鳥が歩き出そうとすると、どこからともなく蚩尤の声が聞こえる。

「なに！」

全員がクレーターの底を見る。そこには青く輝く球体が浮かんでいる。

「ま、まさか！」

スピニツチの甲高い叫び声が風に紛れて霧散する。
青い球体は一瞬のうちに飛鳥たちと同じ高さへと浮かび上がり、その周囲に砂が集まり始める。

「と、とりあえず逃げるにや！」

飛鳥は走りながら背後を振り返る。クレーターの中では、すでに蚩尤の巨体が身を起こし始めていた。

152話：スピニツチの決意

「一体どういうこと！」

走りながら飛鳥は、横に並んで飛ぶスピニツチへ叫ぶ。周囲の砂が蚩尤に引き寄せられるように、後方へと流れていく。

「蚩尤は砂や土でできたモンスターだったんにゃ！ あれじゃいくら攻撃しても無駄にゃ！」

「ええっ？ じゃどうすればいいの？」

ガルドは蚩尤の方を見ながら後ろ向きに飛んでいる。その表情は苦渋に満ちている。起死回生の攻撃が、蚩尤が言った通り無効にされてしまったのだ。

「本体を倒すしかない」

流れる砂の川を遡るように、アレンが走りながら応える。止まったら足を砂に取られて転倒してしまうだろう。そしてそのまま、蚩尤に取り込まれてしまうかもしれない。飛鳥たちがいかに勇者だとしても、あの膨大な量の砂や土の塊に取り込まれてしまったら間違いないく窒息死だ。

「本体って…… さっきの青い球？」

「そうにゃ」

ようやく砂の流れの外に出る。すり鉢状にへこんでいく大地の中心に、さっきよりも巨大になった蚩尤の上半身が出ている。上半身だけですでに数百メートルはあるだろう。立ち上がったらまさに雲

を突く巨人だ。

「蚩尤がズサによ町によ地下から出てきたわけが、これでわかったにや。蚩尤はクレイゴームによ一種にや。倒すには魔力によ中心である、あによ青い球を破壊しなきゃにやらにやいにや」

「だ、だって青い球はアイツの身体ん中でしょ？ あんなでかい身体じゃ、アレンの剣も届かないよ。アタシの遠当てだってそこまでの威力はないし……」

蚩尤の身体は砂や土でできているが、その防御力は強固だ。身体の深いところにある青い球に直接攻撃するなど至難の業だろう。

「俺がまたアルテマを放てば可能だろう」

ガルドが真剣な顔で飛鳥たちを見下ろしている。

「そつか！ その手が」

「無理だ」

飛鳥の喜びをアレンの静かな声が遮る。飛鳥は訝しげな表情でアレンを見るが、ガルドとスピニッチはそれが当然とばかりに何も言わない。

「それをするならさつきがチャンスだった。ヤツはもう二度と本体を見せることはないだろう。ガルドがアルテマでヤツを破壊してもすぐ身体を形成して復活するだけだ」

「じゃ、じゃあどうすればいいのよ！」

蚩尤はすでに下半身の形成に入っている。巨大な角を生やした兜頭が、見る間に上昇していく。ただでさえ弱い陽光が、蚩尤に遮ら

れて暗くなっていく。六本の手にはそれぞれ武器が握られている。先ほど飛鳥が攻撃した時に武器が消えたのは、砂で作られていたからだろう。

「蚩尤によ本体を攻撃する方法はあるにや」

全員の視線がスピニッチへ集まる。スピニッチは心持ち俯いて、細い目を苦しげに地面へ向けている。

「位相転移魔法……」

アレンの発したその単語の意味を理解するのに、飛鳥は数瞬を有した。そしてその意味に気づく。

「ダ、ダメだよ！ それってあの中に瞬間移動するってことでしょ？ そんなことしたらスピニッチ死んじゃうよ！」

飛鳥は俯いて肩を震わせる。

水圧があるように砂にも圧力がある。ましてや蚩尤の身体は、魔法によって鋼鉄並の密度で固められている砂の塊だ。そんな中に瞬間移動したら、移動し終わった時点でスピニッチは一瞬のうちに圧死するだろう。

「本体が見えれば、死ぬ前に攻撃は可能にや」

スピニッチの位相転移魔法は精神的なつながりで移動する。一度会った者のところへは、どんなに距離が離れていても瞬時に移動できる。それが例え敵であっても。

スピニッチが圧死せずに攻撃を成功させるためには、本体を一瞬だけでも露出させればいい。それができるのは……

「アレン、頼めるかにゃ」

アレンは眉間にしわを寄せて蚩尤を振り仰ぐ。

「本体の場所はある？」

「ここにゃ」

スピニッチは胸の真ん中を短い前足で、軽く二度叩く。それは心臓の位置だ。

「目測で上空五百メートルというところか。そこまではさすがに跳び上がれないな…… アスカ」

アレンが飛鳥を振り返る。飛鳥は戸惑ったように顔を上げる。やつれたような顔の苦しい目に、前髪がかかっている。

「私を本体のところまで連れて行ってくれないか」
「そ、それって……」

本体が心臓の位置にあるのであれば、露出させるためには身体の前後から攻撃しなければならない。確かにアレンならば可能だろう。蚩尤の胸板は厚く、数十メートルは掘らなければ本体まで到達しない。しかもこの場合強固な防御力を打ち破って、一撃で本体まで穴を穿たなければならないのだ。飛鳥の打撃では、本体までたどり着く前に穴を埋められてしまうだろう。

『ならば今度は、俺が囷になる役だな』

ガルドは人間の姿に戻る。その方が動きやすく避けやすいからだ。

ガルドが囃役になるのも必然なことである。ガルドでは、アレンを吊り下げたまま蚩尤へ近づくことなどできないからだ。

「スピニツチ、死なないでね…… 絶対、絶対助けるから」

飛鳥はスピニツチの小さな身体を抱きしめる。いつもは嫌がって暴れるスピニツチも、大人しく飛鳥の胸に抱かれている。

「ファンタジアを…… 世界を救うまでミィは死ねにやいにや。ミィも飛鳥たちによ仲間によんだからにや」
「うん…… うん……」

飛鳥はスピニツチの黒い毛玉のような身体に顔を埋める。
作戦は決まった。後はそれぞれが確実に自分の役割をこなすのみ。

「じゃ行くぜ、スピニツチまたな！」

ガルドが山のような蚩尤へ向けて、地面を滑るように超低空飛行で飛んでいく。それを合図としたかのように飛鳥はアレンを両手に吊り下げて、蚩尤の死角へと空中を駆け上がっていく。

スピニツチだけはただ一匹、ゆっくりと蚩尤の胸の高さまで上昇していく。

折しも雲間から差し込む光の柱が、荘厳な世界を作り出していた。

153話：魂の残滓

相手が巨大であればその動きが遅いと思い込むのは早計だ。蚩尤は巨大でも動きはかなり速い。移動も反応も。数百メートルを一瞬のうちに移動し、飛鳥の攻撃にもしっかり反応していた。飛鳥が少しでも躊躇していたらやられていただろう。

決して気は抜けない。

ガルドは攻撃よりも移動に意識を集中している。流れるような地面の中、ガルドは何か違和感を感じる。砂と土だけしかない元ズサの町だった荒野に、金属的な何かを発見したのだ。

「あれ、もしかして……」

ガルドは若干左に進路を変更し、目を懲らす。それはガルドの斬^{デス}魂鎌^{・シッケル}だった。

斬魂鎌は破損することなく砂に埋もれていた。ガルドはその大鎌を拾いあげ、軽く振ってみる。

「うん、大丈夫みたいだな」

他の荷物はすべてなくし、建物や植物さえも消滅してしまったズサの町で唯一残っていた物。ガルドはこの武器に何か絆のようなものを感じ始めていた。

その時ガルドの第六感が警鐘を鳴らす。見ると蚩尤が巨大な矢を弓につがえ、今まさに放たんとしているところだった。

「おわっ！」

ガルドは即座に真上に飛び上がる。直後、ガルドのいたところに

野太い矢が刺さる。いや、それはすでに“矢”とはいえない大きさだった。太めの電柱ほどの矢が、音速を超えるスピードで飛来したのだ。

巻き上がる砂煙と衝撃派が、ガルドを下方から翻弄する。

「くっそ、あつぶなかった……」

斬魂鎌との邂逅に気を取られていた自分を叱咤し、ガルドは改めて蚩尤の巨体を睨みつける。

距離およそ二百五十ヤード。間近にそびえる蚩尤の巨軀は、まるで切り立った絶壁のようだ。遠近感が掴みづらい。

「アスカとアレンは…… あそこか」

アレンを宙づりにした飛鳥は、目立つ超シールドを消して蚩尤の右側面へ回り込んでいる。それは確かに人間だったら死角といえる位置だが、果たして蚩尤に死角はあるのだろうか。ガルドには一抹の不安があった。

蚩尤は砂と土の巨人だ。つまりその身体を構成している物質は、ただの砂と土である。そうなれば眼球などただの飾りに過ぎないのではないか。

では蚩尤は、どういう方法で外部情報を認識しているのか。出てくる答えは一つ。魔力による索敵だ。

「タンポポ綿毛がいっぱいありゃあ、一個ぐらい気にしてらんねえだろ」

ガルドは魔王変化せずに闇の魔力の内圧を高める。

魔王変化している時はいつもそうなのだが、闇の魔力は蠢惑に満ちている。異常な高揚感と攻撃性に支配される。膨れあがる闇のパ

ワーを押さえつけ、ガルドはその力を斬魂鎌へ注ぎ込む。

鈍い銀色に光っていた刃が、薄紫色に染まり始める。ガルドはその方法を知っていたわけではない。しかし本能的にできると確信していた。それはこのファンタジアだからこそできること。吸い取った魂の呼び戻しだ。

「何か名前つけねえとな……」

ガルドは蚩尤へ距離を詰めながら大鎌を構える。深いクレーターを一步で乗り越え、蚩尤は剣や槍を構えて襲いかかってこようとしている。

ガルドは自らの姿を見せつけるように、蚩尤の真正面へ急上昇する。そこへ蚩尤の六本の腕が、交互に武器で斬りつけてくる。

「うおわあっ！　っと、危ねえ！」

サイズを元に戻しておいて正解だった。魔王変化したままだったら、避けきれなかっただろう。いや、普通の人間サイズだったからこそ当たらなかったと言えればいいだろうか。蚩尤の攻撃はその大きさと比較しても、驚異的に速い。

「くっ、もうこれでいいや！　ザオリク！」

ガルドは蚩尤の攻撃を避けながら、大鎌に込めた闇のパワーを解放した。

「あ、あれなに？」

飛鳥は驚いて思わず声を上げてしまう。アレンも同様に目を見開いている。ガルドがいつの間にか手にしていた大鎌から、白い光が

無数に飛び出してくるのだ。

一つ一つはさほど大きなものではないが、その動きは複雑怪奇でまるで生きているようにも見える。

螺旋状に上昇していくものもあれば、蚩尤の周囲を飛び回ってか
らかっているような動きをするものもある。蚩尤にぶつかってまる
で攻撃しているようなものもあれば、ぴったりくっついて寄り添っ
ているようなものもある。

とにかく明確な統一性がなく、悪く言ってしまうえば適当に動き回
っているという感じなのだ。それはとても攻撃しているようには見
えない。

「私もわからんがおそらく…… あ の 鎌 が 今 ま で 殺 し た 者 た ち の 魂
ではないだろうか」

「た、魂？」

アレンは無数の白い光が、大鎌の刃から放出されるのを見た。だ
からこそそう思ったのだが、それは確かにその通りだった。

いくらファンタジアといえども、死んだ者が元通り生き返ること
はない。それこそアンデットにでもならない限り。

アンデットは魂の入れ物たる肉体が動き回るモンスターであるが、
ガルドの使ったのは魂自体を一時的に呼び戻す魔法だった。それは
ある意味、ファンタジアの常識を覆す魔法でもあった。

「きれい」

飛鳥は走りながらではあったが、しばし今自分が戦いの最中にあ
ることを忘れてしまう。モンスター化してしまったとはいえ、死神
に殺された者たちは元は普通の人間たちなのだ。

飛鳥は思う。どんな悪人でもその命の尊さに変わりはない。死ん
でいい人間などいない。罪を憎んで人を憎まずというけれど、そ

れはきつと真実なのだ。

「アスカ、今がチャンスだ。ヤツの正面へ回ってくれ」
「う、うん！」

まるで蛍のように無数の魂が舞い踊る中、飛鳥はアレンを連れて一気に上空へと駆け上がって行った。

153話：魂の残滓（後書き）

1ヤード＝0・9144メートル、よって250ヤード＝22
8・6メートル

154話：死闘、決着！（前書き）

横書き推奨です。

154話：死闘、決着！

粉雪の舞い散る中踊り狂う古の武芸者のように、蚩尤は六本の腕を振り回して魂たちを振り払っている。風圧に翻弄されながらも飛鳥は空高く駆け上がる。

「あの腕が邪魔だね」

六本の腕が縦横無尽に動き回り、巨大な武器や手のひらで一度に数個まとめて魂が押しつぶされている。それでもなお無尽蔵に湧き出てくる白い魂の蚩が尽きることはなく、明かりへ群がる夏の虫たちのように蚩尤へ執拗にまとわりついていく。

飛鳥もガルドも蚩尤の視界内にいるが、攻撃してくる様子はない。おそらく周囲の魂たちの方が“ウザい”と感じているのだろう。

「構わん、このまま突撃してくれ。直前でシールドを張ればいい」

「そっか、そうすればこっち向くよね」

飛鳥は横目でスピニッチを確認する。遙か後方の空に、豆粒より小さな黒い点が浮かんでいる。雲間から差し込む光の柱を背に、スピニッチは固定されたように微動だにしない。おそらく蚩尤にその存在を感知されないように、息を潜めてタイミングを見計らっているのだろう。

「スピニッチ待っててね。絶対死なせたりしないからね」

飛鳥は小さく呟くと、若干踏み応えの薄くなった空気を蹴って走り出す。頬に湿り気を帯びた冷たい空気の流れを感じる。魂の残滓は潰されてもなお、微少な光となって周囲に漂っている。飛鳥とア

レンはその光の中加速していく。

「アレン、行くよ！」

「うむ」

アレンは飛鳥の手から右手を放し、腰の鞘から魔剣グラムを抜き放つ。同時に飛鳥の全身から金色の炎のような光が迸る。魂たちを巻き込みながら、金色の流星が黒くそびえ立つ暴風に向かって行く。

「こつち向けええ！」

飛鳥の絶叫が届いたのか、横を向いて腕を振り回していた蚩尤の身体が正面を向く。銀色に鈍く光る蚩尤の甲冑が目前に迫る。上下左右全方向から手のひらの迫ってくる気配があるが、飛鳥は気にせずまっすぐと突っ込む。蚩尤の胸のど真ん中、距離約二十メートルで飛鳥はアレンを力一杯前に押し出す。その瞬間、アレンの剣から蚩尤へ向かって竜巻が吹き出した。

「Das Eindringen Angriff！」

それは剣圧による暴風だった。破壊力よりも貫通力に特化した打突を神速で繰り出す。アレンの右腕は目に見えない速さで無数の突きの咆吼を放つ。

『むう、な、何を……』

蚩尤はアレンの意図を悟ったのか、武器を消失させた手のひらで押しつぶそうとする。しかしアレンの攻撃はすでに蚩尤の胸に数十メートルもの穴を穿っていた。

「うおおおおおおおっ！」

アレンは右腕の腱がちぎれていく激痛に顔を歪め、脂汗を流しながらも攻撃を止めない。そしてついに、穿った穴の奥に蒼い輝きが見え始める。蚩尤の本体だ。

『私の本体が狙いか！　だが押しつぶして塞げばよいだけのこと！』

蚩尤は手のひらで、アレンを胸に掻き抱くように押しつぶそうとする。しかしその手のひらが爆発する。

「させるかあああっ！」

飛鳥だった。飛鳥は投げたアレンを追ってそのまま疾走し、アレンを押しつぶそうとした蚩尤の手のひらを殴り壊したのだ。

「アレン！」

右腕を押さえながら、アレンは失速して落ちていく。飛鳥は蚩尤の胸に開けられた大穴の直前で、アレンを追って急降下する。手首から先を失った蚩尤の腕の奥に、蒼く輝く球体が見えた。

「今にや！」

スピニッチは細い目をかっと見開くと、瞬時に煙となって消滅する。直後、アレンの開けた大穴の奥に現れる。

「これで終わりにや！」

スピニッチは前足に握っていた銀の短剣を力一杯突き出す。その

瞬間膨大な量の砂と土が、スピニツチの全身を押しつぶした。

「スピニツチiiiiiii!」

飛鳥はアレンを追いながらも、蚩尤の胸の穴を見上げる。太くまっすぐと伸びていた蒼い光は一気に細い糸のようになり、ついには消えてしまう。後には何事もなかったかのような、胸の表面があるだけだった。

「くっ、アレン!」

アレンは意識を失っているのか、そのまま頭を下にして落ちていく。すでに蚩尤の腰を過ぎて膝の高さまで落下している。飛鳥はこのままでは追いつけないと思い、真下に向け走り始める。

その時、蚩尤の足が動いてアレンを蹴り上げた。

「アレン!」

空高く蹴り上げられたアレンを、飛鳥は目で追う。そこに蚩尤が剣を振り下ろす。

『この虫ケラどもが!』

「アスカ!」

剣が飛鳥に当たる瞬間、ガルドがツバメのように飛翔して飛鳥に体当たりする。

「ぐあっ!」

そのままガルドは蚩尤の剣で打ち落とされる。直下の地面に大穴

が開き、土煙が巻き上がる。

「ガルド！」

飛鳥は体勢を立て直して、白煙を上げる地面を見る。ガルドの墜落したところには黒い大穴が開き、その姿は見えない。

「ちつくしよおおっ！」

飛鳥は込み上げる涙を堪えきれず、齒を食い縛って駆け上がる。周囲に白い魂たちがまとわりつき、金と白の尾を引きながら飛鳥の軌跡が縦に半円を描く。

「スピニツチ、アレン、ガルド…… みんなの仇だあつ！」

飛鳥は涙の粒を後ろに引きながら、スピニツチが埋まっているはずの胸の真ん中へ向けて突撃する。

その時、蚩尤の頭が崩れた。

『ぐおっ、ぐああああ！』

二本の腕で頭を押さえようとするが、その腕も泥のように崩れていく。蚩尤の身体からは、青い液体が滲み出てきていた。

『ま、まさか…… この我が！ バ、バハムート様！』

飛鳥は急停止して、青い液体の混じった膨大な量の泥の山ができあがっていくのを流れる涙を拭いもせず呆然と見ていた。

154話：死闘、決着！（後書き）

<独語>

D a s E i n d r i n g e n A n g r i f f : 突貫剣撃

155話：竜王の影

「う、うう……」

泥をかき分けながら、ガルドが地面から這い出してくる。全身真っ黒に汚れているが、かるうじて生きているようだ。

「ガルド！」

飛鳥は駆け下りて行って、ガルドの腕を引く。ガルドは這い出ると、泥の上に仰向けに倒れる。

「サ、サンキュ。お、俺は大丈夫だから、スピニッチとアレンを助けてやってくれ」

ガルドの胸は大きく上下し、息も荒い。それでもまだ生きていることがわかっただけでも、飛鳥は嬉しくて涙がこぼれてしまう。

「わ、わかった！」

飛鳥は湿った土の山に登り、スピニッチの埋まっている辺りをものすごい速さで掘り始める。一掻きごとに大量の土と泥が飛び散って、山はその形を崩していく。飛鳥は顔や身体が汚れていくのにも気にせず、掘り続ける。汗が目に入って腕で拭う。それでも飛鳥は掘り続ける。

「はあ、はあ…… スピニッチ絶対助けるからね」

十メートル以上掘り続け、飛鳥の手には青い液体の混じった水分

過多の泥が触れるようになる。すると穴の底の方に小さな黒い毛玉を発見する。

「スピニツチ！」

飛鳥は穴の中へ頭から突っ込んでいつて、スピニツチを両手で掻き抱く。湿った毛が飛鳥の顔を汚し、生臭い匂いを放つ。飛鳥は気にせずスピニツチを泥の中から引き出した。

「スピニツチ！」

スピニツチは目をつぶっている。首は力なく垂れ、生命力を感じない。飛鳥は慌ててスピニツチの小さな胸に耳を当てる。するとほんの微かだが、鼓動が感じられた。

「生きてる！ スピニツチ生きてるよお！」

飛鳥は涙と泥で酷い状態になった顔に満面の笑みを浮かべ、即座にキュアの魔法をかける。飛鳥のキュアは主に外傷治療の能力しかないが、スーパーモンクヘクラスチェンジしてから少しは体力回復もできるようになっている。

穴の底で懸命に魔法をかけていると、ようやくスピニツチの身体がぴくりと反応した。

「スピニツチ！」

「ん……んにゃ……」

「スピニツチ、ああ、よかった！」

口が開いて小さな牙がのぞく。飛鳥はスピニツチを大切に胸に抱いたまま穴から出て、ガルドの倒れている横で膝をつく。

「ガルド、スピニツチ生きてたよ」

「あ、ああ…… よ、よかつ、いてっ！」

ガルドはどうやら骨折しているようだ。肋骨を押さえて顔を顰めている。飛鳥は手のひらをガルドの脇腹にあて、キュアの魔法をかける。程なくしてガルドの呼吸は落ち着いてきた。

「アタシが格闘家じゃなくってモンクでよかったね。じゃなきゃ、二人とも今頃死んでたかもよ」

「そうだな。回復魔法のできるヤツがパーティにいねえと、RPGは攻略できねえからな」

飛鳥とガルドは、顔を見合わせて笑い合う。

「ミーがよくにやったらガルドは完璧に治してやれるにや。それよりアスカはアレンを捜すにや」

「そうだ、アレン！」

忘れていたわけではないが、スピニツチとガルドが無事だったため安心してしまっていた。飛鳥は立ち上がってアレンの飛ばされた方を見る。

気流を遮る存在であつた蚩尤が消滅したせいか、荒野には激しい横風が吹いている。巻き上げられた砂煙が真っ白に視界を埋め、時折渦を巻きながら吹きすさんでいく。

その向こうから、うつすらと灰色の人影が見えて来る。その人影は、左腕で右腕を押さえて一步一步ゆっくりと歩いてくる。飛鳥の常人より優れた視力は、即座にそれが誰なのか識別する。

「アレン！」

風に流されて靡く髪をそのままに、飛鳥は駆け出す。その時飛鳥はようやく感じたのだ。幻魔との戦いから始まったこの一連の死闘が、ようやく終わったのだと。

「アレン！」

走り寄る飛鳥に気づいたアレンが、微笑みながら小さく左手を挙げる。飛鳥はアレンの胸に力一杯飛び込んでいった。

「いてっ、いててててっ！ もっと優しくしてくれよ！」

「なにわがまま言ってるのよ。アタシがオ、ン、ブ、してあげてんだから贅沢言わないの」

何もない荒野にいたらモンスター軍の格好の餌食だ。飛鳥たちは一路南に向けて移動を開始している。

一番重傷だったのは実はガルドだった。全身の骨が十箇所以上骨折していたのだ。そのため飛鳥のキュアでは治療しきれず、スピニツチの回復を待つて治療することにした。

スピニツチは蚩尤の内部で押しつぶされる直前シールドを張ったようで、思ったより元気だった。しかし何トンもの圧力に耐えるために魔力をほとんど消費してしまい、その後飛鳥に助け出されるまで生命維持に尽力していたのでガルドを治療できるほど余裕はない。今はアレンの肩に掴まってだらけている。

アレンの右腕はほぼ使い物にならなくなっていた。ほとんどの腱がちぎれていたのだ。しかし自らの内部へは治療することのできるアレンは、時間はかかるが完治させられるようだ。

「しっかしあいつら、ほんと陰険なヤツらだったよね。親しい人に化けて騙そうとするなんてさ」

飛鳥はガルドを軽々と背負いながら、頬を膨らませている。

「まあお陰でモンスター軍のナンバースリーを引つ張り出せたんだから、結果オーライだよな」

「あ、そう言えば！」

飛鳥はガルドを背負ったまま、後ろを歩くアレンの肩にいるスピニツチを振り返る。

「一気に戦いになっちゃって忘れてたけど、アンタクウエンディ女王になってた幻魔倒すとき『もう女王様によ使い魔じゃにやいにや！』って言ってたよね。あれどういうこと？」

「ああ、あれかにゃ……」

スピニツチはアレンの肩に顎を載せ、疲れたように目を伏せる。元々糸のように細い目なのでよくわからないが。

「ミーもこれからは蚩尤戦のように、アスカたちといっしょに戦いたいと思ったにや。ただそれだけにや」

「そう、ならいいけど……でも使い魔はいっしょに戦っちゃいけなかったの？」

「そついうわけではにやいけど……」

スピニツチの答えは歯切れが悪く、そのまま眠そうにして口をぐぐんでしまう。意味ありげに顔を見合わせるアレンとガルドに気づくこともなく、飛鳥は「そっか」と言って前を向く。

「でもナンバースリーを倒せたんだから、ツーもワンも何とかかなりそうだね。バハムートだかなんだか知らないけど、この調子で」

「なんだと！」

「うげっ！」

ガルドが突然腕に力を込める。首を絞められて飛鳥は顔を真っ赤にして、ガルドの腕をタップする。

「ガ、ガルド苦しい、苦しいってば！」

「あ、ああ、すまん…… お、お前今なんてった？」

ようやく呼吸ができた飛鳥は、眉根にしわを寄せて背中の中のガルドを見る。

「アイツが死に際に言ったんだよね。『バハムート様！』って。あれってナンバーワンかツーのことでしょ？」

「ツーにゃ」

ガルドより先にスピニツチが言葉を挟む。

「モンスター軍によ最高司令官がバハムートにゃ」

「RPGじゃラスボスに匹敵する最強のモンスターだ…… 別名“

竜王”」

「竜王……」

ガルドの腕が小刻みに震えている。それは間違いなく恐怖から来

るものだった。

砂塵渦巻く荒野を、飛鳥たちは無言のまま進んで行く。その姿は、程なくして砂煙に紛れて見えなくなっていくた。

156話：終焉の地

曇天の夕暮れ時は必要以上に人を不安にさせる。灰と白のまだら模様に染め上げられた低い空が、徐々にその色合いに黒を塗り込んでいく。

飛鳥たちは今、緩やかな丘を柔らかい風に吹かれながら下っている。これが散歩ならとてもよい気候なのだが、次第に心へ重くのしかかる不安によってその足取りは軽快とはほど遠い。

蚩尤との死闘を全員の力で乗り越えてから一週間。飛鳥たちはファンタジアの首都、ファンタジアの近くまで来ていた。

これまで二つの村を通り過ぎてきたが、どの村も生き残った人は皆無だった。荒廃した村で宿を取り、旅するのに必要な物を拝借した。

全滅してから二年以上経っているということもあり、食料には期待していなかった。しかし思ったより長持ちをする干し芋や乾燥豆は残っており、飛鳥たちはそういったものを丁寧に集めて携帯用の食料とした。

村を襲ったのは間違いなくモンスター軍であろうが、死体は一体も見当たらなかった。白骨死体でさえも。モンスターが人を喰らうのは知っているが、骨まで食べ尽くすのは聞いたことはない。悪食で有名な狂戦士でさえ、人間の骨は残すのだ。

もしかしたら骨を分解する能力を持つ微生物でも、ファンタジアには存在するのだろうか。

飛鳥はそんなことを考えながらも、死体を見ずに済んだことに安堵した。しかし飛鳥のそんな妄想も、スピニツチの一言で霧散した。「みんなやモンスター化してしまったんや」

死体がないのも道理であった。厳密に言えば死んでいなかったのだ。モンスター軍は村という村、町という町で人々を襲い次々とモンスター化させていった。

つまりファンタジアはもともと、モンスターの大军団に襲われたのではない。限られた数のモンスターによって、モンスターにさせられていったのだ。

始めは少ない数でも、モンスター化させられた人がさらに人を襲う。親が子を子が親を。恋人同士や友人や隣人同士が殺し合い、互いをモンスターへと変えていく。

きっとファンタジアは伝染病が蔓延するかのようになり、ねずみ算式にモンスターの数を増やしていったのだろう。

「なあんかこの辺がむかむかすんのよねえ」

飛鳥は胃の辺りを撫でながら、面白くもなさそうにくるぶしまで生い茂った草むらをかき分けていく。

昨夜アレンが捕まえてガルドが調理した野ウサギの肉が、胃にもたれているのだ。保存の利く食料を無駄に消費するわけにはいけない。かといって、人間が生き残っている村や町なども期待はできない。

そうなる飛鳥たちも生きるためには殺生をしなければ生き残れない。木の実や小川の水が、そうそう何度も上手い具合に目の前に現れるわけではないのだ。

「贅沢言うな、飢え死にしないでください」

スピニツチに治療してもらって、元気いっぱいガルドが苦笑する。肩にはすでに相棒となった斬魂鎌を担いでいる。

「生きるためとはいえ、我々のしていることもモンスターと大差ないのかもしれない」

アレンは大きな麻袋を肩に提げ、黙々と歩いている。蚩尤との戦

いで兜と盾を無くし、残っているのは身に付けていた鎧とこれまた相棒の魔剣グラムだけだ。グラムは腰の鞘に収めている。兜を被っていないアレンの頭は、弱々しい陽光でもその豪華な金髪が神々しい輝きを放っている。

アレンの右腕もすでに完治した。ここまで何度か野生のモンスターに遭遇したが、すべてアレンが一刀のもとに屠っている。

「仕方ないにや。ファンタジアを解放したら改めて悔い改めるにや」

スピニッチは黒い蝙蝠のような羽を忙しく羽ばたかせて、飛鳥の頭の横をふわふわと飛んでいる。こちらも体力は完全に回復している。ガルドほどではないが、スピニッチの魔力もかなり高い。かなりの大怪我でも、一瞬のうちに治してしまう。戦いには不向きでも、パーティの重要な後方支援メンバーといった立ち位置と言えるだろう。

そんなスピニッチは基本的にクールで、あまり人に媚びを売らない。この世界に飛鳥を召喚した張本人で付き合いが一番長いにも拘わらず、基本的にはべたべたしない。まさに見た目通り、猫の孤高さを持っているのである。

しかしこのところスピニッチは、夜寝る時には常に飛鳥のそばに寄り添っている。人間と違って睡眠時間が少なくていいスピニッチは、だいたいにおいて夜の見張りを担当している。それが常に飛鳥の傍にいるのだ。

今まではふいにどこかへ行ってしまうことも珍しくなかっただけに、飛鳥も不審に思っただけか尋ねてみた。しかし「敵によ本拠地が近いからにや」と言っただけ、それ以上は黙ってしまう。本来それほど他人に深入りしない飛鳥だけに、そういうもんかで済ませてしまっている。

だがガルドは気づいていた。スピニッチは恐れているのだ。竜王

の影を。

その気持ちはガルドにも理解できた。竜王バハムートは、現実世界においても比肩する者のないほどの強さでもって語り継がれている。それこそ神話レベルの話で、世界中に言い伝えが残っているのだ。

ベヒモス、ビヒモス、バハムートなど、それぞれの言語で呼び名は変わり、その姿さえも千差万別だ。巨大なトカゲであったりサイヤカバであったり、場合によっては象の姿であったりもする。

ガルドの知っている姿はゲームに登場するドラゴンとしての姿だ。神々しく美しい流線型のそのメタリックな身体は、憧れこそすれ敵として戦うなどとは考えられない。ましてやスピニッチは現物を見たことがあるらしいのだ。

バハムートの正体を知りたいとは思ったけれど、スピニッチはその名前を口にするのではない。三人と一匹の中ではすでに、バハムートの名前を出すことはタブーとして暗黙の了解になっている。しかし間もなくそうも言っていられなくなるだろう。

三人と一匹は、とうとう首都ファンタジアに到着した。

そこは長い旅と戦いの日々が終焉する地でもあった。

157話：スピニツチの秘密

首都ファンタジア。そこはこの世界の中心であり、最大の都市でもある。壮大なファンタジア城を中心とした市街地は活気と熱気で溢れ、昼夜問わず人が途切れることはない。世界中から集まった物と人が混沌を作り出し消費され、また生み出されていく。

市街地から離れると閑閑な田園風景と閑静な住宅街が広がり、区画された道路や整備された灌漑施設が落ち着いた雰囲気醸し出している。ところどころには公園や文化施設があり、他の国より明らかに文化や文明のレベルが高いことがわかる。

ファンタジアは東西約三十キロメートル、南北約二十キロメートル、総面積六百平方キロメートル以上の敷地に数十万の人々が生活を営んでいた間違いなく世界の中心都市であったのだ。

モンスター軍に占領されるまでは。

灰色の空の下、青い水晶のような美しい尖塔が一本建っている。

その周囲には黒々とした建物群が緩やかな傾斜を見せて、その裾野を形成している。

しかし建物群はそのどれもが荒廃していた。壁や屋根の一部が崩落している程度のもはまだいい方だろう。柱を残して屋根だけになっっているものもあれば、完全に崩落して瓦礫の山になっているものもある。消滅する前のズサの町の方が、まだましだったと言えるだろう。

空爆を受けた跡のような荒涼とした廃墟の広がるファンタジアの市街地は、人間の姿はまったく見られない。その代わりモンスターたちが、まるで人間たちにとって替わったかのように闊歩している。

「あやあ…… 予想はしてたけど、こりやお城まで行くのは一苦労しそうだね」

飛鳥たちは今、ファンタジア外縁部に位置する農家の二階に潜んでいた。眼前には広々とした田畑が広がり、視界を遮るものはない。しかしファンタジア市街地の細かい様子までは、距離があるため見て取れない。空から偵察できればその様子ももっと詳しくわかるのだろうが、それこそ見つけてくれと言っているようなものだ。

それでも市街地の“賑わい”はわかる。オークやゴブリンといったモンスター軍の中核を成すモンスターたちがひっきりなしに歩き回り、時折飛び抜けて大きな狂戦士も歩いていく。空には翼を持ったモンスターが死肉に群がるカラスのごとく飛び回り、まさに人間の代わりにモンスターがファンタジアの住人になってしまったかのような様相を呈している。

「空をまつすぐお城まで飛んで行くって方法は難しいかなあ」

飛鳥はエスターへ突撃した時のことを思い出していた。数十万のモンスター軍の群れを強行突破し、エスターへたどり着いた時のことだ。あの時はガルドが命がけて囹役をしてくれたからこそ、飛鳥が単独でもエスターへ辿り着けたのだ。

「あそこにいるモンスターの数は、見た限りじゃアイリスの時より多い。それに今回は飛鳥一人でファンタジア城に行っても意味ねえからな」

ファンタジア上空の空は相変わらずの曇り空で、見える範囲に青空はない。竜王バハムートがいるとしたら空は赤く燃え立つような色になるはずだ。ブルードラゴンの時がそうだった。この世界へ飛鳥が召喚された時も。

強大なモンスターは気候や天候にも影響を与える。それはこの世界ではほぼ常識に近い現象だ。

ファンタジアの市街地はユグドラシル手前で感じたような禍々しい気配に支配されてはいるが、強大な敵の感覚はない。つまり今のファンタジアの状況を分析すれば、数十万単位のモンスターはいても、その指揮官たるバハムートは不在だと言えるだろう。

これをチャンスと見るか畏と見るか。

「ヤツらは私たちが来ることを間違いなく知っている。その上で隙を見せるとは思えない。今までのヤツらの手口からみても、畏だと考えた方がいいだろう」

アレンの言うことは至極もつともだ。ただモンスター軍が始めから飛鳥たちを殺そうとしたことは、実は今まで一度もなかった。そのチャンスがあっても、まずは籠絡することから始めているのだ。

そのことに気づいたのはズサの町でのことだ。幻魔は飛鳥たちを殺そうとはせず、ズサの町に留めておこうとした。殺す気ならチャンスはいくらでもあったのに。

そう考えると今までの戦いにも、不審な点はたくさんあった。イデアの村で淫魔に襲われた時や、ガザの町でジャグワじいさんやパドムはあさんに助けてもらった時もそうだ。キャリーの町でもヴァンパイアのヴラドはわざわざミライを人質に取って、飛鳥たちを手紙で呼び出したのだ。今考えればあれだっておかしい。ヴラドの強さを考えたら、レジスタンスのアジトに乗り込んで皆殺しにしてみればよかったのだ。

「ね、思ったんだけど“創造主”っていったい何をしたいんだろうね」

「ん？」

全員の視線が飛鳥に集まる。

「この世界を滅ぼすつもりかなって、アタシは思ったんだけど……」
「違うのか？」

ガルドが首を傾げて飛鳥に問いかける。飛鳥は慎重に言葉を選ぶ。

「違う…… ような気がする。この世界に來た時聞いた言葉の違和感に、今さらながらに気づいたんだよね」
「言葉の違和感」

今度はアレンが飛鳥の言葉を噛みしめるように呟く。窓の外では夜の帳が下り始め、もうファンタジアの市街地は闇の底に沈んでいる。

「うん。普通こういう時って『世界滅亡の危機』とかって言うでしょ？ アタシもよくわかんないけど」
「ああ、確かにそうだな」

こういうゲームっぽいネタには、ガルドがすばやく反応する。

「確かに“滅亡”とか“危機”って言葉は何度も聞いたけど、その中身って実は“占領”だったんだよね」

ガルドもアレンも黙って飛鳥の言葉を待っている。唯一スピニッチだけは窓の外の暗がりには、腕組みをしたまま視線を向けている。

「“占領”と“滅亡”って違うよね？ アタシバカだからよくわかんないけど」

「いや、それはとても重要なことだ」

アレンは顎に手を当てて考え込む。

「モンスターたちは確かにこの国の人々を殺し、他の国々にも攻め込んでいる。しかしそれは滅亡を目的としていないのだとしたら？」
「つまり“占領”か？」

アレンの疑問にガルドが質問で答える。アレンはしっかりとわずいて、スピニッチを見る。

「“創造主”はこの世界の王になろうとしている。そして人間の代わりにモンスターの世界を作り上げようとしている。そうだろう？ スピニッチ」

アレンの言葉に、スピニッチは気難しい横顔を見せたまま動かない。それは肯定という意味の無言なのだろう。

「え、え？ どういうこと？　なんでスピニッチに聞くの？」
「アスカ」

アレンが静かに戸惑う飛鳥の正面へ向き直る。

「スピニッチは元モンスター軍の参謀だった。モンスター軍最高司令官、竜王バハムートの」
「えええ！」

窓から差し込む仄かな月明かりが、スピニッチを照らす。

昼間の青白い残照は田園地帯に幽玄の世界を作り出し、生物の気配のない箱庭のような風景によりいつそう寂しさを募らせていた。

158話：モンスター軍出撃！

「そ、そうなの？ スピニツチ」

息を呑む飛鳥とガルドにゆっくりと向き直ったスピニツチは、静かにそしてしっかりとうなずく。

「確かにそうにや。ミーは元モンスター軍にいたにや。そしてファンタジアが滅びていく様を、こによ目でしっかり見ていたにや」

「そ、そんな……」

「アレン、お前なんでそんなこと知ってんだよ」

ガルドが詰問するようにアレンへ詰め寄る。アレンは厳しい表情のまま、ガルドを見返す。

「私がこの世界に來た頃はまだ、ファンタジア全土へモンスター軍の支配は及んでいなかった。この首都が陥落したくらいだったと思う。すぐにフェアリーテイルへ修行に入ってしまったためにその後、の経緯はわからないが、その時モンスター軍を指揮していたのが竜王バハムートだ。そしてバハムートには羽の生えた黒猫のモンスターが付き従っていたという」

飛鳥もガルドも何も言えず、スピニツチを見やる。スピニツチは特に動揺した様子も見せず、静かに羽ばたいて窓枠に着地する。

「いつから気づいてたにや？」

「死神と戦っていたあたりだ。妙にモンスターに詳しく、その対応が的確過ぎると思っただけ。その時思い出した。竜王バハムートの参謀役だったケット・シーの存在を」

「そっか、アレンがこによ世界に来たによは三人によやかで一番早かったにや」

「ねえ、でも今はもうスピニッチはあいつらの仲間なんかじゃないんだよね。だって今までアタシたちのこと助けてくれたし、いっしょに戦ってくれたし」

「もちろんにや。ミーは人間によ味方にや。ミーはあいつらによすることが許せにやくて、ファンタジアを脱出したにや。そこをクウエンディ女王に助けてもらったにや」

きつとスピニッチにはスピニッチなりに、葛藤や苦悩があつたのだろう。飛鳥はここに来てようやく、アイデアの町で淫魔がスピニッチへ“裏切り者”と言つた意味が理解できた。

スピニッチはモンスターたちにとつては、まさしく裏切り者だったのだ。そして人間たちにはモンスターの仲間だと忌避される。飛鳥には想像するしかないが、クウエンディ女王がスピニッチを自分の使い魔としたのはスピニッチを人間とモンスター両方から守る意味合いもあつたのだろう。

飛鳥は当然、スピニッチがモンスター軍のスパイだと疑つてはいない。それはガルドやアレンもそうだろう。スピニッチはすでに、自分たちの大切な仲間なのだから。

「じゃスピニッチは、創造主の正体つて知ってるの？」

スピニッチはうつむいて頭を横に振る。

「ミーは創造主を見たことはにやいにや。ミーがいた頃は、モンスター軍の指揮は全部バハムートが仕切つてたにや」

「じゃ、バハムートつて何者？」

「バハムートは竜王つて言われている通りドラゴンにや。でも、ブルドラゴンにやんか比べもにやにやにやいくら強いにや」

「まあ最高司令官っていうくらいだからな」

ガルドが苦笑して肩をすくめる。

「でもスピニツチなら弱点とかも知ってんでしょ？」

「弱点かにな……」

スピニツチは青白い月明かりに沈む窓に目をやる。

「バハムートに弱点はにやいにや」

「そ、そんな……　なんかあるでしょ？　幻魔が化けてたのを見破ったのとか、蚩尤の時の青い球とか……」

それでもスピニツチは悲痛な顔で首を振る。

「バハムートはまさに完璧にやモンスターにや。物理・魔法どんな攻撃も効かにやいし、その攻撃力は蚩尤より何倍も強いにや」

「へっ、だったら簡単な話だ」

重く沈みかけた空気をガルドの明るい声が払拭する。

「俺たちがヤツより強けりやいい。召喚された勇者三人と元モンスター軍の参謀がいりやあ、俺たちは世界最強だぜ」

「そ、そんなに簡単に」

「うん、そうだよ！　ガルドにはアルテマがあるしアレンには魔剣グラム。アタシだってこの背中の中必殺技さえ使えるようになれば、きつと倒せるよ！」

それはあまりにも楽観的で、ほとんど無謀といってもよいだろう。しかし実際ここまで来たら、逃げるわけにはいかない。せめて体勢

を万全に整えて、全力で戦えるようにしなければならない。飛鳥たちに戦う以外の選択肢はないのだ。

「そうなればやはり邪魔なのは、市街地のモンスターたちだな」

アレンが窓枠に手を置いてスピニツチの頭越しに外を見る。

広大なファンタジアの市街地にいるモンスターの数は、少なくとも見積もっても数十万は確実にいるだろう。それら全部と戦うわけにはいかない。もちろん今の飛鳥たちであれば、時間と体力さえあれば全滅させられなくもない。

しかしいよいよバハムートと戦う時になってヒットポイントが真っ赤では、万が一の勝ち目さえなくなってしまうのだ。

「じゃどうやって、真ん中のあのお城まで行くかよね」

「お、おいちよつと待て、あれなんだよ！」

ガルドがアレンを押しつけて窓から身を乗り出す。見るとファンタジア市街地からぞくぞくとモンスターたちが郊外へ出てくる。それも十体二十体という数ではない。その列は途切れることなく膨大な数に膨れあがっていく。

飛鳥たちが息を潜めて眺めていると、数時間後には地を埋め尽くすモンスター軍で視界は埋め尽くされてしまった。

「これは…… 出撃にゃ！」

この状況から考えれば出撃の意味は一つしかない。フェアリーたちの命を賭した反撃が、フェンドルフィンで始まったのだ。

159話：ファンタジア城

「これは…… チャンスなのか？」

整然と隊列を作って進軍していくモンスター軍を見ながら、ガルドがつぶやく。

「さっきも言ったように、ヤツらが私たちのことに気づいていないわけではない。それでもファンタジアを空けるということをどう判断するか」

「誘ってるにや」

「誘ってる？」

飛鳥はモンスター軍の群れからスピニッチへ視線を戻す。スピニッチは外を見たままゆっくりと、そしてしっかりとうなずく。

「竜王バハムートはミーたちと直接対決したいと思ってるにや。だからこそあえてこうやって、出撃するによを見せてつけているにや」
「余計な邪魔は入らないから堂々と来い…… ってか」

ガルドは鼻で笑う。

どのみちファンタジアを解放するためには、バハムートは戦わなくてはならない相手だ。戦うための条件を整えてくれるなら、それに乗ってもいいだろう。

「陰湿な罠ということは考えられないか？」

アレンがスピニッチへ意見を求める。今考えてみると、アレンはスピニッチに一目置いていた。それは、モンスター軍の元参謀とい

う経歴を尊重してのことだったのだろう。相手がモンスターであれば、迷った時にはスピニツチの意見に従った方が間違いないのだから。

スピニツチはしばらく考え込んでいたが、徐に振り返る。

「罨やいばには間違いにやいにや。でもそれは幻魔によようにや罨ではにやくて、バハムート自身がミィたちと直接戦いたいがためによ罨にや」

「つ、つまり絶対に勝てるという自信がバハムートにはあるってこと？」

「そういうことだろうな」

ガルドが憎々しげに吐き捨てる。

自分は正々堂々待ち受けている。余計な邪魔は入らない。だから、こそこそせずにかかって来いということなのだろう。

「では誘いに乗らない手はないな。余計な戦いをせずに、直接バハムートと戦える機会を逃すことはない」

「賛成」

アレンの提案にガルドが賛同する。元より飛鳥にも反対するつもりはない。緊張した顔でぎこちなくうなずく。

「決まったにや。モンスター軍によ出撃が終わるによを待つて、フアンタジア城に向かうにや」

飛鳥たちは仮眠と食事をして夜明けを待つ。日が昇る頃には地を埋め尽くしていたモンスターたちはすっかりいなくなり、また長閑な田園風景が戻ってきていた。

飛鳥たちは農家を出て街道を歩き始める。しっかりと固められた

道は、今までの道なき道とは違って歩きやすい。一応いきなり襲いかかられても対応できるように、周囲の警戒は怠らない。しかし田畑より廃墟の方が多くなるにつれ、それは杞憂だったと気づく。

まったくモンスターの姿がないのだ。まさしく全軍が出撃したのだろう。昨夜見た数から考えれば、フェンドルフィンだけではなく、イスペリア方面へも出撃したのだと推測される。

「なんだか不気味っていうより拍子抜けだよね。敵の本拠地なのに、モンスターが一体もないなんて」

完全なゴーストタウンと化した市街地を、乾いた風が吹き抜けていく。青空には筋雲がたなびいて、降り注ぐ陽光がまぶしい。周囲が見渡す限りの廃墟でなければ、普通の朝の散歩だ。

飛鳥はたくさんの人々がここで生活していた様子を思い浮かべる。威勢のいい八百屋の店主の呼び声。道行く人々の笑顔。砂塵を舞い上げて走る馬車。公園で遊ぶ子どもたちの歓声。木陰のベンチで佇む老夫婦。愛と未来を語らう恋人たち……

「創造主はどうして、人間たちを滅ぼしてモンスターに取って代わろうとしてるんだろうね」

枯れた木々が立ち並ぶ大通りを歩きながら、飛鳥がぼつりとつぶやく。きつと人々が暮らしていた頃は青々と葉が生い茂り、美しい通りだったのだろう。

「人間が憎いから…… だろうな」

ガルドが元は花屋だったらしい廃墟を眺めながら応える。焦げ茶色に乾いて縮んだ枯れ葉が床に散乱している。傾いた棚には、何も入っていない植木鉢が数個寂しげに並んでいる。

「人間が憎い？」

飛鳥が顔を上げるとガルドは苦笑する。

「俺も似たようなもんだったからな、あっちの世界にいた時は」

実の父親を手にかけるほど憎んでいたガルドには、唯一心の拠り所となる存在は母親だけだ。他人はみんな敵。スラムで生き抜いてきたガルドにとって、それは当たり前前の感覚だった。

「人間は環境を破壊し、我が物顔で世の中を謳歌している。まるで地球を自分の所有物のように振る舞っている。『地球に優しい』などという傲慢なキャッチフレーズに、誰も違和感を抱かないほどに」

アレンにしては珍しく、熱く語る。しかしそれは飛鳥にも共感できた。であれば創造主とはまさに“神”なのだろうか。

「見えて来たにや」

緩やかな上り坂になっている大通りの先に、青く輝く荘厳な建物が見えてくる。それは細長い山のような建築物で、高さは百メートル以上はあるだろう。世界の中心であり、敵の本拠地でもあるファンタジア城だ。それは飛鳥たちの最終目的地でもあった。

周囲を幅十メートルほどの掘が囲み、東西南北に豪華な装飾の施された欄干のある橋が渡されてある。等間隔に並んだ街灯にも植物の蔓のような彫刻が施されており、まさに王城という場所にふさわしい絢爛さだ。

「あれは……」

アレンが何かを見つけて橋の手前で立ち止まる。ファンタジア城の壮麗さに目を奪われていた飛鳥は、アレンの背中にぶつかりそうになってしまう。

橋の向こうには城門があり、門扉は開け放たれている。そこに一人の少年がぼつんと立っていた。

160話：ファンタジア消滅

少年は周囲の壮麗さと比して異質な存在感を醸し出していた。

丁寧に切りそろえられた前髪は、見た目育ちのいいお坊ちゃんという感じだ。髪の色は銀色で、陽の光を受けてきらきらと輝いている。白髪とは明らかに違った質感を感じさせる。

スピニッチほどではないが切れ長の細い目には柔らかい微笑を湛え、美少年と評して異論を挟む者はほとんどいないだろう。

紺色のジャケットの前は大きな金色のボタンできちんと留められており、首元には黒い蝶ネクタイが揺れている。真っ白なワイシャツの尖った襟が、ジャケットの胸元に張り出している。

薄いグレーの半ズボンの下には白い肌の細い太ももが伸び、紺のハイソックスに黒い革靴を履いている。

踵をきちんと合わせて直立不動の姿勢で立っているが、両手は腰の後ろで組まれているのか飛鳥たちのところからは見えない。

飛鳥たちは警戒しながらも、橋をゆっくりと進んで行く。

「ね、ねえあの子って」

「こんなところにあんな身なりで、しかもたった一人でいるなんてどう考えても“まとも”じゃねえな」

ガルドの意見に、飛鳥は全面的に賛成だ。“まとも”であるはずがない。

「竜王バハムートにや」

「え？」

スピニッチは細い目を引き絞り、眉間にはこれ以上ないというほど深いしわが刻まれている。風に揺れる全身の柔らかい体毛は、ハ

リネズミのように逆立っている。スピニッチがこれほどの恐怖心と警戒心を露わにしたことは、飛鳥が覚えている範囲では今まで一度もなかった。

「てつきりブルードラゴンみてえに、派手な登場してくるかと思っただけだな。これはかなりやべえな」

ウィザードであるガルドには、もしかしたら違う姿として見えているのかもしれない。フェアリーたちのように。飛鳥はこの世界での姿形に、現実世界ほどの意味を見出せなくなっていた。今さらガルドやアレンにあの少年がどんな風に見えているのか問い質す気にはなれない。

「会見の主導権はスピニッチに任せる。戦闘が避けられるならそれが一番いいが無理だろう。せめて少しでも情報を引き出せるように、我々は自重しよう」

「自重ねえ」

アレンはいつでも自然体だ。年長者としての自覚がそうさせるのか、飛鳥にはとにかくアレンやスピニッチに任せるしかないと思っている。思ったことをストレートに吐き出すことしかできない自分は、裏読みしながらの駆け引きや騙し合いなどの戦いはやる前から勝敗が見えている。所詮頭脳戦には不向きな肉体派なのだ。

特に攻撃されるわけでもなく、飛鳥たちは橋を渡りきる。少年は寸分違わぬ格好で佇んでおり、風に揺れる前髪だけが少年の存在が作り物ではないことを教えてくれる。

形のいい薄い唇が動き、少年は年相応のボーイソプラノを発する。

「よくここまで来たね」

それは、飛鳥たち召喚された勇者に向けられた言葉なのだろう。
飛鳥たちはそれには応えず、スピニツチが口を開く。

「バハムート、久しぶりにや」

「おや」

少年は細い目をさらに細め、微笑から笑顔に移行させる。それは硬質な仮面を被っているようで、作られた笑顔にしか見えない。

「誰かと思ったらスピニツチじゃないか、久しぶりだね。どう、元気かい？」

「知ってたくせに白々しいにや。お陰さまで元気にや、クウェンデイ女王様のお陰にや」

「ああ、あの麗しの女王様が。フェアリーの助力を得て、少しは巻き返したみたいだね」

やはり昨夜の出撃はフェンドルフィンへの援軍だったのだろう。
首都への進撃は防げたのだろうか。

「フェンドルフィンだけじゃにやいにや。イスペリアだってアイリスだって、お前らには負けにやいにや」

「お前ら？ ははっ！」

少年は楽しげに声を上げる。青空に乾いた笑い声が吸い込まれていく。

「スピニツチ、キミは人間になったつもりなのかい？ ケット・シであるキミが」

「ミーは人間ではにやいにや。でも、モンスターが人間と共存できる証拠でもあるにや」

飛鳥はスピニツチの言いたいことがわかった。スピニツチはモンスターと人間が共存できるよう、バハムートに訴えかけたいのだ。アレンとガルドもその趣旨を汲み取ったのか、飛鳥に視線を送って小さくうなずく。自重してスピニツチに任せろという意味だ。

直情的な飛鳥は、ちよつとしたことでもキレる恐れがある。飛鳥自身も自覚があるだけに、心を落ち着かせてスピニツチと少年との話の推移を見守る。

「共存ねえ…… キミはゴブリンやオークどもを見ただろう？ エサと共存できるわけがない」

「エサ……」

飛鳥は拳を握りしめる。

「それに簡単に予想はつくだろう？ もしモンスターが人間の前に現れれば、人間たちはモンスターを殺そうとするだろう。人間という生き物は、異質なものを認めない。自分たちの価値観でしか物事を考えられない生き物だからね」

それは先ほどアレンの言ったことと、一部重なる論理だった。人間は自分をこの世の王様のように考え、植物を含め他の生き物を思い通りにしようとしてきた。異世界だろうが現実世界であろうが、そこに違いはないのだろう。人間が人間である限り。

「マスターは言ったよ。理性を持たないモンスターこそが、結局世界にとっては一番害のない生き物なんだと」

「マスター？」

飛鳥が小声でアレンへ聞く。

「おそらく“創造主”のことだろう」

「ああ、なるほど」

「理性を持たない大多数のモンスターたちを、理性のあるボクたち一部のモンスターが支配する。これこそが理想の世界の有り様だとは思わないかい？」

「思わにやいにや！」

スピニツチの甲高くも力強い声が、少年の哄笑を遮る。

「人間もモンスターも動物も植物も、みんなや生きてるにや。みんなや生きる権利があつて、それぞれによ生を精一杯生きてるにや！それを力づくで変えようとするによは傲慢にや！」

スピニツチの言葉にガルドとアレンはしつかりとうなずき、飛鳥は何度もうなずいている。そう、例え間違っていたとしても誰かが自分の考えだけで強引に正そうというのは独裁に他ならない。

人はそれぞれの人生を、自分を主人公として生きている。間違っていたらその責任を取るのも正しい道に戻すのも、自分自身でなければならぬ。決して他者に強制されて正すべきではないのだ。

間違いであるということに気づくのも、自分でなければならぬのだから。

少年は目を伏せて軽くため息をつき、両手を挙げて首を横に振る。

「どうやらやはり、キミとはわかり合えないようだね。いや、“キミたち”と言うべきか」

少年の顔から微笑みが消え、まさに仮面のような無表情が形成させる。

「このラストステージまで来られたのは、キミたちが初めてだ。その努力と幸運に敬意を評して仲間にしてあげようと思ってたけど、やっぱり無理みたいだね」

「どうするつもりにや」

「どうするもこうするも、元々キミたちはボクを倒すつもりだったんだろう？ このモンスター軍最高司令官竜王バハムートを」

少年は音もなく浮き上がり、十メートルほど上空で止まる。

「だったらお望み通り戦ってあげるよ。モンスター軍最高司令官としてね」

少年が両手を前に出し、そのまま頭上に振り上げる。その瞬間飛鳥たちは白い光に包まれる。一瞬遅れて轟音が世界を揺るがす。強烈な衝撃波が背後から襲いかかり、飛鳥たちは城門まで吹き飛ばされる。

光と音が収まった時、ファンタジアは城を残してすべて消え去っていた。

161話：それぞれの戦い

白煙と砂埃が収まると、飛鳥たちは愕然としてしまう。ファンタジア城を中心に、見渡す限りすべて何も無い荒野へと変わり果てていたのだ。実際人間は誰もいない広大なゴーストタウンだっただけに、人的被害はないだろう。それでも長い年月をかけて作り上げてきたであろう、ファンタジアの街が消滅させられたのである。人の作り出した文化や文明をこうもあっけなく破壊されると、まさにモンスター軍が成そうとしていることを暗示しているようで空恐ろしくなる。バハムートはこれを、この世界すべての場所で行おうとしているのだ。人間を滅ぼすということを。

「アレン、キミは攻撃力・スピード共に三人の中では一番優れているよね。だからキミにはボクの右腕と戦ってもらおうよ」

「なに？」

後ろ手に組んで、口角を持ち上げて笑うバハムートの頭上の空が赤黒く染まっていく。つい先ほどまで広がっていた青空はいつの間にか夕焼けのような真っ赤な色に染まり、どす黒い雲が渦巻き始めている。

「貴様が戦うのではないのか？」

アレンは射抜くような鋭い視線でバハムートを振り仰ぐ。

「もちろん戦うさ。でもさっき言っただろう？　ボクはモンスター軍の最高司令官なんだ。まずは部下と戦ってもらわないとね」

「そんなの卑怯よ！　部下と戦わせて、疲れさせてから戦おうっていうんでしょ？」

我慢しきれず飛鳥が叫ぶ。両拳は固く握りしめられている。

「ボクはそんな雑魚っぽいことはしないよ、アスカ」

バハムートは目を細めて冷笑を浮かべる。それはぞくつとするような冷酷な微笑みだった。

「アレンがもしケガとかしちゃったら、ボクが責任を持って治してあげるよ。その上で改めてボクが殺してあげるけど」

そうしている間にも、ファンタジア城上空は成長した黒雲の渦で覆い尽くされる。この状態には見覚えがあった。それはエスターの山で見た状態と同じだった。

「そっちのウィザード…… ガルドって言ったかな。キミにはボクの左腕と戦ってもらおう。なかなか面白い魔法を使うみたいだから魔法能力に優れた部下を用意させてもらったよ」

雲の中から獣の咆吼が聞こえる。黒雲の表面には稲光が何本も走り、夕焼けのような赤い空は黒雲の占める割合の方が多くなっている。

見ると先ほどの渦の隣に、もう一つ同じような渦がではじめている。音程の異なる咆吼が重なり、天は不快な不協和音で満たされる。

ファンタジア城真上の渦の中心から、真っ赤な輝きが下りてくる。燃え立つような赤い鱗は、美しくもあるが凶暴さを感じさせる。

それは飛鳥でさえ名前を言うことができるモンスター、レッドドラゴンだ。

「私の相手はレッドドラゴンか。であればケガの心配はしなくてもいい」

前髪を風に揺らせて、アレンは不敵に微笑む。ブルードラゴンに圧勝したアレンが、同レベルの相手に負けるわけがないのだ。

「言っとくけど、ブルードラゴンより強くしてもらってるからね。油断しない方がいいよ」

「愚問だ」

アレンは魔剣グラムを引き抜き、空を見上げて前髪を揺らせている。

「じゃあ、俺の相手はあいつか」

ガルドは強風吹きすさぶ空へ、音もなく浮かび上がる。隣の渦からは、黒光りする鱗を持つ巨大な胴体が現れる。ブラックドラゴンだ。

「ちょ、ちょっと待ってよ。ねえスピニッチ、あいつらってフェンドルフィンとイスペリアを攻めてたヤツらじゃないの?」

スピニッチは固く厳しい表情で空を見上げている。そして沈痛な声で呻くように肯定する。

「バハムートの本当の目的はミーたちだったにや。フェンドルフィンもイスペリアも、ミーたちをここにおびき寄せるために陽動作戦だったんにや」

「え、ど、どういうこと?」

「ああいうことさ」

バハムートの涼しげな声が降ってくる。その視線の先を見ると、荒野の果てに黒く蠢く波が押し寄せてくるのが見える。赤茶けた荒野を黒く埋め尽くすそれは、無数のモンスター軍だった。

「アスカ、きみには蚩尤と戦ってもらおうと思ったんだけど、あのバカは待ちきれずに出て行ってキミたちに倒されてしまったからね。だからキミにはモンスター軍全軍に戦ってもらうよ。ちゃんと数えてないけど、たぶん百万以上いると思うよ。相手にとって不足はないでしょ？」

「ひゃ、百万？」

見渡す限りの荒野すべてに、モンスターたちが黒く蠢いている。それは見たこともない数のモンスターの大集団だった。

「キミもけっこう強くなったみたいだけど、どこまで体力が保つか？ まあせいぜいがんばりなよ。あ、スピニツチ、キミはボクといつしよにここで見物してもらおうよ。三人が死んだら、またキミにはいろいろ手伝ってもらわないといけないことがあるからね」

「アスカたちは死にやにやいにや！」

雷鳴のような咆吼が大気を震わせ、レッドドラゴンが灰色の腹を見せて飛翔していく。アレンは飛鳥たちに一つうなずいて、レッドドラゴンの後を追って走り出す。

「アスカ、あいつを倒したら手助けに行くからな。さっさとこいつら倒して、あつちの世界に戻ろうぜ。それで、改めてアレンとお前を賭けて勝負だ」

「う、うん」

ガルドはウインクを一つすると、魔王へ変化する。大きな黒い翼を広げ全身の筋肉を脈動させると、砂塵を巻き上げて飛び去ってしまふ。向かう先には影のように黒く巨大なブラックドラゴンが待ち受けている。頭部に光る二つの黄色い目が、ガルドを認めて嬉しそうに細められる。

「アレン、ガルド…… うん、絶対みんな生きて帰ろう」

飛鳥は屈伸をしながら、地平線を埋め尽くすモンスター軍を見据える。百万という数がどれほどなのかぴんと来ないが、足を止めたら囲まれて袋叩きにされてしまうだろう。とにかく走り回って数を減らしていくしかない。

飛鳥は覚悟を決めると大きく息を吸う。

「どりゃああああああっ！」

そして弾かれたように、ファンタジア城の橋を渡って荒野を駆けて行った。

162話：飛鳥の戦い

百万のモンスター軍は、まさにオールスターと言える顔ぶれだった。ゴブリン、オークといったモンスター軍の標準的なモンスターはもちろん、狂戦士、ティラノサウルス、パキケファロサウルス、オーガウルフ、モッホブまでいる。数こそ少ないがヴァンパイアもいるようだし、姿こそ見られないが死神や幻魔もいるのだろう。足を止めたら、地面から捕まえられてしまうのは想像に難くない。

地面の柔らかいところからはサンドウォームまで咆吼を上げて何匹も飛び出して来ており、今まで戦ってきたモンスター総出演という感じだ。

飛鳥は一步一步に力を込め、全身を金色の超シールドで覆う。地表に現れた金色の流星が、黒々と蠢くモンスターの海へ向かっていく。

「うわああああああつ！」

飛鳥は走りながら遠当てを放つ。スーパーモンクとなりレベルが上がった飛鳥の遠当ては、すでに驚異的な破壊力を持つ。腰を据えず走りながら放ったにも拘わらず、数十体のモンスターが一直線に弾け飛んでいく。

飛鳥は血飛沫と金色の粒子の舞う中、モンスター軍の真っ只中へ突っ込んでいった。

「アタシに近づくなあ！」

元は人間である限り、心の底から憎しみを持って倒すことは難しい。しかし飛鳥にはクウェンディ女王の言いたかったことが、今になってよくわかる。

『あなたに倒されることよって、“救われる”んです』

殺すことには変わりはない。しかしクウェンディ女王のその言葉によつて飛鳥は戦えるし、ここまで来ることができた。モンスター軍の矛先が自分たちに向いているのなら、それはクウェンディ女王たちにとっては救いに他ならないのだ。

「く……」

倒しても倒しても、モンスターの数は一向に減らない。かえって増えてきているように感じる。超シールドを張っているので直接的なダメージはないが、周囲にかけられる圧力がかかなり高くなっている。

飛鳥は一旦上空に退避する。

しかしそれを待っていたかのように、翼竜やガーゴイル、キラビーたちが空を覆い尽くして襲いかかってくる。黄色い目をしたカラスも混じっている。異教徒の村で見た黄泉鳥だ。

「くっそ…… こいつら、ウザ、いいいいいっ！」

飛鳥は空中で左右にフットワークを駆使しながら、壁のように行く手を塞ぐ翼を持つモンスターたちを倒していく。

すでに額には汗が滲み、全身が熱くなっている。休むことなく動いて攻撃し続けているために、膝や肘の関節に痛みを感じ始めている。いくら飛鳥とはいえ、このままでは間違いなく力尽きてしまう。飛鳥はほんの少し見えた灰色の空に向かって、モンスターたちをかき分けながら強引に身体をねじ込んでいった。

「な、なんなのこれ……」

雲霞のように密集した空中のモンスターの下には、まさに無数と言っているほどの数のモンスターたちが飛鳥の方を見上げて唸り声を上げている。地面はまったく見えない。視界に入る範囲の地表は、すべてモンスターで埋め尽くされていた。このすべてが飛鳥一人を殺そうとして、殺意を剥き出しているのだ。

精神と肉体の境目が曖昧なこの世界において、剥き出しの殺意は物理的な不快感を伴って飛鳥の全身を締めつける。

「う、お、おえ……」

内臓をかき回されるような不快感に、飛鳥は嘔吐しかける。三百六十度全方向から殺意・悪意といった負の感情が押し寄せてくる。それはまさに地獄だった。

ほんの少しスピードを緩めただけで、あつという間に周囲を囲まれる。鋭いクチバシや爪の攻撃が、シールドの表面で火花を上げる。飛鳥は射程の長い蹴り技を駆使して、次々とモンスターたちを爆発四散させていく。

「うわっはははあ！」

血飛沫の中、二体の狂戦士が黒髪を靡かせて上空から斬りかかって来る。片方は幅広の剣ドラゴンスレイヤー、もう片方は柄の長いバトルアックスだ。

「うりゃああつ！」

飛鳥は空中を蹴って身体ごと飛び込んでいって、右の狂戦士の鳩尾に肘打ちを叩き込む。

「ぐぼああっ！」
「せいっ！」

裂帛の気合いと共にその場で身体を反転させ、左の狂戦士の胴体に裏拳を打ち込む。ほぼ同時に、二体の狂戦士は上半身と下半身を分断される。

「きええええっ！」

狂戦士の血飛沫の中から、ヴァンパイアが爪を伸ばして襲いかかってくる。

「今さらアンタなんか！」

飛鳥は伸ばされたヴァンパイアの腕を取り、間接を逆に折り曲げる。乾いた音がして肘の裏側から白い骨が突き出し、ヴァンパイアは絶叫する。

「消えろ！」

ヴァンパイアの苦悶に歪む顔面に、飛鳥の右ストレートが炸裂する。直後、スイカのように弾けたヴァンパイアの頭の向こうに、巨大なサンドウォームの口腔が覆い被さってきた。

「っ、次から次へと…… ああああゝっ！」

飛鳥は逃げることはせず、そのままサンドウォームの口の中へ飛び込んでいく。長い胴体の中を走り抜け、尻尾の辺りから飛び出す。しかしそこはすでに、翼竜とガーゴイルの集団に囲まれていた。

「アンタたちになんか、負けるもんかあ！」

飛鳥の絶叫が、モンスターたちの作り出す球形の黒いドームの中心で響いた。

「ふふっ！ あの娘がんばってるみたいだけど、どこまで保つかなあ」

楽しげに笑うバハムートの横で、スピニッチは激しく歯ぎしりする。助けに行きたいのは山々だが、今自分が行っても足手まといにしかない。飛鳥が傷ついた時に、治療するくらいしか役には立てないだろう。そんな隙があればなのだが。

「ほら、あっちもがんばってるよ」

バハムートの指さす方向では、アレンがレッドドラゴンと死闘を繰り広げていた。

163話：アレンの戦い

白い光跡が連続して空へまっすぐと飛んでいく。乳白色に少しグレーを流したような灰色の腹部は、細かく小さなウロコで覆われている。白い光跡はそこへ向かって吸い込まれるように飛翔し、白煙を上げて四散する。

ファンタジア城から見て左前方、真っ赤な巨体をうねらせて優雅に浮遊するドラゴンが黒い硬質な翼を広げている。

その下では金色の鎧姿の長身の剣士が、油断なく剣を構えている。数十メートル上空から下りてこないレッドドラゴンを、アレンは卑怯だとは思わなかった。敵より優れた能力を使って戦いを有利に進めようとするのは、戦術として正しいからだ。

三人の召喚された勇者の中では唯一、空を飛ぶことができないアレンは苦戦していた。レッドドラゴンは、決して空から下りて来ようとはしないのだ。それは裏を返せば、アレンの戦闘能力を警戒しているとも言える。しかしこのままでは戦いは長引くだけだ。

レッドドラゴンもブレスや魔法で攻撃はするものの、アレンにはすべて避けられるか無効化されてしまっている。アレンもレッドドラゴンも、お互い有効な攻撃ができないでいた。

アレンは剣で直接攻撃する戦闘方法が一番攻撃力を発揮できる。しかし距離を取られ、空にいる相手ではその攻撃力は完全に発揮できない。それがわかっていいるからこそ、レッドドラゴンは地上に降りて来ない。

対してレッドドラゴンは八方塞がりだった。ドラゴン系モンスターの主な攻撃方法は、強力なブレスと爪や尻尾による物理攻撃。そして魔法攻撃だ。

しかしブレスや魔法攻撃などの遠距離攻撃は、アレンにはまったく通じない。残るは直接的な接近戦しかないのだが、それはアレン

の望むところだ。ブルードラゴンよりも防御力が高いため、アレンの剣圧による攻撃は先ほどのように跳ね返せる。しかしそれではアレンを倒すことはできない。元々気性の荒いレッドドラゴンは苛立ちを覚えていた。

『空も飛べない剣士風情が勇者などとは、片腹痛いわ！』

苛立ちを吐き出すかのように、レッドドラゴンはアレンを嘲笑する。アレンは剣を構えたままレッドドラゴンを見上げ、固く口を引き結んでいる。余計なおしゃべりをする気などはないのだろう。

『ほれ、貴様が我に手間取っているうちに、仲間の娘は八つ裂きにされてしまうぞ？』

レッドドラゴンは紅い目を細め、荒野の先にアレンを促す。そこには無数のモンスターたちによって作り出された黒い球体が浮かんでいる。

「飛鳥はあの程度の攻撃ではやられん」

アレンの落ち着いた声音からは動揺はまったく感じられない。しかしレッドドラゴンはアレンのその微細な変化に気づく。挑発だとわかっていて返答するところに、アレンの心情が読み取れたのだ。

『では我が加勢したらどうなるかな？』

レッドドラゴンは邪惡な笑みを浮かべ、黒い翼を羽ばたかせる。強風が地面を叩き、アレンの金髪が激しく波打つ。

黒い球体に向け移動し始めたレッドドラゴンを、アレンは全速力で追いかける。突如急反転したレッドドラゴンが、その巨大な

爪でアレンに襲いかかってきた。

「く……」

内心アレンは飛鳥が気にかかっていた。そのほんの少しの心の隙が、レッドドラゴンの攻撃に対処する行動に遅れを生み出した。

咄嗟に突き出されたアレンの剣は、レッドドラゴンの左前足にはね除けられる。走り出した加速がついていたため、一瞬のうちに間合いを詰められてしまったのだ。

「死ねっ！」

レッドドラゴンの右爪が振り下ろされる。アレンは超人的な反射神経で身を捻るも、爪の先が鎧の表面を削り取る。真下の地面が爆発するように抉られ、アレンは数メートルを跳躍する。

アレンの鎧の左半分には、白く大きな傷が縦に一本引かれていた。アレンははまだ熱を持つ傷を見下ろし、顔を顰める。レッドドラゴンは不敵な笑みを浮かべ、黒い翼を広げる。攻撃は失敗したが、アレンの弱点を見つけた愉悦に浸っているのだ。

アレンは飛鳥が気になっていた。それは飛鳥を愛するがゆえのことで、それがレッドドラゴンにとっては唯一の勝機だった。

『心が乱れているな？　それがお前の限界だということだ』

レッドドラゴンは十メートル以上高度を上げ、再度飛鳥の方へ向かおうとする。ここで追いかけても、アレンはまた同じパターンで攻撃を受けてしまう。しかし傍観しているわけにもいかない。飛鳥が追いつめられているのは事実だし、そこにレッドドラゴンの攻撃が加えられれば飛鳥でさえ無事では済まないだろう。

アレンは数歩の助走の後、剣を上段に構えて跳躍する。一気に十

数メートルの高さまで飛び上がったアレンは、レッドドラゴンの真上から斬りかかる。

しかしそれを読んでいたレッドドラゴンは、その場で身を捻ってまた爪を振るう。アレンはかろうじて剣で防御するも、真横に吹き飛ばされる。数十メートル先に着地したアレンへ、レッドドラゴンの嘲笑が浴びせかけられる。

『相当焦っているようだな。ほら、早く我を倒さないと、娘の命はないぞ』

レッドドラゴンは大きく裂けた口を歪め、牙を覗かせる。さらに高度を上げ、三十メートルほどの高度を維持する。これでアレンは下方から突き上げる攻撃しかできなくなってしまう。

いくらスピードが速くても、下方から飛び上がってくれば好きなように攻撃できる。レッドドラゴンは自らの爪に強化の魔法をかけ、さらに全身を最高レベルの防御シールドで覆う。これでアレンの攻撃で爪や前足をやられる心配がなくなる。後は先ほどのように弾くのではなく、両側から挟んで潰してしまえばいい。

アレンは身体の内部に魔法を効かせることができる。それに肉体的な強さもかなりのレベルだ。しかし両手が利かない状態では、爪やプレスでなぶり殺しになるのは必定だ。

レッドドラゴンは再度飛鳥の方へ移動し始める。やはりアレンは跳び上がって攻撃を仕掛ける。

『バカめ、これで終わりだ!』

レッドドラゴンは爪を光らせ、核攻撃にも匹敵するパワーを両側からアレンへ向けて集束させた。

164話：ガルドの戦い

そこにいるはずのアレンはいなかった。全速に近い速度で跳び上がったのは確認している。レッドドラゴンはその予測軌道上で待ち構えていたのだ。

次の瞬間、レッドドラゴンの首がズレる。なんとアレンは、レッドドラゴンよりさらに上空にいた。無警戒の真上から、レッドドラゴンの防御シールド越しに攻撃したのだ。

『な、なぜ……』

レッドドラゴンは驚愕の紅い目を見開いたまま落下していく。落ちながら首と胴体が分離する。

「私はお前が思ったよりも高く跳んだ、それだけだ」

アレンは心乱されながらも、その状況を冷静に利用した。自分の限界の高さは十数メートルだと思わせておいて、レッドドラゴンに油断させたのだ。

アレンにしても、空中にずっといられたら攻撃のチャンスは少ない。相手の心理戦を逆に利用したのだ。

「お見事だねえ」

自分の右腕ともいうべきレッドドラゴンが倒されても、バハムートは落ち着いたままだ。

「さすがアレンにゃ」

スピニツチはほつと一息をつく。これでアレンは飛鳥の応援に向かえる。鎧が傷ついただけで、大きなケガなどもしていないようだ。

「あつちはどうなるかねえ」

バハムートは強風に目を細めながら、右方に目をやる。そこではガルドとブラックドラゴンが魔法戦を繰り広げていた。

「ギガデイン！」

野太い稲妻がブラックドラゴンの長大な身体を打つ。軽く身震いするも、ブラックドラゴンは黄色い目を燃え立たせて凶悪な咆吼を放つ。

ガルドとブラックドラゴンのいる場所だけ、局地的に雨が降っている。バケツをひっくり返したような大雨だ。

それはブラックドラゴンによる強酸性の雨だった。眼下の地面からはひっきりなしに白煙が上がり、運悪く風向きによって雨の飛沫を受けたモンスター軍の一部がどろどろに溶けていく。

ガルドは黒いシールドを球形に張っており、特にダメージを受けた様子はない。

「魔力はワタシと同じくらいありそうだな、小僧よ」

ブラックドラゴンは牙を剥きだし、ガルドを威嚇する。これまで何度となく強力な魔法攻撃を応酬したが、お互いに有効なダメージを与えることができていた。攻撃力、防御力共に互角なのだ。

「四大元素系の魔法で、俺にダメージを与えることはできねえ」

ガルドは両手をだらりと下げ、少し猫背でブラックドラゴンを見

据えている。背中の黒い翼は大きく左右に広げられ、動いてはいない。飛行に使っているわけではないのだろう。それはブラックドラゴンも同じだった。

ガルドの右手には斬魂鎌が握られている。魔王となっているために、その大きさは片手で使う草刈り鎌程度の大きさだ。

『ではどうする？ 取っ組み合いでもするか？』

ブラックドラゴンの身体は魔王ガルドの十倍はある。肉弾戦になったらガルドには不利だろう。

『……ああ、そうだな』

ところがガルドは、ブラックドラゴンのその挑発を受ける。ブラックドラゴンは一瞬驚くような波動を放出したが、すぐに楽しそうに黄色い目を細める。

実はブラックドラゴンには、まだ見せてはいない奥の手があった。しかしそれは接近しないと難しい攻撃方法だったのだ。動きの速い相手には成功率が低くなってしまうが、相手が肉弾戦をしてくるのであれば好都合だ。

過去ブラックドラゴンに戦いを挑んだ召喚された勇者は何人かいたが、そのほとんどをこの方法で殺してきた。相手がウィザードなら、ほぼ確実に勝てるだろう。

『いくぜ！』

ガルドは音もなく移動し始める。ブラックドラゴンも身を捻って牙を剥き出す。ガルドのシールドからは白煙が尾を引き、闇の塊のようなブラックドラゴンへまっすぐと伸びていく。

瞬間、ガルドの目の前が真っ白になる。ブラックドラゴンが爆発

系の魔法を使ったのだ。元よりガルドを倒せるとは思ってはいない。目くらましだ。

爆発が収まると、上方から巨大な質量がのしかかってくる。ガルドは避けもせず、そのまま斬魂鎌を横薙ぎに振るう。

鎌の切っ先がブラックドラゴンの横腹に突き刺さり、赤黒い血を噴き出させる。同時にガルドの左肩にも、ブラックドラゴンの牙が深々と食い込んでいた。

ブラックドラゴンはその細胞組成自体が強酸性のため、雨を浴びても何の痛痒もない。しかし防御シールドを破壊されたガルドの全身からは、たちまち白煙が噴き出し始める。

ガルドは即座に体表に薄く防御シールドを張るが、皮膚はかなりの部分焼け爛れてしまった。

『なぜ貴様が死神の鎌を持っているのか知らんが、ワタシには通用せんぞ』

『だろうな、知ってたよ』

ブラックドラゴンの牙は根本まで突き刺さっており、ガルドの肩の筋肉は寸断されている。それでもガルドは齒を食いしばって腕を上げる。

『うが、あああっ！』

『何をするつもりかはわからんが、ウィザードである貴様はワタシの牙を受けた時点で終わりだ！』

ブラックドラゴンの全身は妖しく紫色に光を帯び始める。途端にガルドは全身から力が抜けていくのを感じる。

『これは……魔力吸引か！』

相手の魔力を自分のものとする魔法はある。しかし魔力そのものを相手から吸い取る能力は希有だ。そもそもこの世界においての魔力の定義は、精神力によるものとされている。物質的なものではないのだ。

“ 氣力を削ぐ ” という言葉があるが、ブラックドラゴンの奥の手とはまさにそれであった。すべての行動の基本となる “ 氣力 ” “ やる気 ” 、果ては “ 希望 ” “ 夢 ” などあらゆる前向きな考えを吸い取っていく。特に魔力を最大の武器としているガルドのようなウィザードにとっては、それは命を吸い取られることと同義であった。

『 ワタシの牙は、一度食い込んだら死ぬまで抜けん。このまま朽ち果てるがいい 』

ガルドの目から光が失われる。ブラックドラゴンの横腹に突き刺さった斬魂鎌からも手が離れ、斬魂鎌は白煙を上げながら落ちていく。

やがてガルドの全身を覆っていた防御シールドも消え失せた。

165話：竜王バハムート

『このまま干からびて死ぬがいい!』

「ガルド!」

スピニッチが飛び出そうとする。しかしそれをバハムートが制止する。

「そう焦るな。彼はまだ負けてはいないようだよ」

「にゃ?」

ガルドの赤黒い身体は白煙を上げ、その表皮は白く液状化している。すぐに破れた血管から溢れた血液でピンク色になるだろう。そうなる前に助けなければならない。自分がダメならアレンでもいい。スピニッチがバハムートの制止を振り切ろうとした時、ガルドの異変に気づく。

「あ、あれは……」

ガルドの全身を覆っている白煙が光に変わっていく。いや、元々白煙ではなかったのかもしれない。ガルドの全身を覆っていた淡い白光は、もはや見間違えることはないほどの強い光に変わっている。その光の中から白い翼が左右に広がり、同時に光輪が輝き出す。“天使変化”だ。

「ま、まさかガルドは……」

魔力を吸い取られているため、ガルドはアルテマを発動するのに必要な魔力が足りなかった。だからシールドを含め、すべての防御

に使っていた魔力をカットさせたのだ。いや、防御だけではない。生命維持に必要な最低限度の魔力を残して、すべての魔力をアルテムに注いでいたのだ。

『こいつもくれてやるよ』

天使となったガルドは、静かにブラックドラゴンの横腹へ手を添える。斬魂鎌でつけた傷から、ブラックドラゴンの体内へ白い光の球を埋め込む。それは膨大な光属性のパワーを高圧縮した魔力体だった。

『き、貴さ……』

白い無音の爆発が起きる。一瞬遅れて周囲に衝撃波が広がる。酸性雨も黒雲も衝撃波によって消滅する。飛鳥を包み込んでいた無数のモンスターによる黒い球体も、木の葉が風に散らされるように拡散していく。

「す、すごいにや。ガルドによ魔法は、また強くにやってるにや」

スピニッチは吹き飛ばされないように黒いシールドを張り、それでも腕で顔を覆っている。ブラックドラゴンの属性が悪であったからこそ余計に、アルテムによる反発力は強かった。その爆発は蚩尤戦の時よりも大規模だった。

「やるなあ。“ホーリーバースト”か。あれはフェアリーの魔法だね？　よくあんな接戦の中、短時間で発動できたねえ」

吹き荒れる衝撃波の中においても、バハムートはそよ風に吹かれているようににこやかだ。その落ち着きが恐ろしい。

爆発が収まった後には、何も残ってはいなかった。ブラックドラゴンは跡形もなく消し飛んでしまったのだらう。天使の姿からまた魔王へと姿を戻したガルドが戻って来る。

『へへっ、どうだ？』

ガルドはバハムートの前に仁王立ちになり、腕組みをして浮かぶ少年の姿のバハムートと魔王のガルドでは、まるで巨人と小人だ。

「うん、なかなかきみは使えるね。殺さずに僕の三本目の腕にしてあげるよ」

『はあ？』

レッドドラゴンに続いてブラックドラゴンまで倒されたというのに、バハムートにはまったく焦りは感じられない。

すると前方から飛鳥とアレンが走って来る。

「おおーい！」

飛鳥は何とか無事だったようだ。しかし上着であるGジャンは無惨にも破れ、ほとんど身体にまとわりついている程度にしか残っていない。外傷はないようだ、きっと自分で治したのだらう。顔や足に血の流れた跡がある。

「今の爆発ってガルドの魔法だね？ お陰で脱出できたよ！」

飛鳥の隣にアレンが立つ。鎧に付いたレッドドラゴンの爪痕が痛々しい。

「きみたちなかなか楽しませてもらったよ。どうやら大きなケガも

なかったようで僥倖だ。これで心おきなく殺してあげられるよ」
「なに？」

全員の視線がバハムートに集まる。バハムートは音もなく上昇し、その全身に光を纏い始める。

「と、とうとうバハムートが、本当によ姿に戻るにや！」

ガルドによって吹き払われた青空を、また雲が厚く覆い始める。バハムートを包む光は白よりも強い輝きを持ち、神秘的な色合いでもって瞬いている。その輝きを見つけたモンスターたちは、歩みを止めてファンタジア城の方を見上げる。そして次々と跪き始める。

「おお、バハムート様！」

「竜王！」

バハムートを包む光が左右に長く伸びていく。そしてその光は白から完全に銀色の輝きに変わる。光の中から鋭角的な白い光が伸び、空中に大きな十字架を現出される。白い光が消えると金属的な翼が現れ、そして銀色の光も凝固していく。それはそのまま銀色のドラゴンを形作っていく。

「ぎ、銀のドラゴン……」

飛鳥は空を見上げたまま呆然としている。そこには、ジェット戦闘機のようなフォルムを持ったドラゴンが浮いている。大きさは今までのドラゴンより二回りほど小さい。しかし発せられる存在感や圧迫感は蚩尤以上だ。

「プラチナドラゴンにや」

「プラチナ……」

金属同士を強引に擦り合わせたような耳障りな咆吼が世界に響き渡る。バハムートは弱い陽光を一身に集め、まばゆいばかりの光を放っている。血を固めたような真つ赤な目が細められる。鱗ではなく分厚い装甲板を重ね合わせたような蛇腹式の首を動かし、飛鳥たちを見下ろしている。

それは世界の終焉を知らせる神の使いのようにも思われ、飛鳥たちはその絶望的な美しさに言葉を失った。

165話：竜王バハムート（後書き）

作中に登場するモンスターの容姿・能力設定に関しましては、
当作品オリジナルであることをご了承ください。

166話：正義と怒りと絶望と

科学と魔法。異世界と現実世界。過去と未来。矛盾し相反する価値観や概念を孕み、それは飛鳥の目の前に悠然と降り立つ。逃れられない殺意と春風のような心地よさを感じさせる瞳で、バハムートは銀色の翼を静寂と共に折りたたむ。後ろ足二本で立つその姿は平和を象徴する巨大な鳩のようにも見え、今まで戦ってきたモンスターたちのような威圧感はない。

「さて、今後の予定だが」

先ほどまでの甲高い少年の声音とは打って変わって、低く落ち着いた青年の声調が溢れ出す。まるで大人が子どもに、過ちを諭すような雰囲気だ。

「お前たちは協力して戦った方がいい。なるべく汚い手段を用いることを推奨する。不意打ち、騙し討ち、目眩まし……なんでも思いつく限り、できる限りの手段を講じた方がいい。それだけ生き長らえることができる。最終的な結果は変わらないが、どうせ死ぬのなら痛みも少なく、一瞬に死ねた方がいいだろう？ まあ苦しみにのたうち回る姿を見るのも一興だが、それは貴様らの努力次第だ。」

レストランで目の前の料理を批評するかのように、淡々と殺戮のレシピを披露する。挑発でも苦し紛れでもない。変えようのない事実をそのまま脚色なく伝達している。そんな印象だ。

「誰から殺してほしい？ そうだ、お前はさっき言ったように殺さずに私の部下にしよう。その代わり、腕や脚の一本や二本は覚悟するがいい」

「バカにすんな！」

黙って聞いていたガルドが、とうとう我慢しきれず激昂する。バハムートは目を細めてガルドを見つめる。

「俺たちは負けねえ。貴様を倒してファンタジアに、この世界に平和を取り戻す。それが、俺たちがここまで来た目的だ！」

牙を剥くガルドに、飛鳥とアレンも同意してうなずく。逃げ出す気なら逃げることはできた。元の世界へ戻ることも。

しかし飛鳥たちはそれを拒み、自分たちにできることを成そうと苦しい戦いを続けてきた。その結末が殺されて終わりだなど、そんなことは認めない。バッドエンドにはさせない。

ガルドの勢いを受け流し、バハムートは嘴くちばしのような口を少し開く。微笑んでいるようだ。

「みんな揃って、笑顔で元の世界に戻ろうっていうことか？ はは…… お前はアニメやゲームの見過ぎだな。現実にはリセットは効かない。“死”は“死”だ。それ以上でもそれ以下でもない。それは冷徹な事実であり、お前たちが否定しようが変わることのない摂理だ。がんばれば夢はいつか叶う？ 努力は人を裏切らない？ 寝言は寝てから言うがいい。圧倒的な現実の奔流に飲み込まれ、お前たち人間は夢を見失い人生に絶望する。そして寿命で死ぬまで、残りの人生を惰性で生きていく。それは生きていると言えるのか？ 現実を受け入れ運命を享受し、より有益で強い者にその命と人生を捧げよ。それが『顔と名前のないその他大勢の中の一人』である貴様らの、たった一つの存在意義だ！」

紅蓮の炎を想起させるバハムートの瞳は、その奥に激しい感情を内包したまま妖しく揺らめく。飛鳥は自分の身体が、抗いようもな

く小刻みに震えるのを感じる。「それは違う！」と、全身を口に
して絶叫したい欲求に駆られる。

しかし奥歯を噛みしめ、血が滲むほど拳を握りしめ飛鳥は耐える。
これはバハムートという存在そのものなのだ。肉体と精神の境目が
曖昧なこの世界では、固形化された観念は肉体に勝る。つまりこの
偏った思想そのものが“バハムート”なのだ。そしてそれがそのま
まバハムートの強さともなっている。飛鳥たちが戦うのは、プラチ
ナドラゴンでもモンスター軍最高司令官でもない。

バハムートという名の『絶望』なのだ。

「うあああああああつ！」

飛鳥の身体の最奥から、怒りと悲しみが爆発するかのように溢れ
出してくる。それはガルドやアレンも同じで、それぞれの身体から
強烈なパワーが放出される。

「私は今、猛烈に貴様を倒したいと思っている。この剣が折れよう
とも、この身体が朽ち果てようとも貴様だけは絶対に倒す。アレン・
ワグナーの全存在を懸けて、貴様を全否定する！」

アレンの豪華な金髪が逆立ち青い瞳からは激しい闘争心が放出さ
れ、バハムートの硬質な身体を射抜く。全身白く発光するその姿は
まさに、『正義』を象った神聖なる剣士の彫像のようだ。

「俺は今まで生きてきて、ここまで頭に來たことはねえ。お前を倒
せるなら死んでもいい。俺のすべての力を注ぎ込んで、貴様を倒す
！」

魔王ガルドの赤黒い身体が盛り上がる。魔力の内圧が高まり、そ
の巨軀ははち切れんばかりだ。紫色の炎が全身から噴き上がり、身

体には今まで刻み込まれたタトゥーが次々と黒く浮き上がってくる。それはまさに『怒り』。負の感情をも内包し、膨れあがった怒りは周囲の空気を熱していく。

「そうだ！ そうでなくてはつまらん。我を憎め！ それでこそ“死”が美しく彩られる。それが我を、さらに神へと近づける糧となるのだ！」

バハムートはミサイルが射出されるように空高く飛翔する。三人の勇者たちは引き絞られた矢が放たれたように、その銀色のきらめきを追走する。

ファンタジアにおいてついに、召喚された勇者たちのラストバトルが始まった。

167話：アルテマvsアルテマ

硬質で鋭角的な翼を悠然と広げ、鉛色の空の下バハムートは空気を切り裂いて飛翔している。羽ばたいていないということは、魔法で飛行しているのだろう。S字を描きながら、まるで飛鳥たちを誘っているようにも見える。実際そうなのだろう。

バハムートの飛行速度はかなり速いが、それでもまだ全然本気を出してはいないように見える。きっと本気を出せば、音速を超える速度を出せるのだろう。それは、その流線型の身体からも想像に難くない。そんなスピードに対抗できるのは、三人の中ではガルドしかない。

『お前は後ろにつけ。俺はヤツを追い込む。挟み撃ちにするぞ』

「うん、わかった!」

飛鳥もかなりの速度で走っているのだが、さすがに音速は出せない。ガルドは前方を睨むと、黒い羽を後方へ下げハンググライダーのようにする。次の瞬間、今までまるで止まっていたかのように急加速する。ガルドが本気を出してスピードを上げたのだ。

「うわっ!」

飛鳥はガルドによって巻き起こされた乱気流で煽られる。飛鳥が体勢を立て直した時、ガルドはすでに小さな点となっていた。

「やはり貴様が追ってきたか」

後方から急激に迫るガルドの気配を感じて振り返ったバハムートは、嬉しそうに目を細める。ガルドが直後に張り付くのを待って、

バハムートもまた速度を上げる。

「はあくはっはっはっ！ この姿に戻るのも二年ぶりだ。準備運動がてら、付き合ってもらおうか」

バハムートとガルドはすでにイスペリア近くまで到達している。途中進軍するイスペリア軍を見かけたような気がするが、一瞬のうちに後方へ過ぎ去ってしまっていた。

バハムートは“虚無の海”の海岸線ぎりぎりまで行くと、急激に左へ転回する。“虚無の海”上空は飛行できないからだ。眼下は深い森が黒一色となって、まるで敷き詰められた絨毯のようだ。ガルドは高速で飛行しながら魔光砲を放つ。大きく開けられたガルドの口から、紫色の球体が射出される。

しかしそれは外れ、バハムートの通過した後の山の斜面で爆発する。奇しくもそこは、飛鳥がモツホブと戦闘した辺りだった。

「おいおい、今ので何人か人間が死んだんじゃないか？」

バハムートは身体を左右へ交互に傾けながら、嘲笑するようにガルドを見やる。完全に遊んでいる目だ。

『うつせえ！』

ガルドは両の手のひらに、小さな赤い魔法陣を作り出す。攻撃力は劣るが、素早く放てるため命中率は上がるのだ。

バハムートはパルメキア山脈の山肌を撫でるように飛び、さらに加速しながら左へ緩やかに旋回し始める。まるでファンタジアの外縁をなぞっているような飛行コースだ。

「おらあー！」

バハムートの進行方向を狙って、ガルドは連続して魔光砲を放つ。上昇下降、時には捻りを加えながらバハムートは余裕を持つてすべの攻撃を避ける。

バハムートは高度を下げ、衝撃波が木々をなぎ倒していく。程なくして青く輝くファンタジア城が見え始めた。

黒々と地面を埋め尽くすモンスター軍の上空を通り過ぎると、ファンタジア城手前で着地する。翼のあるモンスターたちは寄つてくることもなく、ガルドもバハムートの目の前に着地する。

「少しトバし過ぎたか。他の二人を置いてきてしまったな」

『へっ、お陰で貴様とタイマン張れるぜ』

「ふむ、タイマンか。おもしろいな。ではお前から攻撃してみるがいい」

バハムートは翼を折りたたみ、後ろ足二本で立っている。特にシールドなどを張っている様子もないし、攻撃してくる素振りもない。殺気がまるで感じられないのだ。本気でガルドの攻撃を受けるつもりなのだろう。

『悪いが、俺は手加減とかしねえからな』

ガルドはアルテマの詠唱を始める。瞬時に天使の姿へと変わり、頭上の光輪が眩しく輝き始める。遙か後方では、モンスター軍が立ち止まって様子を見ている。バハムートとガルドの戦いを大人しく見守っているのだろう。

「ほう、飽きずにまた“ホーリーバースト”か。では我も同じ魔法で攻撃してくれよう」

バハムートの紅炎の瞳が細められ、口角が上がる。ガルドの詠唱時間はすでに、一分以内に発動できるまでになっていた。

「てめえのターンはねえ！ 食らえ、アルテマ！」

前方へ伸ばされた両手のひらから、白い光球が飛んでいく。一瞬の白いきらめきとなった光球は、吸い込まれるようにバハムートの胸へ消えていく。直後白い無音の爆発が起こる。

「あれは…… ガルド！」

飛鳥はメリア上空を旋回していた。音速近い速度で飛翔するバハムートとガルドを追いきれず、先回りしようとしていたのだ。しかし彼らはそれ以上に速く、ファンタジア城まで戻ってしまっていたようだ。

巨大な白い光のドームに向かって飛鳥は全力で走り続ける。先ほどこから胸騒ぎがしてならないのだ。

近づくにつれ光のドームは縮小していく。そしてその光が消滅した瞬間、さらに巨大な白い光のドームが膨れ上がる。それも二つ同時に発生していた。

「ガルド！」

飛鳥はかつてモンスター軍と交戦した“B六七街道”に沿って北上し、ファンタジア城を目指す。キャリーの街が眼下を一瞬のうちに通り過ぎ、すぐにバハムートが破壊した何もない荒野へ出る。

直後、翼のあるモンスターたちが群がってくるが、飛鳥は次々と倒しながら進んでいく。黒いモンスターの壁を突き破ると、荒野の中にバハムートとガルドの姿を見出した。

「ガルド！」

バハムートの銀色の身体は傷一つなく、何事もなかったかのように赤茶けた地面に佇んでいる。そして数十メートル離れたところには、ガルドが仰向けに倒れている。その姿は魔王ではなく、人間の姿に戻っている。

倒れたまま動かないガルドに、飛鳥は胸騒ぎが強くなるのを感じた。

168話：究極の魔法

「ガルド！」

「う……」

どうやらガルドはかなりのダメージを受けているようだが、死んではないようだ。ローブはぼろ雑巾のようになり、そこから見える皮膚はところどころ黒く炭化し硬くなっている。ガルドの言う“アルテマ”という光系の魔法は、物理的に言えば高熱の爆発系魔法だ。しかしその爆発には聖属性が混じっている。もともと悪属性を持つ魔王ガルドは、聖属性を持つ天使になっても光系魔法でダメージを受けてしまう。

両方の属性を保有するガルドは、その防御力を超えた攻撃を受けてしまうとどんな属性の攻撃にもダメージを負ってしまう。

「くっそ、一瞬のうちに“アルテマ”を二つ同時に出すなんて……」

「ガルド、もう無理だよ！ 動かないで！」

飛鳥はバハムートの存在を無視して、ガルドにキュアの魔法をかける。今の飛鳥は通常の僧侶ジョブを持つ者以上の治癒能力を発揮できるが、光系魔法のダメージはそう簡単には治らない。

ガルドはふらつきながらも立ち上がり、それでも飛鳥をかばうように力強く押し戻す。

「どうやら、そうとも言ってらんねえみてえだぜ」

「え？」

禍々しい微笑を浮かべるバハムートの姿が、陽に陰る。身の毛もよだつような奇怪な鳴き声がして、飛鳥は驚いて空を見上げる。

そこには全身緑色に液状化した、二体のドラゴンが下りてくるところだった。

「な、なにあれ！」

「ドラゴンゾンビだ」

それは先ほどアレンとガルドの倒した、レッドドラゴンとブラックドラゴンのなれの果てだった。気が狂いそうになる異臭を放ち、着地と同時に巨大な身体中から白煙を上げて皮膚が爛れ落ちる。内臓や眼球も粘膜の糸を引きながら地面へ落ち、不快な湿った音を立てる。

「な、なに、どういうこと！」

二体のドラゴンゾンビは、バハムートの忠実な家臣のように両隣で腐臭を放って佇んでいる。まるで命令を待つ猟犬のようだ。

「ドラゴンを作り出すのは、さすがのマスターでも時間がかかってしまうようだね。使えるものは何でも再利用させてもらう。さしずめ廃物利用といったところか。実に効率的だろう？」

「ドラゴンゾンビは攻撃方法こそ肉弾戦のみで単純だが、その耐久力はハンパねえ。それに生身である身体に触ると皮膚が焼け爛れる。気をつける」

「わ、わかった」

飛鳥がドラゴンゾンビたちを警戒しながら、ガルドから離れていく。バハムートはあくまでガルドと戦いたいようで、そんな飛鳥には目もくれない。

ドラゴンゾンビたちは何もない空洞となっている赤黒い眼窩を向け、飛鳥の拳動に反応している。元レッドドラゴンだった方が奇声

を発すると、二体同時に飛翔する。

「くっ！」

「あまり離れるな！」

ガルドの声を背負いながら、飛鳥は上空へ駆け上がった。

「ふふ…… 格闘戦が基本のあの娘に、どこまで耐えられるかな？」

「ばあか、飛鳥を甘く見るな。あいつはああ見えてもかなりタフだ。それより貴様自身の心配をしやがれ」

「まだ強がりと言えるとは、さすがに我が見込んだ勇者だな。お前が苦しみながら助命を乞う姿が、ぜひと見たくなつた」

バハムートは目を細めて大きく裂けた口角を持ち上げる。

「さて、次は何をするのかな？」

「これはどうだ？」

ガルドは身体の前面に赤く大きな魔法陣を発生させる。それは魔法砲の魔法陣だ。

「今さら“ホーリーバースト”より攻撃力の弱い魔法を使って、どうするつもりだ？」

バハムートは興味深げにガルドを見つめている。

「余裕でいられるのも今のうちだ」

赤い魔法陣は時計回りに回転し始める。するとさらにその前方の一点に、白い光が集まり始める。

「む？」

見たこともない魔法の発動手順に、バハムートの表情が険しくなる。回転する赤い魔法陣の中心が盛り上がっていき、細長くなっていく。そしてその先端が白い光の集束点へ到達した瞬間、紫色の爆発が起こる。それは前方へ向けて一気に拡散し、バハムートの銀色の身体を飲み込んでしまう。

「うりゃああつ、“マダンテ”！」

さらにガルドは残った魔力のすべてを使って、火・水・風・土の四大元素のパワーをすべて注ぎ込む。紫色の光は一瞬のうちにまばゆい金色の光に変わり、大地を削って膨大な光の奔流となる。それはすべての属性と魔力による究極の魔法だった。

闇系魔法の“魔光砲”、光系魔法の“アルテマ”、そして四大元素すべてのパワーを込めた膨大なパワーは、後方のファンタジア城を掠めて遙か彼方の雲を突き破る。もしこの世界に人工衛星があったならば、宇宙へ突き出る金色の光を観測したことだろう。それはガルドの命のきらめきだった。

「うあ、ああああああああつ！」

ガルドは全身が燃え立つような感覚に、呼吸が苦しくなる。すべての魔力を注ぎ込むということは、生命力自体を注ぎ込んでいることと同じである。つまり今ガルドはまさに、命を懸けて攻撃を行っているのだ。

尽きることはないように思えた光の奔流が唐突に途絶える。ガルドは目の前が暗くなっているのに気づく。視力がほとんどなくなってしまったのだ。バハムートを倒すことができたのか。それすらも

確認できないほど、ガルドは消耗しきっていた。

「ガルドお！」

スピニツチの甲高い声が近づいてくる。全身の力が抜け、ガルドは自分が地面へうつぶせに倒れるのを他人事のように感じていた。

169話：血染めの拳

スピニツチの悲痛な叫び声に、飛鳥は空中を走りながら振り返る。ドラゴンゾンビたちは腐臭を放ちながら、飛鳥を左右から追い込んで来る。超シールドを張っている間は直接的なダメージを受ける心配はないが、このまま逃げ回っていても埒が明かない。

すると西の方に、モンスター軍の一角を切り崩しながらアレンが戻って来るのが見えた。

「アレン！」

飛鳥は右方から噛みついてくるブラックドラゴンの下をくぐり、アレンのところへ走る。アレンの周囲にはオークとカルラが群がっていた。

「どけええええ！」

空中で巧みにフットワークを駆使しながら、飛鳥は次々とモンスターたちを倒していく。血飛沫と金色の粒子で彩られた通路の向こうに、アレンの金色の鎧姿が見えた。

「アレン、アイツら頼めない？ ガルドがヤバいの！」

アレンは流れるような動作でモンスターたちを切り刻んでいく。飛鳥はアレンの頭の横を併走しながら、襲いかかってくるカルラたちを倒していく。

「わかった、あれはドラゴンゾンビだな」

上空から緑色の液体を滴らせた巨大な影が下降してくる。すでにどっちがどっちなのか、わからないほどになっている。

「うん、触ると溶けちゃうから気をつけて」

アレンは口の端を持ち上げる。「わかっている」ということなのだろう。飛鳥もアレンへ微笑み返す。

「うりゃあああつ！」

ドラゴンゾンビたちを引きつけてから、飛鳥はカルラたちを蹴散らしてダッシュする。飛鳥の動きにつられて首を伸ばしたドラゴンゾンビへ、アレンは剣圧を飛ばす。緑色の液体を撒き散らし、ドラゴンゾンビが苦悶の声を上げる。

「貴様らの相手はこの私だ」

アレンは進路を南へ変更する。ドラゴンゾンビたちはそのまま身を捻ってアレンを追って行った。

「ガルド！」

飛鳥は五メートルほどの高さを全力で走っている。時折どこからか、弓矢や魔法が飛んでくる。それらをシールドで弾き返ししながら、飛鳥はガルドのいたところへ脇目もふらず走って行く。

バハムートは先ほどと同じところで、寸分違わぬ格好で佇んでいた。しかしガルドは倒れたところにはいない。スピニッチも見当たらない。飛鳥は走りながら周囲を見渡す。

果たしてバハムートの陰に、スピニッチの小さな黒い姿を発見する。どうやらバハムートへ何か怒鳴っているようだ。

そしてその後ろに、ガルドが立っていた。しかしガルドは自分で立っていたのではない。両脇を屈強な狂戦士に抱えられている。意識を失っているようで、くすんだ金髪が力なく項垂れている。

「ガルド！」

モンスター集団を突き抜けた飛鳥は、バハムートと対峙する。

「ガルドを放すにや！ もう勝負はついたにや！」

立ち止まると、スピニツチの甲高い叫び声が聞こえてきた。

ガルドが命懸けで放った究極の魔法も、バハムートには通用しなかった。バハムートの背後には、幅十メートルほどの溝がずつと向こうまで伸びている。ガルドの魔法によって地面が抉られたのだらう。

しかしバハムートの立っているところの地面だけは無事で、その後ろもバハムートの影の形に地面が残っている。そこからはバハムートがガルドの魔法の直撃を受けたことがわかる。それでもバハムートは倒せなかったのだ。

「今度はお嬢さんが相手してくれるのか？」

バハムートはスピニツチのことは完全に無視し、飛鳥へ目を細める。

「ガルドを放せえ！」

飛鳥の背後で土砂の爆発が起こる。飛鳥が力一杯地面を蹴ったのだ。飛鳥はロケット弾のようにバハムートへ突っ込み、そのままの勢いで右ストレートを叩き込む。胸の中央、心臓のある辺りだ。

バハムートの背中から内臓が飛び出し、胸に大穴が開く……こ
とはなかった。飛鳥の拳は、巨大な岩を殴ったように跳ね返される。
飛鳥の右腕全体に痺れが走る。全力で殴って腕が痺れるなど、この
世界へ来て初めての経験だった。

「ふふ、何かしたか？」

バハムートは反撃するでもなく、飛鳥を見て微笑んでいる。

「く、くそ！」

飛鳥はその場で腰を落とし、バハムートの細長い顎目がけてクロ
スアップーを突き上げる。

「せやつ！」

しかしそれも、バハムートには蚊が刺したほどのダメージも与え
られない。

「アスカ！」

スピニッチが泣きそうな顔で飛鳥を見つめている。

「くっそおおおっ！」

飛鳥はその場でめちやくちゃにバハムートを殴り始める。パンチ、
キック、時にはトルネードアップーなどの大技も出す。

しかしバハムートはそよ風に吹かれるように、涼しげな顔で飛鳥
の攻撃を受け続けている。もちろんダメージはまったく与えられて
いない。

飛鳥のグローブはあまりの激しさに破れ、さらに皮膚を突き破って骨まで見え始める。それでも飛鳥は攻撃をやめない。バハムートの銀色の胴体には、拳形の血の跡が判を押したように無数につく。いつしか飛鳥の両目からは、涙が止めどなく溢れてきていた。

「くそつ、くそおつ！」

「もう諦めたらいいのではないか？」

バハムートの憐憫を込めた声に、飛鳥はどうしようもなく怒りと悔しさが込み上げてくる。自分の力がバハムートにはまったく通用しない。ここまで苦しい戦いを乗り越え、辛い思いを噛みしめながら成長してきたというのにそのすべては無駄だったのだ。

「ア…… スカ……」

バハムートの背後から掠れた声が滲み出てくる。飛鳥ははっとして攻撃を止める。ガルドが苦しそうに表情を歪めて顔を上げている。ガルドの瞳は色を失い、黒目が白く濁っている。おそらく目はまったく見えていないだろう。

「あ、きらめる…… な。お、お前は…… い、いや、俺たちは……」

… ま、負けねえ」

「ガルド……」

飛鳥の頬を涙が幾筋も伝って落ちる。飛鳥の胸に、熱いものが込み上がってくる。

「ちつ、本当にしぶといヤツだな。ウィザードにしておくのはもったいない。しかし…… いい加減黙れ」

バハムートの左の翼が一瞬のうちに広げられる。血飛沫と共に、
ガルドの右腕が肩から切断されて宙を舞っていた。

170話：愛の力

「ぐああああああっ！」

ガルドの絶叫が響き渡る。切断された肩口から鮮血が飛び散る。ガルドは大きく口を開けて苦悶の声を上げ続ける。血の混じった唾液を吐き散らし、止めどなく涙を流している。

「ガルド！」

「おおっと」

バハムートの銀色の翼が飛鳥の行く手を阻む。翼に遮られ、ガルドの姿は見えなくなってしまう。それでも苦しい声は聞こえてくる。

「彼はもうゲームオーバーだ。お前もな」

「アタシはまだ終わってない！」

飛鳥は涙に濡れた顔を上げ、バハムートを睨む。しかしその瞳の中には、今までのような怒りや強い意志は感じられない。それはそう、かつて父親に犯されていた頃の飛鳥の目に似ていた。

「絶対的な力の前には、弱者の怒りや憎しみなど何の価値もない。いくらでも憎むがいい。視線を逸らし、下を向いて我を罵ればいい。負け犬の遠吠え、内弁慶。お前ら人間には分相応というものがある。自分の狭い世界の中で偏った悦楽と些末な悔しさ、些細な幸せと身の丈に合った夢に生きていればいい。そして届かぬ怨嗟によって、自分で自分の身を焦がすがいい。我にとっては何の意味も価値もない。まさに虫ケラのごとくな」

「あ、ああ……」

飛鳥の心の中には闇が広がっていた。それは絶望という名の真つ暗な空間だ。

クウエンディ女王やミライの笑顔が黒く塗りつぶされていく。オーガスの無表情な瞳は何も映し出していない。ジャグワやパドムが恨めしげに見つめている。ジェミニは泣き叫び、フェアリーたちは地獄の業火の中で焼かれていく。エマやエレナ、カイたちは血まみれになって物言わぬ死体となっている。そこには黒く焼け焦げたニンファドーラ女王の姿まである。

すべては無駄だった。この世界に來た意味は、まさに自分が死ぬためだった。いや、スピニツチに連れて來られた時点で、自分は死んでいたのだろう。あっちの世界では、自分は生きる価値のない人間だった。喜ぶことも悲しむことも、笑顔さえ必要としない屑のような人間だった。

バハムートの言う通りだった。

自分は生きてなどいなかった。人は生まれた瞬間に死へのカウントダウンが始まる。それが長かるうが短かるうが、たどり着く場所はただ一つ。“死”のみだ。

何不自由ない暮らしができて、使い切れないほどのお金を手に入れても所詮は泡沫の夢のごとく死んでしまう。がんばって勉強していい学校に入っても身を粉にして働いて出世しても、死んだらただの肉の塊になるだけだ。

人は他人が死んでも一時的に悲しみの涙を流し、お為ごかしに悼んでみせる。しかし次の日にはスポーツの結果に喜び、バラエティ番組で大笑いする。

人の死は運命で定められており、それは強者によって管理・操作される。“死”に意味があるならば、それは強者にとって価値を見出せるかどうかだ。

自分はバハムートに殺される。ヤツに殺された何番目かの召喚さ

れた勇者として、その数を一つ増やすためだけに死ぬ。それが自分が生まれた意味、運命だったんだ。

「あ…… ああ……」

飛鳥はその場に両膝をつく。だらりと垂れ下げた両手の指先からは、赤い血が雫となって地面へ落ちる。その地面から黒い炎が湧き出て、人の形を取る。幻魔だ。

幻魔は次々と現れ、飛鳥を地面へ組み敷く。すでに飛鳥に抵抗する気力は残っていなかった。

「おおっと、お前はまだ殺さない。女の召喚された勇者は珍しいかな。モンスターどもの子どもを産めるだけ産んでもらう。死ぬのはそれからだ」

バハムートの嘲笑を受けて、幻魔たちの手が飛鳥のスク水に伸びる。

「ケケケ、久々の女だ」

幻魔は力任せにスク水を破る。身に着けている飛鳥の心が死んでいるため、その生地は通常の布のように簡単に裂けてしまう。

飛鳥の白い背中が剥き出しになり、腰まで露出してしまう。

「アスカ！」

スピニッチが助けに行こうとするが、バハムートの翼で遮られてしまう。

「お前は最後まで大人しく見ているがいい」

「ケケケ、美味そぎえっ！」

突然、幻魔たちは細切れに寸断される。幻魔たちの破片は風に吹かれて塵のように霧散する。

「アスカ！」

アレンだった。飛鳥の様子がおかしいことに気づいて戻ってきたのだ。

「おお、ようやく本命勇者の登場だな」

「アスカ、立て！ まだ終わっていない、君の力はこんなものじゃないはずだ！」

アレンは群がるモンスターたちを次々と屠りながら、飛鳥のところに走って来る。空は巨大なドラゴンゾンビ二体と、無数の翼を持つモンスターたちに埋め尽くされている。

「ア、アレン、ア、アタシ……」

四つん這いになって膝を立てようとするが、飛鳥にはもう立ち上がる気力もない。アレンは飛鳥の腕を取って立ち上がらせ、その腕の中に抱き寄せる。

「私は君を愛している。君のことは絶対に死なせない。私が命を懸けて守ってみせる！」

「アレン……」

アレンと飛鳥は唇を重ねる。絶対に諦めない。飛鳥はアレンの温かい体温から、強い意志を感じ取っていた。

「うおおおおっ！」

アレンは飛鳥をかばうように前に立ち、全身から白い炎を噴き出させる。それはまさに、アレンの命の炎だった。

「アレン・ワグナー参る！」

アレンの黄金の髪と青い瞳が、烈火のごとく燃え上がっていた。

171話：ファイナルストライク（前書き）

横書き推奨です。

171話：ファイナルストライク

「Der Tornado des Schwertes!」（剣の竜巻）

アレンの姿が画質の悪い映像のように霞む。次の瞬間、モンスターたちの悲鳴と血飛沫が降り注ぐ。アレンは凶暴な嵐と化していた魔剣グラムを縦横無尽にきらめかせ、モンスターの壁に向かって突撃していく。無数とも言える黒々としたモンスターの群れが、白い暴風によって削られていく。近づくものはすべて瞬時に切り刻まれ、肉塊へと強制変換されていく。それはまさに暴風とも呼べる攻撃で、モンスターたちに為す術はなかった。

「うおおおおおおおっ!」

空にいるモンスターも、アレンは驚異的な跳躍力で粉碎していく。翼を持つモンスターたちは空中で次々と細切れにされていき、アレンの周囲に肉片となつて着地する。返り血を浴びてもなお、アレンは憤怒の表情で前に進み続ける。

そこに二体のドラゴンゾンビが雄叫びを上げて襲いかかってきた。

「Der Raum der Träne!」（断裂の空間）

アレンは足を止め、剣を下段に構えて腰を落とす。青い瞳がより青い炎を上げると、アレンの全身から噴き出していた白い炎がかき消える。その瞬間、空間が“ズレ”た。

「おおっ!」

バハムートが感嘆の声を上げる。元レッドドラゴンであったらしいドラゴンゾンビは、きれいに真っ二つになっていた。

「むん！」

下段から斬り上げた返す刀で、アレンはもう一体のドラゴンゾンビに上段から剣を振り下ろす。袈裟懸けに斬られた元ブラックドラゴンであったドラゴンゾンビは、緑色の体液をぶちまけながら憤死する。その下の地面には、遙か先まで亀裂が走っていた。

「さすがアイリスの勇者アレン！ワグナー。空間さえも斬るか。我が相手にふさわしい攻撃力だ」

バハムートは翼を広げて舞い上がる。そして優雅にアレンの頭上を飛び越え、どろどろに溶けて消えていくドラゴンゾンビたちの体液の上に粘着質な音をさせて着地する。周囲のモンスターたちは、バハムートの動きに合わせて下がっていく。バハムートの邪魔にならないように、ということなのだろう。これほどまでのアレンの攻撃力を見せつけられてもなお、モンスターたちによるバハムートの強さへの信奉は崩れていない。

アレンは再び全身から白い炎を噴き上げ、バハムートと対峙する。力なく地面へ座り込む飛鳥は、アレンの後ろ姿に嫌な予感を感じていた。

「アレン……」

飛鳥は砂を握り込んで下唇を噛む。

自分がもつと強ければ、いっしょに戦えるのに。しかし自分ではアレンの邪魔にしかない。アレンは戦いの最中でもきつと、自分を守るうと気遣ってくれる。それはバハムート相手では致命的な

隙にしかない。自分はアレンの勝利を信じて祈るしかないのだ。

「お前は空を飛べないのだったな。であれば我も飛ばずに戦ってやろう」

「それを後悔させてやろう」

アレンは一瞬のうちに間合いを詰める。その瞬間にはすでに、魔剣グラムはバハムートの脇腹へ吸い込まれるように振られている。

高い金属的な音をさせ、バハムートの翼がアレンの剣を受け止める。と同時にバハムートの右前足がアレンへ伸ばされる。

「ふっ」

バハムートの右爪はアレンの残像を突き抜ける。アレンはジャンプ一閃、バハムートへ上段斬りをしていた。しかしその攻撃も、バハムートの左前足に受け止められる。

一撃ごとに大地が震動し、大気が震える。ドラゴンと勇者の戦いは一見すると普通の肉弾戦のようだが、その一撃一撃が途方もないパワーのぶつかり合いだ。通常のモンスターが巻き込まれば、コンマ数秒で跡形もなく消し去られてしまうだろう。それはそれほどパワーのぶつかり合いだった。それがわかっていたからこそ、モンスターたちは離れていったのだろう。

「最強の技を出せ！　そうでなければ我は倒せんぞ！」

バハムートが叫ぶ。その真紅の両眼は、強い相手との戦いで喜色に染まっている。

「言われずとも！」

アレンの白い炎が魔剣グラムへ集中する。体内にあるパワーをすべて剣へ込めたのだ。それは、あまりにも強大なパワーで剣が耐えきれずに破壊されるのを防ぐためでもある。

白く輝く魔剣グラムは、超高熱を発して振動し始める。低く長い地鳴りが次第に強まり、世界を下から突き上げる。アレンのパワーに大地が震えているのだ。

「こ、これは…… 凄まじいパワーだ」

バハムートの眼に警戒の色が浮かぶ。今まで常に余裕を持って見下した嘲笑をしていただけに、アレンの次の攻撃がどれほどのものかわかる。

「この一撃に私のすべてを込める！」

バハムートは危険を察して距離を取る。アレンは地面を割りながら、弾丸のように走り出す。

「く、ま、まずい！」

「Final escape? get!」（ファイナルストライク）

アレンは駆け抜けながら、魔剣グラムを下段から天に向かって斬り上げる。

バハムートが驚愕した表情のまま白い光に包まれる。一瞬遅れて地面が爆発する。アレンの剣圧によって大地が抉れたのだ。大量の土砂と白熱した光が高空まで突き抜ける。

ファンタジア城南の荒野に、巨大なキノコ雲が発生した。それはファンタジア目指して進軍中の、フェンドルフイン軍とイスペリア軍にも目視できるほどの規模だった。

172話：チェックメイト

「女王様あれを！」

青空のような蒼く長い髪をなびかせ、レイズナーがクウエンディの元へ着地する。レッドドラゴンとの戦闘によって負傷したレイズナーは、現在女王直属の護衛隊長をしていた。

「あれは……」

形の良い眉根を寄せ、クウエンディは馬車の荷台から身を乗り出す。指揮官用の馬車は至極質素で、とても一国の為政者が使用するものには見えない。華美を好まない誰よりも華美な女王は、常に実用性重視だ。

巨大なキノコ雲が遙か北の空に立ち上っていく。押しのけられた上空の雲が、キノコ雲の周囲を台風のように渦巻いている。クウエンディはそのパワーの源を探るが、少なくとも飛鳥のものではないということぐらいしかわからない。

クウエンディは不安げな様子で、傍らに佇むレイズナーに鋭い視線を送る。

「オーガスに急ぐように言ってください。悪い予感がします」

「はっ！」

レイズナーは即座に先陣を任されているオーガスの元へと飛んでいく。

フェンドルフィン軍はレッドドラゴンが急にいなくなっってから、フェアリーたちの助力もあって大幅に戦況を巻き返した。パルメキア山脈に駐留していた一千ほどの国境警備隊を撃破し、一路“A三

街道”を北上している。ファンタジア南部の要衝である商業都市ドルメンにはモンスターは一体もいなかった。それはフェンドルフィン軍にとっては幸運なことだったが、クウエンディは疑惑を感じていた。

ドルメンにモンスター軍がないということは、どこにいいのか。スピニツチのたつての願いによって使い魔契約を解除したことは、クウエンディに前線へ出ることを躊躇させた。これでクウエンディは何かあっても、死ぬことはできなくなってしまったのだ。

クウエンディはスピニツチの強い覚悟を感じた。それは、スピニツチが死を覚悟しなければならぬほどの戦いが待っているということなのではないか。

クウエンディは飛鳥の勝ち気な笑顔を思い浮かべ、風によって黒々と肥大していくキノコ雲をずっと見つめていた。

「フラット部隊が合流しました」
「うむ」

グインの報告に、黒い巨馬に跨ったデルピエロが鷹揚にうなずく。ドルメン方面から撤退してきたフラット部隊は、ほとんどその数を減らすことなく本隊と合流できた。それは野生モンスター以外と戦闘することがなかったからだ。

ガルドとの契約によって前線へ出ることができなかったデルピエロ王は、ここにきてようやく出陣することができた。それは強敵ブラックドラゴンが、何故か急にいなくなったことに起因する。

ファンタジアとの国境を守るモンスター軍は、明らかに時間稼ぎを主目的とした小規模な部隊だった。ブラックドラゴンの強大な攻撃力の前に苦戦していたが、そのブラックドラゴン自体がいなくなったので国境を突破するのにさほど時間はかからなかった。

キャリーを出立してすぐ上空を二つの物体が超高速で横切った。一つは銀色のドラゴンのようで、もう一つは黒い光体だった。デルピエロ王は、それがガルドであると確信していた。

ファンタジアではどんな死闘が繰り広げられているのだろうか。少なくともガルドは生きている。であれば一刻も早く進軍しなければならぬ。ガザの二の舞にはさせられないのだ。

「お、王、あれを！」

側近の緊張した声で我に返る。前方に黒々としたキノコ雲が湧き上がっていたのだ。

「あれはなんだ？」

「おそらく膨大なパワーの放出かと。魔法とも違うようなのでよくわかりませんが、少なくともガルドではないでしょう」

デルピエロ王と馬を並べて進軍しているグインは、鋭い視線を立ち上るキノコ雲に向けている。先端が上空の薄い雲を突き破り、巨大な渦巻きを形成していく。あれほどのパワーの放出が成されたということは、戦況に何か大きな変化が訪れたということだろう。

「グイン、フラットと共に先に行け。脱落した者は置いていって構わぬ。できるだけ早くファンタジアへ向かうのだ！」

「はっ！」

グインは馬の腹を蹴り、兵達をかき分けながら疾走していく。キャリーに敵はいなかった。フラットの報告によって、ドルメンもめぬけの殻だったことがわかった。

となれば答えは一つ。

ガルドたちは今、たった三人と一匹でモンスター軍全軍と戦って

いるのだ。デルピエロ王は手綱を強く握りしめる。手のひらの皮膚が破れ、血が滲む。噛みしめた奥歯がぎりと鳴る。

「何が最強の軍だ。結局は若い彼らに任せきりではないか。ガルド、死ぬな。お前は絶対に元の世界に還してやる」

王の苦悩に満ちた呟きは、上空に拡散していくキノコ雲とともに虚空へと吸い込まれていった。

「アレン！」

巻き起こる爆風の中、アレンが片膝をついてくずおれる。飛鳥は立ち上がって歩き出そうとするが、ツバメのように前に回り込んできた小さな黒い影に行く手を遮られる。

「待つにや！ まだ終わってにやいにや！」

「スピニツチ、だからってアレンをほっとけないでしょ！」

飛鳥はふらつきながらも歩き出す。周囲のモンスターたちが、収まりつつある黒煙に輪を締め始めている。もしアレンがすべての力を使い果たしてしまっているのなら、雑魚モンスターといえど殺されてしまう。

「違うにや、バハムートはまだ生きているにや！」

「え……」

霧雨のように舞い散る砂と風に流されて漂う黒煙の向こうに、銀色のきらめきが見え始める。続いて真紅の両眼がゆっくりと進み出

てくる。

黒煙をかき分けてゆつくりと現れたバハムートは、片膝について項垂れるアレンの前で止まる。バハムートの体には右後ろ足の付け根から右の肩口にかけて、一直線に白い傷がついていた。それはアレンの攻撃によってつけられたものだろう。

傷は白く泡立っており、白煙を上げている。バハムートが歩みを止めた時、傷は完全に消滅した。

「約束通り“飛ばなかった”ぞ。では我も約束通り、貴様を殺すでしょう…… チェックメイトだ」

その瞳には嘲笑ではなく、憐憫が宿っていた。

173話：アレン死す

「アレン！」

飛鳥が走り出すとスピニッチが横に並ぶ。

「アスカ、どうするつもりにゃ！」

「決まってんじゃん！ アレンを助けんのよ！」

「殺されるにゃ！」

「じゃどうすりゃいいのよ！」

スピニッチは言葉に詰まる。実際のところ、アレン以上に強い勇者など今まで存在しなかった。そのアレンが命懸けで攻撃しても、手傷を負わせることしかできなかった。しかもその傷もすぐに治癒されてしまう。

バハムートはまさに最強だった。召喚された勇者なら倒せる者も現れるだろうと考えていたが、結局は無理だった。スピニッチは俯いてその場に静止してしまう。万事休すだ。

「アレン！」

「おっと、お前はオレたちの相手をしてもらっぜ」

飛鳥の前に複数の狂戦士が立ちはだかる。

「どけえ！」

飛鳥は走りながら右ストレートを繰り出す。しかしそれは難なく受け止められてしまう。

「へへっ、お嬢ちゃんは大人数しくオレたちと遊んでればいいんだよ」
「痛っ！」

受け止められた右腕を捻られ、飛鳥はその場に膝をついてしまう。
狂戦士はそのまま飛鳥にのしかかってくる。

「おい、てめえばかり楽しむんじゃないよ！ オレたちにもやらせろ！」

周囲の狂戦士たちが下卑た笑いで飛鳥を取り囲む。飛鳥の姿はあつという間に赤黒い肉体の壁に見えなくなってしまう。

「うつ、く、くそっ！ 放せ、放せえ！」

飛鳥は必死に狂戦士を振り解き、アレンの方へ這いずり出ようとする。

「がつ！」

飛鳥の剥き出しになった背中を、狂戦士の大きな足が踏みつける。肋骨が数本まとめて折られ、飛鳥の口から血の塊が吐き出される。

「お前はもうやられるしか意味のねえ存在なんだよ。大人数しくしてろ。気持ちよおくしてやるからよ」

飛鳥の両手両足がそれぞれ、狂戦士たちに押さえつけられる。霞む視界に、バハムートに傳くように膝をついて頂垂れているアレンが見える。

「うつ、アレン…… なんて、なんで力が出ないんだよ……」

飛鳥の身体からは急激に力が抜けていつている。諦め、絶望……
飛鳥の中ではすでに敗北を受け入れてしまっている。どれだけ足掻こうとも、今の飛鳥の状態ではゴブリンにさえ敵わない。

飛鳥は涙と血でぐしゃぐしゃになりながら、アレンを見つめ続ける。バハムートはアレンへ何か囁いていた。

「ひと思いに殺してほしいか？」

バハムートの声音は穏やかで落ち着いている。アレンは混濁した意識の中、飛鳥の叫び声が聞こえた気がした。

「私を殺せても、人間は死なない。お前は人の本当の強さを知らない」

「はっ！」

バハムートは仰け反り、禍々しい笑みでアレンを見下ろす。

「人の本当の強さ？ 笑わせるんじゃない。見ろ、あいつらを。元は人間だったモンスターどもを。あれが人の本性だ。自分がよければそれでいいと思い、快楽と他人の不幸を望む。弱い者にはどこまでも見下して攻撃的になり、強者に媚び諂^{へつら}う。まさに醜悪な生き物よ。そのどこに“強さ”などある？ 人間は滅びるべきなのだ。この世界から！」

バハムートは一瞬身を低くし、弾かれたように空へと舞い上がる。バハムートの真上には、金色の光がきらめいている。バハムートはアレンを前足の爪で弾き上げたのだ。

「アレン！」

飛鳥は押さえつけられたまま首を捻って空を見上げる。高く跳ね上げられたアレンはそのまま自由落下に移り、飛鳥の方へ落ちてくる。狂戦士たちは空を見上げたまま隙間を空ける。周囲のオークたちもそれに合わせて下がっていく。

「ぐっ！」

アレンが飛鳥の隣へ仰向けに落ちる。そこにバハムートが猛烈な勢いで着地した。

「ぐはあっ！」

轟音と共に地面が一瞬跳ね上がり、アレンの口から大量の血が吐き出される。アレンは大きく目を見開き、虚空を掴むように右手を突き出す。金属的な音をさせ、魔剣グラムがアレンの横へ落ちる。アレンの下半身はバハムートに踏み潰されていた。

「アレン、アレン！」

飛鳥は涙を流しながら、動かせない左手を伸ばそうともがく。アレンの右手がゆっくりと飛鳥の方へ伸ばされる。

「ア、アスカ…… わ、私はここまで…… 君には絶対に元の世界へ戻ってもらいたい…… だから諦めるな。何があっても…… い、生きるんだ…… 強く…… 私の分まで……」

「いやっ、いやだよ！ いっしょに戻ろうって言ったじゃん！ あつちで妹さんが、エリーゼさんが待ってるんでしょ！ いっしょに帰ろうっ？」

飛鳥の悲痛な叫びに、アレンは目をつぶって自嘲するように微笑む。

「わ、私はどのみちもう、元の世界へは戻れなかった…… 我々召喚された勇者は、召喚した本人でなければ戻せない。わ、私はニンファドーラ女王が亡くなった時点で…… も、もう元の世界には戻れなくなってしまっていたんだ……」

飛鳥は驚愕で何も言えなくなってしまう。ノワール村でフェアリーたちにニンファドーラ女王の死を聞いてからみんなの様子がおかしかったのは、そういう訳があったのだ。そしてローレンツの山でアレンが飛鳥に言ったことには、そういう思いが込められていたのだ。

「だ、だからアスカ、君は元の世界に戻ってエリーゼに伝えてくれ…… 兄は最後までお前の幸せをね、願っていたと…… そしてアスカ…… 君の幸せも、願っているよ……」

アレンの青い瞳から光が失われていく。伸ばされた右手も力なく地面へ落ちる。バハムートがゆっくりと下がっていく。

アレンの下半身は、完全に潰れて何もなくなってしまうていた。バハムートの足にアレンの血液や肉片がこびり付いている。潰された金色の鎧の下に、アレンの内臓らしき肉片がはみ出している。

「アスカ、生きろ…… 強く、強く…… 負けてはいけない…… 人生に…… 自分に」

アレンの頭が力なく横たわる。その瞳には、すでに命の灯火はなかった。

「アレン？ アレン…… ねえアレン、嘘でしょ？ アレン、アレン！」

「ははは、死んだ！ 死んだぞ！ 最強の勇者が死んだ！ これで人間どもは終わりだ！」

バハムートは翼を大きく広げて空へと浮かび上がる。

「聞け、百万のモンスター軍よ！ 我は召喚された勇者どもに勝った！ 後は南と西から近づいている人間の軍勢を滅ぼせば終わりだ。心おきなく殺戮せよ！ 破壊せよ！ 蹂躪せよ！ 我々の世界が始まるのだ！」

「おおおおお！」

世界がモンスターの雄叫びで埋め尽くされる。充滿した殺意と狂気が渦巻いている。

バハムートが悠然と身を翻そうとした時、下方の狂戦士たちが一気に破裂する。

「む？」

飛鳥が組み敷かれていた周囲の狂戦士たち数十体が、一瞬のうちに金色の粒子へと化していた。そしてその中心に、青白い炎を纏った飛鳥がゆらりと立ち上がる。

「こ、小娘……」

バハムートは見た。

飛鳥の背中では、四枚の花びらのタトウが青白い炎を燃え立たせていた。

174話：百花繚乱

「小娘、まだ抵抗するか。もう終わりだというのがわからんらしいな」

「終わってない」

飛鳥の背中から立ち上る青白い炎は次第に勢いを増し、全身を覆い尽くす。静かに揺らめく炎は^{リッ}燐のようにも見える。それは確かに飛鳥の魂の発露だった。

「アタシは死なない。死ねない。アンタたちを殺さないとアタシが生きられないなら、アタシはアンタたちを殺す」

「ははっ！」

バハムートは翼を大きく広げ、ゆっくりと上昇する。それは終末世界に現出した悪の十字架だ。

「殺す？ 殺せるのか？ この百万の軍勢を。最強の我を！ 貴様はアレン＝ワグナーより弱いではないか！」

バハムートの声は荘厳な鐘の音のように降り注ぎ、世界の終わりを告げる神の声を思わせる。それは確かに破滅を誘う神の声だった。それでも飛鳥の心は揺らがない。相手が神なら神を殺すまで。

「アタシは確かに弱い。生きてても意味なんかないカスみたいな人間だ。でもアレンは言ったよ。『生きる』って。だからアタシは生きる。何があっても。邪魔するヤツは許さない」

超高音を発生させ、大気が集束していく。飛鳥はそこに確実に存

在している。飛鳥は今生きている。世界はそれを厳粛に認め、飛鳥に同化していった。

「では生きてみる！ 我らはそれを全力で否定してやろう！」

バハムートの号令一下、モンスター軍が雄叫びを上げて殺到する。バハムートの姿も、翼を持つモンスターの群れで見えなくなる。

「ア、アスカ！」

スピニッチはモンスターの群れの中に、あっという間に埋没してしまった飛鳥に叫ぶ。四枚目の花びらが光っていたのは確認できたが、この状況下でどれほどの意味を持つのだろうか。圧倒的な数と力を持つモンスター軍に、いくら必殺技を持つ飛鳥でも敵うわけがない。

しかしスピニッチの懸念は杞憂に終わった。飛鳥に猛烈な勢いで殺到したモンスターたちは、その勢いを失うことなく消滅していく。

「ア、アスカ……」

それは信じられない光景だった。

飛鳥は一回の攻撃で一体を確実に消滅させている。右ストレートでオークの頭を打ち抜き、右手を戻す動作で後方のゴブリンを肘打ちで倒す。同時に左アッパーが狂戦士の上半身を粉碎し、そのまま右後ろ蹴りで後方のモッホブを肉片に還す。

飛鳥の流れるような動作には、一切の無駄がない。すべての動作が攻撃となり、モンスターを倒していく。モンスターたちは、飛鳥に触れることなく原子へと還元されていく。飛鳥の周囲三六〇度には、血飛沫の花が咲き乱れている。

「ひゃ、「百花繚乱」……」

四枚目の花びらが反応する条件は特定の技ではなかった。飛鳥の「心の有り様」が鍵であったのだ。「生きる」という強い意志。何物にも負けない強い心。絶望に打ちのめされても、希望を失っても絶対に諦めないという強靱な生きる意志。それが発動条件だったのだ。

「うあああああああああああつ！」

周囲のモンスターを消滅させると、飛鳥はモンスター軍の壁に向かって突撃を開始する。それはすでに人間の動きではなかった。一回の攻撃で一体、一匹、一羽。百万の軍勢なら、百万回攻撃すればいい。今の飛鳥にとって、それは造作もないことだった。

「な、なんだあれは……何が起きているというのだ！」

一秒ごとに数百のモンスターが金色の粒子へと変換されていく。あり得ない光景に戦慄したバハムートは動けなくなってしまう。それはバハムートにとって生まれて初めて体験する感情……「恐怖」だった。

地表を埋め尽くしたモンスター軍が、みるみるうちに金色の光で埋め尽くされていく。かと思えば、空中で粉雪の如く乱舞する。飛鳥のあまりにも速い攻撃速度のため、世界が金色の霧で覆い隠されていく。バハムートは今、金色の海の底に沈んでいた。

「ああああああああああつ！」

大地に空に飛鳥の青白い炎を纏った姿が現れては消える。高速再

生された映像のように、飛鳥の姿は捉えようのないスピードで動き続けている。それでも飛鳥の動きは疲れて遅くなるどころか、ますます加速していく。

巨大なパキケファロサウルスやティラノサウルスが、一瞬で微少な肉片となつて消滅する。無数のキラビーに分散したオーガウルフが、拡散するより速く金色の粒子へと強制変換される。

飛鳥は実は、ほとんど体力を使っていない。流れるまま、身体の動くままに攻撃し続けているだけなのだ。それはこの世界の意志。飛鳥と同化した世界の意志が、飛鳥の身体を使つて表現しているに過ぎないのだ。

『ありのままの自分を信じ、受け入れる。それができた時、おぬしは無敵になる。きつとこの世界を救う存在となれるじやろう』

イスペリア寺院の僧、ラナが言った究極の境地。飛鳥は自分の弱さを認め、その上で強く生きようとしていた。それはまさに無敵。飛鳥は今、世界そのものとなっていた。

「女王様、間もなくです！」

フェンドルフィン軍はできる限りの速度でファンタジアへ到着した。本来であれば広大な市街が広がっているはずの場所には、何もない荒野が広がっていた。

そして少し先に、オーガス率いる先発隊が呆然と立ち尽くしている。まるで魂の抜けたように立ち尽くす兵たちを見て、クウェンデイ女王は眉根にしわを寄せる。

「どうしたのです、進軍しなさい！ 飛鳥たちに危険が……」

馬車を飛び降り、オーガスたちの前へ着地する。そしてクウエン
ディ女王も言葉を失ってしまう。

「こ、これは……」

広大な荒野は、見渡す限りにナイト硬貨で埋め尽くされている。
そして遙か先には、青白い炎を纏った少女が一人ぽつんと立ち尽く
している。その周囲は赤黒いモンスターたちの死骸で埋め尽くされ
ていたが、それもすぐに金色の粒子となって上空へ消えていく。

百万のモンスター軍は、たった一人の少女によって全滅させられ
ていた。

175話：屈辱の竜王

「こ、こんなことが……　こんなことがあり得るのか！　あれほどの数のモンスター軍が……」

バハムートの周囲は上昇する金色の粒子が乱舞している。モンスターによって埋め尽くされていた大地は、見渡す限りあらゆる種類のナイト硬貨に変わり果てている。

青白い炎を纏った飛鳥が、ゆつくりとモンスターの血にまみれた握り拳を持ち上げる。前髪に隠れた目がバハムートへ向けられる。その瞳は黄金色に光り輝いている。飛鳥はただ黙ってバハムートを見上げている。その瞳には怒りも悲しみも憎しみも勝利の余韻も何もない。しかしそのすべてを内包する凄まじいまでの“意志”を感じさせる。

「くっ……」

バハムートは完全に圧倒されていた。自分の数十分の一にも満たない小さな身体に。脆弱で矮小な生き物であるはずの人間に。それは最強を自認するバハムートにとっては、決して許容できる感情ではなかった。

バハムートは真紅の瞳を燃え立たせ、小さな声で詠唱を始める。

「我々が負けるはずはない。人間などに負けるわけにはいかないのだ！」

バハムートが空に向かって咆哮を上げる。金属を強烈な力で擦り上げたような不快な叫び声が天にこだまする。直後、虚空に赤い光点が発現する。始めは蛍のような小さな光点だったが、一瞬ごとに

大きくなる。

飛鳥は赤い光点を振り仰ぎ、眉間に微かなしわを寄せる。そこに落雷のようなバハムートの哄笑が響き渡る。

「我が最大の魔法“メテオ”だ。お前の世界では“恐怖の大王”とも呼ばれておるな」

半径十キロメートルはあろうかという巨大隕石は、大気圏突入の摩擦熱によって全身から炎を噴き上げている。それが落下すればどうなるのか、子どもでも想像に難くない。

「かつて恐竜たちを滅ぼし、地球に氷河期をもたらした巨大隕石だ。こうなればこの世界ごと消滅させてやる。その後ゆっくりと、我が主によってまた世界を創造してもらえばよい」

バハムートの醜悪な微笑を向けるも、飛鳥は表情を変えない。怯えるどころか微動だにしない飛鳥に、バハムートは焦りを感じ始める。

「どうした、恐怖で身が竦んでしまったか？ お前が余計な力を発揮したりしなければ、こんなことにはならなかったのだぞ？ 後悔しろ！ 泣き叫べ！」

「無駄」

「な……」

揶揄するでもなく見下しているわけでもない。飛鳥の落ち着いた声音は、澄んだ鐘のように鳴り響く。

次の瞬間、飛鳥の立っていた地面が爆発し、大量の土砂が舞い上がる。土煙が収まった時、そこは直径数百メートルにも渡って地面が抉れていた。そして飛鳥の姿はなかった。

「な、なにを……」

その時すでに、飛鳥は空に向かって駆け上っていた。そして迫る巨大隕石の数キロメートル手前で立ち止まる。足踏みはしていない。まるでそこに地面があるように、飛鳥は空中に静止している。数秒後、空は膨大な質量と炎で埋め尽くされる。

「バカが！ 人間など触れた瞬間に気化してしまうわ！」

飛鳥は視界を埋め尽くす炎にも眉一つ動かさず、ワンツーを放つ。左ジャブがヒットすると巨大隕石が身震いするかのように動きを止める。ほぼ同時に右ストレートを同じ箇所打ち込む。その瞬間巨大隕石には蜘蛛の巣状にヒビが入る。

「しっ！」

飛鳥は右足を踏み込みながら両膝を縮める。直後、全身の力を拳に乘せてクロスアッパーを放つ。天が割れんばかりの轟音とともに、巨大隕石はいくつかの破片となって上空へ爆散する。それらの破片はさらに碎けて無数の細かな隕石となり、そのまま宇宙空間へ飛び去っていった。

それは飛鳥がこの世界で初めて使った技。フェンドルフィンで暴れ牛を撃退したときと同じコンビネーションだった。

「バ、バカな！」

強大な力で君臨してきたバハムートが驚愕に震える。“メテオ”はバハムートですら発動したら止められない究極の魔法だ。地球規模の天災を引き起こす魔法でさえ粉碎されてしまうのならば、バハ

ムートとしてはもう打つ手はない。後は肉弾戦しか勝機は見出せないのだ。

「認めん…… 認めんぞぉ！」

怒りと屈辱で全身を震わせ、バハムートは飛翔する。一瞬のうちに音速を超え、衝撃波が大気を切り裂く。豆粒のような飛鳥へ向かって、バハムートは悲鳴のような咆哮を上げて突撃する。

「我が最強なのだ！ 貴様など認めんぞ！」

バハムートの銀色の巨体は、そのまま飛鳥へ激突したかと思えた。しかしそこに飛鳥はいなかった。

「む、ど、どこに」

「遅いよ」

音速を超えたスピードで飛翔するバハムートの真横で、飛鳥が走っている。バハムートの金属的な顔が恐怖に歪む。

「ぐあっ！」

バハムートは身を捻って飛鳥から距離を取る。そのまま急激な弧を描いて反転する。そしてさらに加速する。

「どうだ、これなら」

「遅いつての」

轟音と震動を伴い、バハムートはいつの間にか地面へ頭から墜落させられていた。バハムートは何が起こったのかわかっていなかった。

た。飛鳥はバハムートを超える速さで前に回り込み、その鼻面を殴りつけたのだ。

「ぐおっ、ぐわおおおおっ！」

大量の土砂を巻き上げながら、バハムートは地面からミサイルのように飛び出す。その顔は無惨にもひしゃげている。

「うぜえっつの」

またもバハムートは顔面を殴りつけられる。自ら墜落した穴へ、再度頭から殴り落とされる。バハムートには飛鳥の動きがまったく見えていなかった。

176話：バハムートの最期

バハムートはこの世に生まれ出でてから初めて、“痛み”を感じていた。負の感情の凝縮体でもあるバハムートは、およそ“痛み”など感じることはないはずなのだ。なぜならバハムートの存在自体が「痛み」であり「憎しみ」であり、「絶望」でもあったからだ。

「なぜ…… なぜだ！」

土と自らの血に塗れたバハムートがよろよろと立ち上がる。ひしやげた鼻から血を噴き出し、外れた下顎に大量の涎をまとわりつかせながら穴から這い出る。

目の前の空中に、青白い炎をまとわりつかせた金色の瞳の少女が浮いている。いや、空中に立っている。

「我は最強のはずだ！ 人間などに負けるはずはないのだ！」

「アンタ、まだわかってないんだね」

飛鳥の声はもはや人間のものではない。それは言うなれば神の声、この世界の“意志”そのものの声だ。

「アンタも所詮“世界の一部”なんだよ。アタシにはわかった。この世界の意味、成り立ちが」

飛鳥の意思は驚異的なスケールで拡散していた。今この世界のどこで何が起こっているのか…… 空気の流れや鳥のさえずり、花の香り。世界と同化した飛鳥には、バハムートでさえ矮小な一匹の小動物に過ぎない。そこに体の大きさやパワーの強弱に意味はない。比べる次元が違うのだ。

「アンタを倒して“創造主”に会う。そしてケリをつける」

飛鳥はすでに、バハムートとの戦いを“戦い”とも見なしでいなかった。バハムートもこの世界の現象の一つが実体化したに過ぎない。“戦い”として成立しないのだ。

「そ、そんなことは……」

バハムートは愕然とする。もしこのまま飛鳥に主の元へ行かれたら、自分はその存在自体を消滅させられてしまう。例え倒されても、主なら再生できる。しかしその主自身に消滅させられれば、もう二度とバハムートとして存在することはできないのだ。

焦るバハムートは、何かこの劣勢を覆す方策はないかと周囲を見回す。するとアレンの金色の遺体の向こうに、黒く小さな毛玉が浮いているのを発見する。その瞬間、バハムートは口角を持ち上げて邪悪な笑みを浮かべる。

「まだ負けたわけではないぞ！」

バハムートの周囲の気圧が高まる。超高圧縮された空気は分子振動を限界まで高め、それに伴って空間が歪んでいく。それは小規模ではあるが超新星と同じ現象だった。

「貴様は人間だ！ 神ではない！」

急激な温度差のため発生した上昇気流が竜巻を作り出す。直後、バハムートはそのベクトルをすべて飛鳥へ向けて解き放つ。

指向性を持った光と熱の竜巻が、超音速で飛鳥のいる空間を蹂躪する。その隙に、バハムートはスピニツチへ向けて飛翔する。飛鳥

に目眩ましをして、スピニツチを人質に取ろうとしたのだ。

「お前を人質に取れば！」

「にやつ！」

体中に黒煙と炎をまわりつかせたバハムートが、両翼を大きく広げてスピニツチを覆い尽くす。

「がつ！」

両前足で顔を覆ったスピニツチは、異変に気づいて顔を上げる。バハムートはスピニツチの目の前で真紅の両眼を見開いたまま固まっている。そして痙攣するよう震えながらゆっくりと全身の力が抜け、両翼と首、尻尾が力なく垂れ下がる。バハムートの真下には飛鳥がいた。そして右手一本でバハムートの身体を支えている。そしてバハムートの胴体には、大きく赤黒い穴が空いていた。

「そうさ、アタシは人間だ。この世に神なんていない。人間は自分で運命と戦っていかなきゃならないんだ」
「かつ、かつ！」

バハムートの上顎が痙攣し、断末魔の声を上げる。真紅の瞳がぐるりと回転し、そのままがくりと頂垂れる。

「ア、アスカ！」

スピニツチは漸く声を出せるようになる。その目の前で、バハムートの身体が金色の粒子になって崩れていく。風に流されて舞い上がる粒子は、凄惨な戦いを忘れさせるほど美しかった。

スピニツチはまるで別人のように変貌した飛鳥へ、おそろおそろ

近づいていく。飛鳥の金色の瞳は、スピニッチの背後、静かに青い輝きを放っているファンタジア城へと注がれている。

「あそこに創造主がいるんだね。あそこだけぽっかりと穴が空いたように、なにもわからない」

飛鳥の厳しい表情に、スピニッチは頷く。エコーがかった飛鳥の声は、音のようでもあり思念波のようでもある。すでに飛鳥はスピニッチの知識と経験を超えた存在になってしまっているのである。

「ミーが案内するにや。決着をつけるにや」

ファンタジア城へ振り返った時、スピニッチはふと気づく。

「アレンとガルドはどうするにや？」

アレンは少し離れたところで上半身だけで横たわっている。ガルドはスピニッチの少し先で俯せに倒れている。右腕はないが、出血は止まっているようだ。

「間もなくデルピエロ王とクウェンディ女王が来る。二人は任せて、アタシは自分がすべきことをしに行くよ」

「そうか…… そうだにや」

もはやスピニッチに、飛鳥の言うことに反対する意味はない。スピニッチはそれ以上何も言わず、飛鳥に並んで黒い羽を忙しく動かす。

飛鳥はゆつくりと、そして一步一步確実にファンタジア城へ向かって歩いていく。あれだけの激しい戦闘が繰り広げられたにも拘わらず、ファンタジア城には傷一つついていない。それは明らかに、

何らかの力によって被害を免れたのだろ。そしてそれが創造主の力によるものなのは間違いない。

青く輝くクリスタルの壁面が、弱い陽光を反射して美しくきらめいている。

飛鳥とスピニッチは少年の姿をしてバハムートが立っていた城門をくぐり、ファンタジア城内へと入って行った。

177話：嘆きの声

城門を入って城壁のトンネルを抜けると、広大な前庭が広がっていた。長方形の花壇と水路がチェッカーフラッグのように交互に並んでいる。水路は一見すると池のようだが、花壇の下にも流れているのだろう。景観と維持管理のことまで機能的に計算して設計された見事な庭だ。いや、庭だった。

使われなくなってから二年以上経っているため、水路に水は流れていない。花壇にもかつては美しい草花が咲き誇っていたのだろうが、今は焦げ茶色の枯れた葉が死体のように折り重なっているだけだ。

飛鳥とスピニッチはそれらの中をまっすぐと進んでいく。五十メートルほども進むと正面入り口に着いた。入り口は青いクリスタルのような石でできた両開きの扉で、高さは五メートルはある大きなものだ。当然今は硬く閉じられている。飛鳥は軽く押してみるがびくともしない。

「鍵かかってるみたいね」

「鍵じゃにやくて門かんぬきにや」

「どっちだっていいわよ」

今度は少し強めに押す。乾いた音がして、扉の向こうで何かが破壊される音がした。扉はそのまま重い音をさせながら奥へと開いていく。

飛鳥は右手一本で何気なく行っているが、この扉は一枚だけでも一トンほどもある。今の飛鳥にとって、物理的な障壁はないものと同じなのだ。

エントランスは薄暗かったが、見えないというほどでもない。小

さめの体育館ほどもあるホールには、窓から差し込む外の光が斜めに柱を作っている。

床は大理石のような材質だがやはり青く半透明に透き通っている。入り口からまっすぐとレッドカーペットが敷かれ、奥の白い両開きの扉まで伸びている。

その扉の左右には湾曲した階段があり、ホールの左右にも通路が伸びている。

「どこに行けばいいの？」

「昔から、偉いヤツは高いところにいるにや」

「そうだね、じゃ上か」

湾曲した階段には豪華な彫刻の施された手すりがついており、テレビで観たどこかの宮殿を思い出させる。手すりの格子一本一本にはそれぞれ違う彫刻が施されており、専門的な職人によるものだとわかる。

飛鳥は階段を上りながら、この城がかつて隆盛を誇っていた頃を思い浮かべる。

たくさんの人たちがここで政務を行っていた。

着飾った貴婦人たち、背筋を伸ばして歩く文官。豪華な鎧に身を包んだ近衛兵、忙しく立ち働くメイドたち。中世ヨーロッパ風の文化はこういうお城にはよく似合う。まさにこの城は人々の憧れの場所だったのだ。

「ねえスピニツチ、このお城は、いやこの国はどうしてこんななつちやっただらうね」

「……どういう意味にや？」

踊り場を折り返し、中央の幅広い階段を上る。上りきった先の正面には、太陽と月を模した色鮮やかなステンドグラスが嵌っている。

「人には愛とか友情とかつていい感情もあるけど、憎しみや怒りなどの負の感情もある。そのどれかが表面に出てきていたとしても、他の感情はいつも必ず心のどこかにはある」

ステンドグラスに突き当たるとスピニッチは右の通路を指す。左右どちらからでも上に行けるようだが、飛鳥の近い方を指し示したようだ。

飛鳥は会話するというよりも、自問自答しているように思える。スピニッチは黙って飛鳥の言葉を待つ。

「仮に誰かとか何かを憎んだとしても、世界が滅びた方がいいとかって普通は思わないよね？　だって世界がなくなれば、自分だっていなくなるからね」

通路はまっすぐと百メートルほど伸びている。右側には等間隔でクリーム色の扉が並んであり、どうやら来客用の部屋のような。左側は大きめの窓が並んでいる。窓の外には前庭が広がり、その先に城壁が見える。この高さでは、城壁の向こうはまだ見えない。

「そう考えると、創造主って一体何がしたかったんだろう。世界といつしよに心中したかったのかな……　スピニッチ、耳塞いでて」

突然右の扉を、青白い顔をした女性がすり抜けてくる。そして両頬に手のひらを当てて、世にも恐ろしい金切り声で悲鳴を上げ始める。女性は白いエプロンを付けており、年齢的にはさほど年は取ってはいないように見える。

「こ、これは……」

スピニツチは耳を両前足で押さえながら、全身を黒いシールドで覆う。右の扉からは次々と同じような女性が現れ、城中に反響するような悲鳴の大合唱を始める。

「バンシーにゃ！」

バンシーとは、ゴースト系のモンスターである。元女性でなおかつ母親であった人間がモンスター化する。子どもを目の前で殺された悲しみが怨念となって悲鳴に宿り、その金切り声を聞くと発狂するか運が悪ければ即死する。物理攻撃力はないに等しく、魔法での攻撃もしてこない。しかし「声」という防御の難しい攻撃方法のため、ふいをつかれてやられる者も多い。

バンシーたちは通路いっぱいに群がって飛鳥の行く手を遮っている。全員口を大きく開け、真っ赤に腫らした半開きの目をしている。おそらくこの城の警報兼、防御担当なのだろう。

数十体のバンシーは声の限りに金切り声をあげながら、浮遊し始める。その恐ろしい嘆きの声には、シールドを張ったスピニツチでさえ強烈な苦痛を感じる。

「かわいそつに……」

飛鳥は静かに涙を流して立ち尽くしていた。

177話：嘆きの声（後書き）

作中の「バンシー」の設定は当作品オリジナルです。ご了承ください。

178話：賢狼フェンリル

「彼女たちの苦しみが伝わってくる。みんな、こんなモンスターなんかにはなりたくなかった。子どもを返して、静かに眠らせてって言ってる」

「わ、わかるによかにゃ」

共鳴した窓ガラスが激しく振動し、後方のステンドグラスより向こうの通路からもバンシীর群れが押し寄せて来る。

飛鳥は耳を塞いだりシールドを張ったりもしていない。ただ静かに涙を流している。

「ア、アスカどうするにゃ！」

スピニツチは耐えられなくなってきた。前後を完全に挟まれ、行くことも戻ることもできないのだ。

「アンタたちの苦しみや悲しみも持つてってあげる」

飛鳥は静かに目の前のバンシীর右手を伸ばす。そのバンシীর全身を震わせながら、金切り声を上げ続けている。飛鳥は右の手のひらをバンシীর額に当てる。その瞬間バンシীর叫ぶのを止め、穏やかな表情になる。そして金色の粒子となって消えてしまう。

「こ、これは……」

周囲のバンシীরたちも次々と叫ぶのをやめ、穏やかな表情になって消えていく。ものの一分もすると、すべてのバンシীরが消え去っていた。

「あの人たちだってなにも、望んでモンスター化したわけじゃない。すべての元凶は上にいる」

飛鳥はもう涙を流してはいなかった。バンシーに触れた右手を強く握りしめ、また歩き出す。城内は何事もなかったかのように静まりかえっている。

スピニッチはシールドを解除して両耳から前足を外す。次いで小さくため息をつく。

「今によアス力には、何が来ても戦いにすらにやらにやいにや」

スピニッチはポケットの中に銀色の短剣があるのを確認し、先を行く飛鳥を追って翼を忙しく羽ばたかせた。

通路は突き当たりで上階へ至る階段となっていた。相変わらずレッドカーペットが敷かれているため、足音はしない。小さな踊り場を折り返してもう一つ階段を上ると、また同じように部屋が並んでいるフロアに出る。

「政務を行う部屋にや。ファンタジアの中枢にや」
「かつて……ね」

飛鳥は戸惑うこともなく歩いて行く。左側に並ぶ部屋からまた何か出てくるのかと思われたが、何も出てこない。あれだけバンシーが騒いだのだから、飛鳥が侵入しているのは間違いなくバレているはずだ。

通路をまっすぐ歩いて行くと、中央に灰色の毛皮の壁が現れる。それは体長五メートルはありそうな巨大な狼だった。

「フェンリルにゃ！」

スピニツチは飛鳥の背後に隠れる。それは恐怖とはまた違う感情からくる行動のようだ。

「フェンリルって？」

「“神殺し”の異名を持つ神獣の一種にゃ。ミーは苦手にゃ」

飛鳥は怯えることもなくつかつかと歩いていく。飛鳥はその巨大な狼の正体に気づいていた。フェンリルは文官たちの魂を結合させて作られていた。フェンリルの体の中には、ファンタジアの頭脳とも言つべき高い知能を持った人間たちの魂が無数に込められているのだ。

フェンリルは吼えるでもなく襲ってくるでもなく、インペリアルトパーズのような美しい瞳で飛鳥を見つめている。

フェンリルは中央階段を塞ぐ形で佇んでいた。倒さないと先には進めないということなのだろうか。

「竜王様との戦い、お見事でした」

フェンリルはゆっくりと一つ瞬きをする。特に敵意は感じられない。
い。

「仲間を殺された。見事なんかじゃないよ」

飛鳥は静かに応える。フェンリルはほんの少し目を細め、口角を上げる。

「私は百万の仲間をそなたに殺された」

「そうだね」

飛鳥は目を逸らさずまっすぐとフェンリルを見つめている。スピニッチは固唾を吞んでその様子を見守っている。強さでいったらバハムートとは比べものにならないが、頭の良さではフェンリルの方が上だ。現実世界では“賢狼”とも言われる伝説のモンスターだ。どんな巧緻な罠が張ってあるとも限らない。スピニッチは周囲の様子を細かく観察する。

「スピニッチ、心配しなくともよい。私にこの方と戦う意志はない」

フェンリルのよく響く低い声音が青いクリスタルの壁に吸い込まれていく。飛鳥もすでに承知しているようで、身構えることもなく自然体で立っている。

「この方が創造主に会いに行く前に、聞いておきたいことがあつてな」

フェンリルは大きな体を動かし、飛鳥と正対する。鼻先でさえ頭上にあるため、飛鳥は必然的に見上げる形になる。

「なに？」

「人とはなんぞや」

フェンリルの黄金色の瞳には深い知性を感じられる。おそらくフェンリルはフェンリルなりの解答を持っているのだろう。

「責任ある生き物…… かな」

「責任？」

飛鳥の答えは意外だったようで、フェンリルの声音が一オクター

ヴ高くなる。飛鳥は小さく頷く。

「この世界のすべてにおいて、責任がある生き物だと思う。世界を破滅させるのも、繁栄させるのも人間次第。傲慢だと言われたりもするけど、実際人間によってこの星はよくも悪くもなる」
「ふむ」

フェンリルは瞑目して考え込む。

「生物としての人間は植物や動物、それこそ微生物やアンタたちモンスターと何ら変わることはない。でも自ら考え、理性と知性を持つて行動する“人”には自ずと責任が生じる。アタシはそう思うよ」

飛鳥は世界と同化することによって、一人の女子高生藤堂飛鳥ではなくなっている。しかしその中にも、飛鳥の精神は確固として存在している。

これは飛鳥が“人として”世界を見渡した結論なのだろう。世界は飛鳥に「責任」を求めているのである。
終わらせる者として。

178話：賢狼フェンリル（後書き）

「フェンリル」の設定は当作品オリジナルです。ご了承ください。
い。

179話：賢狼の問い

「ではそなたは、人として責任を取りに行くということかな？」

フェンリルの穏やかな眼差しから敵意は感じられない。飛鳥を非難したり否定する意思も感じられない。ただあるべき運命を享受する。悟りを開いた僧侶のような、そんな静かな思索が感じ取れるだけだ。

飛鳥はフェンリルの奥行きのある瞳を見つめながら、しっかりと
うなずく。

「なるほど、では重ねて問う。死とはなんぞや」

“死”という言葉聞いて、飛鳥はわずかに表情を歪める。その言葉は飛鳥の胸の中心を強く締めつける。飛鳥は右手を持ち上げ、胸の前で強く握り込む。

「死とは…… 生きること」

フェンリルの瞳がわずかに揺らぐ。しかし口を差し挟むことはなく、飛鳥の次の言葉を待つ。

「死はすべての生あるものに等しく訪れるもの。だから生が輝く、命の大切さがわかる」

飛鳥はこの世界に来てから出会った人たちを思い出していた。そして死んだ者たちを。

名前も知らない兵士たち。無惨にもモンスターに殺された人たち。中には縁があって行動を共にした人もいる。共に戦った者もいる。

彼らはみな飛鳥に言うのだ。世界を救ってくれ、そして生きろと。もし人に運命という鎖があるのなら、それに抗うことは難しい。しかしそれをしっかりと見据えた上で自分の生を生きることが、死の恐怖をも超越できる。

自分は何ができるのか、今何をすべきか、そしてこれから何を成すべきか。それらを考え、精一杯努力すること。それが生きるということではないか。

そこに忌むべき“死”という概念はない。生が昇華した形である“終わり”という事実があるだけだ。

「うむ」

フェンリルは顎を上げ、窓の外を見る。バハムートが死んでから、空には晴れ間が広がり、明るい陽射しが差し込み始めている。窓の形に切り取られた陽光が、フェンリルの灰色の見事な毛並みを艶だたせる。

「では最後に問う」

フェンリルは前を見つめたまま、重々しい口調で白い牙と赤い歯茎を見せる。

「人生とはなんぞや」

「人生……」

飛鳥はうつむいてフェンリルの言葉を反芻する。飛鳥にとってその言葉は、今までの言葉以上に重いものだった。

「アス力……」

スピニッチが心配そうな顔で飛鳥に声を掛ける。

ある意味飛鳥のことを一番よく理解しているのがスピニッチだ。現実世界で飛鳥と出会い、この世界に来てからもずっといっしょに行動してきた。だからこそ飛鳥に対してその問いが、どれほど重くのしかかるものなのかがよくわかつているのだ。

飛鳥にとって人生とは、何よりも無意味で無価値なものだった。取るに足らない、いつ失っても惜しくはないもの。それが飛鳥にとっての人生だった。

一切音のしないファンタジア城の一角で、張りつめた空気が時を着実に押し進める。

「アタシにとって人生とは……」

長い沈黙を破って、飛鳥は静かに口を開く。ゆっくりと顔を上げ、フェンリルの雄々しい横顔を見上げる。飛鳥の瞳には、強い決意の炎が揺らめいていた。

「戦い」

フェンリルの耳がぴくりと反応する。視線は窓の外に固定したままだが、深い思索を巡らしているのがわかる。

「決して負けられない戦い。みんなのためにも…… アレンのためにも」

「アス力……」

スピニッチは湧き上がる歓喜とほんのちよつとした寂寥感で胸が詰まる。飛鳥のこの答えは、スピニッチの成すべきことに対する解答でもあった。スピニッチは始めから知っていたのだ、創造主の正体を。

「ありがとう」

フェンリルはそう言うつと、静かに進み始める。灰色の巨体の後ろに、黄金の扉が姿を現す。道を開けてくれたのだろう。フェンリルはそのまま窓の前まで進み、腰を下ろす。それは主君の帰りを待つ忠実な番犬のようだ。

「そなたは“終わらせる”に足る存在のようだ。行くがいい、すべての始まりの元へ」

飛鳥は静かに頭を下げ、背を向けて歩き出す。するとフェンリルは、思い出したように飛鳥の背中へ声をかける。

「ああ、一つだけ私からもアドバイスをさせてもらおう」

フェンリルは豊かな毛並みを見せる大きな尻尾をばさりと動かす。

「そなたが生きようとする限り、人生に敗北はない」

飛鳥は振り返ったままフェンリルをじっと見つめている。

「もともと人生という戦いに勝敗はない。すべての人生は“勝利”に帰結する。それを覚えておいてほしい」

「……うん」

“賢狼”はすべての人生を見つめてきていた。それは“神”と呼ばれる存在に対してすら同じだった。生に値しない人生は、その対象が“神”でさえ否定する。故に“神殺し”の異名を持つのである。そのフェンリルに飛鳥は認められた。そして飛鳥もフェンリルの“

想い”をしつかりと受け止めた。

飛鳥はもう一度フェンリルに頭を下げると、黄金の扉へ向けて階段を上り始める。飛鳥はもう振り向かなかった。

数段の階段を上って豪華な彫刻の施された取っ手に手をかける。扉は何の抵抗もなく内側へ開いていく。奥は巨柱が立ち並ぶ広間になっており、奥は薄暗くてよく見えない。

扉が背後で閉まる時、フェンリルの尻尾がもう一度ぱさりと動く音がした。

「スピニツチ…… 後は頼んだぞ」

フェンリルのその呟きは、飛鳥の耳に届くことはなかった。

180話：創造主

巨大な広間は王の謁見室のようだった。毛足の長いレッドカーペットは、まっすぐと広間の奥まで続いている。左右に立ち並ぶ巨柱はギリシャの神殿のような彫刻が施されており、どこかの映画で観た大がかりなセットのようだ。

進むにつれ少しずつ奥が見え始める。突き当たりの壁は城の反対側らしく、高い位置に等間隔で窓が備え付けられている。四角く切り取られた白い陽光が、広間を薄ぼんやりとした光で照らし出していた。

前を見て歩く飛鳥の頭上で、二つの銀色の光がきらめく。飛鳥は徐に両手を挙げる。次の瞬間、飛鳥の指は巨大な刃を摘んでいた。

「な、なにっ！」

左右の暗がりから動揺する気配が伝わってくる。刃は美しい曲線を描き、台形を歪ませたような形をしている。それは巨大な戦闘用の斧だった。

刃の根本からは丸太のように太い金属の棒が柱の暗がりまで伸びており、端を爪の長い無骨な白い手が掴んでいる。飛鳥に左右から不意打ちを食らわせたのは、身の丈三メートルはある一つ目の巨人たちだった。

「サイクロプスにゃ！」

飛鳥は自分の体よりも大きな刃を、指三本で摘んでいる。サイクロプスたちは必死に斧を引き抜こうとするが、びくともしない。飛鳥はサイクロプスたちを見もせず、前を向いたままだ。

硬質な高い音がして、刃が砕け散る。斧を引き抜こうと踏ん張っ

ていたサイクロプスたちは、勢い余って奥の壁に吹き飛んで背中をぶつける。振動で天井から埃が舞い落ち、窓からの光にきらきらと反射する。

「創造主はどこ？」

飛鳥の静かな声が広間に反響する。尻餅をついて座り込むサイクロプスたちは、目の前の小柄な少女の存在感に圧倒される。この少女は人間ではない。召喚された勇者であつたが、今はそれすらも超越した存在になっている。完全に気配を消して柱と同化していたというのに、この少女にはまったく通用しなかった。

「お、奥の階段を上った先だ。ファンタジア王の自室だった部屋にい、いらつしやる」

「そう、ありがとう」

左のサイクロプスが野太い声で奥を指さす。飛鳥は結局サイクロプスたちを一度も見ることなく、奥へと歩き去ってしまった。

「お、おめえ、教えちまってるのかよ。後で叱られるぞ」

「ばあか」

右のサイクロプスの言葉に左が答える。

「フェンリル様を通したんだ、敵うわけないだろ？ オレたちは番人としてやるべきことはしたさ。痛い思いをして殺されなかっただけありがたいと思え。後はここで静かに終わりを待てばいいんだよ」

「そうか…… 次はもっといい人生だといいな」

サイクロプスたちは壁に背を預けたまま、奥へと消えていく少女

と羽の生えた黒猫を静かに見送った。

「あそこに階段があるにや」

奥には王の座る台座があり、黄金の椅子が主のいないままぼつねんと鎮座していた。スピニッチの指し示す壁には、黒く切り取られた四角い穴がある。王や王族のプライベートフロアに続く階段はあそこにあるのだろつ。

何となく飛鳥はデジャヴに囚われる。どこかで見た風景だったからだ。

「フェンドルフィンのお城に似てる」

「……気づいたかにや」

スピニッチは黒い羽を忙しく羽ばたかせながら、奥への入り口に入る。そこには上へと続く石造りの螺旋階段があった。

「うん、アンタが知ってたってこともね」

スピニッチは何も言わず上へ向かって飛んで行く。もこもことした黒い毛玉が飛鳥の前でふわふわと上下している。思えば飛鳥はいつもこうしてスピニッチに導かれてきたような気がする。

「悪かったにや」

「気にしてないよ。アンタがいなけりゃ、アタシはここまで来られなかった」

螺旋階段の途中にはいくつかフロアがあったが、スピニッチはす

べて無視して上階に向かって飛び続ける。飛鳥は無言で一段ずつ上がっていく。

「実はミーが召喚したのは、アスカが初めてだったにや」

スピニッチは適性のある人間を捜す役割を担っていたが、召喚するのはクウェンディ女王の仕事だった。

「アスカには今までにないパワーを感じたにや。だから無我夢中で召喚させてしまったにや」

召喚には責任が伴う。自分が死んでしまったら、その人間は現実世界には戻れなくなってしまうのだ。だからスピニッチは飛鳥の可能性を信じ、クウェンディ女王との使い魔契約を切った。そうすれば自分が死んでも、女王さえ無事なら飛鳥は元の世界に戻る。そこにはスピニッチの覚悟があった。

「とりあえず元の世界に戻ったら、クレープ驕ってもらうかんね」
「……そによ前に、すべてを終わらせるにや」

いつ終わるともしれない螺旋階段を上りきると、教室二つ分ほどの部屋にたどり着く。そこはファンタジア城の天辺らしく、左右の壁に開いた窓からは遠くの山々が霞んで見える。

室内には壁際にロココ調の調度品が並び、奥には天蓋付きのベッドがある。朝日が直接当たらないように計算されているため、影になっでよく見えない。

しかしそこに誰かが座っているのに気づいた。

「アンタが創造主かい？」

飛鳥は室内へ数歩入って立ち止まる。その人影はゆっくりとした動作で立ち上がり、こちらへ向かって歩き出す。

斜陽がその人物を照らす。

飛鳥はその姿を見た時、驚愕で何の言葉も発することができなかった。

180話：創造主（後書き）

サイクロプスの設定は当作品オリジナルです。ご了承ください。

181話：最後の良心

妙な歩き方だった。

足の外側に体重がかかっているために、膝の位置がO脚気味に心持ち開いている。白いシーツのような布を巻き付け、城の雰囲気に合わせてあるのかギリシャ神話に出てくる神のような服装だ。

身長は低く、飛鳥と同じくらい。そして何より飛鳥が驚いたのは、その人物が飛鳥のよく見知った人種だったからだ。

「ア、アンタ日本人か？」

近づくに従って斜陽が首から上を照らし出す。それは髪の薄い中年男性だった。

「よくもワシのモンスターどもを殺しまくってくれたな、小娘」

その男性は油ぎった顔にぬらっとした微笑を浮かべる。

丸顔ですだれハゲ。大きなギョ口目は淀んで濁っている。団子っ鼻の横には茶色く盛り上がった大きなイボが、口の動きに合わせて蠢いている。分厚く横長の唇は両生類を思わせ、歯並びの悪い黄色く変色した歯は間違いなく口臭がキツイだろう。

シミの目立つ頬を震わせ、その男は歩みを止めて目を細める。

「しかしいい身体をしておるな。ワシの妾にしてやろうか」
「スピニッチ」

ようやく飛鳥は声を出すことができるようになる。その声は震えている。

「なんにゃ？」

「まさか“コレ”が創造主？」

「そうにゃ、ファンタジア王が召喚した飛鳥とおにゃじ日本人にゃ。名前はニヤカムラ」

「ナカムラ……」

飛鳥は無意識のうちに拳を握りしめる。なぜ現実世界の人間がここにいるのだ？ なぜ創造主などになっているのだらう。

「アンタに聞きたいことがある」

今すぐ殴りかかりたい衝動を必死に抑え、飛鳥は震える声で問いかける。

「なんだ？」

ナカムラは鷹揚に腕組みをして飛鳥を見る。

「なんでアンタが創造主なんてやってんの？」

「ふむ」

ナカムラは濁った眼球をどろりと動かし、斜陽の差し込む窓を見る。その向こうには広大なファンタジアが広がっている。

「話せば長くなるがいいだらう、聞かせてやる。人間と話をしたのは久しぶりだからな」

ナカムラはゆっくりと窓の方へ歩き出す。

「ワシはあっちの世界では政治家をしておった。しかし低脳な官僚

どもや無能な国民に愛想を尽かしておった」

そう言えば飛鳥が中学生の頃、政争に破れて失脚した衆議院議員がいて少しニュースになっていたことがあった。その名前がナカムラだったような気がする。ニュースなど滅多に観ない飛鳥が覚えていくくらいなので、それなりに世間を賑わせた事件なのだろう。

「何となく覚えてるよ。確か汚職かなんかで辞めて、行方不明になったとか」

「はっ！」

ナカムラは小柄な身体を仰け反らせ、大仰に両手を開く。動作が見た目にそぐわず、いちいち芝居がかっているのが見苦しい。

「汚職ではない。お国のために思ってやったことだ。それが無能な者どもには理解できなかったただけだ」

ナカムラは汚いものでも見るような目つきで飛鳥を睨みつける。飛鳥は口を強く引き結び、奥歯を強く噛みしめる。

「しかしワシには適性があつたようだな。この国の王に召喚された。政治顧問として」

「ファンタジア王も召喚する力を持っていたにや」

スピニツチが小さな声で補足する。

「召喚されるとジョブの部屋とかいうところに連れて行かれてな。ワシはこの国で生きるために職業に就いた」

「……なに？」

「モンスターマスター」

聞いたこともない職業に、飛鳥は眉をしかめる。

「モンスターを作り出すことのできる珍しい職業だ。ワシはもともとファンタジーが大好きでな、特にモンスターに関してはかなり詳しい」

どこぞにもマンガ好きを公言する首相がいたくらいだ。それは別におかしいことではないだろう。

「しかしファンタジア王が求めていたのは、モンスターではなくワシの政治に関する手腕でな。この国をもっと豊かな国にしたいと言っておった」

それは為政者として当たり前のことだ。広大なファンタジアを治める王としては、政治の専門家の助力は非常に助かるだろう。

「だからワシはその立場を利用して、この世界を支配することにした。王に代わってこの国を、いやこの世界を豊かな世界にすることにしたのだ」

「豊かな世界って…… アンタみんな殺したんでしょ？ 国民がいなきゃ、政治も何もあつたもんじゃないじゃん！」

「青いな小娘。国民が何も人間である必要はないだろう」
「は？」

ナカムラはカエルのような横長の口を歪め、にやりと微笑む。ねとつくような視線が、飛鳥の全身に絡みつく。

「ワシは自分の能力を使ってモンスターの国を作ろうとしているのだ。従順で反抗もせず、すべてワシの言いなりになって動く忠実な

国民たちだ」

狂っている。飛鳥はナカムラの濁った目の奥に、現実世界で見たヘドロの沈殿する川を思い出す。

「ワシは手始めに三匹のモンスターを作り出した。モンスターたちを束ねる指揮官として竜王バハムートを、ワシの代わりに余計な雑務をこなす賢狼フェンリルを」

ナカムラは粘り気のある視線を飛鳥の背後に向ける。

「そしてバハムートの補佐として黒猫のケット・シーを」
「スピニッチ……」

スピニッチは細い目をさらに細めてうつむいている。

「バハムートはよく働いてくれたよ。ファンタジア王を殺し、瞬く間に城を我がものにしてくれた。バハムートに殺された者は次々にモンスターとなり、街へ出た。ファンタジアの都市をモンスターで占領するのに二日とかからなかった」

ナカムラの濁った目は艶のない光を湛え、惨劇を思い出して楽しんでいるように見えた。

「しかし誤算だったのは、ケット・シーがワシを裏ぎったことだ」

飛鳥とナカムラの視線がスピニッチに注がれる。スピニッチは細い目でナカムラを睨んだまま、何も言葉を発しない。

「その理由はフェンリルがよく知っておった。そいつは…… どう

やらあの女王にスピーニツチと名付けられたようだが、そいつはワシ
の中にあつた最後の良心だったんだと」

182話：破壊衝動

「最後の良心……」

「自分のせいで多くの人々が殺されていくのに、耐えきれなくなつたのだろぅということだ。確かにそりゃあそうだろぅな。そいつが生まれなければ、ワシにはまだ良心とやらが残っていたということだからな」

「スピニツチ……」

飛鳥はうつむいて震えているスピニツチを見る。

「しかしワシは感謝しとるよ。そいつが生まれてくれたお陰で、ワシは心おきなく“創造の神”としてファンタジアを造り替えることができた」

無から有を作り出すという能力は、まさに“神”の能力だ。この世界だからこそできることなのだろう。そしてその能力はこの世界を支える根本的な原理・原則さえも変えてしまった。

「お前も知っていると思うが、この世界は精神と肉体の境目が曖昧な世界だ。無から有を作り出せることが可能になつた時点で、ワシはこの世界の法則そのものになつた」

「法則？」

飛鳥は油断無く身構えながらも、ナカムラの言葉を反芻する。

「ワシが決めたことは、それが現実の現象として実効力を持つのだ。似ておらんか？」

「……なにと？」

ナカムラはぬめりを帯びた微笑みを浮かべる。

「法治国家における法律とだ」

「な……」

飛鳥はまたもや絶句する。つまりこの世界における物理法則は、すべてナカムラの思うがままということなのだ。その力はまさに“神”。すべてを自分の思うとおりには造り替えることのできる“創造”の力だ。

「法律は人間が作り、人間が守るもの。しかし忘れてならんのは、“守らせる”のも人間だということだ」

「ど、どういふ……」

「つまり法律を破つても、それを守らせる者にその気がなければ何の罪もないということだ」

「そんなことできるわけないだろ？」

飛鳥は抵抗を試みる。しかし本当はわかっていた。この男の持つ力の大きさを。

「ワシが『こうしたい』と思ったことは、この世界では具現化される。もともとあった法則はねじ曲げられる。それがお前の質問に対する答えだ。ワシはなるべくして“創造主”になったのだ！」

ナカムラは大口を開け、唾を飛ばして絶叫する。濁った瞳は酩酊したように充血し、頬は薄く紅潮している。自分の口上に酔っているのだろ。大仰に両手を開き、胸を張って上を見上げている。この世のすべては自分のものだと言わんばかりだ。

「無から有を作り出せるのなら、有を無に帰することもできる。する気なら一瞬でこの世界を消滅させることもできた。しかしワシは慈悲深い政治家だ。悪の魔王ではない。愛すべき従順なモンスターたちによって、理想の世界を創り上げようとした。そこに人間はいらん。愛だの友情だの夢だの希望だの……」

ナカムラは上体を戻してスピニッチを見る。

「良心だの」

「く……」

スピニッチの小さな牙の間から空気が漏れる。

「すべては排除すべき余計なものだ」

「貴様あ！」

飛鳥の全身から金色の炎が燃え上がる。始めこそ同じ現実世界の人間で日本人ということもあって、元の世界に戻せればという気持ちもあつた。それでファンタジアが元の平和な世界に戻せるのなら、それが最良の選択だと。

しかしこの男はまさに“毒”だ。どちらの世界にとつても。狂った一個人が世界を破滅に追いやる。それは皮肉にも、現実世界においても同じ“法則”だった。核の炎を管理するのは大国の為政者。戦争を起こすのも、多くの人々を殺す命令を下すのも一個人。たくさんさんの人生を変える法律を決めるのも“民主的に”選ばれた政治家たち。

ナカムラのような“毒”は、現実世界には掃いて捨てるほどいる。たった一人の“毒”でさえ世界の有り様が最悪な形で合致すれば、ファンタジアのような破滅につながってしまうのだ。

飛鳥は怒りにまかせて走り出す。それは飛鳥の人としての怒りだ

った。

「アスカ！」

スピニツチが叫ぶ。飛鳥はすでにナカムラの顔面に拳を振り下ろしていた。

「ばかめ」

ナカムラは避けることもせず、そこに立っていた。そして飛鳥の拳は、見えない何かに当たって弾き返される。勢い余って、飛鳥は部屋の反対側の壁際まで吹き飛ばされる。

「言つたろう？ ワシは“法則”そのものなのだ」と

ナカムラはゆっくりと歩き出す。

「ワシは今こういう法則を作った。『ワシには何人たりとも攻撃を加えることはできん』とな」
「く……」

尻餅をついた形になっていた飛鳥は、痺れる腕を押さえて立ち上がる。

「お前をすぐに殺しても構わんだぞ？ ワシがそう決めるだけでいいのだ。『小娘の体はバラバラになって死ぬ』とな。しかしそんなことはせんよ。下の階の女たちのように、ワシの性奴隷にしてくれるわ」

「な、き、貴様あ！」

飛鳥の怒りは頂点に達する。バンシーたちは何と、ナカムラに犯され孕まされた女性たちだったのだ。幼女とも呼べる女の子から、自分の母親と同年代と思われる女性もいた。あのすべての女性たちはナカムラの欲望の犠牲者たちだったのだ。

「ぶっ殺す！」

「無駄だと言っておるうに」

ナカムラは両手を体の前で横に広げる。その間に黒い影が揺らぎ始める。

「バハムートは“野心”、フェンリルは“知性”、ケット・シーは“良心”。どれもワシの中にあるものが具現化したモンスターだ。さしずめ蚩尤は“防衛本能”、幻魔は“欺瞞”といったところか」

黒い影は上下に伸び、ナカムラを覆い隠すほどの大きさに成長する。

「これはワシの“破壊衝動”だ」

影が固まってモンスターを形作る。凶悪な雄叫びが室内に響き渡った。

183話：究極の選択

黒い身体は隆々とした筋肉が至るところ盛り上がり、腰に粗末な布きれを纏っているだけだ。首から下は、狂戦士と同じく規格外の大きさではあるが人間だ。

しかし頭部は人間ではなく雄牛だった。左右対称に内側へ湾曲した角は長さが五十センチメートルほどあり、闘牛を思わせるように飛鳥へ向けられている。黄色く濁った瞳には明らかな殺意が溢れ出し、歯茎を剥き出しにした口からは泡を吹いている。一振りの重そうな斧を握っているが、それはサイクロプスたちのものより大きくて幅が広い。

牛頭人体の巨人、ミノタウロスだった。

「腕の一本や二本失っても、後で元に戻してやる。大人しく嬲られるがいい」

ナカムラはねとつく微笑みを浮かべたまま、ベッドの方へ下がっていく。ミノタウロスは頭を振って雄叫びを上げる。涎と鼻水を撒き散らし、重量感のある足音をさせ一歩踏み出す。

飛鳥は深くため息をついて、両手をだらりと下げる。

「悪いけど今さらこんなヤツにびびったりしないよ。こういうのはもう見飽きた」

リアルファンタジックRPGともいうべき世界を飛鳥は戦い抜いてきた。ミノタウロスほど有名なモンスターなど、飛鳥にとっては驚くものではない。

「ふっふふふう、ミノタウロスのパワーをなめてもらっちゃ困るぞ。

貴様など一発で骨までばらばらだ」

「アタシは骨太でさ、意外と丈夫なんだよ。牛乳好きだし」

飛鳥はゆっくりと歩き出す。身構えるわけでもない。ごく自然な様子でミノタウロスへと近づいていく。

「やれ、殺さなければどんな状態でも構わん！」

ナカムラが狂気に囚われた目つきで口角泡を飛ばす。ミノタウロスはそれに呼応するかのように、斧を両手で振り上げる。

まさに雄牛の雄叫びだった。豪腕によって振り下ろされた殺戮を目的とした巨大な斧は、飛鳥の小さな頭部を簡単に打ち砕くかと思えた。

しかし振り下ろされた斧は飛鳥の身体に触れることなく、音高く石造りの床に落ちて跳ねる。

「な！」

飛鳥はまばたき一つの間、ミノタウロスとすれ違っていた。そして飛鳥の後方では、腹部に大穴を開けたミノタウロスがスローモーションのように前のめりに倒れていくところだった。

「な、なぜだ！ ミ、ミノタウロスにもワシと同じ“法則”を適用していたはずなのに！」

恐怖に歪んだナカムラの顔を、飛鳥のまっすぐな視線が射抜く。硬質な足音がナカムラへ向かって、一步一步着実に近づいていく。ナカムラにはそれが絶望の足音に聞こえた。

「適用？ もちろんされてたよ。アタシの世界の中でね」

「ア、アタシの世界？」

醜悪な中年が「アタシ」などと言うと、途端に滑稽で無様に感じられる。飛鳥は無表情のままナカムラの前に立つ。

「アンタの法則は確かに実効力を持つてる。“アタシの世界の内側”でね」

「内側……」

ナカムラの目は左右に激しく動き、照りついた額には脂汗が大量に浮かんでいる。飛鳥の言葉を何とか理解しようとしているようだ。まるでそこに、生き延びる術を見出そうとするかのように。

「アタシは今、この世界そのものなんだよ。アンタを含めてね」

物理法則だろうが精神作用だろうが、世界と同一化した飛鳥にとつてはすべて自分の内側で起こる出来事に過ぎない。ナカムラをおもちのブロックで遊ぶ子どもに例えるならば、飛鳥はその子どもが遊ぶ部屋そのものだ。元より戦いにすら、なりはしないのだ。

「アタシにも良心はある。慈悲の心とやらもあるんだろう。でもアンタは許さない。アンタだけは！」

飛鳥の両眼に怒りの炎が燃え上がる。固めた右拳に金色の炎が宿る。それは魂の炎だ。この世界で死んだ数多くの命の炎だった。そこには人間やモンスターの区別はない。スーパーモンクとはすべての魂の救済者、抛り所となる聖なる存在なのだ。

「みんなの怒りを思い知れ！」

飛鳥の鉄拳がナカムラの頬にめり込む。

「ぐぎゃっ!」

カエルのように呻いたナカムラが、折れた歯を二、三本撒き散らしながらベッドのある奥の壁まで吹き飛ぶ。

言うまでもなく飛鳥は手加減をしていた。この悪党を一発で楽にするつもりはない。殴って殴って殴り倒して、この狂った創造主によって奪われたたくさんの命の苦痛を味わわせてやるつもりだった。

「アスカ!」

さらに一步踏み出そうとした飛鳥の元へ、スピニッチが飛んで来る。スピニッチは飛鳥を追い抜くと、ナカムラをかばうように短い両前足を広げる。

「ニヤカムラを殺してはだめにゃ!」

スピニッチの真剣な表情は、飛鳥の足を止めるには十分な気迫があった。飛鳥は拳を握りしめたまま、その場に立ち止まる。ナカムラはベッドの上で、頬を押さえて苦悶している。

「なんで? なんでよ!」

飛鳥の怒りは世界の怒りだ。この世界そのものがナカムラを排除しろと言っている。体内に入り込んだウィルスを駆除する免疫機能のごとく、飛鳥は今世界の“毒”を排除しようとしているのだ。解毒できれば世界は秩序と平穏を取り戻す。それは間違いなく正しいことのはずだ。

「ニヤカムラは人間にゃ」

スピニツチは振り返り、怯えた様子の中年男性を哀れむような目で見つめる。

「ニヤカムラを内包する飛鳥は、ニヤカムラによ法則に干渉はできても消すことはできないにゃ」

「手を出すことはできない」というナカムラの法則は、その存在自体は消滅していない。飛鳥はそれ以上の“法則”で無効にしただけだ。つまりナカムラの法則は、厳然としてそこに存在しているのだ。

「つまりこいつを殺さない限り、こいつの作り出した法則は生き続けるってことだろ？」

「そうにゃ」

スピニツチは飛鳥に背を向け、黒い毛玉のような後ろ姿になる。相変わらず黒い羽は忙しく上下している。飛鳥は疑問に思う。スピニツチは何を言いたいのだろうか。

「人間であるニヤカムラを殺したら、飛鳥はモンスター化するにゃ」

法則を変えるには、その法則が発効していなければならない。先ほどのように。しかしモンスター化の法則は、人間を殺さない限り効力を発しない。つまり現段階で無効にすることはできないのだ。

飛鳥は最後の局面において、究極の選択に直面してしまった。

183話：究極の選択（後書き）

ミノタウロスの設定は、当作品オリジナルです。ご了承ください
い m ((m

184話：スピニツチの涙

「じゃどうすればいいんだよ!」

飛鳥は握り拳に力を込める。空間が歪んで圧縮される。やりきれない飛鳥の怒りが溢れ出し、周囲に影響を及ぼしているのだ。それを見てナカムラが小さく「ひつ」と悲鳴を上げる。

飛鳥はゆっくりと歩いていき、ナカムラの前に立つ。飛鳥の小柄な体からは陽炎が立ち、ナカムラの頬を熱風が撫でていく。

「こいつのせいで…… こいつのせいでみんな死んだ。人の命を何とも思わないようなカスは、生きてる資格なんかない!」

飛鳥はナカムラの胸ぐらを掴んで持ち上げる。飛鳥の倍は重そうなナカムラの体が軽く宙に浮く。

「ひつ、こ、殺すのか? い、いや、こ、殺せるのか? ワ、ワシを殺せば、お、お前はモ、モンスター化するんだぞ!」
「構わないよ」

飛鳥の燃え立つ両眼は、まさに煮えたぎる溶岩のごとき怒りを表していた。今この目の前にいる醜悪な男さえいなくなればすべてが終わる。苦しかった戦いも失われた多くの命も、これからのこの世界の平和もすべて救われるのだ。そのために自分がモンスター化してしまっても構わない。それは飛鳥がこの世界に召喚されてきてから学んだ自己犠牲の尊さだ。

どうでもいいと思っていた自分の命は、旅を通じてその意味を変えた。この世界を救うために生き延びる。元の世界に戻れなくなってしまうのは少し心残りだが、ファンタジアが救われるならそれで

も構わないと飛鳥は思った。

「アタシはこの世界に来ていろんな人たちに会ったよ。心から友達と言える人にも会ったし、こんなアタシを必要としてくれる人もいた」

「ひ、ひいいいっ！」

飛鳥は腕に力を込めて、さらに持ち上げる。ナカムラは涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにして泣き喚いている。

「アタシを好きだと言ってくれる人もいたし、これから幸せな人生を送ろうと未来に希望を持つ人たちもいた」

ナカムラを吊り上げる飛鳥の右腕が小刻みに震えている。溢れ出す怒りを抑えきれなくなってきたのだ。

「はじめはファンタジアもアタシ自身もどうだっていいって思ってた……でも今は違う！」

飛鳥の全身から猛烈な勢いで金色の炎が噴き上がる。飛鳥は左の握り拳をゆっくりと持ち上げる。上腕部に彫られたたくさんのタトゥーも、真っ白な炎を激しく噴き上げている。

「や、やめろ、嫌だ、こ、殺さないで！　し、死にたくない！」

ナカムラは両手両足をばたつかせて暴れ始まる。しかし飛鳥の細かい腕は微動だにしない。

「すべての元凶であるアンタを殺せば、アタシは本望だよ！　アタシはそのためここに来たんだ！」

「ひいひいっ！」

飛鳥は握り拳を固めて渾身の力を込める。それは一撃でナカムラを原子レベルまで粉々にするほどのパワーが込められていた。

しかし飛鳥の脇を一陣の黒い風が吹き抜ける。その黒く小さな塊はナカムラの胸にぶつかって止まる。

「ぐふっ！」

ナカムラの涙に濡れた目が見開かれる。その黒い塊はスピニツチだった。

「スピニツチ？」

突然のことに驚いた飛鳥は金色の炎を消す。ナカムラの様子がおかしい。

「アスカは元によ世界に戻らなくちゃいけにやいにや。それがアレンを始め、みんなにやによ願^{にえが}いにや」

「スピニツチ、アンタ……」

スピニツチは銀色の短剣を握っていた。そしてその刃はナカムラの胸の中央へ半分ほど刺さっている。白い布が見る間に赤く染まっていく。

「き、貴様ど、どうしてワシに……」

「お前はさつき、『にゃん人たりとも手は出せにゃい』って法則を作ったにや。でもミーは『人』じゃにゃいにや」

「げ、げば……」

ナカムラは何か言おうとしたが、込み上げる血流で言葉にならない。代わりに大量のどす黒い血が口から溢れ出す。

「ス、スピニツチ、アンタ何やってんのよ！」

「ミーたちモンスターは人間にひどいことをしたにや。だから最後はミーによ手で終わらすにや」

スピニツチは、クウエンディ女王に銀の短剣をもらった時から覚悟を決めていた。ナカムラの元まで飛鳥に連れて来てもらえれば、最後は自分の手で決着をつけようと。例えば、自分が消えてしまふことになるうとも。

スピニツチは小さな体全身に力を込めて、短剣をさらに奥へと突き刺す。捻られた刃が傷口をさらに広げる。

「げ、げぶっ！」

ナカムラの身に着けている法衣のような布の前面は、元が白だったとはわからないほど真っ赤に変わっている。床に広がる血溜まりの量は、すでに人間の致死量を軽く超えている。もはやナカムラが助からないことは一目瞭然だろう。

「バ、バカっ！」

漸く我に返った飛鳥は、ナカムラを放してスピニツチを抱きしめる。ナカムラは自らの血溜まりへ、飛沫を上げながら糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「そういうのはアタシの仕事じゃん…… 屑でカスで、生きてる価値なんてないアタシがやらなきゃダメなんだよ」

「そんなにやことはにやいにや」

ナカムラの返り血を浴びて、スピニツチの黒い毛はところどころ艶を帯びている。元々細い目がさらに細められ、口の端から尖った犬歯が覗く。

「ミーは飛鳥によことを一番よくわかってるにや。アス力は乱暴でがさつで下品だけど、誰よりも素敵にやおにやによこにや。これくらいっぱい恋をしていい人生を歩んで、幸せににやるにや」

「……一言余計だよ、バカ」

飛鳥の両眼から涙が溢れ出す。止めどなく流れる涙を拭いてもせず、飛鳥はスピニツチへ顔を埋める。ナカムラは頹れたまま動かない。息絶えたのだろう。その証拠にスピニツチの体が金色に変わって透けていく。ナカムラの死によって、ナカムラに作り出されたモンスターがすべて消え去ろうとしているのだ。

「アス力を選んだミーによ目は確かだったにや。でも今まで辛い思いをいっぱいさせて済まなかったにや」

「ううん、そんなことない！ 辛いこともあったけど、けっこう楽しかったよ」

スピニツチの全身から金色の粒子が立ち上り始める。飛鳥の腕の中で、スピニツチはどんどん軽くなっていく。

「ミーは飛鳥に会えて幸せだったにや。今までありがとうにや……」

スピニツチの糸のように細い目の端から透明な雫が一粒落ちる。

それは飛鳥が見た、最初で最後のスピニツチの涙だった。

高い音をさせて銀の短剣が床に落ちる。飛鳥の腕の中にはもう何も残ってはいなかった。

185話：勇者の帰還

黄昏れた空に瑠璃色のカーテンが降り、一つまた一つと星が瞬き始める。光源のまったくない地上は闇が一層濃くなり、そこで動き回る人々の輪郭も暗闇に溶け込んでいく。

まだ数えるほどしか現れていない寂しげな星空の一部が、鋭角な三角形に切り取られている。かつては煌々と青い輝きに満ちていたファンタジア城は、ひっそりと宵の底に沈んでいる。フェンドルフインの女王クウェンディとイスペリア王デルピエロは、城門の前で飛鳥を待っていた。

「女王様、暗くなつて参りました。一度馬車の方へ戻られては」
「いいえ、ここにいます」

片膝について頭を垂れる金色のフルアーマー姿は、フェンドルフインの魔法剣士オーガスだ。飛鳥が城へ入ってから数時間、女王と王はここでずっと城を見上げて立ち続けていた。

女王と王は飛鳥が戻ることを信じていた。そして為政者として大きな力を持っているにも関わらず、何もできないことを心から悔しく思っていた。

異世界から一人連れて来られ、訳もわからず命を懸けた戦いに巻き込まれてしまった。女王はそんな飛鳥に対して常に負い目を感じていた。しかしその反面、飛鳥でなければ打開できない危機であったことも紛れもない事実だ。飛鳥がいなければ、いや、召喚された三人の勇者たちがいなければ、今頃自分を含めここにいるほとんどの者たちは生きてはいなかったろう。

だからこそ女王も王も、せめて飛鳥が戻るまでここで待っていてよ、うと思っているのだ。それは傷つき辛い思いをし続けた飛鳥への、せめてもの償いのように感じていた。

「しかしお二人とも休憩さえ取らず、何も口にされていません」
「そんなことは当たり前だろう」

斜めに走った頬の傷を震わせ、デルピエロ王が応える。鋭い視線はファンタジア城に向けられたままだ。

「わしのせいでガルドは片腕を失ってしまった。その責任はすべてわしにある。しかしその反面、生きていてくれたことに安堵した自分もいる。情けないことだ」

デルピエロ王の憔悴した横顔は、以前見た時よりも一層年老いたように見える。オーガスは何も言えず、緑色の前髪を風に揺らせている。

「アイリスの勇者は見事な最期を遂げた。しかしやはりわしは、あの少女には生きていてほしい。今わしにできることは、アスカの無事を祈ることだけだ」

デルピエロ王の引き結ばれた口に強い意志を感じ、オーガスは静かに一礼すると立ち上がって踵を返す。その瞬間空気が変わった。寒々とした夜の風が暖かなものに変わって頬を撫でる。見ると立ち働いていた兵たちが呆然と立ち尽くしている。その中から、見慣れた豹頭のたくましい戦士が一步踏み出す。イスペリアの將軍グインだ。

「戻ってきた……」

グインのたくましい長身が即座に低くなる。片膝を地面につき、右手を胸に当て視線を落とす。周囲の兵たちも次々と同じ姿勢を取

つていく。オーガスがゆつくりと振り向くと、開け放たれた城門に一人の小さな影が立っているのを見出す。

「アスカ……」

クウエンディ女王の涙声が風に流れて通り過ぎていく。それは不思議な感覚だった。

着衣はぼろぼろで、ほぼ半裸に近い。風に靡くライトブラウンの髪は夜の闇の中、漆黒に艶めいている。小柄な体から朧気な光を放ち、一歩一歩ゆつくりと歩いて来る。

オーガスはその姿を見て胸がいつぱいになる。いつの間にか頬を伝う熱い涙が、すべての苦しみが終わったことを教えてくれる。呼吸さえ苦しくなるほどの嗚咽が込み上げてくるが、ぐっと堪えて目をつぶる。

白金の淡い光に包まれた飛鳥の姿は幻想的で儚げだ。まるで今にも消えてしまいそうにさえ感じてしまう。クウエンディ女王はドレスの裾がめくれ上がるのも気にせず、早足で駆け出す。そしてその存在を確かめるがごとく、飛鳥の小柄な体をひしと抱きしめる。

「アスカ、ああアスカ！ よく無事で……」

「女王様……」

クウエンディ女王の腕の中で、飛鳥は切なげにうつむく。飛鳥の白い頬には涙の跡が幾筋も付いている。クウエンディ女王はその意味することを察して、飛鳥の顔を両手で包み込む。

「スピニツチは自分の責務を立派に果たしたのですね」

飛鳥は小さくうなずく。その両眼からは、また止めどなく涙が流れ始まる。女王は何も言わず、また飛鳥を強く抱きしめる。いい匂

いに包まれながら、飛鳥は声を上げて泣いた。

「アスカ」

クウエンディ女王の後ろに、いつの間にかデルピエロ王が立っていた。飛鳥は王に気づいて涙を腕で拭う。

「辛い戦いご苦労だった。イスペリアを代表して、心から礼を言う。ありがとう」

デルピエロ王が無骨な手を差し出す。飛鳥は握手しながら王を見上げる。

「王様、ガルドは？」

デルピエロ王は目を伏せる。ガルドが最後まで飛鳥の帰りを待つと言っていたのを思い出したのだ。

「ガルドは元の世界に還した。あのままこの世界にいても回復する見込みはなかったからな」

ガルドは完全に枯渇状態だった。それだけではなく右腕を無くしたことによつて、肉体的にもかなり危険な状態だった。そこでデルピエロ王は急遽現実世界に戻し、治療を受けさせることにしたのだ。

「そつか、さよならも言えなかったな……　じゃ、アレンは？」

「彼は……」

デルピエロ王がそう言いかけた時、周囲に白い光が乱舞し始める。それはフェアリーたちだった。まるで粉雪のようなフェアリーたち

の光を見上げていると、飛鳥の肩をクウエンディ女王が優しく抱き寄せる。

「彼の遺体はエスターへ移送します。おそらく彼の地が彼を弔うに一番ふさわしい場所でしょう」

クウエンディ女王の視線の先を追うと、屋根のない豪奢な四頭立て馬車が目に入る。その荷台には黄金の装飾が施された柩が横たわっていた。

「そっか、そうだね」

飛鳥の差し出した手のひらの上に、小さな白い光が舞い降りる。おそらくフェアリーの一人だろう。フェアリーたちの寿命は間もなく尽きてしまう。エスターに帰るまでは保たないかもしれない。それでも飛鳥の生還を喜んでくれている。この白い光の乱舞は、フェアリーたちの命の、最期の輝きなのだ。

「アスカ」

フェアリーたちの祝福を静かに受けている飛鳥へ、クウエンディ女王が声をかける。飛鳥が振り向くと、女王が真剣な顔で見つめていた。

「いよいよあなたも還る時が来ました」

女王の細い長身は薄緑色の光を帯び始めていた。

186話：現実世界へ

「うん……」

飛鳥は複雑な気持ちで女王を見つめる。この世界に来て数ヶ月、いろいろながあつた。死を覚悟したことも一度どころではない。痛い思いもしたし苦しい思いもした。それでも飛鳥の胸には、やり遂げたという充実感でいっぱいだった。

「あつちで嫌なことがあつたら、またこっちに遊びに来てもいいかな」

飛鳥の控えめな上目遣いに女王は驚く。飛鳥にとってこの世界は辛い思い出しかないと思っていたのだ。忘れたくない嫌な経験だと。

しかしそうではないと知って、女王は飛鳥をまたしっかりと抱き寄せる。そしてきっぱりと拒絶する。

「あなたはもうここへ来ることはないでしょう。いえ、正確に言えば来ることはできません」

「え、ど、どうして？」

女王の悲しげな微笑みに、飛鳥は大きく目を見開く。

「あなたは気づいたでしょうか。この世界の成り立ちに」

「この世界の成り立ち？」

飛鳥は女王の言葉を反芻しながら、今までの長い旅路に思いを馳せる。スピニツチに連れて来られて女王に会って、モンスターと戦いながらも数多くの出会いと別れを繰り返してきた。それこそこの

世界中をくまなくと言っていいほど旅してきた。

この世界の人々は現実世界の人々と変わりなく、喜びも悲しみも同じように感じ取る。魔法やモンスターなどRPGな要素は入ってはいても、人々の営みは何ら変わりはないのだ。

「車とか科学技術は発達してないってだけで、後は特に気づかなかつたけど……」

「固有名詞などはどうです？」

「固有名詞？」

いきなり国語の授業のような言葉が飛び出て、飛鳥は面食らってしまう。世界を救った勇者でも、所詮は勉強をサボりまくっていた飛鳥だ。女王の質問にあたふたしてしまう。

「ええっと、確か名前とか？」

目を細めて女王がうなづく。

「人の名前や地名です。何か気づきませんでしたか？」

「ええっと……」

飛鳥は今まで出会った人々の名前や地名を思い出す。目の前にいるのがクウェンディ女王、隣がデルピエロ王。この国がファンタジアで……

「あ……」

飛鳥は口を開けて“それ”に思い至る。

ここは異世界にも拘わらず、人名や地名に聞き覚えがあるのだ。初めて聞いた固有名詞でもきつと飛鳥が知らないだけで、現実世界

に関わりのある固有名詞なのだ。

「気づいたようですね。ここは『ファンタジア』…… “ 幻想世界 ” です」

「幻想世界……」

飛鳥の認識と共に世界が薄紫色を帯び始める。飛鳥の心情に感応しているのだ。

「この世界はあなた方の世界の“ 想念 ” で成り立っています。わたしもここにいてすべての者たちも、空も大地もすべてあなた方の世界の想念でできているのです」

「そ、それって……」

「簡単に言ってしまうえば、“ 心の中の世界 ” っていうことだ」

デルピエロ王の言葉に、飛鳥は絶句してしまう。夢や希望、憎しみや悲しみ。人間の喜怒哀楽が作り出す様々な感情。そういったものが寄り集まって一つの世界を作り出した。それが“ ファンタジア ” だったのだ。

「フェンドルフィンは基本的に心優しい人々の想念の集まりです。“ 常春の国 ” と言われる所以です。イスペリアは生きるために必要な欲望や、野心の強い想念の集まった国。反対にアイリスは俗世間から離れて静かに暮らしたい人々の想念の国です」

「そ、そんな……」

「あなたは強い負の感情を抱いてこの世界にやってきました。それこそ創造主ナカムラと同じように。しかしあなたは道を間違えなかった。愛を喜び死を乗り越え、生きるという強い意志を持つことができた。それは当たり前のようにいて、なかなかできることではないのです」

「そんなことないよ。アタシはそんな立派な人間じゃない」

「いいえ、世界が自らの意志であなたに力を貸した。それは今まで誰も成し遂げられなかったことです」

飛鳥は自分の手のひらを見つめる。ほんの少し意識を集中するだけで、この世界のすべての事象が手に取るようにわかる。確かにこれは不思議な感覚だった。

「この世界もあなたの生きる世界も、基本的には同じです。世界を変えるのは自分自身。アス力、あなたの心次第なのです」

「アタシの心次第……」

飛鳥は強く手を握り、女王へしつかりとうなずく。それはまさに飛鳥がこの世界との別れを決意した瞬間だった。

「わたしたちは常にあなたと共にいます。苦しい時、辛い時、挫けそうな時…… そんな時は思い出してください。ファンタジアのことを、わたしたちのことを」

「うん…… うん、忘れないよ。絶対、忘れるもんか！」

飛鳥の全身が白い光に包まれ、召喚された時と同じ制服姿になる。そしてその光はますます強くなり、ファンタジア城の青く幻想的なシルエットが暗闇に浮かび上がる。

クウェンディ女王の姿が光の向こうへ消えていき、デルピエロ王やオーガス、グインたちの姿も消えていく。飛鳥が最後に見た彼女の顔は、みな一様に微笑んでいた。

「ん……」

頬に冷たい感覚を覚え、飛鳥は目を開ける。目に入っただのは誰も乗っていないシーソーだった。

「ここは……」

飛鳥は公園の出口から少し離れた歩道の上に、俯せで倒れていた。霞がかった頭を振りながら、飛鳥は上体を起こす。等間隔に並んだ街灯が白々と光を落とし、夜の闇をぼんやりと照らし出している。そこはまさにスピニッチに召喚された場所だった。

「ア、アタシ…… 還ってきた？」

立ち上がろうとした飛鳥の手に何かが当たる。それは飛鳥の通学バックだった。中には財布や化粧品など、元通り入っている。

「もしかして……」

飛鳥はスカートのポケットを探る。果たしてそこには携帯電話の存在感。ただしバッテリーは切れていた。

「還って…… 来ちゃったか……」

飛鳥はスカートの裾を払って立ち上がる。多少ふらつくが何とか歩けそうだ。何となく重く感じる自分の体を引き摺って、飛鳥は自宅である市営住宅への道をとぼとぼと歩き始めた。

エピソード

「——昨夜未明東京湾三号埠頭で、人らしきものが浮かんでいるとジョギング中の男性から通報がありました。現場に駆けつけた海上保安官によりますと発見されたのは所持品や身体的特徴などから元衆議院議員の仲村泰三氏と見られており、検死の結果死後一週間以上経過しているとのことです。胸部には刃渡り十五センチ以上の刃物によるものと思われる深い刺し傷があることなどから、警視庁では他殺と断定して死因の特定を急ぐと共に、氏の交友関係についても調べを進めています。仲村氏は二年前事務所から帰宅途中にそのまま行方がわからなくなっており、家族からも搜索願いが出されて

……」

「んあああ……」

階下からテレビの音が聞こえる。遮光カーテンの隙間から差し込む光と雀の鳴き声が朝を告げている。飛鳥はあくびをしながら伸びをする、枕元のケータイを操作してアラームを解除する。現実世界に還って来てからは、毎朝アラームが鳴る前に目が覚めてしまう。飛鳥は健康的な体になったものだと苦笑する。

飛鳥が現実世界に戻ってきてから一週間が経っていた。

あの夜家に帰ると飛鳥を待っていたのは両親からの罵声や暴力ではなく、意外なことに苦しいほどの抱擁と号泣だった。

飛鳥は三ヶ月間行方不明となっていた。ファンタジアの時間経過は現実世界と大差なかったようだ。

両親は始め飛鳥が家出をしたと思っていた。そして一週間二週間と過ぎ、事件に巻き込まれたのだと思い警察に搜索願を出した。それがひょっこり帰ってきたのだ。

飛鳥は言っても信じてもらえとは思えず、「覚えていない」の一点張りを通した。警察も事情を詳しく知りたがったが、学校帰りに公園で気を失って気づいたらまた同じ場所に倒れていたと説明した。

ここ一週間というものの「神隠し」やら「奇跡の生還」やらで、マスコミにも取り上げられて大騒ぎだった。ネットでも話題になったので飛鳥はガルドから何か連絡でもあるかと思ったがそんなことはなく、ガルドの置かれていた環境に思いを馳せた。

それでも飽きやすいマスコミのこと、ようやく落ち着いてきた。今日から飛鳥は復学することになっている。失踪中の記憶がなかったということで、学校も三ヶ月間の休学扱いにしてくれたのだ。身支度をして一階に下りると、すでに両親は起きていた。

「アンタが朝ちゃんと起きるようになるだなんて、ほんと信じられないよ」

白ご飯とみそ汁を並べながら、母親が訝しげに覗き込んでくる。

「うつせーし」

「ふん」

母親は鼻を鳴らせて台所へ引っ込んでいく。母親はこれでもかなり態度を改めていた。飛鳥の分の朝食が用意されている時点で格段の進歩だろう。両親は自分たちのせいで飛鳥が自殺か家出をしたのだと思い、負い目を感じていたのだ。

半分焦げた目玉焼きを平らげ朝食を終えると、飛鳥はカバンを持って立ち上がる。ブックベルトで纏められた数冊の本を小脇に抱えると、玄関へ向かって歩き出す。

すると飛鳥は背後に気配を感じる。父親だった。

「へへ、飛鳥、しかしお前よく戻って来たよなあ。少し見ねえ間にすっかり大人しくなっちまって」

父親の手が飛鳥のおしりに伸びる。

「お前三ヶ月もどうやって生活してたんだ？ いい金づるでも見つけてシケこんでたんじゃねえのか、ええ？」

父親の手が飛鳥のおしりに触れた瞬間、飛鳥は素早く振り返る。

「クロスアッパーあああ！」

「ぐはっ！」

父親の顎に炸裂した飛鳥の拳は、そのまま天井へ突き上げるように伸ばされる。父親は白目を剥いてその場に仰向けで倒れてしまった。

「ア、アンタなにすんだよ！」

「いてて…… やっぱこつちの世界じゃ全然威力出ないね」

母親が慌てて台所から飛び出してくる。飛鳥は右手を振りながら落としたカバンを拾い上げ、鋭い視線で母親を指さす。

「一つ言っとく。アタシはアンタたちのしたこと、されたことは一生忘れない。そして一生許さない。でも、アタシをこの世に生んでくれたことには感謝してる。だからアタシがこの家を出て行くまでは、アンタたちを親だと思ってやる」

「ふん、なに生意気言ってんだい」

そう言いながらも、なぜか母親は頬を緩める。

「……いつてきます」

飛鳥は踵を返して玄関に向かう。明るい光の中へ出ていった飛鳥の後ろ姿を見送ると、母親は「ふん」と鼻を鳴らした後小さく呟く。

「いつてらっしゃい」

電車を降りて駅を出ると、学校まで繁華街がまっすぐ伸びている。夜は賑やかな繁華街も、朝は汚れきったみすばらしい素顔をさらけ出している。飛鳥が歩いていくと、コンビ二の前に見知った顔がたむろっている。飛鳥の悪友たちだ。

金髪に派手な化粧、超ミニのスカートに大きくはだけた胸元。同じような格好をした女子生徒が三人ほどガムをくちやくちや噛んでいる。歩いていくと、そのうちの一人が飛鳥に気づく。

「あ、飛鳥？ 飛鳥だよね？ あんたその髪、どうしちゃったの！」

マスカラを塗りたくった巨大な睫毛が音を立てて開閉される。

飛鳥は髪をばっさりと短く切り、真っ黒に染めていた。ショートボブのようになったその毛先は肩にも届いていない。飛鳥なりのアレンへ対する追悼の意思表示だ。

化粧つ気もまったくなく、唇にほんの少しリップクリームが塗っただけだ。以前の飛鳥とは別人にしか見えない。

「ちょっとね」

飛鳥は苦笑して歩き去ろうとする。友人たちは慌てて後を追いかける。

「ね、ちよつと待つてよ！ 例のもの先輩まだ大丈夫だつて言うてるよ。今日の帰りにでもどう？」

友人は腕に注射をするジェスチャーでウインクする。飛鳥は微かに眉間にしわを寄せ、蔑むような視線で三人を見る。

「悪いけど、アタシ忙しくてそんなことしてる暇ないんだ。じゃね」「あ、ちよつと、飛鳥あゝ！」

ひらひらと手を振って遠ざかる飛鳥を、三人は呆然と見送っていた。

飛鳥にはやらなければならないことが山ほどあった。

まずはドイツに行かなければならない。ニュルンベルクに行つて、エリーゼにアレンの伝言を伝えなければならないのだ。「幸せを願っている」と。飛鳥は思う。アレンは立派に戦ったんだつて、エリーゼに教えてあげようと。少し約束とは違うけれど、アメリカで死んだなんて嘘をつく必要はないと思う。

その後はアメリカへ行くつもりだ。右腕のないガルドは、きっと生活するのにも不自由だろう。飛鳥はゆくゆくは、アメリカに永住したいと思っている。そしてずっとガルドの側で生きていこうと思つていた。まずはアニメ映画を観に行く約束を果たしてもらわなければ。

そのためにはもっと勉強をしなければならない。ドイツ語と英語は最低限でも話せないといけない。ここには翻訳こんにやくも魔法もないのだから。そしてお金もたくさん貯めなければならない。

飛鳥の腕の中にはドイツ語の参考書と英会話の辞書、そしてアルバイト情報誌がブックベルトでしっかりとまとめられている。

飛鳥は朝の眩しい光の中、一步一步しっかりと歩いていく。
その目には強い意志の光が宿り、前を見据えている。

飛鳥の前にはさらなる戦いが待っている。

それは、人生という名のもう一つの“ファンタジア”。

「見ててねスピニッチ、アタシめっちゃがんばるからね！」

飛鳥は気合いを入れると、現実世界の眩しい光の中へまっすぐと
歩んでいった――

「ファンタジア」 了

エピソード（後書き）

最後までご愛読いただき、ありがとうございましたm（
—
—
）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5853k/>

ファンタジア

2011年9月3日23時43分発行